福岡県の中近世城館跡Ⅲ

―豊前地域編―

福岡県文化財調査報告書第 254 集

2016

福岡県教育委員会

福岡県の中近世城館跡Ⅲ

―豊前地域編―

福岡県文化財調査報告書第 254 集

序

今を 500 年ほど遡る中世から近世初頭にかけて、全国各地に数多くの城館が築かれました。福岡県も同様に、著名な山城から無名の小砦に至るまで非常に多くの城館が造られ、その数は現在知られているもので 1,000 箇所を超えています。戦乱の続く激動の時代の象徴とも言える遺跡として、今でもその痕跡を残すものも数多く、名だたる諸大名をはじめとした諸将が鎬を削った歴史を今に物語っています。

本県ではこれまで、埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査や各自治体史誌の編纂事業等をとおして、これら中近世城館遺跡の把握や周知を進めてまいりました。また、任意団体や個々の研究者によって踏査や縄張り図の作成等が行われ、個々の内容と歴史的重要性が次第に明らかになってきました。

一方、遺跡の詳細を未だ把握できていない中近世城館遺跡も多く存在しており、近年の開発事業等によりやむを得ず記録保存の対象となった事例も少なくありません。

こうした現状に対し、本県教育委員会では、県内に所在する全ての中近世城館遺跡を対象に総合的な緊急分布調査に取り組むこととし、平成 24 年度から調査に着手しました。本調査は遺跡の位置や時代、歴史的背景を可能な限り把握するとともに成果の体系的な整理と評価を行い、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解を促進することを目的としています。

この度、旧豊前国の調査成果を取りまとめることができました。既刊の旧筑前国を対象とした２冊に引き続き３冊目となり、残す旧筑後国についても報告書を取りまとめ、刊行する予定です。

本調査の実施並びに本書の刊行に当たり、調査指導委員会の委員の皆様、関係市町村をはじめ、多くの方々に多大なる御協力を得ましたことに心より感謝申し上げます。

平成 28 年３月 31 日

福岡県教育委員会教育長

城戸　秀明

例　言

1　本書は、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業の報告書第３集であり、福岡県文化財調査報告書第 254 集にあたる。

2　本事業は県内に所在する中世・近世の城館跡および関連遺跡を対象とした悉皆分布調査事業であり、平成 24 年度より開始し、28 年度（予定）まで調査を実施し、報告書を刊行する計画である。

3　本書では、平成 26 年度から 27 年度にかけて実施した福岡県内の豊前地域（旧郡の企救郡（北九州市門司区・小倉北区・小倉南区）・田川郡（田川市・田川郡香春町・福智町・糸田町・川崎町・大任町・添田町・赤村）・京都（みやこ）郡（行橋市（一部）・京都郡苅田町・みやこ町（一部））・仲津郡（行橋市（一部）・京都郡みやこ町（一部））・築城郡（築上郡築上町・豊前市（一部））・上毛郡（豊前市（一部）・築上郡吉富町・上毛町））の旧６郡、５市 10 町１村に所在する約 300 箇所の中世・近世の城館跡、城館伝承地、城館関連遺跡を報告対象とした。

4　調査については福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の指導と承認のもとに実施した。

5　本書に掲載した縄張り図および遺構実測図は、事務局で作成したもの以外は全て出典を明示し、縄張り図については作成者もしくは作成機関名を明示した。

　事務局にて作成した縄張り図の作成および製図は岡寺　良（九州歴史資料館）が担当した。

6　本書に掲載した写真は明示したもの以外は事務局にて撮影したものであり、岡寺が担当した。

7　本書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ　坂元雄紀（福岡県教育庁文化財保護課）
Ⅱ　岡寺
Ⅲ　岡寺
Ⅳ　岡寺
Ⅴ　岡寺
Ⅵ　酒井芳司（九州歴史資料館）
Ⅶ　岡寺

8　本書の編集は岡寺が担当した。

目　次

頁

Ⅰ　はじめに …… 1

1　調査に至る経過 …… 1

2　調査の経過 …… 1

3　調査の組織 …… 2

Ⅱ　調査の方法 …… 4

1　調査の進め方と方法 …… 4

Ⅲ　対象地域城館一覧 …… 10

Ⅳ　対象地域城館分布図 …… 40

Ⅴ　個別城館報告 …… 70

1　中世城館 …… 71

①企救郡 …… 71

②田川郡 …… 112

③京都郡 …… 138

④仲津郡 …… 166

⑤築城郡 …… 178

⑥上毛郡 …… 194

2　近世城館 …… 206

3　城館等伝承地 …… 214

4　城館関連遺跡 …… 215

Ⅵ　城館関連文献史料一覧 …… 235

Ⅶ　城館関連地名一覧 …… 255

索　引 …… 263

抄録

挿 図 目 次

頁

第１図　『豊前国古城記』（九州歴史資料館蔵（左：表紙・中：本文・右：奥付））…… 5
第２図　『豊前古城記』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵（左：表紙・右：本文））… 5
第３図　東明寺山城縄張り図（事務局作成）…… 71
第４図　三角城遠景 …… 72
第５図　三角城縄張り図（事務局作成）…… 72
第６図　丸山城縄張り図（事務局作成）…… 73
第７図　丸山城遠景 …… 73
第８図　猿喰城主郭 …… 73
第９図　猿喰城縄張り図（事務局作成）…… 74
第 10 図　若王子城遠景 …… 74
第 11 図　若王子城の曲輪群の状況 …… 74
第 12 図　若王子城縄張り図（事務局作成）…… 75
第 13 図　足立山遠景（右の頂部が妙見山）…… 76
第 14 図　足立山頂付近から見た関門海峡 …… 76
第 15 図　足立山城堀切（A 地点）…… 76
第 16 図　足立山城縄張り図（事務局作成）…… 77
第 17 図　引地山城縄張り図（事務局作成）…… 78
第 18 図　虹山城縄張り図（事務局作成）…… 79
第 19 図　虹山城遠景（右は紫川）…… 80
第 20 図　虹山城堀切 …… 80
第 21 図　大三岳城（右）・小三岳城（左）遠景 …… 80
第 22 図　大三岳城堀切 …… 80
第 23 図　大三岳城・小三岳城・吉川城・三角城位置図 …… 81
第 24 図　大三岳城縄張り図（事務局作成）…… 82
第 25 図　小三岳城縄張り図（事務局作成）…… 83
第 26 図　吉川城主郭 a …… 84
第 27 図　吉川城（a ～ i 地区）縄張り図（事務局作成）…… 85
第 28 図　吉川城（ j ～ l 地区）縄張り図（事務局作成）…… 86
第 29 図　「堤」遺構 …… 86
第 30 図　「堤」の土層状況 …… 86
第 31 図　三角城（A ～ E 地区）縄張り図（事務局作成）…… 87
第 32 図　三角城（F ～ H 地区）縄張り図（事務局作成）…… 88
第 33 図　宝積寺城縄張り図（事務局作成）…… 89
第 34 図　長尾城縄張り図（事務局作成）…… 89
第 35 図　長尾城遠景 …… 90
第 36 図　長尾城帯曲輪 …… 90
第 37 図　椎山城遠景（手前は紫川）…… 90
第 38 図　椎山城主郭 A の堀切 …… 90

第 39 図　椎山城縄張り図（全体・事務局作成）…… 91
第 40 図　椎山城（G 地点）縄張り図（事務局作成）…… 92
第 41 図　椎山城（H 地区）縄張り図（事務局作成）…… 92
第 42 図　椎山城 F 地区南の切通し …… 92
第 43 図　椎山城 G 地区遠景 …… 92
第 44 図　椎山城堀切（H 地区）…… 92
第 45 図　椎山城（主要部）縄張り図（事務局作成）……折込
第 46 図　山本城縄張り図（事務局作成）…… 93
第 47 図　山本城・水ヶ手城遠景 …… 93
第 48 図　山本城堀切 …… 93
第 49 図　水ヶ手城堀切 …… 94
第 50 図　水ヶ手城縄張り図（事務局作成）…… 94
第 51 図　宮山城遠景 …… 94
第 52 図　宮山城堀切 …… 94
第 53 図　宮山城縄張り図（事務局作成）…… 95
第 54 図　木下城及び周辺城館群位置図
（国土地理院 1/25,000 地形図「徳力」を一部改変して事務局作成）…… 96
第 55 図　木下城及び周辺城館群遠景 …… 96
第 56 図　木下城縄張り図（事務局作成）…… 97
第 57 図　木下城周辺城館（A・B 地区）縄張り図（事務局作成）…… 98
第 58 図　木下城周辺城館（C 地区）縄張り図（事務局作成）…… 99
第 59 図　木下城周辺城館群（B 地区）堀切 …… 100
第 60 図　高畑山城遠景 …… 100
第 61 図　高畑山城縄張り図（事務局作成）…… 101
第 62 図　赤松城遠景 …… 102
第 63 図　赤松城（上：主郭・下：堀切の石群）…… 102
第 64 図　赤松城縄張り図（事務局作成）…… 102
第 65 図　丸ヶ口城堀切 …… 103
第 66 図　丸ヶ口城内の嶽の観音堂 …… 103
第 67 図　丸ヶ口城縄張り図（事務局作成）…… 103
第 68 図　堀越城縄張り図（事務局作成）…… 104
第 69 図　堀越城近辺からの眺め（笠岩から。奥に足立山が見える）…… 124
第 70 図　堀越城堀切 …… 104
第 71 図　長野城周辺 C 地区堀切 …… 106
第 72 図　長野城周辺 D 地区の横堀状の窪み（後世の山道とみられる）…… 106
第 73 図　長野城縄張り図（文献 36・村田修三・千田嘉博作成）…… 107
第 74 図　長野城測量図（文献 36）…… 107
第 75 図　長野城周辺城館（C 地区）縄張り図（事務局作成）…… 108
第 76 図　貫城遠景 …… 108
第 77 図　貫城曲輪 A …… 108
第 78 図　貫城縄張り図（事務局作成）…… 109

第 79 図　朽網城遺構平面図（文献 37）……110
第 80 図　茶臼山城主郭 ……111
第 81 図　茶臼山城からの眺め（足立山が見える）……111
第 82 図　茶臼山城縄張り図（事務局作成）……111
第 83 図　新城縄張り図（事務局作成）……112
第 84 図　新城主郭 ……112
第 85 図　新城堀切 ……112
第 86 図　手切城位置図（国土地理院 1/25,000 地形図「金田」を一部改変して事務局作成）…113
第 87 図　『豊前國田川郡全図』に示された牛斬山の城（部分・国立公文書館蔵）……113
第 88 図　牛斬峠（D 地区）からみた牛斬山（A 地区）……113
第 89 図　牛斬山から見た香春岳（奥に英彦山）……113
第 90 図　手切城 D 地区堀切 ……113
第 91 図　手切城縄張り図（A ～ C 地区・事務局作成）……114
第 92 図　手切城縄張り図（D 地区・事務局作成）……114
第 93 図　花立城遠景 ……115
第 94 図　花立城堀切 ……115
第 95 図　花立城縄張り図（事務局作成）……115
第 96 図　明治時代の香春岳（陸地測量部発行 1/50,000 地形図「行橋」（明治 33 年）（部分・福岡県立図書館提供））…116
第 97 図　香春岳遺構群配置図（文献 84）……116
第 98 図　二の岳からの眺め（北から）……117
第 99 図　二の岳の石塁遺構 ……117
第 100 図　香春岳城二の岳遺構群平面図（文献 84）……117
第 101 図　香春岳城「ダゴ土塁」（香春町教育委員会提供）……118
第 102 図　香春岳城「ダゴ土塁」実測図（文献 84）……118
第 103 図　香春岳城「人枡」遺構実測図（文献 84）……119
第 104 図　香春岳城「人枡」遺構（香春町教育委員会提供）……119
第 105 図　城山城縄張り図（事務局作成）……119
第 106 図　観音寺城遠景（興国寺から）……120
第 107 図　観音寺城曲輪 ……120
第 108 図　観音寺城縄張り図（事務局作成）……120
第 109 図　諏訪山城遠景 ……121
第 110 図　諏訪山城縄張り図（事務局作成）……121
第 111 図　新田城縄張り図（文献 10・片山安夫作成）……122
第 112 図　『豊前小倉領絵図』に記された金岡山城
（小笠原文庫・福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）……122
第 113 図　金国城 A 地区縄張り図（文献 154　村上勝郎・田中賢二作成）……123
第 114 図　金国城 B 地区縄張り図（文献 154　村上勝郎・田中賢二作成）……123
第 115 図　城坪城遠景 ……124
第 116 図　城坪城堀切 ……124
第 117 図　城坪城縄張り図（事務局作成）……124
第 118 図　城山城縄張り図（事務局作成）……125

第 119 図　城山城遠景 …… 125
第 120 図　城山城曲輪 …… 125
第 121 図　木城城遠景 …… 125
第 122 図　木城城曲輪の平坦面 …… 126
第 123 図　木城城縄張り図（事務局作成） …… 126
第 124 図　明神山城測量図（文献 85） …… 126
第 125 図　城越城縄張り図（文献 10・村上勝郎作成） …… 127
第 126 図　若木城遠景 …… 128
第 127 図　若木城縄張り図（事務局作成） …… 128
第 128 図　東白土城縄張り図（事務局作成） …… 128
第 129 図　東白土城遠景 …… 129
第 130 図　東白土城堀切 …… 129
第 131 図　豊前国田川郡添田村岩石城跡之図（部分・国立公文書館蔵） …… 129
第 132 図　岩石城からの眺め（左：筑豊方面・右：赤村～京都郡方面） …… 129
第 133 図　岩石城井戸 …… 130
第 134 図　岩石城岩盤ピット …… 130
第 135 図　岩石城曲輪②の内枡形の窪み …… 130
第 136 図　岩石城縄張り図（文献 136・木島孝之作成） …… 131
第 137 図　城山砦縄張り図（事務局作成） …… 132
第 138 図　城山砦曲輪・切岸 …… 132
第 139 図　城山砦堀切 …… 132
第 140 図　城山砦集石遺構 …… 132
第 141 図　城平城縄張り図（文献 10、村上勝郎・田中賢二・坂田淳一郎作成） …… 133
第 142 図　弓張岳砦と岩石城遠景 …… 133
第 143 図　弓張岳城主郭 …… 134
第 144 図　弓張岳城縄張り図（事務局作成） …… 134
第 145 図　城山城縄張り図（事務局作成） …… 134
第 146 図　左衛門城縄張り図（文献 10・中村 正作成） …… 135
第 147 図　宝ヶ岳城縄張り図（中村 正作成・提供） …… 135
第 148 図　上仏来山城縄張り図（文献 152・岡寺　良作成） …… 136
第 149 図　戸城山城縄張り図（文献 144・岡寺　良作成） …… 137
第 150 図　松山城遠景（苅田町教育委員会提供） …… 138
第 151 図　松山城主郭遠景（苅田町教育委員会提供） …… 138
第 152 図　松山城跡の図（部分・昭和 11 年 史蹟松山城阯調査ニ関スル件のうち）（福岡県教育委員会蔵） …… 139
第 153 図　明治時代の松山城近辺地図（陸地測量部発行 1/25,000「苅田」を一部改変）
（明治 33 年測量・昭和 15 年・福岡県立図書館提供） …… 139
第 154 図　松山城縄張り図（全体・事務局作成） …… 140
第 155 図　松山城縄張り図（主城部・事務局作成） …… 141
第 156 図　松山城主城部横堀 …… 141
第 157 図　1983 年段階の松山城主城部縄張り（『福岡県の城』から転載・廣崎篤夫作成） …… 142

第 158 図　松山城の石段（左上：石段 A・右上：石段 B（奥に A）・左下：石段 G・右下：石段 C）
（右上は苅田町教育委員会提供）……142
第 159 図　松山城主城部発掘調査状況（苅田町教育委員会提供）……142
第 160 図　松山城縄張り図（外郭土塁 A 部分・事務局作成）……143
第 161 図　松山城外郭土塁 C ……143
第 162 図　松山城外郭土塁 B（内側から）……143
第 163 図　南原城縄張り図（苅田町教育委員会作成・提供）……145
第 164 図　高城縄張り図（苅田町教育委員会作成・提供）……146
第 165 図　大平山城遠景 (苅田町教育委員会提供) ……146
第 166 図　大平山城縄張り図（苅田町教育委員会作成・提供）……146
第 167 図　白山多賀神社（等覚寺城主郭）……147
第 168 図　等覚寺城畝状空堀群 ……147
第 169 図　等覚寺城堀切 ……147
第 170 図　等覚寺城縄張り図（事務局作成）……148
第 171 図　障子ヶ岳城遠景 ……149
第 172 図　障子ヶ岳城および周辺城館群位置図
（国土地理院 1/25,000 地形図「行橋」から一部改変して事務局作成）……149
第 173 図　障子ヶ岳城からの眺め（京都郡方面・手前に土塁が見える）……150
第 174 図　障子ヶ岳城曲輪群（本城部）……150
第 175 図　障子ヶ岳城土塁（曲輪Ⅰ）……150
第 176 図　障子ヶ岳城堀切 d ……150
第 177 図　障子ヶ岳城縄張り図（本城部・周辺城館 B 地区　事務局作成）……151
第 178 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（A 地区・事務局作成）……152
第 179 図　障子ヶ岳城周辺城館 A 地区遠景（手前の頂部）……152
第 180 図　障子ヶ岳城周辺城館 C 地区（「砦跡」の標柱が建つ）……152
第 181 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（C・D 地区　事務局作成）……153
第 182 図　障子ヶ岳城 C 地区から山頂を望む ……153
第 183 図　障子ヶ岳城周辺城館 E 地区（「砦跡」の標柱が建つ）……154
第 184 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（E 地区・事務局作成）……154
第 185 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（F・G 地区　事務局作成）……154
第 186 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（H 地区・事務局作成）……155
第 187 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（I・J 地区　事務局作成）……155
第 188 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（K 地区・事務局作成）……156
第 189 図　尾倉山城縄張り図（事務局作成）……157
第 190 図　尾倉山城（上：遠景・下：主郭の切岸）……158
第 191 図　勝山城遠景（↓部分）……158
第 192 図　勝山城縄張り図（事務局作成）……158
第 193 図　十鞍山城縄張り図（事務局作成）……159
第 194 図　十鞍山城遠景 ……159
第 195 図　十鞍山城からの眺め（右に御所ヶ岳と馬ヶ岳が見える）……159
第 196 図　塔ヶ峰遠景 ……159

第 197 図　塔ヶ峰城縄張り図（事務局作成）…… 160
第 198 図　塔ヶ峰城堀切…… 160
第 199 図　馬ヶ岳城遠景…… 160
第 200 図　馬ヶ岳城縄張り図（全体・事務局作成）…… 161
第 201 図　馬ヶ岳城縄張り図（山頂城館部・事務局作成）…… 163
第 202 図　馬ヶ岳城山麓城館部横堀 …… 164
第 203 図　馬ヶ岳城山麓城館部連続竪堀状遺構 …… 164
第 204 図　馬ヶ岳城縄張り図（山麓城館部・事務局作成）…… 165
第 205 図　元永城縄張り図（事務局作成）…… 166
第 206 図　覗山城堀切 …… 166
第 207 図　覗山城縄張り図（事務局作成）…… 167
第 208 図　大坂山城縄張り図（文献 150・片山安夫作成）…… 168
第 209 図　不動ヶ岳城縄張り図（事務局作成）…… 169
第 210 図　不動ヶ岳城遠景 …… 169
第 211 図　不動ヶ岳城石列 …… 169
第 212 図　不動ヶ岳城横堀 …… 169
第 213 図　山鹿城縄張り図（事務局作成）…… 170
第 214 図　山鹿城遠景 …… 171
第 215 図　茶臼城遠景 …… 171
第 216 図　茶臼城縄張り図（事務局作成）…… 171
第 217 図　茶臼城曲輪群Ⅱ …… 172
第 218 図　燕岩城遠景 …… 172
第 219 図　燕岩城縄張り図（事務局作成）…… 172
第 220 図　黒岩城縄張り図（事務局作成）…… 173
第 221 図　黒岩城遠景 …… 173
第 222 図　黒岩城主郭 …… 173
第 223 図　毘沙門城縄張り図（事務局作成）…… 174
第 224 図　毘沙門城遠景 …… 174
第 225 図　毘沙門城主郭（奥に毘沙門堂）…… 174
第 226 図　毘沙門城堀切 …… 174
第 227 図　神楽山城縄張り図（事務局作成）…… 175
第 228 図　神楽山城遠景 …… 176
第 229 図　神楽山城畝状空堀群 …… 176
第 230 図　上伊良原城堀切（左側が曲輪）…… 176
第 231 図　上伊良原城縄張り図（事務局）…… 176
第 232 図　城山城縄張り図（事務局作成）…… 177
第 233 図　城山城主郭 …… 177
第 234 図　城山城堀切 …… 177
第 235 図　『城井谷絵図』に描かれた宇都宮氏館跡（部分・福岡県立図書館蔵）…… 178
第 236 図　宇都宮氏館跡平面図（文献 117）…… 178
第 237 図　宇都宮氏館跡遠景（奥に英彦山・築上町教育委員会提供）…… 179

第 238 図　宇都宮氏館跡（築上町教育委員会提供）…… 179
第 239 図　堂山城遠景 …… 179
第 240 図　堂山城主郭 …… 179
第 241 図　堂山城縄張り図（事務局作成）…… 180
第 242 図　小川内城堀切 …… 180
第 243 図　小川内城縄張り図（事務局作成）…… 181
第 244 図　若山城曲輪群Ⅲの堀切 …… 182
第 245 図　若山城縄張り図（天徳寺本堂部分は文献 117 掲載図を参考に事務局作成）…… 183
第 246 図　大平城縄張り図（事務局作成）…… 184
第 247 図　大平城石列遺構 …… 185
第 248 図　「城井谷絵図」に描かれた城井ノ上城（「城井櫓籠」部分・福岡県立図書館蔵）…… 185
第 249 図　三張弓の岩 …… 185
第 250 図　豊前國築城郡城井谷城峡之圖（国立公文書館蔵）…… 186
第 251 図　城井ノ上城・伝表門 …… 186
第 252 図　城井ノ上城城内の様子（自然地形が広がる）…… 186
第 253 図　茶臼山城遠景 …… 187
第 254 図　茶臼山城主郭 …… 187
第 255 図　茶臼山城縄張り図（事務局作成）…… 187
第 256 図　赤幡城縄張り図（事務局作成）…… 188
第 257 図　広幡山城遠景（発掘調査時）…… 189
第 258 図　広幡山城横堀 …… 189
第 259 図　広幡山城張り出し状遺構 …… 189
第 260 図　広幡山城土塁 e 下部の石組み遺構 …… 189
第 261 図　広幡山城平面図（文献 112 掲載図を一部改変して事務局作成）…… 190
第 262 図　釜倉城堀切 …… 190
第 263 図　釜倉城北側の切通し道（堀切などの城郭遺構ではない）…… 191
第 264 図　釜倉城縄張り図（事務局作成）…… 191
第 265 図　小山田城縄張り図（事務局作成）…… 191
第 266 図　小山田城付近から見た城井谷（南側を望む）…… 192
第 267 図　小山田城堀切 …… 192
第 268 図　馬場城遠景 …… 192
第 269 図　馬場城横堀 …… 192
第 270 図　馬場城の麓にある五輪塔 …… 193
第 271 図　馬場城縄張り図（事務局作成）…… 193
第 272 図　下川底城堀切 …… 194
第 273 図　下川底城（海老名城）縄張り図（事務局作成）…… 194
第 274 図　櫛狩屋城縄張り図（事務局作成）…… 195
第 275 図　櫛狩屋城遠景 …… 196
第 276 図　櫛狩屋城畝状空堀群 c …… 196
第 277 図　櫛狩屋城落ち込み f（井戸か）…… 196
第 278 図　櫛狩屋城石垣 b …… 196

第 279 図　櫛狩屋城堀切 g の石組み …… 196
第 280 図　八田城遠景 …… 197
第 281 図　八田城横堀 …… 197
第 282 図　八田城縄張り図（事務局作成）…… 197
第 283 図　神畑城廓圖（天正十九年）（文献 28 から転載）　…… 198
第 284 図　高田城の堀跡と思われる水路 …… 198
第 285 図　緒方城土塁 a …… 199
第 286 図　緒方城縄張り図（事務局作成）…… 199
第 287 図　追揚城縄張り図（事務局作成）…… 200
第 288 図　追揚城遠景（左隅に内蔵寺山城）…… 201
第 289 図　追揚城石垣 a …… 201
第 290 図　追揚城畝状空堀群 i …… 201
第 291 図　叶松城堀切 …… 201
第 292 図　叶松城縄張り図（事務局作成）…… 202
第 293 図　内蔵寺山城横堀 …… 202
第 294 図　内蔵寺山城縄張り図（事務局作成）…… 203
第 295 図　雁股城遠景（右側の峰）…… 203
第 296 図　雁股城縄張り図（文献 155・岡寺　良作成）…… 203
第 297 図　雁股城石垣 A …… 204
第 298 図　門司城遠景 …… 206
第 299 図　門司城石垣 …… 206
第 300 図　小倉城天守櫓台と復興天守 …… 207
第 301 図　小倉城大手口（内枡形）…… 207
第 302 図　小倉城多聞口（内枡形）…… 207
第 303 図　小倉城西の口（元は内枡形）…… 207
第 304 図　天守北側の堀を仕切る石塁 …… 207
第 305 図　明治時代の小倉城跡（陸地測量部発行 1/25,000 地形図「小倉」（部分））…… 208
第 306 図　『筑前筑後肥前肥後探索書』に描かれた小倉城（東京大学史料編纂所蔵・文献 12 から転載）…. 208
第 307 図　豊前国小倉城絵図（部分・国立公文書館蔵）…… 209
第 308 図　鬼ヶ城縄張り図（文献 136・木島孝之作成）…… 210
第 309 図　移築された香春藩庁門 …… 210
第 310 図　香春藩庁跡地 …… 211
第 311 図　錦原町家請取地所（『中原嘉左右日記』明治 2 年 8 月 25 日部分模写・文献 24 から転載）…… 211
第 312 図　藩校育徳館の校門（黒門）…… 212
第 313 図　旭陣屋石垣 …… 212
第 314 図　旭陣屋（旭城）縄張り図（事務局作成）…… 213
第 315 図　移築された旭陣屋の門（賢明寺）…… 213
第 316 図　移築された旭陣屋建物（光林寺）…… 213
第 317 図　法然寺南側の堀状の窪み …… 214
第 318 図　法然寺平面図（事務局作成。網掛けは堀の想定部分）…… 214
第 319 図　上清水遺跡平面図（文献 35・朱色が中世期の遺構）…… 215

第 320 図　城山遺跡群中世城館縄張り図（文献 87・九州歴史資料館作成）…… 216
第 321 図　伊方城園遺跡平面図（文献 86）…… 216
第 322 図　大原八幡神社 …… 217
第 323 図　神社西側の空堀 …… 217
第 324 図　大原八幡神社の城館関連遺構縄張り図（事務局作成）…… 217
第 325 図　延永ヤヨミ園遺跡調査区位置図（文献 111）…… 218
第 326 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ区遺構配置図（文献 109）…… 218
第 327 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区遺構配置図（文献 111・濃いアミカケ中世遺構）…… 218
第 328 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ−Ｃ区 14 号溝実測図（文献 101・仕切りが見られる）…… 219
第 329 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区遺構配置図（文献 106・朱色が中世遺構）…… 219
第 330 図　宝山小出遺跡・宝山桑ノ木遺跡遺構配置図（文献 108）…… 220
第 331 図　福富小畑遺跡 B 地区遺構配置図（文献 98）…… 221
第 332 図　矢留堂ノ前遺跡中世遺構変遷図（文献 110）…… 222
第 333 図　下木井遺跡Ⅰ区平面図（文献 93）…… 223
第 334 図　築城城跡遺跡平面図（文献 119）…… 224
第 335 図　西八田・堂ノ本遺跡平面図（文献 116）…… 224
第 336 図　西高塚ナカバル遺跡平面図（文献 118）…… 225
第 337 図　荒堀車地遺跡平面図（文献 120）…… 226
第 338 図　大村天神林遺跡・石畑遺跡位置図（文献 125）…… 226
第 339 図　大村天神林遺跡Ⅰ区平面図（文献 125）…… 227
第 340 図　大村天神林遺跡Ⅱ区平面図（文献 125）…… 227
第 341 図　大村石畑遺跡平面図（文献 124）…… 228
第 342 図　吉木常松遺跡平面図（文献 33）…… 229
第 343 図　市丸城居屋敷遺跡平面図（文献 121）…… 229
第 344 図　安雲山田遺跡西側に残る土塁 …… 230
第 345 図　安雲山田遺跡（３地点）平面図（文献 127）…… 230
第 346 図　安雲山田遺跡及び周辺城館関連遺構配置図（事務局作成）…… 231
第 347 図　ハカノ本遺跡２次調査１区平面図（文献 126）…… 232
第 348 図　下尻高遺跡・ハカノ本遺跡２次調査１区で検出された区画溝（文献 126）
（写真提供：上毛町教育委員会）…… 233
第 349 図　今蔵遺跡第１次調査Ⅰ区平面図（文献 123）…… 234

表　目　次

第１表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿 …… 1
第２表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過（平成 27 年度）…… 2

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過

古代の防衛施設である大野城跡、基肄城跡、水城跡という特別史跡が存する本県では、九州歴史資料館を中心した継続的な古代山城の調査研究をはじめ、保護のみならず整備・活用を図ってきた。また、８か所の神籠石系山城も国史跡であるだけでなく、研究者、行政それぞれの場で調査・研究されて、文化財として十分に周知されている。

一方で、中世以降近世初期までの間に築造された、山城を中心とする数多くの城館・城郭遺跡については、これまで県および市町村が実施した遺跡詳細分布調査や重要遺構確認調査、県史・市町村史編纂事業を通じて把握に努めてきた。また、任意団体や個々の研究者によって地道に続けられた調査研究成果の蓄積は著しく、本県における中近世城館研究の進展はこれに負うところが大きい。しかしながら、悉皆的な調査が実施されていないため、位置が特定されていない、あるいは詳細が十分に把握されていない城館・城郭遺跡は依然として多く、適切な保護措置を講じるにあたり情報が不足している状況である。そのため、全体的かつ相対的な評価を行うには至っておらず、遺跡の公開活用を図る上でも県内の城館遺跡相互の比較検討は必要であり、本県にとって中近世城館遺跡の総合調査の実施は課題となっていた。

近年の山間部における開発の増加に加え、山城に対する興味関心の高まりや保存活用の要望の増加から、急務となり、総合的な調査に取り組むこととなった。県内の中近世城館遺跡を対象に、遺跡の位置や範囲、時代、歴史的背景等の基本的情報を可能な限り把握し、成果の体系的な整理と評価を行うものである。また、遺跡の周知化と保存活用に向けた理解の促進をも目的としている。

2　調査の経過

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査事業は、国庫補助を受けて平成 24 年度から５か年の計画で実施している。平成 25 年２月に第１回福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会（以下指導委員会）を開催し、調査の方針と手法について指導を受けた。委員は第１表のとおりである。本詳細分布調査は、県内市町村を旧国に基づいて地域分けし、筑前地域、豊前地域、筑後地域の順に調査を進め、随時報告書をまとめることとなった。

第１表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会委員名簿（敬称略）

委員氏名	職名	備考
西谷　正	九州歴史資料館名誉館長 九州大学名誉教授	委員長・考古学
服部英雄	九州大学名誉教授	副委員長・中世史
中井　均	滋賀県立大学教授	城郭研究

平成 25 年度は筑前地域の報告書刊行と豊前地域の調査を実施する予定となっていたが、筑前地域に所在する中近世城館遺跡の数は非常に多く、また、関連資料等も膨大な量にのぼるため、報告書を２分冊とし、調査事業を１年延長することとなった。指導委員会は２回開催し、調査および報告書作成作業の進捗状況の報告、併せて、旧筑前国の三日月山城館群、黒崎城跡、花尾城跡の現地

視察と検討を行った。また、筑前地域の南半部にあたる旧御笠郡・夜須郡・上座郡・下座郡・穂波郡・嘉麻郡の旧６郡の調査成果を「福岡県の中近世城館跡Ⅰ－筑前地域編１－」にまとめた。

平成 26 年度は筑前地域北半部の重点調査と報告書の作成、豊前地域の調査を実施した。５月に開催した第４回指導委員会では、旧筑前国立花山城跡の南側に位置する城ノ越山に点在する城ノ越城館群の現地視察と検討、報告書作成作業の進捗状況および豊前地域の調査状況の報告を行った。平成 27 年３月には第５回指導委員会を開催し、旧豊前国長野城跡周辺に展開する城館群を現地視察し、検討を行うとともに豊前地域の調査状況の報告を行い、指導、助言を得た。年度末には筑前地域北半部にあたる旧鞍手郡・遠賀郡・宗像郡・糟屋郡・席田郡・那珂郡・早良郡・怡土郡・志摩郡からなる旧９郡の調査成果をまとめた「福岡県の中近世城館跡Ⅱ－筑前地域編２－」を刊行した。

平成 27 年度は豊前地域の重点調査と報告書の作成、筑後地域の調査を実施した。５月に開催した第６回指導委員会では旧豊前国の北東部にあたる馬ヶ岳城跡と松山城跡の現地視察と検討を行い、豊前地域の調査状況を報告するとともに筑後地域の調査についての指導、助言を得た。平成 28 年３月に開催した第７回指導委員会では、旧豊前国南部にあたる神楽山城跡、大平城跡、松丸宇都宮氏館跡、赤幡城跡の現地視察、検討を行い、筑後地域の調査状況を報告し、指導、助言を得た。

第２表　福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員会の経過（平成 27 年度）

	開催日時	会　場	審議内容等
第６回	平成 27 年５月 21 日	行橋市役所	・馬ヶ岳城跡・松山城跡の現地視察 ・馬ヶ岳城跡・松山城跡の検討 ・豊前地域の調査について ・筑後地域の調査について
第７回	平成 28 年３月 10 日	築上町役場 築城支所	・神楽城跡・大平城跡・宇都宮氏館跡等の現地視察 ・神楽城跡・大平城跡・宇都宮氏館跡等の検討 ・豊前地域の報告書作成について ・筑後地域の調査について

３　調査の組織

本詳細分布調査事業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課と九州歴史資料館とで協力して取り組んでいる。

福岡県教育庁総務部文化財保護課（調整・調査・報告）

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
総括				
教育長	杉光　誠	杉光　誠	城戸秀明	城戸秀明
教育次長	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治	西牟田龍治
総務部長	西牟田龍治	西牟田龍治	川添弘人	川添弘人
文化財保護課長	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋	赤司善彦	赤司善彦
課長補佐	桂木俊樹	髙田政司	岩崎千鶴子	岩崎千鶴子
庶務				
管理係長	石橋伸二	石橋伸二	石橋伸二	伊藤幸子
事務主査	伊藤幸子	綾香博充	末吉大祐	末吉大祐

	綾香博充	末吉大祐	宮原朋子	宮原朋子
主任主事	加藤教子	加藤教子	加藤教子	青木久美

調査・報告

企画係長	吉田東明	吉田東明	吉田東明	吉田東明
技術主査	岸本　圭	今井涼子	今井涼子	宮地聡一郎
	今井涼子		大庭孝夫	
	宮地聡一郎			
主任技師		大庭孝夫	坂元雄紀	坂元雄紀
		坂元雄紀		

九州歴史資料館（調査・報告）

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
総括				
館長	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠	杉光　誠
副館長	篠田隆行	篠田隆行	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋
参事				飛野博文
参事補佐	小池史哲			
庶務				
総務室長	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲	塩塚孝憲
総務班長	長野良博	長野良博	山﨑　彰	中村満喜子
調査・報告				
学芸調査室長	小田和利	小田和利	小田和利	小田和利
学芸普及班長 （平成 25 年度から学芸研究班）	松川博一	松川博一	松川博一	松川博一
技術主査		岡寺　良	酒井芳司	酒井芳司
			岡寺　良	岡寺　良
主任技師	岡寺　良	一瀬　智		
	一瀬　智			

調査協力（本書報告対象地域のみ（50 音順・敬称略））

＜公的機関＞赤村教育委員会、糸田町教育委員会、大任町教育委員会、苅田町教育委員会、川崎町教育委員会、香春町教育委員会、北九州市市民文化スポーツ局文化スポーツ課、北九州市立自然史・歴史博物館、上毛町教育委員会、添田町教育委員会、田川市教育委員会、築上町教育委員会、東京大学史料編纂所、福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会、福岡県立図書館、福智町教育委員会、豊前市教育委員会、みやこ町教育委員会、行橋市教育委員会、吉富町教育委員会。

＜研究団体・個人＞梅﨑恵司、片山安夫、木島孝之、田中賢二、中西義昌、中村修身、中村正、廣崎篤夫、前薗廣幸、村上勝郎、若杦善満、北部九州中近世城郭研究会（代表：山崎龍雄（平成 28 年３月現在））。

Ⅱ　調査の方法

1　調査の進め方と方法

前章でも述べたとおり、本県における中近世城館の調査研究成果の蓄積は著しく、既往の調査情報が比較的多くそろっているのが実情である。よって、既往情報の整理と蓄積を主眼に置き、以下のとおりの手順で調査を進めている。

＜手順１＞既存資料の把握

上記の状況を勘案し、対象地域における城館の全体概要を知るために、過去の調査資料等を把握するところから始めることとした。福岡県内における城館調査は、既に江戸時代の地誌類編纂にまでさかのぼることができるが、それらも含め、豊前地域については以下の 10 の文献に、城郭の一覧を早い段階において公表した『探訪日本の城』（1977 年・小学館発行。福岡県城郭一覧は西谷正が記載）を加えた 11 文献を「基本参考文献」とし、そのほか各自治体史や報告書等を参考にしながら、城館の情報を収集した。10 の基本参考文献の概要は以下のとおりである。

①　『豊前国古城記（豊前古城記・豊前国志）』（三木市左衛門政光著カ・1857 年）

幕末頃に著されたもので、豊前国に所在する古城を一覧形式で記している。福岡県立図書館初代館長にして、昭和初期の福岡県史編纂にも携わった研究者・伊東尾四郎が県史および各自治体史誌編纂において引用したために広く知られるところとなったものと思われる。伊東も述べているように、豊前古城記あるいは豊前国古城記と称する書物は異本が二、三あり、少しずつ内容も異なっている。当事務局において原書を確認したものは、九州歴史資料館所蔵・伊東尾四郎資料の『豊前国古城記』（第１図）と福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会所蔵・小笠原文庫の『豊前古城記』（第２図）の二つであり、また若干書名は異なるが、古城の記載部分が類似するものとして国立公文書館所蔵『豊前国志』（慶応元年（1865）・高田吉近著）の「古城伝記」がある。伊東尾四郎が編纂した『京都郡誌』（1919 年）などの引用文を参照する限りでは、九州歴史資料館所蔵本に酷似するものがさらに１冊あるようであるが、所在を確認することはできなかった。

なお、九州歴史資料館所蔵本の巻末には、「安政四年歳次丁巳九月上旬　臣三木市左エ門政光謹書」と書かれており、著作者・著作年を示しているものと思われる一方で、小笠原文庫本の巻頭には「明治三十年七月」と書かれており、写本であることがわかる。

本報告書では、九州歴史資料館所蔵本『豊前国古城記』を主に引用し、それ以外の異本は必要に応じて引用している。

②　『豊前志』（渡辺重春著・渡辺重兄校訂・1898 年）

幕末から明治時代にかけて活躍した国学者・渡辺重春が著したもので、豊前国の郷村、寺社、山川、名所旧跡などを記したいわゆる「風土記」であり、その中でも特に城跡についてはかなりのものが網羅されており、幕末期における古城の認識を知ることができる。文久３年（1866）にはほぼ完成していたが、公開されることなく、家に蔵してあったという。その後、明治時代に入ると本書を引用した記載が見られるため、一部には公にされていたものとみられるが、嗣子の重兄が校訂を加えたうえで、明治 32 年（1898 年）に公刊されるに至った。昨今では、昭和 46 年（1971）に雄山閣から発行された『大日本地誌大系 43 豊前志』が広く利用されており、本報告を作成の上でもそ

ちらを参照したほか、一部に国立公文書館所蔵本も利用した。

③ 『旧城跡等ノ取調』（福岡県社第 1956 号　大正５年 10 月２日施行）

福岡県庁には大正５年の公文書の中に「旧城跡取調」という一連の文書が残されている。これは同年９月 10 日付にて高知県庁から各府県にあてての照会として、「貴府縣下ニ於テ旧城址ノ現存セルモノ有之候ハバ乍御手数左記事項御回報相成候」として城名、城主名、位置、面積、現存建物の有無、所有者及び管理者、利用・維持・保存方法について回答を依頼している。福岡県ではこれを受けて県下の郡役所に照会をかけ、回答を得ている。城数自体はさほど多くはないものの、大正時代の城跡の認識を知る上でも非常に重要な資料である。

④ 『研究旅行用　面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（和田宗八・1936 年）

福岡師範学校教諭の和田宗八が著し、金文堂から出版された。序文に「一、小学校の先生曰く、

第１図　『豊前国古城記』（九州歴史資料館蔵（左：表紙・中：本文・右：奥付））

第２図『豊前古城記』（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵（左：表紙・右：本文））

この村はつまりません。貧乏村で（以下略）」のユニークな書き出しで始まるこの書籍は、郷土史を教える福岡県内の小学校、中等学校の教員のために記されたもので、福岡県の歴史に始まり、人物、風習、口碑伝説、遺跡などを記す。特に史蹟遺物口碑伝説所在地と銘打った一覧は、市郡ごとに詳細な地名表が掲げられ、城館のほか、寺社や遺跡なども数多く掲載されている。和田は本書を記すにあたって、地誌類はもとより数多くの古文献に当たっているようで、本文献が初出の城館も少なからず存在する。また、当文献は後の福岡県教育委員会作成の一覧（文献⑦）を作成する際にも参考とされ、その後の城館一覧に掲載されるに至ったものもある。

なお、本書の奥付を見ると当時1円50銭で販売されたことがわかる。

⑤『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967年））

大類伸が監修し、全国都道府県ごとに古代から中近世城館の全体概要を示したという点では、戦後初めてとなるシリーズ本で、鳥羽正雄や小室栄一など当時の学界をリードしていた研究者が編集を行った。福岡県は蒲池星が編集を担当、小和田哲男や廣崎篤夫などが執筆した。近世からの地誌のほか、郡誌などにしか掲載のない城館なども採り上げられ、昭和40年代における城館の把握状況を知ることができる。

⑥『地名から探る豊前国遺跡』（定村責二・1976年）

行橋の郷土史家・定村責二が著したもので、福岡県内の豊前国地域を対象とし、各地に残る小字名などの地名を収集、それらの地名の由来を遺跡の種別ごとに類推した書物である。遺跡としては、貝塚遺跡、住居遺跡、埋葬遺跡、生産遺跡、祭祀遺跡を挙げるほか、祭祀・社領・寺址・寺領・経塚や、さらに古城や居館などが挙げられる。中でも古城と居館については、「古城と居館地名を探る」という一編を設け、地名や古文書などから豊前各地に所在する古城や居館の一覧を挙げている。県内においては古城の一覧表がまだ整備されていない段階における成果であったため、一覧に挙げられた多くの城名は、この後に刊行される以下の基本文献（下記⑦〜⑩）の城跡の一覧表の出典にもなっている。

しかしながら、いわゆる城館関連地名を元に城跡の存在を類推しており、実際現地に城跡があるかどうかの照合をほとんど行っていないため、地誌などに名称が表れてこないような事例は、実際に城館が存在する根拠としては不十分であり、むやみに当地域の城数を増やしてしまったというマイナス面も否定できない。

なお、本報告書では、そのような地名のみが根拠となっている証拠不十分なものについては、ひとまずは削除対象とし、一覧表の末尾に挙げておくにとどめておいた。

⑦『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX 付録　福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）

九州縦貫自動車道建設に伴い、70年代には福岡県教育委員会では路線内の記録保存調査を大規模に行うこととなったが、中世城館跡も幾つかが調査対象となった。その一つ、鞍手町音丸城跡の調査報告に際し、県内の中世山城跡の一覧表を作成報告したものが本書である。基本的には城名、所在地、立地、規模、形式、築城者、時代、残存遺構、文献、備考の項目を列記したものである。例言の5に「本書は、中世山城についての資料を採集した資料編で、今後の研究のためのたたき台としてほしい。」とあるように、その後の福岡県内における城館研究の基礎資料となった。

⑧『日本城郭大系』第18巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979年）

全国の古代から近世に至るまでの城館遺跡を対象としたシリーズで、都道府県ごとに地元の研究者が執筆したこともあり、70 年代の城館遺跡に関する情報が網羅されたものとなっている。福岡県は県職員で古代史が専門の磯村幸男が編集を担当し、中世については当時、文献⑦を手がけていた副島邦弘と近沢康治が、近世は三池賢一という県の関係者が手がけている。中世に関しては文献⑦と重複する部分が殆どであるが、一般への普及という意味においては本書の果たした役割は大きい。

⑨ 『福岡県の城』（廣崎篤夫・1995 年）/『福岡県古城探訪』（廣崎篤夫・1997 年）

中学校の歴史教員の傍ら、全国城郭研究者セミナーなどの全国学会でも発表しつつ、60 年代から 90 年代の約 40 年をかけて県内 1,000 箇所の内の約 700 箇所を踏査し、内約 300 城を詳細に報告した労作である。特に、これまで城館跡の報告としては図面等が完備されたものがなかったが、本書では非常に多くの縄張り図を完備しており、本書が刊行された折には全国の城館研究者の注目度が高かったことは、当時の研究雑誌に書評が載せられたことからも窺い知ることができよう。また、巻末には詳細な城館一覧表が載せられていることも本書の学術的価値を高めている。また、『福岡県の城』刊行の 2 年後には普及・追補版として『福岡県古城探訪』が刊行されている。

⑩ 『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009 年）

平成 11 年、福岡県に「北部九州中近世城郭研究会」が発足した。同会は、これまで北部九州の城館研究を推進してきた一人、中村修身が中心となって主宰したもので、年 1 回の研究集会の他、年数回の現地見学会、年 2 回の機関紙の発行が主な活動内容となっている。自治体、大学、その他城郭研究者など、多様なメンバーによって構成された団体であり、この研究会が母体となって、中村と同会会員の村上勝郎が中心となってまとめたのが本書である。本書には、県内 222 箇所の中世城館の説明と挿図が載せられている。会員をはじめとする計 38 人という大人数が執筆に加わったこともあり、昨今の県内城館の研究状況をそっくり反映したものとなっている。巻末には城館一覧も掲載されている。

また、豊前地域は郡によって参考とする既往文献が大きく異なるため、ここで各郡における既往文献の状況だけ簡単に触れておくこととしたい。

㋐企救郡　企救郡において郡内の城跡の状況を詳しく述べた文献に『企救郡古城址取調簿』がある。これは明治 11 年（1878）の郡制施行当時、企救郡役所（門司・小倉地域）から内務省に報告されたもので、明治初期当時の城跡の認識と状況を知ることができる。原書は既に紛失されており、主に伊東尾四郎が編纂した門司市、小倉市、企救郡の自治体史誌に引用されているものが利用されている。また、企救郡域の城跡を取り扱ったものに廣崎篤夫が 1969 年に出版した『北九州の城』などもあり、本報告書を作成するにあたり、大いに参考とした。

㋑田川郡　田川郡においては高橋種之が近代に編纂した『田川郡誌』が存在するが、本報告書作成において参照することができなかった。そのため、それを多数引用したと考えられる『田川産業経済大観』（1954 年）や『上野村誌』（1930 年）などを参照したほか、近年の刊行物としては、『方城の山城』（1991 年）や方城郷土史研究会が発行した『下田川の山城』（2012 年）などが挙げられる。

㋒京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡　これらの郡においては、基本的に自治体史誌が中心となるため、ここではその詳細は割愛するが、京都郡については、『京都郡誌』に『古城跡実地取調報答書』が引用されており、伊東尾四郎は明治 10 年頃のものかと推測しており、明治初期の城館の認識を知る

うえで重要な記載といえよう。築城郡・上毛郡については、『築上郡志』(1911 年)と『築上郡史』(1956 年）が初出記載となる城も多い。

＜手順２＞既存情報の整理

上記の資料をはじめとする把握された既存情報を元に、城館一覧表を作成するとともに、位置が判明しているものについては国土地理院発行 1/25,000 地形図により位置図を作成した。それらの内容や詳細についてはⅢ・Ⅳを参照願いたい。

それらの情報をこの段階において、該当市町村教育委員会および調査指導委員に情報照会を行ったうえで、追補訂正を行った。

＜手順３＞一次調査

上記、既存情報の整理を行った情報をもとに、一次調査として以下の調査を行った。

①　現地遺構の確認調査

位置が把握できたものについて、現地にて遺構の有無や状況について確認した。既に縄張り図等のデータがあるものについては、それらの図面と現地の状況との照合も行っている。

②　文書調査

既に翻刻されている古文書について、対象地区の城館にかかわる記載を抽出する作業を行った。詳細についてはⅥを参照願いたい。

③　絵図調査

古城跡を描いた古絵図資料として、文化～天保年間に秋月藩士の大倉種周・土井正就によって描かれた『古戦古城之図』（国立公文書館蔵）等の調査も行い、現地調査のためのデータの参考とした。

④　地名調査

城館にかかわる地名を抽出する作業で、「明治十五年字小名調」（『福岡縣史資料第九・十輯』1938 ～ 39 年福岡県編集・発行）を元に、城館関連地名について抽出を行い、現状で把握できている城館との照合を行った。また、上記文献には記載されていないが、現在残されている小字名なども城館に直接関わると思われるものについても抽出を行った。詳細についてはⅦを参照願いたい。

＜手順４＞二次調査（追加調査）

一次調査において、得られた情報をさらに補完するため、追加調査として二次調査を行った。調査内容については以下のとおりである。

①　現地調査

一次調査において現地を確認した結果、城館遺構が確認され、なおかつ既往の図面がないものについて、縄張り調査を行い、図面を作成した。また、平地に立地し、現地形からでは城館の範囲の特定が困難なものについては市町村が所蔵する地籍図を利用して城館の範囲を特定・推定した。作業の行程上、現地調査については一次調査と二次調査を連続して行わざるを得ない状況であり、いくつかについては事実上、一連の調査として行ったものもある。

なお、図面の作成方法・表記・遺構名称等については、『発掘調査のてびき　各種遺跡編』（2014年・文化庁編）に準じた。

②　地名調査

一次調査において確認された城館関連地名について、特定の城館と関連性が窺われるものについては、現在の場所との照合を行った。照合方法は、現在の小字との照合によるものであり、市町村教育委員会および地元博物館等に照会することで行った。そのため、既に今となっては所在不明となってしまったものも多かった。

最終的に、調査対象については「中近世城館」・「城館関連遺跡」・「城館等伝承地」の三分類を行い、それぞれ報告することとした。それらの分類基準は以下のとおりである。

①　中近世城館

中近世城館一般をさす。位置や来歴が明確なもののみならず、それらが不明の場合であっても、基本文献に城として記載されているものについてはここに含めた。

なお、報告においては中世城館と近世城館は区別し、中世から近世まで連続しているものについては中世城館に含め、近世以降に築城されたことが明らかなものについて、近世城館とした。

②　城館関連遺跡

城館等の伝承や来歴はないが、発掘調査において中世（概ね 12 ～ 16 世紀代）の溝や堀状遺構で囲まれた集落、屋敷地などの遺跡を指す。中世の屋敷地と思われる遺跡であっても、溝や堀で囲まれる、防御されたものではないものについては除外した。

③　城館等伝承地

城館伝承の内、主として特定の武将などの居館として伝承のあるもので、現在、場所や城館遺構が全く不明となっているもの、城館以外のもの（岩など）に城館伝承が付されているものを指す。確実に遺構等が見られるものについては「中近世城館」として扱っている。

本書では、上記の調査を経た福岡県内の豊前地域（旧企救（規矩）郡・田川郡・京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡）について報告を行うものである。

Ⅲ　対象地域城館一覧

本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての一覧を示す。一覧表の各項目の詳細は以下のとおりである。

＜一覧表の項目解説＞

「地域」…県内の旧国名（筑前・筑後・豊前）の別を示す。

「No.」…遺跡の分類ごとに通しで番号を付した。番号の振り方は以下のとおり。

- 「中世城館」…１・２・３･･･
- 「近世城館」…Ｋ１・Ｋ２・Ｋ３･･･
- 「城館等伝承地」…Ｄ１・Ｄ２・Ｄ３･･･
- 「城館等関連遺跡」…Ｒ１・Ｒ２・Ｒ３･･･
- 「所在不明」…Ｆ１・Ｆ２・Ｆ３･･･

「名称・別称」…城館の名称が複数あるものについては、なるべく基本参考文献の初出名を名称として採用し、他の名称については別称とした。ただし、今日一般的に通用した名称が上記基準でない場合は、一般名称の方を採用した（宇都宮氏館など）。

「旧郡名」…旧郡名の別を指す。なお、企救郡は、中世期から近世初頭においては「規矩郡」と記されることが多く、近世期以降は「企救郡」が一般化し、両者が混在している。本書では煩雑を避けるため、「企救郡」で統一した。

「所在地」…大字までの表記とした。

「関連地名」…地名調査の結果、城館に直接関連すると思われる地名を記した。

「史料」…文書調査の結果、一次史料に記載のあるものには、「一次」欄に、参考史料に記載のあるものには「参考」欄に○を付した。

「地誌類・基本参考文献」…本一覧表を作成するにあたって基本参考文献とした文献に記載のあるものにはそれぞれ○を付し、「その他文献」欄にはそれ以外の文献番号（番号は参考文献一覧（36～39ページに記載）の番号に同じ）を付した。番号がゴチックとなっているものについては、縄張り図または測量図が掲載されている文献を指す。文献の略号内容は以下のとおり。

- 「古城記」…『豊前国古城記（豊前古城記・豊前国志)』（三木市左衛門政光著カ・1857年）※類似する異本も含む。
- 「豊前志」…『豊前志』（渡辺重春著・渡辺重兄校訂・1898年）
- 「旧城」…『旧城跡等ノ取調』（福岡県社第1956号　大正５年（1915）10月２日施行）
- 「種々」…『研究旅行用 面白い種々な見方の福岡縣史､史蹟名勝口碑傳説所在地』（金文堂（和田宗八･1936年））
- 「全集」…『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡（人物往来社（鳥羽正雄他編・1967年））
- 「遺跡」…『地名から探る豊前国遺跡』（定村責二・1976年）
- 「探訪」…『探訪日本の城』10 西海道（小学館（西谷正ほか・1977年））
- 「教委」…『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX 付録　福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979年）

・「大系」…『日本城郭大系』第 18 巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979 年）
・「廣崎」…『福岡県の城』（廣崎篤夫・1995 年）/『福岡県古城探訪』（廣崎篤夫・1997 年）
・「城郭」…『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009 年）

「種類」…以下の基準により分類して表記した。
・「山城」（比高約 30 ～ 50m 以上の丘陵・山稜上に立地する城館）
・「丘城」（比高約 30 ～ 50m 未満の丘陵上に立地する城館）
・「平城・平地居館」（平地に立地する城館）

「所在」…城館の所在や遺構の状況や範囲は、判別できるか否か等で、以下のとおり分類・表記した。
◎…所在・残存遺構・範囲が明確に把握できるもの。
●…所在は把握できるが、残存遺構や範囲は把握できない（もしくは未踏査）もの。
○…小字の範囲程度の所在のみが把握できるもの
△…大字の範囲程度の所在のみが把握できるもの
なお、旧郡の範囲までしか把握できないものについては「所在不明」とした。

「図幅名」…Ⅳに掲載した位置図の図幅名を示した。図幅名は国土地理院のものを採用し、地図の西側と東側とで、それぞれ（西）・（東）を付した。

「調査データ」…今回の調査事業も含め、「縄張り調査」・「測量調査」・「発掘調査」がなされているものについて、それぞれ○を付した。

「包蔵地番号」…周知の包蔵地となっているものについては、包蔵地番号を県および市町村の番号をそれぞれ付した。それぞれの包蔵地を示した分布地図については、参考文献一覧を参照願いたい。

「概要」…Ⅴの個別報告に記載のあるものについては、記載ページを付し、記載のないものについては、城館の概要について記した。

＜中世城郭＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	1	筆立山城	ふでたてやま		企救郡	北九州市門司区門司							○						○	○		山城	●
豊前	2	東明寺山城	とうみょうじやま	東明寺城	企救郡	北九州市門司区東門司2丁目				○	○				○	○	○	○	O	○	14・18・131・133	山城	◎
豊前	3	三角城	みすみ	三隅山城	企救郡	北九州市門司区門司				○	○			○	○	○	○	○	○	○	14・18・**38**・131・**133・143**	山城	◎
豊前	4	金山城	かなやま		企救郡	北九州市門司区黒川・大積							○			○	○	○	O	○	14・18・131	山城	●
豊前	5	丸山城	まるやま		企救郡	北九州市門司区大積				○	○	○	○		○	○	○	○	O	○	14・18・131・**133**	丘城	◎
豊前	6	辻畑城	つじばたけ		企救郡	北九州市門司区大積															17・131	丘城か	△
豊前	7	伊川城	いがわ		企救郡	北九州市門司区伊川						○							○	○	131	丘城	●
豊前	8	猿喰城	さるはみ		企救郡	北九州市門司区猿喰・畑	城山	○			○		○	○	○	○	○	O	O	O	13・**18**・**133**・**143**・**148**	山城	◎
豊前	9	柳城	やなぎ		企救郡	北九州市門司区大里		○							○	○	○	○	○	○	18・131・133	山城	●
豊前	10	畑城	はた	陣山城	企救郡	北九州市門司区畑							○		○				○	○	18・131	丘城	●
豊前	11	吉志城	きし	寒竹城	企救郡	北九州市門司区吉志	射場ヶ谷					○	○		○	○	○	○	○	○	13・18・131・133	山城	●
豊前	12	恒見山城	つねみやま	恒見城・猿山城・上山城・城山城	企救郡	北九州市門司区恒見	城山			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	13・18・131・133	山城	●
豊前	13	猪ノ浦城	いのうら		企救郡	北九州市門司区恒見															17	不明	△
豊前	14	若王子城	にゃっこうじ	若一王子城・若王寺城・王子城	企救郡	北九州市小倉北区富野・門司区大里	陣ヶ尾			○				○	○	○	○	○	○	○	15・18・131・133	山城	◎
豊前	15	足立山城	あだちやま	吉見城・足立城・黒原城・妙見山城・妙見城	企救郡	北九州市小倉北区足原・小倉南区足原・葛原・湯川		○	○	○	○				○	○	○	○	○	O	15・18・131・133	山城	◎
豊前	16	引地山城	ひきちやま	到津城	企救郡	北九州市小倉北区都1丁目		○		○	○		○	○		○	○	○	○	○	15・18・131・133	丘城	◎
豊前	17	恵里城	えり	恵利城	企救郡	北九州市小倉北区南丘1丁目	恵里城山							○	○		○	○	○	○	13・15・131・133・**142**	山城	●
豊前	18	丸城	まる	下北方城・北方城	企救郡	北九州市小倉南区北方周辺	城野				○		○		○		○	○	○	○	13・15・18・131・133	平城か	△
豊前	19	虹山城	にじやま	二神山城・尼寺山城・蒲生城	企救郡	北九州市小倉南区蒲生				○	○		○		○	○	○	○	O	O	13・15・131・133・**142**	山城	◎
豊前	20	巣山城	すやま		企救郡	北九州市小倉南区蒲生				○	○				○					○	13・15	不明	△
豊前	21	城ノ腰城	じょうのこし	成腰城	企救郡	北九州市小倉南区蒲生					○						○	○	○	○	13・15	不明	△
豊前	22	大三岳城	おおみつだけ	三岳城	企救郡	北九州市小倉南区辻三		○						○	○	○		○	O	O	13・16・18・**36**・131・133	山城	◎
豊前	23	小三岳城	こみつだけ	三岳城	企救郡	北九州市小倉南区辻三		○		○	○		○		○	○	○	○	O	O	13・16・**36**・18・131・133	山城	◎
豊前	24	吉川城	きっかわ	小早川城・益田陣	企救郡/筑前国	北九州市小倉南区辻三・八幡東区大蔵						○							○	O	11・13・16・**36**・133	山城	◎
豊前	25	三角城	みすみ	田代城	企救郡/筑前国	北九州市小倉南区辻三・八幡東区田代							○				○	○	○	O	13・16・18・**143**	山城	◎
豊前	26	宝積寺城	ほうしゃくじ	合馬城	企救郡	北九州市小倉南区合馬							○						○	○	13・16・18・131	山城	◎
豊前	27	長尾城	ながお	高野谷山城・高野城	企救郡	北九州市小倉南区長行								○	○	○	○	○	○	○	13・16・18・131・133・**142**	丘城	◎
豊前	28	大鍋山城	おおなべやま	徳力城・徳力山城	企救郡	北九州市小倉南区徳力・志井							○		○	○	○	○	○	○	13・18・131・133	山城	△
豊前	29	椎山城	しいやま	志井城・古川山城・城ノ粒城・徳光城・陣山城	企救郡	北九州市小倉南区徳吉・志井				○	○	○	○		○	○	○	○	O	○	13・16・18・131・133・**142**	山城	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
下関(東)						『種々』にある「筆立山古城址」の記載を初出とし、『福岡県古城探訪』や『福岡県の城郭』では門司城の出城として考えられている。門司城のある古城山の南嶺続きに聳える筆立山(標高105m)山頂に位置し、山頂部には神社の石祠や石段、さらには戦時中の高射砲台のような痕跡が残り、人為的な平坦面が見られるが、確実な城郭遺構とは言えず、詳細は不明と言わざるを得ない。
下関(東)	○				1023	本文71頁を参照。
下関(東)	○	○			1022	本文71頁を参照。
下関(東)	○				1061	『取調簿』には文治年間に門司親房が築城した城で常に門司城の出城であった旨が記載され、「(黒川)村ノ東北字金山辻ノ頂ニアリ、方二十間余ノ円形平地ヲ見ルノミ。此趾大積村ニ跨リ、同村ニテハ満合辻ト称ス」とある。大積小学校の北側に聳える金山山頂にあったとされ、『福岡県の城』には、山頂を中心に全長500m前後の大規模な城郭を想定した縄張り図が掲載されているが、現状を確認した結果、山頂を中心としたほとんどの曲輪や堀切は、自然の平坦地形や自然の鞍部、一部主郭の南側に確認された人為的な平坦面も、赤間石採取による城郭とは無関係の造作であることが判明した。よって、明確な城郭遺構を見出すことは現状ではできず、詳細は不明と言わざるを得ない。
下関(東)	○				1024	本文72頁を参照。
下関(東)						『大積村志』(文献17所収)には「古跡」として、「辻畑城」と記す。文献131には門司文書を出典に、「大積下総五郎親清　辻畑城主」と記し、門司氏関連の城の一つとしている。文献131によれば、小字「辻畑」が金山城の東麓にあるが、現在は九州自動車道となっており、詳細は不明である。
小倉(東)					1062	大正5年の『旧城』の企救郡役所の回答の中に、「伊川城」として、城主・聖護院入道平明俊とされる。文献131では、「門司郷土叢書」を出典として、保元2年(1157)に企救郡に下向した長野氏が聖護院入道明俊に伊川郷を領知させたとある。また、さらに門司文書を出典として「伊川兵部少輔親澄　親頼叔父　伊川城主」と記す。円楽寺の裏山一帯にあったとされるが、現地は自然地形と後世の墓地が見られるばかりで、明確な城郭遺構はみられない(『福岡県の城』には堀切ありとするが、後世の切通しである)。所在も含め詳細は不明と言わざるを得ない。
小倉(東)	○				1019	本文73頁を参照。
小倉(東)					1025	戸ノ上山の北麓、戸ノ上中学校の南にある小高い丘の上にあったとされ、現地には城跡の石碑も残されている。文献131などでは、『門司文書』などから、貞治2年(1363)に北朝方の門司親房が、南朝方で猿喰城主の門司親頼らを討ち滅ぼすが、その南朝方の将に柳城主の柳大和守親通の名が見える。近隣の宅地造成により破壊されており、一部土塁が残るのみという(未確認)。
小倉(東)					1063	『種々』には「陣山城址(柳田氏)」との記載が見られる。文献131には『畑村村誌』を出典とし、「本村西北にあり、東西に十七間、南北七間、事蹟不詳、本郡門司城の支城にして、大内氏の所有と口碑に伝えている」とする。大字畑地内の周防灘に面した標高79mの独立丘陵上にあったとされ、『福岡県の城』には曲輪跡や大土塁もあるとされている。しかし、山頂から東側は採石により大きく損なわれ、それ以外の場所も自然地形か円墳の隆起しか見られず、明確な城郭遺構は存在しない。
小倉(東)					1033	『取調簿』には文治年中に門司親房が築き、応永年間には門司民部親俊入道が城主とする。さらに「村ノ北方射場ヶ谷ニアリ。東西三十間、南北四十間許ノ平地」とある。吉志の標高約60mの寒竹山山頂にあったとされるが、九州自動車道の吉志PAの敷地となったため、消滅したとされる。
小倉(東)					1021	『豊前志』には、阿部入道平道兼が在城したとする。『古城記』には「同(城跡一ヶ所)　恒見村ニ有　城山」と記載される。『取調簿』では「猿山城　一名上山城」として「村ノ東方、上ノ山頂ニ、東西十間、南北十二間余ノ平地ノ中央ニ、方五間許ノ臺アリ。僅ニ下ル東南二方ノ山腹ニ、深一間、幅三間内外の縦濠数ヶ所アリ」と記す。恒見の鳶ノ巣山から北へ延びる頂部にあったとされるが、採石のために消滅したとされる。
小倉(東)						『恒見村志』(文献17所収)にある「企救郡古城跡」からの抜粋として、「猪ノ浦　一　同壱ヶ所　但申伝而已ニ而場所等も相分不申勿論年号城主等相知不申候　同村(恒見村)」とあり、城主、年代はおろか、場所すらも不明で、城の名前のみを伝えるとする。
小倉(西)					2028	本文74頁を参照。
小倉(西)	○					本文76頁を参照。
八幡(東)						本文78頁を参照。
八幡(東)		○				『小倉市史続編』(文献15)には『企救郡誌』を出典として「恵里城」をあげ、「古城伝に曰く、味尾縫殿城主と見えたれど、何れの頃か、其伝を知らず。」とし、蒲生城の出城であるとする。『取調簿』には「恵利城」として「(蒲生)村ノ北、恵理城山ノ頂ニアリ。東西廿間、南北廿間許ノ円形平地ニシテ、僅ニ城臺ノ形ヲ存スルノミ」とある。鷲峰山の北東峰、紫川に面した小丘陵上にあったが、昭和40年代頃に住宅開発により消滅した。現在の南丘小学校の場所にあったとされる。一方、文献142には、消滅前の恵里城とされる図面が掲載され、一辺約20～30mの楕円形の曲輪を一つ設け、その北西側に土塁を備えた堀切一本がある単郭構造の小規模城館であるが、周辺地形がほとんど記されておらず、現地との照合は困難である。
八幡(東)						『取調簿』には「下北方城　一名丸城」として「(北方)村ノ東方曠原ノ中にアリ。東西百間、南北百間余ノ平地ナリ。現今民有地ニ属シ、開墾シテ畑地トナシ、其間僅ニ城臺ノ形ヲ存スルノミ」とある。城主はいずれの地誌も不詳とする。早くから開発がなされてきた所であるため、詳細は所在すら不明である。
八幡(東)	○				3127	本文79頁を参照。
八幡(東)/徳力(東)						『豊前志』に「巣山城阯」として「同村(蒲生村)にあり。長野の一族、規矩掃部頭之重在城」とある。『福岡県の城』では虹山城の別称としているが、地誌類には虹山城(蒲生城)と明らかに別の城として項目を立てて記載しているため、とりあえず別の城として扱った。所在も含め、詳細は不明である。
八幡(東)/徳力(東)						『古城記』には「同(城跡)一ヶ所　蒲生村今村由分ニ有　城ノ腰」とし、妹尾加賀を城主と記している。『豊前志』には城主不詳の「成腰城趾」とあり、以後の文献も、この「成腰城」と記載する。「成腰」と「城腰」は字がよく似ているため、『豊前志』の誤記の可能性も考えられる。また城主名の「妹尾」も恵里城の「味尾」と類似し、これも同一の可能性も考えられる。今回は便宜上、城ノ腰城と成腰城のみを同一のものとして扱った。所在含め、詳細は不明である。
徳力(東)	○				3166	本文80頁を参照。
徳力(東)	○				3166	本文83頁を参照。
徳力(東/西)						本文84頁を参照。
徳力(東/西)	○					本文86頁を参照。
徳力(東)						本文89頁を参照。
徳力(東)	○				3145	本文89頁を参照。
徳力(東)						『取調簿』には「大鍋山城」として、応永年間の長野氏の支城とし、徳力村の南にある大鍋山の山頂にあるとする。現在、徳力の南に在った丘陵は、志井ニュータウンの宅地に開発されており、消滅したものとみられる。
徳力(東)/苅田(西)	○					本文90頁を参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	30	山本城	やまもと	大舟城・小舟山城・大舩山城	企救郡	北九州市小倉南区山本				○	○		○		○	○	○	○	O	O	13・16・18・131・133・**142**	山城	◎
豊前	31	水ヶ手城	みずがて	水上山城・水ヶ手塁	企救郡	北九州市小倉南区山本・春吉・道原・合馬				○	○						○	○	O	○	13・16・18・131・133・**142**	山城	◎
豊前	32	宮山城	みややま	稗畑山城・稗畑城・大野城・宮尾城	企救郡	北九州市小倉南区山本		○		○	○		○		○	○	○	○	O	O	13・16・18・131・133・**142**	山城	◎
豊前	33	木下城	きのした	西ノ奥城・西の城・粒城	企救郡	北九州市小倉南区石原町・木下・新道寺・春吉・道原	城ヶ谷山					○	○		○	○	○	○	○	O	13・16・18・131・133・**142**	山城	◎
豊前	34	高畑山城	たかはたやま	高畑城	企救郡	北九州市小倉南区道原											○	○	O	○	13・16・18・131・133	山城	◎
豊前	35	赤松城	あかまつ	赤松ヶ畑城・赤松ヶ鼻城	企救郡	北九州市小倉南区道原	城山		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	13・16・18・131・133	山城	◎
豊前	36	丸ヶ口城	まるがくち	福相寺城・丸ヶ城・丸ヶ口福相寺城・隠蓑城	企救郡	北九州市小倉南区隠蓑・堀越・横代	丸ヶ口			○	○		○		○	○	○	○	O	O	13・15・18・131・133・**142**	山城	◎
豊前	37	堀越城	ほりこし	越堀城・鷲ヶ城・横代山城・横武城	企救郡	北九州市小倉南区堀越・横代	城越山・城山	○		○					○	○	○	○	O	O	13・15・131・133・**142**	山城	◎
豊前	38	下長野城	しもながの		企救郡	北九州市小倉南区長野本町1・4丁目		○											○	○	16・18・131・142	丘城か	○
豊前	39	長野城	ながの	上長野城	企救郡	北九州市小倉南区長野	城山	○		○	○	○	○	○	○	○		○	O	O	16・18・**131**・133・**134**・**135**・**142**	山城	◎
豊前	40	塔ヶ峯城	とうがみね	井手浦城	企救郡	北九州市小倉南区井手浦				○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	13・16・18・131	山城	●
豊前	41	貫城	ぬき	城ノ腰城	企救郡	北九州市小倉南区貫	城ノ腰・殿屋敷・府殿・別府					○	○	○	○	○	○	O	○	○	16・18・131・133・**142**	丘城	◎
豊前	42	朽網城	くさみ		企救郡	北九州市小倉南区朽網													○	○	18・**37**・**142**	丘城	◎
豊前	43	狸葉山城	たぬきはやま		企救郡	北九州市小倉南区朽網							○									不明	△
豊前	44	城山城	じょうやま		企救郡	北九州市小倉南区呼野	城山														13・16	山城か	△
豊前	45	茶臼山城	ちゃうすやま	鬼邊城・海老野城・頂吉城・木部城・呼野城	企救郡/田川郡	北九州市小倉南区頂吉・呼野/田川郡香春町採銅所				○	○	○	○		○	○	○	○	○	O	133	山城	◎
豊前	46	新城	しん		田川郡	田川郡香春町採銅所	新城													○		山城	◎
豊前	47	手切城	てきり	牛切城	田川郡	田川郡香春町採銅所・福智町伊方・田川市夏吉			○	○	○				○		○	○	○	○		山城	◎
豊前	48	花立城	はなたて		田川郡	田川郡香春町採銅所															145	山城	◎
豊前	49	久連山城	くれやま		田川郡	田川郡香春町香春							○									山城か	△
豊前	50	香春岳城	かわらだけ		田川郡	田川郡香春町採銅所・香春		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	21・**84**・137	山城	◎
豊前	51	柿下城	かきした		田川郡	田川郡香春町柿下	城山								○	○	○	○	○	○		山城	●
豊前	52	上野城	あがの	立屋敷	田川郡	田川郡福智町上野				○	○				○		○	○	○	○	19・21・129	山城	●
豊前	53	城山城	じょうやま		田川郡	田川郡福智町上野	城山															山城	◎
豊前	54	観音寺城	かんのんじ	宗印城	田川郡	田川郡福智町上野				○	○	○			○	○	○	○	○	○	19・21・129	丘城	◎
豊前	55	諏訪山城	すわやま		田川郡/筑前国	田川郡福智町上野・直方市上境				○	○	○					○	○	○	○	19・21・129	丘城	◎
豊前	56	城道寺城	じょうどうじ	城導寺城	田川郡	田川郡福智町上野	堀田			○	○	○					○	○	○	○		山城か	○
豊前	57	下ノ原城	しものはる		田川郡	田川郡福智町上野				○												不明	△
豊前	58	城田山城	したやま		田川郡	田川郡福智町上野															129	丘城か	●
豊前	59	近吉砦	こんきち		田川郡	田川郡福智町上野															129	丘城か	●

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
徳力(東)	○					本文93頁を参照。
徳力(東)	○					本文93頁を参照。
徳力(東)	○				3125	本文94頁を参照。
徳力(東)	○					本文96頁を参照。
徳力(東)	○					本文100頁を参照。
徳力(東)						本文102頁を参照。
苅田(西)	○					本文103頁を参照。
苅田(西)	○				3150	本文104頁を参照。
苅田(西)/小倉(東)	○				3151	『取調簿』には「下長野城」として、長野種盛が築城、長野義政に至るまでの城主が記されている。所在情報としては「(下長野)村ノ西南平等寺山ノ頂ニアリ。東西二十間、南北十八間許。方形ノ平地ヲ存スルノミ。」とある。平等寺山は、現在の小倉東ICの南側の低丘陵上が想定されているが、九州自動車道建設の際の土取りにより、現地での確認は困難とされている。しかし、『企救郡誌』(文献13)では旧版の『企救郡誌』を引用し、「平等寺山の頂と云うのをたよりに山の頂に城墟らしい台地があるのを、二、三調査して辛うじて探しあてた位であった」とあるように、既に高速道路の開発前から、城跡の状況がわからない状況であったようである。文献142には、長野城のC地区の曲輪群(第75図)を「下長野城」とする説が出されているが、本書では『取調簿』における記載を重視した。
苅田(西)	○	○	○		3084	本文106頁を参照。
苅田(西)						『豊前志』には、「塔ヶ峯城趾」として「井手浦塔ヶ峯にあり」とし、長野筑前守が天正年間に築城、平手口を通る豊後勢を討ち取ったことが記載される。『企救郡誌』は旧版『企救郡誌』を引用し、「塔箇峯城」として「此山は岩山にして、雑木立茂れども、甚嶮にして猿だに登りがたく見ゆ。其山の形勢塔の如く高ければ号たるなるべし。東は祢疑山につづきしに依、南の野を祢疑野と云」とある。貫山の南西隣に聳える塔ヶ峯山頂(標高582m)にあるとも、またその西側の標高414mの頂部にあるともされるが、いずれも明確な城郭遺構はみられず、詳細は不明と言わざるを得ない。『種々』には「塔ヶ峯城址(長野氏)」とは別に「井手浦城址(長野氏)」が掲載されるが、別の集落でそれぞれ挙がっており、同一の城を指しているものと考えられる。
苅田(東)	○	○			3107	本文108頁を参照。
苅田(東)	○	○	○			本文110頁を参照。
苅田(東)						『種々』の朽網の項に、「狸葉山城址、同古戦場」として挙がっている。『応永戦覧』に応永5年(1398)に大友方の援兵として、貫掃部介宗景、長野修理太夫義種が「狸葉山」に至り、松山城の大内方と戦ったが敗れ、敗走したことが記されており、この「狸葉山」の事を指しているものと考えられる。朽網の狸山周辺が想定されるが、その近辺では明確な城郭遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
徳力(東)/金田(東)						『取調簿』には「城山城」として「(呼野)村ノ西方城山ノ頂ニアリ。東西十五間、南北三十間ノ長円平地ニシテ、僅ニ城墟ノ形ヲナス」とある。茶臼山城(豊前45)と同一の可能性も高いが、『取調簿』にはこれとは別に「木部城　一名茶臼山城」と項目を設けて説明しているため、呼野地内に茶臼山城とは別の未発見の城郭がある可能性も考えられる。
金田(東)	○					本文110頁を参照。
金田(東)						本文112頁を参照。
金田(東)						本文112頁を参照。
金田(東)					053	本文115頁を参照。
金田(東)						『種々』には香春町の上香春所在として「久連山城址」が掲載される。城主等は全く書いておらず、また読み方についても不明である。香春岳周辺に所在するものと考えられるものの、詳細については不明と言わざるを得ない。
金田(東)		○	○	811005・811010・811011・8110032	091・092・093・151・152・165・190	本文115頁を参照。
田川(東)					316	『遺跡』の「柿下城」を初出とし、以後の文献もすべてここを典拠としている。『遺跡』では「城山ノ平」「門ノ下」などの関連地名を根拠としているが、それ以上の城としての根拠はない。香春町の分布地図(文献166)などでは、柿下温泉の東側の頂部に城があるとするが、現地は、石祠とそれに伴う平坦面がいくつか見られる程度であり、確実に城郭遺構と目されるものは確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田(西)						『豊前志』には「上野村城趾」として「今、立屋敷と云ふ。香月兵庫介輔吉居城。秋月種實の旗下なり」とある。『古城記』にも「同(城跡一ヶ所)　上野村立屋鋪」とある。『下田川の山城』(文献129)では、常福池の北、定善寺の裏山に所在するとあるが、典拠不明。現地に明確な城郭遺構も確認されていない(事務局未調査)ため、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田(西)						本文119頁を参照。
金田(西)						本文120頁を参照。
金田(西)						本文121頁を参照。
金田(西)						『豊前志』には「城道寺城趾」として「同村(上野村)にあり。城主未詳」とする。『上野村誌』(文献19)には「上野堀田の東北山上にある、今に城道寺と称して城趾らしきものがある。一説には、鷹取の分城にして世良、大久保、等が居城していたとの口碑を伝へられて居る」とある。『田川産業経済大観』(文献21)には「城導寺城」として紹介する。現在、堀田という小字は残るが、その近辺にて明確な城郭遺構は確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。また、『上野村誌』にはこの城の近辺に「立場ヶ谷」と呼ばれる場所があって、礎石や堀跡があり、城跡としているが、これも詳細不明である。なお、隣の大字弁城には、字「城導寺」があり、この城の場所を暗示している可能性も考えられる。
金田(西)						『古城記』に「掻上城一ヶ所　同村(上野村)ノ内、下ノ原」とある。他の文献には記載はない。上野地内のどこかにあるものとみられるが、詳細な場所がわからないため、不明と言わざるを得ない。他の上野地内所在の城と重複している可能性も考えられる。
金田(西)						『下田川の城』(文献129)に「城田山城(館)」として、南北朝時代上野孫次郎輔世の館といわれているとするが、出典は不明である。福智神社下宮がある丘陵上にあったとされるが、現地は神社に関わる造成段が見られるばかりで、明確な城郭遺構を確認することはできず、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田(西)						『下田川の城』(文献129)に「近吉砦」として、新田城の第一の砦としているが、出典は全く不明。大字弁城に近吉池があり、その北側の大字上野地内の丘陵上に砦を想定しているが、現地は全くの自然地形であり、明確な城郭遺構はない。城の根拠等も含めさらなる調査が必要である。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	60	薬師山城	やくしやま		田川郡	田川郡福智町上野															129	丘城か	●
豊前	61	新田城	にった	弁城	田川郡	田川郡福智町弁城	矢城	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	O	128・129	山城	◎
豊前	62	弁天城	べんてん		田川郡	田川郡福智町弁城													○	○	128・129	平地城館か	●
豊前	63	貴船城	きふね		田川郡	田川郡福智町弁城															128・129	丘城か	●
豊前	64	弥次郎畑城	やじろうはた		田川郡	田川郡福智町弁城				○	○	○			○	○	○	○	○	○	128・129	山城	●
豊前	65	草場城	くさば	切寄城	田川郡	田川郡福智町市場	切寄													○	19・21・129	丘城か	●
豊前	66	石松砦	いしまつ		田川郡	田川郡福智町市場														○	129	丘城か	●
豊前	67	高尾山城	たかおやま		田川郡	田川郡福智町赤池															19・21・129	丘城か	●
豊前	68	赤池城	あかいけ	庄ノ辻城	田川郡	田川郡福智町赤池	城ノ辻・城ノ下				○	○					○	○	○	○	19・21・129	丘城か	●
豊前	69	金田城	かなだ	金岡城	田川郡	田川郡福智町金田				○	○											不明	△
豊前	70	名木野城	なぎの	名城野城・堀敷城	田川郡	田川郡福智町金田				○	○	○	○		○	○	○	○	○		129	丘城か	●
豊前	71	舩木城	ふなき		田川郡	田川郡福智町金田				○													△
豊前	72	神崎城	こうざき		田川郡/筑前国	田川郡福智町神崎・飯塚市鹿毛馬									○		○	○	○	○	129	山城か	●
豊前	73	南木城	みなみぎ		田川郡	田川郡福智町神崎									○		○	○	○	○	129	山城か	●
豊前	74	日王城	ひおう	日野尾城	田川郡/筑前国	田川郡福智町神崎・飯塚市鹿毛馬														○	19・129	山城か	●
豊前	75	糸田城	いとだ		田川郡	田川郡糸田町糸田	城			○			○		○	○	○	○	○	○	21・129	平城か	○
豊前	76	切寄城	きりよせ	切帝城	田川郡	田川市弓削田				○					○								△
豊前	77	糸城	いと	上ノ城・下ノ城	田川郡	田川市位登					○				○	○	○	○	○	○		山城	△
豊前	78	金国城	かなくに	金国大王城・金岡山城・立尾城	田川郡	田川市猪国				○	○		○		○	○	○	○	○	○	21・**154**	山城	◎
豊前	79	上伊田城	かみいた	茶臼山城・城ノ腰城・伊田原城	田川郡	田川市伊田町	城ノ腰	○		○	○				○		○	○	○	○		不明	△
豊前	80	大善寺城	だいぜんじ	伊加利城	田川郡	田川市伊加利	城山			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20・21	山城	●
豊前	81	嶽ヶ城	たけが		田川郡	田川市伊加利				○												不明	△
豊前	82	城坪城	じょんつぼ		田川郡	田川市伊加利	城坪														20	丘城	◎
豊前	83	田原城	たばら	平原城・田原平岳城・壕城	田川郡	田川郡川崎町田原・田川市伊加利				○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	20・21	丘城か	△

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
金田（西）						『下田川の城』（文献129）に「薬師山城」として「上野手永十一世香月右馬助後秀則は、「観音寺城の出城として十六世□初同村薬師山城を築く」とある」とあるが、出典は明らかにされていない。同書には上野の薬王寺の背後にある小丘陵上に位置を図示しているが、現地は自然地形が確認されるのみで、明確な城郭遺構は認められない。そのため、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田（西）						本文121頁を参照。
金田（西）	○			840003		『福岡県の城』には『田川郡誌』を出典として、平安時代末期、平重衡が上弁城の要害地に築城、弁天城と名付けて長野新九郎を城主とした。弁財天を祀ったため、弁天城と名付けられたとする。『下田川の山城』（文献129）では、弁城ダムの奥、「城ヶ辻」を中心とした一帯に城があるとするが、平地に位置し、明確な城館遺構も見られないことから、詳細は不明。単なる伝承の域を出ない可能性も考えられる。また、新田城との混同の可能性も十分考えられる。
金田（西）						『下田川の山城』（文献129）には、「貴船城（館）」として、「長谷川系図によれば、永承元年（1046）、兵部卿吉武の宿老永井因幡守宗壽に命じ、高鳥居城を築城後、弁城貴船に館を設けるとある。後、新田城の第二の城（控城）ともいわれていた」とし、館跡と思われる石垣があるとしている。貴船池の東側、岩屋神社がその館跡としているが、現地未踏査のため、詳細は不明（出典の長谷川系図も未見）。
金田（西）						『古城記』には「城跡一ヶ所　同村（弁城村）ノ内　弥次郎畑　右ハ宝珠山弥左エ門ト云フ者居城ノ由」とある。『方城の山城』（文献 128）では彦山川東岸、宝見神社の北側にある丘陵「明神の森」を想定しているが、現地には明確な城郭遺構は存在しないとみられ（現地未見）、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田（西）						『上野村誌』（文献19）には「草場城」として「市津切寄が城の跡といふ。今に土台石なぞ残って居る、太宰管内誌に興国年中南朝の尊良親王此地に城を築かせ玉ひ云々とあり。今を距る五百八十余年前の事とて何等に関する伝説もない。村人は此処は鷹取城在城の際家老職が住ひし館趾でもあるとも伝へて居る。」とある。また、『下田川の山城』（文献129）には「切寄城」として、「高取山系図」（出典不明）を引き、永承元年（1046）に長谷川兵部卿吉武が居城として、草場切寄を築城、松三郎清直が入城、西方に春日神社を兵神として勧請したとある。同書には、切寄城の位置として、市場の春日神社の境内地とその西方約300mの丘陵上であると図示しているが、双方ともに明確な城郭遺構はみられず、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田（西）						『下田川の山城』（文献129）には「石松砦」として切寄城（草場城）の前方砦であるとし、市場小学校裏山にあったとする。しかしながら、所在はおろか、「石松砦」の存在自体が、出典が明記されておらず、存在自体が不明確である。現地も果樹園等の耕作による段造成が見られるばかりで、明確な城郭遺構はみられないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田（西）						『上野村誌』（文献19）には「高尾山城」として、「赤池にあった前記の如く尊良親皇更に本城を日尾山に築きその北の要害として築かれしものであるといふ」とある。『下田川の山城』（文献129）には福智町と飯塚市との境の小峠の東約500mの丘陵上（字高尾）を城地として図示している。現地は神社跡地で、平坦面があるものの、明確な城郭遺構とは言えず、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田（西）						『豊前志』には「赤池村城趾　城主未詳」とある。また、『上野村誌』（文献19）には「赤池城」として、「城の辻にありた今は正の辻といふ、豊前誌には城主未詳なりとあるも古書には平相國公太宰の権帥時代正三位重衡卿に赤池城を修理せしめ長野氏の族将長谷川氏を居らしむ云々とありて余程古く築かれたものと思はる」とある。『下田川の山城』（文献129）には高尾山に隣接する坊主ヶ谷の峯地山を城地とするが、現地は後世の改変により全く城の痕跡は確認できないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
金田（西）						『古城記』には「金田　城氏居城　菊池一族」とある。『豊前志』には「金岡城趾」とあり「金岡村にあり。城氏居城、菊池の一族なり」とあり、両者が一致する可能性が極めて高い。田川郡には金岡村は存在しないため、『豊前志』の「金岡」が「金田」の誤記であることがわかる。なお、国立公文書館所蔵の『豊前志』にも「金岡」と書かれており、原本自体が誤っている可能性が高いとみられる。所在については大字金田地内にあること以外は不明と言わざるを得ない。
金田（西）						『古城記』には「同（城跡一ヶ所）　金田村名木野」とあり、大友氏配下の麻生弾正隆明が元亀年間に初めて築城したとある。『豊前志』は「名木野城趾」として、『古城記』と同様の内容を記載する。『種々』には「名城野城址（麻生氏）」と名を挙げる。また、『古城記』には、前記の城とは別に「掻上一ヶ所　金田村ノ内、堀敷　右ハ二ノ丸、名木野ハ本丸ノ由」とある。金田の碧巌寺の南側の丘陵上（標高49m）の頂部に城地が推定されているが、墓地などがあり、明確な城郭遺構は認められない。しかし、北側の標高39mの丘陵部は字城山で、城郭遺構とも考えられる平坦面や土塁、堀状の窪みが認められる。こちらは『古城記』のいう堀敷の掻上の可能性も考えられる。城山の城郭遺構については、城山遺跡群（豊前R2）を参照。
金田（西）						『古城記』には「同（掻上一ヶ所　金田村舩木」とあり、星野九郎實宗が筑前より来て居城したとある。城主名などから、「金田」ではなく、「金国」の誤写で、金国城（豊前 78）を指している可能性も考えられるが、ここでは別の城として扱うこととするが、所在等は全く不明である。
金田（西）						『遺跡』掲載の「神崎城」を初出とするが、この根拠は、神崎地内にある「小城ノ下」「勝負迫」などの関連地名のみであり、実態は全く不明である。ただ、『下田川の山城』（文献129）には「神崎砦」として「豊前国と筑前国との境にある為城があったと伝えられている」とするが、出典は明記されていない。神崎貯水池の西側の飯塚市との境、標高130m地点を城地としているが、現地には峠越えの切通し以外は、自然地形であり、明確な城郭遺構はみられず、城の存在自体も再検討する必要がある。
田川（西）						『遺跡』掲載の「南木城」を初出とするが、この根拠は南木地内の「城ノ尾」「貞国」「政光」などの関連地名のみであり、実態は全く不明である。ただ、『下田川の山城』（文献130）には「古書にも南木城と有る」とし、床波池の南側の丘陵頂部にあるとするが、現地踏査の結果、自然地形しか確認できなかった。城の存在自体も再検討する必要があるだろう。
田川（西）						『上野村誌』（文献19）の「高尾山城」の項には、尊良親王が本城を日尾山に築いたとあるのを初出とする。『下田川の山城』（文献129）では「高橋紹運記」を引用し、「日野尾城」に宮家（尊良親王）を移らせたとある。同書では神崎と飯塚市鹿毛馬との境に聳える日王山山頂にあったとするが、現地は公園化により改変されていて、基本的には自然地形しか確認できず、明確な城郭遺構は存在せず、伝承の域を出るものではない可能性も考えられる。
田川（西）				830006	39	『古城記』には「同（掻上一ヶ所）　上糸田村ノ内、城」として、毛利壱岐守家老の安田忠右衛門の居城であり、応永年間の頃には、菊池一族の荒牧兵庫武敬が肥後八代から添田雅楽頭の配下となって糸田の地を領したとある。また、同書には他に、「糸田　糸田氏ノ代々ノ居城。田川郡ニ在リ」とある。現在、糸田町内には字「城」が存在し、その周辺に城地があったものと考えられるが、明確な城郭遺構は見つかっておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川（西）						『古城記』には、「同（掻上一ヶ所　西弓削田村ノ内、切寄」とあり、高橋宗仙の配下、小御門與三兵衛が初めて取り立てたとし、後に高橋宗仙の養子に秋月種実の子を迎えた話などが載っている。他に参考文献もなく、場所も含めて不明と言わざるを得ない。
田川（西）						『豊前志』には「糸村城趾　星野九郎居城」とある。『古城記』には「一 同（掻上一ヶ所）　糸田村ノ内、上ノ城　一 同 同村ノ内」とあり、糸田村内に掻上が二箇所あったことを示している。さらに、金田（金国の誤記か）村ノ城主星野九郎實宗の出城だとしている。糸田（糸田町）と糸（田川市位登）は別の場所であるが、城主名が同じであることから、両者は同一の城を指している可能性が高い。糸田には既に糸田城があることや文中記載の八幡宮が位登八幡宮と思われることなどから、『古城記』の「糸田村」は「糸村」の誤記とみられる。『旧城』には「上ノ城・下ノ城」として名を挙げている。金国城の別称とも考えられるが、確証はないため、別個の城としておく。よって現状では、所在等は不明である。
田川（西）					188	本文122頁を参照。
田川（東）						『豊前志』には「上伊田村城蹟　城主未詳」とある。『古城記』には上伊田村内には「同（城跡一ヶ所）上伊田村城ノ腰」と「同（掻上一ヶ所）上伊田村ノ内、茶臼山」の二箇所がある。共に伊田地内にあったものと思われるが、所在等も含め、詳細は不明と言わざるを得ない。また、『種々』の上伊田の項には、「伊田原城址（大内氏、大友氏）」とあるが、これは伊田河の合戦に由来するものと思われるが、ここでは前述の城の別称として取り扱っておく。
田川（東）						『豊前志』には「大善寺城趾」として「伊加利村にあり。大友能直築けり。後暦応元年、菊池武重造作し、嫡子太郎武光に守らしめたり」とある。『古城記』には他に筑紫但馬守光頼が大内氏より城を預かったことや、応永年間に大森阿波守などの城主名が挙がる。『伊田町誌』（文献20）には古井戸や裏門の伝承などが載っている。城山と呼ばれる丘陵上にあるとされるが、現地は開発がすでになされており、明確な城郭遺構は確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。なお、『豊前志』の企救郡の章に「大善寺城趾　応永五年大友親泰守る」とあるが、郡が異なるが、当城のことを指しているものと思われる。
田川（東）						『古城記』に「同（城跡一ヶ所　伊加里村内、嶽ヶ城」とあり、由緒不明とする。城坪城の事を指す可能性もあるが、ここではとりあえず別個の城としておく。所在を含め詳細は不明と言わざるを得ない。
田川（東）						本文124頁を参照。
田川（東）						『豊前志』には「平原城趾　田原村にあり。田原氏居城」とある。『古城記』には「田原平岳　田原氏居城　田原・安永ノ堺ニアリ」とある。また同書には「同（掻上一ヶ所）　田原村ニ有」とも記す。『伊田町誌』（文献20）の大善寺城の古井戸の解説の中に、「伊加利平原の西丘の頂上に約二反歩位の平地がある、此処を塹城と称して居る。昔大善寺城の在りし頃、同城の見張りの砦であったろうといわれている」とあり、前述と同一地点を指している可能性が高い。所在については、川崎町田原と田川市伊加利との境界線上（大任町安永と川崎町田原は近いが、直接接していない）にあったものと思われるが、その周辺で明確な城郭遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	84	椎木谷城	しいのきだに		田川郡	田川郡川崎町池尻・田川市奈良				○	○	○			○		○	○	○	○	21	丘城か	△
豊前	85	城山城	じょうやま	川崎城	田川郡	田川郡川崎町川崎・田川市猪国	城山・城山下								○		○	○	○	○		山城	◎
豊前	86	木城城	きしろ	内木城	田川郡	田川郡川崎町安真木	内木城						○		○		○	○	○	○	21	丘城	◎
豊前	87	荒平城	あらひら		田川郡	田川郡川崎町安真木																山城	●
豊前	88	龍円城	りゅうえん	真崎城・立園城・龍園城	田川郡	田川郡川崎町安真木					○	○	○		○	○		○	○	○	21・88	丘城か	●
豊前	89	安宅城	あたか	安居城・陣ノ尾城	田川郡	田川郡川崎町安真木	城の越・城の迫			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	21	山城	●
豊前	90	蛇面城	じゃめん	蛇面山城	田川郡	田川郡大任町今任原				○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	22	丘城	●
豊前	91	古寺城	ふるでら		田川郡	田川郡大任町今任原				○												不明	△
豊前	92	明神山城	みょうじんやま	山下城・山久井城・丸角城・桑原城	田川郡	田川郡大任町今任原		○		○	○	○	○				○	○	○	○	22・**85**	丘城	◎
豊前	93	差儀城	さぎ		田川郡	田川郡赤村赤・大任町今任原				○												山城か	△
豊前	94	玄己山城	ごんげんやま		田川郡	田川郡大任町今任原														○	22	山城か	○
豊前	95	城越城	じょうのこし	今任城	田川郡	田川郡大任町今任原	城越								○		○	○	○	○	165	丘城	◎
豊前	96	建徳寺城	けんとくじ	米丸城	田川郡	田川郡大任町今任原				○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	22	丘城か	●
豊前	97	丸岡城	まるおか	丸岡山城	田川郡	田川郡大任町大行事					○	○	○				○	○	○	○	22・21	丘城	●
豊前	98	若木城	わかぎ	若木山城・秋永城・秋葉山城	田川郡	田川郡大任町大行事				○	○	○			○	○	○	○	○	○	22	丘城	◎
豊前	99	白土城	しらつち	切寄城	田川郡	田川郡大任町大行事	切寄			○	○						○	○	○	○		丘城か	●
豊前	100	福田城	ふくだじょう	宮山城	田川郡	田川郡大任町大行事				○	○						○	○	○	○		丘城か	○
豊前	101	東白土城	ひがししらつち		田川郡	田川郡大任町大行事	切寄・堀ノ内															丘城	◎
豊前	102	真木城	まき	陣ガ城	田川郡	田川郡添田町庄	陣ヶ城			○	○				○		○	○	○	○	130	山城	●
豊前	103	大豆塚山城	おおまめつかやま		田川郡	田川郡添田町添田					○		○				○	○	○	○	21・130	陣か	●
豊前	104	岩石城	がんじゃく	岩酌城	田川郡	田川郡添田町添田・赤村赤		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	**130・134・136・141**	山城	◎
豊前	105	不動滝の砦	ふどうだきの		田川郡	田川郡添田町添田														○	130	山城	●
豊前	106	城山砦	じょうやま	添田城・城山城	田川郡	田川郡添田町添田		○									○	○	○	○	**130**	山城	◎
豊前	107	城平城	じょうびら		田川郡	田川郡添田町添田・野田											○	○	○	○	**130**	山城	◎
豊前	108	弓張岳城	ゆみはりだけ		田川郡	田川郡添田町添田・津野											○	○	○	○	**130**	山城	◎
豊前	109	平岡城	ひらおか		田川郡	田川郡添田町添田					○	○	○			○	○	○	○	○		不明	△
豊前	110	柿城	かき		田川郡	田川郡添田町添田				○												不明	△
豊前	111	三ヶ尾城	みまお		田川郡	田川郡添田町添田				○												不明	△
豊前	112	城山城	じょうやま		田川郡	田川郡添田町野田	城山								○						130・151	丘城	◎
豊前	113	左衛門城	さえもん		田川郡	田川郡添田町中元寺	陣屋・左衛門城			○	○	○	○							○	21	山城	◎
豊前	114	宝ヶ岳城	ほうがたけ	中元寺城・ホラヶ岳城	田川郡	田川郡添田町中元寺・落合		○		○		○	○		○	○	○	○	○	○	21・130	山城	◎
豊前	115	ナウカ嶽城	のうがたけ		田川郡	田川郡添田町中元寺				○												山城か	△
豊前	116	矢ノ浦城	やのうら		田川郡	田川郡添田町中元寺				○												不明	△
豊前	117	下落合城	しもおちあい		田川郡	田川郡添田町落合					○						○	○	○	○		山城	△

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
田川(東)						『豊前志』には「椎木谷城阯　池尻村にあり。城主未詳」とある。川崎町池尻と田川市奈良の境界線上にあるとされるが、明確な城郭遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(西)						本文125頁を参照。
筑前山田(西)						本文125頁を参照。
筑前山田(西)						国名勝の藤江氏魚楽園の北西側背後にある標高243mの頂部にあるとされる。魚楽園の藤江氏の詰城と地元では伝承されるも、現地は自然地形が確認されるばかりであり、城の実態は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)			○		○	『豊前志』には「立遠城阯　真崎村にあり。蔵地左近居城」とある。『古城記』には「同(掻上一ヶ所)　真崎村ノ内」として、城主は大友氏の配下の蔵地左近で、秋月氏の恨みをかって謀殺されたことが記される。下真崎の南西側の丘陵上にあったとされるが、レジャー施設建設により消滅したとみられる。周辺部を川崎町教育委員会が発掘調査を行っているが、明確な城郭遺構は確認されていない。
筑前山田(東)						『豊前志』には「安居城阯　安宅村にあり。宗像左衛門尉惟代居城」とある。また、『古城記』には「同(掻上一ヶ所)安宅村内、陣ノ尾　右ハ藤原左エ門尉宗像朝臣惟氏と云」とあり、同一の城を指しているとみられる。『種々』には安宅の項に「龍丹(円の誤りか)城址(大友氏ノ臣蔵地氏)」、真崎の項に「立遠城址(蔵地氏)」がある。安宅地区には「城の越」「城の迫」の地名があり、その一帯に城地が推定されているが、明確な城郭遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)				880004	44	『豊前志』には「蛇面城阯　下今任村にあり。曽我太郎祐長居城」とある。彦山川とその支流・浦田川に挟まれた丘陵の突端・蛇面山の頂部にあるとされる。『福岡県の城』には土塁や石塁、堀切などが良好に残るとしているが、現地には、後世の切通しのような開削の痕跡などが見られるくらいで、明確な城館遺構は確認することはできず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)						『古城記』には「掻上一ヶ所　下今任村ノ内　古寺」とあり、下今任(今任原の北部)地内に蛇面城とは別の城があったとみられるが、これ以上の情報はないため、所在を含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)		○	○	880006	39	本文126頁を参照。
田川(東)						『古城記』に「同(城跡一ヶ所)　小内田村桑原村堺、差儀」とあり、城の由緒は不明であるとする。大任町今任原(桑原)と赤村赤(小内田)との境の峰の上に立地するものと考えられるが、その周辺において明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)					42	『大任町誌』(文献22)には「玄己山の柵(峯裏)」として、応永年間には、城主・山名五郎氏久が山名静雲のいる黒岩城(豊前121)を襲撃して、大内盛見に降伏したことが記されている。峯集落の裏山にあることが想定されるが、その周辺では明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)	○				34	本文127頁を参照。
田川(東)				880015	19	『豊前志』には「建徳寺城阯」として「上今任村釈迦堂原にあり。天慶二年、一條参議今任卿築く」とあり、その16世の孫、一條入道蓮浄は大友氏鑑に従っていたが、応永6年に大内盛見に攻められ、自害したことなどが記される。『大任町誌』(文献22)にはさらに永禄14年(1571)に大友義統に攻められ、一條貞政、時任は戦死し、一條家は滅んだとしている。『福岡県の城』では別称を「米丸城」としているが、出典は不明。彦山川に面した上今任の「建徳寺」と称する場所に推定されているが、既に道路により消滅したとみられる。古墳群が見つかったが、城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)				880030	69	『豊前志』には「丸岡城阯　同(秋永)村にあり。城主未詳」とある。『田川産業経済大観』(文献21)には、安永大膳亮秋長の居城であったが、応永5年に大内盛見によって、首をはねられたことが記される。現在、安永神社がある小丘陵上にあったとされるが、現地は神社建設に伴う造成段はみられるが、背後は自然の緩やかな地形となっており、明確な城郭遺構として認識できないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)				880033	67	本文127頁を参照。
田川(東)				880041	50	『豊前志』は「白土村城阯　城主未詳」とするが、『古城記』には「同(掻上一ヶ所　白土村ノ内、切寄」とある。西白土の菅原神社の背後の丘陵上にあるとするが、現地には、後世の墓地、切通しの掘り込み、群集墳などはみられるが、明確な城館遺構は確認されず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)				880045	49	『古城記』には「同(掻上一ヶ所)　福田村ノ内、宮山」とある。大行事福田の高木神社近辺は字「宮ノ山」であり、その近辺に城地が求められるが、明確な城館遺構は見つかっておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)						本文128頁を参照。
筑前山田(東)						『豊前志』には「真木村城阯　城主未詳」とあり、『古城記』には、「同(掻上一ヶ所　真木村ノ内、陣ガ城」とある。『遺跡』には真木地内に「陣ヶ城」の地名が残るとし、『岩石城』(文献130)には、真木小学校がある付近に真木城跡が図示されている。このようにおよその場所は判明しているものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)						『豊前志』には「大豆塚山城阯」として「岩石の麓、四五丁許西の方にあり。豊臣太閤前田孫四郎に命じて築かしめ、岩石の附城とせられたり」とある。また、『田川産業経済大観』(文献21)には、「豆塚古戦場」として、添田駅の北約500mに、応永6年に大内盛見が岩石城を攻めたときに陶弘護が豆塚に陣取ったことが記されている。大豆塚山城と豆塚の示す場所が、共に岩石山の西方に当たることから、同一地点を指している可能性が高いとみられる。豆塚の場所は、『岩石城』(文献130)に図示されたものを参考にした。明確な城館遺構が確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
伊良原(西)/筑前山田(東)	○			820029		本文129頁を参照。
筑前山田(東)						『岩石城』(文献130)には、岩石城の南西麓、不動滝のある谷は岩石城防衛のために重要地点であり、不動滝の上に聳える山は第一の砦であったと考えられるとし、砦を想定する。不動滝の南、標高約200mの頂部には、大日寺に関連する石祠があり、そこが砦跡と推定している。しかしながら、祠に伴う平坦面が若干あるばかりで、明確な城館遺構は確認できない。今後、確実な伝承等がなければ、削除も視野に入れて検討すべきであろう。
筑前山田(東)						本文132頁を参照。
筑前山田(東)	○					本文133頁を参照。
伊良原(西)						本文133頁を参照。
筑前山田(東)/伊良原(西)						『豊前志』には「平岡城阯　添田村にあり。田原氏居城」とある。『旧城』には「平岡城」として、添田町大字添田所在で添田部落所有と一覧に記載されている。よって、大正5年当時は、城の所在が地元では知る所であったと考えられるが、その他に情報がないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)/伊良原(西)						『古城記』には「掻上一ヶ所　添田村ノ内、柿」とある。添田地内に所在したものと考えられるが、他に情報がなく、柿の所在地がわからないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)/伊良原(西)						『古城記』には「同(掻上一ヶ所)　添田村ノ内、三マ尾」とある。添田地内に所在したものと考えられるが、他に情報がなく、三マ尾の所在地がわからないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)						本文134頁を参照。
筑前山田(東)	○					本文135頁を参照。
筑前山田(東)				850041		本文135頁を参照。
筑前山田(東)/小石原(東)						『古城記』には「掻上一ヶ所　同(中元寺)村ノ中　ナウカ嶽」とあり、由緒不明とする。名称から見て山城であり、宝ヶ岳城を指している可能性もあるが、別個の城の可能性もある。所在不明であるため、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)/小石原(東)						『古城記』には「掻上一ヶ所　同(中元寺)村ノ内　矢ノ浦」とあり、由緒不明とする。全くの所在不明であるため、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)						『豊前志』には「下落合村城阯　城主未詳」とあるが、所在すら不明である。『古城記』に下落合村の城として記載のある屋形原城、城ノ尾城などのことを指している可能性もあるが、不確定なため、とりあえずは別個の城とした。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	118	屋形原城	やかたばる		田川郡	田川郡添田町落合				○											130	丘城か	●
豊前	119	城ノ尾城	じょうのお		田川郡	田川郡添田町落合				○												不明	△
豊前	120	上落合城	かみおちあい	内ヶ瀬城	田川郡	田川郡添田町落合				○	○						○	○	○	○		山城	△
豊前	121	黒岩城	くろいわ		田川郡	田川郡添田町津野					○						○	○	○	○		山城	△
豊前	122	上仏来山城	かんぶくさん	彦山城・彦山城	田川郡	田川郡添田町英彦山	城ヶ辻	○	○						○		○	○	○	○	**138・152**	山城	◎
豊前	123	小内田城	こうちだ	城ノ腰城	田川郡	田川郡赤村内田・大任町今任原	城ノ腰			○	○				○		○	○	○	○		山城	△
豊前	124	秋野城	あきの	秋ノ城	田川郡	田川郡赤村赤				○		○	○		○	○	○	○	○	○	21	丘城	●
豊前	125	下赤城	しもあか	赤城	田川郡	田川郡赤村赤		○			○											不明	△
豊前	126	世上ヶ岳城	せじょうがだけ		田川郡	田川郡赤村赤				○												山城か	△
豊前	127	戸城山城	としろやま	戸代山城	田川郡	田川郡赤村赤・内田				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	**36・140・144**	山城	◎
豊前	128	山浦城	やまうら	勢見ヶ岳城	田川郡	田川郡赤村赤				○	○						○					不明	△
豊前	129	松山城	まつやま	神田城・苅田城	京都郡	京都郡苅田町松山・鳥越町	城の辻・小城	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	23・**36・90・91・92**	山城	◎
豊前	130	南原城	みなみばる	西谷城	京都郡	京都郡苅田町南原									○	○			○	○		山城	◎
豊前	131	高城	たか	高城山城・南原城	京都郡	京都郡苅田町南原・山口	高城			○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	23	山城	◎
豊前	132	大平山城	たいへいやま	稲光城	京都郡	京都郡苅田町稲光・葛川・下片島・山口									○	○	○	○	○	○		山城	◎
豊前	133	等覚寺城	とかくじ	山口城	京都郡	京都郡苅田町山口	城山	○							○	○	○	○	○	○	**26・36**・94・**95・143**	山城	◎
豊前	134	障子ヶ岳城	しょうじがだけ	勝司嶽城	京都郡/田川郡	京都郡みやこ町勝山松田・勝山浦河内・田川郡香春町採銅所・鏡山		○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	23・**26・36・148**	山城	◎
豊前	135	尾倉山城	おぐらやま	小倉山城・岩隈城・尾倉山堡	京都郡	京都郡みやこ町勝山岩熊		○		○							○	○	○	○	23・**26**	丘城	◎
豊前	136	勝山城	かつやま		京都郡	京都郡みやこ町勝山黒田・勝山長川				○							○	○	○	○	23	山城	◎
豊前	137	十鞍山城	とくらやま	鞍山城・十鞍城	京都郡/仲津郡	京都郡みやこ町勝山大久保・犀川大坂					○		○	○	○	○	○	○	○	○	23	山城	◎
豊前	138	塔ヶ峰城	とうがみね	矢山城	京都郡	行橋市矢山・高来・入覚・内蔵														○	**27**	山城	◎
豊前	139	高来城	たかく	高来ノ柵	京都郡	行橋市入覚・高来	殿屋敷			○	○	○	○		○		○	○	○	○	23	丘城	●
豊前	140	馬ヶ岳城	うまがたけ	大谷城	京都郡/仲津郡	行橋市大谷・西谷・京都郡みやこ町犀川花熊		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	23・25・**27・36・132**	山城	◎
豊前	141	草野城	くさの		京都郡	行橋市草野							○									不明	△
豊前	142	宝山城	たからやま		仲津郡	行橋市宝山				○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	23・27	丘城	●
豊前	143	蓑島城	みのしま		仲津郡	行橋市蓑島				○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	23・27	山城	●
豊前	144	沓尾城	くつお	久津尾崎城・久津尾城・沓尾崎城	仲津郡	行橋市沓尾							○	○	○	○	○	○	○		23・27	山城	●
豊前	145	元永城	もとなが	城山城・本長山城	仲津郡	行橋市元永	城山			○	○				○	○	○	○	○	○	23・27	山城	◎
豊前	146	覗山城	のぞきやま	のりき山城・野前山城・馬場城	仲津郡	行橋市稲童・高瀬・馬場						○			○	○	○	○	○	○	23・**27・96**	山城	◎
豊前	147	大坂山城	おおさかやま	因州城	仲津郡/京都郡	京都郡みやこ町犀川大坂		○		○	○				○	○	○	○	○	○	23・25・**150**	山城	◎
豊前	148	不動ヶ岳城	ふどうがだけ	西郷大坂城・西郷城・城山城・大村城	仲津郡	京都郡みやこ町犀川大村	城山	○			○		○		○	○	○	○	○	○	23・25・**146**	丘城	◎
豊前	149	山鹿城	やまが	城山城	仲津郡	京都郡みやこ町犀川山鹿	城山			○	○		○		○	○	○	○	○	○	23・25	丘城	◎
豊前	150	茶臼城	ちゃうす	柳瀬城・茶臼山城	仲津郡	京都郡みやこ町犀川柳瀬								○	○	○	○	○	○	○	23・25	丘城	◎
豊前	151	燕岩城	つばめいわ	崎山城	仲津郡/田川郡	京都郡みやこ町犀川崎山・田川郡赤村赤		○		○	○				○	○	○	○	○	○	23・25	山城	◎
豊前	152	黒岩城	くろいわ	黒岩ヶ城	仲津郡	京都郡みやこ町犀川久富・犀川末江・光冨	城山			○	○		○		○		○	○	○	○	23	山城	◎
豊前	153	渋見城	しぶみ	節丸城	仲津郡	京都郡みやこ町犀川内垣・犀川末江・節丸				○	○		○		○		○	○	○	○	23	山城	●
豊前	154	戸垣城	とがき	戸通城・上高屋城・土居ヶ城	仲津郡	京都郡みやこ町犀川犀川上高屋・犀川喜多良				○	○				○	○	○	○	○	○	23・25	山城	●

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
筑前山田(東)						『古城記』には「掻上一ヶ所　下落合村ノ内、屋形原」とある。『岩石城』(文献130)掲載の地図では、字屋形原の駒鳴川東岸の丘陵上に城地が想定されているが、現地は自然地形が見られるばかりで明瞭な城館遺構は確認できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)						『古城記』には「同(掻上一ヶ所)　同(下落合)村ノ内、城ノ尾」とあるが、所在すら不明である。下落合地内にあったものと思われるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)/小石原(東)/英彦山(西)						『豊前志』には「上落合村城趾　城主未詳」とある。また、『古城記』には「同(掻上一ヶ所)　上落合村ノ内、内ヶ瀬」とある。上落合村の城館は、それぞれの文献に一ヶ所ずつしかないため、この二つの記載が同一の城を指している可能性が高い。しかし、所在等が全く不明であるため、別個の城の可能性もあるが、ここでは同一のものとして扱っておく。
伊良原(西)						『豊前志』には「黒岩城趾　上津野村にあり。城主未詳」とあるが、上津野地区にあるとわかるのみで、それ以上の情報はなく詳細は不明と言わざるを得ない。なお、添田町内には黒岩山という山はあるが、津野ではないので、異なるものと思われる。
英彦山(西)	○					本文136頁を参照。
田川(東)						『豊前志』には「小内田村城趾　城主未詳」とある。『古城記』には「城跡一ヶ所　同(小内田)村下今任村ノ内、城ノ腰」とあり、大任町今任原と赤村内田との境にあるとも読める。『遺跡』では、小内田地内の「城ノ越、門田、別府」の関連地名を根拠に「小内田城」とする。所在が全く分からないので、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)				820001		『古城記』には「城跡一ヶ所　下赤村ノ内、秋ノ城」とある。『田川経済産業大観』(文献21)には「秋野城趾」として、秋野山山頂に位置し、天文19年(1550)に小沢左衛門祐源隆選が築城し、山下に居宅を構えたとある。その居宅跡は里見屋敷といわれて峯岡にあるとする。現在、秋野山の我鹿神社境内には秋野城跡の碑が建つが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(東)/豊前本庄(西)						『豊前志』には「下赤村城趾　城主未詳」とあるが、下赤地区にあることがわかるのみで、所在不明である。秋野城あるいは世上ヶ岳城と同一の可能性も考えられるが、判別不能であるため、別個の城として取り扱う。
田川(東)/豊前本庄(西)						『古城記』に「同(城跡一ヶ所　同(下赤)村ノ内、世上ヶ岳」とある。下赤地内にあることと、城名から峰の上にある山城と想定されるが、これ以上の情報がなく、所在や明確な読み方すら不明である。
豊前本庄(西)	○			820007		本文136頁を参照。
豊前本庄(西)						『豊前志』には「山浦村城趾　城主未詳」とあり、『古城記』には「同(城跡一ヶ所)　山浦村ノ内、勢見ヶ岳」とある。共に所在不明であり、同一のものか否かもわからないが、ここでは同一のものとしておく。よって、所在含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
苅田(東)	○		○	900004	C-205-1・2	本文138頁を参照。
苅田(東)	○					本文145頁を参照。
苅田(東)	○			900029	A-412-1	本文145頁を参照。
苅田(東)	○					本文146頁を参照。
苅田(西)	○		○			本文147頁を参照。
行橋(西)/金田(東)	○	○		930142	930112(みやこ町)/119(香春町)	本文149頁を参照。
行橋(西)	○					本文157頁を参照。
行橋(西)	○					本文158頁を参照。
行橋(西)					910378	本文159頁を参照。
行橋(西)	○				14124001	本文159頁を参照。
行橋(西)					14123006	『豊前志』には「高来村城趾　山鹿、足利等居城」とある。『古城記』には「高来ノ柵　足利氏居之」とある。『行橋市史中巻』(文献27)では『行橋市史』(昭和51年)を引用し、「高来天聖寺の南150mの池部台地上にある」とするが、牧場造成により消滅したとする。近辺に字殿屋敷(大字高来地内)などの地名も残るが、明確な城館遺構がないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
行橋(東)	○			140196	910457(みやこ町)/14105024(行橋市)	本文160頁を参照。行橋市指定史跡。なお、『古城跡実地取調報答書』(文献23所収)には、大谷城は馬ヶ岳城の重複であると明記している。
行橋(東)						『種々』の延永村草野に「草野城址」とある。行橋市草野地内にあったものと思われるが、詳細な所在や城主等は全く不明である。
行橋(東)				140205	14098001	『豊前志』には「安藤萬次郎居城」とあるが、『古城記』では安藤市次郎の居城としている。今川と井尻川との間に挟まれた標高18mの低丘陵上に位置するとされるが、現在耕作地となっており、後世の改変が激しく、現状の平坦地形が城館遺構を反映したものかは判断がつかず、詳細は不明と言わざるを得ない。
簑島(西)/神ノ島(西)				140274	14038001	『豊前志』には「蓑島城趾　天文より天正の際、長門国高倉城主、杉因幡守重昌の子、千代丸重良、居りて、海上を警護せり。後、高橋宗全、長野祐盛に攻め落とされたり」とある。『古城記』には「城跡一ヶ所　仲津郡蓑島浦」として杉因幡守重吉、後に高橋宗仙を城主とし、天文23年、天正7・9年の戦闘の記載などがある。現在周防灘に突き出るように聳える蓑島山(標高60m)には3つの頂部があるが、後世の地形改変が激しく、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
簑島(西)				140276	14044006	『豊前古城記』(文献23所収)には「久津尾城址」として、南北朝時代に従四位下左少将顕吉朝臣が築き、次男の本郷兵庫頭吉信を置いたが、天文18年に宇留津加来外記と争い、城主本郷顕季は自害し、城主はいなくなったとある。周防灘に面した沓尾集落の背後の丘陵上(標高82m)に位置するとされる。この丘陵上では、徳川期大坂城の石切場などは見つかっているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
簑島(西)						本文166頁を参照。
簑島(西)	○	○	○		14047011	本文166頁を参照。
豊前本庄(西)/行橋(西)	○				910390	本文168頁を参照。
豊前本庄(西)	○			910144	910243・910363	本文169頁を参照。
豊前本庄(西)	○			910204	910319	本文170頁を参照。
豊前本庄(西)					910360	本文171頁を参照。
豊前本庄(西)					910355	本文172頁を参照。
豊前本庄(東)	○				910270	本文173頁を参照。
豊前本庄(東)	○				910201	『豊前志』には、「渋見城趾　節丸村にあり、今村式部居城」とあり、『古城記』には「同(城跡一ヶ所)　節丸村ノ内、渋見城」とある。京都カントリー倶楽部の南側の標高約200mの頂部に位置する。『福岡県の城』には1990年に作成された縄張り図が掲載されているが、東側は採石されている。現状ではさらに採石は進み、1990年時点よりもさらに損壊は進んでいる。しかしながら、残された現状からは確実に城館遺構が存在したとは考えにくく、明確な城館遺構が元から存在しなかった可能性も否定できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
豊前本庄(東)						『豊前志』には「戸通城趾　上高屋村にあり、城主未詳」とあり、『古城記』には「同(城跡一ヶ所)　上高屋村ノ内、戸垣城」とある。上高屋の集落の西、標高301mの頂部が城地とされているが、現地は巨岩が乱立する自然地形であり、明確な城館遺構はみられず、詳細は不明と言わざるを得ない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	155	毘沙門城	びしゃもん	毘沙門砦	仲津郡	京都郡みやこ町犀川木井馬場													○	○		丘城	◎
豊前	156	神楽山城	かぐらやま	神楽城	仲津郡	京都郡みやこ町犀川木井馬場・犀川上高屋		○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	23・25・**146・147**	山城	◎
豊前	157	上伊良原城	かみいらはら		仲津郡	京都郡みやこ町犀川上伊良原	城山													○		山城	◎
豊前	158	城山城	じょうやま		仲津郡	京都郡みやこ町犀川帆柱	城野															山城	◎
豊前	159	宇都宮氏館	うつのみやし	松丸城・(高畑城)・城井屋敷・鍛冶屋敷	築城郡	築上郡築上町松丸		○		○	○		○		○	○	○	○	○	○	28・**117**	平地城館	◎
豊前	160	伝法寺城	でんほうじ		築城郡	築上郡築上町伝法寺					○				○	○	○	○			30	不明	△
豊前	161	堂山城	どうやま	香楽城	築城郡	築上郡築上町本庄・伝法寺					○				○		○	○	○	○	28・**115・117**	山城	◎
豊前	162	茅切山城	かやきりやま	萱切城	仲津郡/築城郡	築上郡築上町本庄・京都郡みやこ町犀川横瀬		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	28・**34・117**	山城	●
豊前	163	小川内城	こがわち	横瀬城・城山城	仲津郡/築城郡	築上郡築上町本庄・京都郡みやこ町犀川横瀬	城山	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	25・28・30・**34・117・147**	山城	◎
豊前	164	勝山城	かつやま		築城郡	築上郡築上町本庄				○	○						○	○	○	○		不明	△
豊前	165	若山城	わかやま	本庄城	築城郡	築上郡築上町本庄		○							○	○	○				28・30・**117**	山城	◎
豊前	166	溝口館	みぞぐち	溝口屋敷・溝口城	築城郡	築上郡築上町寒田			○	○									○	○	28・30	館	●
豊前	167	大平城	おおひら	城井城	築城郡	築上郡築上町寒田		○	○	○			○				○	○	○	○	28・30・**34・117**	山城	◎
豊前	168	城井ノ上城	きいのこ	木江城・木ノ郷屋形	築城郡	築上郡築上町寒田				○	○		○				○	○	○	○	28・30・118	不明	●
豊前	169	別府城	べふ	楠城	築城郡	築上郡築上町上別府		○		○	○		○		○	○	○	○	○	○	28	平城か	●
豊前	170	築城城	ついき		築城郡	築上郡築上町築城	本丸・二丸・屋敷			○	○		○		○	○	○	○	○	○	28	平城	○
豊前	171	野中城	のなか	野仲城・八津田城	築城郡	築上郡築上町西八田	矢倉下・外堀・古坪・門田・土居内・小路	○		○	○		○		○		○	○	○	○	28	平城	○
豊前	172	宇留津城	うるづ	塩田城・円田城	築城郡	築上郡築上町宇留津		○		○	○		○		○	○	○	○	○	○	28	平城	●
豊前	173	茶臼山城	ちゃうすやま		築城郡	築上郡築上町船迫														○	**114**	丘城	◎
豊前	174	赤幡城	あかはた	甲山城・淵上寺城	築城郡	築上郡築上町赤幡	切寄平・城戸・居屋敷		○		○		○		○	○	○	○	○	○	28・**117・149**	丘城	◎
豊前	175	元山城	もとやま		築城郡	築上郡築上町赤幡	切寄平・城戸・居屋敷			○	○		○				○	○	○	○	28	不明	△
豊前	176	広幡山城	ひろはたやま	広幡城	築城郡	築上郡築上町水原・広末				○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	28・30・**112・113・146**	丘城	◎
豊前	177	高塚城	たかつか		築城郡	築上郡築上町高塚					○		○				○	○	○	○	28・30	平城か	○
豊前	178	釜倉城	かまくら	鎌倉城・釜蔵城	築城郡	築上郡築上町上香楽・小山田				○			○			○	○	○	○	○	30・**117**	丘城	◎
豊前	179	小山田城	おやまだ		築城郡	築上郡築上町小山田・本庄	城ヶ平・城台								○		○	○	○	○	30・**117**	山城	◎
豊前	180	極楽寺城	ごくらくじ		築城郡	築上郡築上町極楽寺					○				○	○	○	○			28・30	山城か	△
豊前	181	岩丸城	いわまる		築城郡	築上郡築上町岩丸	城表口・城表野・松の堀・馬場								○		○	○	○	○	28・30	不明	△
豊前	182	真如寺城	しんにょじ		築城郡	築上郡築上町真如寺					○						○	○	○	○	28・30	山城か	△

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
豊前本庄(東)	○				910171-10	本文173頁を参照。
豊前本庄(東)	○				910171-16	本文175頁を参照。
伊良原(東)					910084	本文176頁を参照。
伊良原(東)					910010	本文177頁を参照。
豊前本庄(東)		○	○	950026	950070	本文178頁を参照。
豊前本庄(東)						『豊前志』には「傳法寺村城阯　傳法寺兵部大輔貞隆 城井家臣 居る」とあるが、伝法寺地区には、堂山城以外に明確な城館遺構は確認されておらず、位置を含めて詳細は不明と言わざるを得ない。『築上郡史』(文献30)では堂山城を伝法寺城としているが、『豊前志』には両方とも別の城として挙げているため、今回は別個のものとして扱う。
豊前本庄(東)	○		○	950032	950077	本文179頁を参照。
豊前本庄(東)	○				950084	『古城記』には「同(掻上)　本庄村ノ内、萱切」とあり、『豊前志』には「茅切山城阯」とし、「豊国紀行」を引用して、「茅切山は城井谷のうち、本庄村の西なる山なり。山上切り立ちたる如くに見ゆる故、名付けしにや」とあるため、『福岡県の城』では城井ノ上城を萱切城の別称とするが、そうではないとみられる。文献117には、茅切峠(隧道)の南約300m地点の尾根上、現在NHKの中継基地局が置かれている場所を城地とし、堀切2本を図示しているが、堀切ではなく自然の鞍部等であって、ここに明確な城郭遺構がなく、城地とするには証拠不十分である。一方、『城井谷絵図』(福岡県立図書館蔵)には茅切峠の北側に天正15年(1587)に黒田長政が城井谷を攻めた際の付城として、「茅切山」が描かれており、本書の分布図には、その場所にあたる位置に点を落としているものの、明確な城館遺構は存在せず(本事業では未踏査)、詳細は不明と言わざるを得ない。
豊前本庄(東)	○			950034	950090(築上町)/910169(みやこ町)	本文180頁を参照。
豊前本庄(東)						『豊前志』には「勝山城阯　同村(本庄村)にあり。城井の出城なり」とある。また、『豊前古城記』(文献23所収)には「同(掻揚)一ヶ所　同村(本庄村)之内、勝山　右は城井之出城也」とある。若山城などの事を指している可能性もあるが、確証がなく詳細は不明と言わざるを得ない。
豊前本庄(東)/伊良原(東)	○			950037	950095	本文182頁を参照。
伊良原(東)					950097	『古城記』の「大平城」の項には「其外、溝口屋敷ト云アリ。常ハ是ニ居住也」とある。また、『豊国紀行』(『豊前志』引用文より)には、寒田村の枝村の溝口集落の東側に、「城井氏(即宇都宮氏)が常に住みし宅の跡あり。廣さ八九段ばかり」とあり、大平城の北西麓、字上溝口に伝承地が伝えられているが、明確な城館遺構は見つかっておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
伊良原(東)	○			950040	950100	本文184頁を参照。
伊良原(東)				950039	950101	本文185頁を参照。
簑島(西)				950072	950012	『豊前志』には「別府村城阯　別府太郎居る。天正の頃は、黒田家の旗下、時枝平太夫居る」とあり、『古城記』にはこの記載に続けて、「其後ハ百姓屋敷トナル」とする。『築上郡志』(文献 28)には「別府村の西北にあり、東西六十間、南北七十間を有し、今僅に石壇を存するのみ」とし、別府太郎、次郎の兄弟が永禄年間に居城したとしている。上別府の日吉神社付近が城地と推測されるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
簑島(西)				950069		『豊前志』には「築城村城阯　別府太郎、同次郎居る」とし、『古城記』には「同(城跡一ヶ所)　築城村ノ内、本丸」とし、由利若大臣の臣下、別府太郎・同次郎が初めて別府村に居住した際に、本丸・二丸と伝える旧跡が築城村内にあるとし、現在は百姓屋敷となっているとする。『築上郡志』(文献28)には「(築城)村の北方にあり」と記す。築城中学校の西側、極楽寺近辺に「本丸・二ノ丸・上屋敷」などの地名が残り、城地が推測されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。ただ、推定地の北側の字原田では、堀で囲まれた方形区画の南東隅と思われる箇所が検出されており、築城城に関連した施設とも考えられる(詳細は、築城城跡遺跡(豊前R12)にて報告している)。
簑島(西)				940001		『豊前志』には「野中城阯　八田村にあり。萬田左近居る。宇留津の城主賀来外記の旗下なり」とある。『古城記』には一万石左近が城主であるとしている。『築上郡志』(文献28)には「野仲城趾」として「西八田村にあり、東西百二十間、南北六十間、八田氏代々の居城にして、応永の頃は八田太郎義朝、同治部少輔武朝居る」とし、さらに天正年間には萬田左近が城主であったとしている。『種々』には「八津田城址」として名を挙げている。西八田の法住寺付近が字矢倉下であり、その近辺に城地が推定されるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
簑島(西)				940002	940035	『豊前志』には「宇留津村城阯」として、潤津日向守高衡、後に加来新外記の子、孫兵衛元邦が居城したとある。天正15年(1587)2月の豊臣秀吉の九州平定戦において、黒田孝高と毛利方の大軍に攻められ、落城したことで知られる。『築上郡志』(文献28)には「宇留津村にあり。東西百六十間、南北八十間に達すと、東北に鹽田沼ありて一方の要害を為し、西南に高土堤の跡、歴然として今に存し、古城井と云ふも傳はり」とある。須佐神社の南側を塩田沼ということからも、宇留津の宝積寺付近に城地が求められ、湿田の跡が城の堀であったとも言われている。しかし明確な城館遺構を特定するには至っておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田(西)		○			950030	本文187頁を参照。
椎田(西)	○			950045	950044	本文188頁を参照。
椎田(西)						『豊前志』には「元山城阯　赤幡村にあり。城主未詳」とあり、『古城記』には「掻上一ヶ所　赤幡村ノ内、元山」として、「右ハ由来傳ナシ、山ノ下ニ平家ノ旗竿ト申傳テ呉竹藪少アリ」と記す。『築上郡志』(文献28)には「赤幡村にあり、或記には淵上寺の城趾と云へり、今は切寄平と云へり」とあるが、『豊前志』には、「元山城阯」と並んで「淵上寺城阯」が別の城として記されており、齟齬が生じている。『古城記』の平家の伝承が平家の赤旗(＝赤幡)と通じることなど、赤幡城と同一の可能性もあるが、今回は別の城として扱っておく。
椎田(西)	○	○	○	940008	950055・940050	本文189頁を参照。
椎田(西)					940102	『豊前志』には「高塚村城阯」として衛藤氏の居城とする。『築上郡志』(文献28)には、「高塚村城趾」として「何處なる可き、豊陽古城傳に、後藤(名を逸す)氏居城と見えたり」とある。『築上郡史』(文献30)には大塚高塚真光寺の東南近くに城跡という所があるとしている。しかしながら現状では、明確な城館遺構や根拠はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。ところが、西高塚ナカバル遺跡(豊前R14)において中世の堀を持つ居館遺構が検出されており、高塚城と関連がある可能性も考えられる。
椎田(西)	○			950043	950083	本文190頁を参照。
椎田(西)	○			950042	950089	本文191頁を参照。
椎田(西)					940118	『豊前志』には「極楽寺村城阯　応永の頃、鹽田彌十郎、同兵部居れり」とある。極楽寺川流域の極楽寺集落の西側背後の丘陵上に城地が推定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田(西)						『築上郡志』(文献28)には「岩丸村城趾」として「城主詳ならず、今も田の字に城表口、城表野、松の堀、馬場等を云ふあり」とある。大字岩丸地内に城地が推定されるものの、字の場所を把握できていない。また、明確な城館遺構を確認してもいないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田(西)						『豊前志』には「眞如寺村城阯二所　城主未詳」とある。『築上郡史』(文献30)には「眞如寺城跡」として「大字眞如寺の西松ヶ迫と云う所にあり、之に対する東の山上に烽火場というもある」とあり、真如寺を本拠とする宇都宮氏の重臣芳賀氏の城ではないかとしている。大字真如寺地内にあることは想定できるが、松ヶ迫、烽火場の場所を特定できていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	183	湊城	みなと		築城郡	築上郡築上町湊	城本								○		○	○	○	○		平城か	●
豊前	184	有安城	ありやす		築城郡	築上郡築上町有安	上内ヶ丸・下内ヶ丸						○		○	○	○	○	○	○	28・30	不明	△
豊前	185	鳥越山城	とりごえ	鳥越城	築城郡	豊前市中村・築上郡築上町有安	城ヶ鼻	○		○	○		○				○	○	○	○	28・30・32	丘城	●
豊前	186	角田城	すだ	則行城	築城郡	豊前市中村				○	○				○	○	○	○	○	○	30	平城か	●
豊前	187	馬場城	ばば	城山城	築城郡	豊前市馬場	城山			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	28・30・**32**・**34**	山城	◎
豊前	188	寒城	かん		築城郡	豊前市松江	寒城														28・30	不明	△
豊前	189	畑城	はた	郷城・蟹萱城・龍城院山城	上毛郡/築城郡	築上郡築上町畑・豊前市篠瀬	郷城			○	○		○		○	○	○	○	○	○	28・30・**32**	山城	●
豊前	190	日瀬城	ひのせ	日の浦城・火の浦城・四ノ瀬城	上毛郡	豊前市篠瀬					○				○	○	○	○	○	○	28・30・32	山城か	●
豊前	191	求菩提山砦	くぼてさん	求菩提山城	上毛郡	豊前市求菩提									○	○	○	○	○	○	28・30	山城	○
豊前	192	岩屋城	いわや		上毛郡	豊前市岩屋									○	○	○	○	○	○	28・30	山城	△
豊前	193	岡城	おか	川底城	上毛郡	豊前市下川底	城岩・城岩の淵		○		○				○	○	○	○	○	○	28・30・32	丘城	●
豊前	194	下川底城	しもかわそこ	海老名城・川底城	上毛郡	豊前市下川底	城山・城の尾		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	28・30・32	平城	◎
豊前	195	小畑城	おばたけ	下川底城	上毛郡	豊前市下川底										○			○	○	28・30	平城か	△
豊前	196	櫛狩屋城	くしがりや	串狩野城・川内城・山田城	上毛郡	豊前市川内	城の台・城ヶ谷・陣所平・御所山・詰ヶ谷	○		○	○		○		○	○	○	○	○	○	28・30・**32**	山城	◎
豊前	197	天和城	てんわ		上毛郡	豊前市天和	シロノヅク・殿山												○	○	28・30	山城か	△
豊前	198	下川内城	しもかわち		上毛郡	豊前市下河内	古城								○				○	○	28・30・32	平城か	●
豊前	199	如法寺城	ねほうじ		上毛郡	豊前市山内						○	○		○	○	○	○	○	○	28・30・32	山城	●
豊前	200	山内城	やまうち		上毛郡	豊前市山内							○		○						28	山城か	△
豊前	201	引地城	ひきち		上毛郡	豊前市山内・才尾							○								30	山城か	△
豊前	202	墨城	すみ	住城城	上毛郡	豊前市山内	住城谷・城谷・城の越・堀の内												○	○	28・30	居館か	○
豊前	203	薬師寺城	やくしじ		上毛郡	豊前市薬師寺	堀の内								○	○			○	○	28・30	平城か	●
豊前	204	挟間城	はさま	狭間城・猪ノ迫城	上毛郡	豊前市挟間	城の台												○	○	28・30	平城か	●
豊前	205	八田城	はった	山田城・川内城	上毛郡	豊前市川内		○								○			○	○	28・30・**32**	山城	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
椎田（東）						『築上郡志』（文献28）には「湊村城趾」として「何人の城趾なるか、明ならず、今田の字を城の本と云ふ」とある。『築上郡史』（文献30）には「大字湊の東南、西角田村大字上リ松近くに城本という字が残って居る、之城跡であろうが城主を詳にしない」とあり、周辺の地名などから臼田氏の城跡ではないかとしている。湊地内の上リ松近くの標高48mの丘陵上に小字「城本」という地名が残り、その付近が城地と想定されるが、明確な城館遺構は過去に確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない（本事業では現地未確認）。
椎田（東）						『築上郡志』（文献28）に「有安村城趾」として「応永の頃に、有安小太郎と云ふもの居たりき。応永戦乱等に見ゆ」とある。『築上郡史』（文献30）には「大字有安に上内ヶ丸、下内ヶ丸等の字があり、城跡と傳えて居る」とある。大字有安地内にあることは想定できるが、上内ヶ丸・下内ヶ丸という場所が把握できず、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田（東）					150002	『古城記』には「掻上一ヶ所　中村ノ中、鳥越山」とある。『豊前志』には「鳥越山城趾　中村にあり。中村何某居城」とある。『築上郡史』（文献30）には「大字中村城ヶ鼻と称する所にある」とする。築上町有安と豊前市中村との境にある丘陵上に位置するとされるが、現地には自然地形および鉄塔による改変地形が見られるのみで、明確な城館遺構は見られず、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田（東）					150015	『古城記』には「角田　蜂屋刑部亟照光居城、是モ宇都宮ノ一族也。応永ノ比、宇都宮播磨守馬場盛直居」とあり、『豊前志』には「則行主計頭居る。後、中八屋刑部丞宗種、城井一族居る」とある。『築上郡史』（文献30）に「則行城跡」として、「大字中村角田八幡神社の南西近くに屋敷跡が残り堀の形などもある。角田手永大庄屋を勤めて居た家に則行というがあり」、仲八屋氏の常住の宅跡ではないかとしている。現在も角田八幡神社があるため、およその位置は把握できるが、明確な城館遺構は今のところ確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない（本事業では現地確認していない）。
椎田（東）	○			150022	150017	本文192頁を参照。
椎田（東）						『築上郡志』（文献28）を初出とし、同書には「寒城趾」として「松江村にあり。城主を詳にせず」とある。『築上郡史』（文献30）には「寒城」として「大字松江日豊本線の南山の出鼻を寒城と云い城跡と伝えているが城主を詳にしない」とある。豊前松江駅の南側には標高14mほどの小丘陵が南から延びており、その先端部を指しているものと思われるが、現地はすでに住宅地となっており、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（西）	○				40142	『豊前志』には「畑村城趾　世良田大膳大夫居る。後、宇都宮の抱城となれり」とあり、『古城記』には「畑　世良田大膳大夫居城、近代宇都宮抱。応永年代規矩太郎通忠居之」とある。『築上郡志』（文献28）は「蟹萱城趾」として南朝方の新田頼氏の一族、世良田大膳大夫が、貞和年間に懐良親王と共に九州に下向して築城したとし、後に宇都宮氏の持ち城となったとある。また、「今も城趾に其頃の抜穴とて奥底知れぬ深窟を存すと云ふ」とある。『福岡県の城』では「郷城」として、国見岳の北東、豊前市と築上町の境界上の標高約580mの尾根の頂部に位置し、土塁、竪堀などが曲輪を取り囲むような縄張り図が提示されている。該当地について踏査を行ったが、図示されていたものは自然地形と後世の山道による人為的改変地形のみであり、明確な城館遺構は存在しなかった。城地としては特定はされるものの、構造については不明と言わざるを得ない。
下河内（西）				150092	150209	『豊前志』には「日瀬城趾」として渡邊右京進重國と弟の與十郎が居城するとあり、天正17年（1589）に黒田方に攻められ、自殺したとする。『築上郡志』（文献28）では「日の浦城」としている。『築上郡史』（文献30）には、大字篠瀬字戸部に火ノ浦という場所があり、その西方の山上に城跡と伝える場所があるという。篠瀬の集落の北側背後の山稜上にあると推定されているが（本事業では現地は未確認）、詳細な場所は不明である。明確な城館遺構は確認されておらず、不明と言わざるを得ない。ただ、篠瀬集落に堀を備えた下屋敷があるというが、本事業では未確認である。
下河内（西）						『築上郡志』（文献28）に「求菩提山砦趾」として、求菩提の小倉口にあるとし、新田家の家臣や、豊前御領衆で求菩提山城番の鹽田内記重吉が在城したとしている。鹽田内記は宇都宮鎮房の家臣で、岩丸山合戦にて黒田方に討ち取られたとも記している。『築上郡史』（文献30）には「大字求菩提鞍懸の竪路を下ると北中坊の墓所がある。其の東方道の右手に堀の跡など残って居る」としているが、両者で場所が異なっており、また本事業にて現地確認を行っていないため、場所も含め、詳細は不明である。
下河内（西）						『築上郡志』（文献28）には「岩屋村城趾　応永の頃、岩屋和泉守居る。今之を稲積舊来臺と称し、東西三十間、南北之に叶ふ、面積九百坪なりと」とある。『築上郡史』には大字岩屋字中畑の東方の稲積山にあったとするが、現在稲積山の所在が不明であるため、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）				150082	150234	『豊前志』には「川底村城趾　川底弥次郎甫房居る。宇都宮の一族なり。黒田家より攻め落されたり」とある。『築上郡史』（文献30）には「川底城跡」として、合河中学校の敷地を「岡の鼻」といい、さらにその上に「城岩」があり、古井戸や堀の跡などが残るとし、天文年間に宇都宮正房が築き、弥七郎知房（一説には信継）の時に、黒田方により攻められて知房は討たれたとしている。。『築上郡志』（文献28）には、城名は明記していないが、宇都宮氏の一族、川底源次郎甫房の居城で、天正16年（1588）に落城したとある。現在、合河中学校の裏手の丘陵上には、岡城主・城井弥七郎知房の墓（通称・岡殿（おかどん）の墓があるが、近辺には明確な城館遺構は見られず、中学校の敷地内にあったものなのか詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）	○					本文194頁を参照。
下河内（東）						『築上郡志』には「下川底村城趾」として、「今、田の字を小畑と云ふ。此地なり。小畑長重の居城にして、宇都宮氏の一族と称す。家老を奥村勘解由と云ひ」とあり、天正16年（1588）に日熊の戦により黒田方に滅ぼされたとある。『築上郡史』（文献30）には「小畑城跡」として、下川底の東方の小畑という場所が小畑氏居城の跡だとしている。現在、「小畑」の場所がよくわからないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）	○			150057		本文195頁を参照。
下河内（東）					150229	『築上郡志』（文献28）には「天和村城趾　殿山にあり、如法寺家の抱城どもや、詳かならず」とある。『築上郡史』（文献30）には「天和城跡」として大字天和の西に殿山という場所があり、「シロノゾク」と呼ばれているとし、出城ではなかったかと推定している。天和の集落背後の丘陵上に城地が推定されているが、現地は自然地形が見られるばかりである。地名のみから城郭の存在を推定している可能性もあり、城の存在を含め、要検討である。
下河内（東）					150237	『築上郡志』（文献28）には「下川内村城趾　誰の城ともわかず、今は古城と云ふ、又、為国、友貞などの地あるは、或は城主、家臣どもの名にや」とある。『築上郡史』（文献30）には「下川内城跡」として大字下川底の「歳手の坂」の南道の上の小丘陵を「フルジャウ（古城）」と呼ばれ、山内如法寺家の出城ではないかとしている。現在、合河郵便局の北東約300m地点の小丘にあるという古城の丘は、墓地となっており、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）					150238	『築上郡志』（文献28）には「如法寺城趾」として、山内如法寺の峰にあり、宇都宮信房三男の信政が築城、以後、如法寺氏を名乗り、本城としたが、天正16年（1588）に開城したとある。『築上郡史』（文献30）には大字如法寺の南山上、山の神と称する所を城地とし、その東麓に「城の腰」という地名が残るとする。現在、如法寺集落の南西側の丘陵上に城地が推定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない（本事業では現地確認していない）。なお、『種々』や『遺跡』では如法寺城とは別に「山内城」を列記しているが、根拠不明確であり、本書では当城の別称として扱っておく。
下河内（東）						『築上郡志』（文献28）では「山内村城趾」として、「如法寺山一本松の峯尾にあり、如法寺の抱城にて、天正十五年、黒田氏の山田攻と同時に陥りたり」とある。如法寺城と同一とする文献が散見されるが、明らかに如法寺城と別の城として列記されているため、別の城として取り扱う。場所等含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）						『築上郡史』（文献30）には「引地城跡」として「大字山内如法寺の北数町の山上才尾との界に引地というがあり、里人如法寺の出城のあつた所と伝えて居る」とあるが、現在、その場所は明らかではなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）						『築上郡志』（文献28）には「墨城趾　山内村の住城にあり、城主不詳、或は如法寺氏の一族なるべし、住城谷、城谷、城の越、堀の内等の字も今に傳れり」とあり、『築上郡史』（文献30）は「住城城跡」として前書とほぼ同様の記載をする。字住城の地内にあることは想定できるが、詳細な場所までは把握できておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）/土佐井（西）					150195	『築上郡志』（文献28）には「薬師寺村城趾　何處とも定め難し、応永の頃は、薬師寺山城守と云ふ人居たり」とある。『築上郡史』（文献30）には大字薬師寺の東光庵、宗像八幡神社の台地に位置し、堀の内、門前等の地名が残るとする。現地には明確な城館遺構は確認できないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内（東）						『築上郡志』（文献28）には「挟間村城趾　今の由井田の地なりと、此處に五輪の塔などありて、城主の奥都城と聞く」とある。『築上郡史』（文献30）には「狭間城跡」として、「城の台」という場所にあるとしているが、城主不詳とし、猪ノ迫城ともいうとある。城地は推定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田（東）	○				150142	本文196頁を参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	206	平原城	ひらばる		上毛郡	豊前市川内													○	○	30・32	丘城か	●
豊前	207	山田城	やまだ		上毛郡	豊前市四郎丸		○			○											不明	△
豊前	208	八屋城	はちや		上毛郡	豊前市八屋	城屋敷				○				○	○	○	○	○	○	28・30・32	平城	●
豊前	209	安祥寺城	あんしょうじ	八屋城	上毛郡	豊前市八屋	立屋鋪				○		○				○	○		○	28・30・32	平城	●
豊前	210	筆垣城	ふでがき		上毛郡	豊前市八屋													○	○	30	平城か	●
豊前	211	大村城	おおむら	土居城・山田親實居館	上毛郡	豊前市大村	城屋鋪・門田・城戸下り・馬場・堀田・修理屋敷・讃岐屋敷		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	28・30・32	平城か	●
豊前	212	荒堀城	あらほり		上毛郡	豊前市荒堀	殿屋敷・上屋敷・堀								○				○	○	28・30	平城か	●
豊前	213	青畑城	あおはた		上毛郡	豊前市荒堀									○				○	○	30	丘城か	●
豊前	214	鬼木城	おにのき		上毛郡	豊前市鬼木	掃部屋敷						○		○	○			○	○	28・30・32	平城か	●
豊前	215	今市城	いまいち		上毛郡	豊前市今市	古屋敷・堀の内・弓場本									○			○	○	30	平城か	●
豊前	216	吉木城	よしき	小森城	上毛郡	豊前市吉木													○		28・30	平城か	●
豊前	217	赤熊城	あかぐま		上毛郡	豊前市赤熊	高地屋敷・橘御園・倉屋敷・細工園			○	○		○			○	○	○	○		28	平城か	●
豊前	218	沓川城	くつかわ	世永城	上毛郡	豊前市三毛門													○		28・30	平城か	●
豊前	219	市丸城	いちまる		上毛郡	豊前市市丸	堀ノ内・居屋敷・堀田・射場・的場						○						○	○	28・30	平城か	●
豊前	220	黒土城	くろつち	久路土城	上毛郡	豊前市久路土	門田・笠懸								○	○	○	○	○	○	28・30	平城か	●
豊前	221	三毛門城	みけかど		上毛郡	豊前市三毛門	射場ノ本								○	○			○	○	30	平城か	●
豊前	222	高田城	たかた	神畑城	上毛郡	豊前市高田			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	28・30・32	平城	◎
豊前	223	広瀬城	ひろせ		上毛郡	豊前市広瀬													○	○		平城か	●
豊前	224	別府城	びょう		上毛郡	築上郡吉富町別府	城田														28・29・30	不明	○
豊前	225	広津城	ひろつ		上毛郡	築上郡吉富町広津		○	○				○		○			○			29・30	不明	○
豊前	226	天仲寺山城	てんちゅうじやま	広津城・広津山城	上毛郡	築上郡吉富町広津				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	28・29・30	丘城か	●
豊前	227	幸子矢頭田城	こうじやとうだ	幸子城	上毛郡	築上郡吉富町幸子							○		○	○	○	○	○	○	28・29・30	平城か	○
豊前	228	西光寺城	さいこうじ	幸子城	上毛郡	築上郡吉富町幸子															29・30	平城か	●

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
椎田（東）					150082	『築上郡史』（文献30）には「大字川内字平原の山の出鼻にあり里人山田氏の出城の跡と伝えて居る」とある。大冨神社の南西側の丘陵上に城地があるとされているが、果樹園や高圧鉄塔がある他は、自然地形のみであり、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田（東）						『豊前志』には「山田城趾　四郎丸村にあり。山田左近大夫元房居城。宇都宮一族なり」とある。ただ、近代以降の地誌類では、山田城は全て大字川内にあるとしており、混乱が生じていると思われる。ここでは『豊前志』の記載を尊重し、櫛狩屋城や八田城とは別の城として扱っておく。四郎丸地内の山田付近にあったものと思われるが、場所を含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
椎田（東）				150061	150033	『豊前志』には「同村（八屋村）城趾　城主未詳。宇佐郡記に蜂屋隠岐守と云ふ人見えたり。決く是れなるべし。今、城屋敷と云ふ」とある。『築上郡志』（文献28）には「鎧、弓場元、烏帽子丸」などの地名が残るとし、『築上郡史』（文献30）には、八屋の宝福寺の南に堀の跡があり、城屋敷や城根川の名を残すとしている。『豊前市史』（文献32）には宝福寺の本堂の南、約50mの場所に幅10m、深さ1m、長さ90mの堀が残るのみとしており、実際の現地にも堀と思われる窪みを確認することができるが、城の範囲など詳細については不明と言わざるを得ない。
椎田（東）					150086	『豊前志』には「八屋村城趾　安城寺常陸介の家臣宮尾織部居城」とある。『古城記』には「同（掻上一ヶ所）八屋村ノ内、安城守　右ハ常陸介家士宮尾織部居之」とある。国道10号バイパス天地山公園入口交差点の西、標高約20mの今吉の台地上には、東西方向に延びる幅約5mの堀跡と見られる窪みが見られ、周囲では中世期の遺物も散布している。しかし、これが確認されるばかりで、城の範囲などの詳細については不明と言わざるを得ない。
椎田（東）					150085	『築上郡史』（文献30）には「大字八屋字今吉の東北近くに東西約三十間、南北約五十間、巾約三間許りの堀を巡らしたところがあり、字を筆垣と云う。城主を詳にしないが、或は八屋氏の家臣の居った所であろう」とある。貴船神社の北側の低丘陵上に位置するとされているが、詳細については不明である（本事業では現地確認は行っていない）。
椎田（東）				150063	150089	『豊前志』には「大村城趾　宇都宮常陸介親實守る」とあり、『古城記』には「上毛郡大村　畠山氏ノ居城」とある。さらに『築上郡志』（文献28）や『築上郡史』（文献30）などには、新田氏の一族、山名相模守の居城とも記される。『築上郡志』（文献28）には、「城趾、今は城屋鋪と呼び、門田、城戸下り、馬場、堀田、二條、三條、出口など云ふ田の字もありて、又玄蕃、修理屋敷、織部、讃岐屋敷など云ふ在るは、家臣どもが名なるべきか」とある。大村小学校の北側、永寿寺一帯が、城地と推定されているが、現状では不明確である。しかし、その南側から西側にかけて調査が行われた大村天神林遺跡、大村石畑遺跡からは堀に囲まれた居館遺跡が見つかっており、大村城に関連するものと思われる。
椎田（東）					150094	『築上郡志』（文献28）には「荒堀村城趾　今の殿屋敷にありしと、又、殿の塚と云ふは、城主の墳墓なるべく、兵庫屋敷は家臣の邸宅なるべし」とある。『築上郡史』（文献30）には堀の跡などは残るが、城主は不明とする。豊前市の分布地図（文献164）では字上屋敷・堀の場所に城地が推定されているが、明確な遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。しかし、その北側で発掘された荒堀車地遺跡（豊前R15）では、居館群が見つかっており、荒堀城と関連する可能性も考えられる。
椎田（東）					150151	『築上郡史』（文献30）には「青畑城跡　大字青畑に殿山、其の西に的場というもあれど、城主を詳にしない」とある。豊前市の分布地図（文献164）では、字荒堀の二番池の裏の丘陵上に想定されているが、開発のためすでに消滅、残された場所も墓地となっており、明確な城館遺構も見られず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）/土佐井（西）					150198	『築上郡志』（文献28）には「鬼木村城趾」とあり、「今の掃部屋敷なり、一に下屋敷と云ふ」とあり、鬼木備前守が築城したとある。『豊前市史』（文献32）には佐井川西岸の鬼木公民館と鬼木家一帯が城跡とするが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）					150097	『築上郡史』（文献30）には「今市城跡　大字今市堀の内という所が之で弓場本という字もある、山田氏の旗下津野田氏の城跡である」とする。豊前市の分布地図（文献164）では城根川の段丘上、事代主神社付近にあったとされるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）					150051	『築上郡志』（文献28）には「小森某居る。今、田の字に血切とて在るは、刑場の遺蹟なりと、又、的場の跡と云ふもあり」と記す。『築上郡史』（文献30）では乙姫八幡神社と長願寺山の間の小森という場所にあるとしており、豊前市の分布地図（文献164）では、豊前市役所の北側に城地を想定している。現地は宅地等もあり、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）					150055	『豊前志』には「赤熊村城趾　豊後國屋形某の息女及家臣木部和泉居れり」とある。『古城記』にも「掻上一ヶ所　赤熊村」とある。『築上郡志』（文献28）には「赤熊城趾」として「今は高地屋敷と称し、溜、楼などの跡あり。又、橘御園、倉屋鋪、細工園等の田の字は、其頃の遺蹟なるべし」とある。豊前市の分布地図（文献164）では宇島小学校と正明寺の敷地に想定され、櫓の跡なども残るとしているが、詳細は不明である（本事業では現地確認はしていない）。
中津（西）					150062	『築上郡志』（文献28）には「世永城趾　沓川村にあり、先年城跡、開墾の時古銭、刀剣の類、許多出でたりと、城主を傳へず」とある。豊前市の分布地図（文献164）では、字世永の微高地に想定されている。条里跡の地割も良好に残されている箇所ではあるが、明確な城館遺構や地割は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）					150113	『築上郡志』（文献28）には「市丸城趾　城主詳ならず。今、田の字に泰常と云ふあり。或は城主の名なる可し。又、堀田、射場、的場等云もあり」とある。『築上郡史』（文献30）では「市丸城跡」として、「大字市丸明徳寺の裏手に上屋敷、堀の内、其の東南に門田、弓場ノ本、的場の小字がある」とし、市丸氏の居城と推測している。現在、字堀ノ内、居屋敷の付近に城地が想定されているが、字中居屋敷地内において調査がなされた市丸城居屋敷遺跡（豊前R19）の調査では、16世紀から近現代に至る居館・集落遺跡が見つかっており、当城との関連が窺われる。
中津（西）					150180	『築上郡志』（文献28）には「久路土城趾　応永の頃、大友氏の旗下にて黒土十郎と云ふもの居たりしが、後大内氏に降れり、其城趾を詳にせず」とある。『築上郡史』（文献30）には「黒土城跡」とし、「久路土小学校の西に門田、笠懸等の字がある。城跡はこの辺ではあるまいか」とある。現在、岩岳川東岸の豊前病院付近に城地が想定されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）					150137	初出は『築上郡史』（文献30）で、「三毛門城跡」として、三毛門の東方に久留米、西久留米の小字があるとし、緒方氏あるいは三毛門氏の城ではないかとし、関連地名として射場ノ本を挙げているが、城跡についての概要は一切見られない。豊前市の分布地図（文献164）には居屋敷・外屋敷・的場ノ本・門田・屋敷ノ内などの字が残るとし、佐井川西岸の三毛門の平地に城地を想定しているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）				150072	150162	本文197頁を参照。
中津（西）					150163	『築上郡志』（文献28）には「広瀬城跡」として「大字広瀬の北方を里人城跡と云って居る」とし、広瀬氏の城と推測する。豊前市の分布地図などでは高田城の南側に隣接した場所を城地と推測しているが、明確な根拠は示されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。高田城の別称とも考えられるが断定できない。
中津（西）						『築上郡志』（文献28）には「別府村城趾」として、「今は田となりて、字を城田と云へり。城主、詳ならず、或は郡府の遺蹟なる可しと」とある。『吉富町誌』（文献29）には「別府村城跡」として、別府の西佐井川の東方に城田という字があり、成恒氏の城と推測する。『築上郡史』（文献30）には「里人城跡と伝えて居り、其の跡今墓地となつて居る」とある。佐井川東岸には、字城田があり、その付近に城地が想定されるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）						『吉富町誌』（文献29）には「広津村城跡」として「広津の字櫓と云う所が之で」とあり、南北朝時代に宇都宮房政が築いたとしている。他の文献では天仲寺山城と混同したものもあり、混乱を来している。櫓という字が現在も残るため、その付近に城地が推定されるものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）				980010		『豊前志』には「廣津村城趾」として源経基が築城、蔵人行家を置いたとする。その後、宇都宮氏の持ち城となり、城代に広津氏を置いたが、天正15年（1587）に黒田氏により落城させられたとする。『古城記』には「上毛郡廣津城　廣津村昔シ中津小童命鎮坐ノ霊地也」とし、源経基等などの城主名を挙げている。『築上郡志』（文献28）では「廣津城趾　今の臥牛山なり、本丸二の丸等、歴然として残れり」とする。『吉富町誌』（文献29）では「天仲寺山城跡」として「天仲寺山上小笠原家の墓地が其の牙城の跡」と記し、広津氏の城であるとしている。『築上郡史』（文献30）では「広津山城」として、丘陵西方に切割の跡が残るとしている。天仲寺と廣運寺のある二つの丘陵上に城があったとみられるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）						『築上郡志』（文献28）には「幸子村城趾」として「天文の頃、矢頭田常陸介守實居り、其子友國に至りて、野仲鎮兼に滅されたり」とある。『築上郡史』では「幸子矢頭田城跡」として「西光寺の北矢頭田にあり、矢頭氏居城の跡」とある。西光寺の北東側に字「矢頭田」があり、そこに城地が求められるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津（西）						『吉富町誌』（文献29）には「幸子村西光寺城跡」として「幸子舊村西光寺の処が之で、田部系広津氏常住の宅所であつた」とあり、「西光寺旧記」を引いて、「広津兵庫頭、当寺境内、其居城之跡、於今上段二之丸、角矢倉、其外二重堀、厩、一家中屋敷之跡古井等歴然也云々」としている。また同書では「広津旧記」を引き、広津村の中に、山城と屋敷があるとし、屋敷には馬場、的場の跡があるとしている。西光寺の近辺には屋敷、古屋敷、園田、上屋敷、門田、井樋ノ口などの字が残るが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	229	吉岡城	よしおか		上毛郡	築上郡上毛町吉岡	門の下・坪の内									○	○	○	○	○	30	平城か	●
豊前	230	日熊城	ひぐま	日隈城	上毛郡	築上郡上毛町大ノ瀬			○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	28・30	丘城	●
豊前	231	中村城	なかむら		上毛郡	築上郡上毛町中村										○			○	○	30	平城か	●
豊前	232	成恒城	なりつね	田島崎城	上毛郡	築上郡上毛町成恒				○			○		○	○	○	○	○	○	30	平城か	○
豊前	233	安雲城	あくも		上毛郡	築上郡上毛町安雲	城ヶ森								○	○	○	○	○	○	28・30	平城か	○
豊前	234	鶴林城	つるばやし		上毛郡	築上郡上毛町安曇													○	○		平城か	△
豊前	235	緒方城	おがた		上毛郡	築上郡上毛町緒方・矢方				○	○		○		○	○	○	○	○	○	28・30・**132**	平城	◎
豊前	236	牛王城	ごおう	本牛王城	上毛郡	築上郡上毛町矢方		○		○	○		○		○	○	○	○	○	○	28・30	丘城	●
豊前	237	尻高城	しだか	司高城	上毛郡	築上郡上毛町尻高									○	○	○	○	○	○	28・30	丘城	●
豊前	238	下唐原城	しもとうばる	秋吉城	上毛郡	築上郡上毛町下唐原	古屋敷						○		○	○	○	○	○	○	28・30・31	平城	●
豊前	239	壇の城	だんの		上毛郡	築上郡上毛町下唐原											○	○	○	○	28・30・31	山城	●
豊前	240	榎木城	えのき		上毛郡	築上郡上毛町上唐原											○	○	○	○	28	不明	△
豊前	241	代金城	しろかね		上毛郡	築上郡上毛町上唐原									○	○	○	○	○	○	28・30・31	丘城	●
豊前	242	百富城	ひゃくどみ		上毛郡	築上郡上毛町上唐原							○		○	○	○	○	○	○	28・30・31	丘城	●
豊前	243	原井城	はらい		上毛郡	築上郡上毛町原井									○		○	○	○	○	28・30・31	山城	●
豊前	244	林崎城	はやしざき	松崎城	上毛郡	築上郡上毛町東下											○	○	○	○	30・31	平城か	●
豊前	245	追揚城	おいあげ	追揚ヶ城	上毛郡	築上郡上毛町東下・西友枝	城山	○				○					○	○	**○**	**○**	28・30・**31**・**122**	丘城	◎
豊前	246	叶松城	かのうまつ	加能松城	上毛郡	築上郡上毛町東下・西友枝		○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	28・30・31	山城	◎
豊前	247	内蔵寺山城	ないぞうじやま	内蔵寺城	上毛郡	築上郡上毛町東下											○	○	**○**	**○**	30・31・**122**・**132**	丘城	◎
豊前	248	東上城	ひがしかみ		上毛郡	築上郡上毛町東上	古城畑								○		○	○	○	○	28	不明	△
豊前	249	大切城	おおぎり	大桐城	上毛郡	築上郡上毛町東上														○	28・30・31	不明	○
豊前	250	大原城	おおはら		上毛郡	築上郡上毛町東上															28	不明	△
豊前	251	光明寺城	こうみょうじ		上毛郡	築上郡上毛町西友枝				○	○		○		○	○	○	○	○	○	28・30・31	山城	●
豊前	252	松尾山城	まつのおさん		上毛郡	築上郡上毛町西友枝		○									○	○	○	○	30・31	山城	○
豊前	253	雁股城	かりまた	雁股山城	上毛郡/下毛郡	築上郡上毛町西友枝・豊前市松尾川内・大分県中津市耶馬渓町川原口		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	**○**	**○**	31・32・**155**	山城	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
中津(西)				970005		『築上郡史』(文献30)には「大字吉岡の北、南、西北三方に巾約四間半の城の跡があり、東方は高土手で其の下を門の下と云い、堀の内側南北約六十間東南約四十間堀之内を坪の内といつて居る」とし、「城井軍記」を引いて、黒田長政の日隈城(日熊城)攻めを道案内した吉岡備前守が城主ではなかったかとしている。雄熊山の北、吉岡集落の北側に城地が想定されており、『福岡県の城』では南を除く三方に幅約9mの堀が巡っていたというが、現在は確認することはできず、墓地などが見られるくらいであり、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津(西)				970026		『豊前志』には「日熊城趾　大瀬村にあり。日熊小次郎直次(佐々木一族)居る。天正十六年三月三日、黒田氏により攻め落されたり」とある。『築上郡志』(文献28)には「日熊城趾」として「今も山頭を城の臺と云ひ、纔に城壁の残れるがあり、其東南は有名なる大の瀬池にして、北には壕を繞らし、西には佐井川の天険、之に添ひて頗る要害の地たり」とある。大の瀬池の西に聳える日隈山(雌熊山)山頂にあったとするが、大規模な土砂採取のため、旧状を知ることはできないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
中津(西)						『築上郡史』(文献30)には「大字中村景幽寺の前が之で、其の南方を今に殿の前といつて居る」とし、吉富氏の城ではないかとしている。中村の景幽寺付近に城地が求められるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				970031		『豊前志』には「田島崎城趾　是れは何處なるか詳ならず。成恒越中守居城なり」とある。『築上郡志』(文献28)には「田島崎城」として、成恒氏の居城とし、「城跡、詳ならねど、今、村の地なるべし。此の附近に堀の内、馬場等云ふもあり」とする。『築上郡史』(文献30)では「成恒城跡」として、「大字成恒部落の西方をコモリの土居、南を馬場の土居、コモリの土居の北を堀のソト、馬場の土居の西を馬場のウシロ、其の南を堀のウチと云い、吉富神社の北側に堀の跡が残つて居れば城跡は大体吉富神社の台地であると思われ其の東方に末光の土居(訛りてスエミチの土居)というがあり、ここに末久氏と称する家があつて鎌倉以後、天正以前の古文書を多数蔵して居る。之ここの城主の子孫の家と思われる」とある。吉富神社の裏側には堀状の落ち込みがあるが、明らかに自然の谷川であり、城館遺構とすることは困難であり、詳細な場所も含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				970056		『築上郡志』(文献28)には「安雲村城趾」として「城ヶ森と云ふ是也、又、小松堀、内ヶ丸、兵衛屋敷、堀田、馬場、鍛冶屋敷などの田の字もあり、いづれ其頃の遺蹟なるべし、城主詳ならず」とある。『築上郡史』(文献30)では光林寺の北方に城ヶ森が位置するとしており、足立氏あるいは安雲氏に関わる城と推測する。城ヶ森の付近に城地が求められるものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)						初出は『福岡県の城』で、「鶴林城」として「鶴林長左衛門徳則の居城。土塁と濠の跡が残る」とある。『福岡県の城郭』では山田集落の山田1号墳の丘とその北麓が城だったとする。安雲山田遺跡(豊前R20)がそれにあたる可能性が考えられるが、城の名称も含め、本来ここが城である根拠が不明確であり、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				970034		本文199頁を参照。
土佐井(西)				970037		『豊前志』には「本牛王城趾」として佐々木三郎大夫頼綱が築城し、七代の後に滅亡、その後、矢方次郎正綱が守ったが、野仲鎮兼に滅ぼされたとする。『豊前古城記』(小笠原文庫)にも「本牛王城」として名を挙げている。『築上郡志』(文献28)には「牛王城趾　矢方村の南にあり、東西三十六間、南北九十三間、空濠今に残れり、亦馬場の蹟と云ふも附近に存す」とある。『築上郡史』(文献30)には「矢方池の西方、山の出鼻の城跡、之即牛王山城跡である」とする。矢方池の西側の丘陵上が城地と想定されるが、現地には人為的な造成段は見られるものの、曲輪などの明確な城館遺構ではなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				970038		『築上郡志』(文献28)には「津留弾正光盛の居城にして、永正の頃、某氏に攻められて降り、髪を薙ぎて城趾に一ヶ寺を建つと云ふ」とあり、『築上郡史』(文献30)には「大字尻高覺円寺の西方、山の出鼻が其の城跡」とある。覚円寺の西側の丘陵上には、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				960047		『築上郡志』(文献28)には「唐原舊記」を引き、「今、秋吉の旗屋敷より、東川岸城跡也、中島也、畠之内、矢倉、詰丸云、名為貢納所跡、蔵屋鋪云、云々。今も、田の字に、馬場、堀内、大溝端、櫓、アフミ、馬立、鐙田等いふあり」とする。『築上郡史』(文献30)には「大字下唐原字古屋敷が之で堀、土居等の跡が残り矢倉、馬場の土居など云うも附近にある」とする。『福岡県の城』では「堀、土居跡が残り」とあるが詳細不明(本事業では現地確認は行っていない)。
土佐井(西)						『築上郡史』(文献30)には「大字下唐原の西南上唐原との界近くの台地を里人壇の城跡と称し其の南に縦馬場と称する所もある」と記す。小山田池の北東側の低丘陵上に位置するとし、『福岡県の城』では「堀の一部が残る」としているものの、詳細は不明である(本事業では現地確認は行っていない)。
土佐井(西)						『築上郡志』(文献28)には「榎木城趾」として「同村(上唐原村)にあり、誰人の城地なりしか、詳ならず、往古は城付の町並五百戸に及べる由を傳へたり」とある。『教委』では壇の城の別称ともしているが、壇の城は下唐原に所在する城であるため、それぞれ別個の城であるとみられる。上唐原に所在する以外には情報がなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				960115		『築上郡志』(文献28)には天正8年(1580)、百富兼貞が土田より押寄せて代金信濃守を討ったとする。また、『築上郡史』(文献30)には「百富の西方に代金山と云うがある」とあり、そこが城地と想定している。百留集落の西、池田池の北側の丘陵頂部が城地とされているが、現地は自然地形が見られるのみで明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				960114		『築上郡志』(文献28)には「百富城趾」として「上唐原村にあり、長岩城野仲鎮兼の臣にて、下毛郡土田城主百富河内守兼貞築くと云ふ」とある。『築上郡史』(文献30)には「大字百富部落のある所、南方に東西に亘りて深い溝があり、もと堀のあとと称し」とある。百留の集落内に城地が想定されているが、明確な城館遺構はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				960163		『築上郡志』(文献28)には「原井村城趾　城主を詳にせず、今も田の字に門田、城の前、小城戸、堀田、井堀、外ヶ丸、弓場、馬場屋敷等云ふあり」とある。『築上郡史』(文献30)には「原井小学校の敷地が之で、此の所を丸尾と云い、其の東南低い所に城ヶ前、内ヶ丸、門田、北に小城戸、弓場等の地名がある」とし、原井氏の城、あるいは百富氏の出城かと推測している。原井小学校跡の台地が城地とみられるが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				960026		『築上郡史』(文献30)には「林崎城跡」として「大字東下、友枝小学校のある台地字を林崎と云い、堀の跡など残つて居る、之も加能松城の出城のあつた所であろう」とする。「松崎城」の名称は、『教委』の誤記であり、それ以後の文献の「松崎城」の記載は全てこの誤記に由来するものと思われる。友枝小学校跡地は現在、上毛町役場大平支所となっており、明確な城館遺構は今となっては確認されず、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)	○	○	○	960030		本文200頁を参照。
土佐井(西)				960032		本文201頁を参照。
土佐井(西)	○			960033		本文202頁を参照。
土佐井(西)						『築上郡志』(文献28)には「東上村城趾　今は古城畑と云へり、城主又明ならず、いづれ、野仲家の出城なるべし」とある。古城畑という場所が現在不明であるため、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)						『築上郡志』(文献28)には「大切城趾　是も同村(東上村)にあり、城主を詳かにせず」とあり、『築上郡史』(文献30)には「大桐城跡　大字東上字大桐に石垣を長く築いた所があり里人は城跡といつて居る」とある。東友枝川上流域に大桐集落があり、そこに城地が求められるものの、現地を確認できていないので、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)						『築上郡志』(文献28)には「大原城趾　東上村にあり、野仲鎮兼の抱城、雁股山の出城なり」とあるが、他に記載文献もなく、詳細な位置も示されていないため、場所も含め、詳細は不明と言わざるを得ない。
土佐井(西)				960017		『豊前志』には「光明寺城趾　西友枝村にあり。友枝忠兵衛居城」とある。『築上郡志』(文献28)では「西友枝の横川にあり、初、佐々木姓友枝氏の守城なりしが、後、宇都宮氏の族、友枝忠兵衛居ると云ふ」とある。『築上郡史』(文献30)には字横川、友枝川東方、人家のある所の上を蔭平と云い堀の跡など残り」とある。場所は推定されているが、明確な城館遺構が現地では確認されていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内(東)				960018		『築上郡史』(文献30)には「松尾山城跡」として「太宰管内志」を引用・検討し、天正6年(1578)に野仲氏が松尾山医王寺の本堂敷地内に切寄を構えたとする。松尾山医王寺は彦山六峯の一つである山岳寺院で、宗教施設は確認されているが、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
下河内(東)	○			960025	150261 (豊前市)	本文203頁を参照。

＜近世城郭＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	K1	門司城	もじ	門司ヶ関山城・亀城	企救郡	北九州市門司区門司		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	14・**133**・136・141	山城	●
豊前	K2	小倉城	こくら	勝山城・指月城・勝野城・湧金城・鯉ノ城	企救郡	北九州市小倉北区城内		○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	**39～83**・141	平城	◎
豊前	K3	鬼ヶ城	おにが	鬼ヶ岳城・香春城	田川郡	田川郡香春町採銅所	殿町	○		○		○	○		○		○	○	○	○	**136・141**	山城	◎
豊前	K4	香春藩庁	かわら		田川郡	田川郡香春町香春			○							○			○			陣屋	◎
豊前	K5	勝山城	かつやま	猪膝城	田川郡	田川市猪膝	城尾			○	○	○	○		○		○	○	○	○		山城か	△
豊前	K6	生山城	いくやま		京都郡	京都郡苅田町苅田か					○						○	○	○	○		不明	△
豊前	K7	豊津藩庁	とよつ	御殿地	仲津郡	京都郡みやこ町豊津		○								○		○	○		24	陣屋	◎
豊前	K8	旭陣屋	あさひ	旭城・千束城	上毛郡	豊前市千束			○				○	○		○	○	○	○		32	陣屋	◎

＜城館等伝承地＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	D1	吉川元春陣所	きっかわもとはる		企救郡	北九州市小倉南区城野							○									陣	△
豊前	D2	大内盛見陣	おおうちもりはる		企救郡	北九州市小倉南区北方周辺	城野														13	陣	△
豊前	D3	小野田屋敷	おのだ	亀甲城	企救郡	北九州市小倉南区木下										○			○		133	館	●
豊前	D4	為朝屋敷	ためともやしき	鎮西原城・大原館	田川郡	田川郡香春町中津原・田川市伊田					○	○	○	○					○	○	21	館	○
豊前	D5	迫屋敷城	さこやしき		田川郡	田川郡川崎町川崎				○												館か	△
豊前	D6	公門屋敷	くもんやしき		田川郡	田川郡川崎町田原																館	○
豊前	D7	新田氏館	にったし		京都郡	行橋市津積							○								23	館	△
豊前	D8	大将陣	たいしょうじん	矢留城	仲津郡	行橋市矢留	大将山			○					○		○	○	○	○	23	山城か	◎
豊前	D9	佐伯陣	さえきじん	大将陣・天生田城	仲津郡	行橋市天生田	大将陣・古城ノ尾	○		○	○				○		○	○	○	○		山城か	○
豊前	D10	辻野屋敷	つじのやしき	惣杜城	仲津郡	京都郡みやこ町惣社				○					○	○	○	○	○	○		館	○
豊前	D11	国見台	くんみだい		仲津郡	京都郡みやこ町犀川蔵持																山城か	●
豊前	D12	猿尾の陣	さるお		築城郡	築上郡築上町寒田																陣	●
豊前	D13	法然寺	ほうねんじ	法然寺城	築城郡	築上郡築上町東八田															28・30・**132**	平地城館	◎

＜城館関連遺跡＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	R1	上清水遺跡	かみしみず		企救郡	北九州市小倉南区横代															**18・35**	平地城館	◎
豊前	R2	城山遺跡群	じょうやま		田川郡	田川郡福智町金田	城山														**87**	丘城か	◎
豊前	R3	伊方城園遺跡	いかたしろぞの		田川郡	田川郡福智町伊方	城園														**86**	平地城館	◎
豊前	R4	大原八幡神社	おおはらはちまんじんじゃ		京都郡	京都郡みやこ町勝山大久保	雲屋敷															平地城館か	◎
豊前	R5	延永ヤヨミ園遺跡	のぶながやよみその		京都郡	行橋市吉国・延永															**99～107・109・111**	平地城館	◎
豊前	R6	下稗田森遺跡	しもひえだもり		京都郡	行橋市下稗田															27	平地城館	●
豊前	R7	宝山小出遺跡	たからやまこいで		仲津郡	行橋市宝山															**108**	平地城館	◎
豊前	R8	宝山桑ノ木遺跡	たからやまくわのき		仲津郡	行橋市宝山															**108**	平地城館	◎
豊前	R9	福富小畑遺跡	ふくとみおばた		仲津郡	行橋市西泉3丁目															**98**	平地城館	◎
豊前	R10	矢留堂ノ前遺跡	やどみどうのまえ		仲津郡	行橋市矢留															**110**	平地城館	◎

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
下関(東)	○				1027	本文206頁を参照。
小倉(西)		○	○		2048	本文207頁を参照。
金田(東)	○			810025	166	本文209頁を参照。
金田(東)				810029	175	本文210頁を参照。
田川(西)/筑前山田(西)						『古城記』には「城跡一ヶ所　猪膝村ノ内、勝山」とあり、細川忠興が築き、一国一城令により廃城となったと記している。詳細な場所等もわかっておらず、伝承の城を出ない可能性もある。
苅田(東)か						『豊前志』には「生山城阯　芥田村にあり。細川三斎の舎弟堯安の城代、毛利左馬頭居城」とある。京都郡に芥田村はなく、また国立公文書館所蔵の『豊前志』を確認したところ、「田村」となっており、何らかの誤伝・誤写等がある可能性がある。苅田村の間違いの可能性もあり、そうなると生山城は松山城を指している可能性もあるが、断定できず、ひとまずは別の城として扱う。
行橋(東)						本文211頁を参照。
中津(西)				150071	150155	本文212頁を参照。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
小倉(西)						『種々』の「企救町城野」の項目に「陣所(吉川元春陣所)」とあるが、これ以上の情報はなく、詳細は不明である。
小倉(西)						『企救郡誌』(文献13)の「北方の城址」の項目に、『北方村村誌』や旧版の『企救郡誌』の丸城の項を引き、丸城の位置(城野台)にあったとし、「城野」の地名もこれに由来するとある。高坊山の西にあるとするが、現在場所は不明である。
徳力(東)						『北九州の城』(文献133)の「木下城跡」の説明に、木下城の麓に館を構え、この館跡は現在小野田屋敷と呼ばれ、堀跡・土塁・城門跡も現存するとあるのが初出である。木下城の東麓に伝承地も残されている。現に残るという城館遺構を確認した事例もないため、詳細は不明である(本事業では現地確認は行っていない)。
田川(東)						『豊前志』には「為朝屋敷」として「中津原村にあり。鎮西八郎為朝、此所に舘を造り、暫く寓居せりと云ふ」とあり、『種々』には上伊田の項に「鎮西公園(鎮西原城址)」、中津原の項に「為朝屋敷址」とあるが、隣接地であり、また共に鎮西八郎為朝の居宅としての伝承であることから、同一のものを指しているものと見られる。現在の鎮西公園から田川高校にかけての一帯に城地が想定されるものの、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
筑前山田(東)						『古城記』には「掻上一ヶ所　河崎村ノ内、迫屋敷　右ノ由緒不分明」とある。川崎町川崎の地内にあることは想定できるがそれ以上については情報がないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
田川(西)						川崎町の西田原の低丘陵上に位置するとされ、地元の古老の話では、室町時代の屋敷跡と伝えられている(川崎町教育委員会の調査による)。現地については確認を行っていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
行橋(西)						『太宰管内志』「馬岳城」に「山足西北に津積村御所ガ谷と云処あり、是馬岳の里城の趾なるべし」とある。また、『種々』の「下稗田村津積」の項に「新田氏館址」とある。馬ヶ岳城を居城とした新田氏の居館跡の事を云って居るものと思われるが、これ以上の情報はなく詳細は不明である。
行橋(東)						『古城記』には「同(城跡一ヶ所)　矢留村ノ内、大将陣」とある。『京都郡誌』(文献23)には『長野家譜』を引き、「馬ヶ岳城之事並家臣の姓名」として「一出城国見矢倉(矢留村にあり大将陣と云山也)」とある。今川東岸の矢留山が字「大将山」であり、矢留山にあるものと思われる。『遺跡』では「大将山、堀ノ内、小堀、中木戸道」などの関連地名から、「矢留城」を想定し、以後の文献は全てこれに倣っているが、「大将陣」を本来の名称とすべきであろう。現地には、堀切等の防御遺構はないが、曲輪群と考えられる小規模な平坦面が山頂を中心に展開している。馬ヶ岳城の出城あるいは城を攻めるための陣城とも考えられるが、本報告には図面掲載する時間的余裕がなかったため、詳細は次巻に掲載したい。
行橋(東)						『古城記』には「陣場一ヶ所　天生田村ノ内、佐伯(泊)陣」とあり、由来不明とする。『豊前志』には「大将陣　天生田村にあり。誰れの陣所なりしか。未詳」とある。『遺跡』では「大将陣・古城ノ尾・門田」の関連地名から「天生田城」を想定し、以後の文献は全てこれに倣っているが、「佐伯陣」あるいは「大将陣」を本来の名称とすべきであろう。馬ヶ岳から東へ延びる稜線上に字「大将陣」「古城ノ尾」があり、その付近に城地が想定されるが、現地の確認を行っていないため、詳細は不明と言わざるを得ない。
行橋(東)						『豊前古城記』(文献23所収)には「城跡一ヶ所　惣社村之内、辻野屋敷　右は辻野三郎と云者居城せり、馬ヶ岳之出城と云、其弟鬼王とて馬ヶ岳に於て討死す、今に於て辻の屋敷に鬼王の墓所あり」とする。『京都郡誌』(文献23)には村誌からの引用として、「惣社村古城跡」として「本村の南にあり、東西六十三間、南北三十五間、土人云、応永の前辻三郎居城なりと、又中史に剣塚と云あり、南の端に鬼塚と云あり、総て城主の一類を埋葬せし塚と云伝へり、現今開墾して畑となり、周囲纔に堀の形を存せり、年号干支不詳」とある。惣社の地内に位置することが想定されるが、それ以上の情報はなく、詳細は不明と言わざるを得ない。
豊前本庄(東)						伝承では、城井宇都宮氏の出城の一つという。展望良好の故に宇都宮氏の国見伝承などもある。蔵持山の北側の稜線上に位置し、やや広い場所もある(みやこ町教育委員会からの情報)。しかしながら、明確な城館遺構は確認されておらず、詳細は不明と言わざるを得ない。
伊良原(東)						『陰徳太平記』には吉川広家が城井谷攻めに際して、陣取ったとされ、大字寒田に字猿尾がある。築上町教育委員会の調査によれば、城井川西の稜線頂部に堀切が確認でき、そこを陣跡とみているが、詳細は不明である。
蓑島(西)	○				940018	本文214頁を参照。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
苅田(西)/小倉(東)			○			本文215頁を参照。
金田(西)			○			本文215頁を参照。国史跡「城山横穴墓群」の範囲内。
金田(西)			○		840039	本文216頁を参照。
行橋(西)						本文217頁を参照。
行橋(東)			○	140140・140141	14115010	本文218頁を参照。
行橋(東)			○		14107011	長峡川西岸の段丘上に位置する。稗田小学校のグラウンド拡張工事に伴い、平成7年度に行橋市教育委員会により調査が行われ、時期は特定できないが、土塁と溝が検出され、中世の屋敷地ではないかと推測される(未報告)。なお、文献27には、遺跡の北東の大分八幡宮周辺にも区画溝状の地形が分布するとあり、屋敷地の広がりについては現地調査が必要である。
行橋(東)			○	140202	14098004	本文219頁を参照。
行橋(東)			○	140203	14098004	本文220頁を参照。
行橋(東)			○	140248	14069002	本文221頁を参照。
行橋(東)			○	140209	14101004	本文221頁を参照。

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	R11	下木井遺跡	しもきい		仲津郡	京都郡みやこ町犀川木井馬場	中屋敷														93	平地城館	◎
豊前	R12	築城城跡遺跡	ついき		築城郡	築上郡築上町築城															119	平地城館	◎
豊前	R13	西八田・堂ノ本遺跡	にしはったどうのもと		築城郡	築上郡築上町西八田															116	平地城館	◎
豊前	R14	西高塚ナカバル遺跡	にしたかつかなかばる		築城郡	築上郡築上町西高塚															118	平地城館	◎
豊前	R15	荒堀車地遺跡	あらほりくるまち		上毛郡	豊前市荒堀															33・120	平地城館	◎
豊前	R16	大村天神林遺跡	おおむらてんじんばやし		上毛郡	豊前市大村															125	平地城館	◎
豊前	R17	大村石畑遺跡	おおむらいしはた		上毛郡	豊前市大村															124	平地城館	◎
豊前	R18	吉木常末遺跡	よしきつねまつ		上毛郡	豊前市吉木															33	平地城館	◎
豊前	R19	市丸城居屋敷遺跡	いちまるじょういやしき		上毛郡	豊前市市丸															121	平地城館	◎
豊前	R20	安雲山田遺跡	あくもやまだ		上毛郡	築上郡上毛町安雲															127	平地城館	◎
豊前	R21	下尻高遺跡・ハカノ本遺跡	しもしだか・はかのもと		上毛郡	築上郡上毛町尻高・緒方															126	平地城館	◎
豊前	R22	今蔵遺跡	いまくら		上毛郡	築上郡上毛町東下															123	平地城館	◎

＜所在不明＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	F1	規矩城	きく		企救郡	旧企救郡		○															
豊前	F2	笠松城	かさまつ		田川郡	旧田川郡		○															
豊前	F3	猪嶽城	いのたけ		田川郡	旧田川郡か			○														
豊前	F4	老翁丸城	おきなまる		田川郡	旧田川郡																	
豊前	F5	長尾城	ながお		田川郡	旧田川郡				○													
豊前	F6	黒谷城	くろたに		田川郡	田川郡上津村				○													
豊前	F7	杉城	すぎ		仲津郡か	旧仲津郡か		○															
豊前	F8	鴻巣城	こうのす		築城郡か	旧築城郡か				○													

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
豊前本庄(東)			○			本文223頁を参照。
蓑島(西)			○		950016	本文223頁を参照。
蓑島(西)			○		940002	本文224頁を参照。
椎田(西)			○			本文225頁を参照。
椎田(東)			○	150163	150092	本文226頁を参照。
椎田(東)			○		150101	本文226頁を参照。
椎田(東)			○		150197	本文228頁を参照。
中津(西)			○	150151	150049	本文228頁を参照。
中津(西)			○		150114	本文229頁を参照。
土佐井(西)			○			本文230頁を参照。
土佐井(西)			○	970125		本文232頁を参照。
土佐井(西)			○		960163	本文233頁を参照。

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
						一次史料に登場し、門司氏や菊池氏などの関与が窺われるが、所在不明である。
						一次史料に登場し、赤の城と共に攻められており、旧田川郡に属するものと思われるが、所在不明である。
						大内盛見が豊前国猪嶽合戦について報告しているが、田川郡の猪国付近とも思われるが、全く所在不明である。
						『古城記』に「田川郡老翁丸　四王寺此類ノ城数々有テ其ノ時々ノ城主不定。近代築之天正十七年悉破却ス」とある。田川郡内に城地が想定できる他は詳細は不明である。
						『古城記』に「田川郡　長尾　応永年代赤松太郎義祐居城ス」とある。城主名の共通性から、企救郡の赤松城のことを指している可能性もあるが、ここでは別個の城としておく。田川郡内にあること以外は詳細は不明である。
						『古城記』の田川郡の城の一覧中に「同(掻上一ヶ所)上津村ノ内、黒谷　花月ト云者居住」とある。田川郡には「上津村」はない。上津野村(現・添田町)の誤写とも考えられるが断定できないため、詳細は不明である。
						一次史料に登場し、仲津郡の西郷の城と共に防戦したことを記しており、仲津郡内とも考えられるが全く所在不明である。
						『古城記』には「鴻巣　名和入道寂心代々守ル天文以来城主乱混」とある。郡名が書かれていないが、記載の並びから築城郡あたりと思われるが、その他の詳細は不明である。

＜削除対象＞

地域	No.	名称	よみがな	別称	旧郡名	所在地	関連地名	史料		地誌類				基本参考文献								種別	所在
								一次	参考	古城記	豊前志	旧城	種々	全集	遺跡	探訪	教委	大系	廣崎	城郭	その他		
豊前	－	富野城	とみの		企救郡	北九州市小倉北区富野				○					○				○	○			
豊前	－	片野城	かたの		企救郡	北九州市小倉北区片野									○				○	○	131		
豊前	－	葛原城	くずはら		企救郡	北九州市小倉南区葛原									○				○	○			
豊前	－	蚊田城	かだ		企救郡	北九州市小倉南区横代東町									○				○	○			
豊前	－	小森城	こもり		企救郡	北九州市小倉南区小森									○				○	○			
豊前	－	母原城	もはら		企救郡	北九州市小倉南区母原									○				○	○			
豊前	－	春吉城	はるよし		企救郡	北九州市小倉南区春吉									○				○	○			
豊前	－	成光城	なりみつ		田川郡	田川郡大任町大行事									○		○	○	○	○			
豊前	－	野田城	のだ		田川郡	田川郡添田町野田									○		○	○	○	○			
豊前	－	殿倉岳城	とのくらだけ		田川郡	田川郡添田町落合									○		○	○	○	○			
豊前	－	津野城	つのじょう		田川郡	田川郡添田町津野									○		○	○	○	○			
豊前	－	大内田城	おおうちだ		田川郡	田川郡赤村内田									○		○	○	○	○			
豊前	－	赤城	あか		田川郡	田川郡赤村赤									○		○	○	○	○			
豊前	－	葛城	かづら		田川郡	田川郡赤村赤																	
豊前	－	矢山城	ややま		京都郡	京都郡みやこ町勝山矢山									○		○	○	○				
豊前	－	長川城	ながかわ		京都郡	京都郡みやこ町勝山長川									○		○	○	○	○			
豊前	－	二塚城	ふたつか		京都郡	行橋市二塚									○		○	○	○	○			
豊前	－	長尾城	ながお		京都郡	行橋市長尾									○	○	○	○	○	○			
豊前	－	須磨園城	すまぞの		京都郡	行橋市須磨園									○		○	○	○	○			
豊前	－	稗田城	ひえだ		京都郡	行橋市下稗田									○	○	○	○	○	○			
豊前	－	崎野城	さきの	野崎城	仲津郡	行橋市西泉1丁目									○		○	○	○	○			
豊前	－	稲童城	いなどう		仲津郡	行橋市稲童・松原									○		○	○	○	○	27		
豊前	－	平島城	ひらしま		仲津郡	行橋市平島									○	○	○	○	○	○			
豊前	－	福富城	ふくとみ		仲津郡	行橋市福富									○	○	○	○	○	○			
豊前	－	大熊城	おおくま		仲津郡	京都郡みやこ町犀川大熊									○		○	○	○	○			
豊前	－	須江城	すえ		仲津郡	京都郡みやこ町犀川末江									○		○	○	○	○			
豊前	－	犬丸城	いぬまる		仲津郡	京都郡みやこ町犀川犬丸									○	○			○	○			
豊前	－	下伊良原城	しもいらはら		仲津郡	京都郡みやこ町犀川下伊良原									○		○	○	○				
豊前	－	高城	たか		上毛郡	豊前市中川底											○	○	○	○	**32**		
豊前	－	大河内城	おおかわち		上毛郡	豊前市大河内									○		○	○	○	○			
豊前	－	六郎城	ろくろう		上毛郡	豊前市六郎															164		

図幅名	調査データ			包蔵地番号		概要
	縄張	測量	発掘	福岡県	市町村	
						『遺跡』の「地名からあてた古城と居館」の中に、上富野と下富野の「大門、大城、手串防」などの地名を根拠として、「富野城」の存在を推測したのが初出であり、以後は、この記載を根拠にしているが、地名のみが根拠であり、城の存在を確実に担保するものではないため、城郭の一覧からは削除の対象とする。
						『遺跡』の「地名からあてた古城と居館」の中に、片野の「庄代、大堀」などの地名を根拠として、「片野居館」の存在を推測したのが初出であり、以後は、この記載を根拠にし、「片野城」の存在を想定するが、地名のみが根拠であり、城の存在を確実に担保するものではないため、城郭の一覧からは削除の対象とする。
						初出が『遺跡』であり、城の根拠が「門田、城籠、門堀」などの城館関連地名のみである。明確な城地や城館遺構が現在のところ存在しないため、城の根拠としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出が『遺跡』であり、城の根拠が小倉南区大字蜷田にある「中城、木戸口、馬石、別処」などの関連地名のみである。少なくとも「蚊田」は「蜷田」の誤りであるし、なおかつ明確な城地や城館遺構が現在のところ存在しないため、城の根拠としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出が『遺跡』であり、城の根拠が「城ノ森、城川、門田」などの城館関連地名のみである。明確な城地や城館遺構が現在のところ存在しないため、城の根拠としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出が『遺跡』であり、城の根拠が「城台、門田、堀田」などの城館関連地名のみである。明確な城地や城館遺構が現在のところ存在しないため、城の根拠としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出が『遺跡』であり、城の根拠が「古城山」の城館関連地名のみである。おそらく水ヶ手城を指しているものと思われ、「春吉城」とする確かな根拠が不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出が『遺跡』であり、城の根拠が「城戸前・八郎屋敷・隠山殿・打合原」などの城館関連地名のみである。明確な城地や城館遺構が現在のところ存在しないため、削除対象とした。
						『遺跡』の「野田城」の掲載が初出である。同書には「城平、城山、西城山、東城山」の地名を城の根拠としているが、少なくとも「城平」は城平城(豊前107)を指し、「城山」は城山城(豊前112)を指しており、複数の城をまとめてしまっている。そのため、一つの城を指す名称としては不適当であるため、削除対象とした。
						初出が『遺跡』であり、下落合にある「殿倉嶽城」という地名を城の根拠としている。しかしながら、所在不明であり明確な城館遺構が見つかっていないため、城の根拠としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』で上津野地区の「陣屋、大城ヶ谷、城ヶ迫」、下津野地区の「城道、城ノ峠、土居ノ内」などの関連地名が城の唯一の根拠となっている。明確な城館遺構も見つかっていないため、証拠不十分として、今回は削除対象とした。
						初出は、『遺跡』で大内田所在の「城、城台、門前、ジンヤ」の関連地名を唯一の根拠としている。これらの地名の場所に明確な城館遺構があるかどうか不明である。『教委』の「大内田城」には出典が『豊前志』とあるが、そこには掲載されておらず、『遺跡』を典拠としたものと思われる。よって証拠不十分として、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』で下赤地区の秋ノ城、倉谷、小倉ヶ谷、隠谷の関連地名を城の唯一の根拠となっている。秋ノ城は秋野城(豊前124)をさし、その他の地名の場所にも明確な城館遺構は確認されていない為、証拠不十分として今回は削除対象とした。
				820002		福岡県の分布地図(文献158)に「葛城跡」として、南北朝時代で葛城山頂に所在とあるが、地誌などに全く現れず、現状も不明であるため、今回は削除対象とした。
					930072	初出が『遺跡』であり、城の根拠は「大城、木戸口、蔵下屋敷、蔵山」の関連地名のみである。分布地図には矢山城の所在が落されているが、現地は全くの自然地形と若干の後世の改変地形が見られるのみで、明確な城館遺構はない。そのため、城としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』であり、室町時代の城として「長川城(長川七郎か)」とある。しかしながら、典拠が示されておらず、証拠不十分であるため、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』であり、城の根拠が「金城、出口、柿ヶ堀(垣ヶ堀)」の関連地名である。垣ヶ堀の小字は残るが、現地に城館遺構は確認されておらず、現状においては城としての証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』であり、城の根拠が「城山・堀・ツイジ」の関連地名である。現在、小字でツイジはあるが、城館遺構は確認されておらず、城としての証拠不十分であるため、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』であり、城の根拠が「陣ノ内、木戸口、出口、垣添」の関連地名である。現在、小字で木戸ノ口があるが、明確な城館遺構はなく、城としては証拠不十分であるため、今回は削除対象とした。
				140355	14107004	初出は『遺跡』で、室町時代の城として「稗田城(長野一族)」として下稗田に所在するとある。しかしながら、出典は明記されておらず、他に確実な根拠もない。分布地図(文献171)には所在が示されているが、現状で城館遺構が見つかっていないため、城としての証拠不十分として、今回は削除対象とした。
						『遺跡』・『行橋市の文化財　第2集』(文献89)では、「崎野城」として、崎野地内の「山城、前門、倉添、倉丸、山城ヤシキ、的場」などの地名を根拠に城の存在を主張するが、現地は住宅地となっており、地名のみが城の根拠とされるため、城の存在としては証拠不十分であるため、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』で、「城ノ尾、古城、城戸」などの関連地名が城の唯一の根拠となっている。現地は住宅地となっており、現状では明確な城館遺構は確認されておらず、城がある根拠としては証拠不十分であるため、今回は削除対象とした
						初出は『遺跡』で、室町時代の城の一覧に、「平島城　平島(平島佐衛門佐)」とあるが、典拠不明である。この記載を遡る「平島城」の記載はなく、他に確実な典拠もないため、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』で、室町時代の城の一覧に、「福富城　福富(福富対馬守)」とあるが、典拠不明である。この記載を遡る「福富城」の記載はなく、他に確実な典拠もないため、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』であり、城の根拠が「城山、豊ヶ城、ホウ城山」の関連地名である。現地に城館遺構は確認されておらず、現状においては城として証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』で、室町時代の城の一覧に、「須江城　末江(須江太郎か)」とあるが、典拠不明である。この記載を遡る「須江城」の記載はなく、他に確実な典拠もないため、今回は削除対象とした。
						初出は『遺跡』で、天正15年に豊前国人一揆に蜂起した領主・居城の一覧に、「犬丸城　犬丸越中守」とあるが、典拠不明である。この記載を遡る「犬丸城」の記載はなく、他に確実な典拠もないため、今回は削除対象とした。なお、豊前下毛郡には犬丸城(犬丸民部)があり、それを誤って採用している可能性もある。
伊良原(東)						初出は『遺跡』であり、城の根拠が「城山、下城戸、大倉谷」の関連地名である。現地に城館遺構は確認されておらず、現状においては城として証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
下河内(東)	○			150083		戦前の地誌には、城としての記載は一切なく、初出は『教委』によると『豊前志』であるとするが、記載は見つからない。字「高城」という地名から、城を想定したものと考えられ、『福岡県の城』では、岡城背後の標高362mのNHKの中継基地局がある山稜頂部に、曲輪群を配置した縄張り図が掲載されている。しかしながら、現地は基地局建設の際の造成による平坦面と石垣が見られるばかりで、明確な城館遺構は確認することはできない。よって、城館としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
下河内(東)						初出は『遺跡』であり、城の根拠が「高城、八郎屋敷、垣ノ内、門出」の関連地名である。場所もバラバラで、現地に明確な城館遺構は確認されていないため、城としては証拠不十分であり、今回は削除対象とした。
					150122	豊前市の分布地図(文献164)に「六郎城跡」として、「微高地。遺構は不明。角田屋敷・外屋敷・神田坪屋敷・上屋敷などの字名が残る」とあり、『築上郡史』(文献30)を参考文献として挙げているが、『築上郡史』に六郎城は確認できない。遺構不明で、地名のみが城地の根拠であるため、証拠不十分であり、今回は削除対象とした。

参考文献一覧表

＜基本参考文献＞

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
1	三木市左衛門	1857	『豊前国古城記（豊前古城記）』	
2	渡辺重春（渡辺重兄）	1863	『豊前志』	
3	和田宗八	1936	『研究旅行用　面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』	金文堂
4	鳥羽正雄ほか編	1967	『日本城郭全集』14 佐賀・長崎・福岡	人物往来社
5	定村責二	1976	『地名から探る豊前国遺跡』	美夜古郷土史学校
6	西谷正ほか	1977	『探訪日本の城』10西海道	小学館
7	副島邦弘・近沢康治編	1979	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX	福岡県教育委員会
8	磯村幸男編	1979	「福岡県」『日本城郭大系』第18巻	新人物往来社
9	廣崎篤夫	1995	『福岡県の城』	海鳥社
		1997	『福岡古城探訪』	海鳥社
10	福岡県の城郭刊行会	2009	『福岡県の城郭　戦国城郭を行く』	銀山書房

＜市町村郡誌＞

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
＜全般＞				
11	青柳種信	文政～天保	『筑前国続風土記拾遺』	
12	㈶西日本文化協会	2001	『福岡県史』近世史料編　細川小倉藩（三）	福岡県
＜企救郡＞				
13	伊東尾四郎	1931	『福岡縣企救郡誌』	企救郡教育会
14	伊東尾四郎	1933	『門司市史』	門司市役所
15	伊東尾四郎	1940	『小倉市史　続編』	小倉市役所
16	末岡作太郎	1955	『小倉市史　補遺』	小倉市役所
17	門司郷土叢書刊行会	1981	『門司郷土叢書』　第四巻	国書刊行会
18	北九州市史編さん委員会	1992	『北九州市史　古代・中世』	北九州市
＜田川郡＞				
19	和田泰光	1930	『上野村誌』	筑豊之實業社
20	筑豊之實業社	1930	『伊田町誌』	筑豊之實業社
21	九州日報社編集部	1954	『田川産業経済大観』	九州日報社
22	大任町誌編纂委員会	1970	『大任町誌』	大任町
＜京都郡・仲津郡＞				
23	伊東尾四郎	1919	『京都郡誌』	京都郡役所
24	豊津町誌編纂委員会	1985	『豊津町誌』	豊津町
25	犀川町誌編集委員会	1994	『犀川町誌』	犀川町
26	勝山町史編纂委員会	2006	『勝山町史』上巻	勝山町
27	行橋市史編纂委員会	2006	『行橋市史』中巻	行橋市
＜築城郡・上毛郡＞				
28	熊谷克己	1911	『築上郡志』	福岡縣教育会築上支会
29	吉富町誌編纂委員	1955	『福岡縣築上郡吉富町誌』	福岡県築上郡吉富町役場
30	築上郡史編纂委員	1956	『福岡縣築上郡史』	福岡県築上郡豊前市教育振興会
31	大平村誌編集委員会	1986	『大平村誌』	大平村
32	豊前市史編纂委員会	1991	『豊前市史』上巻	豊前市
33	豊前市史編纂委員会	1993	『豊前市史』考古資料	豊前市
34	築城町誌編纂委員会	2006	『築城町誌』上巻	築城町

＜発掘等調査報告書＞

No.	編著者名	発行年	著書名
＜企救郡＞			
35	（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1999	『上清水遺跡Ⅱ区』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第100集）
36	北九州市教育委員会	2000	『長野城』（北九州市文化財調査報告書第89集）
37	（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室	2005	『宇土遺跡・朽網城跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第332集）
38		2011	『埋蔵文化財調査室年報』27　平成21年度
＜小倉城＞			
39	北九州市教育委員会	1977	『小倉城跡』（北九州市文化財調査報告書 第22集）
40	北九州市教育委員会	1993	『小倉城北の丸跡』（北九州市文化財調査報告書 第57集）
41	北九州市教育委員会	1994	『小倉城跡』（北九州市文化財調査報告書 第60集）
42	（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1994	『小倉城跡１』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第150集）
43	北九州市教育委員会	1995	『小倉城跡１―御勘定所跡南東側堀の発掘調査―』（北九州市文化財調査報告書 第64集）

No.	編著者名	発行年	著書名
44	北九州市教育委員会	1996	『小倉城跡Ⅱ―御下屋敷跡の第１次発掘調査―』（北九州市文化財調査報告書 第70集）
45	北九州市教育委員会	1997	『小倉城跡Ⅲ―普請所跡の調査―』（北九州市文化財調査報告書 第72集）
46	（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1997	『小倉城跡２』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第196集）
47		1997	『小倉城跡３』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第197集）
48	北九州市教育委員会	1998	『小倉城跡Ⅳ―御花畠跡の調査―』（北九州市文化財調査報告書 第78集）
49	（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1998	『小倉城下屋敷跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第222集）
50	北九州市教育委員会	1999	『小倉城跡Ⅴ―下屋敷跡の調査―』（北九州市文化財調査報告書 第85集）
51	（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	1999	『小倉城御蔵跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第228集）
52		1999	『常磐橋西勢溜り跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第229集）
53		2000	『小倉城跡第3地点－下條守衛屋敷地の調査－』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第245集）
54		2001	『小倉城御普請所跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第258集）
55	（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室	2002	『小倉城代米御蔵跡Ⅰ』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第271集）
56		2002	『小倉城代米御蔵跡Ⅱ』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第272集）
57	北九州市教育委員会	2003	『大門遺跡』（北九州市文化財調査報告書 第98集）
58	（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室	2003	『小倉城代米御蔵跡Ⅲ』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第293集）
59		2004	『小倉城代米御蔵跡Ⅳ』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第313集）
60		2004	『小倉城新馬場跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第314集）
61		2005	『小倉城御花畠跡・新馬場跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第342集）
62		2006	『小倉城二ノ丸家老屋敷跡第２地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第349集）
63		2007	『小倉城三ノ丸跡第３地点－小笠原織衛屋敷跡の調査－』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第362集）
64		2007	『大門遺跡　第３地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第363集）
65		2007	『小倉城桜町口門跡・大門遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第370集）
66		2008	『小倉城代米御蔵跡・御普請所跡（第２次調査）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第381集）
67		2008	『小倉城御花畠跡２（第２地点２区）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第384集）
68		2008	『大門遺跡　第４地点（１区）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第389集）
69		2008	『小倉城御花畠跡３（第２地点３区）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第398集）
70		2008	『小倉城三ノ丸跡第４地点－小倉小笠原藩士・牧野弥次左右衛門屋敷跡の調査－』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第399集）
71		2008	『備後守屋鋪南側土塁跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第405集）
72		2009	『大門遺跡第４地点（２区・３区）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第409集）
73		2009	『小倉城三ノ丸跡第６地点（１区）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第420集）
74		2010	『小倉城三ノ丸跡第７地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第428集）
75		2010	『小倉城三ノ丸跡第６地点２』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第439集）
76		2010	『小倉城三ノ丸跡第６地点３』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第440集）
77		2011	『小倉城三ノ丸跡第８地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第452集）
78		2011	『小倉城三ノ丸跡第６地点４（３区の調査）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第462集）
79		2011	『小倉城三ノ丸跡第９地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第466集）
80		2012	『小倉城三ノ丸跡第６地点５（４区と５区の調査）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第473集）
81		2012	『小倉城三ノ丸跡第８地点（２区の調査）』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第480集）
82		2013	『大門遺跡　第６地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第503集）
83		2015	『大門遺跡　第７地点』（北九州市埋蔵文化財調査報告書第523集）
＜田川郡＞			
84	香春町教育委員会	1992	『香春岳』（香春町文化財調査報告書第８集）
85	大任町教育委員会	2004	『狐塚横穴墓群　明神山城跡』（大任町文化財調査報告書第８集）
86	方城町教育委員会	2004	『伊方城園遺跡』（方城町文化財調査報告書第７集）
87	福智町教育委員会	2011	『城山遺跡群　調査概要報告』（福智町文化財調査報告書第２集）
88	川崎町教育委員会	2013	『龍円城跡』（川崎町文化財調査報告書第11集）
＜京都郡・仲津郡＞			
89	行橋市文化財調査委員会	1976	『行橋市の文化財』第２集（美夜古文化懇話会発行）
90	苅田町教育委員会	1988	『豊前国松山城跡』（苅田町文化財調査報告書第８集）
91	苅田町教育委員会	1991	『豊前国松山城跡（土塁）』（苅田町文化財調査報告書第14集）
92	苅田町教育委員会	1992	『豊前国松山城址』（苅田町文化財調査報告書第18集）
93	犀川町教育委員会	1992	『城井遺跡群』（犀川町文化財調査報告書第３集）
94	苅田町・苅田町教育委員会	1993	『等覚寺の松会』
95	苅田町教育委員会	1996	『等覚寺修験道遺跡群調査概報』（苅田町文化財調査報告第27集）
96	福岡県教育委員会	1998	『穴田古墳群　覗山城跡』（覗山無線中継所関係埋蔵文化財調査報告書）
97	豊津町教育委員会	2003	『小笠原藩市井方役所跡』（豊津町文化財調査報告書第29集）
98	福岡県教育委員会	2004	『福富小畑遺跡B地点』（福岡県文化財調査報告書第194集）

No.	編著者名	発行年	著書名
99	九州歴史資料館	2012	『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』２　福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の調査Ⅰ
100	九州歴史資料館	2013	『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』９　福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査Ⅰ
101	九州歴史資料館	2013	『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅲ区Ⅰ-』（国道２０１号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第１集）
102	九州歴史資料館	2013	『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅴ区-１・２・３区-』（福岡県文化財調査報告書第238集）
103	九州歴史資料館	2013	『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』11　延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区２
104	九州歴史資料館	2014	『延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ区-４～７区』（福岡県文化財調査報告書第244集）
105	九州歴史資料館		『延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ区-４～７区』（国道２０１号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第２集）
106	九州歴史資料館	2015	『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅳ区Ⅰ-』（国道２０１号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第３集）
107	九州歴史資料館	2015	『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅳ区Ⅱ-』（国道２０１号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第４集）
108	九州歴資料館	2015	『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』12　宝山小出遺跡　宝山桑ノ木遺跡　流末溝田遺跡
109	九州歴資料館	2015	『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』18　福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区の調査２
110	九州歴資料館	2015	『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』19　矢留堂ノ前遺跡
111	九州歴史資料館	2015	『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅲ区Ⅱ-』（国道２０１号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第５集）
＜築城郡＞			
112	福岡県教育委員会	1992	『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』９　広幡城跡
113	椎田町教育委員会	1992	『広幡城跡』Ⅱ（椎田町文化財調査報告書第３集）
114	築城町教育委員会	1998	『船迫窯跡』（築城町文化財調査報告書第６集）
115	築城町教育委員会	1999	『堂山城址』（築城町文化財調査報告書第７集）
116	椎田町教育委員会	1999	『今津・西八田の遺跡』（椎田町文化財調査報告書第９集）
117	築城町教育委員会	2005	『宇都宮氏城館跡』（築城町文化財調査報告書第11集）
118	椎田町教育委員会	2005	『西高塚ナカバル遺跡』（椎田町文化財調査報告書第15集）
119	築上町教育委員会	2014	『築城城跡』（築上町文化財調査報告書第10集）
＜上毛郡＞			
120	豊前市教育委員会	1991	『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告』Ⅲ（豊前市文化財調査報告書第７集）
121	福岡県教育委員会	2003	『市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡』（福岡県文化財調査報告書第179集）
122	大平村教育委員会	2004	『追揚ヶ城』（大平村文化財調査報告第15集）
123	上毛町教育委員会	2006	『恵良古墳群　今蔵遺跡　縄手遺跡』（上毛町文化財調査報告書第３集）
124	豊前市教育委員会	2007	『大村石畑遺跡』（豊前市文化財報告書第22集）
125	豊前市教育委員会	2009	『大村天神林遺跡』（豊前市文化財報告書第26集）
126	九州歴資料館	2013	『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』７　ハカノ本遺跡２・３次調査　安雲山田遺跡１地点
127	上毛町教育委員会	2015	『七ツ枝遺跡　安雲山田遺跡　土佐井遺跡　上唐原榎町遺跡』（上毛町文化財調査報告書第20集）

＜その他刊行物＞

No.	編著者名	発行年	著書名	発行
128	植田辰生	1991	『中世における方城の山城』	
129	植田辰生	2012	『下田川の山城』	方城郷土史研究会
130	岩石城史編集委員会	1987	『岩石城』	添田町
131	八木田　謙	2001	『門司小倉の古城史（改定企救郡古城址取調簿）』	今井書店
132	中津市教育委員会	2014	『城館ガイドブック～中津市・築上町・豊前市・上毛町・宇佐市・豊後高田市～』	中津市教育委員会

＜論文等＞

No.	編著者名	発行年	論文名	著書名	発行
133	廣崎篤夫	1969	『北九州の城』		廣崎篤夫
134	村田修三編	1987	『図説中世城郭事典』第三巻		新人物往来社
135	千田嘉博・小島道裕・前川要	1993	「中世城館を地表面から調査する」	『城館調査ハンドブック』	新人物往来社
136	木島孝之	1995	「近世初頭九州における支城構造―黒田・細川領の支城について―」	『福岡県地域史研究』No.13	福岡県地域史研究所
137	木島孝之・中西義昌	1998	「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」	『戦国の城と城下町Ⅱ』	鳥栖市教育委員会
138	片山安夫	1998	「修験遺跡に見る防御遺構―彦山上仏来る山城―」	『地域相研究』26	地域相研究会
139	中西義昌	2000	「城郭遺構にみる戦国後期糸島半島の動向」	『福岡地方史研究』第38号	福岡地方史研究会
140	中西義昌・岡寺　良	2001	『歴史史料としての戦国期城郭―北部九州における城郭遺構と地域権力―』（地域資料叢書４）		九州大学服部英雄研究室
141	木島孝之	2001	『城郭の縄張り構造と大名権力』		九州大学出版会
142	中村修身	2002	「小規模山城　豊前國企救郡の例から」	『「惣構」の再検討』（第19回全国城郭研究者セミナー資料集	第19回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会

No.	編著者名	発行年	論文名	著書名	発行
143	宮川泰男・中村修身ほか	2003	「苅田町等覚寺城について」	『北部九州中近世城郭情報紙』５	北部九州中近世城郭研究会
144	岡寺　良	2004	「戸代山城の踏査報告」	『福岡考古』第21号	福岡考古懇話会
145	香春町史編纂委員会	2005	「香春の民俗-下採銅所編-」	『郷土史誌かわら』第60集	香春町教育委員会
146	中村修身	2005	「御城と城下町の発展」	『北部九州中近世城郭情報紙』９	北部九州中近世城郭研究会
147	中村修身	2006	「まぼろしの高畑城」	『図説 田川・京築の歴史』	郷土出版社
148	中村修身	2006	「豊前国の中世城郭について―在地勢力の動向―」	『史学論叢』36	別府大学史学研究会
149	切寄研究班	2006	「切寄について」	『北部九州中近世城郭情報紙』６	北部九州中近世城郭研究会
150	中村修身	2007	「福岡県みやこ町大坂城の紹介」	『北部九州中近世城郭情報紙』12	北部九州中近世城郭研究会
151	村上勝郎	2009	「平成21年前半に訪城した福岡県内および山口県内の戦国期の古城跡について」	『北部九州中近世城郭情報紙』17	北部九州中近世城郭研究会
152	岡寺　良	2012	「筑前翅嶽城と豊前上仏来山城の平面構造について」	『都市・建築学研究』第22号	九州大学大学院人間環境学研究院
153	中村修身	2012	「豊前・松山城山頂部の評価をめぐって（桐葉文軒先瓦の検討）」	『北部九州中近世城郭情報紙』23	北部九州中近世城郭研究会
154	村上勝郎・田中賢二	2014	「豊前国（田川市）金国山の城郭遺構調査報告」	『北部九州中近世城郭情報紙』27	北部九州中近世城郭研究会
155	岡寺　良	2015	「豊前長岩城平面構造考」	『九州歴史資料館研究論集』40	九州歴史資料館

＜分布地図＞

No.	編著者名	発行年	著書名
156	福岡県教育委員会	1976	『福岡県遺跡等分布地図』（豊前市・築上郡編）
157	福岡県教育委員会	1977	『福岡県遺跡等分布地図』（行橋市・京都郡編）
158	福岡県教育委員会	1977	『福岡県遺跡等分布地図』（田川市・田川郡編）
159	田川市教育委員会	1993	『田川市内遺跡等分布地図』
160	北九州市教育委員会	1995	『北九州市埋蔵文化財分布地図（小倉南区）』
161	北九州市教育委員会	1998	『北九州市埋蔵文化財分布地図（小倉北区・門司区・離島）』
162	苅田町教育委員会	2000	『苅田町の文化遺産-苅田町文化財詳細分布地図-』（苅田町文化財調査報告書第34集）
163	糸田町教育委員会	2000	『糸田町内遺跡等詳細分布調査報告書』（糸田町文化財調査報告書第４集）
164	豊前市教育委員会	2000	『豊前市内遺跡分布地図』
165	大任町教育委員会	2001	『大任町の文化財　大任町内遺跡詳細分布調査報告書』（大任町文化財調査報告書第７集）
166	香春町教育委員会	2001	『香春町内遺跡等詳細分布調査報告書』（香春町文化財調査報告書第12集）
167	豊津町教育委員会	2001	『豊津町内遺跡等分布地図』（豊津町文化財調査報告書第25集）
168	犀川町教育委員会	2003	『犀川町内遺跡等分布地図』（犀川町文化財調査報告書第８集）
169	椎田町教育委員会	2003	『椎田町内遺跡等分布地図』（犀川町文化財調査報告書第13集）
170	川崎町教育委員会	2007	『川崎町文化財分布地図』
171	行橋市教育委員会	2010	『行橋市内遺跡等分布地図』（行橋市文化財調査報告書第37集）
172	みやこ町教育委員会	2010	『みやこ町内遺跡等分布地図』（みやこ町文化財調査報告書第６集）
173	築上町教育委員会	2011	『築上町内遺跡等分布地図（築城地区編）』（築上町文化財調査報告書第８集）

Ⅳ　対象地域城館分布図

本章では、本書における対象地域内すべての城館および関連遺跡についての位置図を示す。凡例および分布図対照図について以下のとおりである。

＜凡例＞

1　基本地図は、国土地理院長の承認を得て（承認番号　平 27 情複　第 1295 号）、同院発行の数値地図 25000（地図画像）を複製したもので、下の対照図に★が付されている図幅については、1/37,500 に、それ以外は全て 1/35,000 に縮小して掲載している。

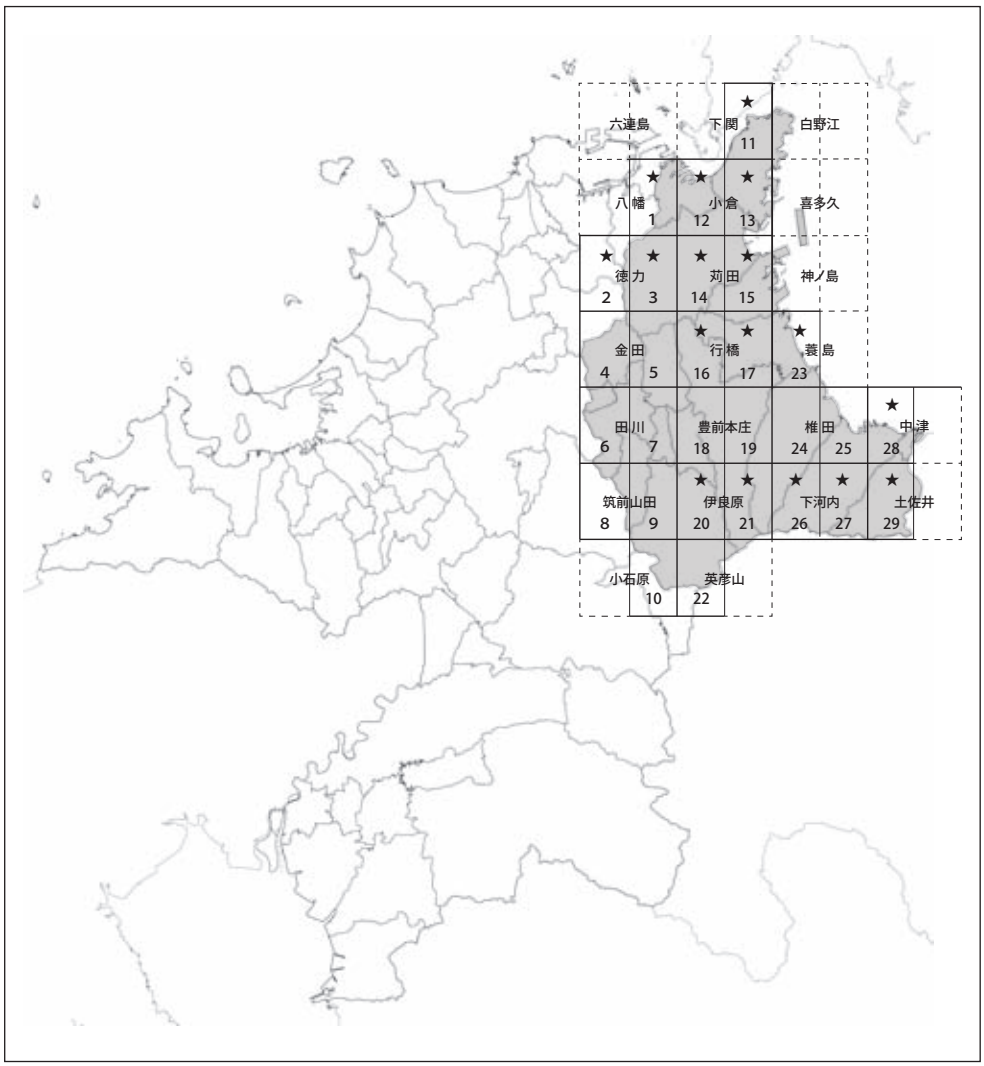
2　本書の対象地域になっているが、城館が存在しない図幅については割愛した。

3　分布図の遺跡の表記と分布図対照図は以下のとおり。

＜遺跡の表記＞

	範囲が明確なもの	所在は明確であるが範囲が不明確なもの	所在はある程度は明確なもの（小字の範囲程度）	所在は明確でないもの（大字の範囲までの把握）
中近世城館	◯	●	○	表記なし（地図の欄外に名称のみ記載）
城館等伝承地	◯	●	○	表記なし（地図の欄外に名称のみ記載）
城館等関連遺跡	◯	●	○	なし

〈分布図対照図〉



1　八　幡（東）

< 中近世城館 >
豊前 16 引地山城
豊前 17 恵里城
豊前 19 虹山城

（所在不明）
＜中近世城館＞
豊前 18 丸城
豊前 20 巣山城
豊前 21 城ノ腰城

報告書 2 にて報告済
< 中近世城館 >
筑前 219 篠谷城
筑前 221 天賀城
筑前 K 11 若松城

（所在不明）
< 中近世城館 >
筑前 220 戸畑城

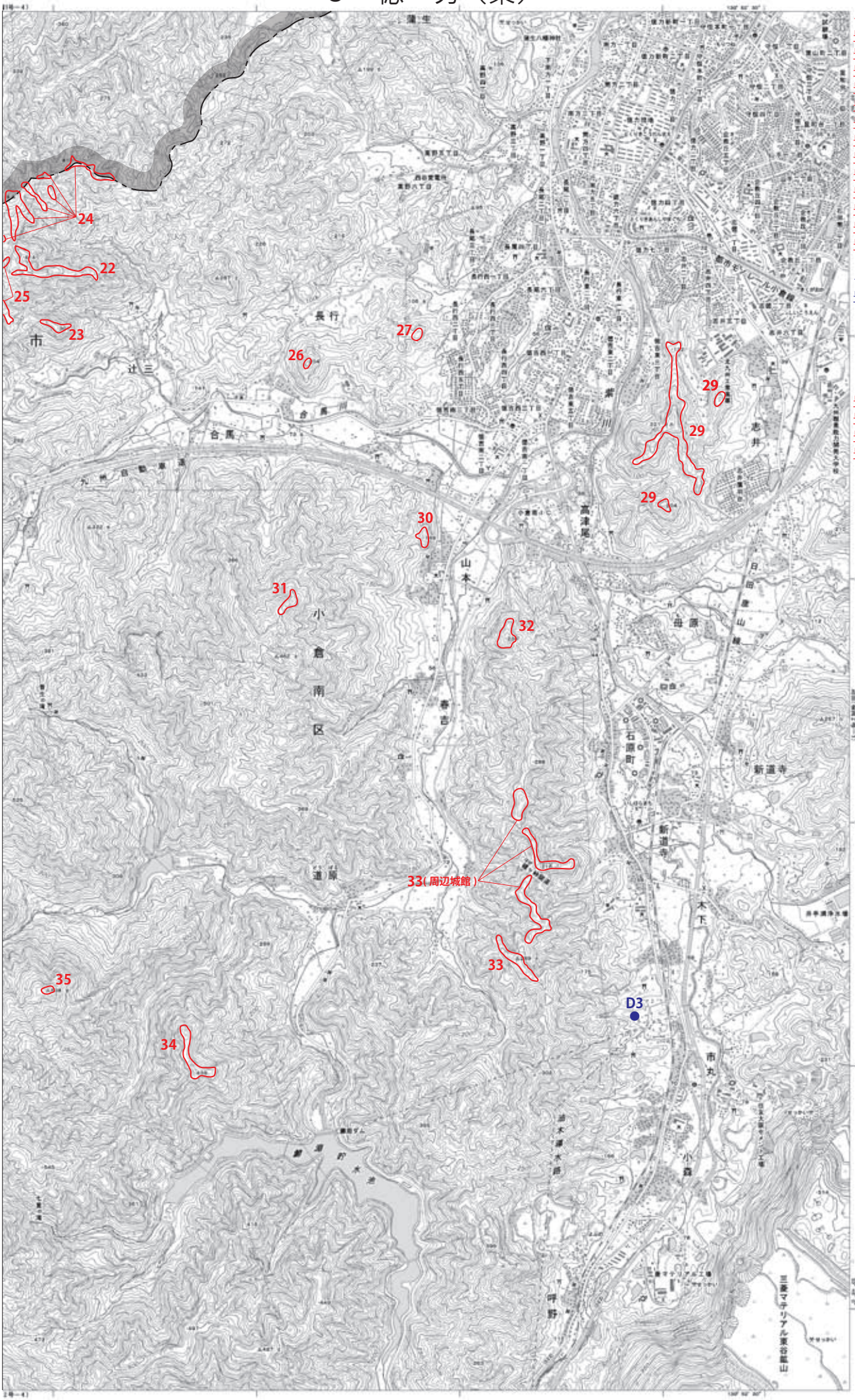
2　徳　力（西）

＜中近世城館＞
豊前 24 吉川城
豊前 25 三角城

報告書２にて報告済
＜中近世城館＞
筑前 192 雲取山城
筑前 193 山ノ田城
筑前 194 髻岩
筑前 201 金剛城
筑前 208 畑城
筑前 209 馬乗城
筑前 210 竹尾城
筑前 211 市瀬城
＜城館等伝承地＞
筑前Ｄ34 陣屋谷
＜城館関連遺跡＞
筑前Ｒ９
上頓野宮ノ前遺跡

（所在不明）
＜城館等伝承地＞
筑前Ｄ33 隠館

3　徳　力（東）

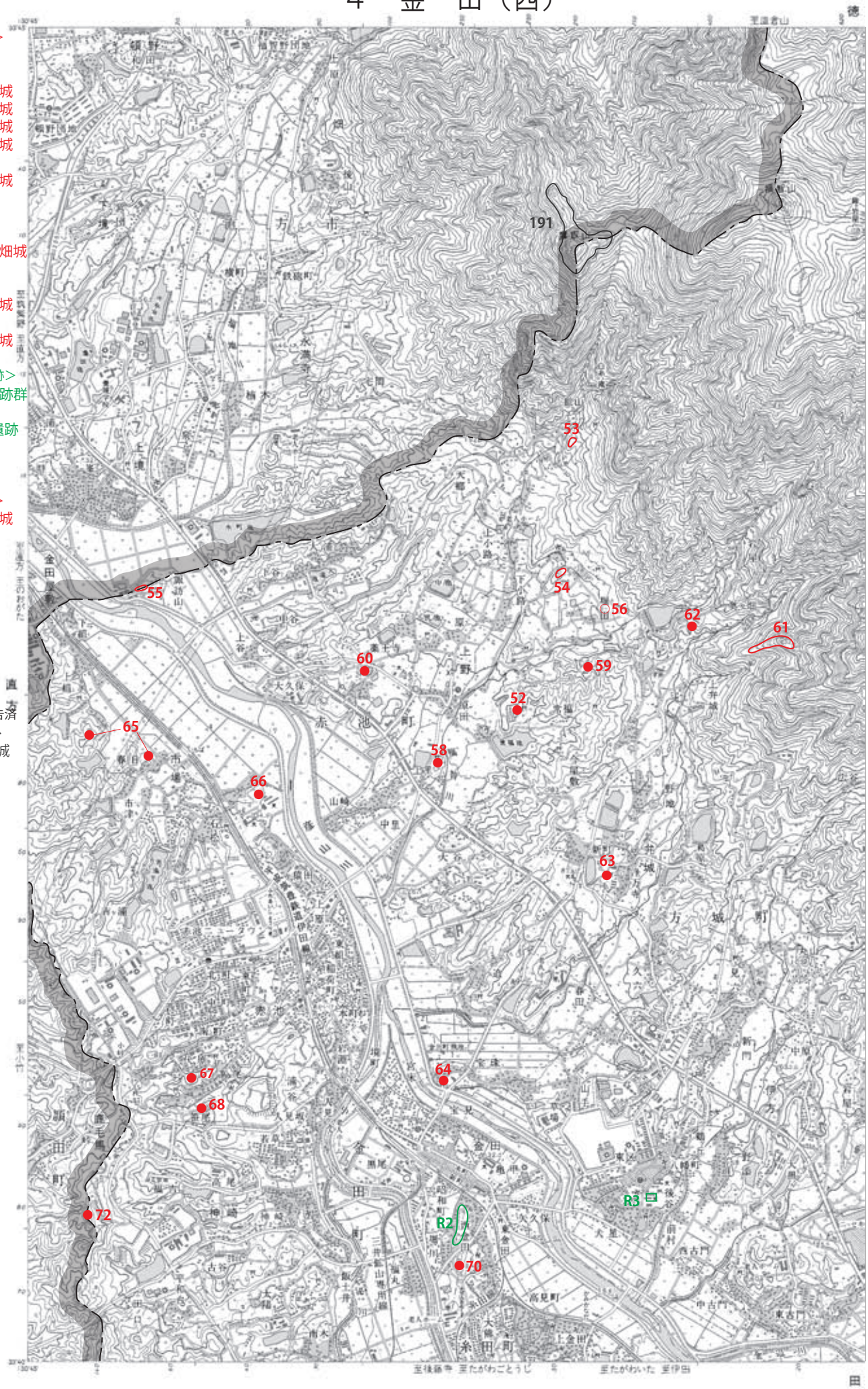


＜中近世城館＞
豊前 22 大三岳城
豊前 23 小三岳城
豊前 24 吉川城
豊前 25 三角城
豊前 26 宝積寺城
豊前 27 長尾城
豊前 29 椎山城
豊前 30 山本城
豊前 31 水ヶ手城
豊前 32 宮山城
豊前 33 木下城
豊前 34 高畑山城
豊前 35 赤松城

＜城館等伝承地＞
豊前 D3
　小野田屋敷

（所在不明）
豊前 20 巣山城
豊前 21 城ノ腰城
豊前 28 大鍋山城
豊前 44 城山城

4　金　田（西）

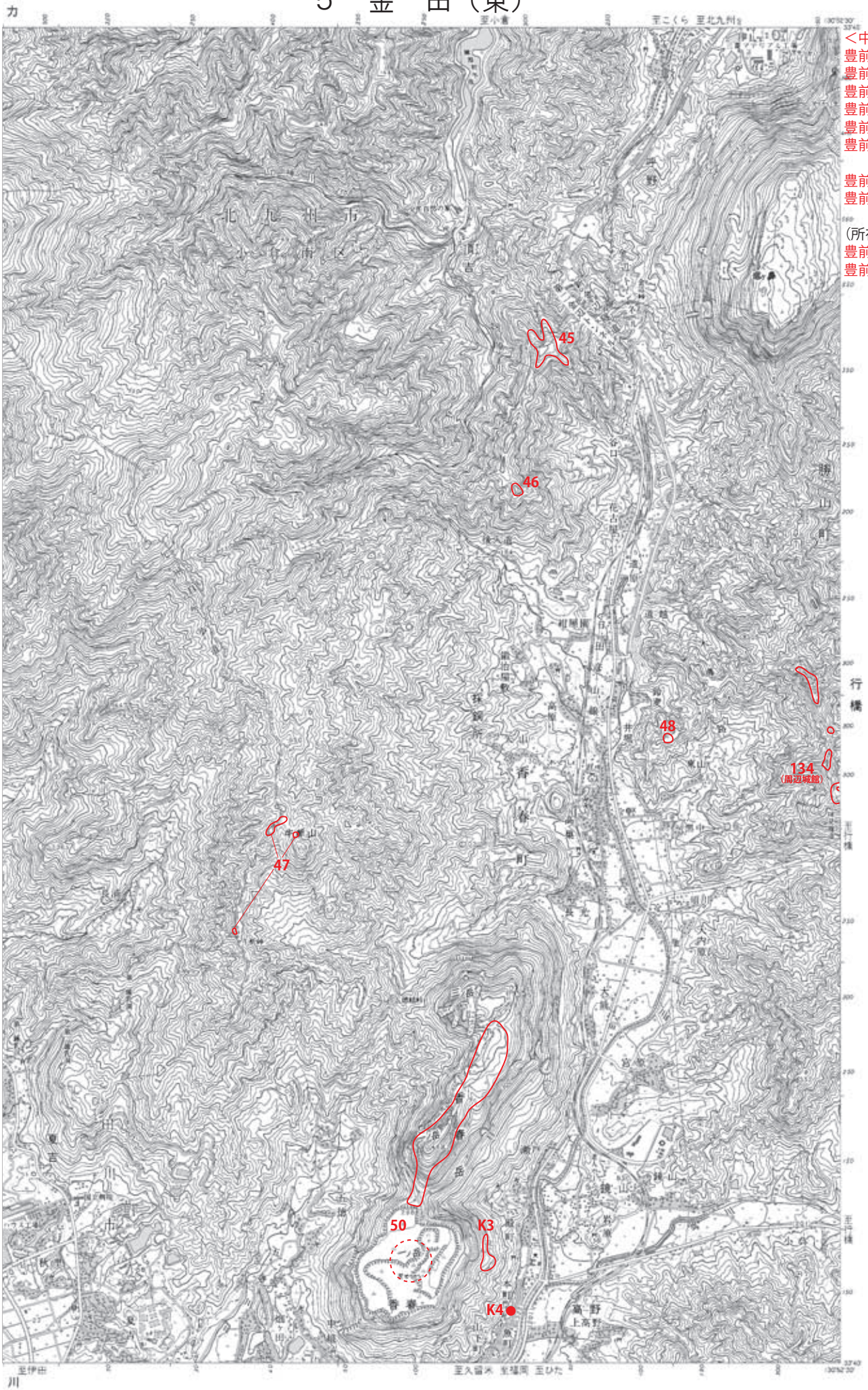


＜中近世城館＞
豊前 52 上野城
豊前 53 城山城
豊前 54 観音寺城
豊前 55 諏訪山城
豊前 56 城道寺城
豊前 58 城田山城
豊前 59 近吉砦
豊前 60 薬師山城
豊前 61 新田城
豊前 62 弁天城
豊前 63 貴船城
豊前 64 弥次郎畑城
豊前 65 草場城
豊前 66 石松砦
豊前 67 高尾山城
豊前 68 赤池城
豊前 70 名木野城
豊前 72 神崎城
＜城館等関連遺跡＞
豊前 R2 城山遺跡群
豊前 R3
伊方城園遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
豊前 57 下ノ原城
豊前 69 金田城
豊前 71 舩木城

報告書２にて報告済
＜ 中近世城館 ＞
筑前 191 鷹取城

5　金　田（東）



＜中近世城館＞
豊前 45 茶臼山城
豊前 46 新城
豊前 47 手切城
豊前 48 花立城
豊前 50 香春岳城
豊前 134 障子ヶ岳城
（周辺城館）
豊前 K3 鬼ヶ城
豊前 K4 香春藩庁

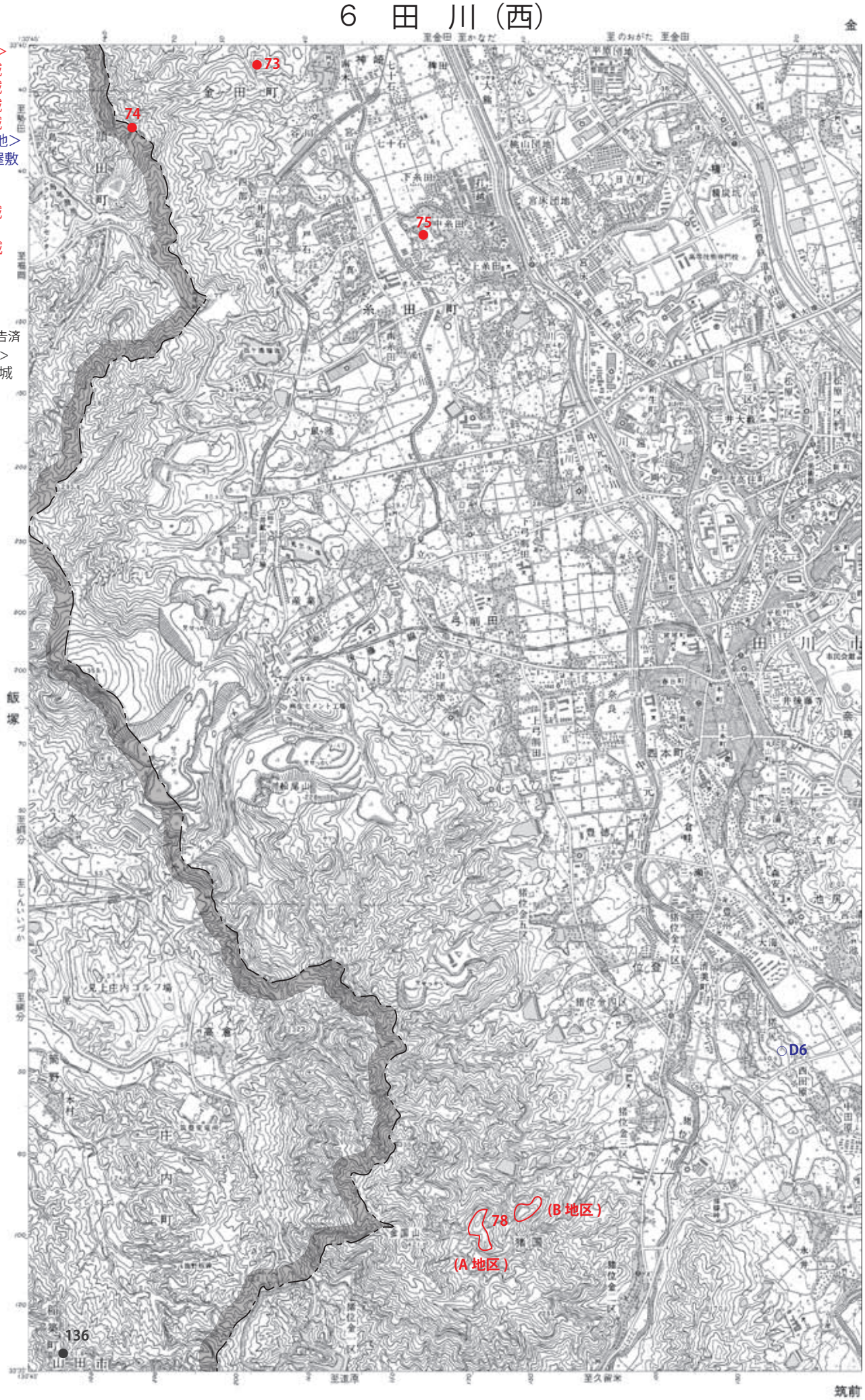
（所在不明）
豊前 44 城山城
豊前 49 久連山城

6　田　川（西）

＜中近世城館＞
豊前 73 南木城
豊前 74 日王城
豊前 75 糸田城
豊前 78 金国城
＜城館等伝承地＞
豊前 D6 公門屋敷

（所在不明）
豊前 76 切寄城
豊前 77 糸城
豊前 K5 勝山城

報告書 1 にて報告済
＜ 中近世城館 ＞
筑前 136 筒見城



7　田　川（東）

＜中近世城館＞
豊前 51 柿下城
豊前 80 大善寺城
豊前 82 城坪城
豊前 90 蛇面城
豊前 92 明神山城
豊前 94 玄己山城
豊前 95 城越城
豊前 96 建徳寺城
豊前 97 丸岡城
豊前 98 若木城
豊前 99 白土城
豊前 100 福田城
豊前 101 東白土城
豊前 124 秋野城
＜城館等伝承地＞
豊前 D４為朝屋敷

（所在不明）
＜中近世城館＞
豊前 79 上伊田城
豊前 81 嶽ヶ城
豊前 83 田原城
豊前 84 椎木谷城
豊前 91 古寺城
豊前 93 差儀城
豊前 123 小内田城
豊前 125 下赤城
豊前 126
世上ヶ岳城

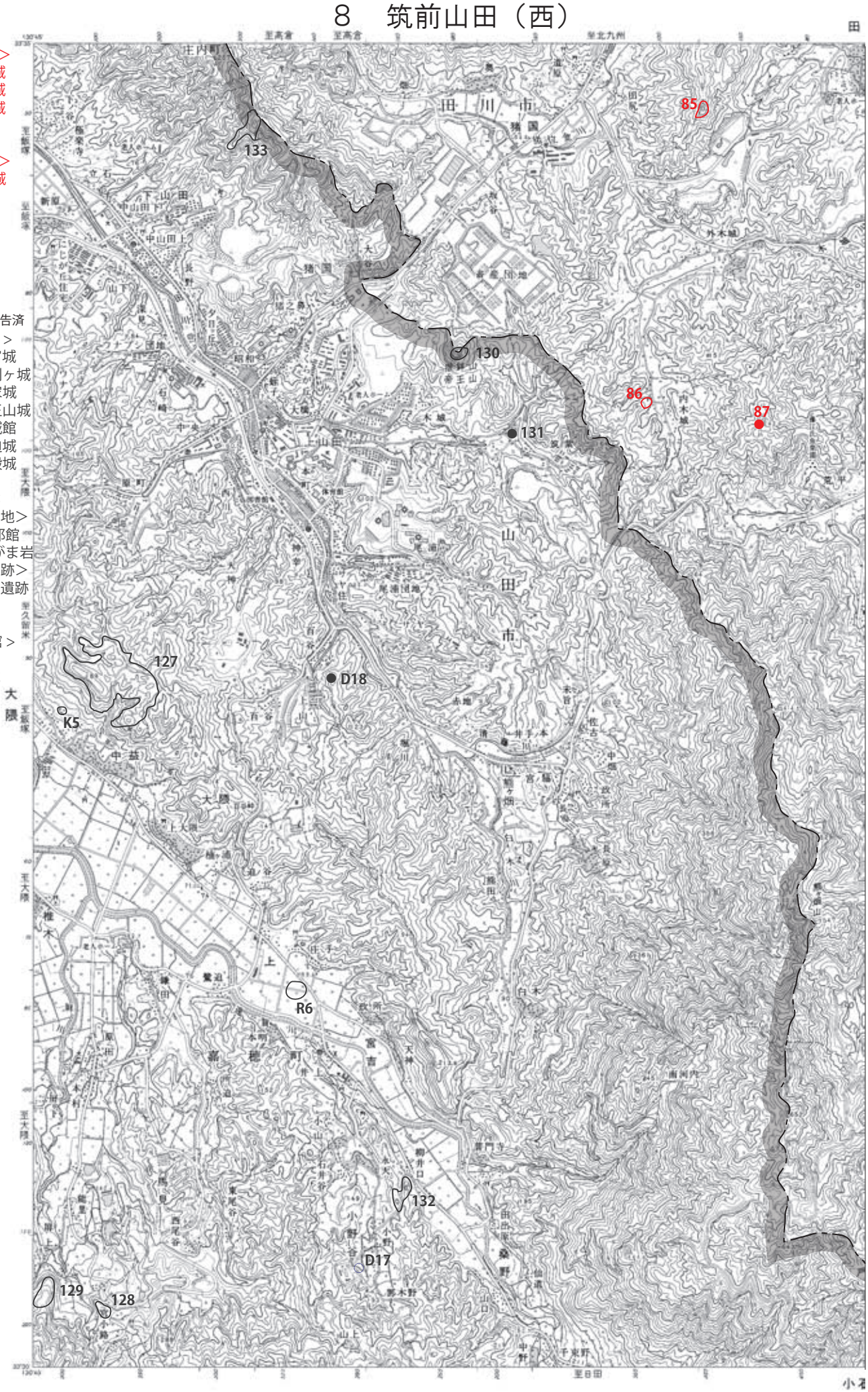
8　筑前山田（西）

＜中近世城館＞
豊前 85 城山城
豊前 86 木城城
豊前 87 荒平城

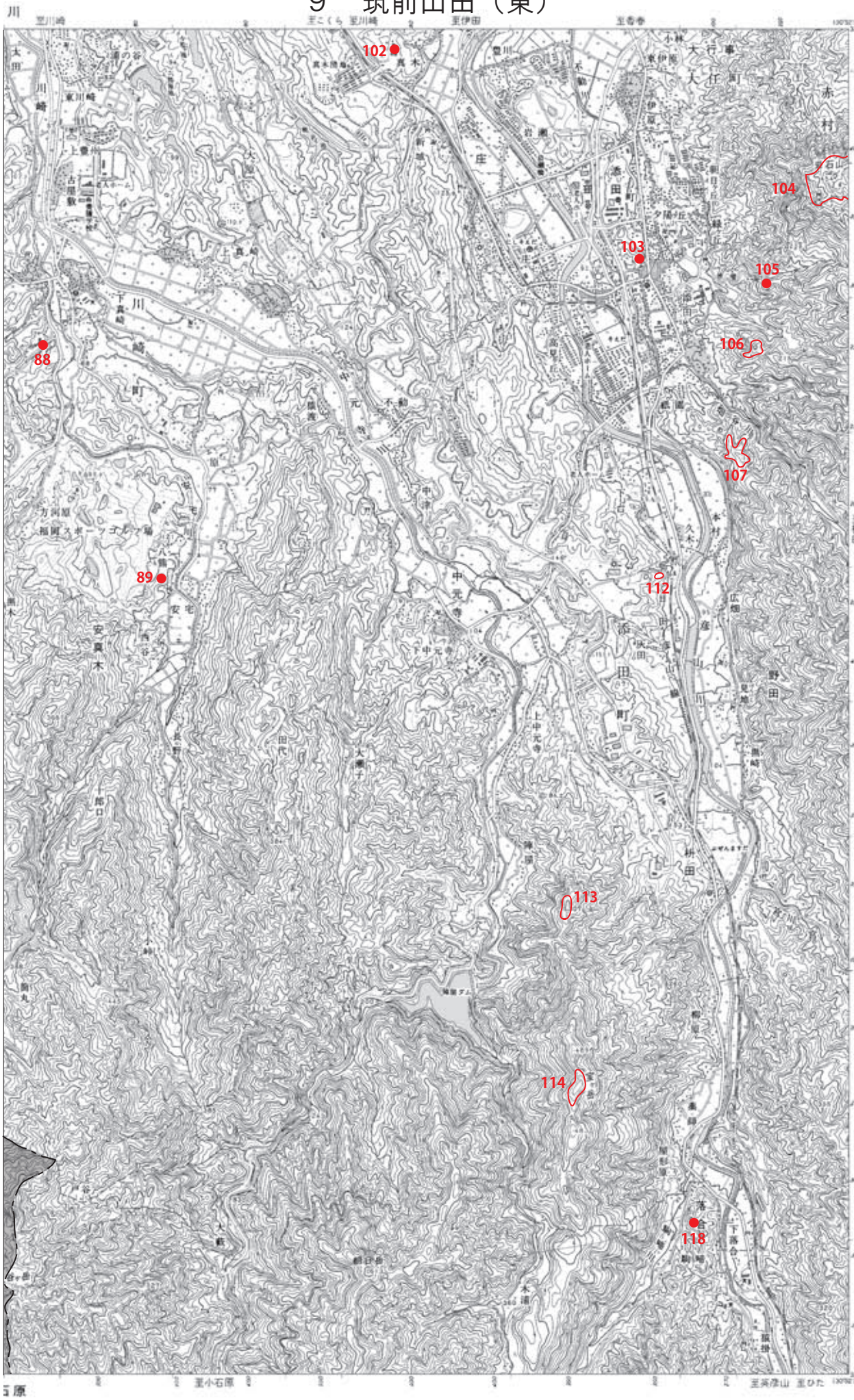
（所在不明）
＜中近世城館＞
豊前 K5 勝山城

報告書 1 にて報告済
＜中近世城館＞
筑前 127 益富城
筑前 128 毛利ヶ城
筑前 129 平家城
筑前 130 大王山城
筑前 131 木城館
筑前 132 塘迫城
筑前 133 岸殿城
筑前 K 5
　城主屋敷跡
＜城館等伝承地＞
筑前 D 17 八郎館
筑前 D 18 茶がま岩
＜城館関連遺跡＞
筑前 R 6 勘高遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
筑前 134
　遠見ヶ尾城



9　筑前山田（東）



＜中近世城館＞
豊前 88 龍円城
豊前 89 安宅城
豊前 102 真木城
豊前 103
　大豆塚山城
豊前 104 岩石城
豊前 105
　不動滝の砦
豊前 106 城山砦
豊前 107 城平城
豊前 112 城山城
豊前 113 左衛門城
豊前 114 宝ヶ岳城
豊前 118 屋形原城

（所在不明）
＜中近世城館＞
豊前 109 平岡城
豊前 110 柿城
豊前 111 三マ尾城
豊前 115
　ナウカ嶽城
豊前 116 矢ノ浦城
豊前 117 下落合城
豊前 119 城ノ尾城
豊前 120 上落合城

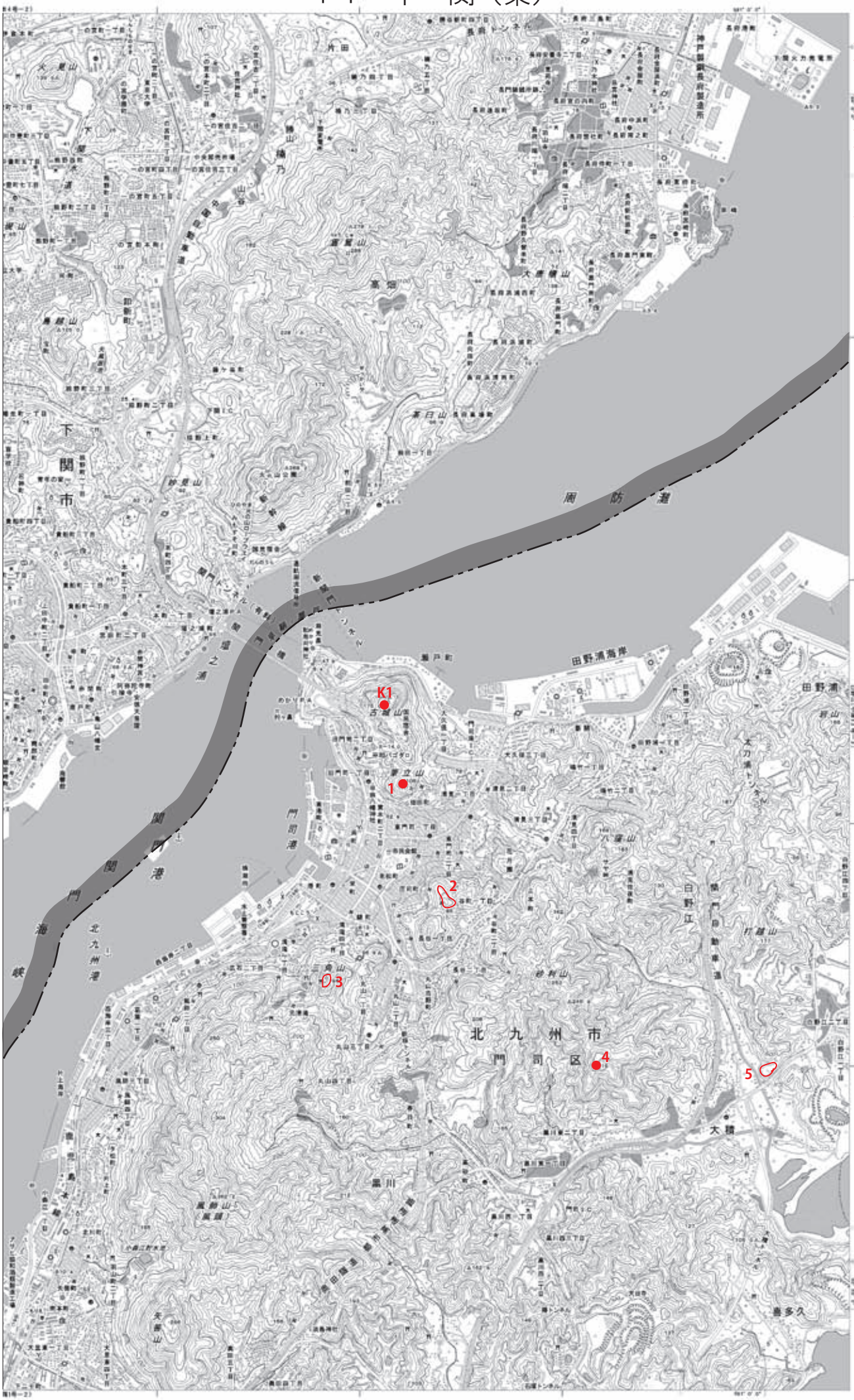
＜城館等伝承地＞
豊前 D5 迫屋敷城

１０　小石原（東）

（所在不明）
＜中近世城館＞
豊前 115
　　ナウカ嶽城
豊前 116 矢ノ浦城
豊前 120 上落合城

報告書１にて報告済
＜中近世城館＞
筑前 74 高鼻城
筑前 75 松尾城
筑前 76 二股岳城

１１　下　関（東）



＜中近世城館＞
豊前 1 筆立山城
豊前 2
　　東明寺山城
豊前 3 三角城
豊前 4 山城
豊前 5 丸山城
豊前 K1 門司城

（所在不明）
豊前 6 辻畑城

１２　小　倉（西）

＜中近世城館＞
豊前 14 若王子城
豊前 15 足立山城
豊前 38 下長野城
豊前 K2 小倉城
＜城館関連遺跡＞
豊前 R1
　上清水遺跡

（所在不明）
＜城館等伝承地＞
豊前 D1
　吉川元春陣所
豊前 D2
　大内盛見陣

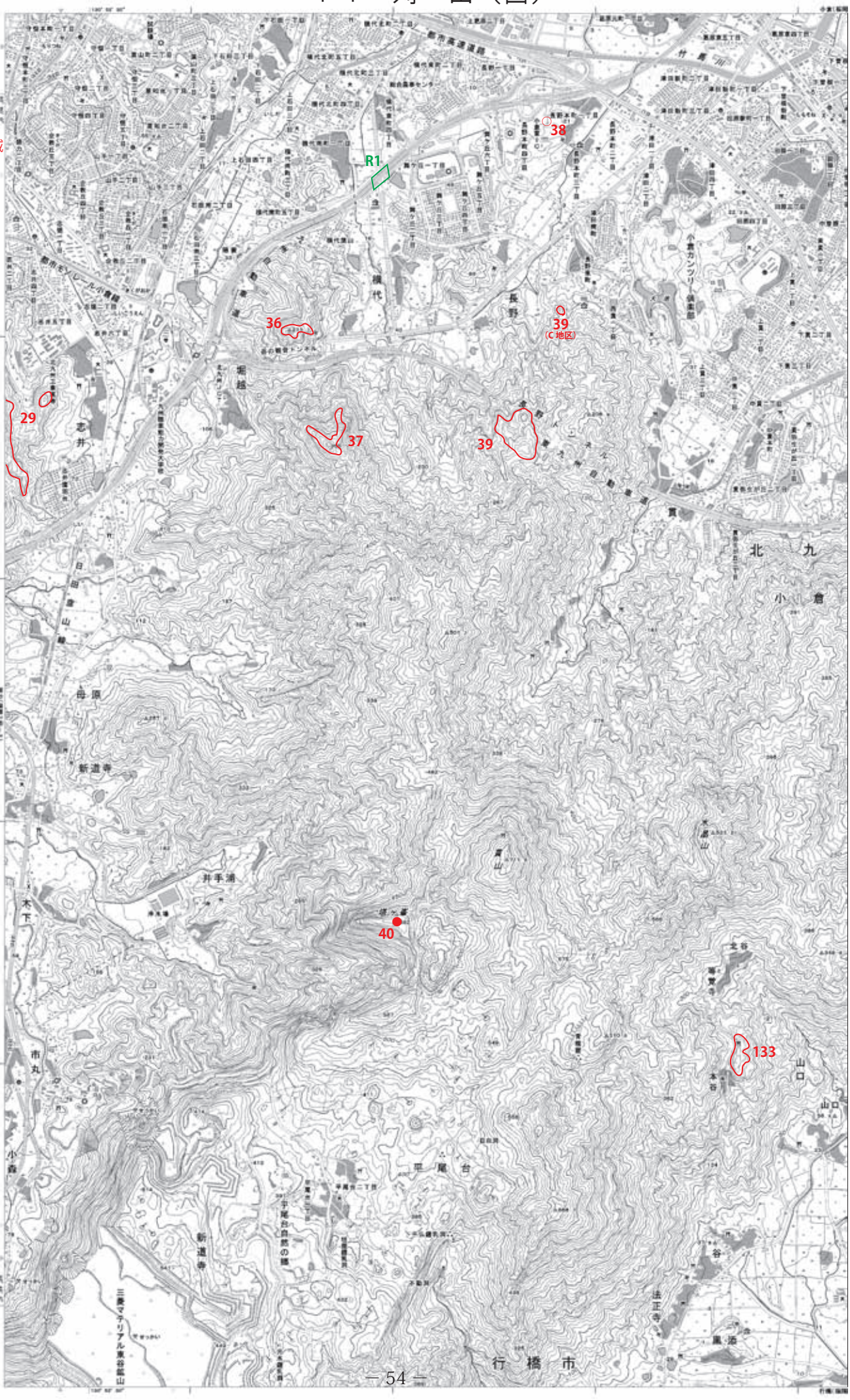
１３　小　倉（東）

＜中近世城館＞
豊前 7 伊川城
豊前 8 猿喰城
豊前 9 柳城
豊前 10 畑城
豊前 11 吉志城
豊前 12 恒見山城

（所在不明）
豊前 13 猪ノ浦城

１４　苅　田（西）

<中近世城館>
豊前 29 椎山城
豊前 36 丸ヶ口城
豊前 37 堀越城
豊前 38 下長野城
豊前 39 長野城
豊前 40 塔ヶ峯城
豊前 133 等覚寺城
<城館関連遺跡>
豊前 R1
　上清水遺跡



― 54 ―

１５　苅　田（東）

＜中近世城館＞
豊前 41 貫城
豊前 42 朽網城
豊前 129 松山城
豊前 130 南原城
豊前 131 高城
豊前 132 大平山城

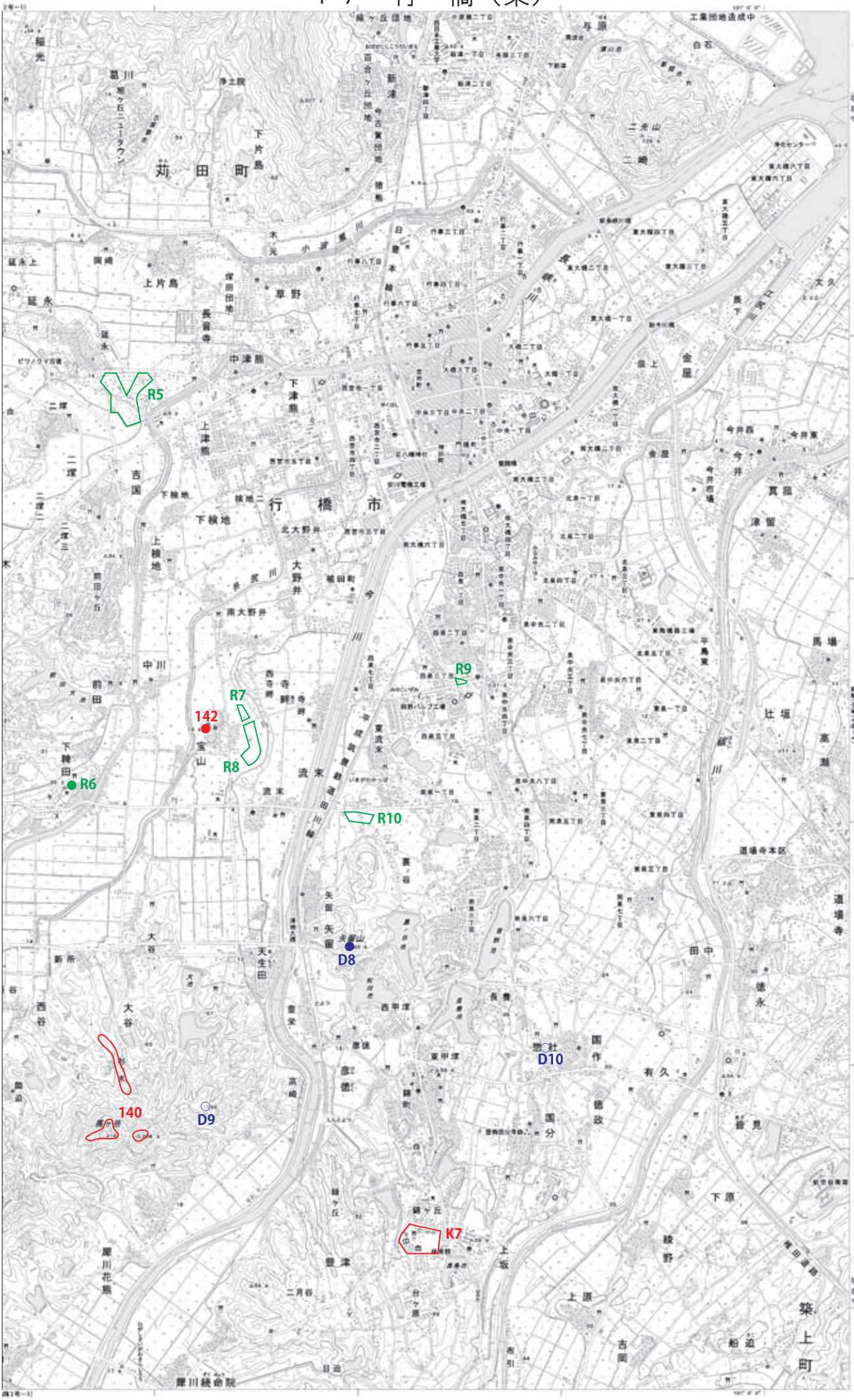
（所在不明）
豊前 43 狸葉山城
豊前 K6 生山城

１６　行　橋（西）

＜中近世城館＞
豊前 134
　障子ヶ岳城
豊前 135 尾倉山城
豊前 136 勝山城
豊前 137 十鞍山城
豊前 138 塔ヶ峰城
豊前 139 高来城
豊前 147 大坂山城
＜城館関連遺跡＞
豊前 R4
　大原八幡神社

（所在不明）
＜城館等伝承地＞
豊前Ｄ７新田氏館

１７　行　橋（東）



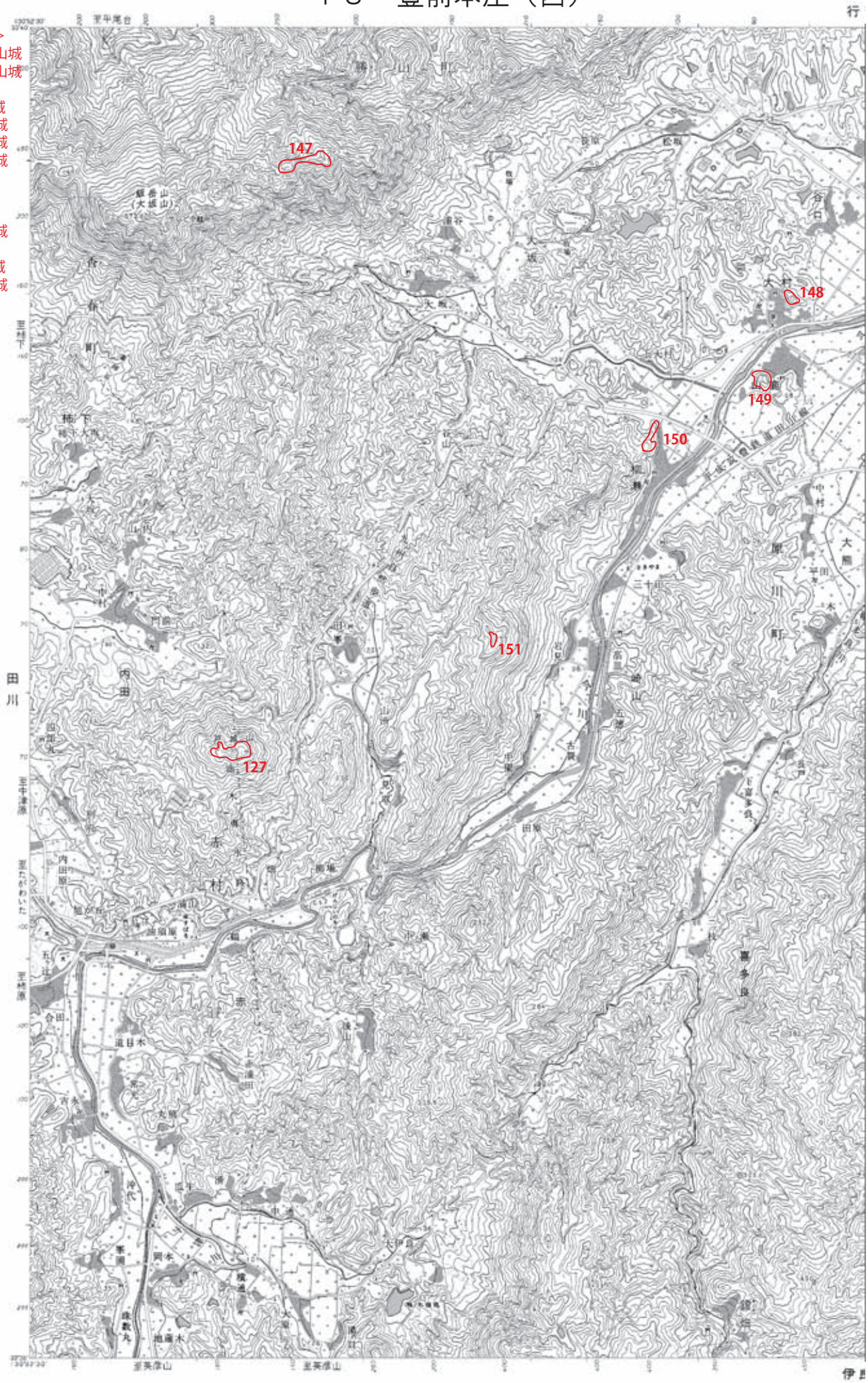
＜中近世城館＞
豊前 140 馬ヶ岳城
豊前 142 宝山城
豊前 K7 豊津藩庁
＜城館等伝承地＞
豊前 D8 大将陣
豊前 D9 佐伯陣
豊前 D10 辻野屋敷
＜城館関連遺跡＞
豊前 R5
　延永ヤヨミ園
　遺跡
豊前 R6
　下稗田森遺跡
豊前 R7
　宝山小出遺跡
豊前 R8
　宝山桑ノ木遺跡
豊前 R9
　福富小畑遺跡
豊前 R10
　矢留堂ノ前遺跡

（所在不明）
豊前 141 草野城

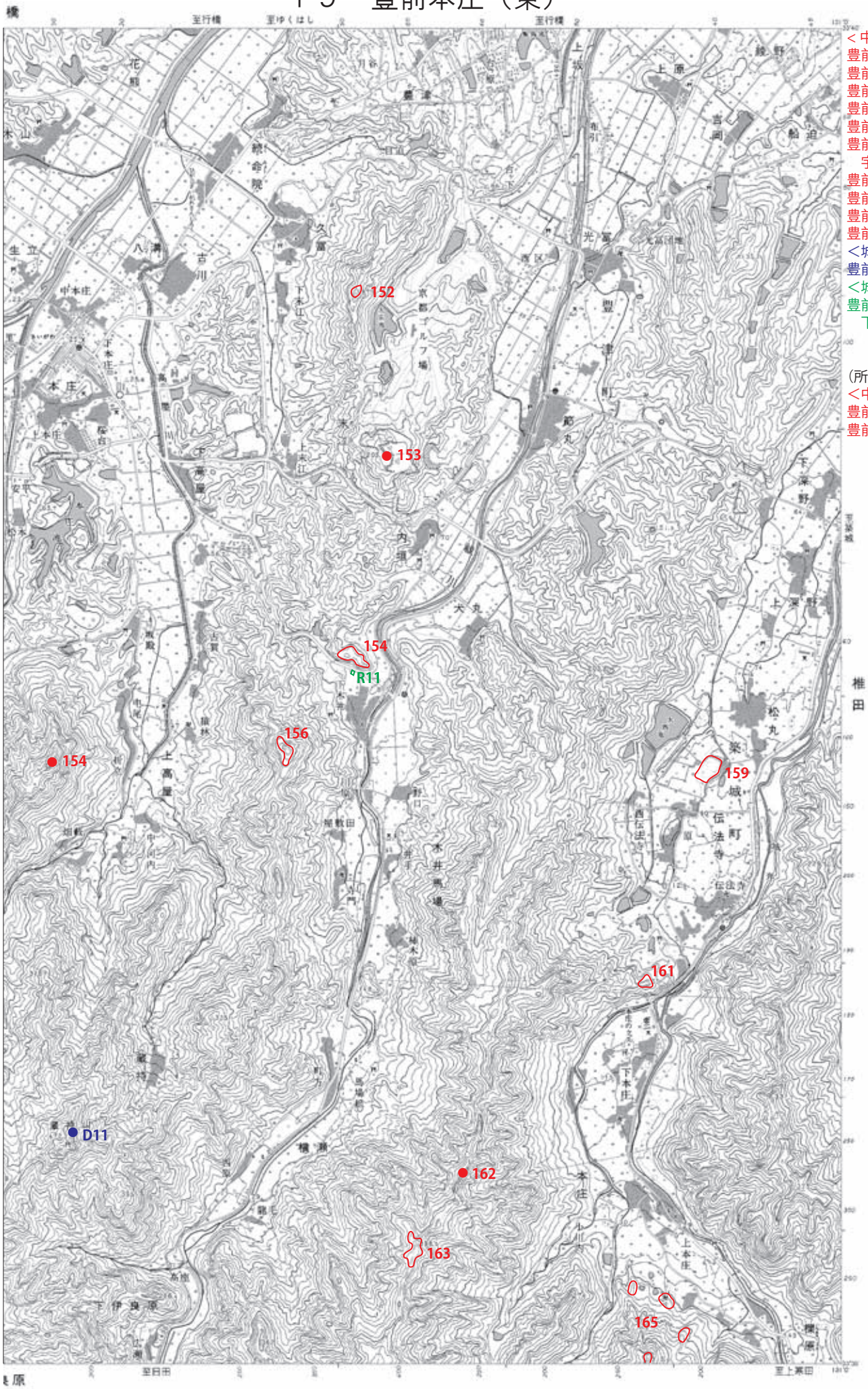
１８　豊前本庄（西）

＜中近世城館＞
豊前 127 戸城山城
豊前 147 大坂山城
豊前 148
　　不動ヶ岳城
豊前 149 山鹿城
豊前 150 茶臼城
豊前 151 燕岩城

（所在不明）
豊前 125 下赤城
豊前 126
　　世上ヶ岳城
豊前 128 山浦城



１９　豊前本庄（東）



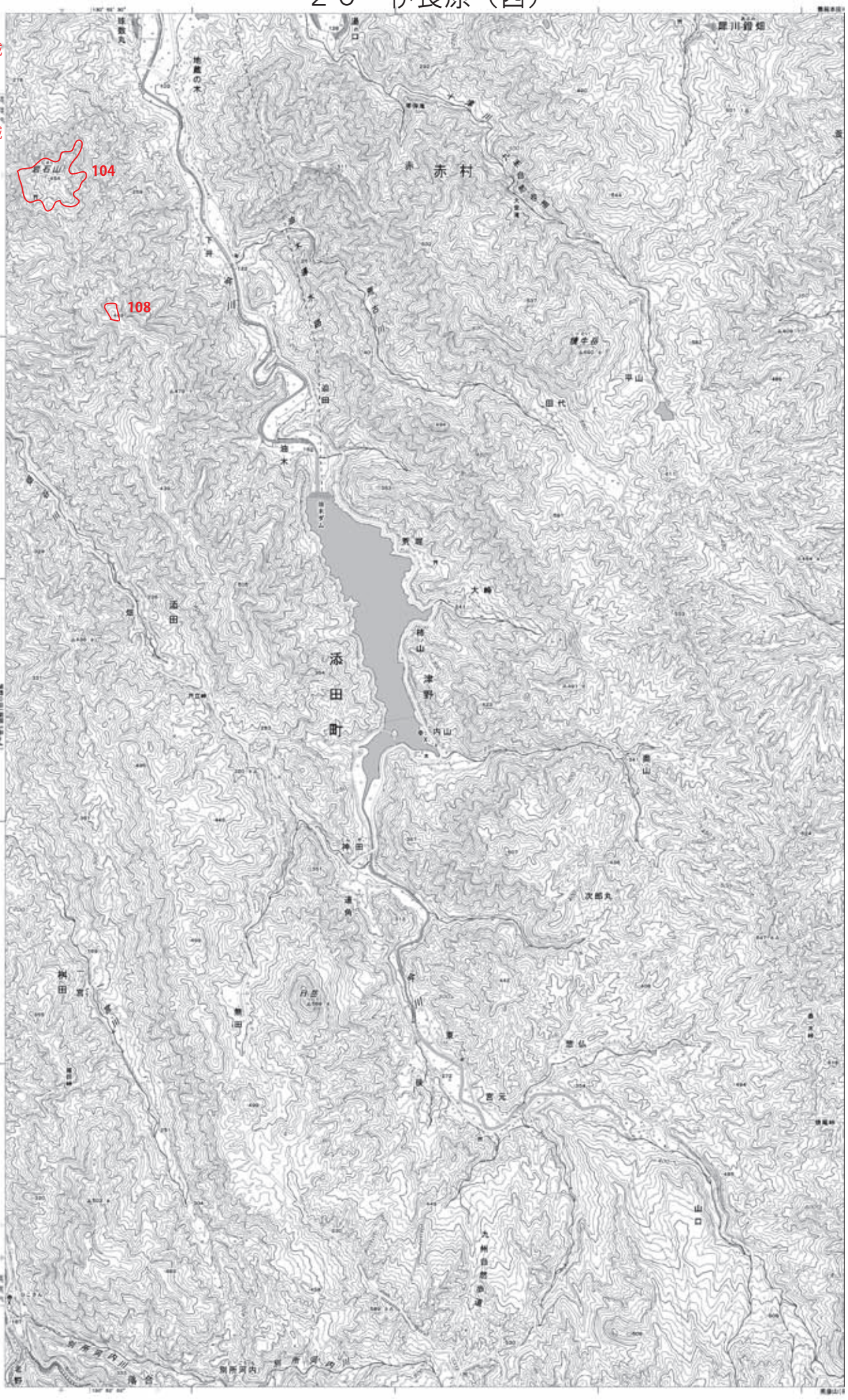
＜中近世城館＞
豊前 152 黒岩城
豊前 153 渋見城
豊前 154 戸垣城
豊前 155 毘沙門城
豊前 156 神楽山城
豊前 159
　宇都宮氏城館
豊前 161 堂山城
豊前 162 茅切山城
豊前 163 小川内城
豊前 165 若山城
＜城館等伝承地＞
豊前 D11 国見台
＜城館関連遺跡＞
豊前 R11
　下木井遺跡

（所在不明）
＜中近世城館＞
豊前 160 伝法寺城
豊前 164 勝山城

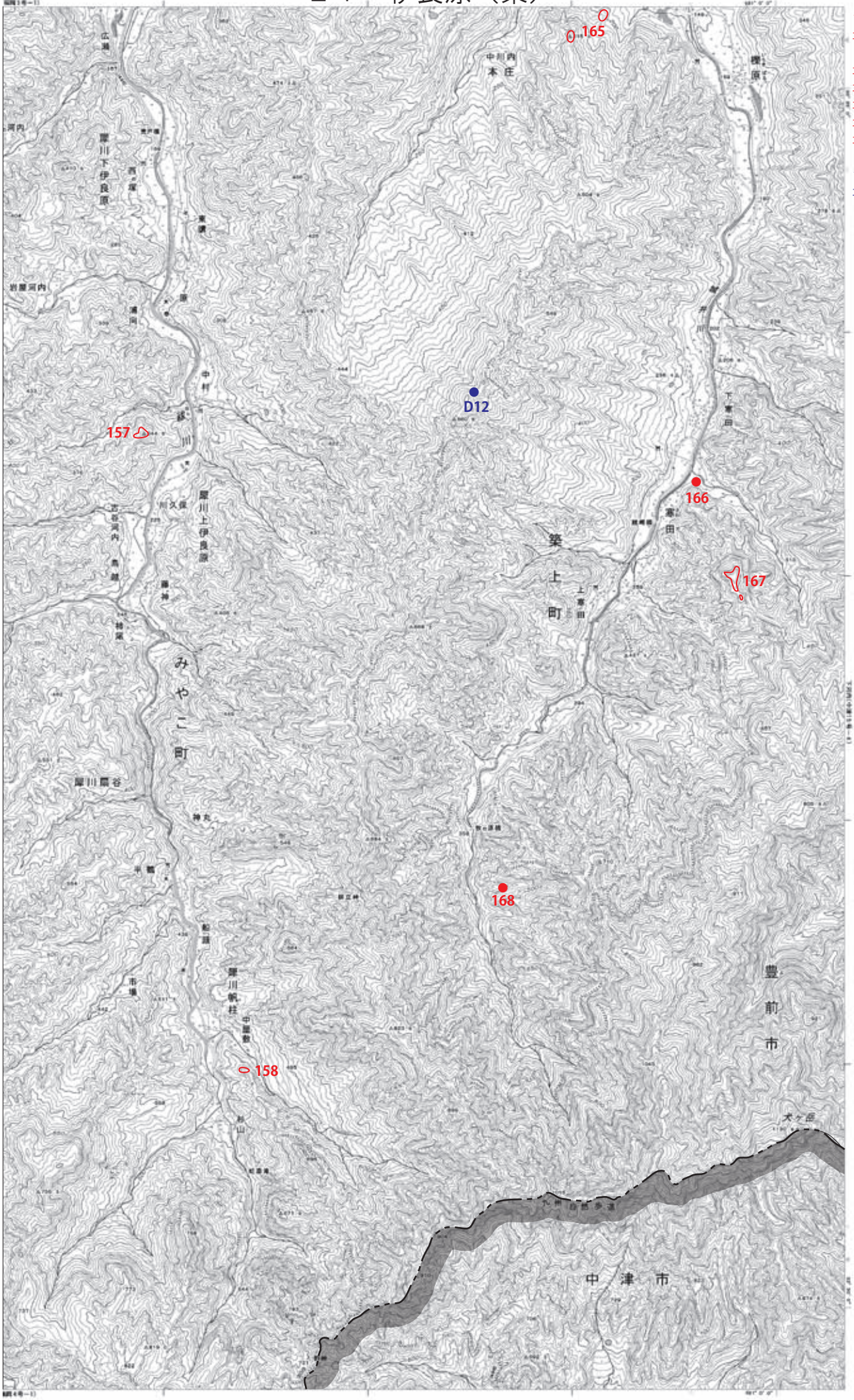
２０　伊良原（西）

＜中近世城館＞
豊前 104 岩石城
豊前 108 弓張岳城

（所在不明）
豊前 109 平岡城
豊前 110 柿城
豊前 111 三ヶ尾城
豊前 121 黒岩城



２１　伊良原（東）



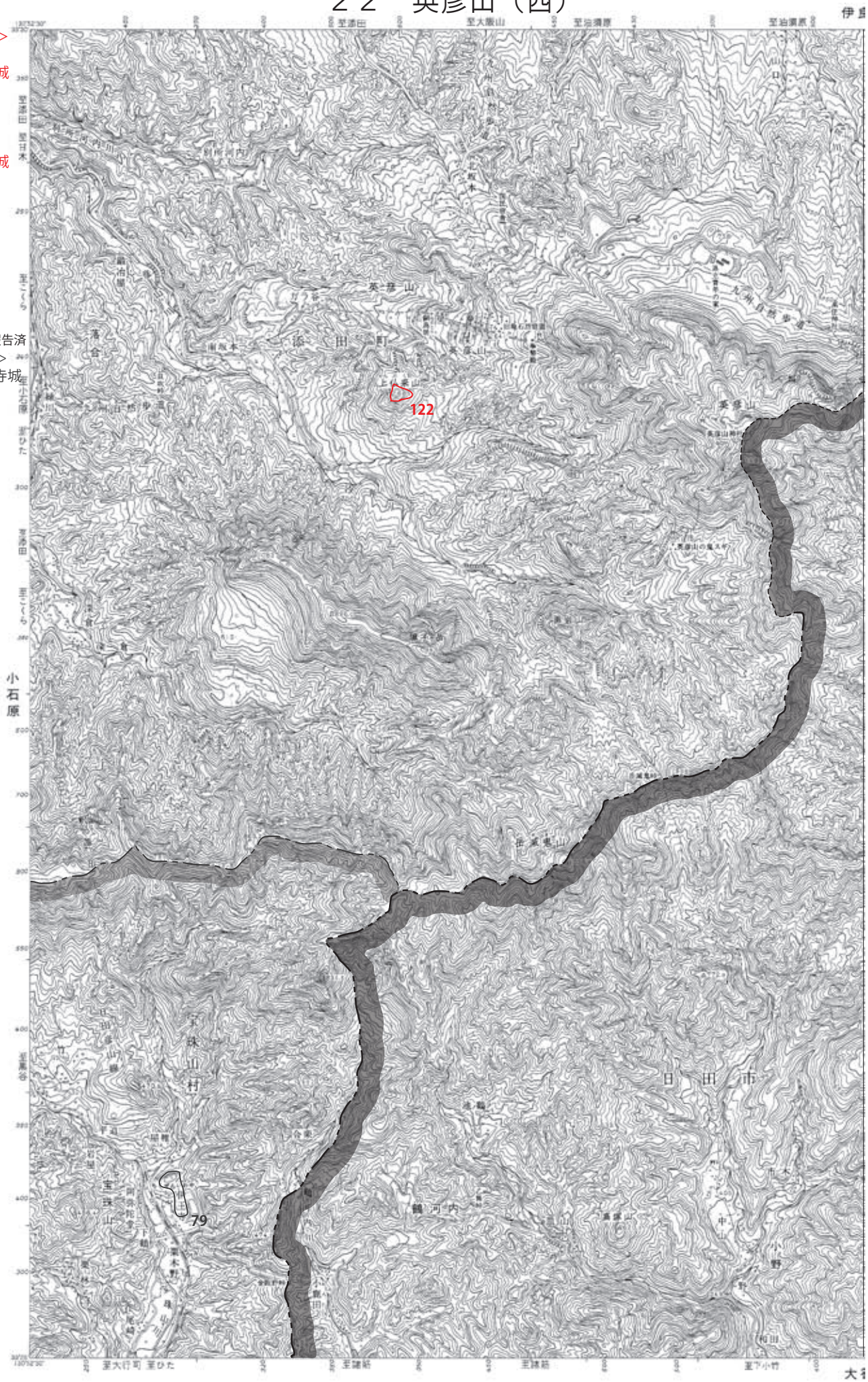
＜中近世城館＞
豊前 157
　上伊良原城
豊前 158 城山城
豊前 165 若山城
豊前 166 溝口館
豊前 167 大平城
豊前 168
　城井ノ上城
＜城館等伝承地＞
豊前 D12
　猿尾の陣

２２　英彦山（西）

＜中近世城館＞
豊前 122
上仏来山城

（所在不明）
豊前 120
上落合城

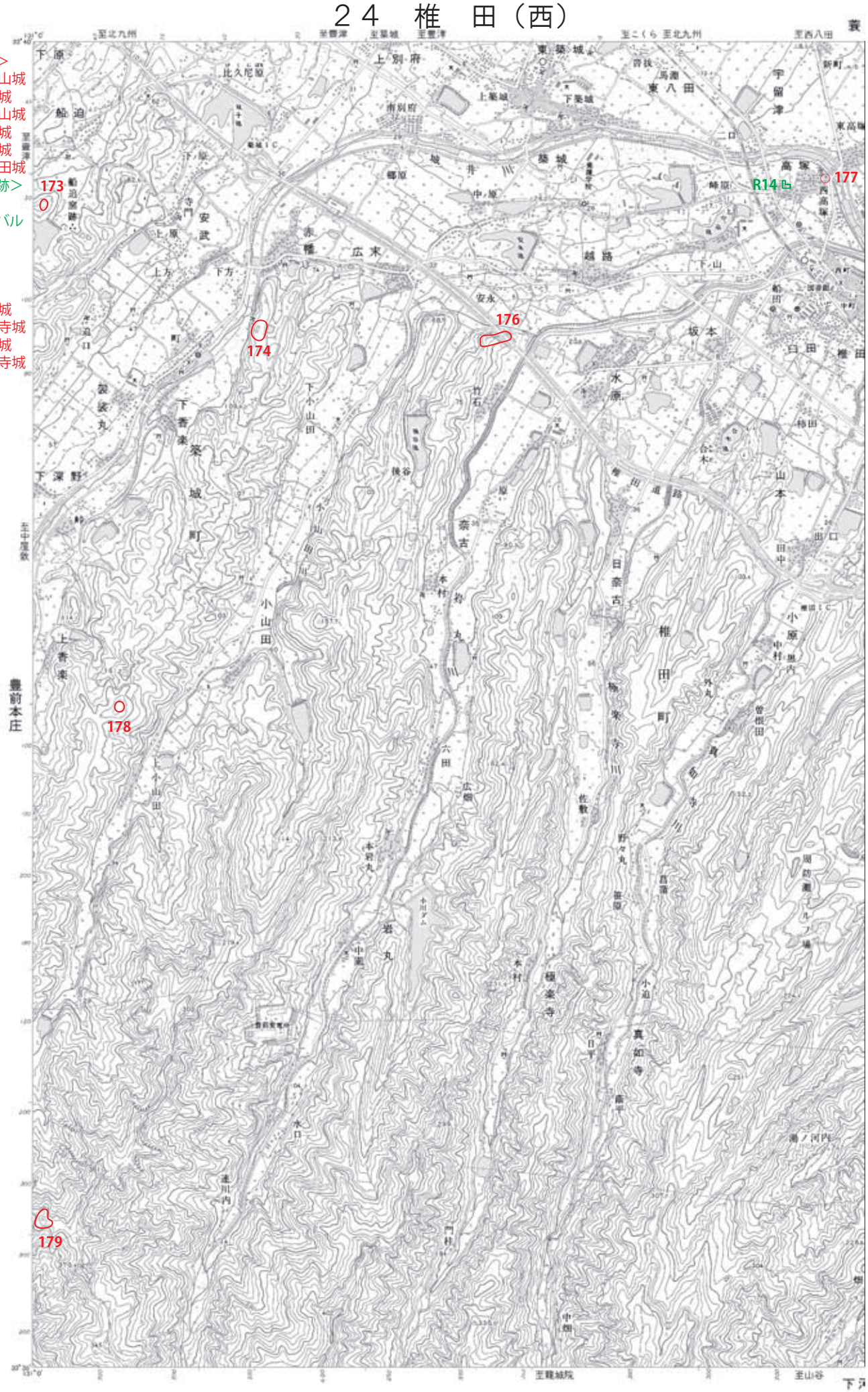
報告書１にて報告済
＜中近世城館＞
筑前 79 伊王寺城



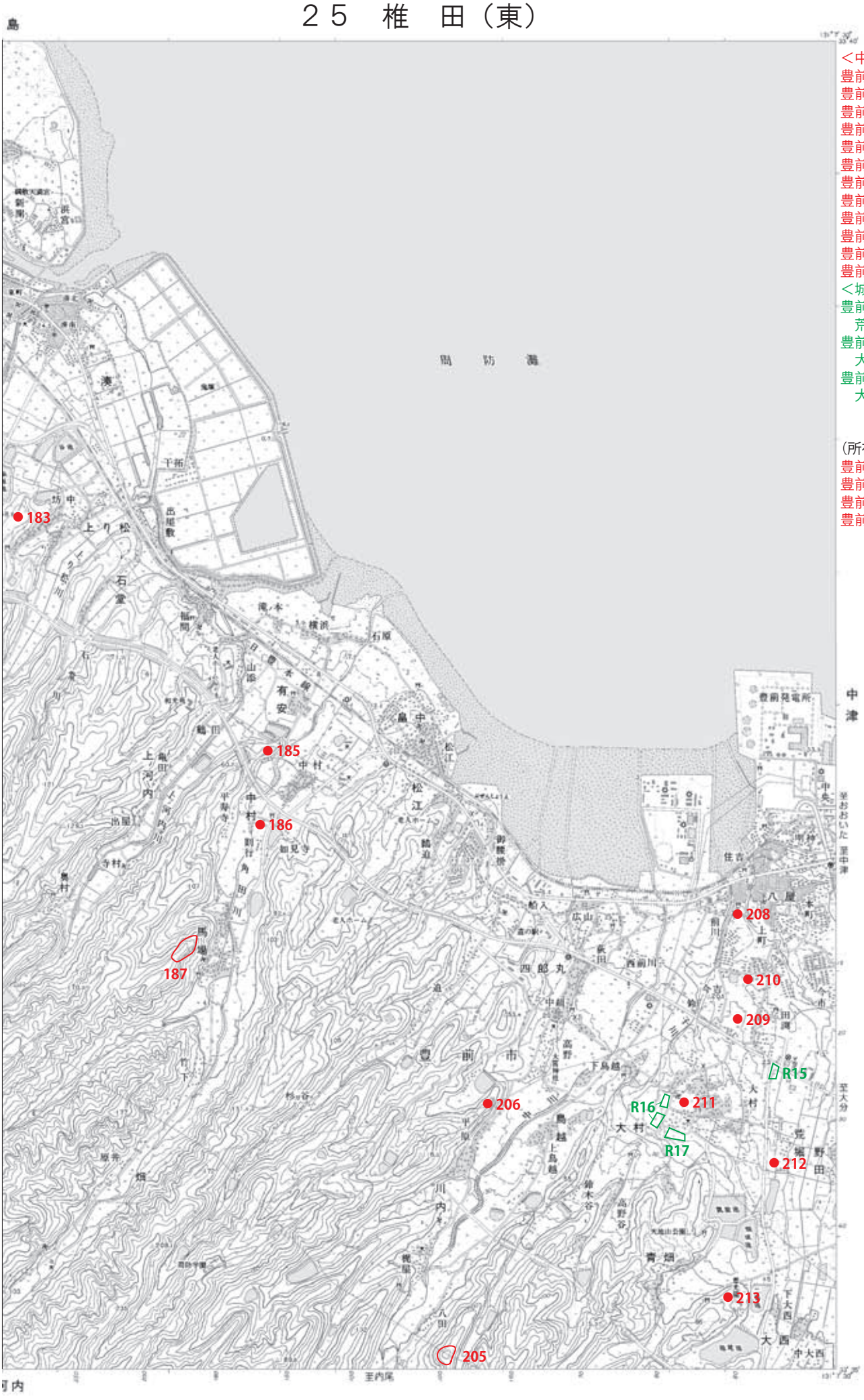
２３　蓑　島（西）

＜中近世城館＞
豊前 143 蓑島城
豊前 144 沓尾城
豊前 145 元永城
豊前 146 覗山城
豊前 169 別府城
豊前 170 築城城
豊前 171 野中城
豊前 172 宇留津城
＜城館等伝承地＞
豊前 D13 法然寺
＜城館関連遺跡＞
豊前 R12
　築城城跡遺跡
豊前 R13
　西八田・堂ノ本
　遺跡

２４　椎　田（西）


＜中近世城館＞
豊前 173 茶臼山城
豊前 174 赤幡城
豊前 176 広幡山城
豊前 177 高塚城
豊前 178 釜倉城
豊前 179 小山田城
＜城館関連遺跡＞
豊前 R14
西高塚ナカバル
遺跡
（所在不明）
豊前 175 元山城
豊前 180 極楽寺城
豊前 181 岩丸城
豊前 182 真如寺城
173
174
176
177
178
179
R14
豊前本庄
椎田町
至北九州
至豊津
至築城
至こくら
至西八田
至中津
至宇佐
至山谷

２５　椎　田（東）



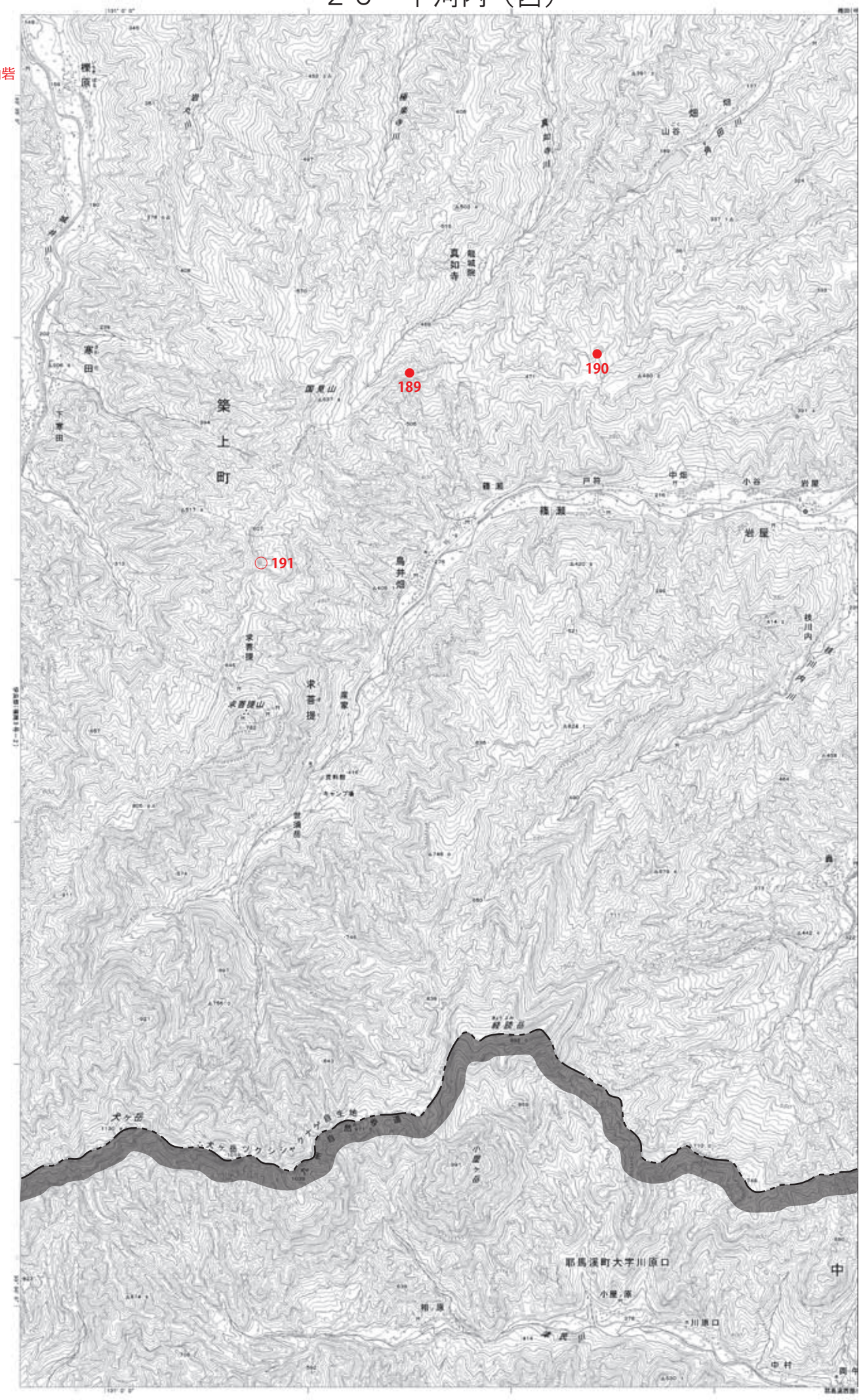
＜中近世城館＞
豊前 183 湊城
豊前 185 鳥越山城
豊前 186 角田城
豊前 187 馬場城
豊前 205 八田城
豊前 206 平原城
豊前 208 八屋城
豊前 209 安祥寺城
豊前 210 筆垣城
豊前 211 大村城
豊前 212 荒堀城
豊前 213 青畑城
＜城館関連遺跡＞
豊前 R15
　荒堀車地遺跡
豊前 R16
　大村天神林遺跡
豊前 R17
　大村石畑遺跡

（所在不明）
豊前 184 有安城
豊前 187 角田城
豊前 188 寒城
豊前 207 山田城

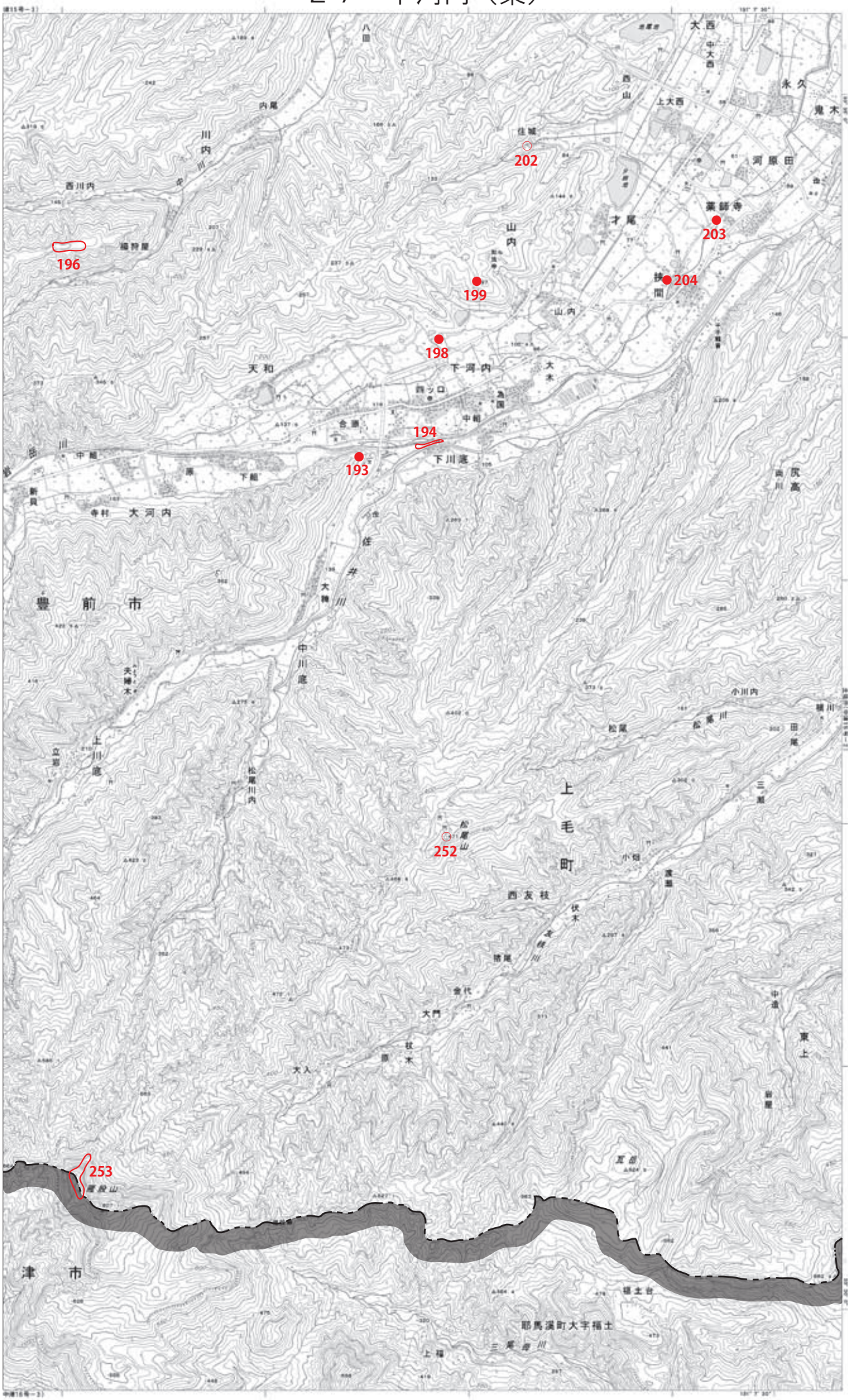
２６　下河内（西）

＜中近世城館＞
豊前 189 畑城
豊前 190 日瀬城
豊前 191 求菩提山砦

（所在不明）
豊前 192 岩屋城



２７　下河内（東）

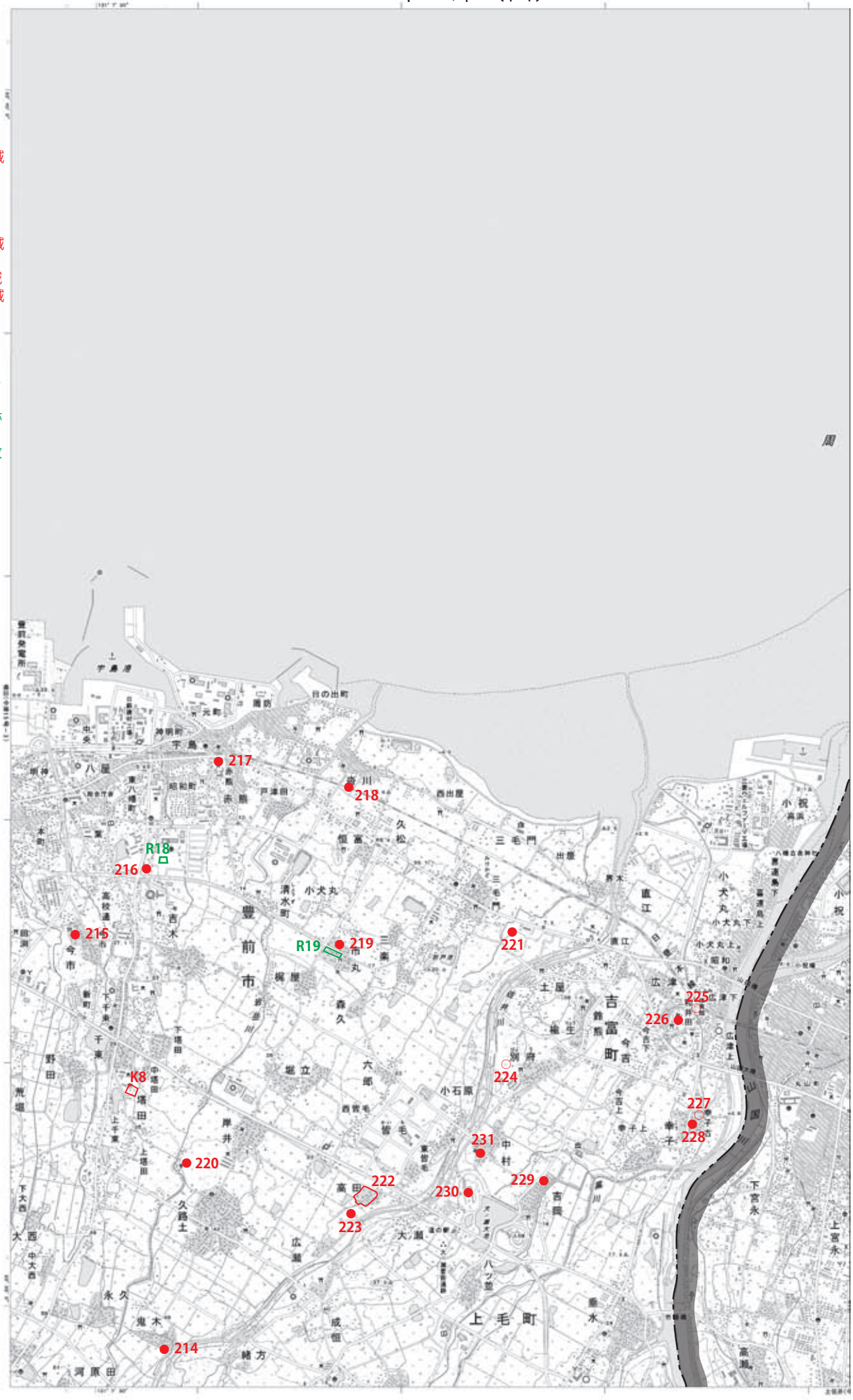


＜中近世城館＞
豊前 193 岡城
豊前 194 下川底城
豊前 196 櫛狩屋城
豊前 198 下川内城
豊前 199 如法寺城
豊前 202 墨城
豊前 204 挟間城
豊前 252 松尾山城
豊前 253 雁股城

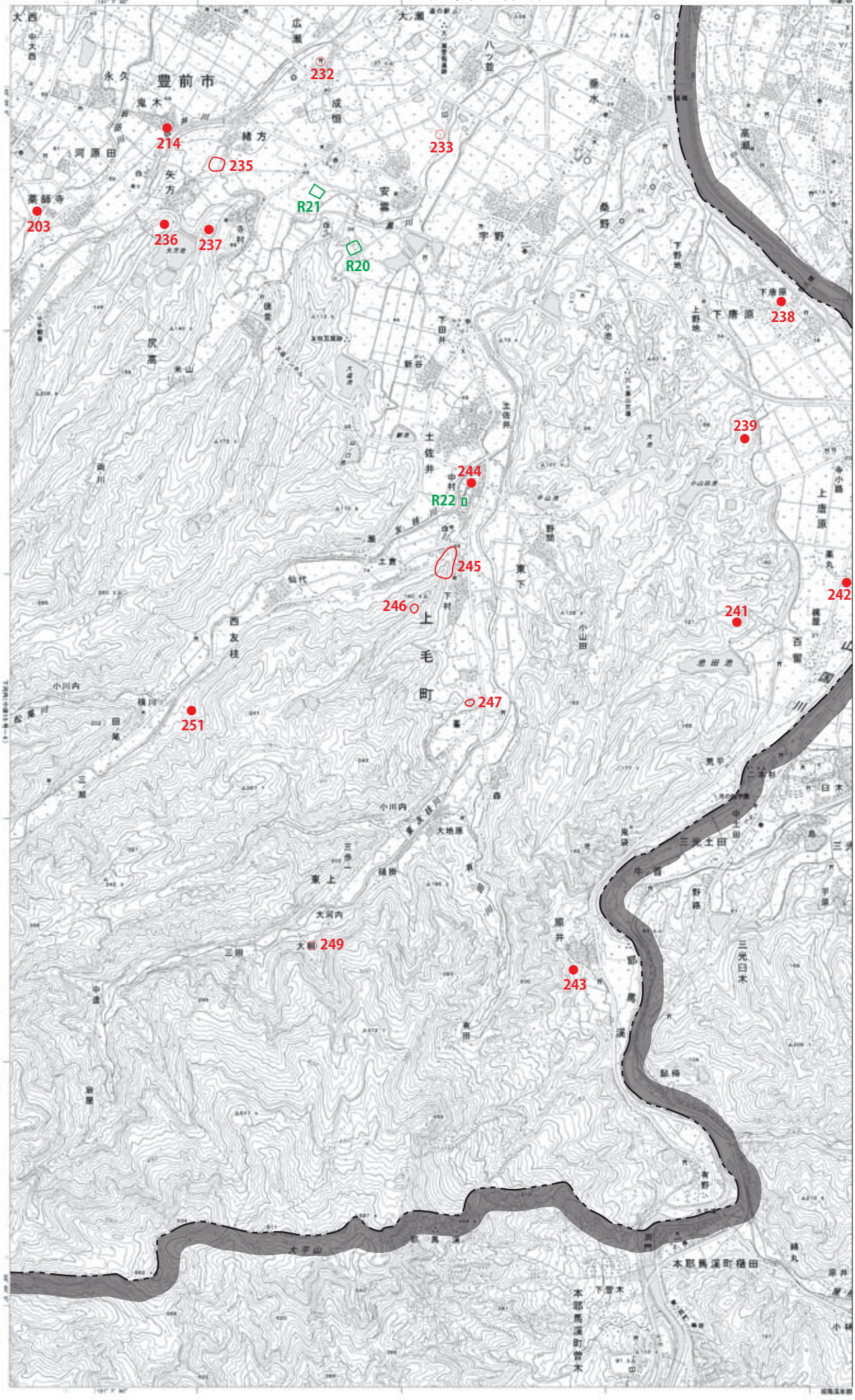
（所在不明）
豊前 195 小畑城
豊前 197 天和城
豊前 200 山内城
豊前 201 引地城

２８　中　津（西）

<中近世城館>
豊前 214 鬼木城
豊前 215 今市城
豊前 216 吉木城
豊前 217 赤熊城
豊前 218 沓川城
豊前 219 市丸城
豊前 220 黒土城
豊前 221 三毛門城
豊前 222 高田城
豊前 223 広瀬城
豊前 224 別府城
豊前 225 広津城
豊前 226 天仲山城
豊前 227
　幸子矢頭田城
豊前 228 西光寺城
豊前 229 吉岡城
豊前 230 日熊城
豊前 231 中村城
豊前 K8 旭陣屋
<城館関連遺跡>
豊前 R18
　吉木常末遺跡
豊前 R19
　市丸城居屋敷
　遺跡



２９　土佐井（西）



＜中近世城館＞
豊前 203 薬師寺城
豊前 214 鬼木城
豊前 232 成恒城
豊前 233 安雲城
豊前 235 緒方城
豊前 236 牛王城
豊前 237 尻高城
豊前 238 下唐原城
豊前 239 壇の城
豊前 241 代金城
豊前 242 百富城
豊前 243 原井城
豊前 244 林崎城
豊前 245 追揚城
豊前 246 叶松城
豊前 247
　内蔵寺山城
豊前 249 大切城
豊前 251
　光明寺山城
＜城館関連遺跡＞
豊前 R20
　安雲山田遺跡
豊前 R21
　下尻高遺跡・
　ハカノ本遺跡
豊前 R22 今蔵遺跡

（所在不明）
豊前 234 鶴林城
豊前 240 榎木城
豊前 248 東上城
豊前 250 大原城

Ⅴ　個別城館報告

＜凡例＞

1　本章では、対象地域に分布する個別城館遺跡等の記載を行っている。

2　城館跡は、遺跡の分類単位で、なおかつ旧郡単位で収録しており、市町村単位ではない。

3　個別城館のタイトルに示した内容は、Ⅳの一覧に準じている。

4　文中にある文献番号は、参考文献一覧（36～39ページ）と対応している。また、基本参考文献等の略号は以下のとおりである。

- 「古城記」…『豊前国古城記（豊前古城記・豊前国志）』（三木市左衛門政光著カ・1857 年）
- 「豊前志」…『豊前志』（渡辺重春著・渡辺重兄校訂・1898 年）
- 「取調簿」…『企救郡古城址取調簿』（企救郡役所・明治時代前期）
- 「種々」…『研究旅行用　面白い種々な見方の福岡縣史、史蹟名勝口碑傳説所在地』（和田宗八・1936 年）
- 「遺跡」…『地名から探る豊前国遺跡』（定村貴二・1976 年）
- 「教委」…『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XXIX 付録　福岡県中世山城跡（福岡県教育委員会（副島邦弘・近沢康治編）・1979 年）
- 「大系」…『日本城郭大系』第 18 巻福岡・熊本・鹿児島（新人物往来社（磯村幸男編・1979 年）
- 「廣崎」…『福岡県の城』（廣崎篤夫・1995 年）/『福岡県古城探訪』（廣崎篤夫・1997 年）
- 「城郭」…『福岡県の城郭』（福岡県の城刊行会・2009 年）

5　個別報告文章の項目および内容は以下のとおりである。

【沿革】…城館の位置、および伝承等の来歴を記す。

【概要】…城館の現地の状況及び構造等を記す。

【史料】…文書調査における「一次史料」・「参考史料」の記載の有無を示す。

【文献】…参考文献一覧に示した文献の有無を示すもので、文献番号を付した。番号がゴチック体となっているものについては、記載文献に縄張り図・測量図等の調査データが掲載されているものを示す。

6　掲載した縄張り図の内、事務局作成分については、作成方法・表記方法等については、『発掘調査のてびき　各種遺跡編』（2014年・文化庁編）に準じている。また、遺構名称も上記文献に準じているが、曲輪への出入口を指す用語については「虎口」を用いた。

1　中世城館　　①企救郡

豊前２	東明寺山城（とうみょうじやまじょう）	郡名　企救郡	別称　東明寺城	図幅名　下関（東）
		種別　山城	所在　北九州市門司区東門司２丁目	

【沿革】企救半島の山稜の一角、砂利山（標高 253m）の北西麓、門司港に面した東明寺山（標高 112m）山頂を中心に位置する。

『豊前志』には、大内氏が築城し、門司城主の仁保常陸介を置いたとし、さらにその後に常陸介の養子、仁保帯刀は毛利壱岐守を討とうとするが、悟られて逆に討ち取られるとある。『取調簿』には、「東西七間、南北九間許ノ平地ナリ」とある。また、『豊前国志』（国立公文書館蔵）には「同（掻上）一ヶ所　楠原村東明寺」とある。

【概要】現在、城のある東明寺山一帯は、竜門町林間公園となっており、公園の園路整備などにより、かなりの改変が認められる。また、山の南側斜面一帯にも、後世の耕作に伴う段造成が少なからず見受けられ、往時の状況はそのまま残されているとはいいがたい。

第３図　東明寺山城縄張り図（事務局作成）

しかしながら、山頂部を中心として、その南側の A、B、C の３箇所には、一定の広さの人為的な平坦面が階段状に展開しており、一部公園造作等も施されてはいるものの、かつての曲輪の平坦面ではないかと考えられる。堀切などの防御遺構は認められない。以上のことから、東明寺山城は、山頂部を中心に南北約 100m、東西約 50m の範囲に３～４ほどの曲輪が階段状に展開する構造を呈していたものと考えられる。

【史料】なし　　【文献】1,2,5 ～ 8,**9**,10,14,18,131,133

豊前３	三角城（みすみじょう）	郡名　企救郡	別称　三隅山城	図幅名　下関（東）
		種別　山城	所在　北九州市門司区門司	

【沿革】企救半島の一角に聳える風師山から北側へ派生し、半独立峰状に門司港に面した三角山（標高 194m）の山頂に位置する。東明寺山城からは、長谷の谷を挟んで南西側に約 1 km 地点の場所に当たる。

『古城記』には門司にある城の一つとして、「三角　応永ノ頃、大内ヨリ門司弥三郎親辰ニ預ケラン」とある。また、同じく『古城記』の「門司城」には永禄２年（1559）に豊後勢が攻めてきた際

第４図　三角城遠景

第５図　三角城縄張り図（事務局作成）

には、三隅山に掻上（砦）を築き、合戦の上、豊後勢を打ち負かしたとある。『取調簿』には「三隅山ノ頂ニアリ。東西十六間、南北十六間許。円形平地ニシテ、僅ニ城臺ノ形ヲ存スルノミ」とあり、現状の地形とほぼ変わらない様子を記載している。

【概要】三角山山頂には、現在、毘沙門天の社殿が建ち、その周囲には、テレビ局の中継放送アンテナが２箇所建っている。北側のアンテナ建設の際には、発掘調査が行われ、寛永通宝の他、14 世紀後半～ 15 世紀中ごろの龍泉窯系青磁碗や土師器坏の破片が出土しており、青磁などは城に伴うものと考えられている。

このように三角城の主要部分は、後世の改変がかなり入っていることが想定されるが、現況を見てみると、山頂部を中心に南北約 30m、東西約 20m の曲輪があり、周りに帯曲輪が巡る。さらに南側に数段の曲輪と北側に曲輪が一つ見られる程度である。南側の曲輪には、石垣が確認されるが、これは毘沙門天とそれに付随する石祠などに伴うもので、城郭遺構ではないとみられる。

むしろ城郭遺構と考えられるのは、南側斜面の５本の竪堀群であり、いわゆる畝状空堀群の様相を呈している。発掘報告には北側斜面にも竪堀があるとしている（未確認）。

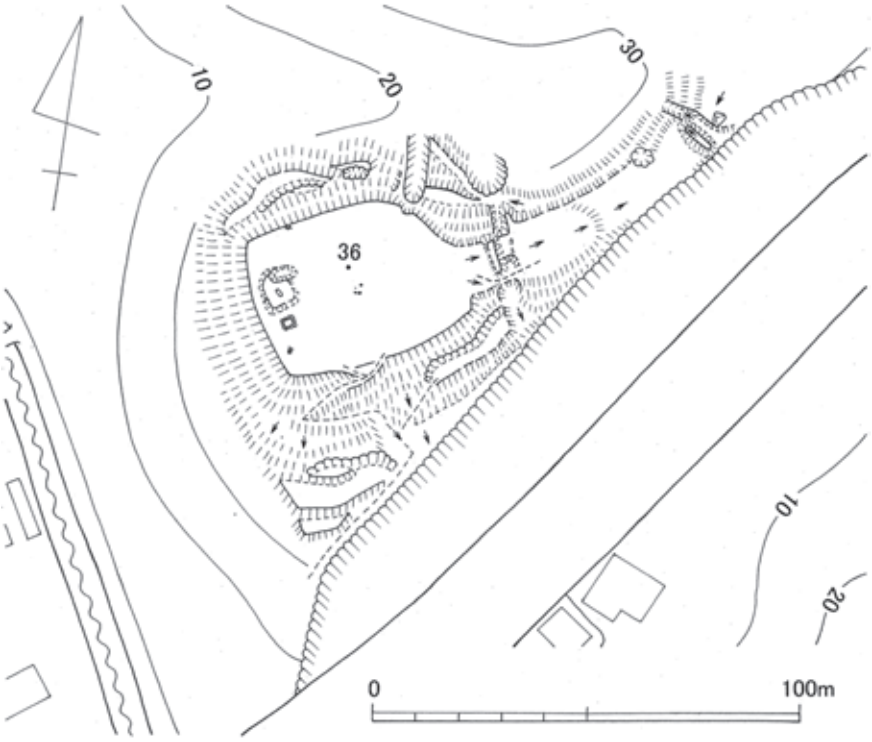
【史料】なし　【文献】1,2,4 ～ 10,14,18,**38**,131,**133**,**143**

豊前５　丸山城（まるやまじょう）	**郡名　企救郡**	**別称　なし**	**図幅名　下関（東）**
	種別　丘城	**所在　北九州市門司区大積**	

【沿革】企救半島の東側、周防灘に流れ込む大積川に面した通称丸山と呼ばれる小高い丘の上に立地する。白野江植物公園の西側に隣接する。

『豊前志』によると、仁保帯刀が在城したとあるが、『取調簿』には文明年中に大積上総介隆鎮が築いて居城としたとある。さらに「（大積）村ノ東北丸山ノ頂ニアリ。東西八十間、南北十五間許。長方形ノ平地ナリ。城墟古松ノ下ニ碑アリ。城主ノ古墳ナリト云。北三十間許ニ方リ、廃井ヲ存セリ」とされる。

【概要】標高 36m の通称丸山と呼ばれる小丘陵上の頂部には、東西約 50m、南北約 40m の方形の主郭がある。曲輪の西側には、一辺 10m にも満たない土壇がある。これは祠や小社殿などが置かれていた可能性が高く、また、曲輪の南北側にみられる小平坦面も、後世の造作によるものであり、城域全体が、神社などにより後世の改変がかなり入っているものとみられる。また、土壇の北東側に隣接して、池状の窪みも見られるが、これが『取調簿』にいう所の井戸跡かどうかはわからない。



第６図　丸山城縄張り図（事務局作成）

しかしながら、主郭の東側の尾根続きには、土塁を伴う堀切が一本あり、さらにその東側約 50m 地点にもさらに堀切一本があることから、城郭遺構は少なからず残存していることがわかる。おそらく堀切の西側に主郭を置くのみの単郭構造の小規模城館であったとみられる。

【史料】なし

【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,10, 14,18,131,**133**

第７図　丸山城遠景

豊前８　猿喰城（さるはみじょう）

郡名　企救郡　　別称　なし　　図幅名　小倉（東）
種別　山城　　所在　北九州市門司区猿喰・畑

【沿革】門司の大里から企救半島の山稜を越え、周防灘側へ抜ける鹿喰峠と七ツ石峠の間に聳える城山（標高 208m）山頂に位置する。

『豊前志』には「城主未詳」とするが、門司文書には貞治２年（1363）、南朝方の門司親頼らが立て籠もった猿喰城を門司親尚が攻めた軍忠状があり、南朝方の親頼以下、主だった南朝方の武将は討死したとされる。それ以後の来歴については不明である。

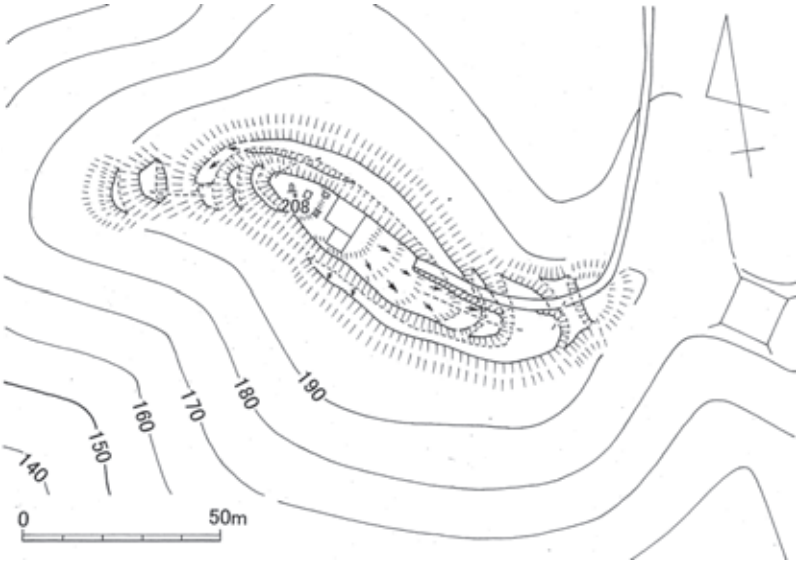
第８図　猿喰城主郭

【概要】城山山頂には、現在テレビ局のアンテナなどがあるが、その付近が主郭である。

主郭は、東側に向けて緩やかな傾斜を持つ平坦面で、東西約50m、南北約 20m の長楕円形を呈する。主郭の周囲には、帯曲輪が巡り、東側と西側の尾根続きには、階段状に小曲輪が展開する。そして、東側の曲輪群の先には、幅６～７ｍ、深さ約４ｍにも達する堀切を１本設け、城域を画している。

【史料】あり

【文献】２～7,**8～10**,13,**18**,**133**,**143**,**148**



第９図　猿喰城縄張り図（事務局作成）

豊前 14　若王子城（にゃっこうじじょう）

郡名　企救郡　別称 若一王子城・王子城・若王寺城　図幅名 小倉（西）
種別　山城　　所在　北九州市小倉北区富野・門司区大里

【沿革】企救半島の付け根部分、足立山（霧ヶ峰）から北へ延びる尾根（小文字山）から富野の谷を挟んだ北側の頂部、陣ヶ尾山山頂（標高 290m）を中心とする一帯に位置する。

『古城記』には門司の城の一つとして、「若一王子」をあげ、文治５年（1189）に門司親房が築城したとする。『取調簿』には「若王子城　一名王子城」として門司城の支城として、応永年間に民部親俊一徳斎を城主に置いたとする。そして、「（富野）村ノ東方陣ヶ尾山ノ頂ニアリ。東西十三間、南北三十四間、三角形ノ平地ニシテ、所々ニ平坦ナル壇アルノミ」と記している。

【概要】富野にある須賀神社はかつて若一王子（若王子（にゃっこうじ））社と呼ばれ、それが城名の由来になっているとされる。須賀神社の東側には、北側に三角点のある標高 290m の頂部、さらにその南側に標高 295m の頂部が南北に連なっており、それら二つの頂部にまたがるように、広く城域は展開している。

城の構造は、基本的には曲輪（平坦面）を細かく階段状に連ねていくのみの単純なものであり、堀切や竪

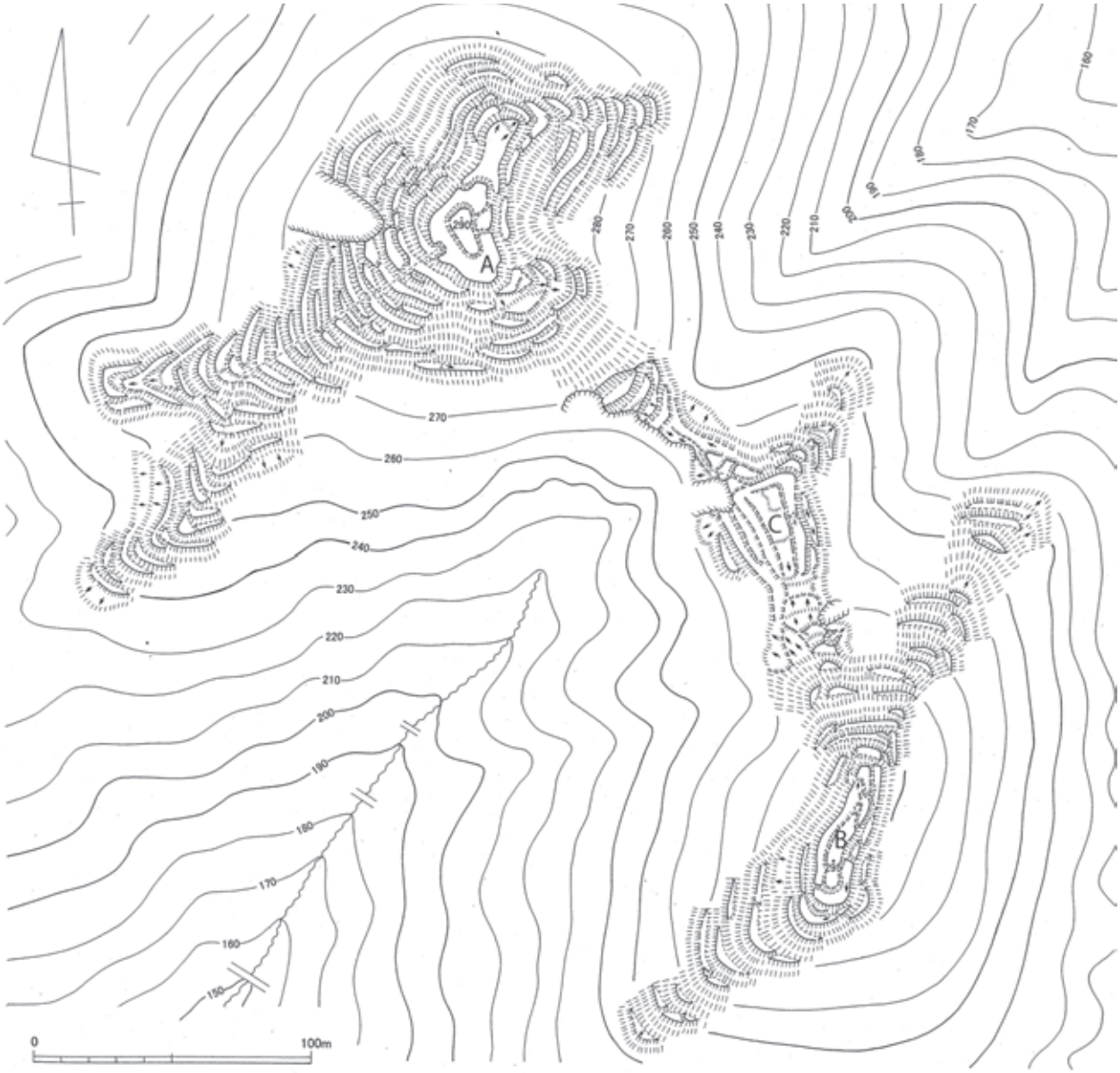
第 10 図　若王子城遠景

第 11 図　若王子城の曲輪群の状況

堀、横堀などの防御遺構は一切確認することができない。現地を最初確認した際は、後世の耕作や植林による造成段であると認識した。しかしながら、三角点のある場所は明らかに平坦面の上から三角点を造っており、近代以前にさかのぼるのは確実であること、さらに造成段は山麓まで延々と伸びていかず、途中自然地形に変化していること、さらにより低い尾根の頂部には造成段は及んでいないことなどから、後世の造成段ではなく、城郭遺構と認識できるものと判断して図化した。

城は、標高 290m と 295m の頂部（図中 A・B）とその鞍部 C にやや広い曲輪が置かれ、それら３箇所を核としてその周囲に小曲輪群が階段状に展開する様相を呈している。防御遺構が極端にみられないことや小曲輪の展開状況など、椎山城や三岳周辺などの他の企救郡の城館と類似するものといえる。城域は全長約 600m にも及ぶ大規模なものであり、また小曲輪群が連続する状況から、大軍による臨時駐屯のための造作である可能性が高い。文献記載にはないが、永禄初年頃の門司合戦に伴って使用された可能性も十分考えられる。

【史料】なし 【文献】1,4 ～ 10,15,18,131,133



第 12 図　若王子城縄張り図（事務局作成）

豊前 15　足立山城（あだちやまじょう）

郡名　企救郡　別称　吉見城･足立城･黒原城･妙見山城･妙見城　図幅名　小倉(西)
種別　山城　　所在　北九州市小倉北区足原・小倉南区足原・葛原・湯川

【沿革】企救半島の南西隅にひときわ高く聳える足立山（霧ヶ峰・標高 598m）を中心とした一帯に城郭遺構が点在する。

『豊前志』には「吉見城」、『古城記』には「妙見足立也。応永ノ頃、小野田兵部少輔種尚居」とあり、『豊前国志』には「同（城跡）一ヶ所　黒原村の上にあり吉見陣といふ。吉見伊賀守の跡なりといふ」とある。『取調簿』には「吉見城　一名妙見山城、又吉見陣」として小野田種尚の在城を記すと共に、所在情報として「（黒原）村ノ東方足立山南端ノ頂ニアリ。東西二十間、南北三十間許。楕円形ノ平地ニシテ、僅ニ石垣及濠渠ノ跡猶存セリ」とある。

第 13 図　足立山遠景（右の頂部が妙見山）

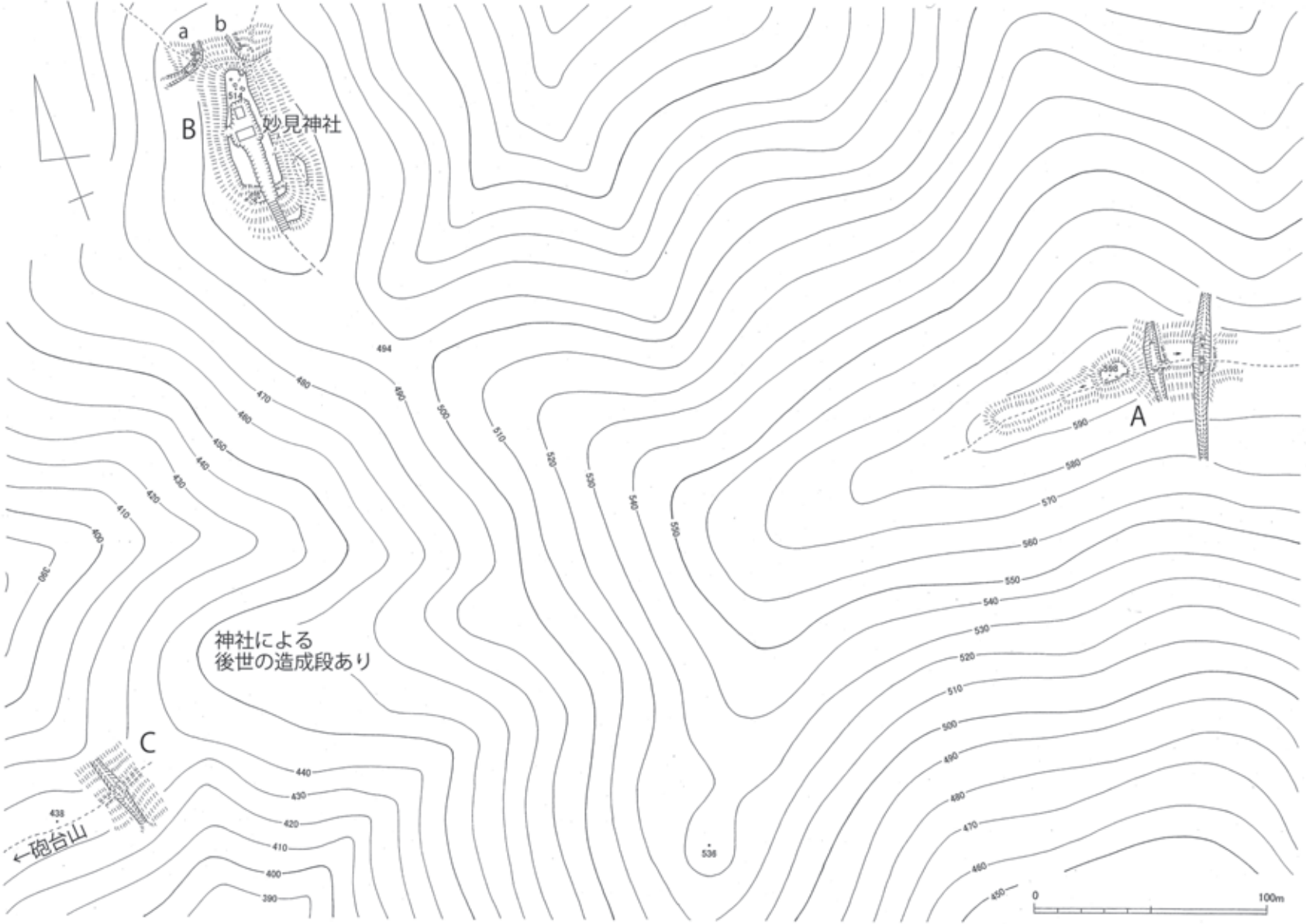
第 14 図　足立山頂付近から見た関門海峡

第 15 図　足立山城堀切（A 地点）

【概要】足立山周辺には、足立山を頂点として、その北西隣に妙見山（標高 519m）、西側に砲台山（標高 442m）の３つの頂部が並んでいるが、城郭遺構を確認することができるのは、足立山山頂部（図中 A）と、妙見山山頂部（図中 B）と、砲台山の東側（図中 C）の３箇所に分散してみられる。

足立山山頂の A は、山頂部にわずかな広さの人為的な平坦面が認められるのみで、自然の尾根地形が広がっているが、山頂部の東側には二本の大きな堀切を確認することができる。特に東側の堀切は、深さ３m、全長 70m 前後にも及ぶ長大なもので、東側から山頂部への侵入を大胆に遮断している。山頂部から西側は、自然の尾根地形が続いており、特に堀切などは設けていない。

妙見山山頂（B）は、現在、妙見神社の上宮になっており、地表面をかなり削り込んで社殿が建てられている。社殿のある周囲に広がる平坦面がかつての城の曲輪であると考えられ、その北東側と北西側には、埋没しかかってはいるが、堀切が二本施されており（図中 a,b）、北側斜面からの侵入を防いでいる。妙見山山頂から南へ下り、砲台山へ分岐する尾根筋へと行き当たり、その近辺には、人為的に平坦に造成された段をいくつか確認することができる。それらが曲輪であるという指摘もあるが、後世の神社の瓦などが散布しており、近世以降の神社による造成面である可能性が高い。そこから南西へと進んだ尾根上 C には堀切 1 本のみが確認できる。しかしながら、C の南西側にある砲台山には、文字通り、戦時中の高射砲陣地が数多く構築されており、石垣なども認められるものの、中近世の城館遺構を確認することはできない。



第 16 図　足立山城縄張り図（事務局作成）

以上のように、足立山周辺の城郭遺構を全体的にみると、足立山山頂、妙見山山頂、砲台山の東側の尾根を広く取り込んだ範囲を囲い込むように堀切が構築されている。曲輪などの平坦面は顕著ではないが、広い範囲を囲い込むことで、広大な駐屯地を構築していた可能性が高い。

永禄年間には大友氏や毛利氏によって、足立山近辺に陣を構えた記載が多く見られることから、これらの城郭遺構が大友や毛利の大軍が駐屯した際の痕跡の可能性も十分考えられる。

【史料】あり　【文献】1,2,5 ～ 9,**10**,15,18,131,133

豊前 16　引地山城（ひきちやまじょう）

郡名　企救郡　　別称　到津城　　図幅名　八幡（東）
種別　丘城　　所在 北九州市小倉北区都 1 丁目

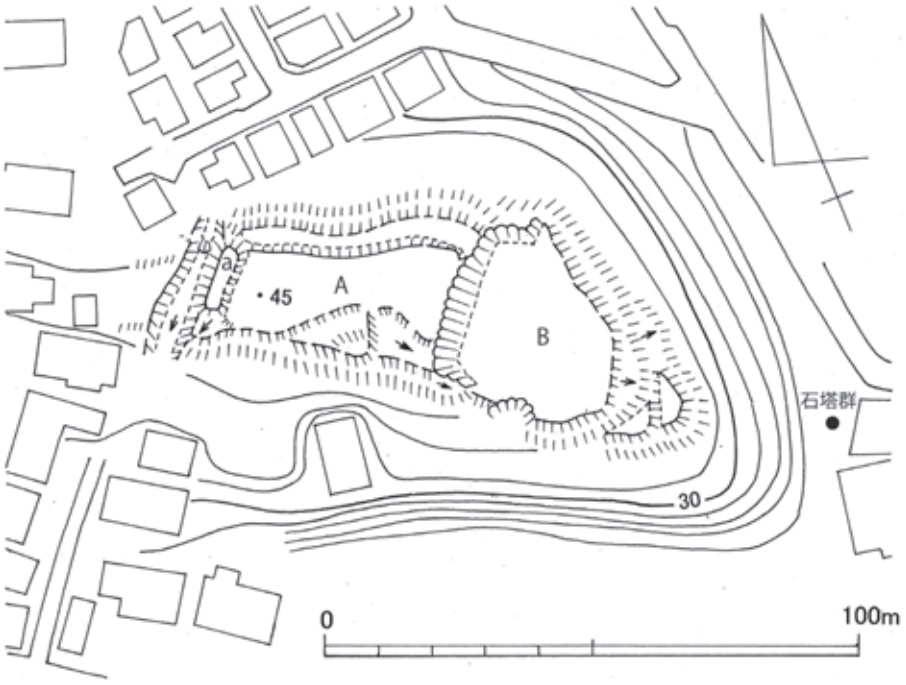
【沿革】板櫃川の北岸、到津は標高 50m 未満の低丘陵が複雑に入り組んだ地形であるが、上到津にある到津八幡宮の谷を挟んで南西側の丘陵上に位置する。

『豊前国志』には「到津引地山」として「城主宇佐大宮司到津中務在城、又畑間和泉守居城せり」とある。他の地誌類もほぼこれに類することを記し、宇佐八幡宮の有力な拠点、到津を支配する重要な城とされていたことがわかる。また、『取調簿』には「（到津）村ノ西方、引地山ノ頂ニ二段アリ。上ハ東西十三間、南北十三間許ノ平坦鈍角方形ヲナシ、次は一間半ヲ下リ、東西廿三間、南北十三間許。長方形ノ平地ニシテ僅ニ城臺ノ形ヲ存ス」と記し、さらに「北方大凡十五間ヲ下ル山腹ニ空洞アリ。蓋シ昔時ノ廃井ナリト」と記す。

【概要】城が所在する丘陵の周囲は早くから住宅開発が行われているが、かろうじて城の本体が残されている。標高約 45m の丘陵先端部には A,B ２つの曲輪が並列し、その西側には土塁 a を伴った堀切一本が確認できる。後世の改変がかなり入っており、A の北側に見られる帯曲輪状の平坦面も城に伴うかどうか不明である。また、堀切の西側にも平坦地形は続いており、住宅開発により判然としないが、A と B の範囲は確実に城域とみてよいであろう。東側の麓には中世まで遡るとみられる石塔群が集められており、城に関連するものとみられる。

【史料】あり

【文献】
1 ～ 4,6 ～ 10,15,18,131,133



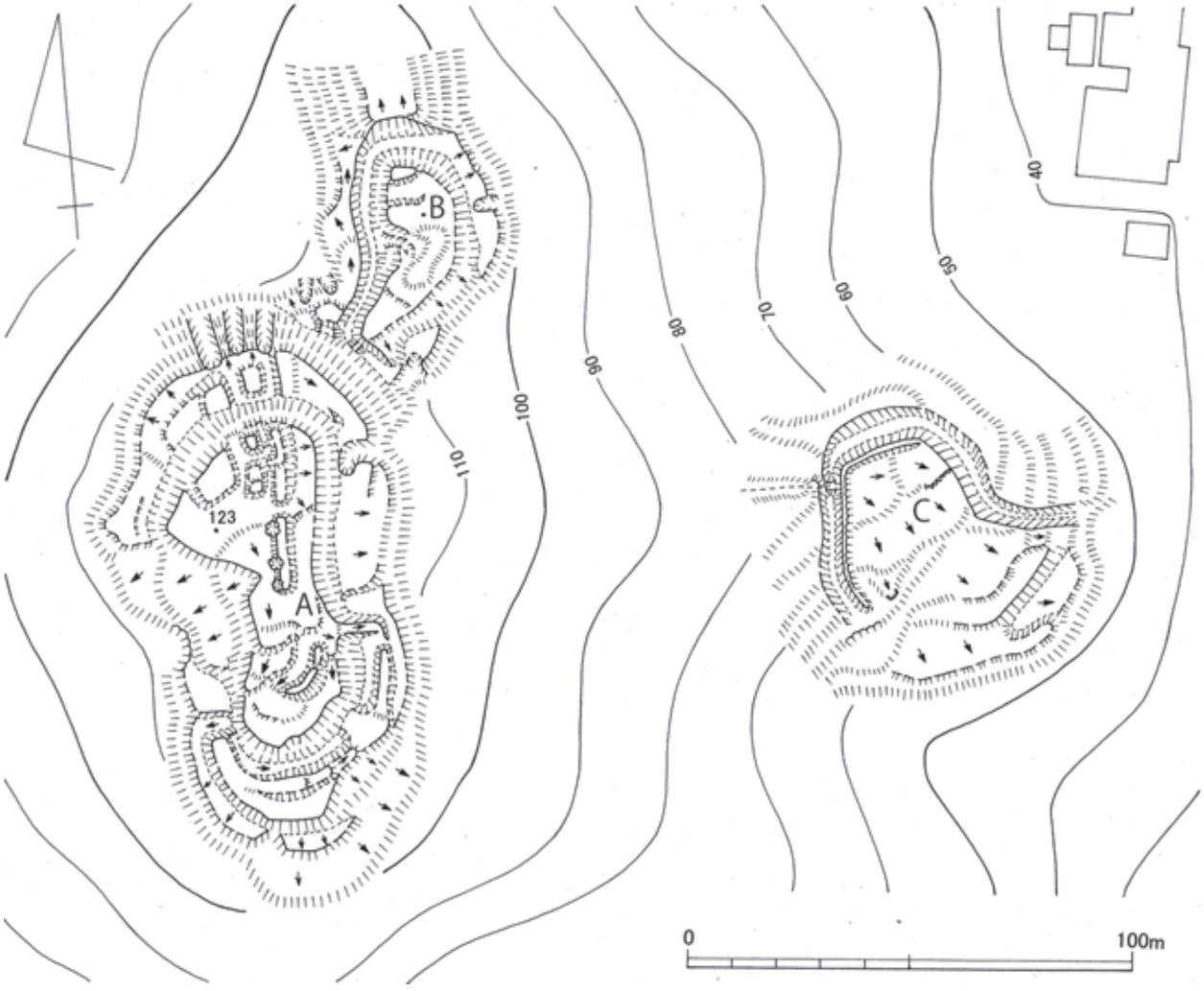
第 17 図　引地山城縄張り図（事務局作成）

豊前 19	虹山城（にじやまじょう）	郡名　企救郡	別称　二神山城・尼寺山城・蒲生城	図幅名　八幡（東）
		種別　山城	所在　北九州市小倉南区蒲生	

【沿革】紫川中流域西岸に突き出すように聳える虹山（標高 121m）山頂に位置する。

『豊前志』には「蒲生城阯」として、佐野源左衛門を城主とし、弘治２年（1556）に大友勢が攻め落としたとある。『取調簿』では「蒲生城（一名虹山城又二神山城）」とし、元弘年間から天文年間までの北条一族の規矩氏の城主名を連ね、弘治二年、佐野源右衛門が城主の時に大友勢により落とされたとある。さらに所在情報として、「（蒲生）村ノ西虹山の頂ニアリ。一ヲ大城ト云ヒ、東西廿五間、南北六十間余。北を小城と云ヒ、東西十間、南北廿五間許。共ニ円長ノ平地ニシテ、城臺ノ形ヲナシ、其東方ニ竪濠駒返シノ跡ヲ存ス」とある。

【概要】虹山の山頂を中心に南北約 70m、東西約 40m のいびつな平面形の主郭が置かれる（図中 A）。曲輪上は、人為的な凹凸が見られ、いくつかの区画に分かれていたような印象を受ける。この主郭が「大城」にあたる。主郭 A の周りには、帯曲輪が巡り、一部東側から南側にかけては横堀状を呈している。帯曲輪の北側には竪堀３本なども見られ、厳重に防備する様子が窺われる。



第 18 図　虹山城縄張り図（事務局作成）

主郭Aの北側は、堀切を挟んで、Bの曲輪が置かれる。南北約30m、東西約15mと主郭より一回り小さい。これが「大城」の北にあるという「小城」にあたる。曲輪Bはあまり平坦ではないものの、東側を除き、幅10m近くもある大きな横堀が巡っている。Bの北側は横堀から接続する堀切によって尾根は断ち切られ、その北側は自然地形となっており、平坦ではあるものの、城域外であったとみられる。

第19図　虹山城遠景（右は紫川）

山頂を中心としたA･Bの曲輪群から東側へ約100m下った地点には、いびつなL字形に横堀状の掘り込みがある場所がある（図中C）。横堀で囲まれた場所は、後世の石垣などの竹林管理の造作を除いては、自然の緩斜面であり、出丸などの曲輪とはみなされず、城郭遺構か理解に苦しむところである。しかし場所から見て、『取調簿』の「駒返シ」にあたる場所であり、明治初期にはこの遺構が存在したことが明らかであり、山頂部への侵入を防ぐための防御遺構の可能性も考えておく必要がある。

第20図　虹山城堀切

【史料】なし　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**, 13,15,131,133,**142**

豊前22　大三岳城（おおみつだけじょう）　**郡名　企救郡　別称　三岳城　図幅名　徳力（東）**
種別　山城　所在　北九州市小倉南区辻三

【沿革】紫川支流、合馬川が流れる辻三の谷は、その北側から西側にかけて、豊前国と筑前国との国境となっており、標高400m前後の山稜となっている。その国境の山稜の東、辻三集落に面した中腹には大三岳と小三岳と呼ばれる二つの頂部が形成されている。これら二つの頂部には共に中世城郭が所在する。文献史料では「三岳城」と併せて呼ばれ、近世以降、大三岳の方を「大三岳城」、小三岳の方を「小三岳城」とされる。ここでは別個に報告する。

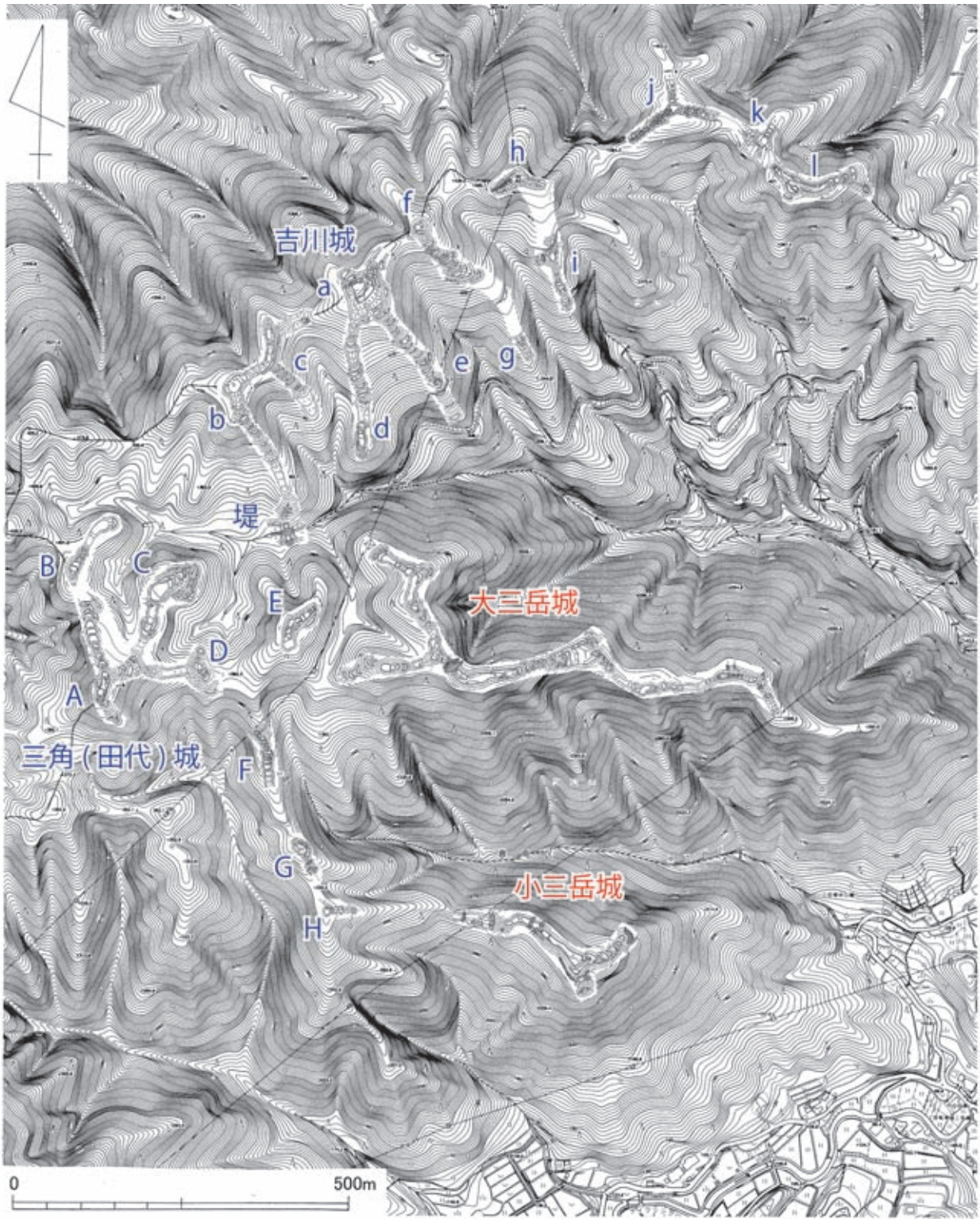
第21図　大三岳城（右）・小三岳城（左）遠景

大三岳城は、大三岳山頂（標高414m）に位置し、『取調簿』では、「大三嶽城」として挙がっており、長野豊前守種盛が築城、応永年間から永禄年間までの久盛、義忠、義廉、義信、義時、義延、義孝、義有、義通の城主名を挙げ、永禄12年（1569）3月に毛利氏に滅ぼされ、廃城となったとある。所在情報としては、「大三岳山ノ頂ニアリ。東西二十五間、南北十間許。長方形ノ平地ニシテ、濠壁遺石ナク、僅ニ城臺ノ形ヲ存ス

第22図　大三岳城堀切

ルノミ」とある。

実際、長野氏の居城として存続し、長野氏は毛利方であったが永禄８年（1565）の豊後大友氏による長野成敗により大友方となり、同 11 年に長野城と共に毛利方に攻められて落城、これ以後、長



第 23 図　大三岳城・小三岳城・吉川城・三角城位置図

第 24 図　大三岳城縄張り図（事務局作成）

野氏は企救郡から京都郡に拠点を移すこととなり、大三岳城は小三岳城と共に廃城となった。

【概要】大三岳山頂を起点として、そこから東西に延びる尾根上に曲輪群が細長く展開する。全長は 900m 前後にも及ぶ長大なものである。

曲輪群は大きくⅠ～Ⅵの頂部を中心に築かれており、Ⅰ～Ⅳの頂部は標高 400m 前後と高低差はあまりなく、どこが主郭にあたるのか不分明なほど、横並びな曲輪配置を呈している。

基本的には、自然の平坦地形を最大限生かしながら、最低限度の造成加工によって、平坦面を造り出しており、堀などの防御遺構も極端に少なく、ⅢとⅣの曲輪群の間に２本の堀切が見られるのみである。しかしながら、これらの堀切は共に深さ３ｍを超えるような大規模なもので、城域の中でひときわ目立つ存在となっている。従来、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳの範囲のみが城域であると想定されていたが、今回の調査により、さらに尾根線上に曲輪群が延びていることが判明した。この長大な曲輪群は、従来指摘されているように（文献 36）、永禄 11 年（1568）の毛利氏による三岳城包囲戦における長野方の構築によるものと考えられ、北部九州における永禄期の城郭、特に臨時築城の在り方を考える上で、非常に重要な事例と言えよう。

【史料】あり

【文献】4～6,8,**9**,**10**,13,16,18,**36**,131,133

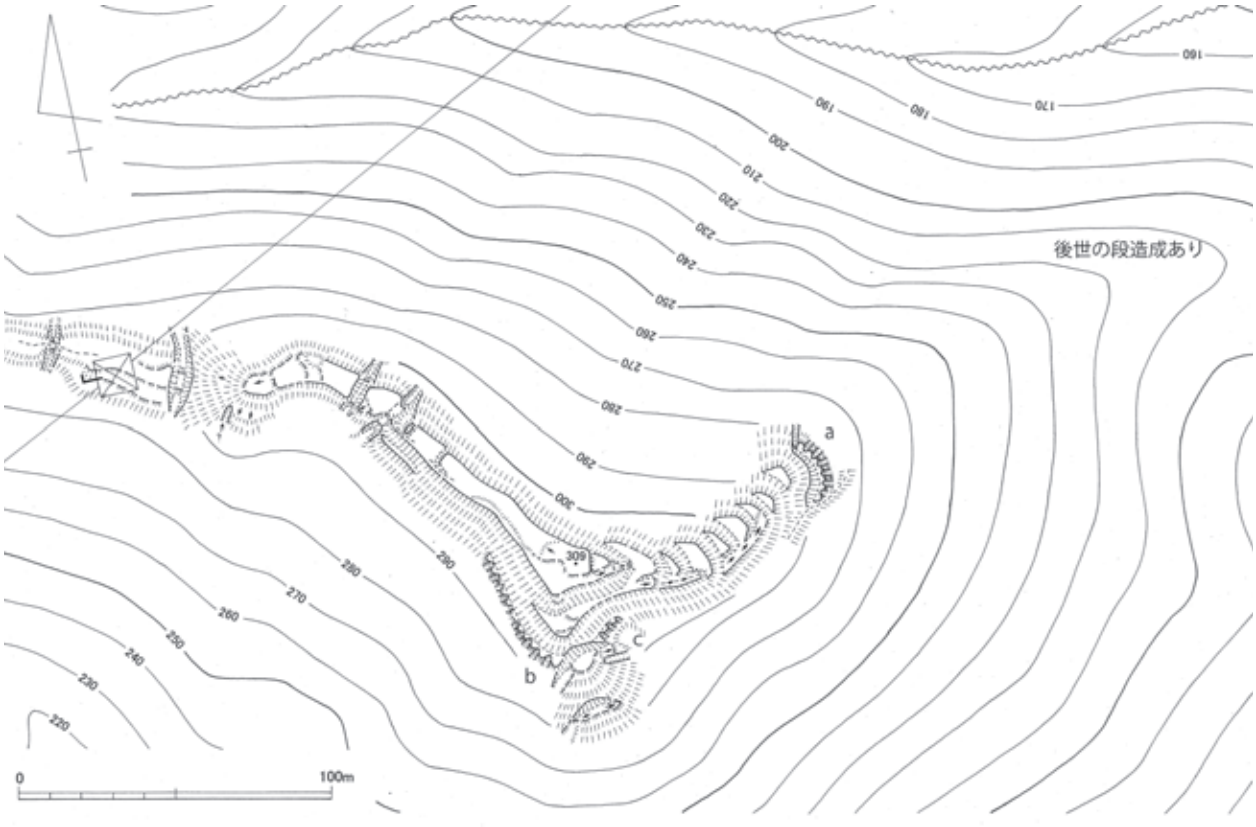
豊前 23	小三岳城（こみつだけじょう）	郡名　企救郡　別称　三岳城　図幅名　徳力（東） 種別　山城　所在　北九州市小倉南区辻三

【沿革】大三岳城から谷を挟んで南側の小三岳山頂に位置する。『古城記』には「城跡一ヶ所　三嶽村ニアリ。小三岳ト云フ」とあり、長野筑後守（あるいは兵庫大夫）が城主であったとする。大三岳城と共に、三岳城として長野氏の居城で、永禄 11 年（1568）に毛利氏によって攻め落とされ、廃城となった。

【概要】小三岳（標高 309m）山頂に東西約 100m の細長い主郭を置き、一部に土留めの石垣なども確認することができる。主郭の北東側は、階段状に小曲輪群が８段ほど続いており、その先の a には、腰曲輪と、短いながらも７本の畝状空堀群を確認することができる。

また、主郭の南側の尾根にも帯曲輪が回り、その先に堀切２本で尾根を遮断する（先端の堀切はかなり埋没しており、一見曲輪に見える）。その堀切の東西両側斜面 b,c にもそれぞれ短いながらも 10 本と３本の畝状空堀群が確認できる。主郭の西側の尾根伝いには、10 ～ 50m の一定の間隔を置いて、堀切４本が構築されている。さらに西側は鞍部を経て徐々に高くなっていき、最終的には三角（田代）城のある尾根へと続いているため、三角城に陣取ったと思われる毛利勢に対する備えとして、堀切群の存在意義が考えられる。大三岳城と小三岳城はセットで長野氏の居城だとみられるが、造成の粗放さから、大三岳城の方がより臨時築城的な色合いが濃いのではないかと思われる。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**, 13,16,**36**,18,131,133



第 25 図　小三岳城縄張り図（事務局作成）

豊前 24　吉川城（きっかわじょう）

郡名　企救郡／筑前国　別称 小早川城・益田陣　図幅名 徳力（東 / 西）
種別　山城　　所在　北九州市小倉南区辻三・八幡東区大蔵

第 26 図　吉川城主郭 a

【沿革】大三岳城から谷を挟んで北側には、豊前と筑前の国境の稜線が聳える。その一角が吉川城と伝えられている。『筑前国続風土記拾遺』には「吉川城址」として、筑前国大蔵村と豊前国三竹村との境の山上にあり、吉川左京あるいは肥後守という者が居城したとある。また、『古城記』の小三岳城の項には「天正三年安芸国主毛利方ヨリ吉川、小早川、増田三将ヲ遣シ、合戦有。三年目落城也。今、吉川、小早川、益田陣ト云フ跡アリ」と記す。『取調簿』には小三岳城の項の附として「吉川城・小早川城」があげられており、吉川元春、小早川隆景が大三岳城・小三岳城を攻めた際の陣跡と説明している。

【概要】従来、吉川城の範囲は、第 27 図の a の周辺とそこから南側にかけての尾根上であると考えられていたが、今回の踏査によって、吉川城周辺にある曲輪群の範囲は、豊前と筑前の国境の稜線上の東西約 1km 近くにわたっての広範囲に広がることがわかった（第 23 図）。

吉川城の曲輪群は、大きく a ～ l の 11 ヶ所を数える。a は従来、吉川城と考えられてきた場所で、大三岳城の谷を挟んで北側にあたる。吉川城の中でも広い曲輪を有する場所で、これらの曲輪群の中でも中心的な存在であることがわかる。文献 36 などで、村田修三は土塁を巡らした虎口を有することから、恒久築城的な要素を持つということを指摘している。確かに、a の主郭の南西側を中心に土塁状の高まりが見られるものの、その平面プランははっきりとはせず、これが本来の虎口の土塁かどうかは、さらなる検討が必要であると思われる。主郭の南側は不明瞭な地形が展開するものの、基本的には南側の尾根 d と e に向って階段状に小曲輪が連続する状況が見受けられる。

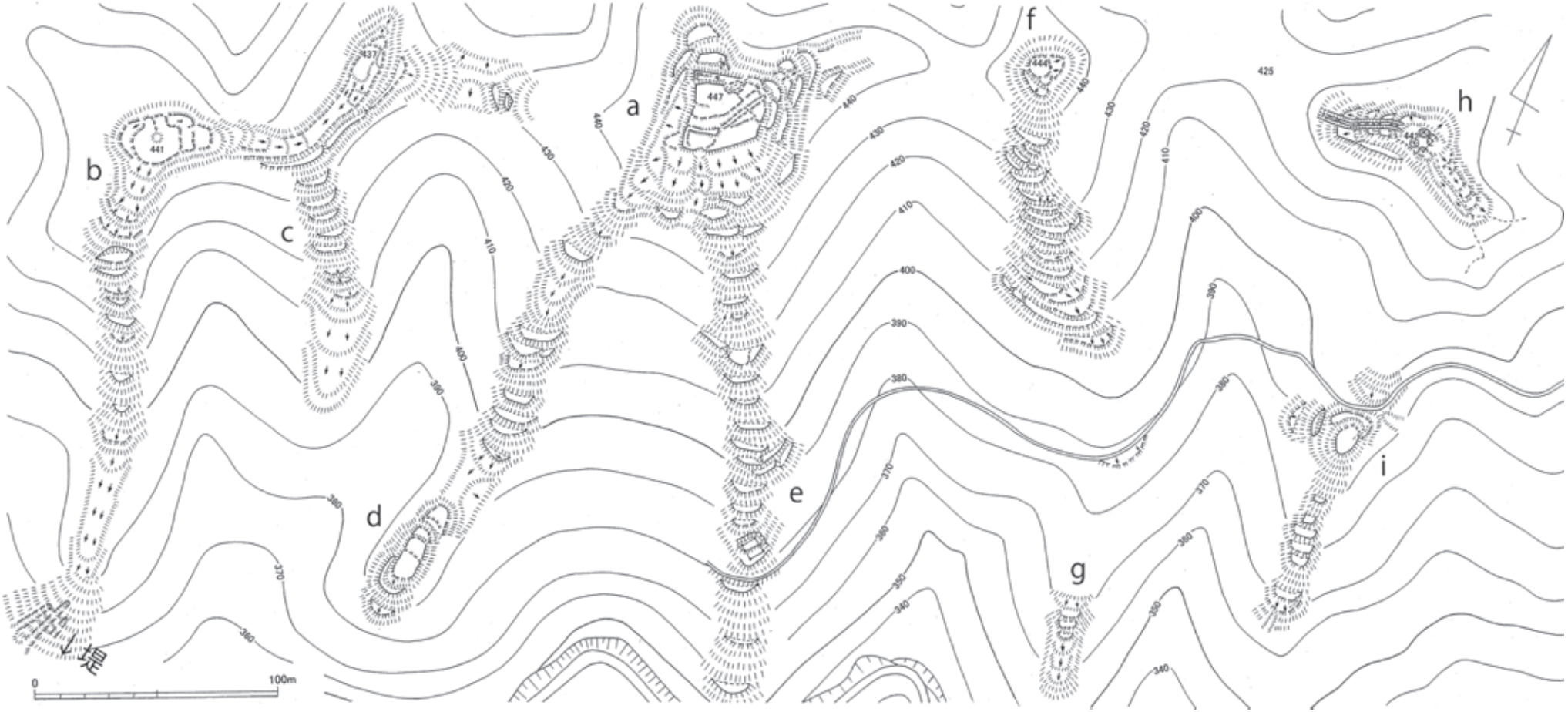
また、a の東西両側の稜線上の各頂部にも不明瞭ながら曲輪群 b,c,f,h が確認できるが、これらも基本的には南側、つまり大三岳城がある方向の尾根上に階段状に小曲輪が連続している。曲輪群 h からさらに東側へ進むと、さらに j,k,l の稜線上の各頂部に小曲輪が展開している（h ～ j にかけての二重の竪堀のような表記は、重機の轍の痕跡で城郭遺構ではない）。このあたりになると、各頂部から南側には曲輪群は展開せず、稜線上にのみ曲輪群が見られるようになる。

以上のように、吉川城は、尾根上の小曲輪群をひたすら延長していくような縄張り構造で、堀などの遮断・防御遺構は一切確認できない。これは、陣という日々移り変わる戦局の中で、防御ラインを固定するのではなく、一進一退を繰り返すような状況を表しており、兵を駐屯するための最低限の平坦造成を普請として優先していた状況を表しているものと考えられる。

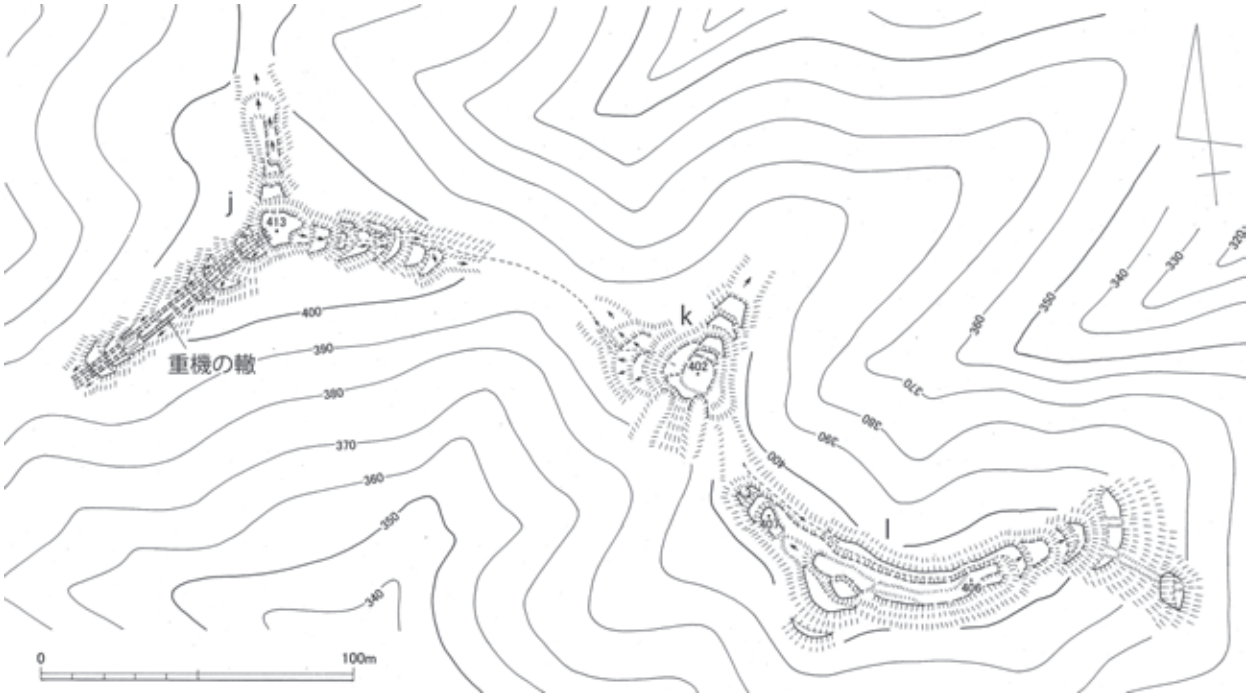
このように吉川城は、次の三角城と併せ、長野氏が籠もる大三岳城と小三岳城と対峙し、攻め落とすための毛利方の陣城群の姿であると考えられ、永禄 11 年（1568）の毛利氏対長野氏の様相を如実に表しているのであろう。

【史料】なし

【文献】9,**10**, 11,13,16,**36**,133



第 27 図　吉川城（a ～ i 地区）縄張り図（事務局作成）



第 28 図　吉川城（j ～ l 地区）縄張り図（事務局作成）

豊前 25　三角城（みすみじょう）　　**郡名　企救郡 / 筑前国　　別称　田代城　　図幅名 徳力（東 / 西）**
種別　山城　　所在　北九州市小倉南区辻三・八幡東区田代

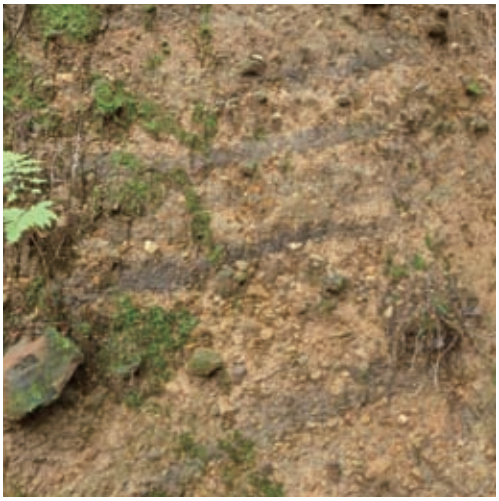
【沿革】吉川城の南西にあたり、大三岳城の谷を挟んで西約 500m 地点の豊前と筑前の国境の稜線上に位置する。

『取調簿』には「三角城」として「（田代）村ノ東方、角山ノ頂ニアリ。東西七間、南北十五間許ノ平地ニシテ、僅ニ城跡ノ形ヲナスノミ」と記す。『種々』には「田代城址」として名が挙がっている。これ以外に、確実な地誌類の記載は見られない。

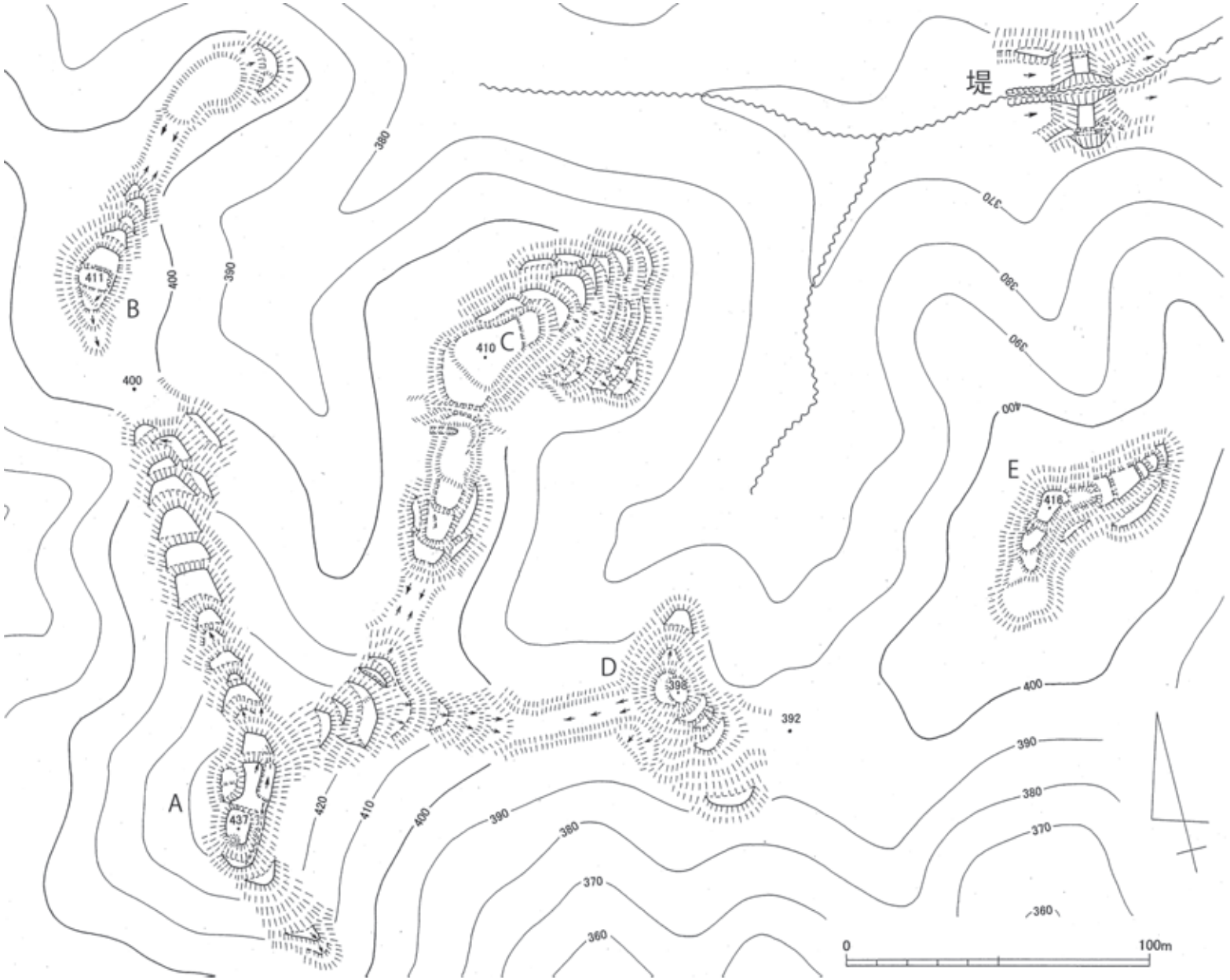
【概要】三角城は、現在、国土地理院の三角点のある標高 437m の頂部 A を中心として縄張りが展開している。A には三角城の主郭が置かれており、一辺 20m にも満たない小さな主郭であるが、この一帯は、城域の中でも、最も曲輪の整形が丁寧になされている印象を受ける。A から北側と東側の尾根上に 10m 四方もないような小曲輪群が階段状に連続する。そして、その先は、B,C,D,E のそれぞれの頂部を中心に小曲輪群が展開しており、主に頂部の北、あるいは東側に向けて小曲輪群が階段状に展開する。

一方、D,E から南側へ派生する尾根上 F,G,H にも小曲輪群が点在している。三角城は、A ～ H の計 8 地区にも

第 29 図　「堤」遺構



第 30 図　「堤」の土層状況



第 31 図　三角城（A～E 地区）縄張り図（事務局作成）

及んでおり、その範囲は南北約 500m、東西約 500m にも及ぶ。さらに基本的な縄張りは頂部および尾根上の小曲輪群であり、堀切などの防御遺構は G 地区に堀切らしきもの 1 箇所を除いては、全く見当たらず、吉川城と類似する構造を呈している。そして、三角城の曲輪群の展開する方向が、大三岳城と小三岳城の方向に向いていることも大きな特徴として挙げることができる。

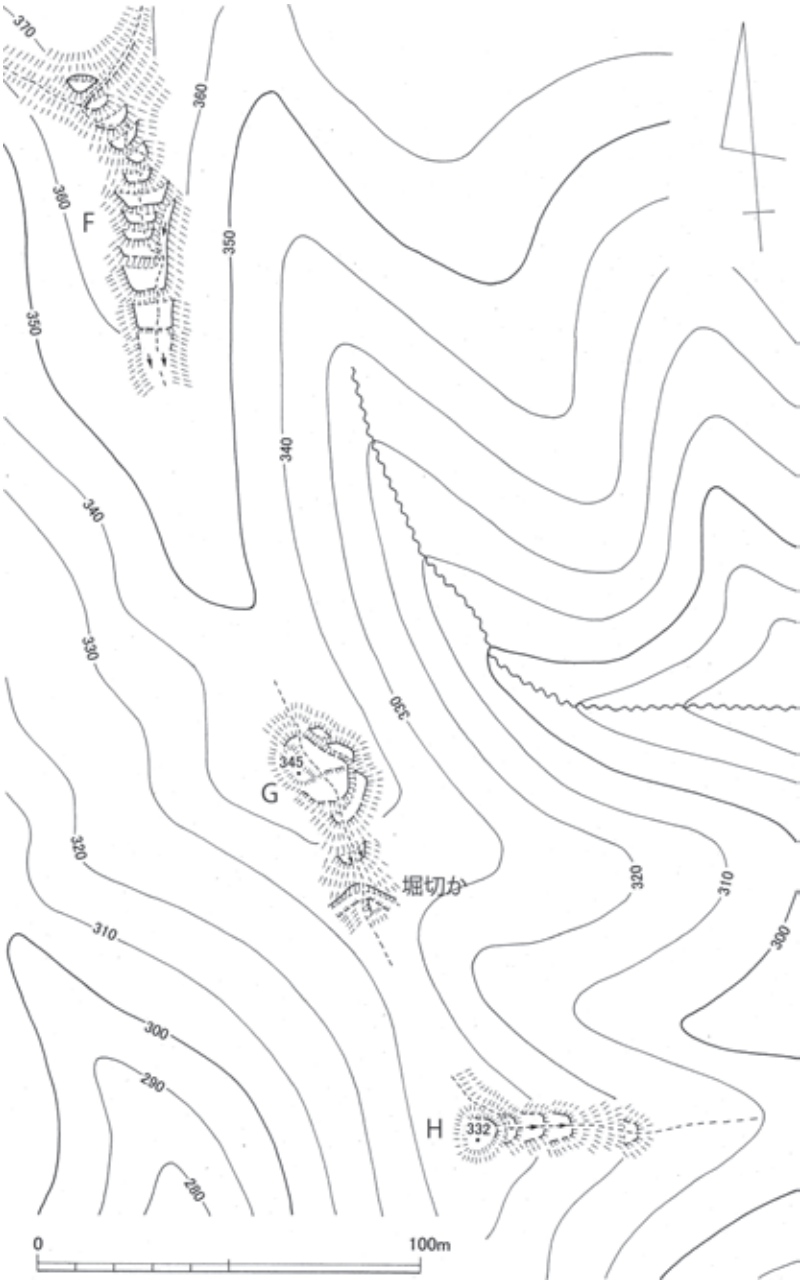
一方、三角城と吉川城との間の谷部には、地元で「堤」と称される遺構が残されている。全長約 30m、幅約 20m、高さ約 5 m の巨大な土塁状遺構で、谷を塞ぐように構築しているものである。地元の伝承では、元々池の堤体であったが、毛利勢が攻めてきた際に、堤の真ん中を切り落とし、谷川を氾濫させたというもので、実際に堤の真ん中は V 字形に開削されたように見える。その断面を見ると、赤褐色土と灰褐色土の互層が確認され、人為的に盛土して構築されたことがわかる。

この「堤」は地元の伝承では、池の堤となっているが、これは、吉川城と三角城が連携し、下の谷から敵勢（長野勢）が侵入してくるのを防ぐための大規模な土塁で、元々真ん中は V 字に途切れて虎口状になっていたものと推察される。

以上のように、三角城は、吉川城と「堤」遺構を介して連携し、東側の大三岳城と小三岳城に籠る長野勢を包囲するための毛利方の陣城群の一角であったと推察される。地誌類の言う小早川か益田の陣跡とも考えられる。この包囲陣の全長は 1.5km にも及ぶ壮大なものであり、永禄期の北部九州の山城を巡る攻防戦を考える上で非常に重要な事例であると言えよう。

【史料】なし

【文献】3,7 ～ 9,**10**, 13,16,18,**143**



第 32 図　三角城（F ～ H 地区）縄張り図（事務局作成）

豊前 26　宝積寺城（ほうしゃくじじょう）

郡名　企救郡　　別称　合馬城　　図幅名　徳力（東）
種別　山城　　所在　北九州市小倉南区合馬

【沿革】合馬川の北岸、合馬集落の入口、合馬竹林公園の北側に聳える宝積寺山山頂に位置する。

『取調簿』には「寶積寺城」として「寶積寺伊賀守之ニ居ル。（合馬）村ノ西北寶積寺山ノ頂ニ方十間許ノ円形平地アリ。僅カニ城臺ノ形ヲ存スルノミ」とある。『種々』には「合馬城」として掲載する。

【概要】合馬竹林公園の北側に聳える宝積寺山（標高 200m）山頂を中心に、南北約 100m、東西約 50m の範囲に城域が展開する。不明瞭な平坦面の主郭の周りには帯曲輪が取り付き、南側の斜面には雛壇状に小曲輪群が施される。小規模な城館の部類に属すると言えよう。

【史料】なし

【文献】3,9,10, 13,16,18,131

第 33 図　宝積寺城縄張り図（事務局作成）

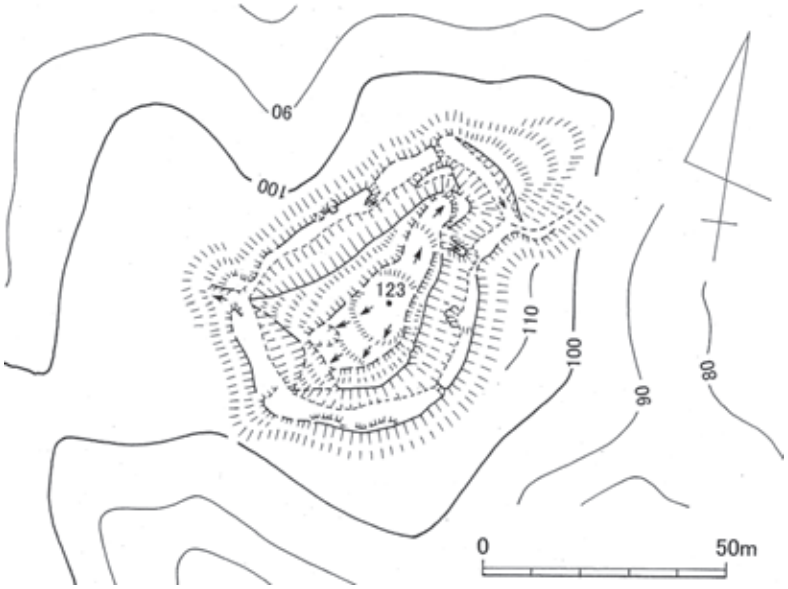
豊前 27　長尾城（ながおじょう）

郡名　企救郡　　別称　高野谷山城・高野城　　図幅名　徳力（東）
種別　丘城　　所在　北九州市小倉南区合馬

【沿革】宝積寺城の東約 500m の標高 123m の頂部に位置する。

『取調簿』には「今云フ高野谷山ナリ。」とあり、長尾小次郎景通と高野三郎能行を城主名として挙げる。城の北側には高野三郎の墓もあると記す。

【概要】能行の集落から低いながらも特徴的にそびえる山稜頂部に位置する。頂部には東西約 30m、南北約 40m のいびつな形をした主郭を置く。主郭の平坦面は自然地形に近く、あまり整形しているとは言えない。主郭の周囲は、幅



第 34 図　長尾城縄張り図（事務局作成）

約５ｍの帯曲輪が巡り、北東側の尾根には、主郭側からの高さ約５ｍの堀切１本が巡っている。

【史料】なし

【文献】4 ～ 10, 13,16, 18,131,133,**142**

第 35 図　長尾城遠景

第 36 図　長尾城帯曲輪

豊前 29　椎山城（しいやまじょう）

郡名　企救郡　別称　志井城・古川山城・城ノ粒城・徳光城・陣山城
図幅名　徳力（東）/ 苅田（西）　種別　山城　所在　北九州市小倉南区徳吉・志井

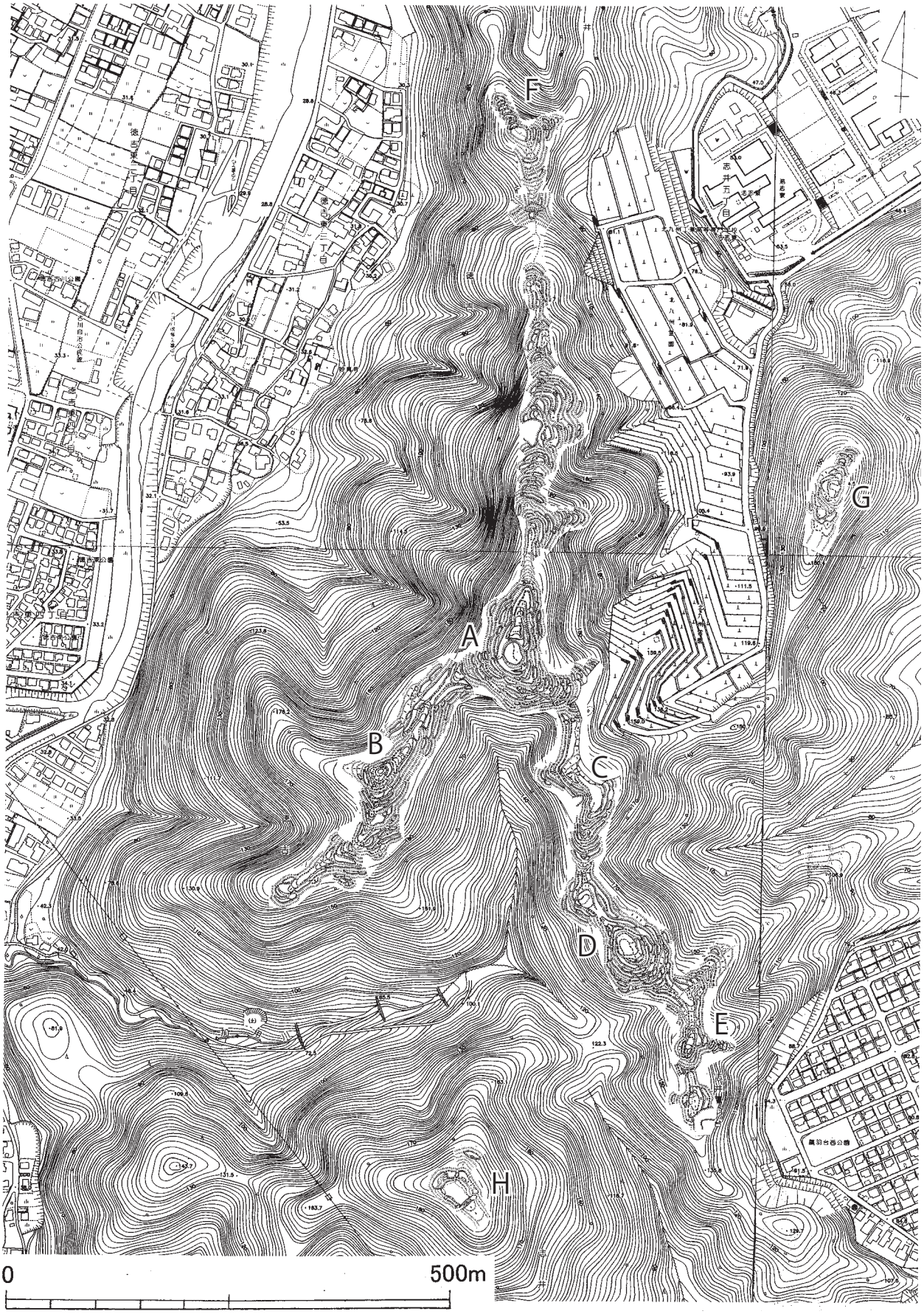
【沿革】紫川の東岸に面し、九州自動車道の北側に南北に長く聳える椎山の山頂一帯に位置する。

『取調簿』には「椎山城　又城ノ粒城（一名古川山城）」とし、長野豊前守種盛が築城し、応永年間には長野義富の第四子左兵衛佐義衡が城主であったが、大内盛見に攻め落とされたとある。さらに、所在情報として、「（徳光）村ノ東方古川山ノ頂ニアリ。東西十五間、南北二十間許。楕円形ノ平地ニシテ、僅ニ城臺ノ形ヲ存スルノミ。又西北一町許ノ山腹ニ、駒繋ト云所アリ。切石ノ柱ヲ存セリ」とある。また、『古城記』には「一　掻揚一ヶ所　徳光村ニ有、陣山ト云。一　同（掻揚）一ヶ所　同（徳光）村ニアリ此二箇所由来不知。」とあり、椎山城あるいはその近辺に２箇所城があったことが記されている。後述するように椎山城は非常に広大で、いくつもの曲輪群から構成されていることから、『古城記』の記載にある徳光村の城２箇所も、椎山城として報告するものに当てはまる可能性が考えられる。

第 37 図　椎山城遠景（手前は紫川）

第 38 図　椎山城主郭 A の堀切

【概要】椎山城の中心は椎山山頂（標高 221m）地点にあり（図中 A）、とてもよく整形された平坦な、南北約 25m、東西約 20m の楕円形の曲輪を主郭としている。その主郭の周りには、幅５ｍほどの帯曲輪が巡り、その北側と南側は堀切あるいは横堀状となって尾根からの侵入を防御する。さらにその北側には不整形ながらも平坦面が続き、主郭から約 50m の地点にさらに堀切１本を設けている（図中 a）。これにより椎山城の縄張りは完結しているかに見えるが、さらにその外側には広大な曲輪群が展開している。山頂から続く尾根上の至る所、雛壇状に小曲輪群が林立する様子が窺える。尾根の各頂部に中心を持ち、それらを曲輪群の核とするならば、A ～ H の曲輪群に区分することができる。南北約 1 km 以上、東西約 500m、山頂から南側は東と西の二股に尾根が分かれることから、総延長約



第 39 図　椎山城縄張り図（全体・事務局作成）

２km 近くもの長さの曲輪群を持つ。県内でも随一の規模を誇っている。しかしながら、縄張りは非常に単純であり、A の周囲に堀切が若干見られるのを除いては、基本的には、自然の平坦地形はなるべく整形せず、逆に斜面は階段状に小曲輪群を切り刻むように連続させるというものである。また、F・G・H は他の曲輪群からは距離を保っており、出曲輪などが想定されるが、H の曲輪群については、曲輪の南側に堀切１本を構えており、この H の曲輪単体だけでも、一つの城の構えをなしており、H については、出曲輪というよりは別の城の可能性も想定されよう。

なお、F の南側は鞍部となっており、大規模な堀切状の窪みがあるが、これは戦前の地図にも古道が通っている。そのため、峠越え道の切通しである可能性が高い。

地誌類では、椎山城に関しては戦国時代以前の記事しかなく、これらの広大な縄張りを構築した主体については判然としない。全長２km にもわたり、小曲輪群を展開させるような縄張りは、三岳周辺の城館群の在り方を考えるならば、大軍勢による戦時の駐屯の痕跡とみることも可能である。村田修三は永禄 11 年の毛利勢による長野城、三岳城攻略戦において、長野城を攻略した後、三岳城を攻めるために一時的に大軍を駐留させた場所が、椎山城ではないかとしており（文献 36）、その可能性が高いのではないかと思われる。いずれにせよ、さらに周辺の城館との比較を通して検討を進める必要があるだろう。

【史料】なし

【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,10, 13,16,18,131,133,**142**

第 40 図　椎山城（G 地点）縄張り図（事務局作成）

第 41 図　椎山城（H 地区）縄張り図（事務局作成）

第 42 図　椎山城 F 地区南の切通し

第 43 図　椎山城 G 地区遠景

第 44 図　椎山城堀切（H 地区）

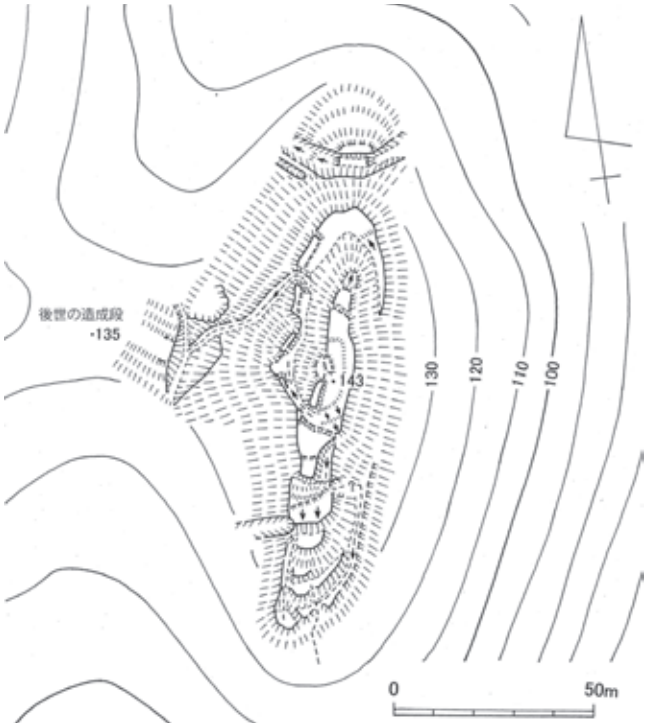
豊前 30　山本城（やまもとじょう）

郡名　企救郡　　別称　小舟山城・大舟城・大船山城　　図幅名　徳力（東）
種別　山城　　所在　北九州市小倉南区山本

【沿革】紫川の西岸、中谷の山本集落の背後に聳える小舟山山頂に位置する。『古城記』には「同（保障城）一ヶ所　山本村ニアリ。同（山本）村ノ内　大船山」と記し、『取調簿』では長野義富の第六子、山本八郎義親が城主であるとし、「村ノ西方小舟山ノ頂ニアリ。東西八間、南北二十間許ノ平地ニシテ、僅ニ城臺ノ形ヲ存スルノミ」とある。

【概要】尺岳の山系から東、山本集落に突き出すように聳える小舟山（標高 143m）に、南北約 40m、東西約 10m の細長い主郭を置き、さらにその南北に階段状に小曲輪を配する構造をとる。曲輪群の北側と西側に堀切それぞれ 1 本を設けて麓からの侵入を防いでいる。主郭をはじめとして所々に土塁を設けるが、曲輪面はあまり平坦ではなく、やや粗放な印象も受ける。西側の堀切の西の鞍部は人工的に平坦に造成しているが、後世の造作であろう。

【史料】なし　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**,13,16,18,131,133,**142**



第 46 図　山本城縄張り図（事務局作成）

第 47 図　山本城・水ヶ手城遠景

第 48 図　山本城堀切

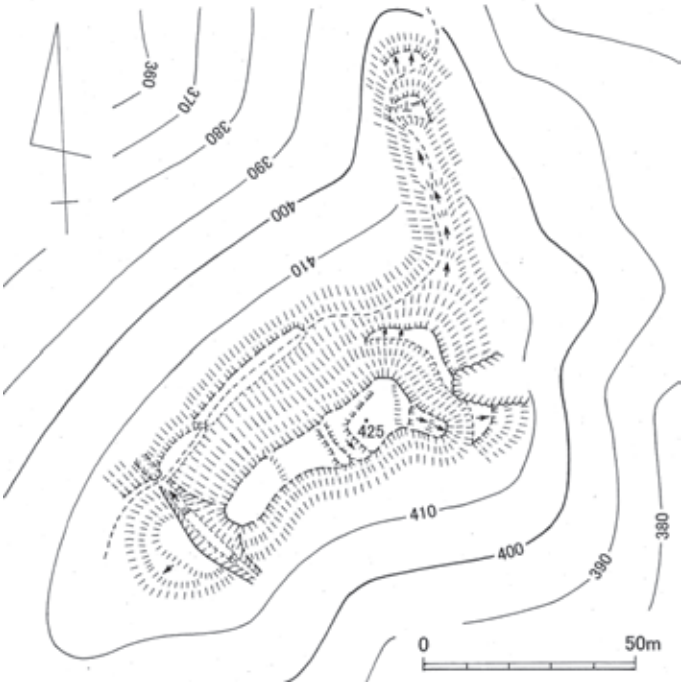
豊前 31　水ヶ手城（みずがてじょう）

郡名　企救郡　　別称　水上山城・水ヶ手塁　　図幅名　徳力（東）
種別　山城　　所在　北九州市小倉南区山本・春吉・道原・合馬

【沿革】山本城の南西約 1 km の山稜頂部に位置する。山本城から尾根伝いにあたる箇所である。

『古城記』には「保障城一ヶ所　山本村ニアリ。水ヶ手」とあり、『取調簿』には、「水上山城　一名水ヶ手塁」として、「（山本）村ノ西方水上山ノ頂ニアリ。東西十間、南北十五間許。楕円形ノ平地ナリ。西北三十間許ヲ下ル山腹ニ清水ノ小池アリ。此所ヲ水ヶ手ト云フ」とある。

第 49 図　水ヶ手城堀切



第 50 図　水ヶ手城縄張り図（事務局作成）

【概要】山本城から南西方向へ尾根伝いに約 1 km 登った標高 425m の頂部に、東西約 50m、南北約 20m の範囲に曲輪（主郭）を置き、曲輪内は不明瞭ながら段差を設けて区画しているようである。曲輪の南西側には深さ 5m、幅 10m 近い規模の堀切を設け、曲輪の北側には一部腰曲輪が巡る。一方、北東側にも三日月形の腰曲輪を置き、その先は自然の尾根地形となっているが、北へ 50m ほど進んだ場所には、明治 31 年の銘を持つ石祠が置かれている。

『取調簿』にある「清水の小池」については、『福岡県の城』に「城跡より 60m 下がった山腹」にあるとしているが、現地は未確認である。山本城とも同じ尾根線上に位置することから、山本城の詰め城としても想定できる。

【史料】なし　【文献】1,2,7,8,**9**,10,13,16,18,131,133,**142**

豊前 32　宮山城（みややまじょう）

郡名　企救郡　別称　稗畑山城・稗畑城・大野城・宮尾城　図幅名 徳力（東）
種別　山城　所在　北九州市小倉南区山本

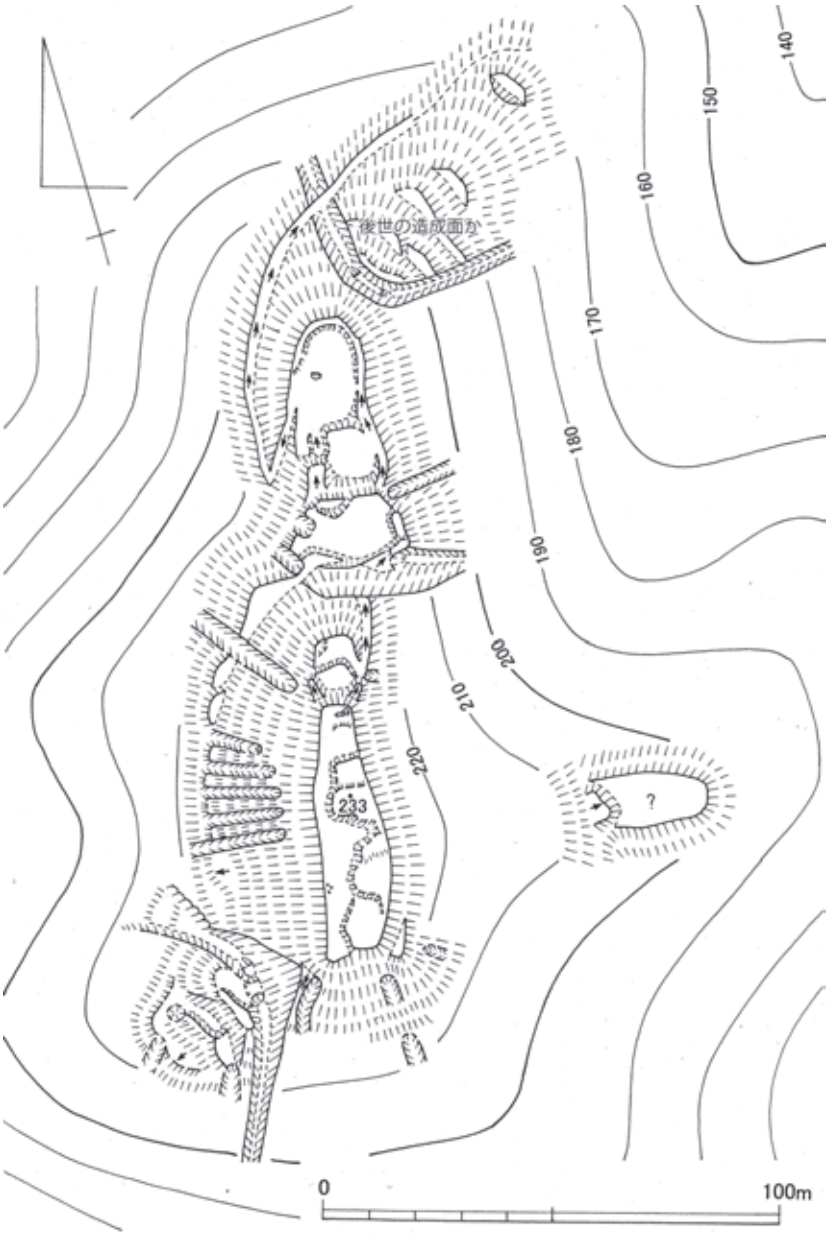
【沿革】山本城から紫川を挟んだ東側の山稜上の頂部に位置する。『古城記』には「同（保障城）一ヶ所　同（山本）村ノ内　宮山」とある。『取調簿』には「稗畑山城（大野城・宮山城）」として、長野豊前守種盛が築城し、大野太郎盛時に至る城主が挙げられている。また、「（山本）村ノ東方宮山ノ頂高津尾ノ界ニアリ。東西十間、南北十五間。楕円形の平地ニシテ、僅ニ城臺ノ形ヲナシ、山北一町許ヲ下リ、空濠ヲ存セリ」としている。

また、永禄 11 年（1568）の毛利方による長野城・三

第 51 図　宮山城遠景

第 52 図　宮山城堀切

岳城攻めの際にも、宮山城を攻略したことが、一次史料からも窺い知ることができる



第 53 図　宮山城縄張り図（事務局作成）

【概要】西大野八幡宮の東側に聳える標高 233m の頂部を中心に曲輪が展開する。南北約 50m、東西約 20m の細長い主郭の上面は、凹凸が激しく、いくつか区画されていた可能性が高い。主郭の西側には、５本の畝状空堀群を構築する。さらに主郭の南西側には、幅 10m を越えるものも含む堀切２本により、厳重に防備する。

また、主郭の東側は、尾根が続いており、人為的な平坦地形も見られるが、曲輪などの城郭遺構か否かは判断がつかない。

一方主郭の北側は、曲輪３段を階段状に並べ、最も北側の曲輪には低土塁を巡らせている。さらにその北側に長大な堀切１本を設けて城域を画している。

『取調簿』には北一町の場所に空濠があるとしているが、既往図には、たしかに主郭の北約 200 ～ 300m の地点には、四段ほどの平坦面と帯曲輪状の平坦面が取り囲んでいる。これが『取調簿』の言う所の「空濠」だと思われるが、城の曲輪群としてみるには、非常に整いすぎており、違和感を覚えるため、城郭遺構ではなく、山仕事等による後世の造成と判断した。

宮山城から南側へ続く尾根上を進むと約１km先から木下城主郭のある約２kmまでの尾根上には、断続的に曲輪群が並列している（木下城の項を参照）。これらの曲輪群は木下城も含め、一次史料には登場しない城館群であり、一次史料があり、永禄年間にかなりの規模の合戦が繰り広げられた宮山城を考える上は、これら木下城周辺の城館群と考え合わせる必要があるのではないだろうか。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**, 13,16,18,131,133,**142**

豊前 33　木下城（きのしたじょう）

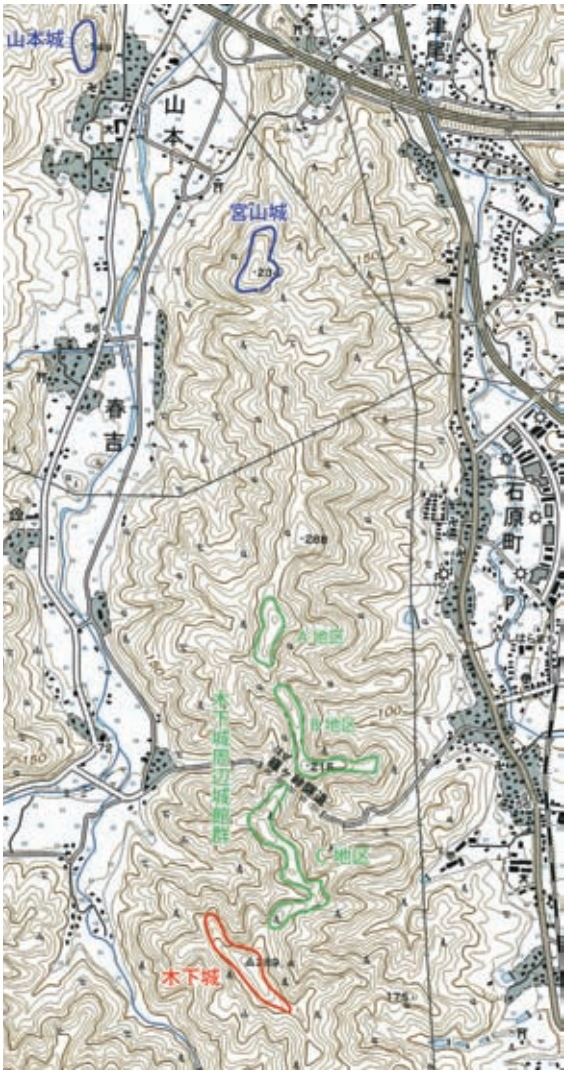
郡名　企救郡　　別称　西ノ奥城・西の城・粒城　　図幅名 徳力（東）
種別　山城　　所在　北九州市小倉南区木下・新道寺・石原町・春吉・道原

【沿革】紫川支流、東谷と中谷に挟まれた南北に細長く伸びる山稜上の頂部に位置する。

『取調簿』には「西ノ奥城　道原村ヨリハ城ヶ谷山、粒城ト云」とあり、「木下村ノ西方、西ノ奥山の頂、道原村ノ界ニアリ。東西十五間、南北七間許。長方形ノ平地ニシテ僅ニ城墟ノ形ヲナス」とある。『企救郡誌』には旧『企救郡誌』からの出典を引き、「木下城　西の城と云。城跡高く廣し」とある。

【概要】木下城は、東谷と中谷との間に延びる山稜上、標高 289m の頂部に位置するが、木下城周辺には、広大な城館群が展開することが近年確認された。本来であれば、別個に命名する必要があるかもしれないが、木下城とも非常に近接し、木下城と密接に関係した城である可能性が高いため、ここではとりあえず「木下城周辺城館群」と仮称し、本項において併せて報告する。

＜木下城＞木下城本体は、三角点のある標高 289m の場所を中心に、細長く伸びる尾根上約 300m にわたって曲輪群が展開する。一辺約 15m のやや狭い主郭の周りには、小規模な段が階段状に展開し、南側は 5 本の竪堀によって構成される畝状空堀群、東側には堀切を構えて防備する。そして、さらに東～南東方向の尾根上には、20 ～ 30m の間隔を置いて堀切 2 本を構えて防御する。一番東（南東）側の堀切は深さ約 4 m にも及ぶ規模を有する。



第 54 図　木下城及び周辺城館群位置図
（国土地理院 1/25,000 地形図「徳力」を一部改変して事務局作成）

第 55 図　木下城及び周辺城館群遠景

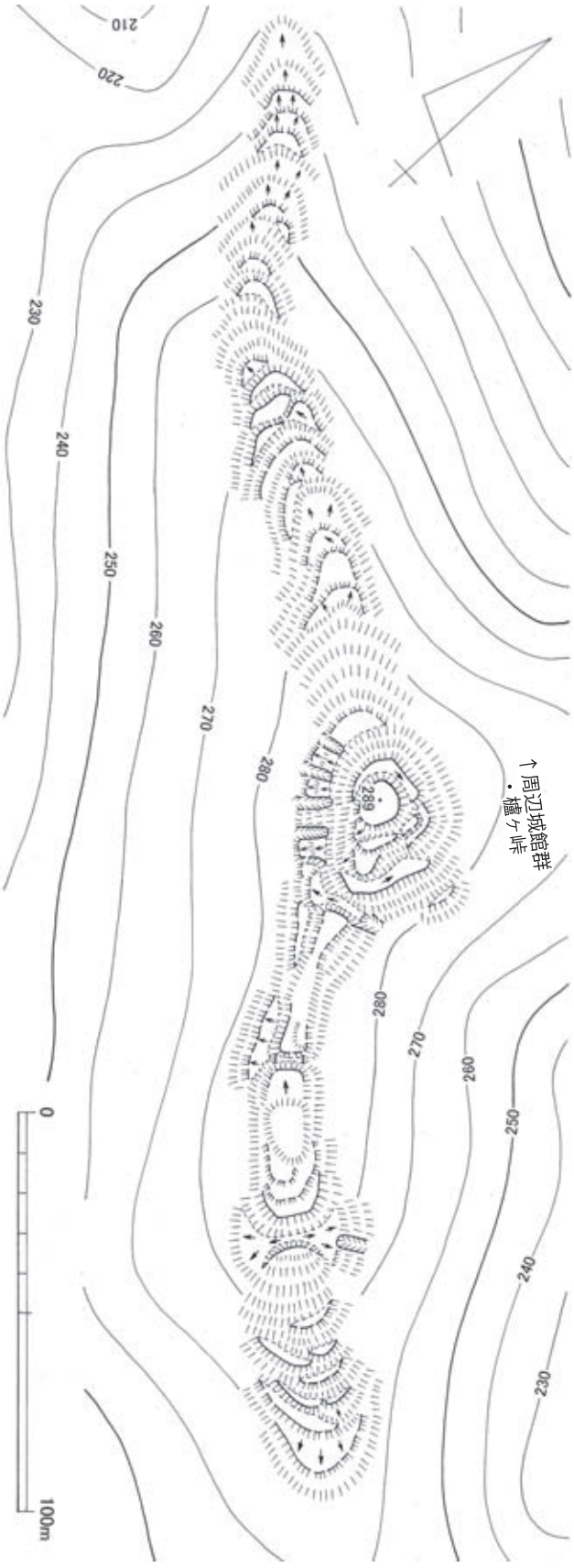
これらの堀切の外側、東西それぞれの尾根上にはさらに曲輪群が展開する。斜面上に階段状に小曲輪群が連続する構造で、駐屯地的な印象を受ける。

＜周辺城館群＞木下城から北東へ延びる尾根を約 200m 下ると、曲輪群が展開し始め、その曲輪群は櫨ヶ峠を挟んで約 1.5km にも渡って続いており、それぞれの頂部ごとのまとまりから、便宜上 A ～ C 地区に三分することができる。

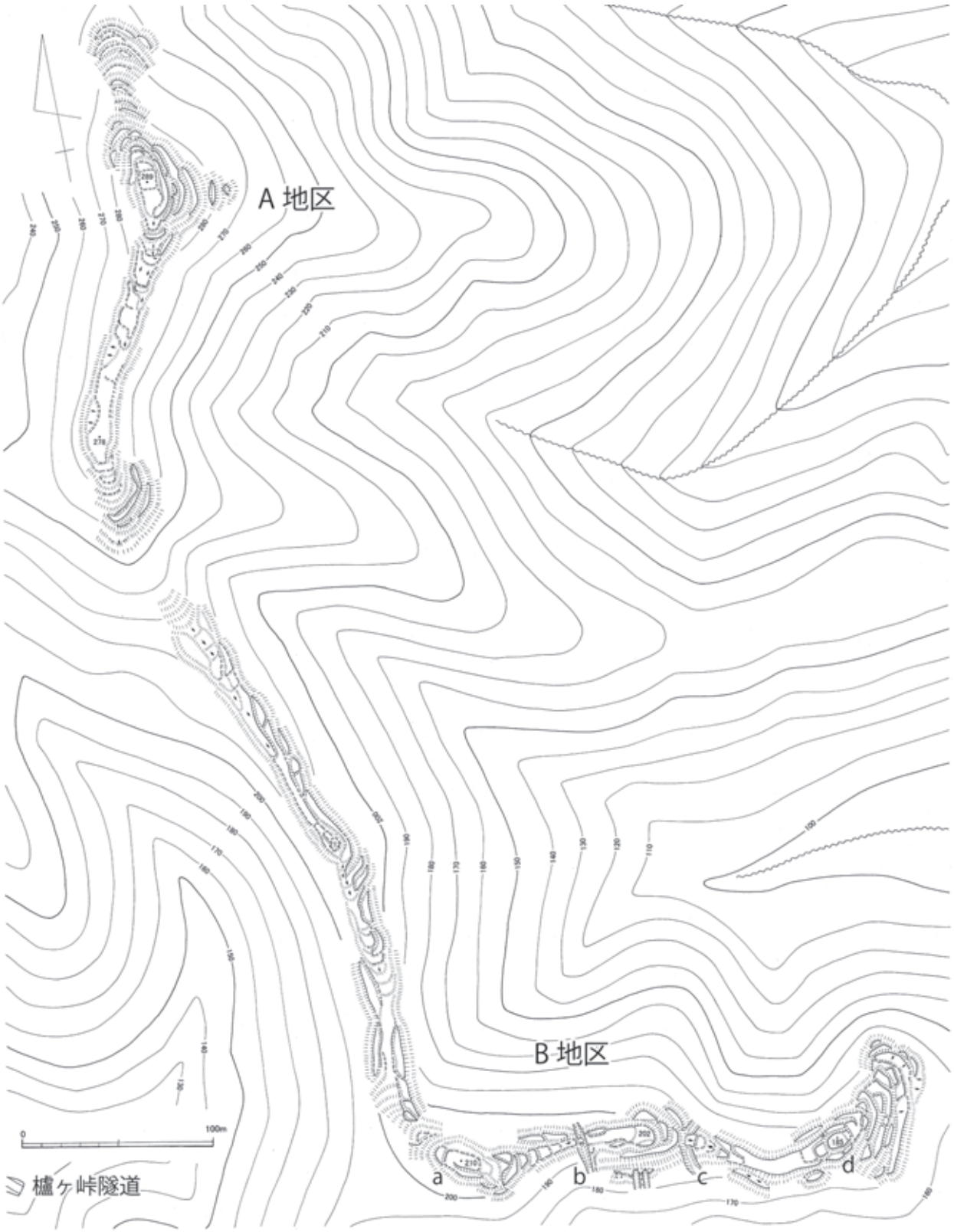
最も北側の A 地区（第 57 図）は標高 289m の頂部を中心に南北 300m ほどに渡り、曲輪群が展開する。基本的には平坦地形にはあまり加工を加えず、傾斜地形の場所に階段状に小曲輪群を展開させる構造を見せる。頂部の南側の尾根上の曲輪群には、一部石列などの構造物も確認することができるが、堀切などの防御遺構を確認することはできない。

A 地区の南側からは、尾根上に曲輪群が途切れることなく展開するが、主に東側斜面に向けて構築されているような印象を受ける。300m ほど南へ進んだ標高 210m の頂部が B 地区の中心となる（第 57 図 a）。a からは東側と南の櫨ヶ峠側へ尾根は分岐するが、曲輪群は東側に見られる。この B 地区も、基本的には階段状に曲輪群を連立させる構造であるが、他の A や C 地区とは異なり、通常の城郭の縄張りに見られるような堀切（b,c）や竪堀群も確認することができる。そのことからわかるように、B 地区 a から東側の尾根上の曲輪群は、木下城周辺城館の中でも比較的曲輪の整形が丁寧になされて平坦になっている印象を受ける。東側 c 周辺は小曲輪群が雛壇状に連続する構造をとる。

B 地区から南、櫨ヶ峠の切通し道までは自



第 56 図　木下城縄張り図（事務局作成）



第 57 図　木下城周辺城館（A・B 地区）縄張り図（事務局作成）

第 58 図　木下城周辺城館（C 地区）縄張り図（事務局作成）

然の尾根地形が続くが、峠道の南側からまたC地区の曲輪群が展開する。標高200～230m前後のそれぞれの頂部a～eを中心に曲輪群が展開するが、元々の平坦地形はあまり整形することなく、傾斜地には階段状の小曲輪群を連続させる構造を呈している。主に尾根の東側に向けて小曲輪を構築している様相を呈し、東側に対して曲輪群構築の志向性を読み取ることができる。A地区と同様、このC地区にも堀切や竪堀などの顕著な防御遺構は確認することはできない。

第59図　木下城周辺城館群（B地区）堀切

以上のように、木下城に加え、その北側の尾根上には1.5kmにもわたって長大な曲輪群が展開している。木下城自体が城主等は不明であるものの、文献133では木下城の東麓に「小野田屋敷（豊前D3）」があることから、木下城と小野田屋敷の小野田氏との関係を説いている。確かに木下城と小野田氏との関係を否定するものではないが、木下城周辺城館群の縄張り構造は、大軍が一時的に駐屯するための構造に適しており、また木下城の北約2km地点には、永禄11年（1568）の毛利氏と長野氏による長野城・三岳城の攻防戦で戦場となった宮山城も位置することを考え併せれば、木下城及びその周辺城館群も、永禄11年の合戦に関連した城館群である可能性も考えられる。いずれにせよ、文献史料等の検討を含め、今後詳細な調査が必要となるであろう。

【史料】なし　【文献】3,5～8,9,**10**,13,16,18,131,133,**142**

豊前34　高畑山城（たかはたやまじょう）　　**郡名**　企救郡　　**別称**　高畑城　　**図幅名**　徳力（東）
種別　山城　　**所在**　北九州市小倉南区道原

【沿革】紫川支流の中谷の奥、鱒淵貯水池の北西に聳える高畑山に位置する。

『取調簿』には「高畑山城」として、「（道原）村ノ南、高畑山ノ頂ニアリ。東西八間、南北八間許ノ円形平地ナリ。東方一町許ノ山腹ニ、百二十間余ノ平地アリ。馬攻ト云。（古時馬場ノ跡ナラン）」とある。

第60図　高畑山城遠景

【概要】鱒淵貯水池の北西、標高439mの高畑山山頂に位置する。北の道原集落からはその山容をよく見ることができる。山頂はほとんど人為的な造成はなされていないが、その東側の尾根上に曲輪群が展開する。一つ一つの曲輪群は、一辺約10mに満たない小曲輪だが、階段状に約10段、約100mにわたって連続し、東端部は標高429mの小頂部となっており、その東側にはやや大きい曲輪を1段設けている。ここが『取調簿』のいう所の「馬攻」と考えられるが、馬場かどうかは不明である。また、山頂の北側の尾根上にも断続的に曲輪群が展開し、3つの曲輪群が長さ約400mに渡って断続的に置かれている。一つ一つの曲輪群は小曲輪がいくつか密集する

程度である。以上のように、高畑山山頂を中心とし、東側と北側の尾根にかけて小曲輪群が連続するという、非常に単純な縄張り構造で、堀切などは一切認められない。恒常的な構造というよりは、臨時的な駐屯地としての印象を強く受ける構造である。

なお、『福岡県の城』には、山頂の南側の尾根上にも 500m に渡って曲輪群が細長く展開する様子が図示されているが、実際には自然の尾根地形か、採石などの痕跡が見られるばかりで、明確な城郭遺構を確認することはできなかった。

【史料】なし 【文献】7,8,**9**,10,13,16,18,131,133

第 61 図　高畑山城縄張り図（事務局作成）

豊前 35　赤松城（あかまつじょう）

郡名　企救郡　　別称　赤松ヶ鼻城・赤松ヶ畑城　　図幅名　徳力（東）
種別　山城　　所在　北九州市小倉南区道原

【沿革】高畑山城の北西約 1.5m 地点の標高 538m の頂部に位置する。

『古城記』には「同（保障城一ヶ所）道原村ノ内、赤松ヶ鼻ニアリ」とし、赤松太郎義祐の居城とする。『取調簿』には「赤松城　一名赤松ヶ畑塁」とし、「（道原）村ノ西南、城山ノ頂ニアリ。東西八間、南北十二間楕円形ノ平地ナリ。（中略）西北一町許ノ麓、東ヶ谷ノ叢中ニ、孤壇アリ。面積五歩許中ニ、五輪ノ塔二箇、野石ノ碑四箇ヲ立ツ。而シテ彫字ヲ見ズ。土人ハ城主赤松氏ノ墓標ナリト云」とある。

第 62 図　赤松城遠景

【概要】道原集落にある道原貯水池から正面奥に聳える城山の頂部に位置し、山頂には東西約 50m、南北約 30m の平面略三角形の非常に平坦に整形された主郭が置かれる。その主郭の西側には、幅約 15m、深さ約 7 ～ 8 m にも及ぶ堀切により、西側からの侵入を防いでいる。堀幅は 10m 前後、全長も 50m ほどにも及び、非常に規模が大きい堀切である。堀切に沿って築かれた土塁状の高まりには、大石が並んでおり、堀切構築の際に掘り出された石が人為的に堀端に沿って置かれたかの印象を受ける。堀切の西側にも平坦な地形は広がっているが、そこに人為的な造成の痕跡はなく、堀切と主郭のみの単純な構造であったと推察される。

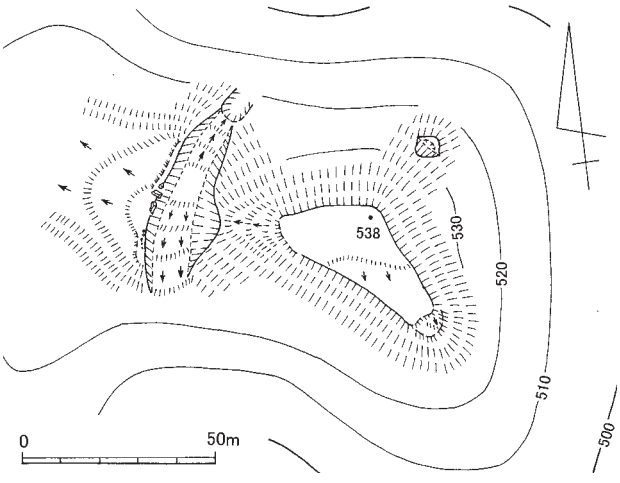
第 63 図　赤松城
（上：主郭・下：堀切の石群）

赤松城は、企救郡から福智山系を越えて筑前鞍手郡へ抜ける峠道に差し掛かる場所に位置し、峠越えのルートを考慮し、築城されたものとも考えられる。『取調簿』の言う赤松氏の墓標は未確認である。

なお、『古城記』には、「長尾　田川郡　応永年代赤松太郎義祐居城ス」とある。これが赤松城を指すのか、田川郡の別の城を指すのかは不明である。

【史料】あり

【文献】1 ～ 3,5 ～ 10, 13,16,18,131,133



第 64 図　赤松城縄張り図（事務局作成）

豊前 36　丸ヶ口城（まるがぐちじょう）

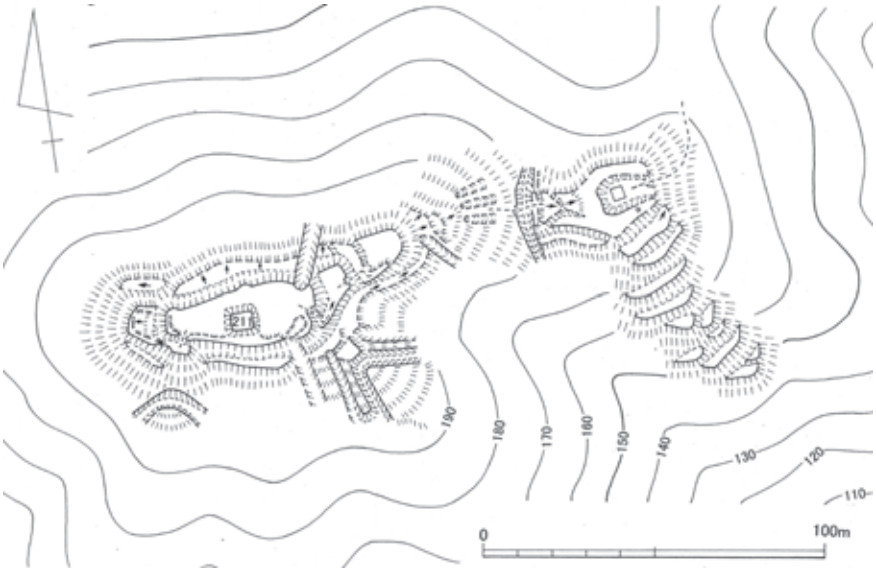
郡名　企救郡　**別称**　福相寺城・丸ヶ城・丸ヶ口福相寺城・隠蓑城　**図幅名**　苅田（西）
種別　山城　**所在**　北九州市小倉南区隠蓑・堀越・横代

【沿革】貫山の北麓、横代に突き出した標高 211m の頂部に位置する。『豊前志』には「隠蓑村城阯」として名が挙がり、『取調簿』には「丸口城　一名福相寺城」として、長野種盛から佐助に至る長野氏 11 代の城主名を挙げ、元和元年（1615）に助直が自害して廃城したとある。所在情報としては「（丸ヶ口）村ノ西、城山ノ頂ニアリ。東西二十四間、南北七間。長円形ノ平地ニシテ周囲ニ一間許平坦ノ縁アリ。東方三十間ヲ下ル山腹ニ嶽ノ観音ナル堂宇アリ。堂ノ上手ニ濠渠ノ跡ヲ存ス」とあり、現状の縄張りとほぼ一致する。『企救郡誌』（文献 13）には旧版の『企救郡誌』を引用し、「丸箇口」として、「堀越城の大手口なるに依て、なづけしなるべし」とある。

第 65 図　丸ヶ口城堀切

第 66 図　丸ヶ口城内の嶽の観音堂

【概要】九州自動車道北九州 JCT の北東側にあり、隠蓑、横代、堀越の 3 地区の境となる標高 211m の頂部に位置する。山頂の主郭は、東西約 40m、南北約 20m で、中央には一辺約 10m、高さ 1 m の方形の壇状遺構を築く。主郭およびその西側の曲輪には低いながらも土塁が巡る。主郭の南東側と南西側には堀切を構築して防御し、東側は階段状にさらに曲輪群が展開する。主郭の東約 100m 地点には、「嶽の観音」の堂が建ち、曲輪状に平坦に造成がなされる。一見、城の曲輪か否か判断に苦しむが、『取調簿』の言うように山頂側に堀切 1 本（堂ノ上手ニ濠渠）があり、曲輪であると判断される。そして南東側斜面には階段状に小曲輪が 12 段ほど構築される。全体的に曲輪の平坦面は非常に丁寧に整形がなされており、堀切などの防御遺構も入念に構築されている印象を受ける。



第 67 図　丸ヶ口城縄張り図（事務局作成）

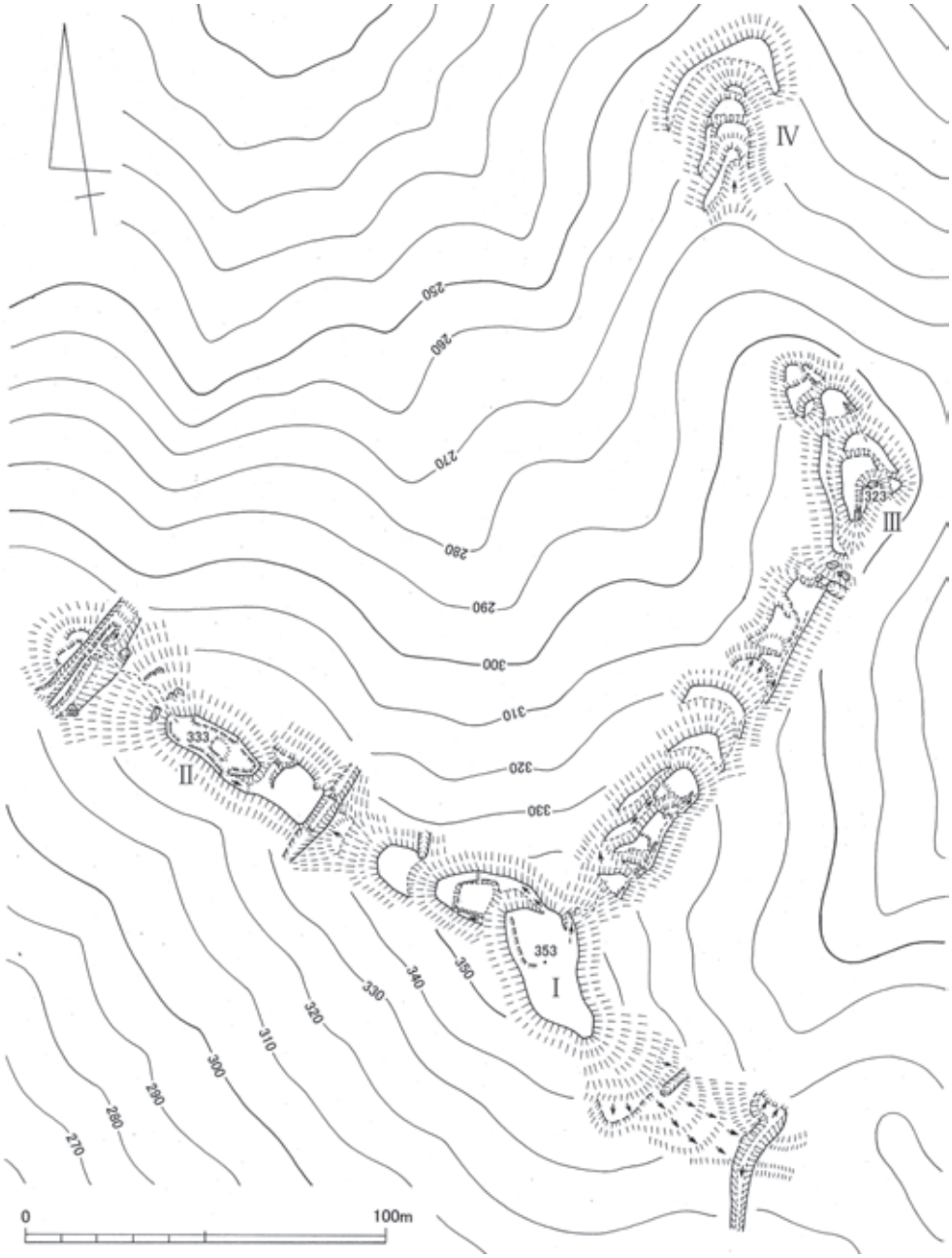
【史料】なし　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**, 13,15,18,131,133,**142**

豊前 37　堀越城（ほりこしじょう）

郡名　企救郡　**別称**　越堀城・鷲ヶ城・横代山城・横武城　**図幅名**　苅田（西）
種別　山城　**所在**　北九州市小倉南区堀越・横代

【沿革】貫山の北麓、丸ヶ口城の南約 1 km 地点に位置する。

『取調簿』には「越堀城」として、長野氏の一族、堀越十郎義豊、弥太郎義永の居城であるとする。所在情報としては、「（堀越）村ノ東ニアリ。大城、小城ノ二址アリ。南大城、東西十間半、南北廿四間。北小城、東西十五間、南北六間、平坦ニシテ城臺ノ形ヲ存スルノミ。南東三十間余を距リ、屹立セル巌石ノ頂ニ小平地アリ。物見櫓ノ跡ナリト云。」とある。『企救郡誌』



第 68 図　堀越城縄張り図（事務局作成）

（文献 13）は『堀越村誌』を引用して、「鷲城（三笠山亦堀越城トモ云）城址」と名を挙げる。また、『企救郡誌』はさらに『豊筑古跡名残』を引用し「堀越城山」として、「城越山あり。城臺の跡、箱を重ねたるが如く、嶺三つあり。大城、小城、鷲ヶ嶽といふ。東に鷲ヶ嶽あり。大手は此山の東北の手のひらを立し如し。」とある。

なお、『古城記』では「一　城跡一ヶ所　堀越村　右ハ高橋治勝ト云フ人居城ノ由」とし、高橋治勝を城主とするが、『豊前志』では「横代山城阯」として「高橋治部居城」と記している。また、『古城記』には別に「一　横代村　丸が口　鷲が城又ハ地山ト云フ」とあり、鷲ヶ城が丸ヶ口城の別称であるとも記しており、名称については、一部混乱が生じている可能性が高い。

【概要】堀越と横代の境にあたる標高 353m 地点を中心として、そこから北東側と北西側の尾根上を中心に曲輪群が展開する。Ⅰは主郭で、南北約 50m、東西約 30m とやや大きめの曲輪で非常に平坦に整形している印象を受ける。ここが「大城」と呼ばれる箇所と思われる。Ⅰから北西側にかけては、階段状に曲輪群が展開し、堀切２本を挟んでⅡの曲輪に至る。Ⅱは東西約 10m、南北約 30m で、平坦面の周囲に高さ 0.5m にも満たない低い土塁が巡っている。平坦面内部にも土壇状の高まりなどがあり、区画がなされていた可能性がある。ここが「小城」と呼ばれる箇所であろう。Ⅱの北西側、20m ほど下った箇所には、併せて幅 20m にもなる堀切２本が構築され、深さは 10m にも及ぶ。その先には全く人為的な造成はなされず、ここで城域が画されていることがわかる。

第 69 図　堀越城近辺からの眺め
（笠岩から。奥に足立山が見える）

Ⅰの南東側は 50m ほど人工的な造成はほとんど見られず、尾根の鞍部に深さ約５m の堀切１本が設けられ、その先は平坦地形であるが、曲輪面などの人為的造成はなされてはいない。一方、Ⅰの北東側には、尾根上に階段状の小曲輪群が約 100m 続き、堀切１本を挟んで、標高 323m の頂部、Ⅲの曲輪群に至る。頂部周辺は自然の大石が露頭しており、その石を避けるようにして曲輪面の造成加工がなされている。ここが『豊筑古跡名残』の記載に基づけば、「鷲ヶ嶽」にあたる箇所とみられる。Ⅲの北側は、100m ほど間隔を置き、尾根上にⅣの曲輪群が構築される。斜面地形を利用し、階段状に５段ほどの小曲輪群を造成加工する。堀切などは確認できないが、明らかに人工造成の曲輪群の平坦面である。

第 70 図　堀越城堀切

以上のように、堀越城は尾根上約 500m にもわたって曲輪群を構築するやや規模の大きなものである。『福岡県の城郭』には永禄 12 年（1569）あるいは元亀元年（1570）の「鷲岳」の記載のある文書に注目し、堀越城が大友方によって駐屯の城として利用されたことが想定されている。城の規模、あるいは丸ヶ口城との位置関係から考えても、堀越城と丸ヶ口城はこの時期の大友方の軍事行動の中で利用された城とみることも可能であろう。

【史料】あり　【文献】1,5 ～ 8,**9**,**10**, 13,15,131,133,**142**

豊前 39 長野城（ながのじょう）	郡名　企救郡	別称　上長野城	図幅名　苅田（西）
	種別　山城	所在　北九州市小倉南区長野	

【沿革】護念寺のある旧上長野集落の南側、現在の長野緑地公園の南側の山稜上に位置する。企救郡の城の中でも、門司城と並び、江戸時代以来の地誌類で最も記載の多い城である。長野氏の居城として、永禄年間の大友氏、毛利氏との合戦に関わる重要な城郭である。一次史料でたどれるのは、永禄 11 年（1568）の毛利氏による長野城攻めによって、長野氏が企救郡から京都郡へと移ることになったのが最後であり、それ以後の一次史料には長野城の記載は見受けられない。しかしながら、全国的にも卓越した畝状空堀群の存在から、永禄 12 年以後、天正 14 年（1586）の豊臣秀吉の九州平定に至るまでの間の、高橋鑑種・元種による改修・使用も想定する見方もある。

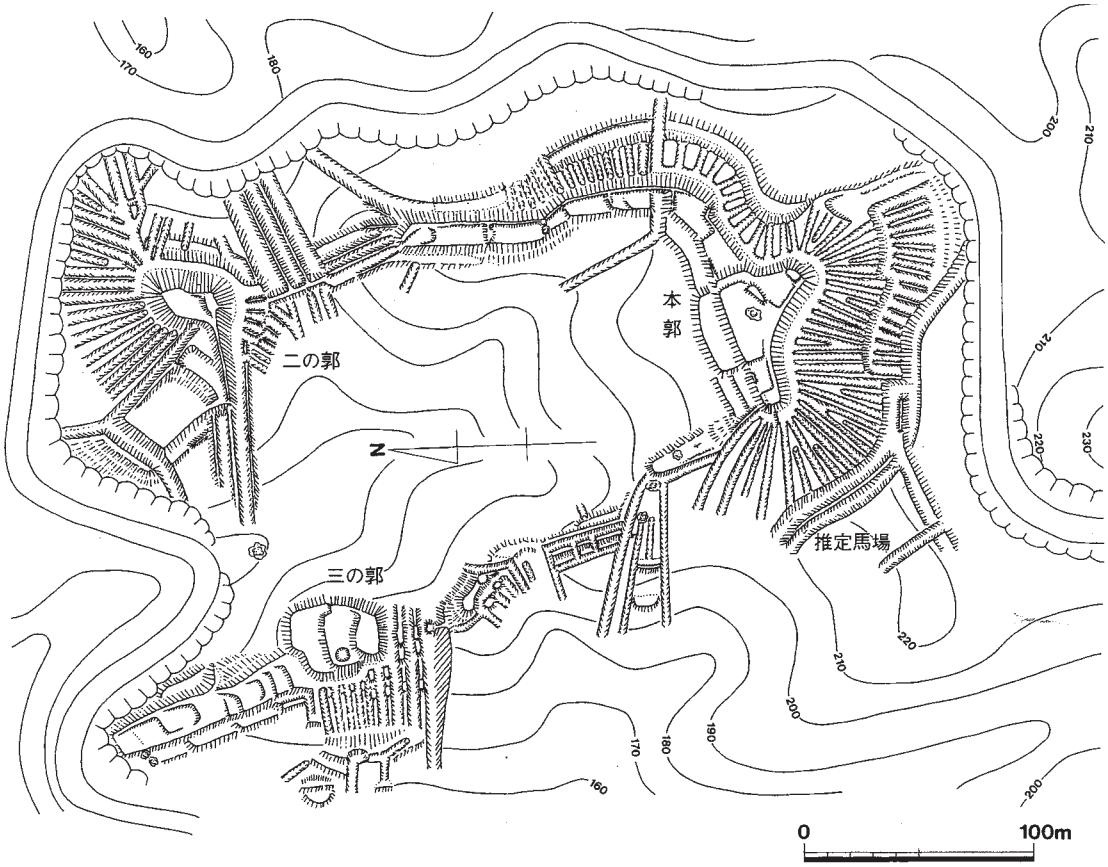
【概要】長野緑地公園の南、『取調簿』のいう「城山」の頂部（標高 237m）を中心に曲輪群が展開している。山頂部を中心に北側の谷を挟んで、北東側と北西側の尾根上に、U 字形状に曲輪群が延び、その総延長は 600m を上回る。曲輪群は大きく本郭、二の郭、三の郭に三分され、それぞれ同程度の規模をもって、並列するような構造を呈し、郭と郭の間は、階段状に曲輪群が並列し、場所によってはそれらを土塁でつないでいるような構造をしている。

長野城で最も特徴的な構造は、250 本近くもある竪堀や横堀から構成される畝状空堀群の存在である。畝状空堀群は、北部九州の戦国期山城の防御遺構の特徴の一つでもあるが、単独の城郭においてこれほどまでに畝状空堀群を発達させた事例は他にはなく、全国随一の規模であると言えよう。畝状空堀群の配置状況を見ると、曲輪群の内側の谷に向けてはほとんどと言ってよいほど確認できず、逆に曲輪群の外側周囲に向けて、集中的に構築されており、その志向性を窺わせる。特に本郭の南側は竪堀群が２段に渡って構築されており、苅田町の等覚寺城と類似する構造を見せる。

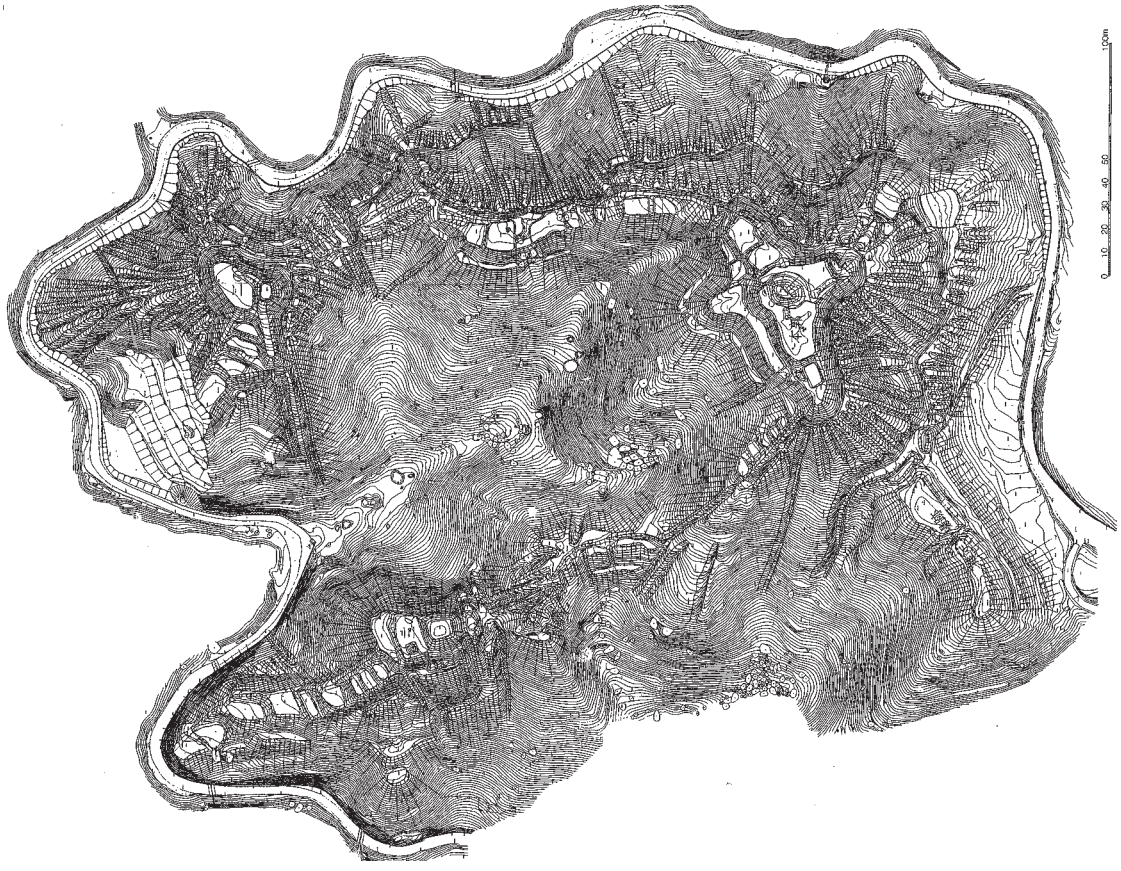
第 71 図　長野城周辺 C 地区堀切

第 72 図　長野城周辺 D 地区の横堀状の窪み
（後世の山道とみられる）

また、北九州市教育委員会の調査では、長野城本体の周囲の尾根上には、A ～ I 地点他の城郭遺構があるとされ、横堀の位置などから、永禄８年（1565）に大友氏が長野城を攻めるために包囲網を形成したという陣城遺構であるとも考えられている（文献 36）。しかしながら、今回、それらの一部、A ～ F 地区、臼山地点、護念寺裏山地点を踏査したところ、城郭遺構とされる平坦面は自然の平坦地形、あるいは城郭以外の目的で行われた人工的な造成平坦面（臼山地区など）、長大な横堀遺構は、近世以降の山道（木馬道か）であることがわかり、かろうじて C 地区が城郭遺構であることが判明した（第 75 図）。C 地区は長野城の谷を挟んで北東側の尾根上に当たり、尾根の頂部を主郭とし、周囲に帯曲輪と堀切２本を構築していた。長野城を攻めるための陣城というよりも、長野城の出城として考えた方が良い可能性



第 73 図　長野城縄張り図（文献 36・村田修三・千田嘉博作成）



第 74 図　長野城測量図（文献 36）

があると判断される。地誌類にも、長野城周辺の城郭遺構については、記載を確認することはできないため、今後、長野城の範囲については、年代等とも併せて、さらなる詳細な検討が必要であろう。

【史料】あり

【文献】1 ～ 6,8,**9**,**10**,16,18,**131**,133,**134**,**135**,**142**

第 75 図　長野城周辺城館（C 地区）縄張り図
（事務局作成）

豊前 41　貫城（ぬきじょう）

郡名　企救郡　　別称　城ノ腰城　　図幅名　苅田（東）
種別　丘城　　所在　北九州市小倉南区貫

【沿革】貫川の南側、水晶山から北へ派生する標高 20 ～ 30m の尾根上に位置する。

『取調簿』には、応永年間には貫掃部介が城主であったとし、「（上下貫）村ノ西南七町余ヲ距ル字城ノ腰畑地ノ中央ニ、高一間余ノ台アリ。東西十三間、南北十五間許ノ方形平地ナリ。東北三十間許ヲ距リ、濠渠ノ趾ヲ存ス」とある。『小倉市史補遺』（文献 16）には「僅かに其の形跡を止めているが仔細に其の地形を検するに、本丸の外に二の丸、三の丸と覚しきものが階段状に現存し（畑地）、なお附近の周囲にも点々として防禦線にあたる丘陵の存在を見ることが出来る」とあり、丘陵全体に曲輪群が広がっている可能性を指摘している。

【概要】中貫本町の荘八幡宮や松尾神社がある低丘陵の谷を挟んで東側、南北に長く延びる舌状台地上の標高

第 76 図　貫城遠景

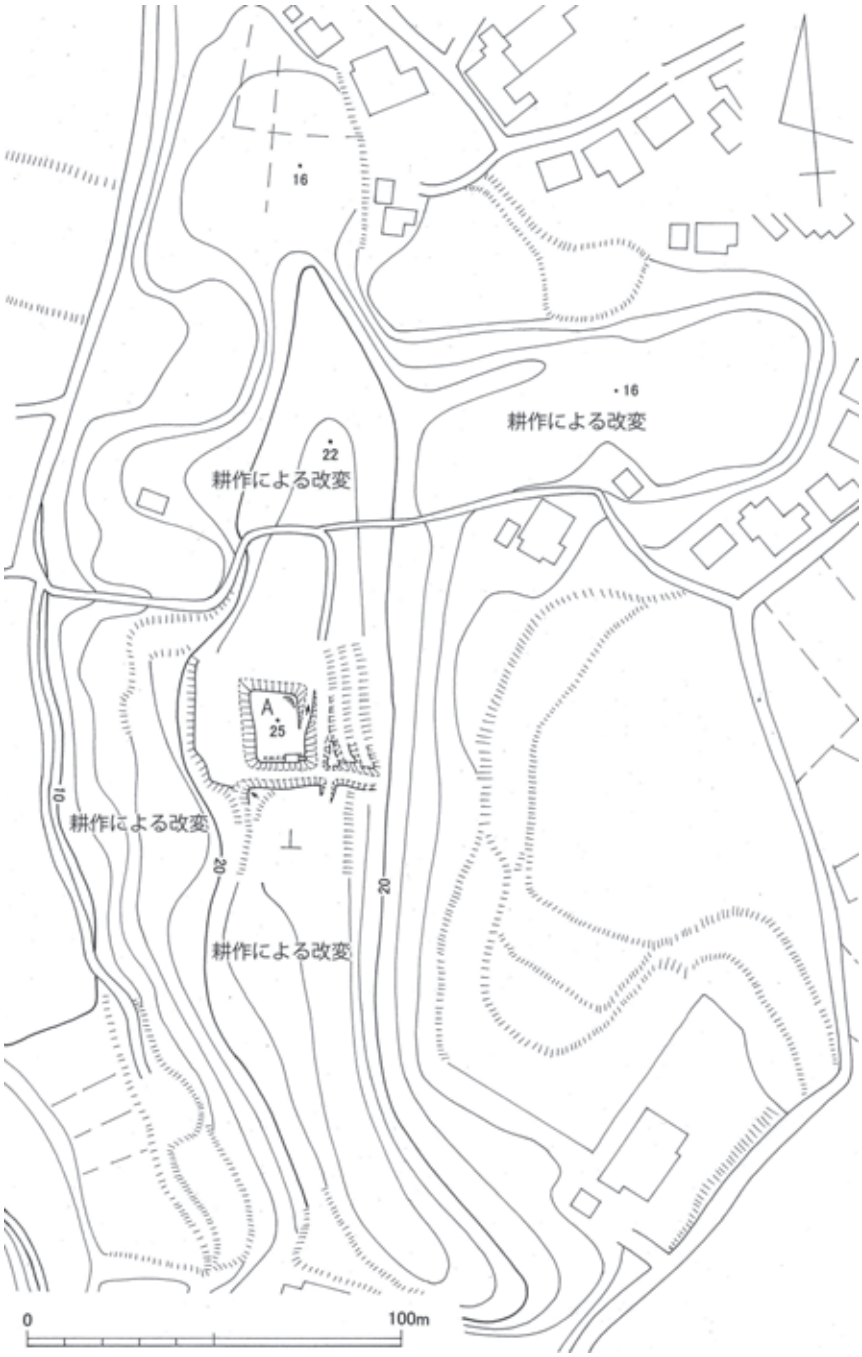
第 77 図　貫城曲輪 A

25m 地点には、一辺 20 ～ 30m、高さ約 5 mの方形台状の平坦面 A がある。南側には一部土塁状の高まりもあって、かつての曲輪であると想定される。これが『取調簿』にある方形平地の台であるとみられる。丘陵内でもここが最も標高が高く、貫城の中心的な場所であったと考えられる。また、A の南側には、横堀あるいは堀切とみられる深さ 1 ～ 2 m 程度の掘り込みがあり、これもかつての堀の一部とみられる。

さらには A の周辺も平坦面が階段状に続いており、『小倉市史補遺』には二の丸、三の丸の曲輪群の痕跡ではないかとしているが、後世の耕作や墓地などによる改変が激しく、これらの平坦面群がかつての城郭の曲輪の痕跡を表しているかどうかは地表面観察のみでの判断は難しい。『北九州の城』（文献 133）にはさらに「諸書院」と呼ばれる箇所が南東側にあったともいうが詳細は不明である。いずれにせよ、台地上に遺構が展開していた可能性は十分考えられるものの、後世の改変が想定されているため、遺構の広がり等については発掘調査等のより詳細な調査が必要である。

【史料】なし

【文献】3 ～ 7,**8**,9,10,16,18,131,133,**142**



第 78 図　貫城縄張り図（事務局作成）

豊前 42　朽網城（くさみじょう）

郡名　企救郡　　**別称**　なし　　**図幅名**　苅田（東）
種別　丘城　　**所在**　北九州市小倉南区朽網

【沿革】水晶山から北東に派生する尾根の先端部、標高55mの丘陵頂部に位置する。『太宰管内志』には、朽網にある宗林寺の説明があり、そこには「此寺の南に当りて城址あり。是松野氏の城址なり。松野氏というも長野氏の支族なるか」とあり、松野氏の持ち城であるとする。

第 79 図　朽網城遺構平面図（文献 37）

【概要】『太宰管内志』のいう宗林寺は、現在も朽網の地にあり、その南側の標高 55m の丘陵上に朽網城は位置したが、東九州自動車道により、全面発掘調査が行われ、消滅した。

発掘調査では、丘陵頂部に約 20m 四方の主郭を置き、其の西側の尾根続きには堀切 1 本を設けて城域を画す。主郭の西側を除く周囲には、幅２～３m の帯曲輪を巡らし、北東尾根には細長い曲輪を設ける構造が確認された。その他には土坑がいくつか検出されたにすぎず、鉄滓なども出土したが、城郭の時期に該当するものかどうかは不明である。

【史料】なし　【文献】9,10,18,**37**,**142**

豊前 45　茶臼山城（ちゃうすやまじょう）

郡名　企救郡 / 田川郡 **別称** 鬼邊城・海老野城・頂吉城・木部城・呼野城　**図幅名**　金田（東）
種別　山城　　**所在**　北九州市小倉南区呼野・頂吉・田川郡香春町採銅所

【沿革】近世秋月街道の企救郡と田川郡の境、金辺峠の西、茶臼山山頂に位置する。

『古城記』には「同（保障城一ヶ所）　頭吉村ノ内茶臼山」とある。また、それとは別に「鬼邊田川郡企救郡界ニアリ。応永ノ比大館盛貞居城」とある。『取調簿』には「木部城　一名茶臼山城」として、応永年間に大館九郎源盛貞が居城し、その後、遠藤孫六郎房勝、同石見守房司、さらに天正年間には末松加賀守房快が守備したとあり、遠藤氏、末松氏は宇都宮氏の配下であったとする。さらに所在情報としては「(呼野）村ノ南西、茶臼山ノ頂ニアリ。東西十間、南北十間許ノ円形地形ニシテ、僅ニ城台ノ形ヲ存スルノミ」とある。

【概要】金辺峠の西側、茶臼山山頂（標高 415m）を中心に縄張りは展開する。山頂部には南北約 25m、東西約 15m の主郭を置くが、全くの平坦ではなく、不整形の段が見られ、造成をしっかりした印象は受けない。山頂から、西側を除く三方に尾根が延びているが、そのすべてに対して、曲

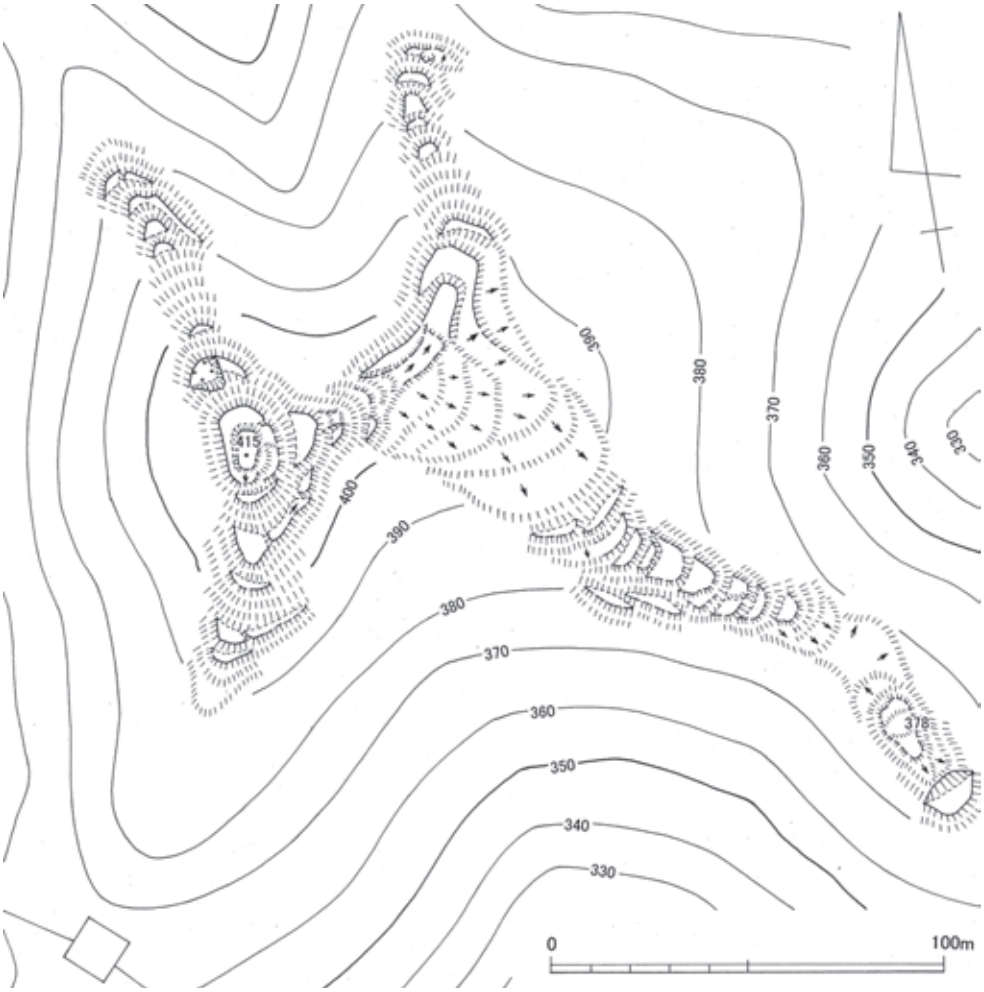
輪群が構築される。南と北へ延びる尾根には、階段状に小曲輪群がそれぞれ５段ずつ構築される程度であるが、東側の尾根には、やや広い曲輪群が展開する。自然の平坦地形が広がる箇所は、あまり良好に造成がなされていないが、尾根線が北と南東に分岐して細く傾斜する場所には、階段状に小曲輪群が構築される。特に南東側の尾根線の先端部は標高 378m の頂部をなし、その南東側に明瞭な曲輪１段を構えている。全体を見ても、堀切などの防御遺構は一切確認することはできず、吉川城などのような永禄期の陣城遺構に類似する印象を受ける。立地から見て、企救郡から田川郡へ、金辺峠を抜けるルートの抑えを意識したものであろう。また、この城の南約１km 地点には、新城（豊前 46）があり、両者が一体となって金辺峠一帯の防備を行った可能性も考えられる。

【史料】なし

【文献】1 ～ 3,5 ～ 9,**10**,133

第 80 図　茶臼山城主郭

第 81 図　茶臼山城からの眺め
（足立山が見える）



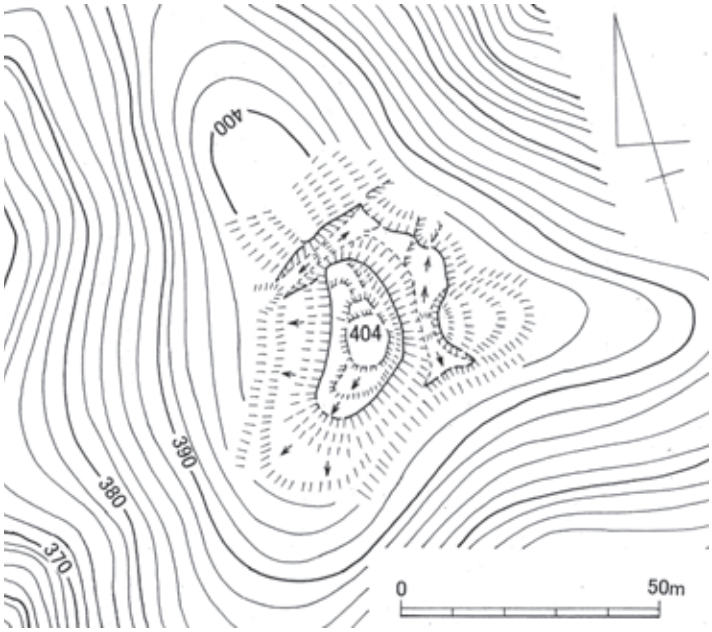
第 82 図　茶臼山城縄張り図（事務局作成）

②田川郡

豊前 46 新城（しんじょう）	郡名　田川郡	別称　なし	図幅名　金田（東）
	種別　山城	所在　田川郡香春町採銅所	

【沿革】金辺峠の南西に聳える「新城」と呼ばれる峰の頂部に位置する。地誌類等には、城としての明確な記載はなく、「新城」という地名があるのみで、『福岡県の城郭』に「採銅所村新城」として概要が記載されたのみである。

【概要】金辺峠の西に聳える茶臼山城（豊前 45）から尾根伝いに南約 1 km の標高 404m の頂部に位置する。頂部には南北約 20m、東西約 10m の、あまり平坦に整形を行っていない主郭を置き、その東側と北側に 1 本ずつ堀切を構築する。堀切の深さは主郭側が約 5 m、反対側は約 0.5m である。南側にも尾根は延びるが、そちら側は自然の緩斜面が見られるのみで、堀切などは確認できない。



第 83 図　新城縄張り図（事務局作成）

第 84 図　新城主郭

第 85 図　新城堀切

城主等の伝承がなく、性格については不明なところが多いが、北 1 km の茶臼山城と位置的にみて何らかの関係があったものとみられるが、両者の間の尾根上は、なだらかではあるが、自然地形で、人為的な造作はなく、基本的に別個の城であると考えた方が良いとみられる。

【史料】なし　【文献】10

豊前 47 手切城（てきりじょう）	郡名　田川郡	別称　牛切城	図幅名　金田（東）
	種別　山城	所在　田川郡香春町採銅所・福智町伊方・田川市夏吉	

【沿革】香春岳の北側背後に聳える牛斬山山頂から牛斬峠にかけての稜線上に位置する。『豊前志』には「手切城阯　香春岳の後にあり。千手氏の抱城なり」とあり、『古城記』には「手切　千手氏ノ末家抱城」とある。これまで手切城については、詳細な場所が全く不明であったが、『豊前國田川郡全図』（国立公文書館蔵・明治 22 年発行・西田明圓著）を偶然にも見たところ、香春岳の北側に

城跡の凸の印が落ちており、そこが現在「牛斬山」と呼ばれていることがわかった。「牛」と「手」は筆運びが非常に類似しており、江戸時代の地誌編纂の際に誤写があった可能性が考えられた。あらためて文献を確認すると、『太宰管内志』には『本朝通記後編十七巻』を引用し、応永4年（1397）に大内義弘が豊前に侵攻、少弐氏を破ったのちに「馬岳・赤松・牛切之数城」を戦わずして降伏させたことが記される。この「牛切」の城が手切城を指しているものとみられる。

第86図　手切城位置図（国土地理院1/25,000地形図「金田」を一部改変して事務局作成）

第87図　『豊前國田川郡全図』に示された牛斬山の城（部分・国立公文書館蔵）

第88図　牛斬峠（D地区）からみた牛斬山（A地区）

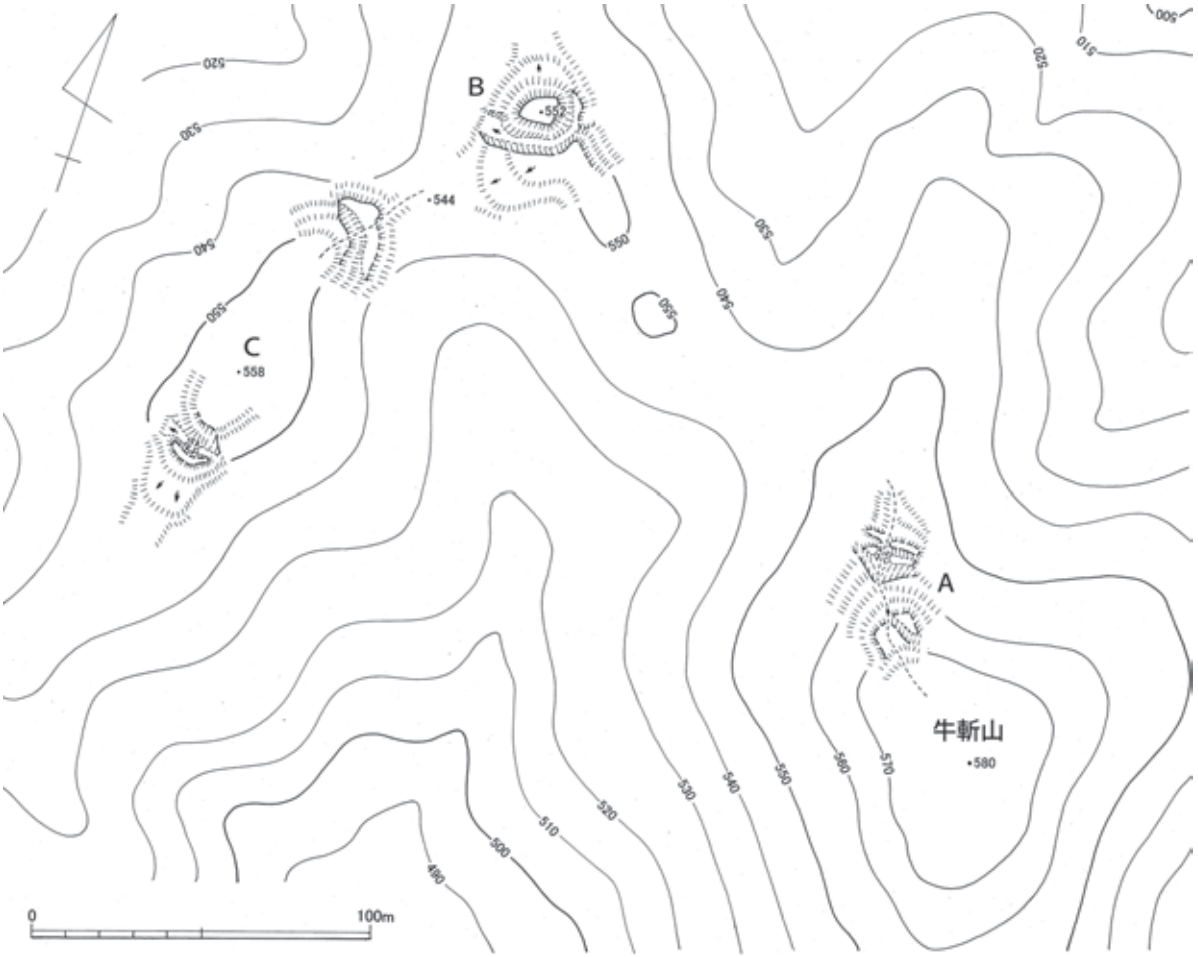
第89図　牛斬山から見た香春岳（奥に英彦山）

第90図　手【概要】五徳越から牛斬峠を経由し、牛斬山山頂まで現地確認したところ、牛斬山周辺および牛斬峠に城館遺構を確認することができた。牛斬山山頂（標高580m）一帯は自然地形で、人為的な造成の手は全く認められないが、平坦な地形である。山頂からは香春岳を初めとして、田川郡一帯を一望できる高所で、特に山頂の南にある通称「国見岩」からは香春岳の三峰全てを俯瞰することができる。城館遺構は、山頂から北側の鞍部へ下りる途中に1ヶ所（A地区）、福智山へ続く南北の主稜線上に2ヶ所（B・C地区）、さらに稜線を南へ約1km地点の牛斬峠に1ヶ所（D地区）の合計4箇所が確認された。

A地区は、山頂から50mほど下った箇所に堀切1本と、山頂側に一辺10mにも満たない小曲輪を置く。山頂部を防御するという明らかな意図をもって構築されており、自然地形のままではあるが、山頂部が駐屯などを目的とした空間として考えることができる。

A地区から200m足らず北西側に進むと、福智山へと続く稜線上へたどり着く。その稜線の結節点となる箇所がB地区である。B地区には標高552mの頂部に一辺約

第90図　手切城D地区堀切



第 91 図　手切城縄張り図（A ～ C 地区・事務局作成）

10m の曲輪を置き、その南側に弧を描くように横堀状の堀切を巡らせる。堀切の深さは曲輪内部から 3 m である。B 地区の南西側の頂部（標高 558m・C 地区）は自然地形であるが、頂部の北側と南側には人為的に造成した曲輪や堀切を確認することができ、標高 558m の頂部を防御しようという意図が確認できる。

そして、これら A ～ C 地区から稜線上へ南約 1 km 地点にある牛斬峠にも、城館遺構を確認することができる（D 地区）。標高 467m の頂部に 10m に満たない曲輪を置き、その北東側と南東側に堀切を設ける。南側の堀切はかなり埋没してはいるが、若干の堀の窪みを残している。

第 92 図　手切城縄張り図
（D 地区・事務局作成）

以上のように、手切城は牛斬山から牛斬峠にかけての稜線上に点々と小曲輪と堀切を確認することができた。これは居城というよりも臨時的な築城を彷彿とさせる在り方で、障子ヶ岳城の城館群とも併せて香春岳を北側から包囲する位置となり、香春岳城包囲のための陣城群とも考えられるが、現状では断定できず、今後さらなる検討が必要であろう。

【史料】あり　【文献】1,2,5,7 ～ 10

豊前 48　花立城（はなたてじょう）

郡名　田川郡　　別称　なし　　図幅名　金田（東）
種別　山城　　所在　田川郡香春町採銅所

【沿革】味見峠の西、田川郡と京都郡の境をなす山稜線から西側に下った尾根の頂部に位置する。地元の伝承では、香春城主原田義種が落城の際、花立の砦に落ち延びようとしたが討ち取られ、祀ったのが東山現人神社であるとされている（文献 145）。

【概要】尾根線上の標高 223m の頂部に、東西約 20m、南北約 10m の主郭を置き、その周囲には、幅２～３m の帯曲輪を巡らせる。東側の尾根続きには、堀切を構築する。尾根の中央部分は埋没により堀が埋もれているようであるが、元は尾根を掘り切っていたとみられる。主郭側からの堀切の深さは約４m としっかりと構築している。

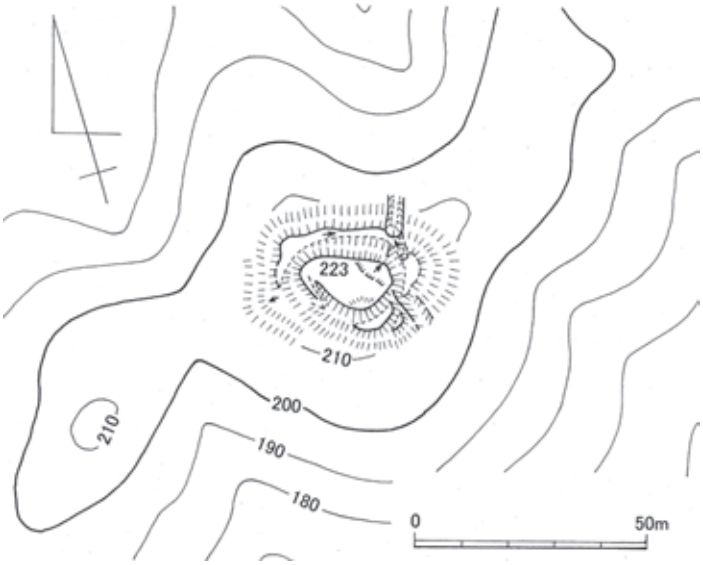
花立城は諸文献に記載がないため、明確な性格を言うことは難しい。しかしながら、その立地を見ると、田川郡と京都郡との境をなす稜線上には、障子ヶ岳城（豊前 134）を中心として南北に点々と出城群が構築されている。その稜線上から花立城へは直接アプローチもできる。この花立城も、単体で城の体をなし、香春城の出城のように伝承されているとはいえ、障子ヶ岳の城館群の中で、その性格を考えることが出来るのではなかろうか。

【史料】なし

【文献】145

第 93 図　花立城遠景

第 94 図　花立城堀切



第 95 図　花立城縄張り図（事務局作成）

豊前 50　香春岳城（かわらだけじょう）

郡名　田川郡　別称　なし　　図幅名　金田（東）
種別　山城　　所在　田川郡香春町採銅所・香春

【沿革】彦山川の支流、金辺川の北西側にひときわ高く聳える三つの峰、香春岳山頂に位置する。現在、香春岳の三つの峰は、南から「一の岳・二の岳・三の岳」と呼ばれ、その特徴的な山並みは田川郡

の象徴ともされてきたが､昭和 10 年（1935）以降の石灰岩採掘により、一の岳はおよそ五合目から上が消滅してしまっている。

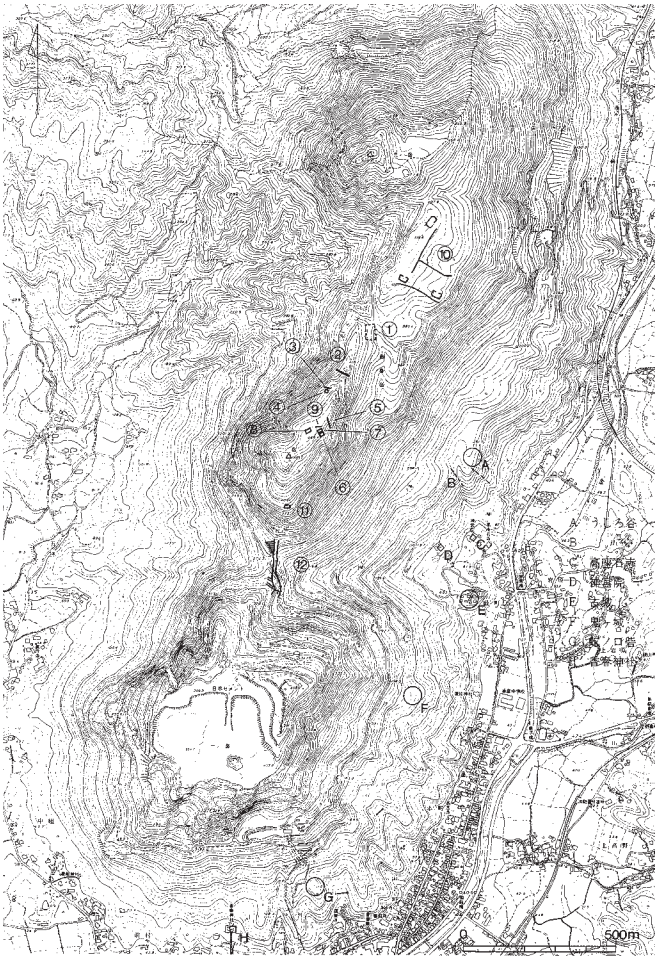
多くの古文書、地誌類等に記載がなされる香春岳城は、藤原純友の築城以来、平氏、緒方氏、香春氏、中尾氏、少弐氏など多くの城主が伝えられ、応永年間には千手氏、原田氏、天正年間には小倉にも本拠を置いた高橋鑑種、元種が在城した。天正 14 年（1586）の豊臣秀吉の九州平定においては、黒田、小早川の軍勢に攻められ、落城した。

なお、香春岳城は鬼ヶ岳城とも呼ばれるが、この鬼ヶ岳城がある字「鬼ヶ城」、香春岳東麓の城郭遺構は（第 97 図 F）、慶長年間から元和にかけての細川忠興の支城であるため、鬼ヶ岳城は、香春岳城とは別個に近世城館の項（豊前 K3）にて報告し、ここでは一の岳から二の岳にかけて所在する中世城郭の遺構を報告する。

【概要】香春岳城の遺構は、一の岳から二の岳にかけて存在したが、一の岳山頂の城郭遺構はセメント採掘によって、詳細不明なままに消滅した。明治時代の地図を見ると、標高 491m の頂部が円錐形に聳えている様子がわかるが（第 96 図）、『日本城郭史資料』（国立国会図書館蔵）に掲載されている「香春城平面図」には、山頂部を中心に円形の曲輪が置かれ、そこから南側に向って 4 段ほどの半月形の曲輪が配置された図が描かれている（文献 141 に再掲図あり）。

一の岳の山頂は、上記のように城郭遺構は詳細な調査がなされないままに消滅したが、一の岳と二の岳の間の「ダゴ土塁」、二の岳山頂周辺の遺構群については、昭和 51 ～ 59 年（1976 ～ 84）度にかけて、香春町教育委員会により発掘調査がなされ、その様相が明らかとなっている。以下は、調査報告書に基づき記載を進めることとしたい。

第 96 図　明治時代の香春岳（陸地測量部発行 1/50,000 地形図「行橋」（明治 33 年）（部分・福岡県立図書館提供））



第 97 図　香春岳遺構群配置図（文献 84）

標高 468m の二の岳の山頂部は自然の石灰岩が多数露頭しているが、その露頭と露頭の間を塞ぐように荒割の石灰岩を積んだ石塁遺構（第 97 図②（「二丁石」）・③・⑤・⑨）、あるいは石垣を持った平坦面群（第 97 図④・⑥～⑧・⑪）が検出されており、その平坦

第 98 図　二の岳からの眺め（北から）

第 99 図　二の岳の石塁遺構

第 100 図　香春岳城二の岳遺構群平面図（文献 84）

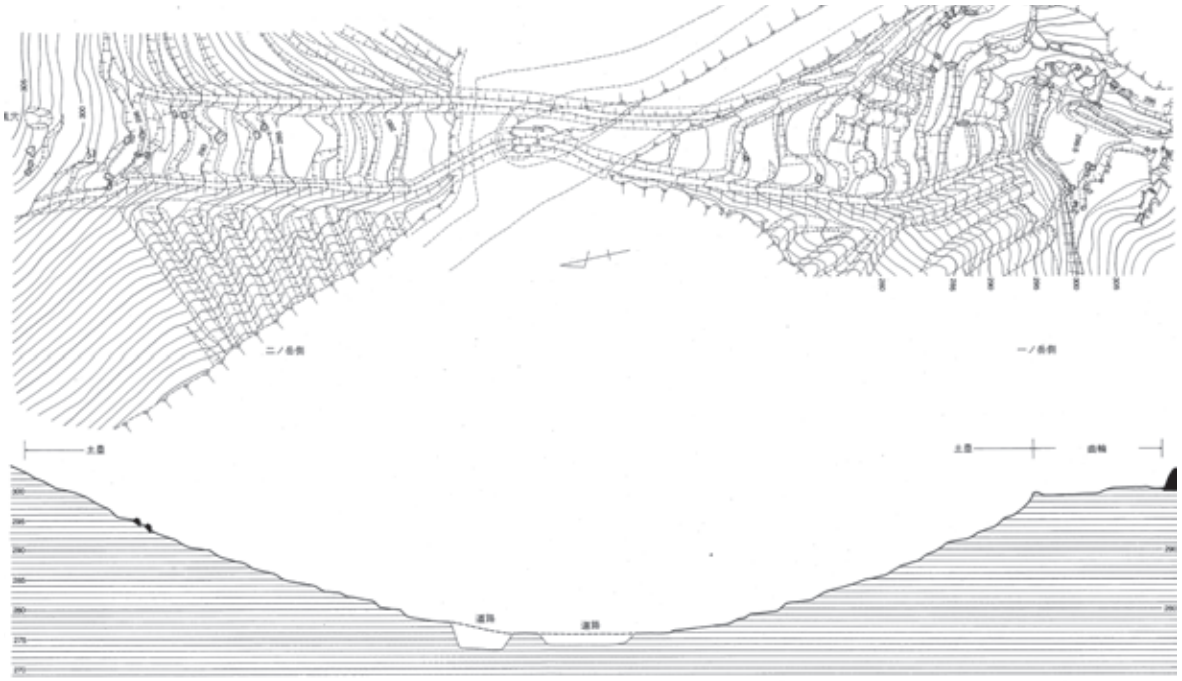
面上からはピットが多数検出されている。これらの平坦面群では、明の染付や金襴手などの貿易陶磁器が多数出土しており、建物を構え、陶磁器を使用するような恒常的な使用の可能性を示唆している。

そして、これらの石塁は場所によっては、斜面上に構築された「登り石垣」状を呈し、いずれも二の岳の山頂から北側の尾根上に構築されており、二の岳の北側からの侵入を防ぐための防御施設と想定される。

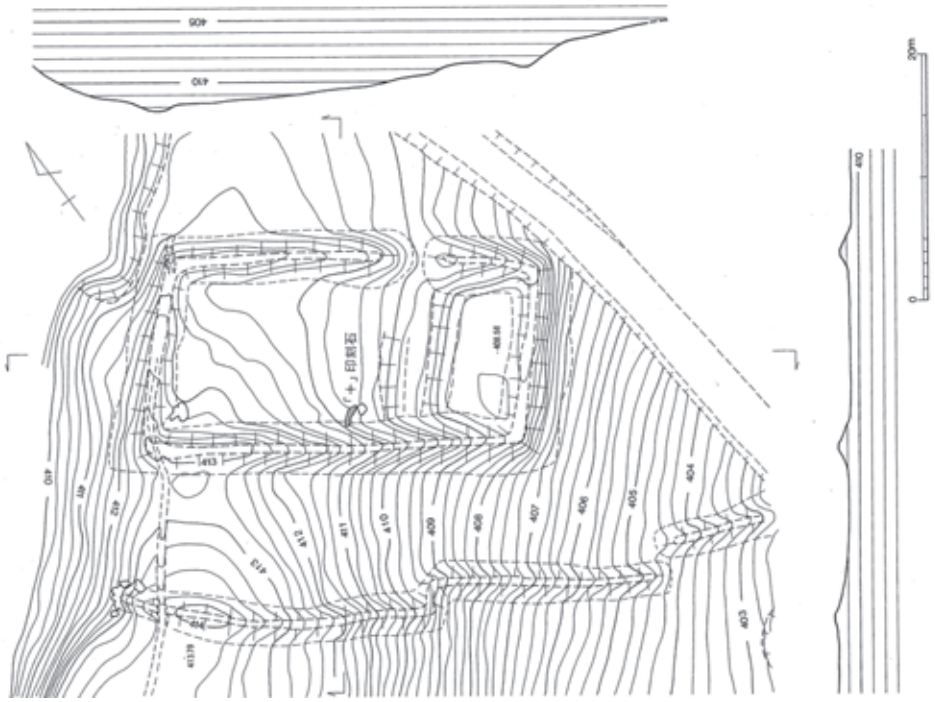
一の岳と二の岳との間の鞍部には、「ダゴ土塁」と呼ばれる遺構があり（第 97 図⑫）、現在は消滅しているが、詳細な発掘調査がなされている。これは鞍部に

第 101 図　香春岳城「ダゴ土塁」
（香春町教育委員会提供）

二本の並行する土塁を約 150m に渡って構築し、その西側斜面を中心に竪堀約 15 本（一部斜面が破壊されているため、当時はさらに多くの竪堀が掘られていたものとみられる）を設け、鞍部下から攻める敵勢から防御している。発掘調査によって、土塁には貼り石がなされていることがわかり、さらに一の岳側の土塁の付け根部分には土塁で囲まれ、一部土塁を途切れさせた曲輪が構築されていた。この遺構は一の岳と二の岳を有機的につなごうとする表れであり、一の岳と二の岳のそれぞれの山頂の城郭遺構が一体のものであったと考えられる。



第 102 図　香春岳城「ダゴ土塁」実測図（文献 84）



第 103 図　香春岳城「人枡」遺構実測図（文献 84）

また、三の岳付近には、「人枡」と呼ばれる遺構がある（第 97 図⑩）。これは、土塁を東西方向に２本、南北方向に１本構築し、その中に 10 ～ 15 m× 20 ～ 30 mの土塁で囲まれた方形区画３箇所を構築するものである。方形区画は、全て二の岳とは逆方向に向いており、土塁の途中には直角に屈曲する箇所がいくつか見られる。また、発掘調査でほとんど遺物が検出されなかったことや遺構も土塁上の柱穴や平坦面上に焼土坑などしか検出されなかったことを考え合わせると、二の岳側に対して構築された陣城遺構と見ることも可能である。しかしながら、「人枡」の名の由来については、『太宰管内志』には、土塁に囲まれた方形区画に人を入れ、その人数を計ったものとされている。また、江戸時代に馬を放牧した「牧」の構築物ではないかという意見もある。

第 104 図　香春岳城「人枡」遺構
（香春町教育委員会提供）

以上のように、中世の香春岳城については、一の岳と二の岳の山頂にそれぞれ曲輪群を構え、その間の鞍部には土塁と畝状空堀群による防御遺構「ダゴ土塁」により、それらの曲輪群をつなごうという意図を見ることが出来る。ただ、二の岳北側の「人枡」に関しては、城郭遺構かどうかについて、さらなる検討が必要であろう。

【史料】あり　【文献】1 ～ 10,21,**84**,137

豊前 53　城山城（じょうやまじょう）

郡名　田川郡　　**別称**　なし　　**図幅名**　金田（西）
種別　山城　　**所在**　田川郡福智町上野

【沿革】福智神社中宮の入口、城山橋の東側に聳える小丘陵上に位置する。地誌類等には記載は確認できず、「城山橋」という名称から、「城山」と呼ばれていた可能性が高い。

【概要】城山橋の東側の頂部（標高 199m）には、東西約 20m、南北約 10m の主郭を置き、その周囲には、帯曲輪を巡らせる。主郭の東側と南側には主郭側の深さで約４m の堀切を構築するが、後世の山道整備により堀切の中央部は埋められてしまっている。約 50m 四方で完結する小規模な城館である。

この城館遺構は、既往文献には全く見られず、福智町教育委員会の案内により確認したもので、近傍の「城山橋」から「城山城」と仮名したものである。

【史料】なし　【文献】なし

第 105 図　城山城縄張り図（事務局作成）

豊前 54　観音寺城（かんのんじじょう）

郡名　田川郡　　別称　宗印城　　図幅名　金田（西）
種別　丘城　　所在　田川郡福智町上野

【沿革】上野の古刹・興国寺の南側の尾根上に位置する。『豊前志』には「観音寺城阯」として「上野村にあり。狩野宗印居城、秋月の旗下なり」とある。『古城記』には天正３年（1575）に筑前高鳥居（鷹取）城城主・森（毛利）重實の軍勢が攻めてきたのを、狩野宗仰（印）が追い返したことなどが記載されている。『上野村誌』（文献 19）には興国寺の右手の「観音寺」と称する丘にあり、「宗印城とも云へり」とし、『古城記』の内容を記している。

【概要】興国寺の南側の標高 105m の丘陵頂部に、曲輪二段を置き、その南西側の尾根続きに堀切１本を構える。堀の深さは曲輪側で約 1.5m 程度と浅い。二段目の曲輪は植林されているが、畝の痕跡が残っており、近年まで畑地になっていたとみられる。周囲も後世の改変による段造成が見られるが、堀切の存在などから、曲輪二段は城郭遺構と見てよいであろう。主郭の東側は崩落など、改変が激しく、城郭遺構を読み取るのは難しい。秋月氏に関わる城とされるが、立地から見て、興国寺との関係も少なからず考えておく必要があるであろう。

【史料】なし

【文献】1,2,5 ～ 10, 19,21,129

第 106 図　観音寺城遠景（興国寺から）

第 107 図　観音寺城曲輪

第 108 図　観音寺城縄張り図（事務局作成）

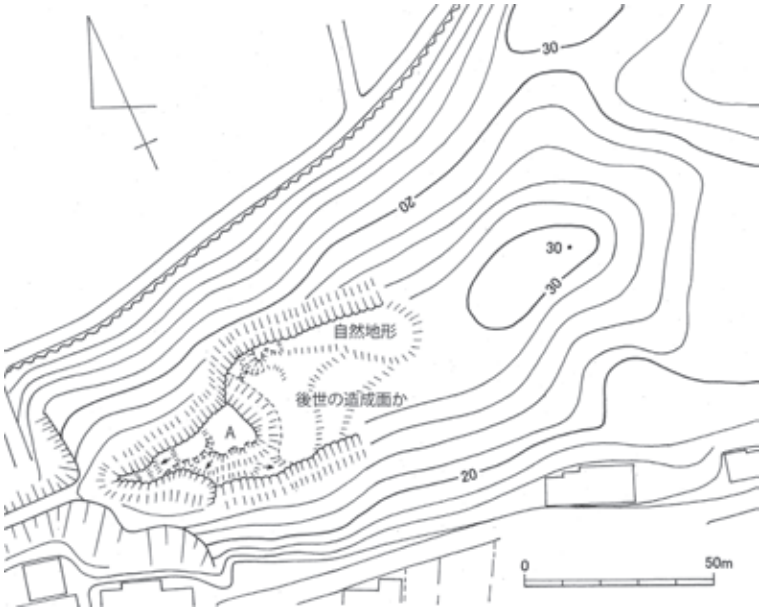
豊前 55　諏訪山城（すわやまじょう）

郡名　田川郡 / 筑前国　　別称　なし　　図幅名　金田（西）
種別　丘城　　所在　田川郡福智町上野・直方市上境

【沿革】彦山川東岸、福智町と直方市の境、旧豊前国と筑前国との境界上の標高約 30m の低丘陵上に位置する。『豊前志』には「諏訪山城阯」として「鋤木田村にあり。城主未詳」とあるが、『上野村誌』（文献 19）には、天文 11 年（1542）に大友義統と宗麟が筑前鞍手郡の鷹取城を落とし、国境の諏訪山に砦を築き、家臣の舌間国綱を置いたとし、さらに鷹取城が黒田藩の手にあった時代、赤城入道が築城して居城したという伝説も紹介している。

第 109 図　諏訪山城遠景

【概要】現在、諏訪山の丘陵は、川に突き出した部分は、造成により消滅してしまっているが、最高所とその付近については残存している。標高 30m の最高所については、自然地形であるが、その西側の A 地点は人工的に上部を平坦面化し、東側は切岸状に切り立っている。北側は断崖絶壁となっており、西側は崩落と削土によりなくなってしまっている。A 地点が諏訪山城の主郭とみることもできるが、後世の畑利用の可能性も考えられ、発掘調査等を経なければ詳細は明らかにすることは難しい。いずれにせよ、小規模な城館であった可能性が高いであろう。



第 110 図　諏訪山城縄張り図（事務局作成）

【史料】なし　【文献】1,2,7 ～ 10,19,21,129

豊前 61　新田城（にったじょう）

郡名　田川郡　　別称　弁城　　図幅名　金田（西）
種別　山城　　所在　田川郡福智町弁城

【沿革】福智山の南麓、弁城ダムのある谷とその周辺には、「新田城」と「弁天城」の二者が存在するとされる。その内、明確な城郭遺構があるのは、ダムの東側の尾根上に位置するもので、『福岡県の城郭』では、「弁天城」（豊前 60）として報告しているが、『下田川の山城』（文献 129）では、「新田城」となっており、両者の混同が見受けられる。ここでは地元の伝承と縄張り構造からみて、新田城の方が妥当性があるとみられるので、「新田城」として報告する。

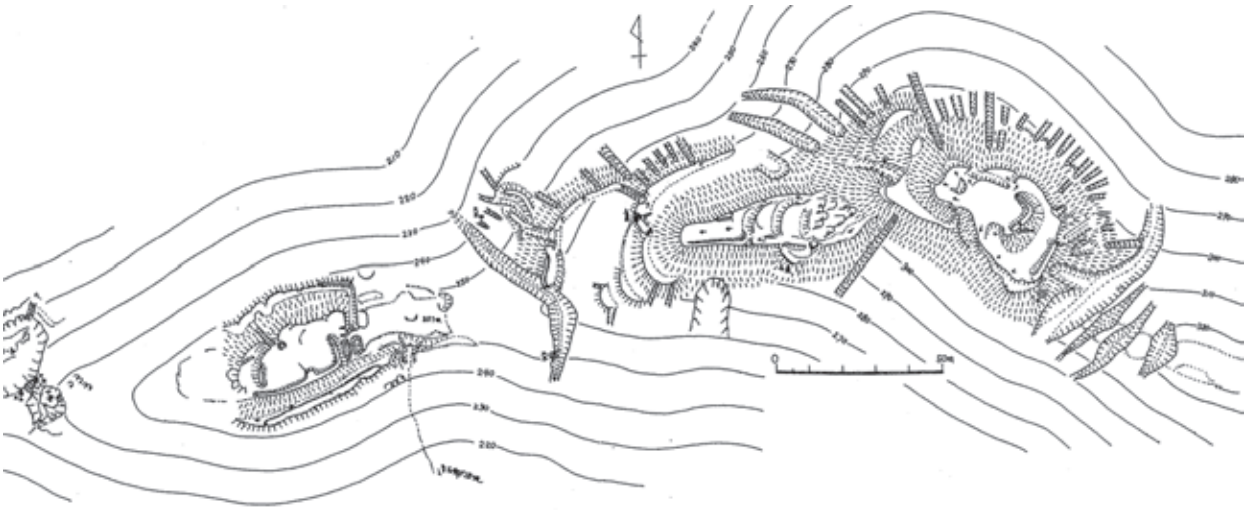
新田城は、『古城記』には「掻上一ヶ所　弁城村ノ内、新田　右ハ高橋元種取出ノ由」とある。また、『福岡県の城郭』には天正７年（1579）に、大友方鷹取城主の毛利鎮実は、高橋元種の圧力を受け、持ち城三ヶ所（高鳥居、上野弁城、中元寺）の内の一城の借受を強要されたことが文献に見られるとし、この「上野弁城」が、新田城の可能性が高いと考えられる。

【概要】福智山から南へ延びる、企救郡と田川郡との境の稜線から南西側に派生した尾根の頂部（標高 322m）を中心に縄張りは展開する。曲輪群は大きく東と西に分かれる。最高所にある東側の曲輪群に主郭があり、その東側は四本の堀切によって城域を画している。また、東側の曲輪群の北側斜面には竪堀約 30 本からなる畝状空堀群が構築され、北側からの厳重な防備を見ることが出来る。

また、東側の曲輪群の西端には大きな堀切１本を設け、さらにその西側尾根上に曲輪群を配置する。西側の曲輪には、東側に屈曲して導入する虎口や、横堀、土塁などが見られ、かなり技巧的な防備の様子を看て取ることが出来る。

全長は 200m を越える規模を有し、畝状空堀群、横堀など技巧的な防御遺構が多数見受けられることから、地誌類に言う所の高橋元種による取り立ても可能性が高いのではないかとみられる。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 9,**10**,128,129



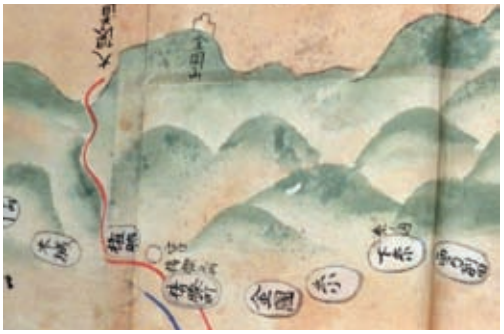
第 111 図　新田城縄張り図（文献 10・片山安夫作成）

豊前 78　金国城（かなくにじょう）

郡名　田川郡　別称　金国大王城・金岡山城・立尾城　図幅名　田川（西）
種別　山城　　所在　田川市猪国

【沿革】豊前と筑前の境近くに聳える金国山の東側に位置する。『豊前志』には「金国村城阯」とあり、「星野源太居る。星野九郎實旨、兄を攻め落して城を奪へり」とある。一方、『古城記』には「金国大王　城氏代々ノ居城ナリ。是菊池ノ一族也。応永年中、城太郎右エ門尉武孝居」とあり、両者で城主が異なっている。

一方、小笠原文庫（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）の『豊前小倉領絵図』には金国山あたりに「金



第 112 図　『豊前小倉領絵図』に記された金岡山城
（小笠原文庫・福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵）

岡山」の記載と共に城跡のしるしが付されている（第 112 図）。「金国」と「金岡」で異なっているものの、同一の城を指していると考えられる。『豊前志』には前記の「金国村城阯」とは別に、「金岡城阯　金岡村にあり。城氏居城、菊池の一族なり」とある。田川郡には金岡村は存在しないが、金岡山の記載や、城主名が『古城記』の金国大王城と同一であることから、この『豊前志』の記載も金国山の城跡を指しているものとみられる。

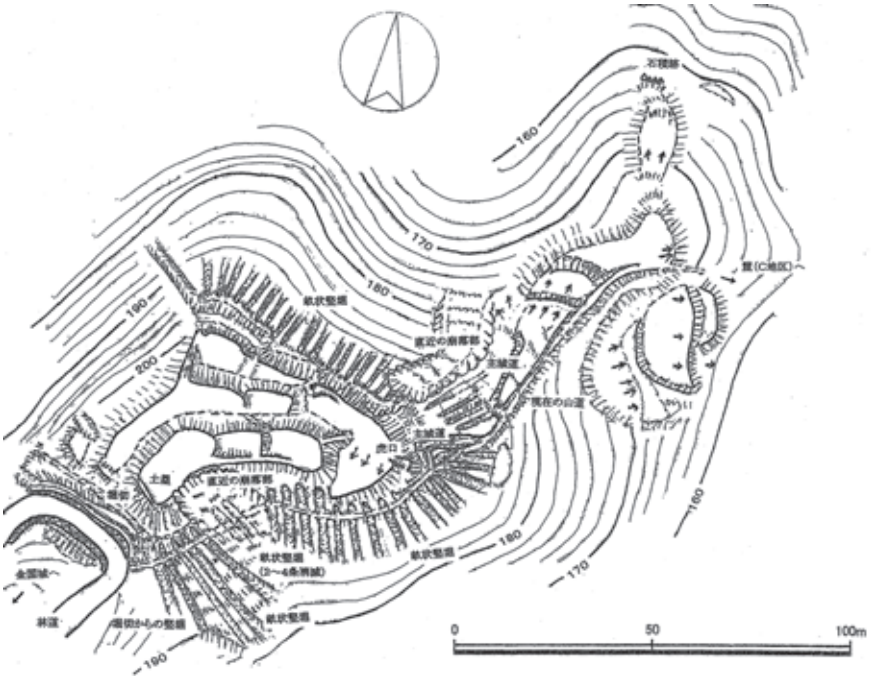
また、『旧城』には「立尾城（一名金国城）」とあり、立尾城という別称もあったことがわかる。

【概要】金国山山頂（標高 421m）の北東側の尾根上には、二つの城郭遺構が確認されている。文献 154 に従い、西側を A 地区・東側を B 地区と呼称する。文献 154 では A 地区を金国城、B 地区を立尾城としているが、ここでは金国城（別称：立尾城）として報告する。

城の縄張りは、山頂から東へ約 500m 地点の A 地区と、約 1 km 地点の B 地区の 2 ヶ所存在する。A 地区は、標高 295m の頂部を中心に南北約 30m、東西約 20m の主郭を置き、その周囲には堀切あるいは帯曲輪を巡らせる。主郭の南北側それぞれの尾根上には堀切を設け、城域を画している。全長は南北約 250m となる。

一方、B 地区は標高約 200m の頂部に主郭を置き、その北側と東側に階段状に曲輪群を配置する。それらの曲輪群の南西側の尾根続きには堀切を、さらに周囲の斜面には竪堀約 40

第 113 図　金国城 A 地区縄張り図
（文献 154　村上勝郎・田中賢二作成）



第 114 図　金国城 B 地区縄張り図（文献 154　村上勝郎・田中賢二作成）

本からなる畝状空堀群を巡らし、厳重に防備している。さらに北東側の尾根続きには、不整形な造作ながら、曲輪群が展開している。

また、A・B 地区の北東側の麓にも屋敷跡とも考えられる平坦面群があるというが（文献 154）、詳細は不明である。前述のように、金国城には城氏と星野氏の複数の城主の伝承があるが、これらの畝状空堀群をはじめとする城郭の構造から見ると星野氏による天正年間の改修が妥当とみられる。

【史料】なし　【文献】1 ～ 3,5 ～ 10,21,**154**

豊前 82　城坪城（じょんつぼじょう）	郡名　田川郡	別称　なし	図幅名　田川（東）
	種別　丘城	所在　田川市伊加利	

【沿革】田川市伊加利の南東、須佐神社の背後の「岡山」の丘陵上に位置する。『伊田町誌』（文献 20）の「岡山」の項に「長谷川氏の居城ありし処といふ」とある。現在も近傍には長谷川姓が多く居住することから、在地の小領主の居城だったとみられる。

【概要】岡山の丘陵の南端部は「城坪（じょんつぼ（「じょうのつぼ）の転訛）」と呼ばれる場所で、そこには「岡山伽藍」という祠などが建っている場所（図中 A）が城跡の主郭である。主郭 A は一辺約 20m の規模を有し、南側には階段状に曲輪がいくつか並び、北側は深さ 5 m の堀切 1 本（図中 B）で丘陵を分断することにより城域を画している。

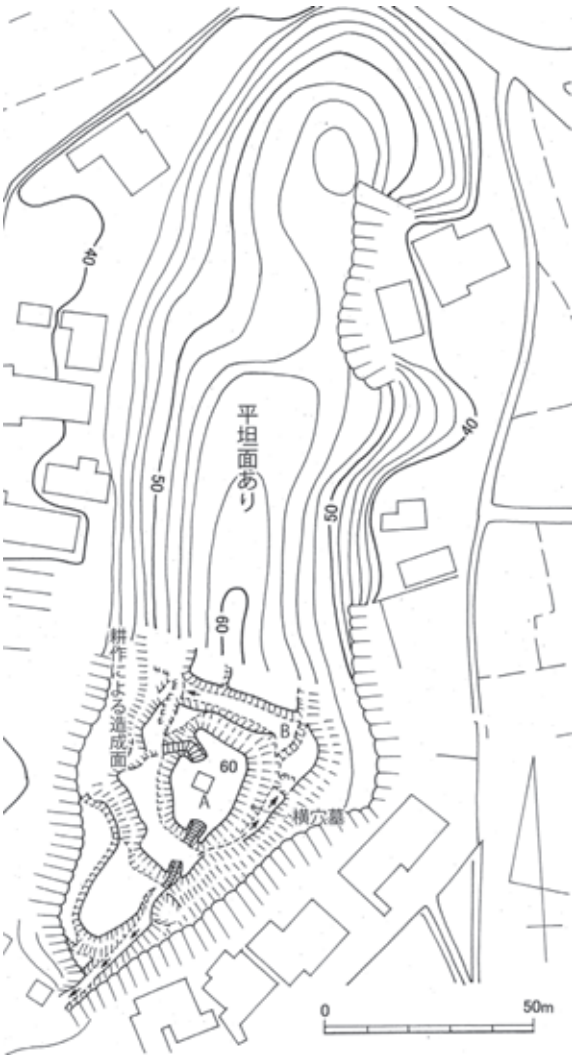
B より北側にも人為的な造成による平坦面は続いているが、まとまりに欠け、堀などの防御遺構もないため、城とは関係のない造成とみられる。

なお、この丘陵全体に古墳時代の横穴墓群が展開し、一部開口もしているため、丘陵上に広がる平坦面の造成は古墳時代にさかのぼるものである可能性も考えられる。

【史料】なし　【文献】20

第 115 図　城坪城遠景

第 116 図　城坪城堀切



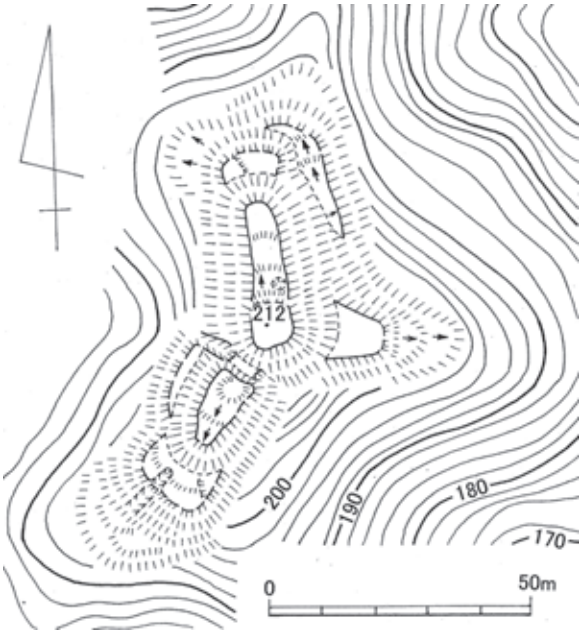
第 117 図　城坪城縄張り図（事務局作成）

豊前 85　城山城（じょうやまじょう）

郡名　田川郡　　別称　川崎城　　図幅名　筑前山田（西）
種別　山城　　所在　田川郡川崎町川崎・田川市猪国

【沿革】猪膝峠の南、川崎町川崎と田川市猪国の境に聳える通称「城山」の山頂に位置する。道路地図等では、東約 500m の丘陵頂部を「城山」と表記するが、地元では市町境の丘陵頂部を「城山」と呼び、城郭遺構も認められることから、地図の「城山」表記は誤記と考えられる。

なお、「川崎城」の名称の初出は『遺跡』であり、城の根拠が東川崎と西川崎の城館関連地名の存在（北城・城山下）であり、この城山の城郭遺構を指したものではないため、地元呼称の「城山」を城名に採用した。



第 118 図　城山城縄張り図（事務局作成）

【概要】城山山頂（標高 212m）の頂部に一辺約 10m 弱の主郭を置き、北側になだらかに平坦面が継続する。主郭の南側に堀切 1 本を構築し、さらにその南側に 2 段の曲輪を設けている。主郭の東側や北側にも一辺 10m 前後の小規模な曲輪を複数設けている。

第 119 図　城山城遠景

第 120 図　城山城曲輪

城主は不明ではあるが、規模などから在地の小領主層の持ち城ではないかと考えられる。

【史料】なし　【文献】5,7 ～ 10

豊前 86　木城城（きしろじょう）

郡名　田川郡　　別称　内木城　　図幅名　筑前山田（西）
種別　丘城　　所在　田川郡川崎町安真木

【沿革】川崎町安真木と嘉麻市上山田との境近く、内木城の集落近くの丘陵上に位置する。

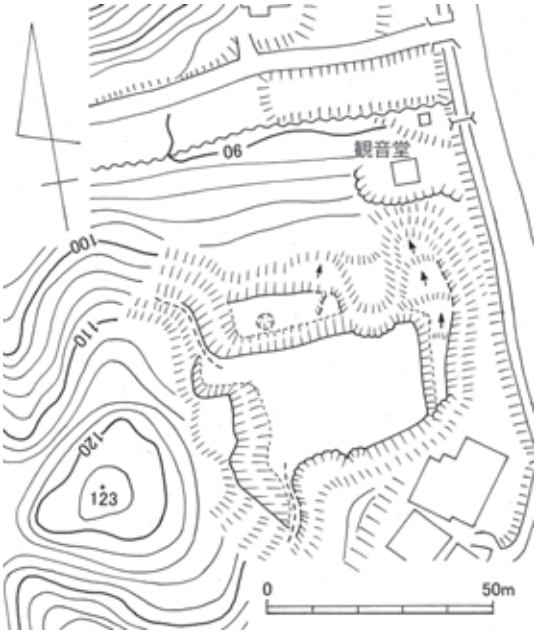
『田川産業経済大観』（文献 21）には「木城城趾」として嘉吉年間に秋月種政の嫡男・大善守政時が筑前秋月領大塚庄から当地に移り、城主となり、大塚氏を名乗ったことが記される。さらに秀吉の九州平定戦においては岩石城の戦いに次ぐ激戦地であったとされる。『種々』には「内木

第 121 図　木城城遠景

城址」と名を挙げている。

【概要】内木城の千手観音は、城主・大塚政時の守り本尊とされ、その観音堂の背後の丘陵上に位置する。丘陵の腹部に切り込む形で、東西約 50m、南北約 30m の長方形の曲輪を築く。平坦面上には、植林などがなされておらず、近年の耕作の造成かとも考えたが、地元では、古くよりこの平坦面は地面が固いため、木が生えにくく、植林ができなかったとのことであり、固い地山を切り込んで平坦面にした結果と考えられる。少なくともここ数十年は現状のままであるとのことであり、城の曲輪と見てよいと思われる。丘陵上の居館とも思われるが、詳細は発掘調査をする必要があろう。

第 122 図　木城城曲輪の平坦面



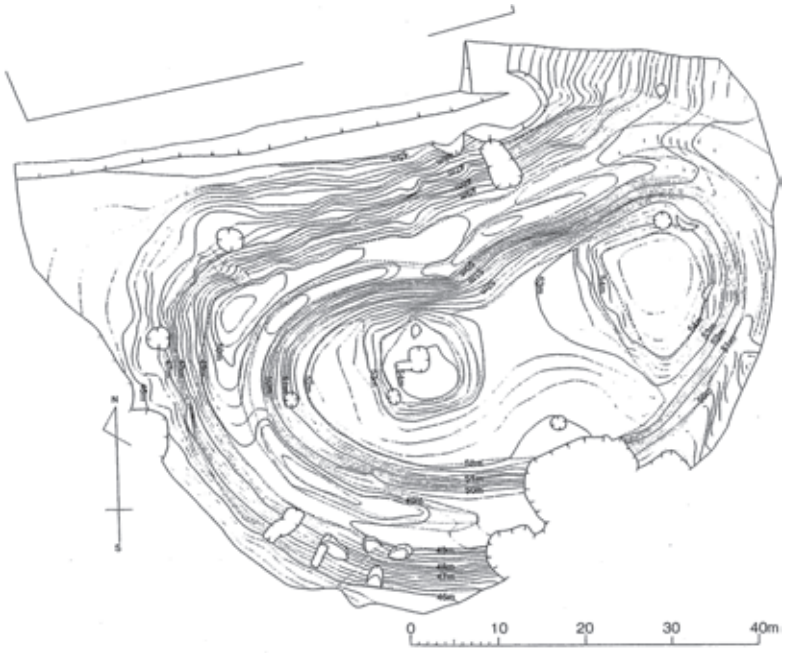
第 123 図　木城城縄張り図（事務局作成）

【史料】なし　【文献】3,5,7 ～ 10,21

豊前 92　明神山城（みょうじんやまじょう）	郡名　田川郡　　別称　山下城・山久井城・桑原城・丸角城 図幅名　田川（東）　　種別　丘城　　所在　田川郡大任町今任原

【沿革】彦山川東岸、下今任の集落の東側の丘陵上（桑原）に位置する。

『豊前志』には「明神山城阯桑名村にあり。曽我氏居城」とある。『古城記』には「同（城跡一ヶ所）桑原村ノ内、山下城。同　同村内、山久井村」とあり、これらのどちらかが明神山城を指している可能性が高い。また、同書には「丸角」として若木城と明神山城の説明が付されており、丸角城も明神山城の別称に当たる可能性もあるが確証はない。「桑原城」の初出である『遺跡』は、城の根拠を、桑原にある「城ヶ迫」「内堀」「堀田」



第 124 図　明神山城測量図（文献 85）

に求めているが、城としての実態は検討されていないので、名称としては不適当かもしれないが、とりあえず別称として扱っておく。

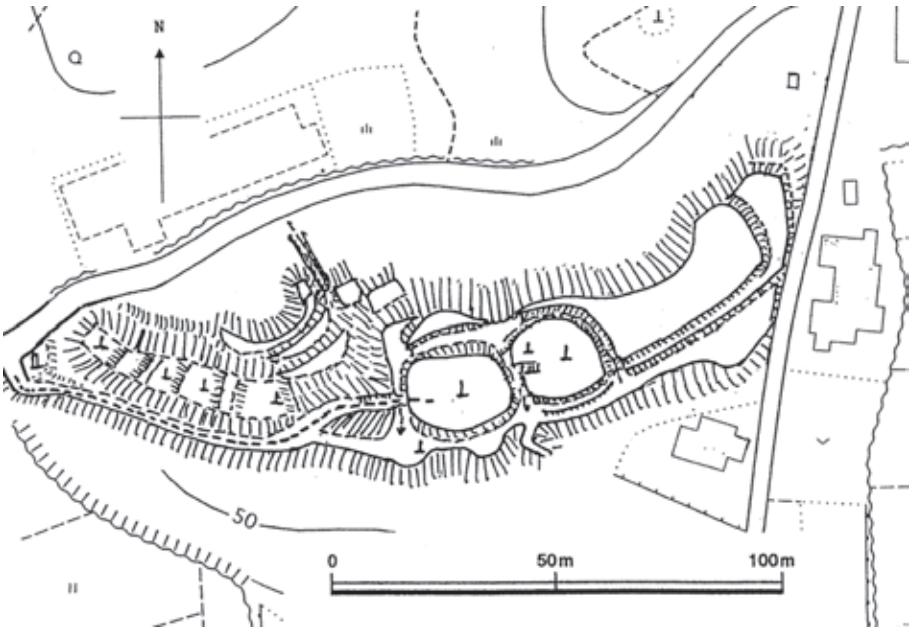
【概要】標高 54m の二つの頂部の周囲に横堀が巡る構造をとる。いわゆる単郭構造の城であり、全長 50m あまりのいわゆる小規模城館である。東側の一部は宅地造成、南側は土取りによって消滅しているが、それ以外は良好に残存している。蛇面城と共に在地の小領主・曽我氏の持ち城であったと考えられる。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,7 ～ 9,**10**,22,**85**

豊前 95　城越城（じょうのこしじょう）

郡名　田川郡　　別称　今任城　　図幅名　田川（東）
種別　丘城　　所在　田川郡大任町今任原

【沿革】彦山川東岸、上今任の野原山八幡宮のある丘陵から谷を挟んで北側の丘陵上に位置する。大任町の分布調査報告書（文献 165）に「城越城跡」とされており、地名の「城越」から城名を採用したものと考えられる。「今任城」の名称の初出となった『遺跡』では上今任の「城ノ越」の地名を根拠としているため、同一のものとして扱う。



第 125 図　城越城縄張り図（文献 10・村上勝郎作成）

【概要】標高約 55m 前後の小丘陵に、並列的に曲輪を配置する。丘陵上の大部分が墓地となっているために、改変が想定されるが、一辺 20m 前後の曲輪が二段並び、その周囲に横堀が巡る構造であることがわかる。その周囲にも平坦面群が広がっているが、墓地により、城郭遺構をどこまで反映したものなのかは不明瞭と言わざるを得ない。立地や構造など、他の彦山川流域の小規模城館と類似することから、在地の小領主の持ち城と想定される。

【史料】なし　【文献】5,7 ～ 9,**10**,165

豊前 98　若木城（わかぎじょう）

郡名　田川郡　　別称　若木山城・秋永城・秋葉山城　図幅名　田川（東）
種別　丘城　　所在　田川郡大任町大行事

【沿革】彦山川の西岸に面した大行事秋永の秋葉社のある丘陵上に位置する。『豊前志』には「若木城阯　秋永村にあり。応永の頃、大森安房守居る」とある。『古城記』の「丸角」の項にも明神山と共に若木（城）の名が掲載されている。

【概要】鷹羽ロイヤルカントリークラブの東端の「稲荷山」と呼ばれる丘陵上には、秋葉神社の祠

第 126 図　若木城遠景

第 127 図　若木城縄張り図（事務局作成）

があるが、そこが若木城の主郭である。主郭の規模は東西約 10m、南北約 30m で、主郭の北には堀切 1 本を構え、さらにその周辺に平坦面群が配されているが、後世の墓地などになっており、どこまで城館があった当時を反映しているかは不明である。規模などから見ても、在地の小領主大森氏の居城が妥当であろう。

【史料】なし　【文献】1,2,5 ～ 10,22

豊前 101　東白土城（ひがししらつちじょう）

郡名　田川郡　　別称　なし　　図幅名　田川（東）
種別　丘城　　所在　田川郡大任町大行事

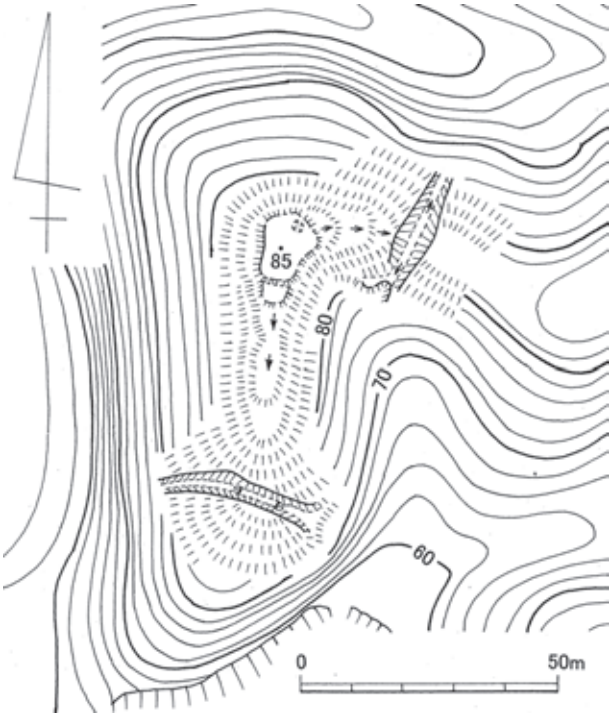
【沿革】大行事東白土集落の東側背後にある丘陵上に位置する。馬を洗った所との伝承が残るのみで城名も伝わらない。付近に「切寄」という地名もあるため、『古城記』の白土村切寄にある掻上がこれにあたる可能性もあるが、それは他の場所に推定されているため、こちらは便宜上「東白土城」とする。

【概要】標高 85m の頂部に南北約 15m、東西約 10m の主郭を置き、東側と南側の尾根続きのやや離れた場所にそれぞれ堀切 1 本を構築する単純な構造である。主郭の規模の割には堀切はしっかりと深く掘られているという印象を受ける。

立地や規模からみて、在地の小領主の持ち城とみられる。

【史料】なし

【文献】なし



第 128 図　東白土城縄張り図（事務局作成）

第 129 図　東白土城遠景

第 130 図　東白土城堀切

豊前 104　岩石城（がんじゃくじょう）

郡名　田川郡　　**別称**　岩酌城　　**図幅名**　筑前山田（東）/ 伊良原（西）
種別　山城　　**所在**　田川郡添田町添田・赤村赤

【沿革】田川郡内で、香春岳城と共に有名で、様々な文献に登場する城である。添田町と赤村の境に聳える岩石山山頂に位置する。築城は大宰大弐・平清盛が大庭景親に築かせたとされ、その後、応永 6 年（1399）には大友氏公が守備する岩石城を大内盛見が攻めるなど、大内氏と大友氏の争奪の場となり、戦国時代には秋月氏が領する所となり、天正 15 年（1587）には、秋月種実の配下、飽田悪六兵衛と熊井越中守久重が在城した。同年、豊臣秀吉の九州平定戦においては、豊臣方と秋月方との前哨戦の場となり、岩石城を守る秋月勢に対し、豊臣方の蒲生氏郷、前田利家らの猛攻にわずか一日で落城した。この岩石城の戦いを契機に、秋月氏は豊臣方に降伏することとなった。慶長 5 年（1600）に細川忠興が豊前に入部すると、岩石城は

第 131 図　豊前国田川郡添田村岩石城跡之図（部分・国立公文書館蔵）

第 132 図　岩石城からの眺め（左：筑豊方面・右：赤村～京都郡方面）

細川領内の支城の一つとなり、飯河豊前とその嫡子、長岡肥後が、それぞれ三千石と六千石の禄により入城した。しかし、慶長 11 年には飯河父子は誅罰され、その後は的場甚右衛門正廉、市野熊之助が城番として入城、元和の一国一城令により廃城となったとみられる。

【概要】岩石山山頂（標高 454m）を中心に約 250m 四方もの広範囲に城郭遺構を確認することが出来る。山頂に主郭①を置き、その周囲の尾根線上に広い曲輪群を階段状に配している。特に南側の尾根は、H1 と H2 の大堀切で尾根を分断するが、さらにその南側にも曲輪⑧～⑩は続いている。また、東側の曲輪⑤～⑦にかけての尾根線上も堀切を所々に設けて、遮断する動きが見られる。主郭の南、曲輪②には、内枡形の虎口 K1 があり、またこれらの曲輪群の周辺には壊されているものの石垣遺構（I3 など）が見られるほか、城域の西端、I1 や I2 などでも崩れた石垣を確認することが出来る。これらの内枡形虎口や石垣遺構は、主郭周辺や B1 などで多数採集される瓦と共に、細川氏の改修によるものである。また、曲輪③の南側には、花崗岩の露頭の岩盤を刳り抜いて造られた柱穴列（いわゆる岩盤ピット）も地表面にて 20 基近くも観察することが出来、柵や塀を建てた痕跡であると考えられる。さらに、主郭の東側の谷には井戸（W1）なども残されている。

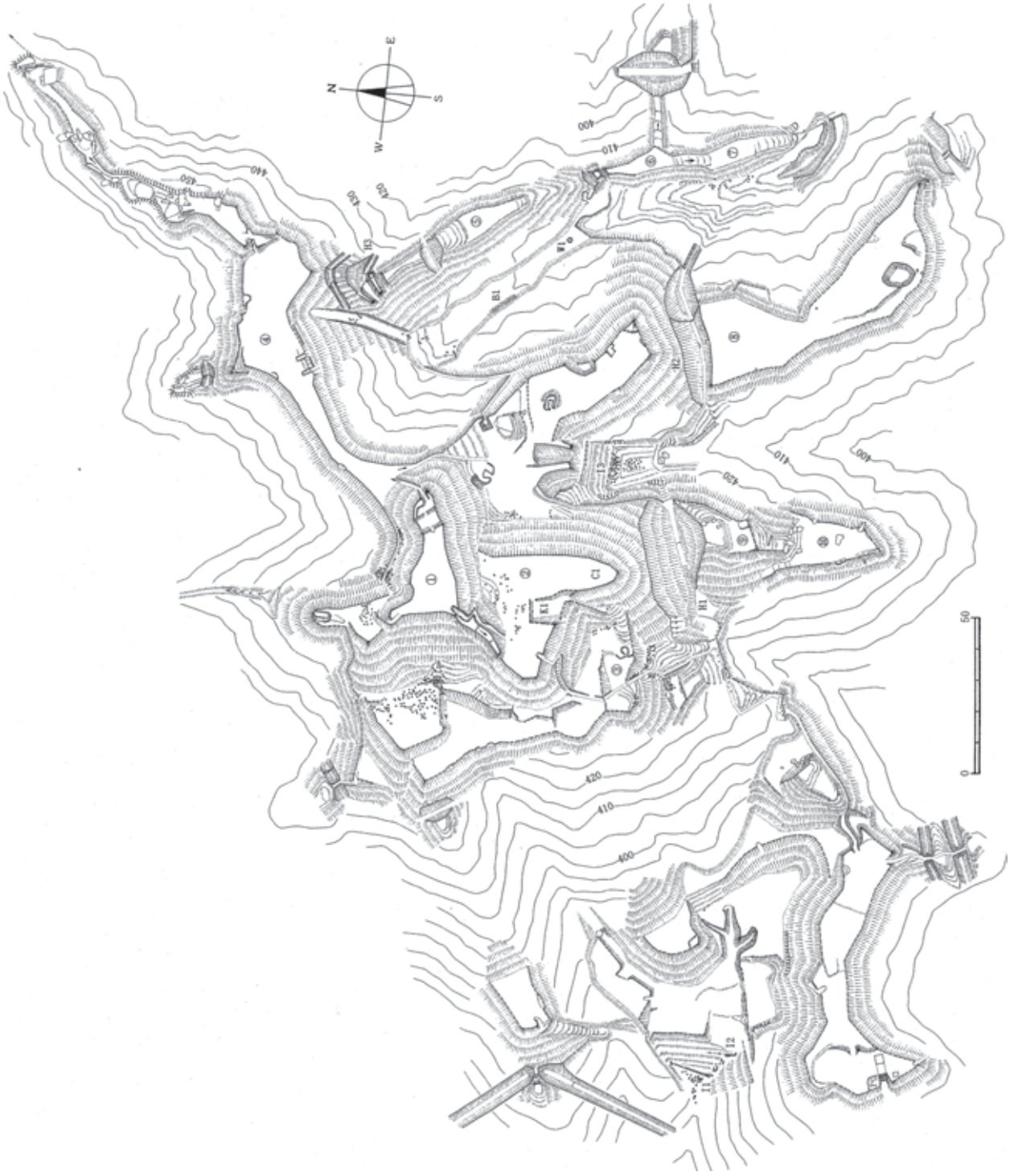
以上のように、岩石城は戦国時代の秋月氏の縄張りを基本とし、石垣、枡形虎口、瓦葺建物などの細川氏の改修を見ることができる城と言えよう。

【史料】あり　【文献】1 ～ 8,**9**,**10**,**130**,**134**,**136**,**141**

第 133 図　岩石城井戸

第 134 図　岩石城岩盤ピット

第 135 図　岩石城曲輪②の内枡形の窪み



第 136 図　岩石城縄張り図（文献 136・木島孝之作成）

豊前 106　城山砦（じょうやまとりで）

郡名　田川郡　別称　添田城・城山城　図幅名　筑前山田（東）
種別　山城　所在　田川郡添田町添田

【沿革】岩石城の南西麓、通称「城山」と呼ばれる尾根の頂部に位置する。『岩石城』（文献 130）に報告されたのが初出であり、地名以外には伝承等はみられない。同文献では、岩石城の出城ではないかという想定から「城山砦」と命名している。

【概要】添田中学校の南東側に延びる尾根の頂部、標高約 200m の頂部に位置する。曲輪群はⅠとⅡに大別できる。Ⅰは最高所に位置する主郭で、南北約 30m、東西約 20m で、周囲には一部、低土塁が巡る。さらに南側と北側に小曲輪を配し、南東側の尾根続きの a は、深さ約 10m、幅約 20m もの大堀切で分断する。Ⅰの南西側は、尾根伝いに自然の緩斜面が続き、堀切を経てⅡの曲輪群が展開する。Ⅱの曲輪の西側の曲輪には一部土塁状の高まりや性格不明の円礫の集石なども確認できる。その北西側の b に、幅約 10m、深さ約 5 m の大きな堀切を構築する。

第 137 図　城山砦縄張り図（事務局作成）

城主などの伝承等は残されていないため、明確なことはわからないが、岩石城の南西側を押さえる位置に当たり、谷を挟んだ南側には城平城があり、両者が一体となり、岩石城の出城として機能したものと考えられる。

【史料】あり　【文献】7 ～ 10,**130**

第 138 図　城山砦曲輪・切岸

第 139 図　城山砦堀切

第 140 図　城山砦集石遺構

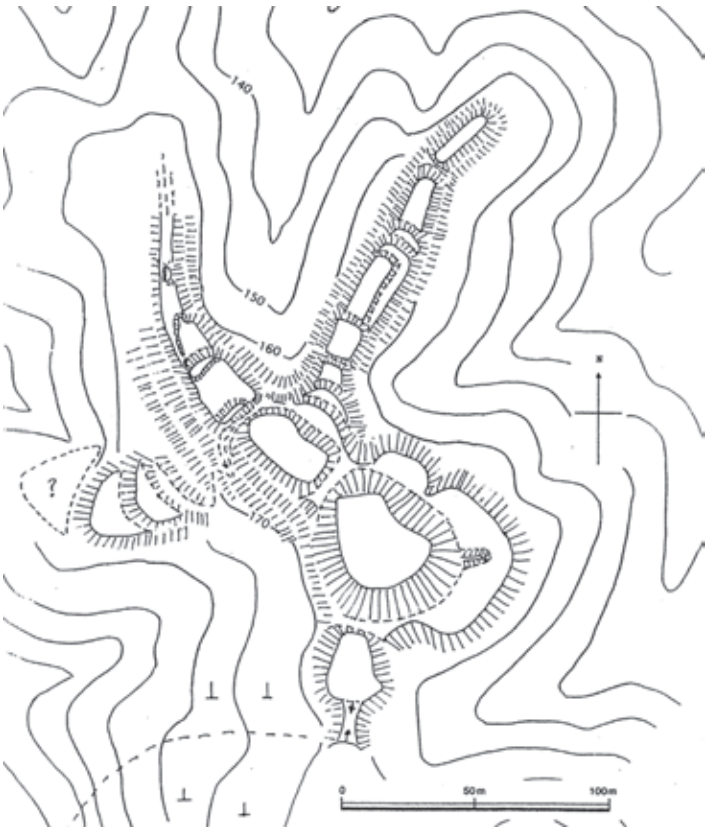
豊前 107　城平城（じょうびらじょう）

郡名　田川郡　　別称　なし　　図幅名　筑前山田（東）
種別　山城　　所在　田川郡添田町添田・野田

【沿革】岩石城の南西麓、城山砦から畑谷川を挟んで南側の尾根の頂部に位置する。『岩石城』（文献 130）によれば、添田町野田の古老の話として、城平城は岩石城の出城で、岩石城と共に廃城となったと伝えるという。

【概要】標高 187m の頂部に一辺約 30m の主郭を置き、そこから北西方向に階段状に曲輪を展開する。その曲輪と曲輪の間は堀切で区画する。堀切は落差約 10m もあって、城山砦同様、非常に大型であり、曲輪群の東側には堀切から続く帯曲輪が巡っている。また、北東側の尾根線上にも階段状に小曲輪が展開し、所々に堀切で防御する様子が見受けられる。城主名は不明であるが、とりあえずは伝承のとおり岩石城の出城とみておくのが妥当ではなかろうか。

【史料】なし　【文献】7 ～ 9,**10**,**130**



第 141 図　城平城縄張り図
（文献 10、村上勝郎・田中賢二・坂田淳一郎作成）

豊前 108　弓張岳城（ゆみはりだけじょう）

郡名　田川郡　　別称　なし　　図幅名　伊良原（西）
種別　山城　　所在　田川郡添田町添田・津野

【沿革】岩石城の南、添田から津野へ抜ける峠道「鷲越え」を挟んだ約 1.5km 地点に聳える弓張岳の山頂に位置する。『岩石城』（文献 130）では『添田町誌』を引用し、天正 15 年（1587）に、豊臣秀吉が岩石城を攻撃した際、弓張岳に陣を構え、遠矢を射たことから弓張岳の名がついたとしている。また、同書では『応永戦覧』に大友方が弓張山に陣取ったことが記載されるとしている。

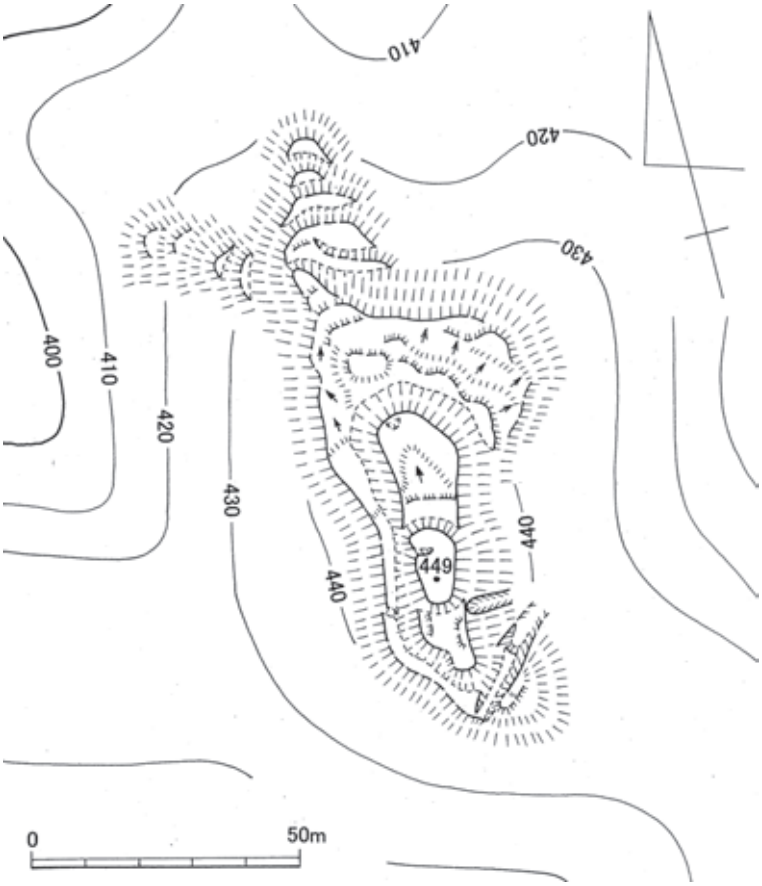
第 142 図　弓張岳砦と岩石城遠景

【概要】弓張岳の山頂（標高 449m）の最高所に、南北約 15m、東西約 10m の主郭を置き、その南北にそれぞれ曲輪を展開、南東側には、主郭側の深さ約 5 m の堀切 1 本を設けて城域を画すると共に、西側には、帯曲輪を巡らしている。さら

に北側は一見自然地形のような緩斜面が広がっているが、さらに北側の二股に分かれた細尾根上には、それぞれ階段状に小曲輪群を展開させている。不整形な曲輪が多く、また岩石城側に向けた小曲輪群は恒常的というより臨時的な陣城としての印象を受ける。岩石城に対する向城として機能したか、あるいは岩石城の出城として機能したのか、時代によっても機能が異なっている可能性も考えられる。

【史料】なし　【文献】7 ～ 10,**130**

第 143 図　弓張岳城主郭



第 144 図　弓張岳城縄張り図（事務局作成）

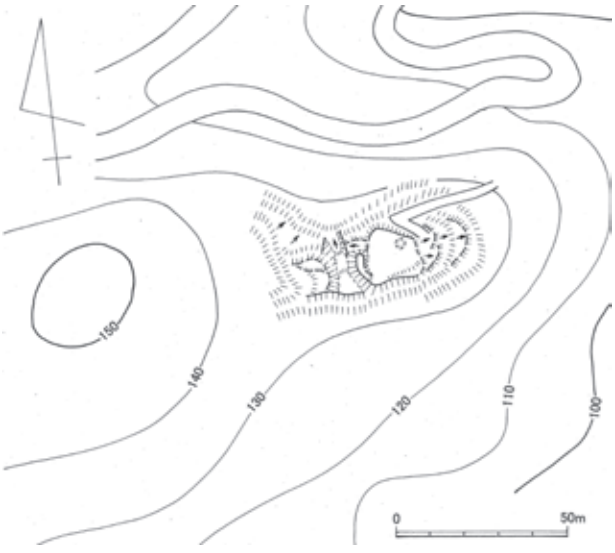
豊前 112　城山城（じょうやまじょう）

郡名　田川郡　　別称　なし　　図幅名　筑前山田（東）
種別　山城　　所在　田川郡添田町野田

【沿革】野田の加茂神社の裏側の丘陵上に当たる。『岩石城』（文献 130）に掲載されている地図に「城山」として城跡の記号が付されており、その場所を現地確認したところ城館遺構が見つかったため、「城山城」として報告する。地誌類への記載や伝承等は確認できない。

【概要】野田の加茂神社の背後には、標高約 150m の尾根の先端頂部があるが、そこから東に約 70m 下った地点に城郭遺構は位置する。主郭の西側には土塁を持つ深さ約 4 m の堀切を設け、主郭の東側は自然の緩斜面にそのまま移行している。城主名等は不明であるが、岩石城の出城の一つである可能性も考えられる。

【史料】なし　【文献】5,130,151



第 145 図　城山城縄張り図（事務局作成）

豊前 113　左衛門城（さえもんじょう）

郡名　田川郡　　別称　なし　　図幅名　筑前山田（東）
種別　山城　　所在　田川郡添田町中元寺

【沿革】添田町中元寺には宝ヶ岳山頂と、そこから約 1.5km 北へ下った標高 315m 地点の尾根の頂部の二箇所の城館遺構が存在する。前者は宝ヶ岳城、後者は左衛門城である。『豊前志』には「中元寺村城阯」がある。『種々』や『福岡県の城郭』では「左衛門城＝中元寺城」としているが、『教委』、『福岡県の城』では「宝ヶ岳城＝中元寺城」とし相違が見られる。本書は城主名から「宝ヶ岳城＝中元寺城」として報告する。

左衛門城は、『旧城』あるいは『田川産業経済大観』（文献 21）には城主不詳となっているが、城名の「左衛門」は城主名の名残であろうか。

【概要】標高約 315m の頂部を中心に主郭を置き、その南北に曲輪を並べ、西側を除く三方の尾根伝いに堀切をそれぞれ構築するが、南側は大小２本の堀切で厳重に防備する。北側の堀切のさらに北側は緩斜面がだらだらと続いている。以上のように全長 50m ばかりの小規模な城館で、宝ヶ岳城の出城的な役割を果たしていた可能性も考えられる。

【史料】なし　【文献】1 ～ 3,**10**,21

第 146 図　左衛門城縄張り図（文献 10・中村 正作成）

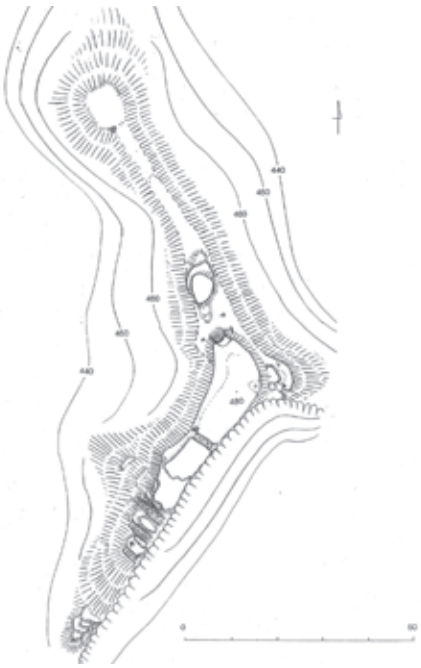
豊前 114　宝ヶ岳城（ほうがたけじょう）

郡名　田川郡　　別称　中元寺城・ホラヶ岳城　　図幅名　筑前山田（東）
種別　山城　　所在　田川郡添田町中元寺・落合

【沿革】彦山川と中元寺川に挟まれた場所に聳える宝ヶ岳城山頂に位置する。『豊前志』には「中元寺村城阯」として木工介平弘依が居城するとある。『古城記』には「城跡一ヶ所　中元寺村ノ内」として、杢之介平弘依が城主であるとする。また、『旧城』や『田川経済産業大観』（文献 21）には、宝ヶ岳城として、平弘依の他に、深見摂津守、和泉守の城主名も上げている。また、『古城記』には下落合村（添田町落合）に「掻上一ヶ所　ホラヶ岳」とあり、当城を指している可能性が考えられる。

【概要】宝ヶ岳山頂に 20m × 30m の主郭を置き、南側に堀切を挟んで、更に曲輪群を置く。その南側には連続する３本の堀切群を設けて尾根を寸断している。主郭の北側は一部、小曲輪も見られるが、基本的には自然の緩斜面が続いている。

【史料】あり　【文献】1,3,5 ～ 10,21,130

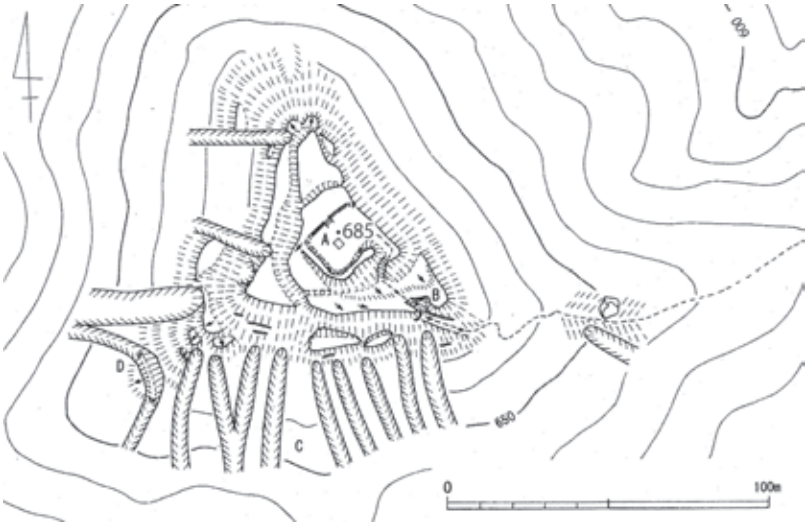


第 147 図　宝ヶ岳城縄張り図（中村 正作成・提供）

豊前 122　上仏来山城（かんぶくさんじょう）

郡名　田川郡　　別称　彦山城・英彦山城　　図幅名　英彦山（西）
種別　山城　　所在　田川郡添田町英彦山

【沿革】中世から近世にかけて、山岳修験の一大拠点であった彦山（英彦山）の坊院群が建ち並ぶ、大門筋の南に聳える上仏来山山頂に位置する。彦山の守りの城として築かれたもので、地誌類等には見られないが、一次史料に永禄 11 年（1568）と天正 9 年（1581）の大友方による上仏来山攻めの記載が見られる。



第 148 図　上仏来山城縄張り図（文献 152・岡寺　良作成）

【概要】標高 685m の上仏来山城山頂には、現在、祠が残されているが、そこが城の主郭に当たる。土塁状の高まりがあるが、おそらくこれは祠に伴い、周辺の地面を造成した際に生じたものと考えられる。主郭 A の周囲には、小曲輪を巡らせている。B は曲輪群に入る入口に当たる場所であるが、自然石による石垣が構築され、虎口を固めていた様子が窺われる。この他、石垣は南側斜面を中心に散見される。そして、南側斜面を中心に 9 本の大きな竪堀群（図中 C）や堀切（図中 D）から構成される畝状空堀群が構築されており、厳重に防備する様子がわかる。

以上のように、上仏来山城の縄張りは、彦山の山岳修験勢力によって、彦山の入口に当たる上仏来山山頂を中心に城塞化が図られたもので、彦山を守備した様子を物語る。

【史料】あり　【文献】5,7 ～ 9,**10**,**138**,**152**

豊前 127　戸城山城（としろやまじょう）

郡名　田川郡　　別称　戸代山城　　図幅名　豊前本庄（西）
種別　山城　　所在　田川郡赤村赤・内田

【沿革】赤村赤と内田との境に聳える戸城山山頂に位置する。『豊前志』には「戸代山城阯」として、暦応２年（1339）に菊池肥後守武重が築き、貞和年間には麻生玄蕃頭、菊池武宗に在城させた。応安３年（1370）には畠山式部大輔義深、その子義豊（又は義冬）、その子義孝が在城、畠山氏滅亡後は大内盛見により内田右馬頭が在城した。永享３年（1431）には菊池武忠が攻略、桃井直次を置き、その後は大内氏配下の陶武護、杉弘長、さらには宇都宮氏の西郷入道愚閑が在城、弘治年間には毛利氏配下の坂新五右衛門に守らせ、天正年間には小早川秀包の弟、義平、その後馬屋原左馬之助元有が入る。天正 15 年（1587）、豊臣秀吉の九州平定において降伏して廃城となったとする。『古城記』もほぼ同様の内容を記載する。

【概要】戸城山は、A の主郭部は、東西約 25m ×南北約 18m の楕円形を呈し、標高 317m の山頂に位置する。その東側の B の曲輪は、東西約 85m ×南北約 50m と山城の曲輪としては非常に広い

面積を有する。現在この場所には、休憩所やアスレチック遊具が置かれ、それらの整備の際には若干の削平は受けているかもしれないが、大きくは改変されていないと考えられる。これらの二つの曲輪の西側を除く周囲に、横堀及び畝状空堀群等の防御施設が認められる。基本的な構造としては、曲輪の周囲に２重の横堀が巡り、所々で畝状空堀によってそれらは連結し、内側の横堀については、二つの曲輪の西側でＣの曲輪へと続いている。内側の横堀には、いくつか特筆すべき箇所がある。戸城山城の一般的な横堀の土塁の高さはせいぜい１ｍくらいであるが、D,E の箇所の土塁の高さは、２ｍを超え、非常に高い。このＤとＥの間の堀底の通路は、主郭への主要な通路とも考えられる箇所にあたり、ここが城内へ入るメインの虎口であったと考えられる。よって、土塁の高さを非常に高くすることで、防御性を強め、城内へ入る敵を威嚇する役割を十分に果たしていたと考えられる。また、内側の横堀はそのまま曲輪の周囲を巡るのではなく、土塁による仕切りが設けられ、容易に城内へは入ることができない仕組みになっている場所もある。一方、外側の横堀は、畝状空堀と組合わさり、全周はしないものの、北西側を除く三方向に認められ、城郭を囲む意図が見受けられる。F の標高 315m の曲輪は、東西 15m ×南北 15m とさほど大きくはないが、主郭の標高 317m とあまり差はなく、主郭から一定の独立性を持った曲輪であると言える。F の曲輪からは、北側と西側にそれぞれ尾根が伸びる。北側の尾根は小規模な曲輪が並び、その両側に帯曲輪を備え、先端部には堀切も認められ、城内の他の箇所に比べて、横堀や畝状空堀のような高度な防御施設は備えていない。その一方で、西側の尾根（G 地点）は、先端部を堀切で仕切り、その城内側に、尾根筋に平行する２本の横堀とそれに複数の竪堀を連結させている。この尾根まで曲輪として防御しきれないために、尾根上に堀を錯綜させ、攻め手の足場として使えなくさせる為のものである。

以上のように、当城の特徴は、横堀やそれらと組合わさった畝状空堀群が特徴である。おそらくは、天正 15（1587）年の豊臣秀吉の九州平定戦に備えて改修されたものであろう。京築地域から筑豊地域に入る玄関口にあたる交通の要衝にあり、筑豊地域を支配する高橋氏、秋月氏が戸城山城を重視したため、その関与により大きな規模の山城を造らせたのではなかろうか。

【史料】なし

【文献】1 ～ 8,9,10,36,140,144

第 149 図　戸城山城縄張り図（文献 144・岡寺　良作成）

③京都郡

豊前 129	松山城（まつやまじょう）	郡名　京都郡	別称　神田城・苅田城	図幅名　苅田（東）
		種別　山城	所在　京都郡苅田町松山・鳥越町	

【沿革】京都郡と企救郡との郡境近く、周防灘に突き出すように聳える松山山頂に位置する。『豊前志』や『古城記』には、以下の城主の変遷を記している。天平 12 年（740）に藤原廣嗣が築城し、天慶３年（940）以降、神田氏が在城、保元２年（1157）には平判官康盛の三男・蔵人信盛とその子、吉盛が入る。平家滅亡後は、緒方氏一族の長弥太夫坊覚願、建久年間には宇都宮信房の持ち城となるが、長野氏との争いに敗れ、建武年間まで長野氏が城代を置いた。以後、菊池氏、大内氏の争う所となり、大内義弘が領した後は守護代として杉弾正大弼興信とその子弘信が居城する。応永の戦乱では大友氏と大内氏が松山城を巡って争うが、大内氏の城代として杉氏が居城を続けている。しかし弘治２年（1556）には大友義鎮が落としたのを契機に、永禄年間を通じ、毛利氏と大友氏が取り合うこととなる。天正元年（1573）には、毛利氏は馬ヶ岳城主の長野三郎左衛門助盛に託し、馬ヶ岳城の出城となり、長野三郎永盛が入城した。天正 15 年（1587）の豊臣秀吉の九州平定後は、豊前六郡を領した黒田孝高が城番を置き、後慶長５年（1600）に領主となった細川氏も城番を置いたが、慶長 11 年に破却したとしている。また、一次史料では、天正 14 年の九州平定戦の折には、小早川隆景が仁保元豊に松山城に在番させていることがわかる。このように、松山城は長期間にわたって、豊前の覇権をめぐる上で非常に重要な位置にある城であったことがわかる。

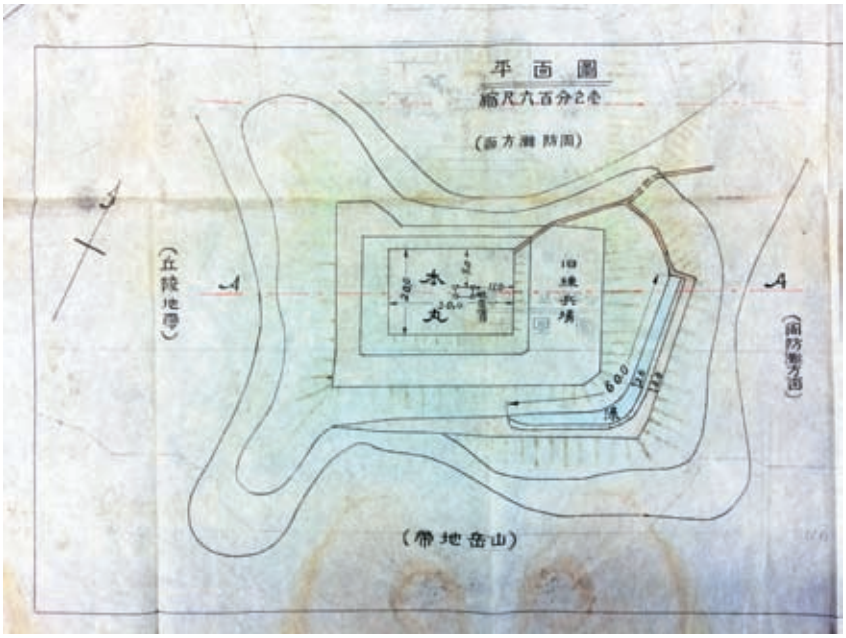
第 150 図　松山城遠景（苅田町教育委員会提供）

第 151 図　松山城主郭遠景（苅田町教育委員会提供）

【概要】現在、松山城の主郭がある山頂とその周辺については残存しているが、北麓から東麓を中心に、周辺部については、昭和期の採石によりかなり削られて消滅してしまっている。そのため、現状のみから往時の松山城の姿を見るのは困難となっているため、消滅以前の資料を元に、まずは松山城の全体像を見ていく。明治 10 年（1877）頃に編纂されたと考えられる『古城址実地取調報答書』の「松山城址」には、「松山の頂にあり、中央を城の辻と称し、東西十五間、南北十二間あり、城の辻の東に小城と云ふあり、其東西十間、南北十八間許り、此東に番所跡と称ふるあり、東西五間、南北十一間余、此城東北は海に面し、所々胸墻の跡を存す」とあり、主郭「城の辻」の東に「小城」、さらにその東に「番所跡」があり、胸墻（横堀のことか）の存在を記している。

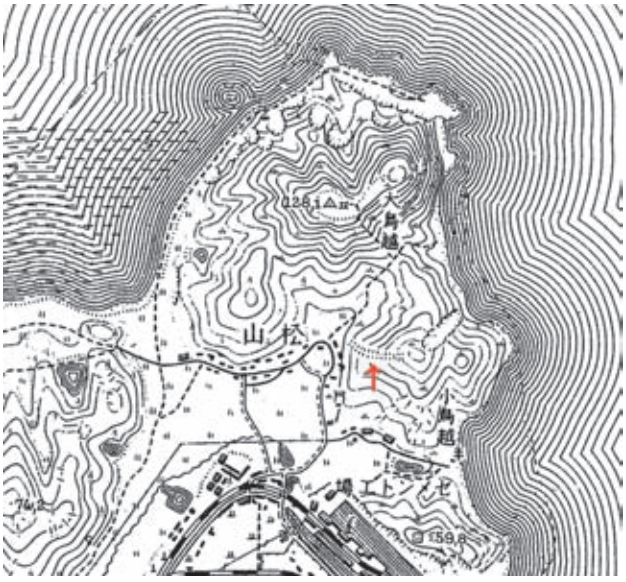
また、昭和 11 年（1936）に松山城の史跡指定のための調査の要望のため、苅田町役場から福岡県庁に提出された資料の中に、「松山城跡の図」があり、縮尺 1/600 の平面図と 1/200 の断面図が描かれている（平面図部分は第 152 図）。それを見ると、本丸（主郭）に「航空燈台」を記し、本

丸周囲の帯曲輪に「旧練兵場」の文字が認められ、近代における松山城の利用状況を示している（航空燈台の基礎は現在も残っている。）。また、横堀なども図示されており、非常に精度の高い作図であることがわかる。しかし残念ながらそれ以外の曲輪については明示しておらず、当時の松山城の範囲の認識を表しているとも言えよう。



第 152 図　松山城跡の図（部分・昭和 11 年 史蹟松山城阯調査ニ関スル件のうち）
（福岡県教育委員会蔵）

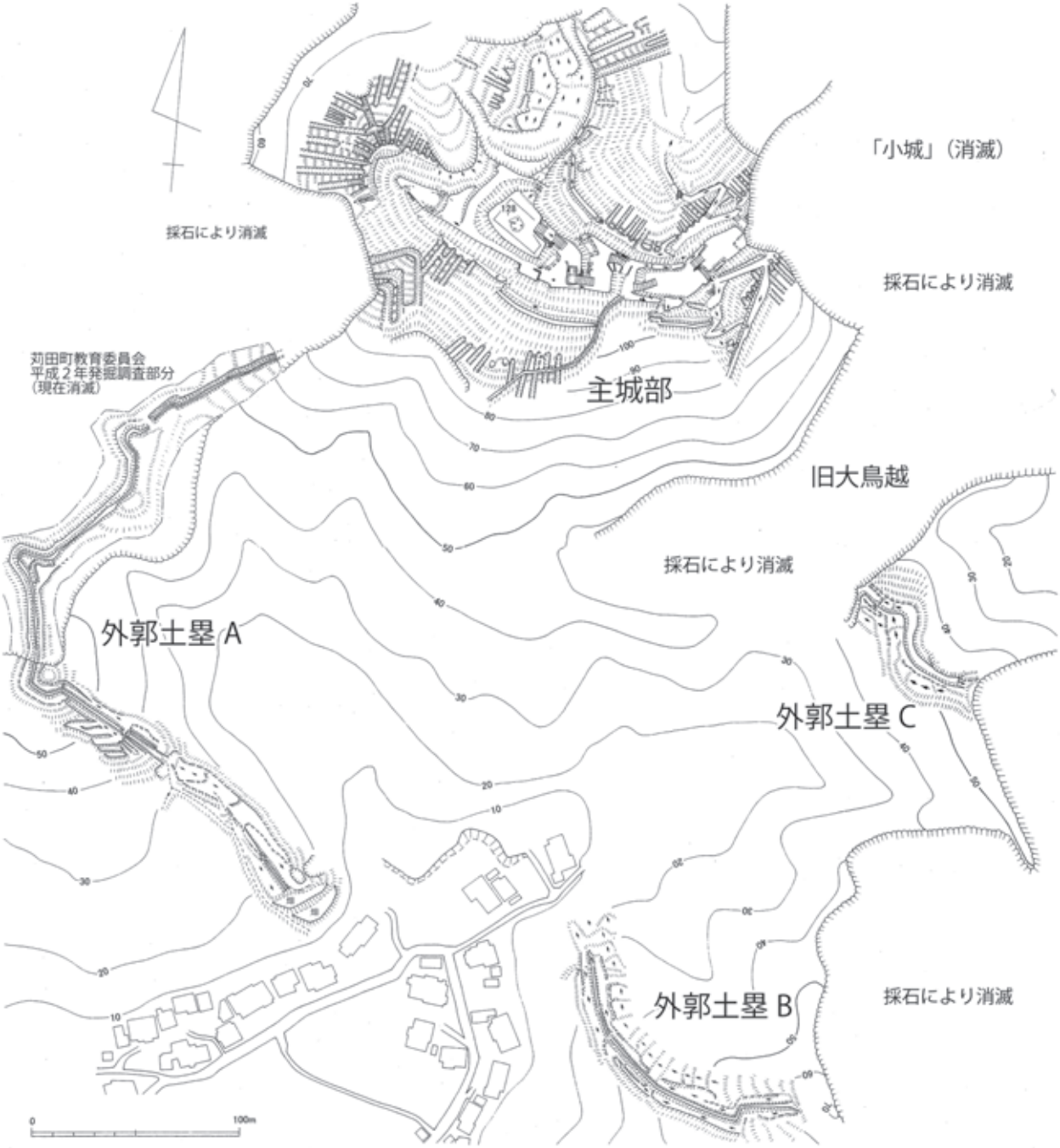
一方、近代の陸地測量部作成の地図（第 153 図）には、現状破壊前の松山の様子が克明に図示されている。明治 33 年測量、昭和 15 年発行の 1/25,000 地形図「苅田」の松山の部分を見ると、当時はまだ埋め立ては始まっておらず、松山の山頂から東側に平坦地形が継続し、東端部に頂部があるのがわかる。また、その南東側に松山の集落から周防灘に抜ける「大鳥越」、さらに南側には丘陵部を挟んで「小鳥越」があり、山は南側を除き、そのまま海へとつながっていたことがわかる。また、後述するように、図の↑の部分には、松山城の土塁の痕跡も記されている。



第 153 図　明治時代の松山城近辺地図
（陸地測量部発行 1/25,000「苅田」を一部改変）
（明治 33 年測量・昭和 15 年・福岡県立図書館提供）

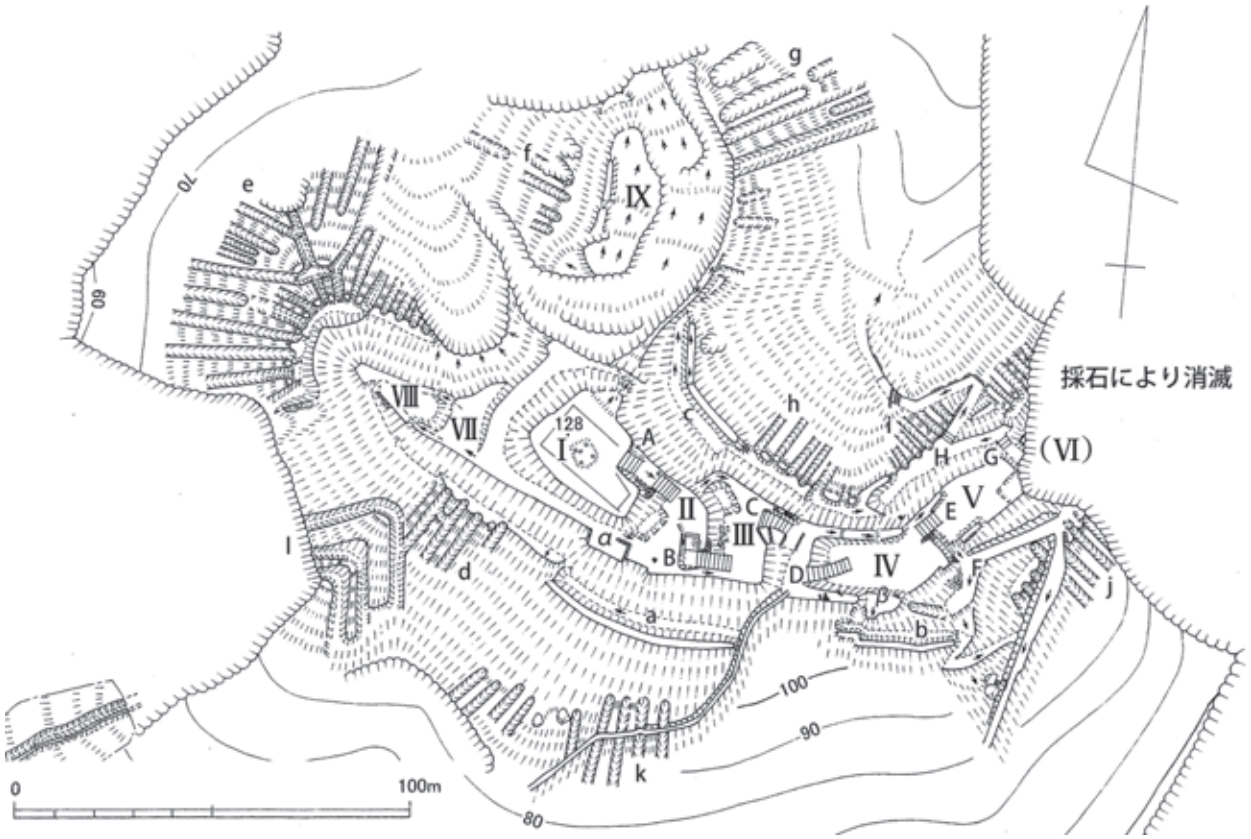
松山城の縄張りは現状、大きく「主城部分」と「外郭土塁」に二分することが出来る（第 154 図）。ここではそれぞれに分け、かつて苅田町教育委員会が行った調査成果も踏まえて説明する。

＜主城部分＞松山城の主城部分（第 155 図）は、松山の山頂（標高 128m）を中心に位置する。山頂部に主郭Ⅰを置き、南東側に石垣を備えた石段Ａを設ける。Ａの途中、踊り場状になっているところには門礎も見られ、城門があったことが想定される。Ⅰの周囲には帯曲輪Ⅱを置き、石段を持ち、直角に屈曲する虎口Ｂや、横矢の折れを持つ石垣で固められた櫓台α、Ａの石段の脇には堀状の窪みが認められる。Ｂ付近には相当数の瓦片が散乱しており、瓦葺の城門があった可能性も考えられる。Ⅱから石段を下りた曲輪Ⅲにも堀状の窪みとⅣへ向かって降りていく石段Ｃがある。石段Ｃは幅が



第 154 図　松山城縄張り図（全体・事務局作成）

一定せず、何度か作り直したような痕跡が見られ、練兵場時代あるいは戦後の公園整備による改変が想定される。C からつづら折れになってつく石段 D もまた、導線に対してややゆがんだ軸線設定となっており、改変されている可能性も考えられる。石段 D から降りた曲輪Ⅳは主郭Ⅰと同じく長さ 30m ほどでやや大きな規模を有し、南北両側に削り残しの土塁を備えている。Ⅳの南側にはやや崩れているがβの櫓台があり、東側に石垣を盛った石段 E が付く。E の南側の石垣は高さ約２ｍも



第 155 図　松山城縄張り図（主城部・事務局作成）

あり、E の石段と併せて多聞櫓のような構造物も想定され、松山城における大手口の様相を呈している。曲輪Ⅴからは南の虎口 F とさらに北東側へと二方向へ分かれている。Ⅴの曲輪の北東側は現在、採石により消滅してしまい、詳細はわからない。しかしながら、Ⅴの北側には石段 G が確認され、G から導入する曲輪Ⅵを想定できる。石段 G からは石段 H を経て、城道が北側の谷へと続いている。城の搦手口のような役割を果たした城道であろうか。

一方、Ⅰの西側にはⅦ・Ⅷの曲輪群、北側にはⅨの曲輪が配置され、頂上部を中心とした尾根上の平坦部にはことごとく曲輪が造り出されていることがわかる。また、消滅前の第 153 図の地形を見ると、主郭から東側の頂部（おそらく「小城」）までの平坦部分のうち、現状はおよそ６～７割が残存しており、かつてはⅤの曲輪からまだ北東側へ 100m ほどは曲輪群が続いていたと思われる。

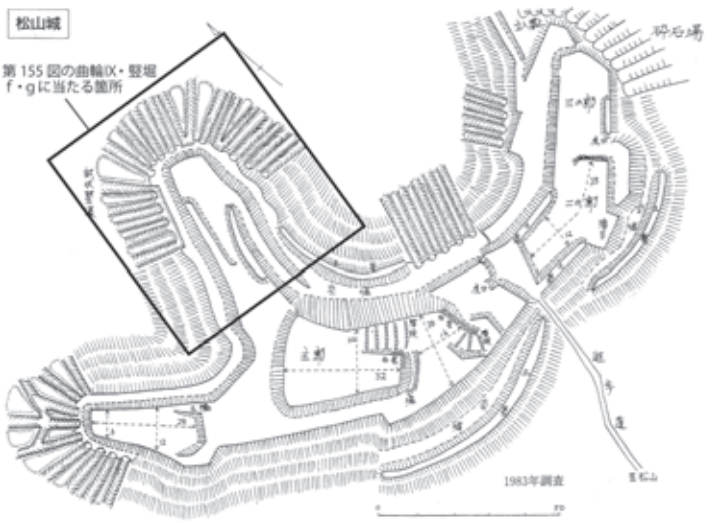
第 156 図　松山城主城部横堀

また、これらの曲輪群の周囲の斜面にはａ～ｃの横堀と、ｄ～ｋの竪堀群（畝状空堀群）、ｌの堀切群の防御遺構も確認でき、曲輪群の周囲至る所を厳重に防備している様子が窺い知れる。

ところで、今回の調査では主郭Ⅰの北側、曲輪Ⅸと竪堀群ｆ・ｇのある尾根と斜面は、非常に荒れていた。1983

年に調査・作図された縄張り図を見ると（第 157 図）、該当箇所は南北に長い曲輪とその周囲に、竪堀約 20 本からなる畝状空堀群が取り巻く様子が記されている。現状では、若干の竪堀と崩落地形が確認されるのみであり、1983 年のような状況は見る影もない。おそらくは 1983 年以後、山津波のような崖崩れが起こり、損壊してしまったのではなかろうか。

なお、曲輪Ⅸ付近では瓦が若干採集された。この付近に瓦葺の建物があった可能性が考えられる。



第 157 図　1983 年段階の松山城主城部縄張り
（『福岡県の城』から転載・廣崎篤夫作成）

また、その後も苅田町教育委員会により、主郭ⅠとⅣの発掘調査が行われている。調査では、大量の瓦が出土しており、鉄線切り（いわゆる「コビキ B 技法」）によるものであった。また、巴文の軒丸瓦、唐草文、桐文の軒平瓦なども出土している。これらは石垣や石段と同時代のものと考えられている。

第 158 図　松山城の石段
（左上：石段 A・右上：石段 B（奥に A）・左下：石段 G・右下：石段 C）
（右上は苅田町教育委員会提供）

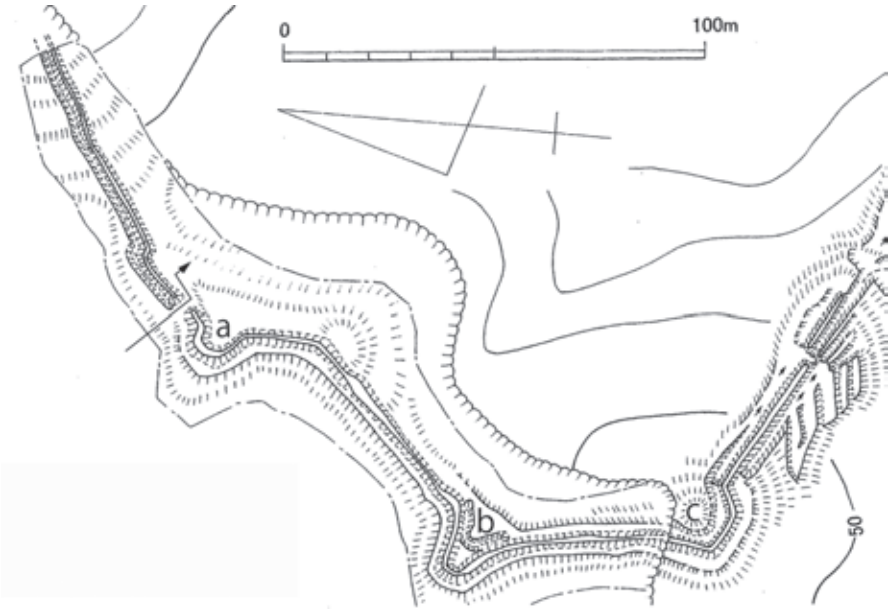
以上のように、松山城の主城部は、畝状空堀群や堀切群を主体とする戦国期の土作りの城の段階から、石段、石垣により複雑な屈曲を持った導線を生み出して、瓦葺の建物や門によって、重層的な建物群を構築した、いわゆる織豊系城郭の段階へと大々的に改修されていることがわかる。

第 159 図　松山城主城部発掘調査状況
（苅田町教育委員会提供）

＜外郭土塁＞松山城には、主城部から南側の尾根上に土塁線が伸びている。大きく東側の尾根の土塁と西側に大きく二分されるが、東側については採石により一部分断されているので、ここでは西側の土塁全体を「外

郭土塁A」、東側の土塁をBとCに分けて報告する。

なお、外郭土塁Aについては、その北半部について苅田町教育委員会によって平成2年（1990）に発掘調査が行われており、その成果も含めて併せて報告する。



第160図　松山城縄張り図（外郭土塁A部分・事務局作成）

東側の尾根線に延びる外郭土塁Aは、主城部の南西側斜面の、やや下った所から土塁線が始まり、南西方向に向かって、尾根上を約200m延びている。標高約60mの頂部で直角方向に向きを変え、南東方向に向かい谷まで約150m延びる。土塁は発掘調査では、幅4m前後、高さ1～2mで、外側に犬走り、あるいは横堀が並行している。さらに土塁線の途中には、a～cの3ヶ所の突出部を確認することが出来る。その突出の形状は、コの字型に屈曲している。このコの字の内側は、現状地形が残るcで見てみると内側に通路となるような横堀を設け、最高所は全くの自然地形である。これは最高所に櫓のような施設を建てたのではなく、防御の弱点となる最高所を取り込みつつ、土塁線を胸壁のようにして「長城ライン」のような防衛線をなしていたものと言えよう。

第161図　松山城外郭土塁C

第162図　松山城外郭土塁B（内側から）

さらにaの突出部の東側は土塁線が一部途切れており、虎口となっている。詳しく見てみると、虎口の導線は、中へ入ったのちに直角に2回おれて内部に入るようになっている（第160図矢印部分）。これは食い違い虎口ともいえるもので、突出部aからは虎口に対して横矢が掛けられるようになっており、非常に高度な築城技術の元に構築されたものであることがわかる。

なお、cから南東方向へは、土塁線は途切れたり、不可解な平坦面、明らかな後世の耕作地の平坦面があり、縄張りの読み込みが非常に難しいが、ラインとしては一貫しており、麓まで継続していたものと考えられる。

一方、東側の尾根上の外郭土塁は、途中の尾根の頂部が採石により削られ分断されているため、部分的にしか残存していない。谷側の外郭土塁Bは、現状の全長は約150mで、高さ約2mの土塁の外側には一部横堀状となっており、基本的には外郭土塁Aと同じ構造である。上方には10m弱に渡って直角に屈曲しており、横矢を期待した意図的な折れである。土塁の内側は基本的には自然地形である。この外郭土塁Bであるが、明治33年測量の1/25,000地形図にケバ表記により図示されており（第153図の↑部分）、少なくとも明治33年より古いと判断される。

外郭土塁Bの北側はかつての採石により、現状が極端に損なわれていて、往時を知ることはできない。また、旧大鳥越の峠道部分も採石により損なわれている。しかし、その間の部分は旧地形が残存しており、踏査したところ、土塁線ではないが、自然の尾根を一段造成し、東側斜面に造り出された犬走りのラインが確認できた。後世の改変が想定されるものの、外郭土塁のラインとしては矛盾はなく、外郭土塁Cとした。現存する全長は70mほどで、自然地形に沿って屈曲して伸びている。大鳥越から北側、主城部側については、現状見た限りでは土塁線を確認することはなかった。詳細に確認したわけではないため、今後詳細な調査が必要であろう。

以上のように、外郭土塁は現状では良好な残存であるとはいい難いが、かつての発掘調査の成果や現況の確認により、土塁線は主城部から東西の尾根線上を延び、尾根の最高所を取り込みながら、谷部まで続いていることがわかった。ちょうど、両手を広げて囲い込むようなラインであり、山頂から南側一帯を囲い込んでいるプランであることがわかる。また、土塁線には横矢掛かりを想定した直角の屈曲や食い違い虎口などが確認されたが、これはいわゆる織豊系城郭の築城技術により構築されたものと考えられる。さらに石垣などのような構築物もなく、土造りであることから、短期間で構築した臨時的な築城であると想定され、一時的に大軍を城の南麓側に駐屯させる必要性から急遽構築したものと考えられる。このような横矢の折れを持つような長城ラインは、豊臣秀吉による三木城攻め、鳥取城攻めなどの攻城戦において攻城側に特徴的に認められているが、守城側が構築した事例は倭城段階まで見られないため、非常に希少な事例であると言えよう。

以上、主城部と外郭土塁に分けて説明したが、松山城の縄張りは複数の改修の画期を想定することが出来る。それは、①主城部の畝状空堀、堀切群（一部横堀）を構築した戦国期城館としての段階、②外郭土塁の構築の段階、③主城部の石垣、石段、横堀、瓦葺建物構築の段階の3つの段階である。これらの段階をどの年代や築城主体にあてるかは様々な意見があると思うが、他の城館の縄張りの評価から考えると、①は戦国時代末期（天正年間）の長野氏あるいは高橋氏の構築によるもの（一部は永禄末期の毛利方の構築も含まれる可能性もある）、②天正14年（1586）の九州平定戦における豊臣方の構築、③天正15年～慶長5年の黒田氏の支城の改修、あるいは慶長5年以後の細川氏の支城としての改修が想定される。

このように、松山城は様々な勢力が単に入城して使用しただけではなく、戦国末期から近世初頭にかけての当時の最先端の築城技術が導入された痕跡がふんだんに残されており、戦国期～近世初頭の地域史・城郭史を考える上での重要性は、消滅した部分を補って余りあると言っても過言ではないであろう。

【史料】あり

【文献】1,2,4 ～ 8,**9**,**10**, 23,**36**,**90**,**91**,**92**

豊前 130　南原城（みなみばるじょう）

郡名　京都郡　　別称　西谷城　　図幅名　苅田（東）
種別　山城　　所在　京都郡苅田町南原

【沿革】苅田町西側の南北方向に展開する高城山から北東方向に伸びる尾根先端部に位置する。伝承等はなく、『福岡県の城郭』において初めて図面入りで公表された。

【概要】城域は、2地点 (標高 130 m・154 m) に位置し、互いの距離は約 120 mと近接するため、南原城として一括して報告する。高城山系の尾根先端部の鞍部を挟んで、北東側（曲輪群Ⅰ）と南西側（曲輪群Ⅱ）の2地点にそれぞれ城郭遺構が確認される。それぞれの比高は約 100 m以上で、眺望が良く、松山城を遠望できる。

曲輪群Ⅰは、南北約 30 m、東西約 80 mで、主郭西側に幅約 5 mの腰曲輪を配し、主郭の南西側にはⅡにつながる尾根筋に2本の堀切と1本の竪堀を設けている。曲輪群Ⅱは、南北約 50 m・東西約 100 mを測る。主郭の周囲を幅約 2 ～ 5 mの帯曲輪が囲い込み、北側は、三段の曲輪が展開する。さらに、幅約 3 mの小規模な曲輪群が南東方向と曲輪群Ⅰに続く北東方向に、それぞれ五段ほど展開する。主郭西側は2本の堀切を設けている。

第 163 図　南原城縄張り図（苅田町教育委員会作成・提供）

【史料】なし　【参考文献】5,6,9,**10**

豊前 131　高城（たかじょう）

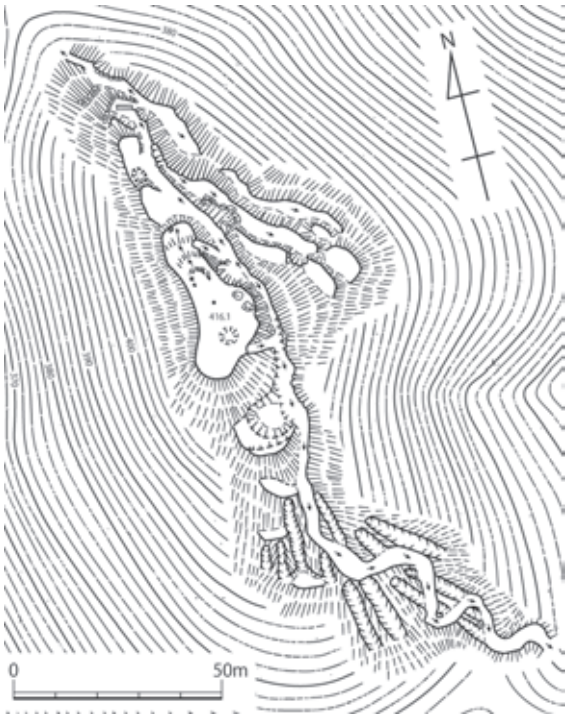
郡名　京都郡　　別称　高城山城・南原城　　図幅名　苅田（東）
種別　山城　　所在　京都郡苅田町南原・山口

【沿革】苅田町西側の南北方向に展開する高城山系四座の内、最も北側の高城山頂（標高 416 m）に位置する。『豊前志』には「高城城阯　南原村にあり。長野三郎左衛門の抱城なり。後、杉因幡守居城となれり」の記載がある。『古城記』にも「城跡一ヶ所　南原に有り　右の城主は杉因幡守といふ」とある。また、『古城跡実地取調報答書』（文献 23 所収）には、「南北十六間余、東西七間余、平坦にして、東面に二個の大石峙立す、国見の岩と唱ふ」とあり、さらに「東南北の三面に各壇あり、北は壱畝許り、南は稍広濶にして、兵士数百を屯すべし、東面は三壇あり、間に胸墻の遺趾を存す」とある。国見の岩は今も現地に残る。

【概要】高城山系の最頂部にあたり、京都平野からの比高は 350 m以上となる。山頂部の主郭は、緩やかな弧状を呈し、南北約 38 m・東西約 8 ～ 12 mを測る。主郭北側は、南北約 10 m・東西約 5 mを測る同規模の二段の曲輪が展開し、明瞭な平坦面を形成する。主郭東側は、幅約 3 ～ 5 mを測る腰曲輪が五段ほど展開する。主郭南側は、幅約 2 mの土塁をもつ一段の曲輪があり、南北・東西ともに約 12 mを測る。この曲輪から南側に幅約 3 mの小規模な二段の曲輪が、また約 10 本の竪堀群が確認された。二段の曲輪は他の曲輪に比して平坦面がやや不明瞭であり、竪堀群は現道に破壊されるため、現状ではその構成は不明瞭である。

【史料】なし

【文献】1 ～ 5,7 ～ 9,**10**,23



第 164 図　高城縄張り図（苅田町教育委員会作成･提供）

豊前 132　大平山城（たいへいやまじょう）

郡名　京都郡　　**別称**　稲光城　　**図幅名**　苅田（東）
種別　山城　　**所在**　京都郡苅田町稲光・葛川・下片島・山口

【沿革】苅田町西側の南北方向に展開する高城山系四座の内、最も南側の大平山山頂（標高 327 m）に位置する。伝承などの来歴については全く記載がないため、城主等は不明である、『遺跡』では「稲光城」として、関連地名のみが根拠であったが、『福岡県の城郭』にて初めて図面入りで公表された。

【概要】大平山の頂部を主郭とし、南北約 30 m、東西約 10 mを測り楕円形状を呈する。主郭北側に堀切と土塁を設け、主郭北側から東側にかけ曲輪を配する。

小規模な城館であるが、西側山麓からの比高差は約 300 mを測り、眺望が確保されており、周防灘・京都平野を広範囲に遠望できる位置にある。また大平山城より南西方向に位置する等覚寺山城が視認される。

【史料】なし

【文献】
5 ～ 9,**10**

第 165 図　大平山城遠景
（苅田町教育委員会提供）

第 166 図　大平山城縄張り図
（苅田町教育委員会作成・提供）

豊前 133　**等覚寺城**（とかくじじょう）　郡名　京都郡　別称　山口城　図幅名　苅田（西）
種別　山城　所在　京都郡苅田町山口

【沿革】苅田町の西、貫山の東麓、等覚寺集落の南、白山多賀神社の境内に位置する。『応永戦覧』には応永５年（1398）に等覚寺座主堯賢が大友氏の援軍として参加している。また、永禄年間の毛利氏と大友氏の豊前争奪戦においては、長野城に拠点を持っていた長野氏の京都郡方面の要の城として機能し、大友氏、毛利氏双方から攻められてたびたび落城したことが一次史料からも知られる。永禄 11 年（1568）を最後に一次史料からの記載がなくなる。しかし、『京都郡旧記』（文献 23 所収）には、普智山等覚寺は天正年間に兵火に遭い、天正 14 年（1586）から寛永元年（1624）まで、松会が催行されなくなったことが記されており、天正年間も城として機能していた可能性が考えられる。

第 167 図　白山多賀神社（等覚寺城主郭）

第 168 図　等覚寺城畝状空堀群

第 169 図　等覚寺城堀切

【概要】等覚寺は、中近世を通じて山岳修験の一大拠点であった彦山の主要拠点である「彦山六峰」の一つ、「普智山等覚寺」があり、白山多賀神社の神宮寺として子院 300 が存在したともいわれており、白山多賀神社境内の発掘調査では、平安時代の遺物が見つかっているし、過去には社殿の裏で銅製経筒が発見されている。等覚寺城は白山多賀神社の社殿（標高 304m）のある境内一帯が城域で、南北約 200m に渡って平坦面が続く。ここが、かつて曲輪が置かれた場所で、現在は白山多賀神社と山王権現社の社殿などが置かれている。また、平坦面の端部には土塁状の高まりが所々に残っているが、発掘調査の結果では、中央の低くなっているところは遺構面がかなり削られており、当初はもっと高い場所が地表面だったのが、削られた結果、両側の残された地面が高く残り土塁状に見えるようになったものとみられる。そのため、かつての曲輪面の段数などは現状で推し量るのは難しい。白山多賀神社の社殿裏の土塁状の高まりも、社殿建設のために明らかに削られており、城郭があった時点では自然の高まりであったと考えられる。ただ、社殿裏の高まりからは平安時代の経塚も見つかっているため、最高所は後世の改変を受けていないものとみられる。

等覚寺城の縄張りで最も特徴的と呼べるのは斜面の防御遺構であろう。曲輪群の周囲Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

の地点には、それぞれ夥しい数の畝状空堀群や堀切群を確認することが出来る。特に曲輪群北側のⅠは、北側の尾根続きには、一部車道造成により埋没しているものの、４本の堀切群が尾根を分断し、東側斜面には堀切と連動する形で畝状空堀群を構築する。約20本余りの竪堀が途中、犬走りを挟んで二段となって、斜面に掘り込まれており、厳重な防備の様子が窺い知れる。Ⅱの場所にも７本の竪堀群からなる畝状空堀群と堀切１本が設けられる。Ⅱのすぐ上には曲輪群が階段状に並列し、その横には現在、等覚寺の松会（国重要無形民俗文化財）が催行される「松庭」の平坦面があり、後世の改変も多少みられるものの、Ⅱの空堀の在り方からみて、平坦面のレイアウトを変更するほどの改変はなされていないと思われる。

そして、曲輪群の南端部のⅢにも、約15本の竪堀群を二段に構えた畝状空堀群が構築される。

以上のように、等覚寺城は、上下段それぞれ合わせると約80本前後の竪堀群からなる畝状空堀群を備えた非常に高度な防御技術により構築された城であ

第170図　等覚寺城縄張り図（事務局作成）

ることがわかる。曲輪群周囲の斜面を二段にわたって構築する畝状空堀群は、長野城（北九州市小倉南区）にも見ることが出来る。

これらの畝状空堀群の年代であるが、一次史料の存在から永禄年間の構築とする考えもあるが、非常に高度な築城技術によるものであることから、天正年間（～天正 15 年まで）の構築とする考えもある。いずれにせよ、京都郡に拠点を構えた国人領主・長野氏によるものと想定される。

【史料】あり　【文献】5 ～ 9,**10**,**26**,**36**,94,**95**,**143**

豊前 134　障子ヶ岳城（しょうじがたけじょう）　**郡名　京都郡 / 田川郡　別称　勝司嶽城　　図幅名　行橋（西）/ 金田（東）**
種別　山城　所在　京都郡みやこ町勝山松田・勝山浦河内・田川郡香春町採銅所・鏡山

【沿革】田川郡と京都郡との境界の稜線上、障子ヶ岳山頂に位置する。『古城記』には建武３年（1336）に足利尊氏の命により足利駿河守統氏が築城し、応安元年（1368）には千葉上総介光胤が足利統氏を討って居城としたが、その後大内氏の持ち城となる。天正年間には小早川隆景の持ち城となるが、後に破却したとする。『豊前志』も同様な記載に加え、「今も空湟残れり。又、本城、北の丸、馬屋の跡など云ふ處あり」とある。一方、同書の田川郡の章では、「勝司嶽城阯」として、「豊臣太閤、馬嶽城の附城とせられたり」とある。実際、天正 14 年（1586）11 月に香春岳城主・高橋元種の支城であった障子ヶ岳を小早川・安国寺・黒田勢が落とし、引き続き香春岳城を包囲したことについて、秀吉から賞されている。

また、城そのものの記載としては、『古城跡実地取調報答書』（文献 23 所収）、には「上野村の西方に位し、其嶺上は田河郡に堺せり。山頂平坦の地、南北一丁四十間余あり、南方の高処は里人之を牙城の跡なりと云ひ、今尚胸壁を存す。其高さ三尺、馬踏六尺許り、中間馬場と称ふるもあり」とある。

【概要】障子ヶ岳城は、障子ヶ岳山頂（標高 427m）一帯が、城のある場所として有名であるが、その近辺、田川郡と京都郡の郡境の稜線上には、数多くの城館遺構が残されている。それらは特に城名も伝わっていないが、障子ヶ岳城に何らかの関係のある遺構と思われるため、ここで報告する。よって、山頂に所在する「本城部」と「周辺城館」に二分し、それぞれ報告を行う。

第 171 図　障子ヶ岳城遠景

第 172 図　障子ヶ岳城および周辺城館群位置図（国土地理院 1/25,000 地形図「行橋」から一部改変して事務局作成）

＜本城部＞本城部は、通常、障子ヶ岳城として認識されている場所で

ある（第 177 図）。障子ヶ岳の最高所に南北約 30m、東西約 20m の主郭Ⅰを置き、そこから北側へ階段状にⅡ～Ⅴの曲輪を並列させる。基本的にⅠ～Ⅳにかけては徐々に低くなっているが、Ⅴでは再び高くなる。それぞれの曲輪は、高さ１ｍにも満たない低土塁が巡らされているが、土塁線はそれぞれの曲輪で完結して巡っており、Ⅰの東側の土塁には、屈曲した張り出しなども認めることが出来る。その一方で、曲輪と曲輪の間の切岸の両側にも土塁線を延ばしており、曲輪群全体を囲い込もうという意図が感じられる。特に曲輪群ⅣとⅤとの間は、堀状に窪んでおり、一見単なる堀切にも見えるが、入念に観察すると、堀切の両端部は土塁によって仕切られているのがわかる。そのような目で見ると、曲輪ⅡとⅢの間のｃや、ⅢとⅣの間のｂは、わずかに窪んでおり、さらに両側の斜面には竪堀状の掘り込みが見られることから、堀切ａも含め、元々あった堀切を埋め、土塁線を延長させていることが推察される。

以上のように、元々は曲輪間にあった複数の堀切を埋め、その上に土塁を巡らすという改修が行われた可能性が考えられる。

主郭Ⅰの南西側には深さ 10m にも及ぶ非常に大きな堀切ｄを含む堀切２本が掘られ、尾根線を遮断し、堀底から主郭までの高さが 20m 前後にも及んでいる。一方、主郭の南東側には、これまで何も遺構は存在しないと考えられてきた。しかし、今回の踏査によって、長大な堀切ｅを含む堀切３本が構築されていることがわかった。堀切は上方からの流入土によって、尾根部分の大半が埋まってしまっていた。自然埋没とも考えられるが、主郭の改修の際に、土砂が大量に流入した可能性も考えられるのではなかろうか。

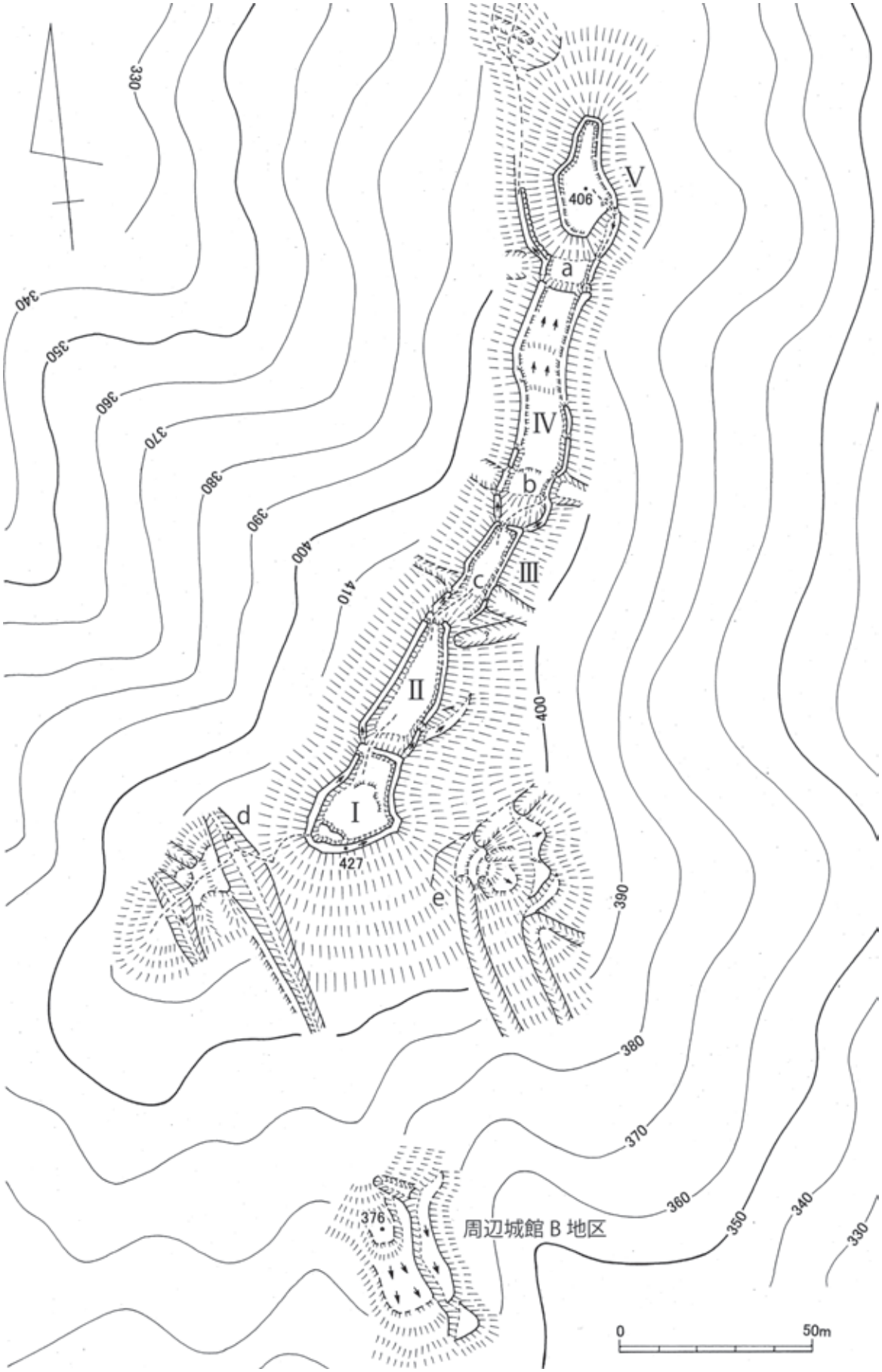
以上のように、障子ヶ岳城の本城部は、階段状に並列する曲輪群を土塁が囲い込み、尾根上は大堀切によって豪快に遮断する構造である。しかも、曲輪群を囲む土塁線はそれ以前に構築されていた堀切を埋めた上で構築されており、とある段階において障子ヶ岳城が大々的に改修されていることが推測される。この改修の時期や主体であるが、横矢を志

第 173 図　障子ヶ岳城からの眺め
（京都郡方面・手前に土塁が見える）

第 174 図　障子ヶ岳城曲輪群（本城部）

第 175 図　障子ヶ岳城土塁（曲輪Ⅰ）

第 176 図　障子ヶ岳城堀切ｄ

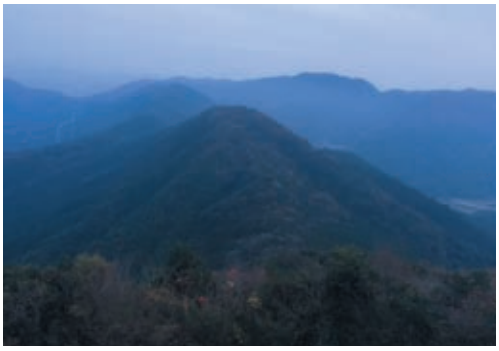


第 177 図　障子ヶ岳城縄張り図（本城部・周辺城館 B 地区　事務局作成）

向するような屈曲により突出させた土塁線の構築などをみると、天正 14 年(1586)の小早川・黒田が障子ヶ岳城を落城させたのちに、香春岳城攻略の際の付け城として改修した可能性も考えられるが、それ以前の高橋元種段階の可能性もあり、現状では決め手に欠く。

第 178 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（A 地区・事務局作成）

＜周辺城館＞障子ヶ岳城の周辺、京都郡と田川郡との境の稜線上には、多くの城館遺構が存在する。障子ヶ岳山頂からは北側へは約 2.5km の区間、南側へは約 0.5km の区間に、稜線上の頂部を中心として、11 箇所もの曲輪のまとまり（A ～ K 地区）を確認した。既に周辺城館の存在については、みやこ町の分布地図（文献 172）などに掲載されていたが、今回、改めて踏査を行い、全て図化を行った。以下、南側から順番に報告する。


第 179 図　障子ヶ岳城周辺城館 A 地区遠景
（手前の頂部）

①A 地区（第 178 図）　障子ヶ岳山頂から郡境の主稜線を南へ約 500m の地点、標高 391m の頂部に位置する。頂部を中心に 10m × 5 m の曲輪を置き、その東側と西側に小曲輪を並列させる。堀切などもなく、平坦面はあまり丁寧な整形がなされていないが、明らかに人為的な平坦面である。周辺城館群の中では、最も南側に位置するもので、ちょうど障子ヶ岳とは尾根の鞍部を挟んで向かい合うような位置に当たる。

第 180 図　障子ヶ岳城周辺城館 C 地区
（「砦跡」の標柱が建つ）

②B 地区（第 177 図）障子ヶ岳山頂から南へ約 100m 地点の主稜線上の尾根の中腹に位置する。標高 376m 地点を中心に不整形な平坦面群が全長約 40m に渡って延びる。竪堀状の掘り込みはあるものの、明確な堀切などはなく、至って単純な構造である。

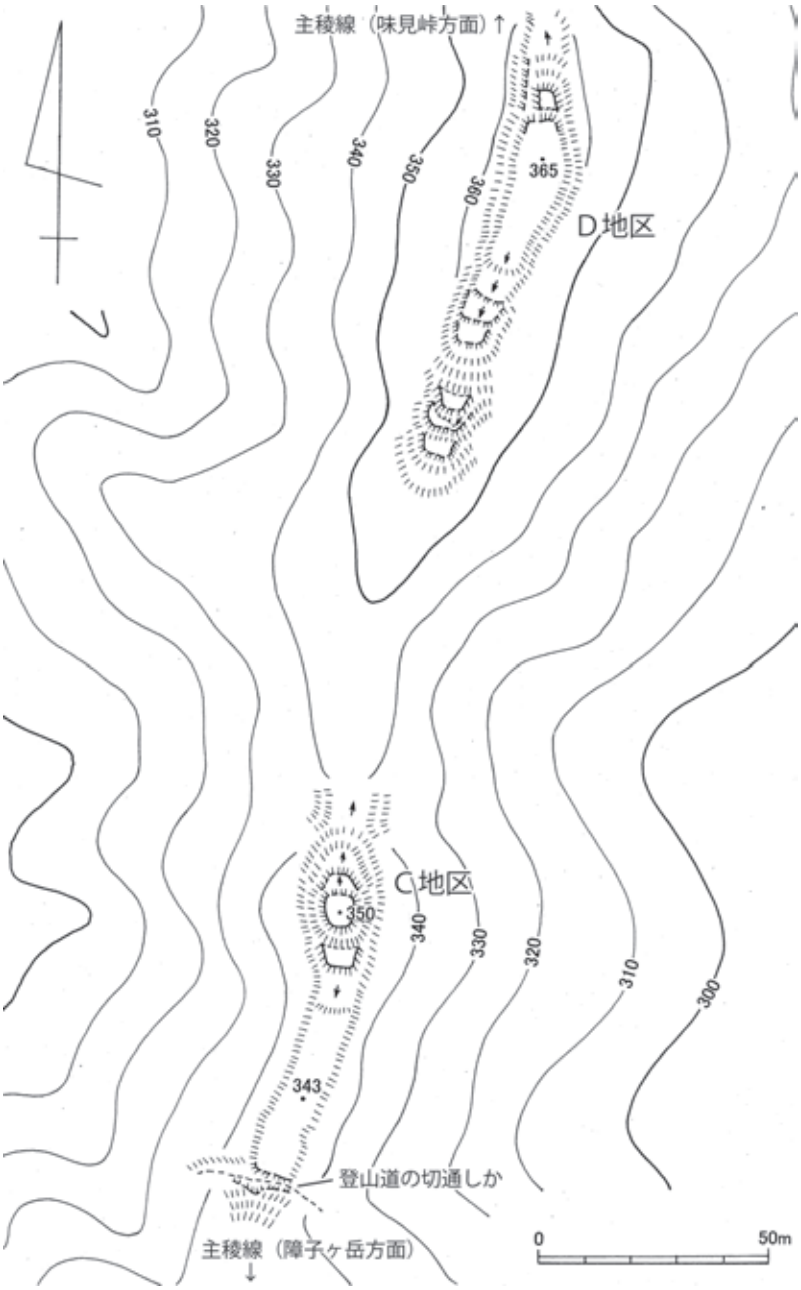
③C 地区（第 181 図）障子ヶ岳山頂の主城部から北へ尾根を 150m ほど下ると郡境の主稜線は、平坦地形へと遷移する。そのわずかな起伏の凹凸の頂部ごとに曲輪群が形成されている。C 地区は、主稜線が平坦になってから、北へ約 50m の地点、標高 350m のわずかな頂部に位置する。現在、ここは味見峠から障子ヶ岳への登山道となっており、「砦跡」の標柱も建つ。全長約 20m の区間に小曲輪が主稜線に沿って三段造られる。堀切などはないが、明ら

かに人為的な造作の痕跡である。

④D地区（第 181 図）C 地区から主稜線を北へ約 150m 先には、標高 365m の尾根の頂部があるが、そこは自然の平坦面である。しかし、その南側の斜面部分には、人工的な造成段があり、小曲輪群とみられる。一辺 10m にも満たない小曲輪が約 5 ～ 6 段形成される。また、頂部の北側にも、一部登山道で損壊しているものの、1 ～ 2 段の小曲輪を確認することが出来る。堀切などは確認できないが、明らかな人為的な造作である。

⑤E 地区（第 184 図）D 地区から北へ約 300m 進んだ標高 348m の頂部には、一辺 10m にも満たない小曲輪を置き、その周囲に放射状に小曲輪群が展開する。主に北側の主稜線に沿って曲輪が造られている印象を受ける。ここも C 地区同様、「砦跡」の標柱が建つ。堀切等の防御遺構は確認できず、小勢の駐屯を意図したものと考えられる。

⑥F 地区（第 185 図）E 地区から北西へ稜線を 500m ほど進むと、京都郡から田川郡へ抜けるルートの一つ、味見峠（標高 249m）にたどり着く。峠の南北両側は、主稜線の中で最も傾斜がきつい斜面となっているが、それぞれの頂部には、曲輪群が展開している。峠の南側約 70m の標高 305m の頂部には、F 地区の曲輪群が展開する。頂部は自然地形のままとなっているが、

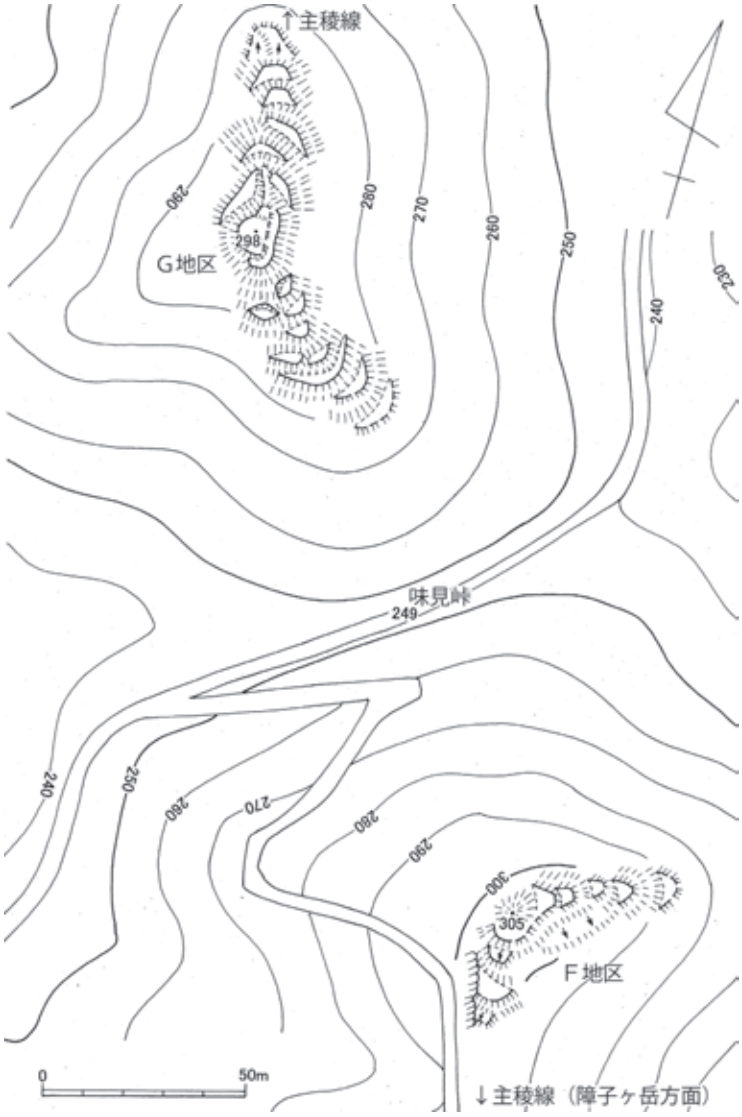


第 181 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（C・D 地区　事務局作成）

第 182 図　障子ヶ岳城 C 地区から山頂を望む

第 183 図　障子ヶ岳城周辺城館 E 地区（「砦跡」の標柱が建つ）

第 184 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図
（E 地区・事務局作成）



第 185 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（F・G 地区　事務局作成）

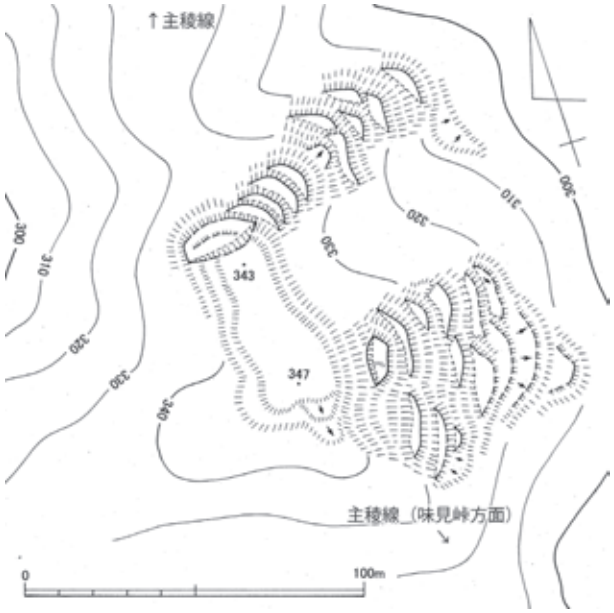
その東側と南側の尾根伝いには、一辺 10m にも満たない小曲輪群が階段状に展開する様子が看取できる。他の地区と類似する構造である。

⑦G 地区（第 185 図）味見峠の北約 100m 地点の標高 298m の頂部には一辺 10m にも満たない小曲輪があり、その南北側の稜線上に小曲輪が展開する。稜線の尾根上に半月形の小曲輪を展開させている。G 地区の南北全長は、100m 近くもあり、障子ヶ岳に近い周辺城館群の中では規模の大きな方である。堀切などはない。

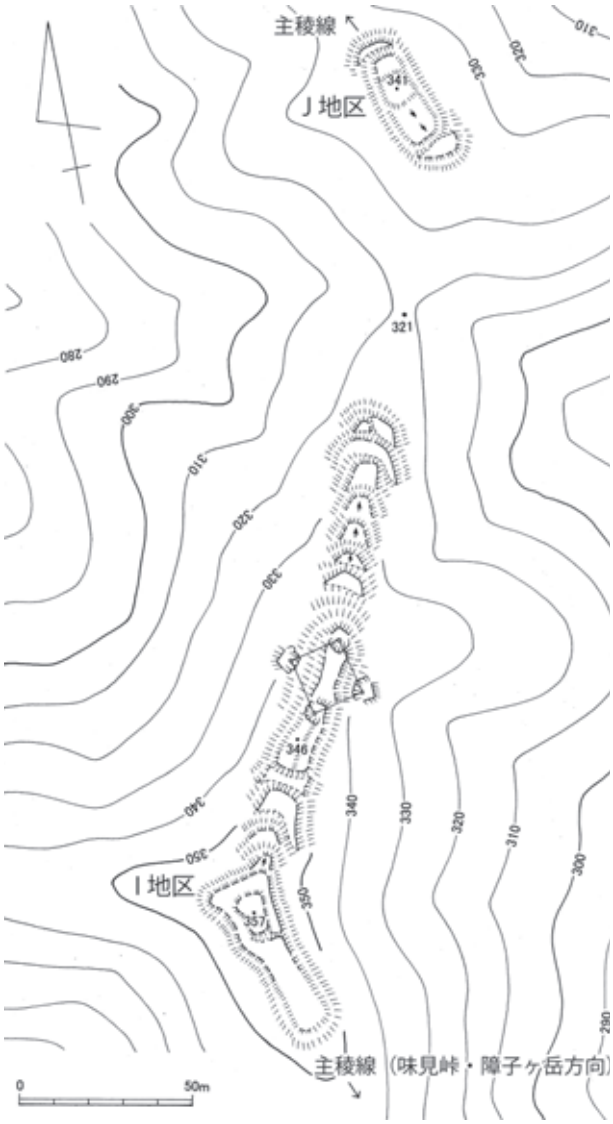
⑧H 地区（第 186 図）G 地区から郡境の主稜線を北へ約 300m 地点の標高 347m の頂部は、自然の平坦地形であるが、そこから東側へ下ると尾根上には、等高線に並行して細長い小曲輪群が展開している。曲輪の幅は 5 m前後であるが、全長は 20m 前後のものも多い。約 15 段を確認することが出来る。また、主稜線を北へ約 50m 進んだ標高 343m 地点から北東側に延びる尾根上にも、先ほどと同様に階段状に細長い小曲輪群が展開している。約 12 段を確認することが出来る。

曲輪の規模や並び方などの構造は他の地区と類似するが、当地区は明らかに東側に対してのみ意図的に曲輪群を構築しており、他の地区とは志向性を異にしている。

⑨I 地区（第 187 図）H 地区から主稜線を北西へ約 300m の標高 357m の頂部には、不整形ながら曲輪面が確認でき、そこから、北へ向かって曲輪群が展開している。途中、高圧線鉄塔により損壊している場所もあるが、基本的には曲輪群は続いているようであり、全長は 150m 近くもある。



第 186 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図
（H 地区・事務局作成）



第 187 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図
（I・J 地区　事務局作成）

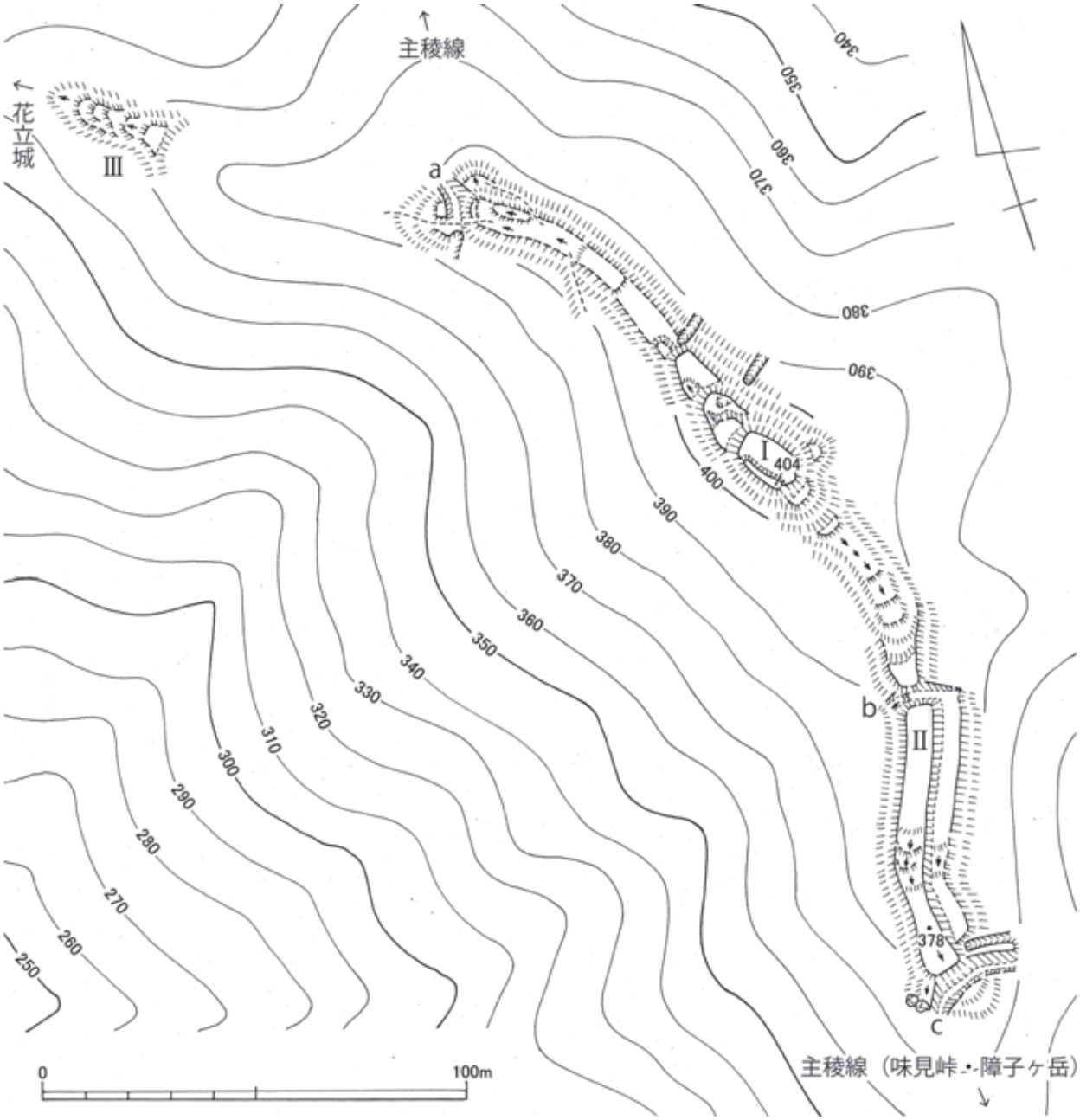
曲輪群の途中、鉄塔の南側には深さ 3 m の堀切 1 本を確認できるが、それ以外は、一辺 10m 前後の小曲輪が階段状に並列している。曲輪は併せて 10 段ほどを数える。

⑩ J 地区（第 187 図） I 地区から北へ、標高 321m の鞍部を挟んで約 200m、標高 341m の頂部は、ほとんど人工的な造成がなされない自然地形であるが、頂部の南北両側に僅かに人工的に造成した平坦面を確認することができる。おそらくこれも他の地区同様、曲輪群の一つとみてよいだろう。基本的には自然の平坦地形であるので、最大限その自然地形を活かしつつ、最低限の造成にとどめているものと思われる。全長も 40m ほどで他の地区に比べて小規模である。

⑪ K 地区（第 188 図） J 地区から主稜線を北西へ約 300m 地点の標高 404m の頂部を中心に、尾根線上に全長約 300m の曲輪群が広がっている。曲輪群は大きくⅠ～Ⅲの 3 ヶ所を確認することができる。最高所の標高 404m の頂部には主郭Ⅰを置く。東西約 20m、南北約 15m の規模で、南側に低土塁を設けている。Ⅰから北西の尾根線上にかけての約 100m の区間には、曲輪が階段状に連続して並列する。その曲輪群の先には、登山道で一部損壊しているが、堀切を 1 本設けている（図中 a）。曲輪群は主郭側ほど、丁寧に整形しており、堀切 a の近くの曲輪になると、不整形で不明瞭な平坦具合となっている。堀切 a からは主稜線は北側へ延びるが、香春町採銅所方面へ続く、北西側の尾根上を進むと、a から約 50m 地点に不整形ながらも人為的に造成された小曲輪群Ⅲを確認することができる。Ⅲは全長 25m ほどであり、小規模である。一方、Ⅰの南東側は、不明瞭な緩斜面

が 50m ほど続くが、その先には堀切 b を確認することができ、堀切の南側にはⅡの曲輪が展開している。Ⅱの曲輪は途中、緩やかな傾斜を持ちつつも、全長約 70m、幅約 10m と細長く、東側に堀切 b から続く帯曲輪を巡らしている。Ⅱの南端部には幅 10m 近い、大きめの堀切が確認できる。以上のように、K 地区は周辺城館の中でもひときわ大きく、さらに明瞭な平坦面群や土塁、堀切を構築し、単独でも一個の城ともみなすことのできる構えを備えていると言えよう。

以上、障子ヶ岳城の周辺城館群について見てきたが、これらの城館群は、主城部と同じく郡境の稜線上に約 300m 前後の間隔で稜線上の僅かな頂部を利用して構築していた。さらに、堀切などの防御施設は基本的に持たず、自然の平坦地形は最大限そのまま活かし、主に斜面部に階段状に小曲



第 188 図　障子ヶ岳城周辺城館縄張り図（K 地区・事務局作成）

輪群を構築するものであった。これは、三岳城周辺の城館群（豊前 22 ～ 25）や椎山城（豊前 29）などとも類似するもので、恒常的な在城を意図して造られたものではなく、一時的な兵の駐屯を目的とした「陣城」であるとみられる。K 地区については、他の地区とは異なり、平坦面も非常に明瞭で、要所に堀切を備え、それなりの規模を有している。ある意味恒常的な構えである印象を受ける。周辺城館の中でも中心的な位置にあった可能性も考えられる。

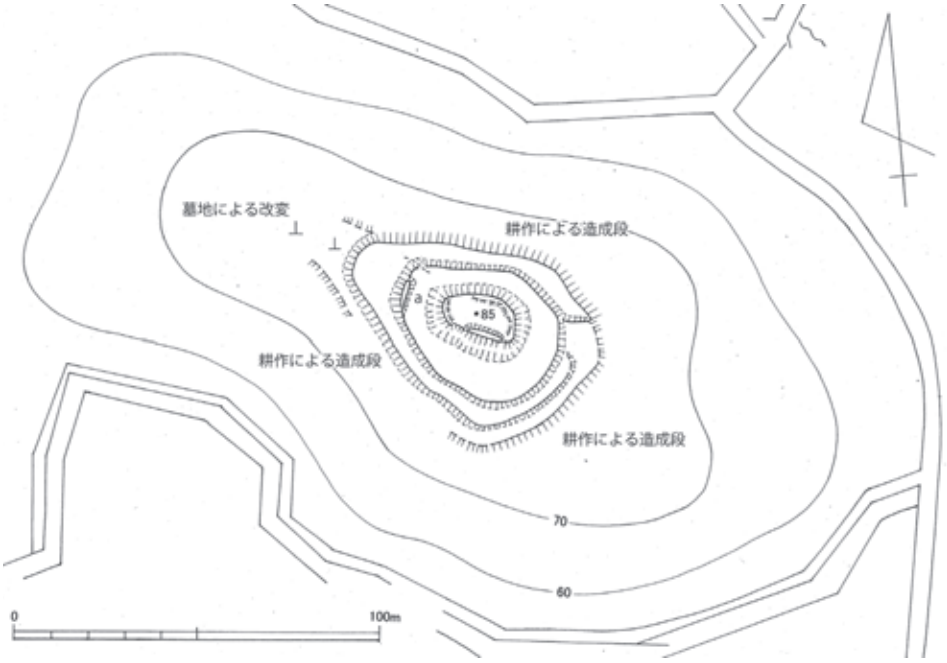
ただ、これらの城館群が、障子ヶ岳城と連携した陣城群であるのか、はたまた障子ヶ岳城を攻めるための陣城群であるのかは今一つ不明確である。また、H 地区では東側の斜面に曲輪群が構築されているのに対し、K 地区の尾根筋を西側に降りた先には花立城（豊前 48）があり、花立城もこれら周辺城館群の一つである可能性も考えられ、たとえこれらの城館群が、障子ヶ岳城と連携した陣城群であっても、東と西、どちらに向けられて構築されたものなのか不明瞭なところがある。歴史的な背景を参照すれば、天正 14 年の黒田・小早川勢による香春岳城包囲戦に関わる陣城群の可能性もあるが、断定はできない。場合によっては、各地区で使用年代が異なる可能性もあり、今後、詳細に検討していく必要があるだろう。

【史料】あり　【文献】1 ～ 8,**9**,**10**,23,**26**,**36**,**148**

豊前 135　尾倉山城（おぐらやまじょう）	**郡名　京都郡**　　**別称　尾倉山堡・小倉山城・岩隈城**　　**図幅名　行橋（西）**
	種別　丘城　　**所在　京都郡みやこ町勝山岩熊**

【沿革】みやこ町勝山岩熊の長峡川に面した低丘陵上に位置する。

『古城記』には「掻揚一ヶ所　岩熊村ノ内、尾倉山」とある。また、『古城跡実地取調報答書』には「尾倉山堡　岩熊村の東南に小丘あり、高さ三十間、周囲五丁余もあるべし、頂上の平地、南北十間、東西七間あり、その西面、今尚ほ胸墻を存し、壇下一帯の平地あり、二廓の類ならんか」とある。一次史料では、門司文書から、貞治５年（1366）に門司親長が、菊池武光が立て籠もる岩熊城と伊田城（田川郡）を攻めたことがわかる。また、永禄 12 年（1569）には、大友宗麟が「岩熊村」に立て籠もる毛利方を攻撃したことが、合志文書から読み取ることができ、岩熊城（尾倉山城）が争いの場となったと推察される。



第 189 図　尾倉山城縄張り図（事務局作成）

【概要】標高 85m の小丘陵上の頂部に南北約 10m ×東西約 20m の主郭を置く。主郭の縁には高さ 0.5m に満たない低土塁をほぼ全周巡らしている。主郭の周りは約 5 m の落差を持って切岸が構築され、帯曲輪を巡らしている。帯曲輪の西側、図中 a には、土塁のような高まりを確認することができる。主郭の土塁もしくは土塁 a が、『古城跡実地取調報答書』（文献 23 所収）の言う所の「胸墻」であるとみられる。さらにこれらの曲輪群の周囲にも段状の平坦面群が展開しているが、西側には後世の墓地が広がっており、また、その他についても後世の耕作による改変と思われる。よって、主郭の帯曲輪から外側については、堀切なども確認することはできず、現状でそれらを城館遺構として断定することは困難である。

【史料】あり　【文献】1,7 ～ 9,**10**,23,**26**

第 190 図　尾倉山城（上：遠景・下：主郭の切岸）

豊前 136　勝山城（かつやまじょう）

郡名　京都郡　　別称　なし　　図幅名　行橋（西）
種別　山城　　所在　京都郡みやこ町勝山黒田・勝山長川

【沿革】みやこ町勝山黒田の集落の西に聳える山稜上に位置する。『古城記』には「遠見場一ヶ所京都郡黒田村ノ内勝山」とあり、言い伝えはなしとする。

【概要】標高 110m の頂部は、古墳のような高まりがあり、その周囲にわずかな曲輪の平坦面を設ける。北側から東側にかけて土塁が囲み、さらにその周囲には帯曲輪が巡り、北、東、南側の尾根続きには堀切をそれぞれ一本ずつ設けている。北側の尾根はさらに約 15m 先に小さい堀切を構築している。最高所が塚状に高まっていることや曲輪面が非常に狭いことなど、遠見場という記載と符合するかのようであるが、詳細な性格までは不明である。しかし構造など通常の中世城郭と同様であり、その頃のものとみてよいだろう。

【史料】なし

【文献】1,7 ～ 9,**10**,23

第 191 図　勝山城遠景（↓部分）

第 192 図　勝山城縄張り図（事務局作成）

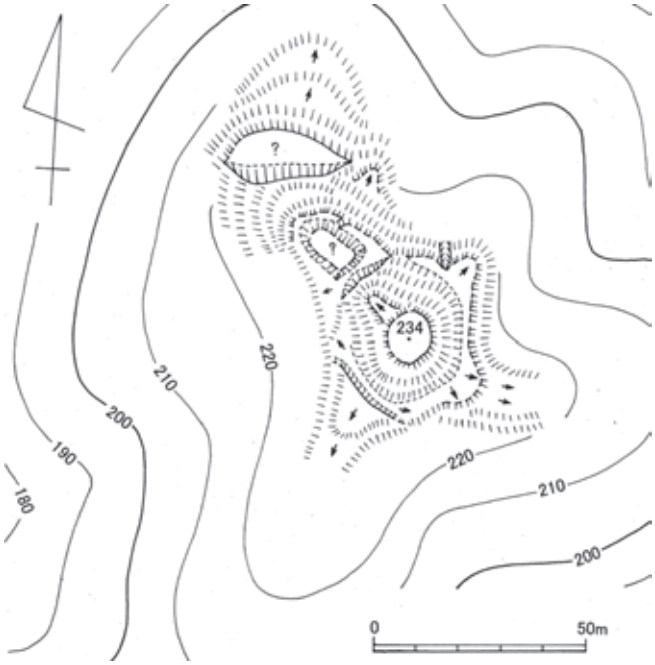
豊前 137　十鞍山城（とくらやまじょう）

郡名　京都郡 / 仲津郡　**別称**　鞍山城・十鞍城　**図幅名**　行橋（西）
種別　山城　**所在**　京都郡みやこ町勝山大久保・犀川大坂

【沿革】旧勝山町と旧犀川町との境（京都郡と仲津郡の郡境）、御所ヶ谷の西に聳える十鞍山山頂に位置する。十鞍山からは周防灘まで京都郡の平野が一望できる。『豊前志』には「十鞍山城趾（異書では「鞍山城阯」）　図師村にあり。元暦の際、平氏築きて籠れり」とある。また、同書「十鞍山」には緒方三郎が在城したが、攻められた際に馬の鞍 10 個を埋めたため、それが山名の由来になったとしている。『京都郡誌』（文献 23）では『京都郡旧記』を引用し「今において堀の形あり」と記す。

【概要】十鞍山山頂（標高 234m）に直径約 10m の円形の主郭を置き、その北西側と南西側に堀切をそれぞれ 1 本置く。北西の堀切の先にも人為的な平坦面があるが、城郭に伴うものかどうかは不明である。小規模城館の部類に属するものであろう。

【史料】なし　【文献】2 ～ 10,23



第 193 図　十鞍山城縄張り図（事務局作成）

第 194 図　十鞍山城遠景

第 195 図　十鞍山城からの眺め
（右に御所ヶ岳と馬ヶ岳が見える）

豊前 138　塔ヶ峰城（とうがみねじょう）

郡名　京都郡　**別称**　矢山城　**図幅名**　行橋（西）
種別　山城　**所在**　行橋市矢山・高来・入覚・内蔵

【沿革】行橋市の西北、平尾台の手前に円錐形に聳える塔ヶ峰山頂に位置する。塔ヶ峰には、城としての伝承や記載はなく、苅田町山口にある彦山六峰の一つ普智山等覚寺の『普智山縁起』（文献 94 に記載あり）に記載のある峯中の宿所（山伏の峰入りの際の宿泊所）の 11 の内の一つに「塔ヶ嶺」とあり、峰入りの宿として認識されてきた。城としての記載

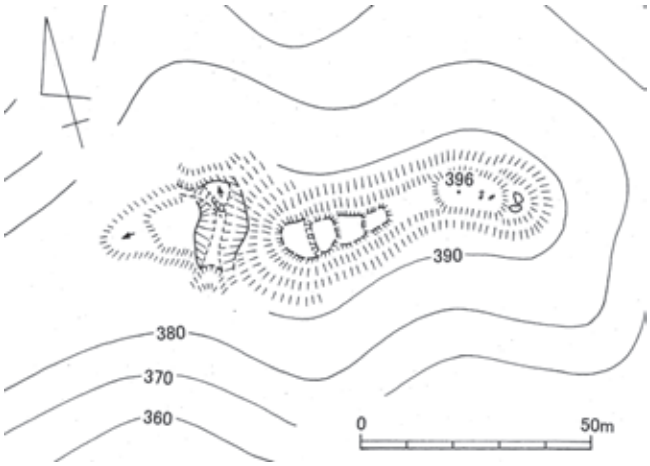
第 196 図　塔ヶ峰遠景

は『行橋市史中巻』（文献 27）に「矢山城」として縄張り図と共に説明があり、『福岡県の城郭』では「塔ヶ峰城」として記載する。

【概要】塔ヶ峰山頂（標高 396m）には、一辺５～ 10m の人工的に造成された平坦面が４面ほどあり、その東側は自然の平坦地形となっている。これだけ見ると、修験の宿遺構のみである可能性もあるが、その西側には、岩盤を刳り抜いて造り出した堀切が１本ある。東側の高さは 10m、反対側も３m もある規模の大きなもので、宗教的な結界という可能性も否定できないが、防御性が重視された堀切とも見ることができる。可能性としては、修験の峯入りの宿として定期的に使われていたものが、戦国時代のある一時期に城郭として使用され、その際に堀切が構築されたとみるべきではなかろうか。

【史料】なし

【文献】10,27



第 197 図　塔ヶ峰城縄張り図（事務局作成）

第 198 図　塔ヶ峰城堀切

豊前 140　馬ヶ岳城（うまがたけじょう）

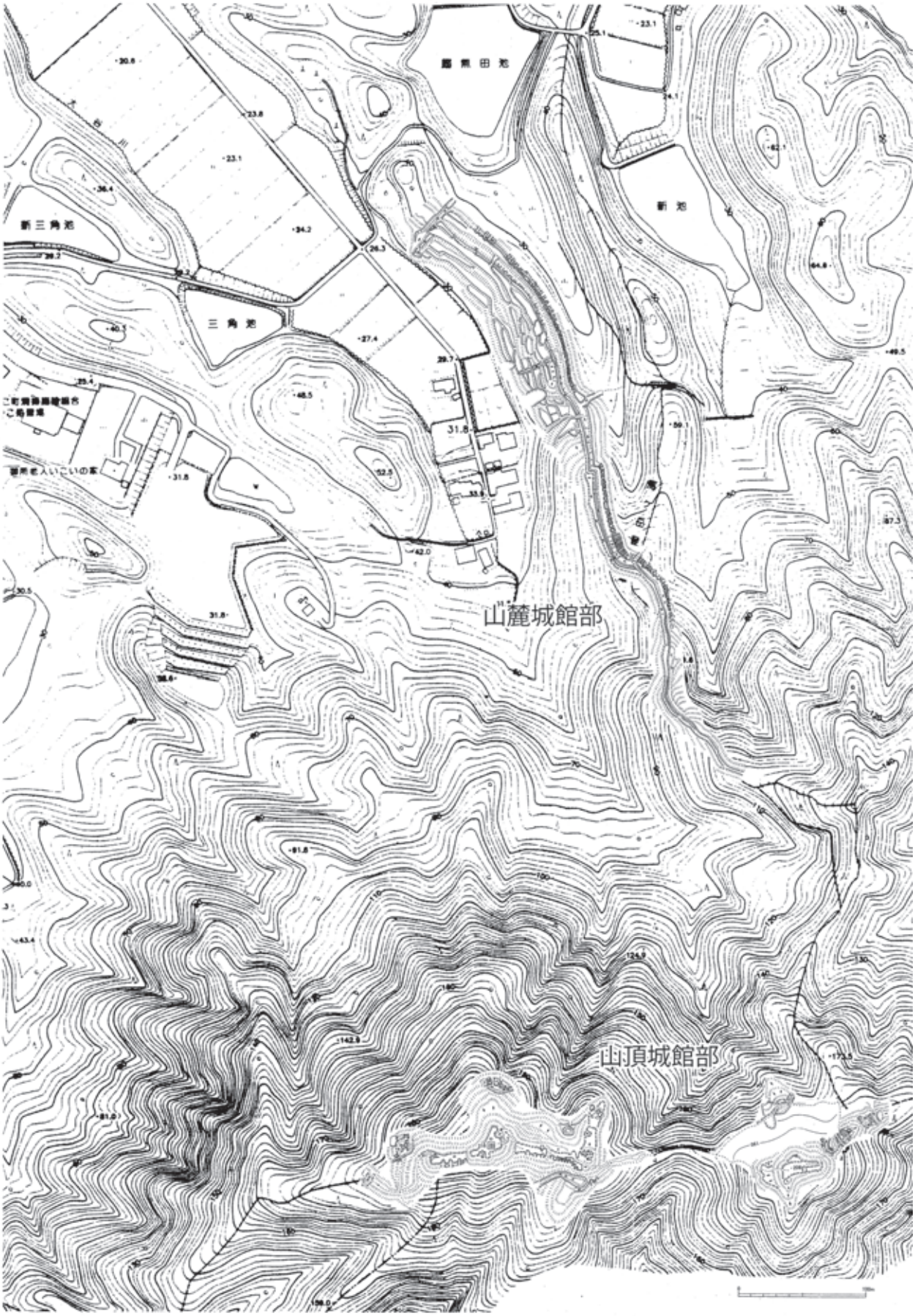
郡名　京都郡 / 仲津郡　別称　大谷城　図幅名　行橋（東）
種別　山城　　所在　行橋市大谷・西谷・京都郡みやこ町犀川花熊

【沿革】飯岳山（大坂山）から東へ延びる、京都郡と仲津郡の郡境の稜線上、御所ヶ岳の東、馬ヶ岳山頂から北側一帯に位置する。

第 199 図　馬ヶ岳城遠景

『古城記』等の記載によると、天慶年間に源経基が築城して大宰大弐橘公頼の子筑前守昌頼が在城したとする。その後、少弐、菊池、長野、規矩などの氏族が入れ替わり入城、貞和年間に南朝方の新田上野介義基が入城、三代にわたり南朝方の拠点となった。その後、菊池、大内、宇都宮方が相次いで入城、その後天正年間には、企救郡から移った長野三郎左衛門助盛の居城となった。天正 15 年（1587）の豊臣秀吉の九州平定においては、秀吉自身が逗留し、国分け後は黒田孝高が中津入城までの一時的な居城とした。慶長５年（1600）に細川領となった後、元和の一国一城令で破却されたとしている。

所在等の情報としては、貝原篤信の『豊国紀行』には「馬ヶ嶽」として「山上に古城の跡有、西山は高し、本丸也。東は少卑し、二の丸らし、北の麓に諸士の居たりし所有、其下に馬ヶ岳村あり、



第 200 図　馬ヶ岳城縄張り図（全体・事務局作成）

通路には非ず」とある。『古城跡実地取調報答書』（文献 23 所収）には「馬嶽城址」として「其西丸跡東西十一間、南北三間余あり。東丸の跡は東西十七間、南北六間余を有す、又た山の半腹に城主の菩提所、護念寺の旧跡と称ふるものあり」とある。

【概要】馬ヶ岳城は、馬ヶ岳山頂（標高 216m）を中心とする「山頂城館部」と北側の西谷の集落近くの尾根上に位置する「山麓城館部」に分かれているため、それぞれ報告する（第 200 図）。

＜山頂城館部＞山頂部は、馬ヶ岳西岳（標高 216m）を中心に展開する曲輪群Ⅰと、東岳（標高 208m）を中心に展開する曲輪群Ⅱに分かれる。Ⅰでは東西に長く延びる尾根上に曲輪群を並列させるが、いずれの曲輪もあまり平坦に造成がなされておらず、自然の平坦地形に近い状態のところも多い。これらの曲輪群の周囲には、a ～ d の堀切が構築されており、曲輪群を防備する。特に d の堀切は深さ 4 ～ 5 mもあり、これらの中では最も大きく尾根を遮断しているが、堀の東側には掘り残しの土橋を設けている。堀切 c には一部竪堀も見られる。また、曲輪群の北東側は尾根が逆 L 字になっていて、間に挟まれた谷部には、径 5 m、深さ 2 ～ 3 mもある大きな窪みがある（図中 g）。かなりの部分、埋没しているとみられ、おそらく城の水溜めとして機能したものとみられる。また、曲輪群の主に南側斜面には、非常に浅いが、竪堀状の窪みが列をなして並んでいる（図中 e・ f ）。特に f の部分は非常に浅く、注意深く観察しなければその存在には気づきにくい。これについて、人工的な造作なのか、自然の作用（土砂の流出など）によるものなのか判断が付きかねるが、人工的な造作であれば、山麓部で見るような畝状空堀群の可能性もあり、とりあえず遺構の可能性を残す意味でも図示・報告しておく。

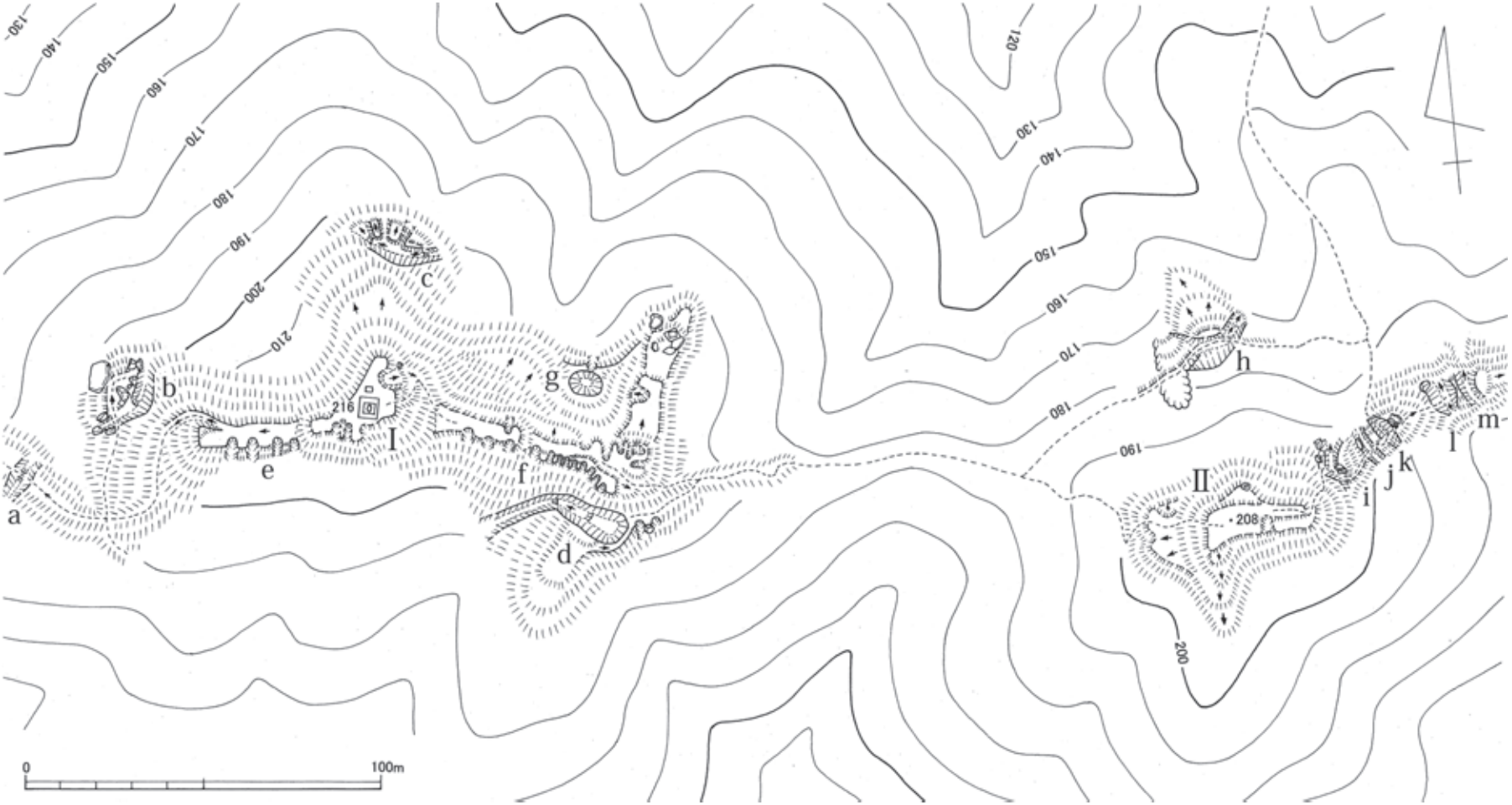
東岳頂部を中心とする曲輪群Ⅱもまた、Ⅰと同様に非常に不鮮明な平坦面が 2 面ほど並び、その北側に堀切 h を置き、その東側の尾根上に i ～ m の 5 本の堀切群を構築している。

このように、山頂城館部は、曲輪群ⅠとⅡの周囲に堀切群を配置して防備するが、ⅠとⅡの間には堀切などの遮断施設は構築されていない。これは、ⅠとⅡが一体として防備しており、その間の連絡を容易にしている証左であろう。

＜山麓城館部＞曲輪Ⅱがある東岳から北側へ尾根線が伸びているが、約 200m 先には標高約 145m の頂部がある。その頂部から北北西側へ尾根を下り、しばらくすると土塁状の高まりが現れる。ここから麓までの尾根上の約 500m 区間には城館遺構が見られる（第 204 図）。

山麓部の城館遺構は、鰯無田池の西側に延びてくる尾根線上に位置する。鰯無田池の南西側には、東西に延びる里道があり、里道と尾根が交わる箇所は、大きな堀切状となっており、一見堀切とも見紛うが、堀切ではなく、切通し道の開削によるものである。その南東側の a から城館遺構が認められる。a には尾根を断ち切るように一直線に堀切が掘られており、城域を画している。a から山頂側にかけて、主に東側斜面に城館遺構群が見られる。東斜面側には、土塁と横堀が尾根線と並行して掘られ、さらに b ～ c の区間では、斜面側に竪堀状の掘り込みが所狭しと構築され、その数は 50 前後にも及ぶ。

なお、さらに東側の谷部（図中 A）は、現在湿地状となっており、『福岡県の城郭』などでは、城の水濠の痕跡であるとの見解もある。しかしながら、これは谷の下流を東西に横切る里道が堤防状となって、谷川をせき止めた結果、土砂が堆積し、湿地状となったものであり、水濠は存在しないものと考えられる。また、c の西側では土塁が途切れており、虎口であるとの見解もあるが、これも後世の山道による開削であり、城館遺構ではない。また、西側斜面には階段状に細長い曲輪群が



第 201 図　馬ヶ岳城縄張り図（山頂城館部・事務局作成）

展開しているが、これらの大半は、耕作地など後世の改変を受けているものとみられる。辛うじて土塁に沿った平坦面のみが、確実に曲輪であると考えられる。

c から山頂側は、竪堀状の掘り込みはなくなり、土塁と横堀が尾根線に並行して斜面を約 50m にわたって登っている。その先、d で土塁と横堀は直角にクランクし、そこから再び竪堀状の掘り込みの連続が再開する。そこから e 付近までの約 80m において、土塁、横堀、竪堀状掘り込みが継続する。e では、東側へ分岐する尾根からの登山道が合流するが、そのあたりから横堀はなくなり、犬走り状の平坦面となる。e からさらに 50m ほど継続したのち、竪堀状の掘り込みがなくなり、さらに f から g までの約 200m 区間は土塁と一部横堀のみとなるが、現在の登山道が土塁上を通っているため、本来の城郭遺構がどこまで反映されたものかは不明確である。

以上のように、山麓城館部では、尾根上を約 500m にもわたって、土塁、横堀、竪堀状の遺構群が連続する様子が見受けられた。これらのうち、連続する竪堀状の掘り込みであるが、場所によっては非常に狭い間隔で構築されており、一見畝状空堀群とも考えられる。しかしながら、ほとんどの掘り込みが横堀の土塁を掘り込んでいるのみで、斜面側には掘り込みが続いていない。e 付近のいくつかは斜面方向にも延びてはいるため、いわゆる畝状空堀群の一種と考えられるだろうが、斜面上の横移動の阻止という、竪堀本来の機能を果たしていないため、いかなる機能を果たしたのかは疑問である。一案として、弓矢や鉄砲を城内から放つために、城壁を切り欠いた「女墻」のような機能も想定できるが、本来ならば横堀上段の土塁に必要なものであるため、疑問が残る。ここでは、いちおう畝状空堀群の一種としておきたい。そのように考えると、山頂城館部曲輪群 I の南側斜面に見られた竪堀状の浅いくぼみも、畝状空堀群の一種として考えておく必要があるだろう。

なお、これらの他にも、谷を挟んだ西側の尾根上にも三本の堀切群があるとの指摘もあるが、これは後世の切通しの開削で、城館遺構とは認められない。

以上のように、山頂城館部と山麓城館部の状況を見てきたが、特に土塁、横堀、竪堀状遺構の存在が特筆されるが、この構築主体や年代はどこに求めることができるだろうか。土塁と横堀が d において直角にクランクして、横矢を造り出している点を重視すれば、織豊系城郭の築城技術として天正 14 ～ 15 年の秀吉や黒田孝高による改修も考えられるかもしれない。しかしながら、それらに付随する畝状空堀群の一種とも考えられる遺構群の存在を考えると、織豊系城郭の技術とは考えにくい。よって、それ以前の長野氏の段階が現状では妥当と考えられる。しかしながら、非常に短い竪堀群の類例もほかに見当たらず、さらには機能も不明確であることから、詳細については今後さらなる検討が必要となろう。

【史料】あり

【文献】1 ～ 8,**9**,**10**, 23,25,**27**,**36**,**132**

第 202 図　馬ヶ岳城山麓城館部横堀

第 203 図　馬ヶ岳城山麓城館部連続竪堀状遺構

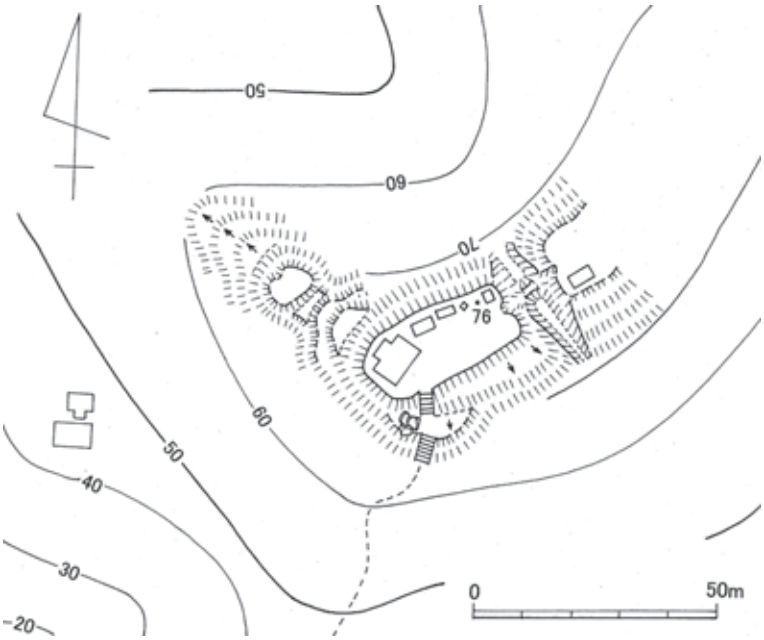
第 204 図　馬ヶ岳城縄張り図（山麓城館部・事務局作成）

④仲津郡

豊前 145	元永城（もとながじょう）	郡名　仲津郡	別称　城山城・本長山城	図幅名　簗島（西）
		種別　山城	所在　行橋市元永	

【沿革】祓川下流域東岸、元永集落に鎮座する須佐神社の裏の丘陵上に位置する。

『豊前志』には「元永村城阯　城主未詳」とあり、『古城記』には「同（城跡一ヶ所）　元永村ノ内、城山」とある。また、『豊前古城記』（文献23所収）の「久津尾崎城址」には、「本長山の城」に本郷兵部少甫の居城であるとしており、近隣の久津尾崎城、野前山（覗山）城もまた本郷一族が居城としている。



第205図　元永城縄張り図（事務局作成）

【概要】須佐神社の裏、標高76mの頂部には、現在大師堂が建つが、そこは東西約30m、南北約20mの主郭である。主郭の東側の尾根続きは深さ２～３mの堀切１本を構築し、城域を画している。それより東側は後世の堂宇により若干造成されているが、基本的には自然地形である。また、主郭の北西側は、小曲輪と堀切１本を設けている。単郭構造の非常に単純な構造と言えよう。

【史料】なし　【文献】1,2,5 ～ 10,23,27

豊前 146	覗山城（のぞきやまじょう）	郡名　仲津郡	別称　のりき山城・野前山城・馬場城	図幅名 蓑島（西）
		種別　山城	所在　行橋市稲童・高瀬・馬場	

【沿革】祓川東岸、沓尾、元永から南へ延びる丘陵上の覗山山頂に位置する。

『古城記』には「同（城跡一ヶ所）　下馬場村ノ内、ノソキ山」とある。また、『豊前志』には「のりき山城阯　馬場村にあり。宇都宮播磨守居城なりしが、未詳」とあるが、これまでの既往文献では、のりき山城はみやこ町犀川木井馬場にあると解釈されていた。しかし、『京都郡誌』（文献23）では『豊前志』を引用して「のそき山城址　馬場村にあり、宇都宮播磨守居城なりしか」とあり、「のりき山＝のそき山」であると推察され、場所も行橋市馬場であることが想定され

第206図　覗山城堀切

る。また、『豊前古城記』（文献 23 所収）の「久津尾崎城址」に従四位下左少将顕吉朝臣が「野前山」に城を築城、三男の本郷左近大夫吉房を置いたとあり、「覗山（のぞきやま）」は「野前山（のざきやま）」が転じた名前であると考えられる。

【概要】覗山山頂（標高 121m）の頂部を中心に縄張りが展開しているが、山頂の西側斜面は、無線中継所の建設に先立ち、発掘調査が行われている。現状および発掘調査の成果に基づき作成した縄張り図が第 207 図である。

城は、大きくⅠ～Ⅲの曲輪を基本として構成される。最高所のⅠが主郭で、一辺約 10m の方形の壇状をなし、その周囲には、幅の広い帯曲輪を巡らしている。その周囲の斜面には、堀切や散在する竪堀により防御している。

Ⅰの東側は、Ⅱの曲輪に続いている。Ⅱの平坦面は不整形な平坦面で、丁寧な整形は窺われない。径 10m 近い陥没孔が見られるが、井戸なのか後世の攪乱なのかは現状では不明である。Ⅱの周囲には、横堀と竪堀を組み合わせた畝状空堀群が構築されている。

Ⅱの北東側に曲輪Ⅲが位置するが、両者の間は 50m ほど空いており尾根の鞍部となっているが、若干の人為的な整形が見られるくらいで、積極的な造成は感じられない。Ⅲもまた、平坦面は整形はあまりなされておらず、自然地形に近い状況を呈している。Ⅲの頂部にも陥没孔があるが、これも城に伴うものではない印象を受ける。Ⅲの北側斜面には、横堀が巡っており、さらにその北側から、発掘調査により竪穴状遺構が 9 基ほど見つかっており、斜面の足場確保のためのものとも考えられる。Ⅲの北東側の尾根上には、階段状に小曲輪が展開し、約 10 段を数える。

第 207 図　覗山城縄張り図（事務局作成）

以上のように、覗山城は全長 200m 前後もあり、近辺では比較的規模が大きな城であり、横堀や畝状空堀群を積極的に構築していることから、『豊前志』にある通り、宇都宮氏の関与も考えてもよいのではないだろうか。

【史料】なし

【文献】5 ～ 9,**10**,23,**27**,**96**

豊前 147　大坂山城（おおさかやまじょう）

郡名　仲津郡 / 京都郡　　**別称**　因州城　　**図幅名**　豊前本庄（西）/ 行橋（西）
種別　山城　　**所在**　京都郡みやこ町犀川大坂・勝山松田

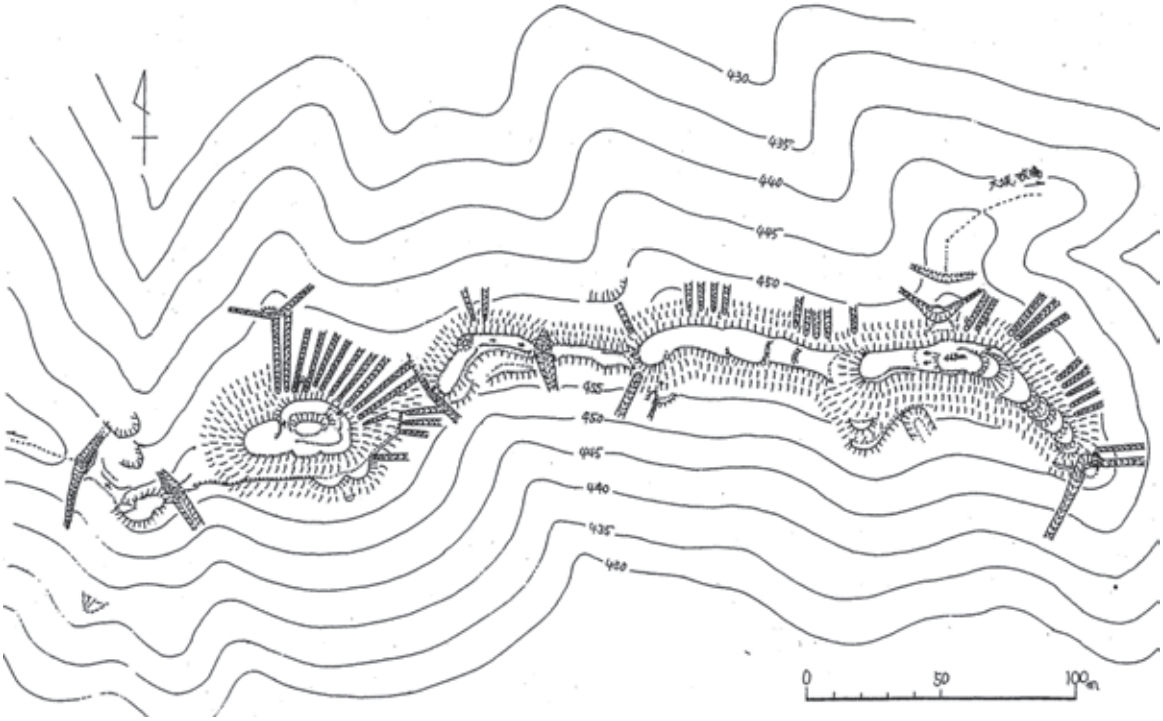
【沿革】仲津郡、京都郡、田川郡の境に聳える飯岳山（大坂山・標高 573m）から、東へ延びる尾根線上、約 1.2km 地点の干草山山頂に位置する。この城郭については、はっきりとは城名は伝わっておらず、『福岡県の城郭』では「大坂山城」として報告しているため、本書もそれに倣うことにする。大坂村内には、「因州城」という城が伝えられており、『古城記』には「同（城跡一ヶ所）大坂村ノ内　インシウ城」とあり、由来伝えなしとする。『豊前古城記』（文献 23 所収）には、「同（城跡一ヶ所　大坂邑之内インシウ城」とあり、香春岳城の砦であるとしている。また、『豊前志』には「いんしう城趾　同村（大村）にあり、杉因幡守居城」とある。このように、因州城が干草山の「大坂山城」を指す可能性は高いが断定できない。

城主の杉因幡守は高城（豊前 131）の城主としても名が挙がっている。

【概要】干草山山頂に、東西大きく二つに分かれる曲輪群を持ち、西側は標高約 470m で、曲輪群の東側を中心に、竪堀約 15 本からなる畝状空堀群と堀切が置かれ、西側には堀切 2 本で城域を画している。また、そこから 200m 以上離れた東側の曲輪群は、標高 463m で、東西に細長い曲輪を置き、東側には階段状に小曲輪群を展開、北側斜面には散在的に竪堀群を配置、北側と東側の尾根には堀切を配して城域を画している。

以上のように、大坂山城は全長約 350m と規模も大きく、畝状空堀群を多数構築し、厳重に防備する。香春岳城の砦という伝承を重視すれば、香春岳城主であった高橋元種の京都・仲津郡方面の重要な出城であった可能性も十分考えられるのではなかろうか。

【史料】あり　【文献】1,2,5 ～ 9,**10**,23,25,**150**



第 208 図　大坂山城縄張り図（文献 150・片山安夫作成）

豊前 148　不動ヶ岳城（ふどうがだけじょう）

郡名　仲津郡　**別称**　西郷城・西郷大坂城・城山城　**図幅名**　豊前本庄（西）
種別　丘城　**所在**　京都郡みやこ町犀川大村

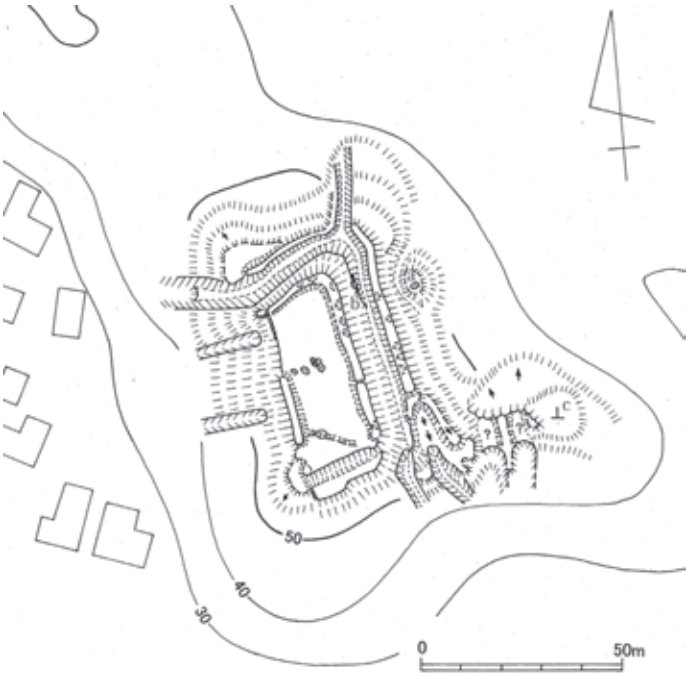
【沿革】今川の西岸、大村の集落の東側の小丘陵「城山」の頂部に位置する。『豊前志』には「不動嶽城阯」とあり、「大村にあり。西郷刑部左衛門高頼居る。高頼は大阪村興正寺に詣でし時、道にて長野三郎左衛門尉祐盛に討たれたり」とある。『古城記』には「同（城跡一ヶ所）　大村不動ヶ嶽　右ハ西郷刑部亟盛正居之　宇都宮一族」とあるが、それに続いて「同（城跡一ヶ所）　西郷大坂　右ハ西郷刑部右衛門高頼ト云者居之、大阪村貞正寺エ参詣ノ時、長野祐盛押寄討取、墓所興正寺ニ有リ。宇都宮ノ旗下トモ云」とあって、『豊前志』の「不動嶽城阯」と同一の記載が見られ、江戸時代に既に混乱が生じていることがわかる。そのため、ここではとりあえず、西郷大坂の城を不動嶽城として扱うこととしたいが、今後さらなる検証が必要であろう。

また、『京都郡誌』（文献 23）には「村誌」からの引用として、「大村城山城跡　村の北方に在、東西十七間、南北十三間、東北に虚壕あり、広瀬唯信なるもの居城せしと云、興廃年記考ふべき史なし」とあり、実際、現地に広瀬唯信の墓が残されている。

一方、『豊前古城記』（文献 23 所収）には「西郷城　紀井の一族西郷氏代々居、天文の頃、西郷刑部大甫、子息右衛門太夫、天正まで在居」とあり、とりあえず

第 210 図　不動ヶ岳城遠景

第 211 図　不動ヶ岳城石列



第 209 図　不動ヶ岳城縄張り図（事務局作成）

第 212 図　不動ヶ岳城横堀

これも不動ヶ岳城の別称として考えておきたい。

【概要】標高約 50m の頂部に南北約 50m、東西約 20m の長方形の曲輪を配置し、曲輪の周囲には高さ約 1 m 内外の土塁を巡らせる。曲輪の周囲の要所には、土留めと思われる石列や石垣なども確認できる。曲輪の西側斜面は竪堀が 2 本ほど確認でき、南側は犬走りがあるのみだが、北側から東側にかけて、深さ 5 m の横堀が巡る。横堀は曲輪の角に当たる部分ですべて斜面側の竪堀に接続している。また、曲輪の東側の a には横穴式石室の古墳が残るが、b は横堀構築の際に古墳を破壊しており、石室の残骸が露出する。曲輪の南東側は堀切が何本かあるようにも見えるが、後世の改変があって、不明瞭である。またその先の c には「廣瀬院唯官居士」という墓石があり、城主の墓だと伝えられている。前述の「村誌」の記載に適合している。

以上のように、不動ヶ岳城は、小規模ながらも、大規模な横堀と竪堀を用いて厳重に防備している状況がわかる。宇都宮一族の西郷氏の拠点として捉えることができよう。

【史料】あり　【文献】2,3,5 ～ 8,**9**,**10**,23,25,**146**

豊前 149　山鹿城（やまがじょう）	**郡名　仲津郡**　　**別称　城山城**　　**図幅名　豊前本庄（西）**
	種別　丘城　　**所在　京都郡みやこ町犀川山鹿**

【沿革】今川東岸、山鹿集落の長善寺の南背後にある小丘陵上に位置する。『古城記』には「同（城跡一ヶ所）　山鹿村ノ内、城山　右ハ西郷刑部出城ナリ」とある。『豊前志』には「山鹿城阯　山鹿氏居城」とある。『京都郡誌』（文献 23）には「村誌」からの引用として、「山鹿村城山城址　村の西方にあり、東西五十間、南北二十間、天正二年の頃、桃井左近なるもの居之、大友氏の兵之を攻む、戦不克して亡ぶと云、今に至り城址の側を鑿て城具を得る者多し」とある。

【概要】山鹿集落の背後、標高 58m の丘陵頂部に、東西 30m、南北 20m の主郭を置く。主郭の周囲には、土塁状の高まりが見られるが、山全体に後世の改変が入っている可能性が高く、城の遺構を反映したものかは不明である。この主郭を中心に周囲には雛壇状に細長い曲輪が巡る。所々、古墳を破壊したような痕跡など、確実な旧地形が見られるものの、丘陵裾部に行くほど、

第 213 図　山鹿城縄張り図（事務局作成）

後世の改変は明らかで、詳細に縄張りを読み込むのは困難である。

しかしながら、北側斜面のａには、テラス状の緩斜面に約 15 本の竪堀状の掘り込みが確認でき、城の畝状空堀群と判断できる。また、南西側斜面ｂにも、竪堀が散見でき、往時の城郭遺構が地表に残されていることがわかる。以上のように、山鹿城は、後世の改変をかなり受けている可能性が考えられるが、畝状空堀群などが見られ、厳重に防備していた様子を知ることができる。

【史料】なし　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,10,23,25

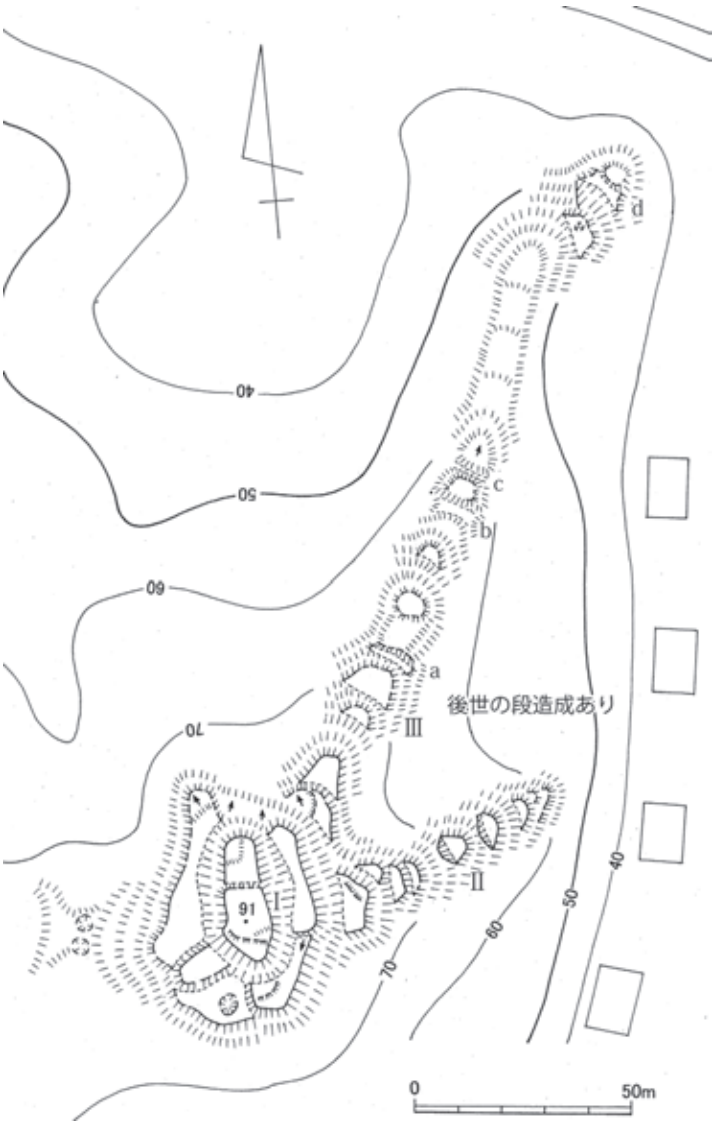
第 214 図　山鹿城遠景

豊前 150　茶臼城（ちゃうすじょう）　**郡名　仲津郡**　**別称　茶臼山城・柳瀬城**　**図幅名　豊前本庄（西）**
種別　丘城　**所在　京都郡みやこ町犀川柳瀬**

【沿革】今川上流西岸、柳瀬集落の西に位置する丘陵上に位置する。『京都郡誌』（文献 23）には「村誌」を引用して、「柳瀬村茶臼城址」とあり、「村の北方二丁余、茶臼山の山嶺にあり、内郭週囲四十間、外郭週囲一丁四十間、東方に一路あり、興廃年紀不詳、然れども其形恰も茶臼に肖たるを以て、今世里人、茶臼の城址と呼ぶ」とある。『福岡県の城』では宇都宮氏の一族、西郷氏の居城と伝えるとしているが、典拠不明である。

【概要】柳瀬の集落の西、標高 91m の頂部に南北約 30m の細長い主郭Ⅰを置き、その周囲に何段かに分かれた帯曲輪を巡らせる。Ⅰの西側は、尾根線が登っ

第 215 図　茶臼城遠景



第 216 図　茶臼城縄張り図（事務局作成）

ていく方向だが、特に堀切などの遺構は確認できない（後世の攪乱などはある）。一方、Ⅰから北方向と北東方向へ延びる尾根上には、曲輪群が見られる。北東側に延びる尾根Ⅱには、８面ほどの階段状に展開する小曲輪群が並ぶ。その一方で、北側へ展開する尾根Ⅲには３面ほど曲輪群が展開するが、その先には、自然の尾根地形の途中にａ～ｃの３本の堀切が構築されている。また、ｃから先、約 50m は自然の尾根の緩斜面が続くが、その先のｄには堀切１本と小曲輪が築かれている。

城主名が伝わっておらず、詳細な城の性格などはわからないが、小曲輪群を階段状に展開し、堀切などの遮断施設を積極的には採用しない構造は、臨時的な築城を匂わせるものである。

なお、『福岡県の城郭』では永禄年間に大村を戦場として勃発した西郷合戦における寄手の大友方の築城の可能性を指摘しており、構造面からみても、その可能性も十分考えられる。

【史料】なし　【文献】4 ～ 10,23,25

第 217 図　茶臼城曲輪群Ⅱ

豊前 151　燕岩城（つばめいわじょう）

郡名　仲津郡 / 田川郡　　別称　崎山城　　図幅名　豊前本庄（西）
種別　山城　　所在　京都郡みやこ町犀川崎山・田川郡赤村赤

【沿革】今川上流西側、田川郡と仲津郡との境に聳える山稜頂部に位置する。『豊前志』には「燕岩城阯　崎山村にあり。香春嶽城の塞なり」とある。また、『古城記』には、「掻上　崎山村ノ内、燕岩　香春城主取出也」とある。

【概要】郡境の標高 283m に東西約 10m、南北約 20m の主郭を置き、その南側には堀切を１本設けて城域を画す一方で、残る三方は、主郭の周囲に切岸を構築し、その周囲に緩斜面の犬走り状の平坦地形を配する。主郭には北側と南側にスロープ状の入口があるが、城の虎口なのか、後世の山道なのかは判断に苦しむところである。北側には竪堀３本、北西側の尾根上には、竪堀を両端部に設け、城域を画している。全長が 50m にも満たない非常に小規模な城であり、地誌類に言うとおり、香春岳城の砦である可能性も十分あるだろう。

【史料】あり　【文献】1,2,5 ～ 10,23,25

第 218 図　燕岩城遠景

第 219 図　燕岩城縄張り図（事務局作成）

豊前 152　黒岩城（くろいわじょう）

郡名　仲津郡　　別称　黒岩ヶ城　　図幅名　豊前本庄（東）
種別　山城　　所在　京都郡みやこ町犀川久富・末江・光冨

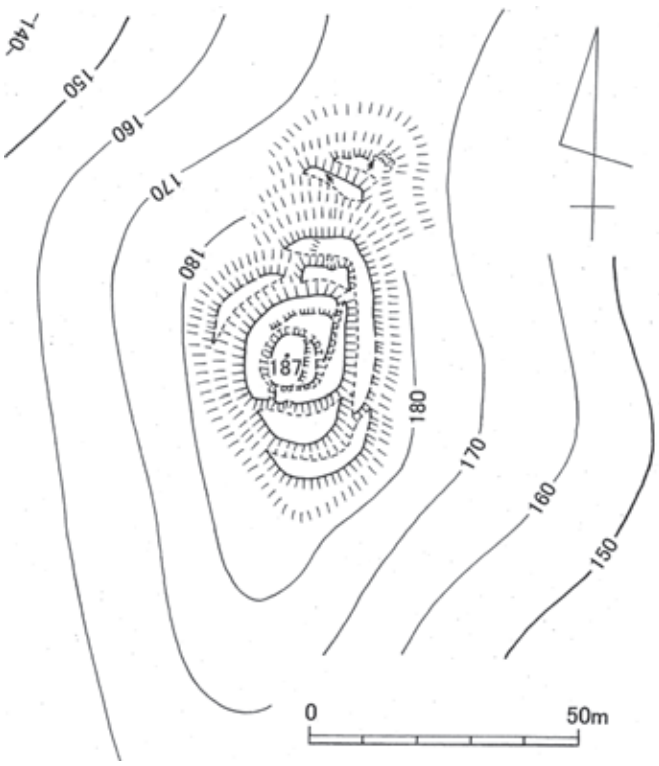
【沿革】今川と祓川に挟まれ、旧犀川町と旧豊津町の境に南北に延びる山稜上に位置する。

『古城記』には「同（城跡一ヶ所） 満冨村ノ内、黒岩ヶ城」とある。また、『豊前志』には「黒岩城阯　光富村にあり。城主未詳」とある。

【概要】京都カントリー倶楽部の西、大正池の北西に聳える標高 187m の頂部に一辺 10m にも満たない小さい主郭を置く。主郭の四周に、帯曲輪状に３～４段ほどの細長い曲輪を配している。

なお、城の北側は緩やかな尾根地形があり、『福岡県の城』では長大な曲輪が配されるとしているが、自然地形であり、城域には含まれない。

【史料】なし 【文献】1 ～ 3,5,7,8,**9**,10,23



第 220 図　黒岩城縄張り図（事務局作成）

第 221 図　黒岩城遠景

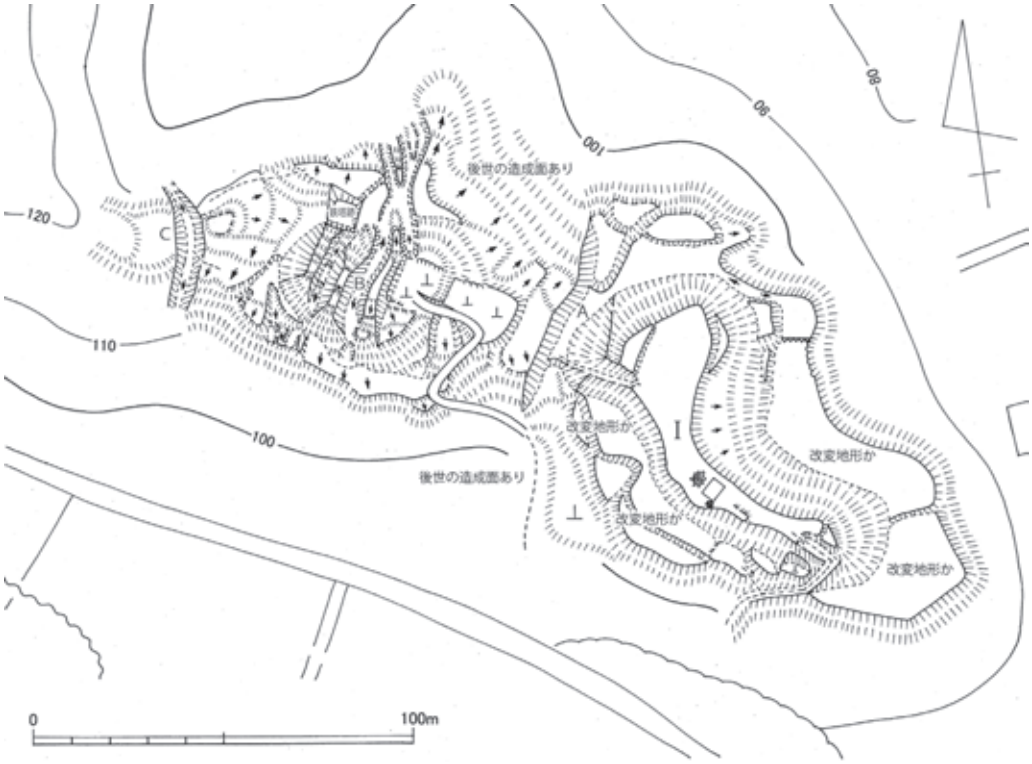
第 222 図　黒岩城主郭

豊前 155　毘沙門城（びしゃもんじょう）

郡名　仲津郡　　別称　毘沙門砦　　図幅名　豊前本庄（東）
種別　丘城　　所在　京都郡みやこ町犀川木井馬場

【沿革】神楽城の北、通称毘沙門あるいは床の間と呼ばれる低丘陵上に位置する。地誌類には、当城の記載はなく、『福岡県の城』において掲載されたのが初出である。

【概要】木井馬場集落の北、標高約 100m の低丘陵上に、Ⅰの主郭を置く。Ⅰは全長約 100m の細長い曲輪で、Ⅰの中ほどには、文治年間に宇都宮大和守信房が神楽城を築いた際に祀られたという毘沙門天の堂があり、その背後には、宇都宮信房が植えたという「毘沙門の松」があったが、現在は枯死し、大きな株が残るのみである。Ⅰの周囲は高さ約 10m の切岸となっており、その周囲は帯



第 223 図　毘沙門城縄張り図（事務局作成）

曲輪状に平坦面が巡っているが、耕作地として利用されたようであり、かなり改変されている可能性が高い。一方、Ⅰの西側には、幅 20m、深さ 10m にも及ぶ大堀切 1 本が築かれている（図中 A）。その西側は新しい墓地などが築かれ、改変が進んでいるが、そのさらに西側の B 地点には、尾根を分断するように 3 ～ 4 本の連続する堀切が設けられる。ここは尾根を分断するだけではなく、尾根の頂部を曲輪として使用できなくするためにも設けられたもので、攻め手の足場にできないようにするための構築物と考えられる。もっとも西側の堀切は、深さ 6 ～ 7 mにも及ぶ。そして、B の西側へは約 30m ほど自然地形があり、C に深さ 3 mの堀切 1 本を設けて城域を画している。

第 224 図　毘沙門城遠景

第 225 図　毘沙門城主郭（奥に毘沙門堂）

第 226 図　毘沙門城堀切

『福岡県の城』では神楽城の見張りの砦としての機能を想定しているが、見張りとしては非常に規模も大きいため、見張りとしてのみならず、木井馬場の防御拠点の一つとしても十分機能を果たしたものとみられる。

【史料】なし　【文献】9,10

豊前 156	神楽山城（かぐらやまじょう）	郡名　仲津郡	別称　神楽城	図幅名　豊前本庄（東）
		種別　山城	所在　京都郡みやこ町犀川木井馬場・犀川上高屋	

【沿革】木井馬場の集落の西、木井神社の背後に聳える、通称・城山山頂に位置する。『豊前志』には「神楽城阯　城井馬場村にあり。今井津某居る。天文の頃、今出兵衛元國居れり」とある。『古城記』には「神楽山」として、「応永四年木綿和泉守守護也。大内義弘、木綿ヲ殺ス。宇都宮代々外城。中津郡馬場村」とある。また『豊前古城記』（文献 23 所収）には「神楽山城　西城井馬場にあり、宇都宮代々抱城、応永の頃は城井播磨守直房居城」とある。『種々』では「神楽城址（城井氏）」と名が挙がっている。

【概要】標高 272m の城山の山頂に、主郭Ⅰを置く。主郭は南北約 30m、東西約 10m で、周囲に帯曲輪を巡らせている。帯曲輪の東側は低土塁が巡り、西側には一部に列石状の石積み遺構が見られる。Ⅰの南北はａとｂの堀切によりそれぞれ分断されており、堀切ａは、両端部に石で固められた土塁で塞がれ、Ⅱの周囲を囲む土塁につながっている。一方、Ⅰの南、堀切ｂは、クランクする土塁を伴っており、西側はａと同様、石で固められた土塁で塞がれている。ｂの南側は曲輪Ⅲが置かれるが、上面はあまり丁寧な造成はなされず、自然地形に近い形状だが、東側には低土塁が巡り、周囲の切岸は明瞭な箇所も見られる。

第 227 図　神楽山城縄張り図（事務局作成）

これら、Ⅰ～Ⅲからなる曲輪群の周囲には、南北側の尾根続きには堀切ｃ・ｇが設けられると共に、それ以外の斜面には、ｄ～ｆの畝状空堀群が構築される。Ⅰの北東側斜面を除き、畝状空堀群はほぼ曲輪群を全周している。特に西側斜面の畝状空堀

群は横堀と竪堀群が合わさった形態で、竪堀は間隔は短いが、ほぼ等間隔に構築されている。そして、堀切ｇの北側には、ｇと直交する方向に竪堀１本を掘り、その東西両側に竪堀群ｈが築かれている。戸城山城に構築された畝状空堀群に平面プランが非常に類似しており、攻め手により尾根を積極的に使用させないための構築とみられる。

以上のように、神楽山城は、合計 60 本を超える膨大な数の竪堀からなる畝状空堀群を斜面全体に囲繞するという厳重な防御をなしており、宇都宮氏が最末期まで使用した可能性も考えて良いと思われる。また、堀切ａやｂに見られる堀切の両端部を塞ぐ土塁、あるいはｂに伴う横矢を意図したともとれるクランクした土塁などは、天正 15 年（1587）の黒田氏による改修の可能性も含め、検討する必要があろう。

【史料】あり　【文献】1 ～ 8,**9**,10,23,25,**146**,**147**

第 228 図　神楽山城遠景

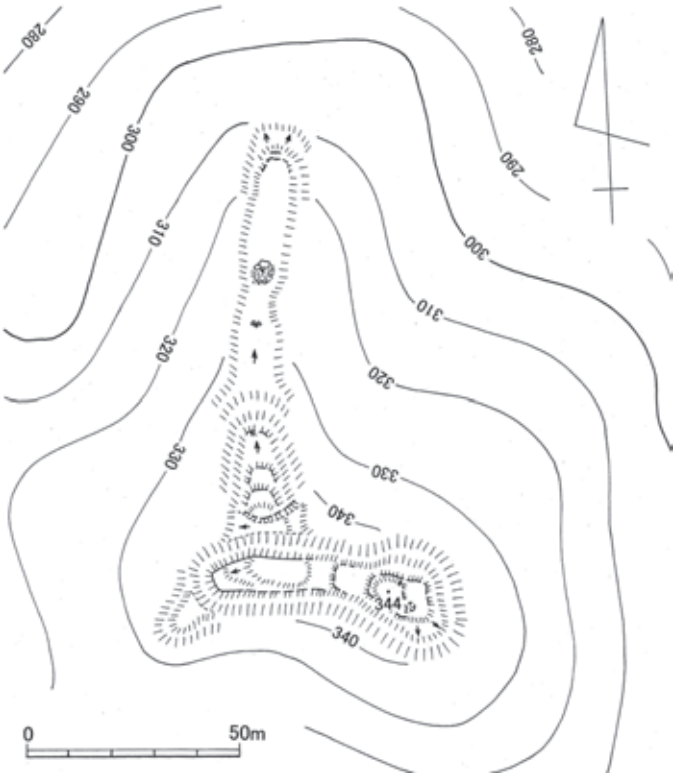
第 229 図　神楽山城畝状空堀群

豊前 157　上伊良原城（かみいらはらじょう）　**郡名　仲津郡**　**別称　城山城**　**図幅名　伊良原（東）**
種別　山城　**所在　京都郡みやこ町犀川上伊良原**

【沿革】祓川上流西岸、上伊良原集落の北側に聳える通称・城山の山頂に位置する。地誌類には記載はなく、「城山」という山名以外に関連情報はない。『福岡県の城郭』において「上伊良原城」として報告されたのが初出である。

【概要】標高 344m の城山山頂に、曲輪を、東西約 50m にわたって置く。上面はあまり整形がなされていないが、周囲は切岸として整形している。曲輪の北側に深さ約５ｍの堀切１本を設け、城域を画している。堀切の北側や曲輪の西側には、緩斜面は続くものの、基本、自然地形に近く、城館遺

第 230 図　上伊良原城堀切（左側が曲輪）



第 231 図　上伊良原城縄張り図（事務局）

構とは断定できない。城主も伝わっておらず、詳細はわからないが、上伊良原一帯を治めた小領主の持ち城と考えられるが、麓からの比高が非常に高く、その他の性格も考える必要があるかもしれない。

【史料】なし 【文献】10

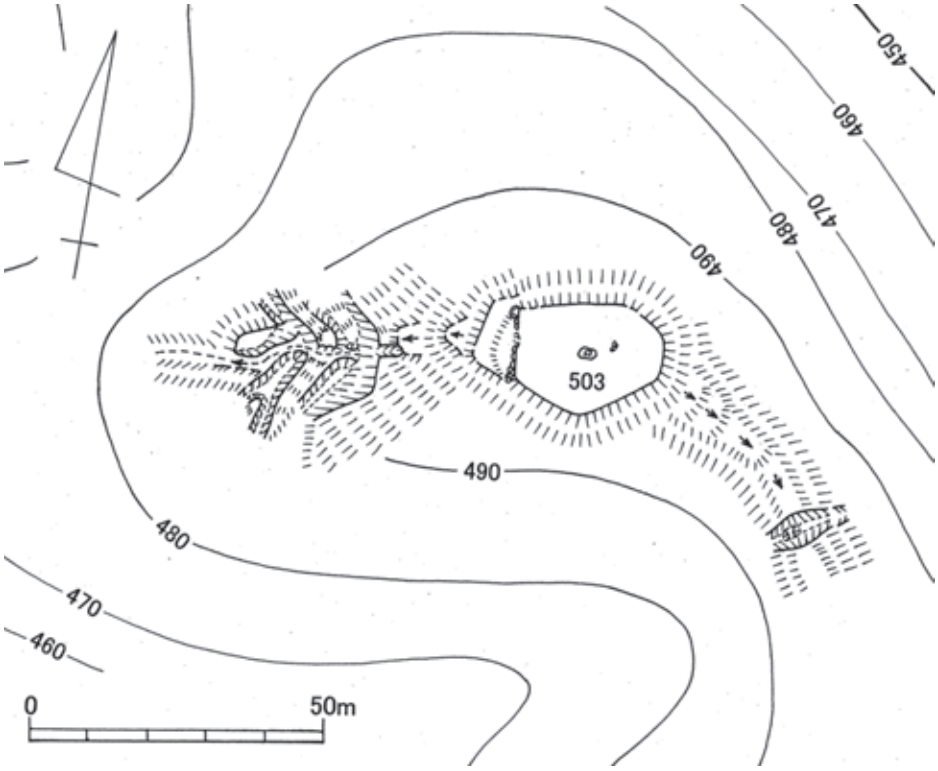
豊前 158 城山城（じょうやまじょう）	郡名 仲津郡	別称 なし	図幅名 伊良原（東）
	種別 山城	所在 京都郡みやこ町犀川帆柱	

【沿革】祓川上流、犀川帆柱の中屋敷の集落の南にある山稜上に位置する。地誌類などには城館としての記載は見られないが、地元では「城山」として伝承が残されているようである。

【概要】福岡県と大分県との間に聳える犬ヶ岳から西へ延びる山稜の北西端に当たる標高 503m の頂部に、南北約 20m、東西約 25m の主郭を置く。現地は近世以降の祠（城野明神）があり、主郭の西にある石垣などは、城に伴うものではなく、祠に伴うものである。主郭の南東側は尾根の鞍部となっており、そこには深さ約 3 mの堀切 1 本を設け、城域を画す。一方、主郭の西側は堀切 2 本を構築し、麓側から防御としている。城主名が伝わらないため、詳細なことはわからないが、帆柱集落に関連した小領主の持ち城と考えられる。

【史料】なし

【文献】なし



第 232 図　城山城縄張り図（事務局作成）

第 233 図　城山城主郭

第 234 図　城山城堀切

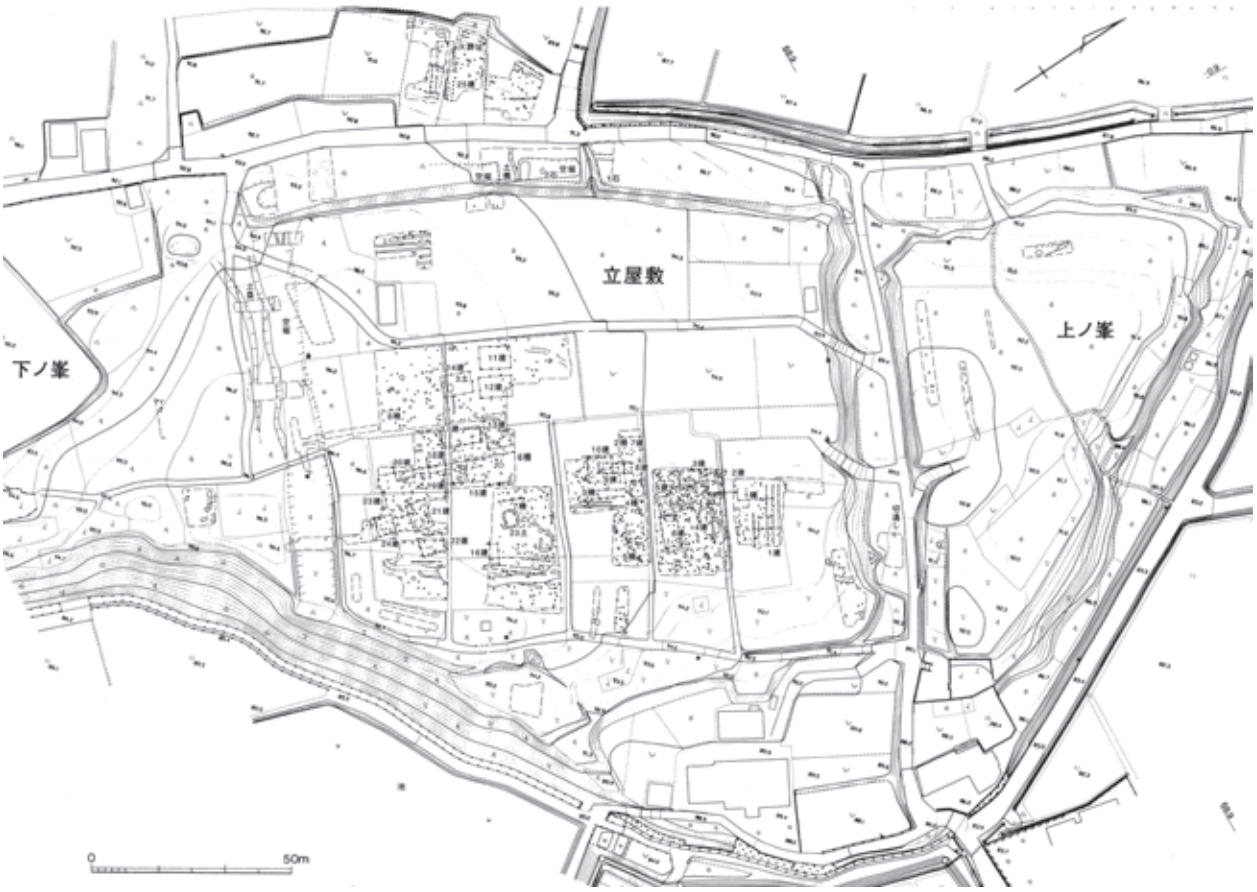
⑤築城郡

豊前 159　宇都宮氏館（うつのみやしやかた）　**郡名　築城郡　別称　城井屋敷・松丸城・鍛冶屋敷・(高畑城)　図幅名　豊前本庄 (東)**
種別　平地城館　　所在　築上郡築上町松丸

【沿革】城井川に沿って南北に細長く伸びる城井谷は、中世、国人領主の宇都宮（城井）氏の本拠であったが、その居館は、城井谷を約３km 遡った川の西岸の低台地上に位置する。貝原益軒の著した『豊国紀行』の付図として知られる『城井谷絵図』（福岡県立図書館蔵）には「城井屋敷跡」として、「取テノ方一丁程有、廻り土手有、カラホリ有」と記される（第 235 図）。また『豊前志』には「松丸村城阯　宇都宮鎮房の塞に築きしなり。湟、土居など今も存れり」とある。『古城記』には「掻上　松丸村ノ内、カシヤ敷　傳ナシ」とあり、当館を指しているものと思われる。

第 235 図　『城井谷絵図』に描かれた宇都宮氏館跡（部分・福岡県立図書館蔵）

なお、当城館は「高畑城」とも言われるが、これは昭和９年の築上新聞に掲載された「城井高畑城の発見」が初出であり、南北朝時代の宇都宮冬綱、家綱父子が反乱を起こした「高畑城」として



第 236 図　宇都宮氏館跡平面図（文献 117）

紹介されたものの、その後、「高畑城」の場所は木井馬場（京都郡みやこ町）と改められている。

【概要】松丸集落内の南には、標高 95m の低台地があり、そこに館跡は位置する。城館は一辺約 100m の方形を呈し、発掘調査により、東側を除く三方に、空堀や段落ちを方形に巡らせることがわかっている。東側は自然の崖面となっている。また、方形区画内の調査により、約 25 棟の掘立柱建物、８条の柵、土坑１基、集石遺構２ヶ所が確認されている。出土遺物が非常に少なく、報告書にはわずか５点の土師器皿が報告されるのみであり、時期の特定は困難であるが、およそ 15 世紀頃と推測でき、宇都宮氏の居館と判断される。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 10,28,**117**

第 237 図　宇都宮氏館跡遠景
（奥に英彦山・築上町教育委員会提供）

第 238 図　宇都宮氏館跡
（築上町教育委員会提供）

豊前 161　堂山城（どうやまじょう）

郡名　築城郡　　別称　香楽城　　図幅名　豊前本庄（東）
種別　丘城　　所在　築上郡築上町伝法寺・本庄

【沿革】城井川西岸、本庄集落の北、城井川が谷の西側の山稜に接する頂部に位置する。『豊前志』には「堂山城阯　同村（本庄村）にあり。城主未詳」とあり、『古城記』には「同（掻上）　同村（本城村）堂山　右ハ由来傳ナシ」とある。『築上郡志』（文献 28）の「堂山城趾」には「城井の出城なり。城趾は三段にて本庄の関門を扼し、ただ要害の地也」とある。

【概要】標高 155m の丘陵頂部に東西約 25m、南北約 20m の主郭（Ⅰ）を置く。主郭Ⅰの西側には土塁状の高まりがあり、その西側に曲輪Ⅱを配置する。そしてその西側に堀切 a を置いて、西側に対する城域を画している。堀切 a には一見、土橋とも見える高まりがあるが、これは後世の山道造成によって堀底の北側が段下げされてしまっているため、土橋ではない。

また、Ⅰの東側にはⅢ～Ⅴの曲輪が置かれるが、Ⅳには発掘調査により１間×１間の建物跡と考えられる柱穴が検出されている。また、曲輪Ⅴの北側には、堀

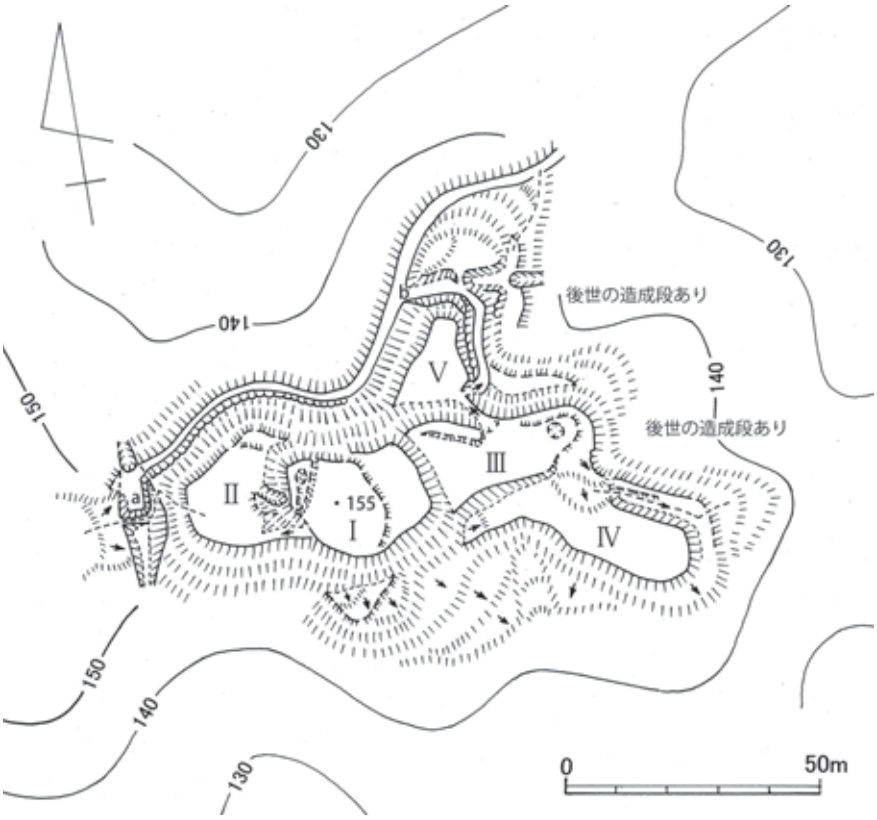
第 239 図　堂山城遠景

第 240 図　堂山城主郭

切 b が設けられる。こちらも a 同様、土橋状の高まりが堀切の中央に見えるが、これも後世の山道造成によるもので、b により完全に城域は画されている。そのため、文献 115・117 には b の北側は馬出し遺構とするものの、その場所は単なる自然地形にすぎない。また、当城の東側の尾根上には、別に曲輪群が存在するともされるが（文献 115・117）、これは後世の造成によるものであり、城館遺構ではない。

【史料】なし

【文献】2,5,7 ～ 9,**10**,28,**115**,**117**



第 241 図　堂山城縄張り図（事務局作成）

豊前 163　小川内城（こがわちじょう）

郡名　仲津郡 / 築城郡　別称　横瀬城・城山城　図幅名　豊前本庄（東）
種別　山城　　所在　築上郡築上町本庄・京都郡みやこ町犀川横瀬

【沿革】本庄の内、小川内集落の南西に聳える仲津郡との境の稜線上に位置する。『豊前志』には「小川内城阯　本庄村にあり。城主未詳」とあるが、仲津郡の節に、「横瀬村城阯」ともあり、同一の城を指しているものと思われる。また、『古城記』には「同（掻上）同村（本庄村）ノ内、小川内」とあるが、これも仲津郡の節に「同（城跡一ヶ所）　横瀬村ノ内、城山」ともあり、同一の城を指していると考えられる。

なお、『福岡県の城』では、本書でいう小川内城の北東の尾根上を城地とし、曲輪群、石塁、城門などを図示しているが、現地は自然の平坦地形と地境を示すものと思われる石塁がみられ、城門は自然の岩間であって、明確な城館遺構は見られないため、今回は対象外としている。

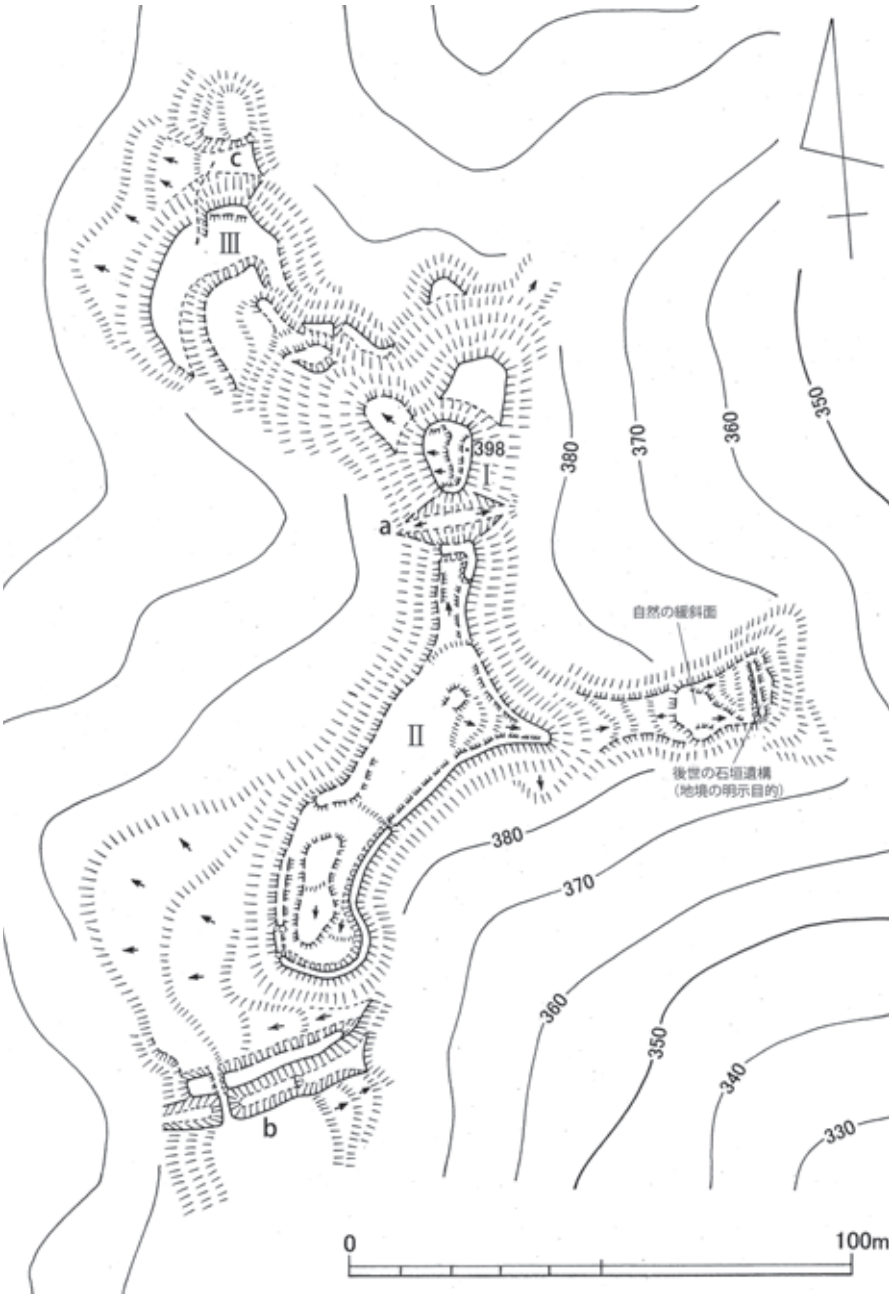
第 242 図　小川内城堀切

【概要】小川内集落の南東に聳える標高 398m の頂部にⅠの曲輪を置く。Ⅰは南北約 15m、東西約 10m で、その南側に堀切 a を挟んで、その南側に、全長約 100m もある広い曲輪Ⅱを置く。Ⅱは周囲を低土塁で囲まれているものの、上面は起伏があり、

自然地形を残したまま整形を行っているとみられる。特にⅡの南側は、土塁遺構については明瞭に確認できるが、その内側は土塁に沿って通路状となっており、中央部分は自然地形をそのまま残しているようであり、いわゆる塹壕のような印象を受ける。また、Ⅱの曲輪の南西側は自然の緩斜面が広がるが、その南に土塁や土橋を伴った深さ５mの堀切ｂを設け、南側からの侵攻を遮断する（『福岡県の城郭』ではこの土橋は後世の山仕事によるものとしている。確かに一部土塁を破壊している部分も見られるものの、土橋の高さは、堀切の両岸と同一であり、後世に埋没させて土橋状にしたものとは考えにくく、当初からの城郭遺構としての土橋であろう。）。一方、Ⅰの北西側の尾根上には、Ⅲの曲輪とその北側に高低差約６mある堀切ｃを設け、城域を画している。

なお、Ⅱの曲輪から東側へ延びる尾根上には、緩やかな平坦地形と、先端部に土塁状の高まりを伴った石垣遺構が確認できるが、これは後世の地境を明示するための遺構であり、城館遺構とは関係ない。

『黒田家譜』には、天正 15 年（1587）に黒田長政が城井谷攻めを行った際に、「城井谷の口茅切山の内出崎の丸山に、神楽山という古城あり。是を取立向城として人数を入置」き、桐山弥兵衛、黒田宇兵衛、原弥左衛門を頭人として約 350 人が詰め置かれたとある。文献 117 では、『城井谷絵図』の「茅切山」とは若干場所が異なるものの、「茅切山」をこの城郭遺構としている。Ⅱの曲輪における塹壕状の土塁の在り方など、障子ヶ岳城と類似しており、障子ヶ岳城も黒田氏あるいは毛利方の織豊勢力により、



第 243 図　小川内城縄張り図（事務局作成）

臨時的に改修された可能性があり、小川内城も、城井谷攻めの際に黒田氏あるいは吉川氏により改修された可能性は十分考えられる。一方、『福岡県の城郭』では、この城館遺構を本庄城（小川内城）として、黒田勢が攻めた宇都宮方の城としているが、前述の見解とは異なっており、なお検討を要する。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**,25,28,30,**34**,**117**,**147**

豊前 165　若山城（わかやまじょう）

郡名　築城郡　別称　本庄城　図幅名　豊前本庄（東）/ 伊良原（東）
種別　山城　　所在　築上郡築上町本庄

【沿革】本庄集落の天徳寺の裏山一帯に城館遺構が散在する。『築上郡志』（文献 28）には「若山城趾」として、「本庄村の南方、若山の北麓にあり、東西五十間、南北五十間と云ふ。諸所に残濠の今尚深さ一丈、廣さ二丈余なるがあり」とあり、宇都宮氏の出城とする。文献 117 では、明応 10 年（1501）の肥後佐田文書に見える「本庄城」を当城にあてているが、一方で『福岡県の城』や『福岡県の城郭』では「本庄城」を小川内城としており、意見の相違がある。文書からでは詳細な位置までは把握できないため、今後の新出資料が出てこない限りは、確定することは困難である。あるいは、城井谷の城館群をまとめて「本庄城」と言っていた可能性も考えられるため、ここでは「若山城」として報告する。

第 244 図　若山城曲輪群Ⅲの堀切

【概要】城は大きく 4 箇所に分かれている。現在の天徳寺も曲輪と考えられ（図中Ⅰ）、寺の背後は、寺の本堂よりも一段高くなっており、さらに高さ 4 m の土塁状の高まりを持つ。その背後には、尾根を断ち切るように堀切が、全長約 50m にわたって築かれており、堀切の両端部はそれぞれ谷地形につながっている。寺の本堂部分は後世の改変が想定されるが、全長約 70m の方形の曲輪があったものと想定される。

Ⅰから南へ尾根を登った先、約 400m 地点の標高 315m の頂部Ⅱには現在、高圧線鉄塔が建ち、その周囲については改変が見られるものの、あまり目立った城郭遺構の残存はない。ただし、鉄塔の南側には、深さ約 2 m の堀切が掘られている。ただ、その堀切の周囲には明確な人為的造作を伴った平坦面はわずかしかなく、南側には自然の平坦尾根地形が続くばかりであり、この堀切が南北側どちらを防御するために構築されたものかは明確ではない。

一方、Ⅰの南東側、標高約 220m 地点のⅢには、階段状に築かれた小曲輪群とその南側に堀切が構築されており、明確な城館遺構であることがわかる。それと対をなすかのように、Ⅰの北西側、標高約 170m 地点のⅣにも堀切 2 本を設けた平坦地が確認できる。北側の堀切は土橋も確認できるが、曲輪は自然地形に近く、あまり積極的に造作したとは感じられない。以上のように、天徳寺のあるⅠを中心にその南側背後のⅡには、堀切を設け、Ⅰの東西両側には堀切を設けた小砦のような小規模城館が確認できた。Ⅱ～Ⅳで確認できた城館遺構はあたかもⅠを囲い込んで防御するために設置されたかのような配置を示しており、一体として機能したことが考えられる。

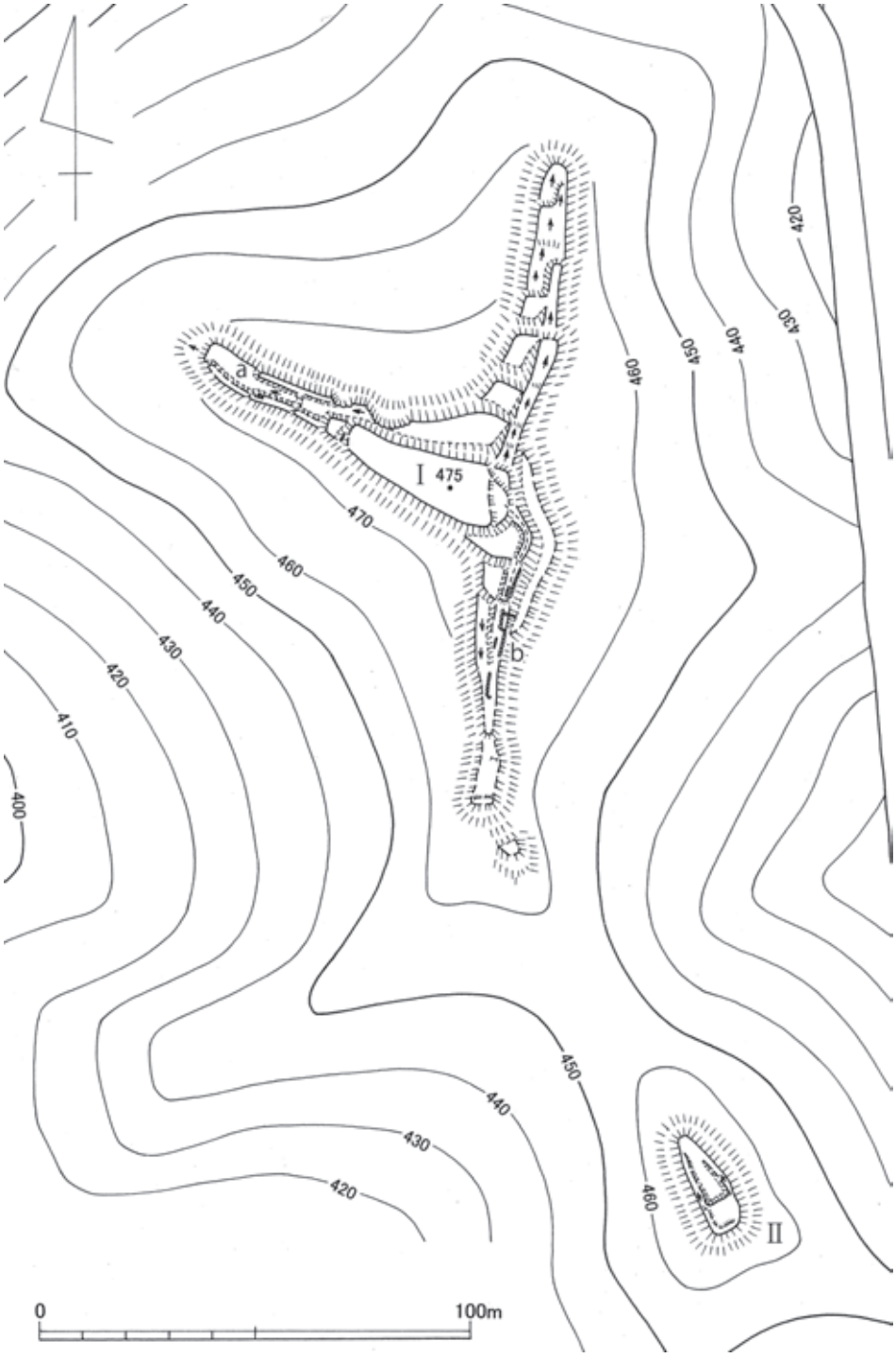
【史料】あり　【文献】5 ～ 7,28,30,**117**

第 245 図　若山城縄張り図（天徳寺本堂部分は文献 117 掲載図を参考に事務局作成）

豊前 167 大平城（おおひらじょう）	郡名　築城郡　　別称　城井城　　図幅名 伊良原（東） 種別　山城　　所在　築上郡築上町寒田

【沿革】寒田集落の東に聳える標高 475m の山稜上に位置する。『古城記』には「城跡一ヶ所　寒田村ノ内、大平」とあり、「城井代々ノ城ナリ」とある。『豊前志』には「大平城阯　寒田村にあり。宇都宮の抱城なり。今、宇都宮の屋敷跡存れり」とする。『城井谷絵図』（福岡県立図書館蔵）には「城井城跡」と記されている。同書の「茅切山城阯」の項には、『豊国紀行』の引用として、「此の宅（溝口屋敷）の上に、城井が城跡あり」と記している。

【概要】城の縄張りは標高 475m の頂部を中心としたⅠとその南側の尾根の頂部のⅡに二分される。Ⅰには、東西約 40m、南北約 20m の主郭を置く。主郭の平坦面は非常に丁寧に平坦に整形されている。Ⅰからは東を除く三方向に尾根が伸びており、それぞれに曲輪群が形成されている。Ⅰの西側 a には東西に細長い曲輪を配するが、土塁が囲い込むように構築されている。一方、Ⅰの北側はスロープ



第 246 図　大平城縄張り図（事務局作成）

状に城道が造られ、その傍らには小曲輪群が階段状に並んでいる。また、Ⅰの南側にも土塁状のスロープと共に小曲輪を階段状に並べる。尾根の先端部は一見自然地形に近い、非常に不明瞭な平坦面であるが、平坦面の東側 b には、石列を伴った土塁遺構が確認できる。石列は土塁に沿って２～３列に構築されており、下段の犬走りから導入する虎口とも思える造作も見られるが、半ば埋没しており、明確にはわからない。いずれにしても城館遺構であるとみられる。

第 247 図　大平城石列遺構

Ⅰの曲輪群からさらに南へ約 100m 地点の標高約 460m の尾根の頂部には、Ⅱの曲輪が構築される。南北約 30m、東西約 10m の規模の曲輪に a と同様に、土塁が囲い込む構造を呈している。

以上のように、ⅠとⅡを併せると、全長約 200m の規模を有する城館であり、土塁や石列などの遺構を有することがわかる。

【史料】あり　【文献】1,3,7 ～ 9,**10**,28,30,**34**,**117**

豊前 168　城井ノ上城（きいのこじょう）　**郡名　築城郡**　**別称　木江城・木ノ郷屋形**　**図幅名　伊良原（東）**
種別　不明　**所在　築上郡築上町寒田**

【沿革】城井谷の最奥部は、巨岩、奇岩が林立する幽谷地帯で、城井川東岸の谷部に立地する。

城井ノ上城の初出は江戸時代前期に貝原益軒により著された『豊国紀行』で、「キノコウ屋敷は、城井氏が敵を遁れてたて籠る所なり。入口は大石有りて門の如し。其の口二間ばかり。宅の四方は皆大なる岩岸にて人の下り通るべき所にあらず。入口をかたく防がば百萬の兵といふとも攻む可からず。誠に要害なり」（『豊前志』の引用文参照）と記す。「城井谷絵図」にも、「城井櫓籠　常の住所ニあらず」と記されている（第 248 図）。また、『豊前志』「茅切山城阯」の項に、「城井谷奥なる木江（きのこう）を以て詰城とすと云ふ」とある。一方、『古城記』の「大平城」の項には、「木ノ郷屋形ニハ蔵計有リ」と記す。『築上郡志』（文献 28）は「木江城趾」として、著者伊東尾四郎は、宇都宮氏 400 年の継続は、「難攻不落の当城に據れるの故に外ならざる也」と記している。

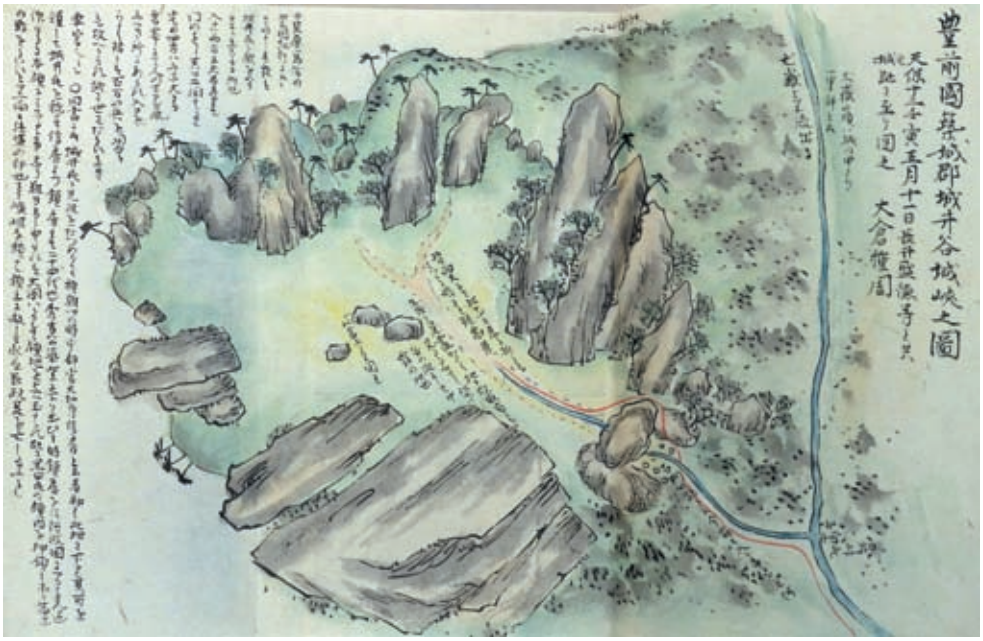
第 248 図　「城井谷絵図」に描かれた城井ノ上城
（「城井櫓籠」部分・福岡県立図書館蔵）

また、天保 13 年（1842）に秋月藩士の大倉種周により描かれた「豊前國築城郡城井谷城峡之圖」（第 250 図）を見ると、『豊国紀行』に記された状況が描かれており、現状とも一致する。

第 249 図　三張弓の岩

【概要】城井谷最奥部の城井川上流の東岸の谷部に位置

するが、現在城の前には「三張弓の岩」が聳えたつ（第 249 図）。これは三人の兵がこの岩に籠れば幾千人もの敵を防ぐと伝承されている。その岩の背後の谷が城跡と伝承される場所である。谷の入り口には、自然の岩と岩が重なり合い、ちょうど人がやっと通れるくらいの空間が空いており、城門（表門）と伝えられている（第 251 図）。そこを潜り抜けると、中は広い谷地形となっており、両側には数十ｍもの崖がそそり立っている。また、伝表門から約 1 km 奥にも同様の裏門があるという。



第 250 図　豊前國築城郡城井谷城峡之圖（国立公文書館蔵）

しかしながら、城内とされる場所は、自然の谷の緩斜面であり、人工造作物は、近現代の木炭窯や、窟を祀った祠ぐらいしか見られず、明確な城館遺構は全く存在しない。間違いなく、中世城郭として造作されたものではないことが立地などから考えてもわかる。

ところが、沿革でも述べたように、既に江戸時代前期の段階において、ここが宇都宮氏の詰城であったという伝承が残されており、それが後世まで色濃く伝えられていることから、宇都宮氏の城館や城井谷合戦と全く無関係の場所であったとは考えにくい。

第 251 図　城井ノ上城・伝表門

よって、推測ではあるが、ここは元々は城館ではなく、自然の谷あるいは山岳霊場であった場所が、天正 15 年（1587）の城井谷合戦において、宇都宮氏の残党が、黒田方に追われ、緊急避難的に立て籠もり、抗戦した最期の場所であり、それが後世に伝えられたのではなかろうか。

第 252 図 城井ノ上城城内の様子（自然地形が広がる）

【史料】なし

【文献】1 ～ 3,7 ～ 10,28,30,118

豊前 173　茶臼山城（ちゃうすやまじょう）

郡名　築城郡　　別称　なし　　図幅名 椎田（西）
種別　丘城　　所在　築上郡築上町船迫

【沿革】祓川と城井川との間に挟まれた船迫窯跡のある丘陵先端、茶臼山の頂部に位置する。茶臼山城に関しては、築城町教育委員会による船迫窯跡（古代の瓦窯跡）の調査の中で発見され、報告書（文献 114）において測量図と共に初めて報告された。それ以前の地誌類等の記載は見られない。

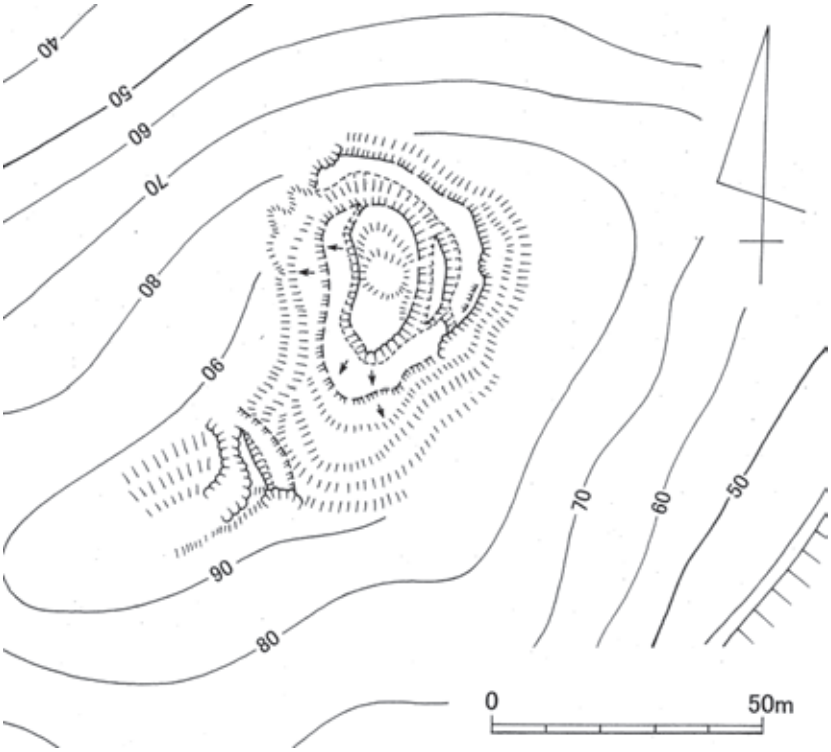
【概要】船迫窯跡のある丘陵先端部、標高約 90m の茶臼山の頂部に位置し、頂部を中心として一辺約 30 ～ 40m の範囲に主郭、帯曲輪を配置する。主郭の上面平坦部はあまり丁寧に整形がなされておらず、自然地形に近いが、北側から東側にかけての切岸は明瞭である。また、主郭の南西側には、浅いながらも堀切 1 本を確認することができ、城の防御遺構であると考えられる。来歴等が一切不明であるため、詳細はわからないが、戦国時代の小規模城館とみておくのが妥当と考えられる。

【史料】なし

【文献】10,**114**

第 253 図　茶臼山城遠景

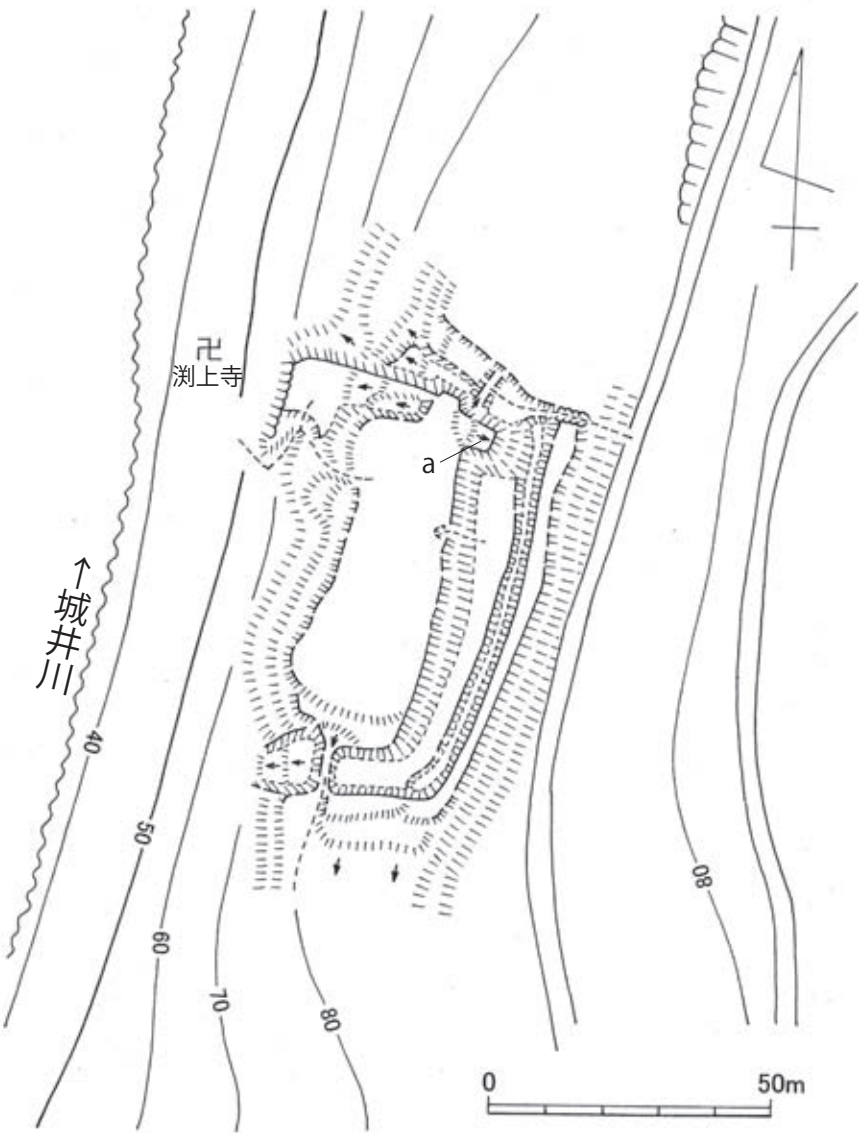
第 254 図　茶臼山城主郭



第 255 図　茶臼山城縄張り図（事務局作成）

豊前 174 赤幡城（あかはたじょう）	郡名　築城郡	別称　淵上寺城・甲山城	図幅名　椎田（西）
	種別　丘城	所在　築上郡築上町赤幡	

【沿革】城井川東岸、河岸段丘上の頂部に位置する。『黒田家譜』には、天正 15 年（1587）の黒田方と宇都宮方との戦いにおいて、城井中務（鎮房）が「赤旗」に出城を構え、壁兵庫、城井宮内を置き、黒田長政家臣の母里太兵衛、小河伝右衛門が赤幡城の城兵と戦い、討ち取ったことが記される。また、『豊前志』には「淵上寺城趾　同村（赤幡村）にあり。城主未詳」とあり、赤幡城に隣接する渕上寺の存在から、赤幡城を指しているものとみられる。そして、『築上郡志』（文献 28）には、「甲山城趾」として赤幡神社の背後にあり、宇都宮家尚、之を築きて家臣を込め置けりと」とあり、赤幡城を指しているものとみられる。



第 256 図　赤幡城縄張り図（事務局作成）

【概要】城井川の東岸に面した標高約 80m の河岸段丘上に位置する。段丘上には、南北約 60m、東西約 25m の長方形の主郭を置き、城井川に面した西側を除く三方向に横堀を巡らせる。主郭の北側と南側の横堀には、土橋状の高まりも見えるが、北側については後世の山道による改変である可能性も考えられる。注目すべきは主郭の北東隅に櫓台状の張り出し a が確認できることである。横矢の効果を狙ったものとも考えられ、広幡山城にも類似する遺構が見られ、両者が城井谷の入口にあたり、宇都宮氏の本拠を攻める際の付城としては、好都合な立地に在ることから、櫓台状の張り出し a は横堀と共に天正 15 年の黒田勢による改修の可能性も考えられるが、断定はできない。

なお、縄張りを図示した範囲のさらに南側には、溝と土塁状遺構とによる方形区画が存在するが、これは地境を明示するための後世の造作であり、城館遺構ではない。

【史料】あり　【文献】2,3,5 ～ 9,**10**,28,**117**,**149**

豊前 176　広幡山城（ひろはたやまじょう）

郡名　築城郡　　**別称**　広幡城　　**図幅名**　椎田（西）
種別　丘城　　**所在**　築上郡築上町水原・広末

【沿革】岩丸川と小山田川との間に挟まれた南北に細長い丘陵最北端に位置する。『豊前志』には「廣幡山城阯　廣末村と水原村との堺にあり。宮原忠将築く。後、城井民部修造して、爪田讃岐守春永を城代に置きしに黒田家に内通し城井城への嚮導せしとぞ」とある。『古城記』には「同（城跡一ヶ所）末廣村水原村ノ堺廣幡山」として瓜田春水が城代であったとしている。『築上郡志』（文献 28）には「岩力山の峯尾にありて、東西一町、南北三十町なりと」とある。

なお、城域の内、東半部は椎田バイパス建設に伴い、発掘調査が行われている。

【概要】広末と水原との境の丘陵先端頂部、標高 61m の頂部に東西約 50 ～ 60m、南北約 20m の曲輪 2 段（Ⅰ郭・Ⅱ郭）を東西に並列させる。曲輪の周囲には、直線的な横堀を巡らせるが、南側の横堀に面して、櫓台状の張り出し遺構 a ～ d が確認できる。そしてⅠ郭とⅡ郭の間を仕切る堀切の両端部 e は基礎を石組みで固めた土橋としていることが発掘調査により判明し、堀切の両端部を塞いでいたと考えられる。Ⅱ郭の西側斜面には、横堀の外側に 6 本の竪堀からなる畝状空堀群 f があり、西側からの防御としている。発掘調査では曲輪面上からは礎石や土坑が見つかっている他、Ⅰ郭の南東側斜面には、壇状遺構と建物跡と思われる柱穴群が 2 ヶ所検出されている。

また、城の南側は緩やかな尾根の平坦地形となっており、山道に沿って土塁状の高まりが延々と 600m 近くにもわたって続く。前述の『築上郡志』の南北三十町は、土塁状遺構を含めた規模を指しているものとみられるが、これは地境明示の後世の造作であり城館遺構ではない。

上記の縄張りの内、横堀と櫓台状の張り出し、堀切を仕切る土塁遺構（下部に石組み）については、赤幡城や神楽山城などにも類似する遺構が確認されており、広幡山城や赤幡城は、共に天正 15 年（1587）に黒田勢により落城あるいは開城されたと言われるもので、これらの遺構は黒田方による改修とも考えられるが、断定はできない。

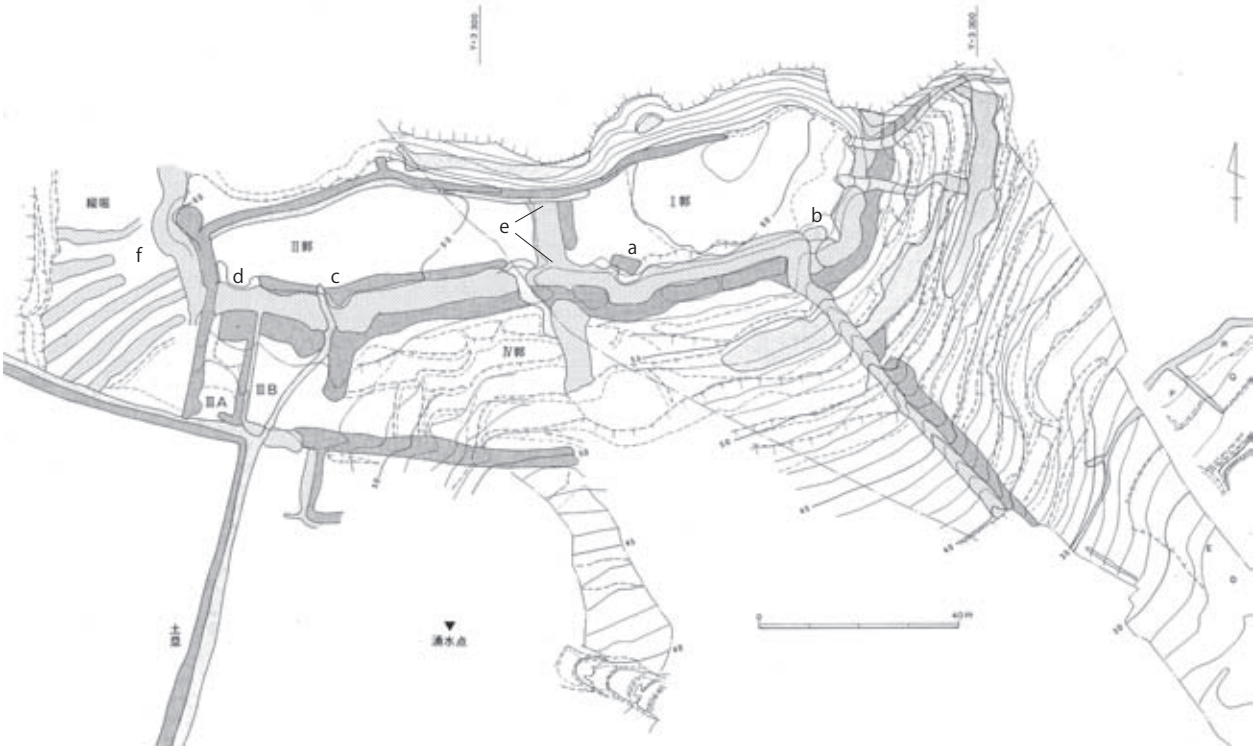
【史料】なし　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**, 28,30,**112**,**113**,**146**

第 257 図　広幡山城遠景（発掘調査時）

第 258 図　広幡山城横堀

第 259 図　広幡山城張り出し状遺構

第 260 図　広幡山城土塁 e 下部の石組み遺構



第 261 図　広幡山城平面図（文献 112 掲載図を一部改変して事務局作成）

豊前 178　釜倉城（かまくらじょう）	郡名　築城郡	別称　鎌倉城・釜蔵城	図幅名　椎田（西）
	種別　丘城	所在　築上郡築上町上香楽・小山田	

【沿革】城井谷の東、小山田谷との間に立地する丘陵上に位置する。『古城記』には「釜倉　北条氏代々居代、応永ノ頃、北条四郎左エ門時通居之」とある。『種々』や『築上郡史』（文献 30）は「鎌倉城」とする。

【概要】城井川と小山田川に挟まれた標高約 170m の低丘陵上に一辺約 10m の不整形な曲輪Ⅰを置く。Ⅰの南北の尾根上にそれぞれ一本ずつ堀切を施し、城域を画している。全長 50m ほどの小規模城館である。

第 262 図　釜倉城堀切

なお、この城域の北側にかけて人工的なスロープが伸び、東側の尾根に向けて三重の土塁と堀切が弓形になって構築、さらにその北側には大土塁が構築され、東側からの攻撃に対し厳重な備えを行っているとの指摘がある（文献 117）。しかしながら、三重の堀切はその両端部が南北の尾根上を並行するばかりで谷に向って落ちておらず、明らかに後世の山道開削による造作である。また、その北側の大土塁についても、ややや せ気味の自然の尾根地形であり、人工的な造作物ではない。よって、これらは城館遺構でなく、釜倉城の城域は当初指摘したとおり、標高約 170m の頂部に堀切２本をもって画した全長約 50m の範囲にすぎないと言えよう。

第 263 図　釜倉城北側の切通し道
（堀切などの城郭遺構ではない）

【史料】なし

【文献】1,3,6 ～ 10,30,**117**

第 264 図　釜倉城縄張り図（事務局作成）

豊前 179　小山田城（おやまだじょう）　**郡名　築城郡**　**別称　なし**　**図幅名　椎田（西）**
種別　山城　**所在　築上郡築上町小山田・本庄**

【沿革】城井谷の上本庄集落の北東側に聳える山稜上に位置する。小山田城の初出は『築上郡史』（文献 30）であり、「大字小山田の谷の詰の高き見晴しのよい所を里人ジャウダイ（城台）と云って居る。城跡は即ちこの所にある」とあり、この城郭遺構を指している。『遺跡』では室町時代の城の一覧の中に、「小山田城　小山田（小山田兵部少輔）」とあり、小山田氏の居城であったとする。

【概要】上本庄集落の北東側、小山田集落の南側に聳える標高 370m の頂部に、南北約 30m、東西約 20m の主郭を置き、北側にかけ、階段状に小曲輪を配置する。主郭の東側には、深さ約 4 ～ 5 m の堀切 1 本を設け、東側からの侵入を防御する。堀底から主郭の南側にかけては帯曲輪が展開しているが、この帯曲輪の切岸は不明瞭である。全長約 70m の小規

第 265 図　小山田城縄張り図（事務局作成）

模城館と言えよう。

【史料】なし　【文献】5,7 ～ 10,30,**117**

第 266 図　小山田城付近から見た城井谷（南側を望む）

第 267 図　小山田城堀切

豊前 187	馬場城（ばばじょう）	郡名　築城郡	別称　城山城	図幅名　椎田（東）
		種別　山城	所在　豊前市馬場	

【沿革】角田川の西岸、馬場の集落の西側背後にある城山山頂に位置する。『豊前志』には「馬場村城阯　宇都宮播磨守居る。後、八屋尾張守宗鎮居る」とし、『古城記』には「同（城跡一ヶ所）　馬場村」とし、宇都宮氏家臣の八屋幡十郎統重ト云フ者在城ナリ」とし、黒田孝高に攻め落とされたとある。『築上郡志』（文献 28）には「東西十五間、南北一朝余の城臺に空湟繞り、今尚礎石の残れるがあり」とする。

【概要】城山山頂一帯は、戦後に公園整備がなされたが、遺構もほとんど損なわれることなく、非常に良好に観察することができる。山頂部には、南北の尾根線に沿って、Ⅰ～Ⅲの曲輪を並列する。それぞれ一辺約 30m ほどの規模を有し、大きさに大差はない。Ⅰ～Ⅲの周囲や曲輪間は、堀切や横堀により厳重に防備されている。

標高が最も高い曲輪はⅠであるが、いずれの曲輪も土塁が曲輪の西側に置かれていることなど、それぞれの曲輪の独立性が高く、いずれが主郭（中心的な曲輪）であるのか決めるのが困難である。いずれの曲輪も深さ 5 ～ 10m と規模も大きく、曲輪間は全て堀で仕切られており、また横堀も一連ではなく、a と b で分断されていることなど、各々独立性が高いことがわかる。

第 268 図　馬場城遠景

第 269 図　馬場城横堀

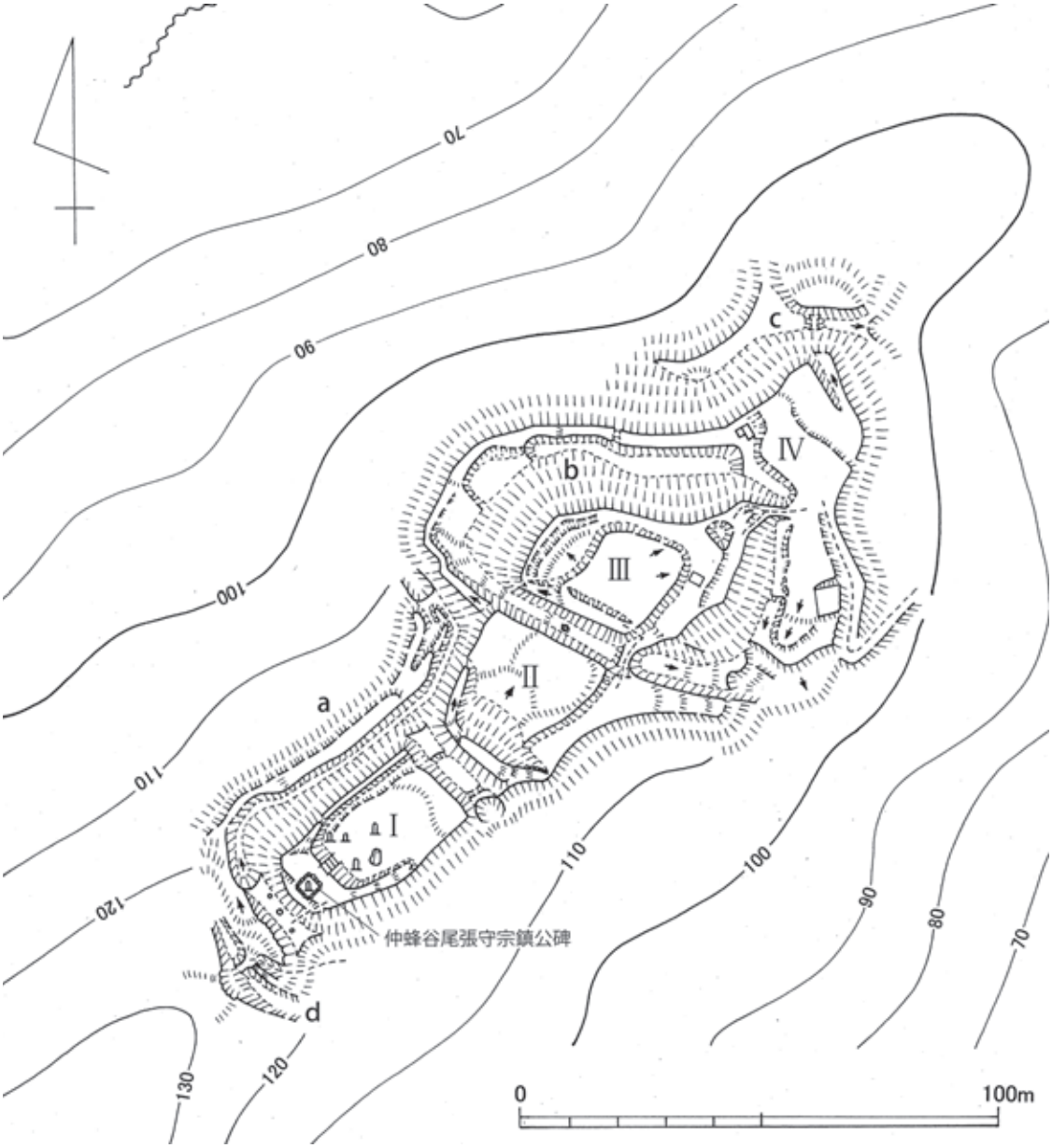
Ⅰ～Ⅲを巡る横堀の外側には、南側に城内より高い尾根に備えた堀切ｄを１本設けるほか、北側には曲輪Ⅳを挟んで、北側からの侵入を防ぐために堀切ｃが１本構築されている。

以上のように、馬場城は３つの並立する曲輪を中心にそれぞれ周囲を横堀、堀切、土塁で囲い込んで厳重に防備する構造を呈していることがわかる。

なお、馬場城の麓、馬場集落からの城の登山口には、中世と思われる五輪塔等もあり、城に関わった人物に関連する供養塔であるかもしれない。

【史料】なし　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**,28,30,**32**,**34**

第 270 図　馬場城の麓にある五輪塔



第 271 図　馬場城縄張り図（事務局作成）

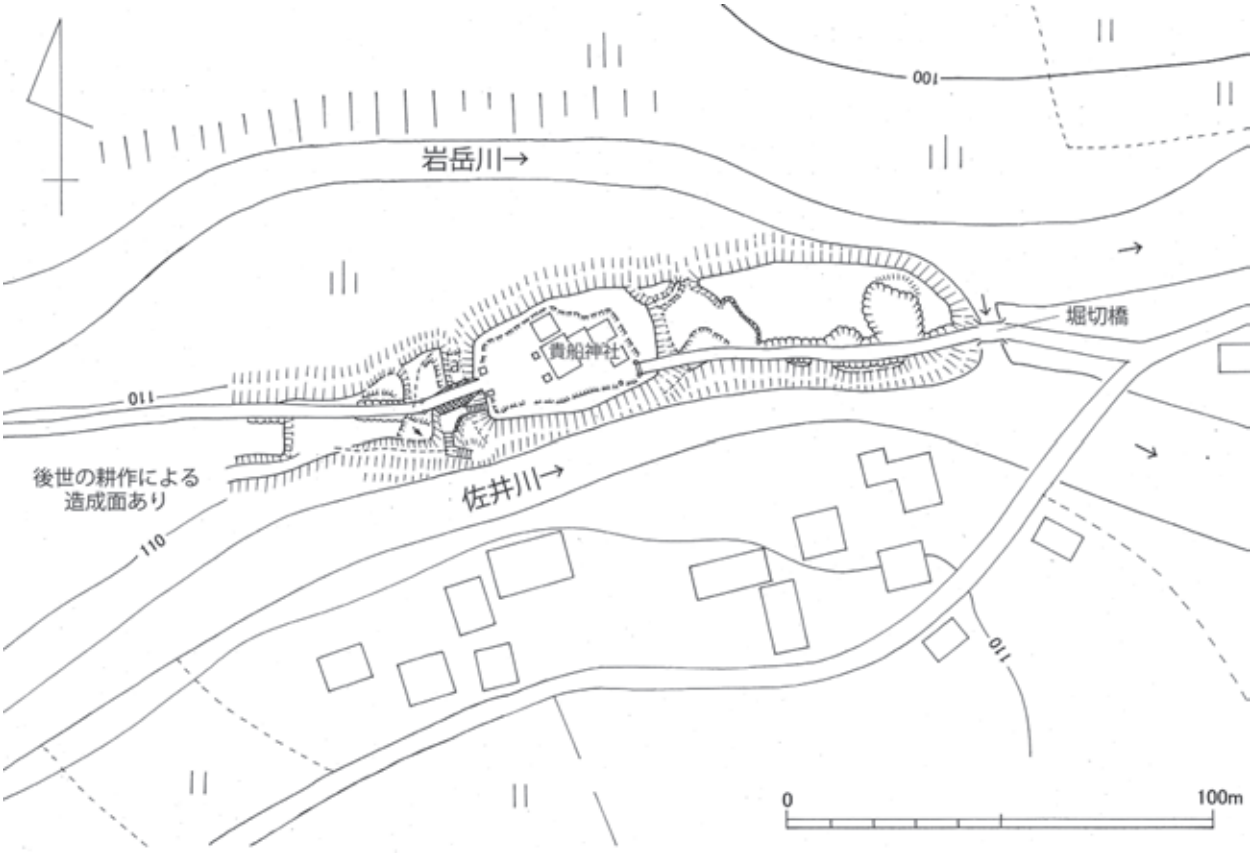
⑥上毛郡

豊前 194	下川底城（しもかわそこじょう）	郡名　上毛郡	別称　川底城・海老名城	図幅名　下河内（東）
		種別　平城	所在　豊前市下川底	

【沿革】岩岳川の上流、岩岳川と佐井川に挟まれた山稜の北東先端部は、「岡の鼻」と言い、岡城（豊前 193）があったとされているが、さらにその先端部の両川が接近する中洲は台地状となって、「城山」と呼ばれており、そこに下川底城は位置する。『古城記』には「城跡一ヶ所　下川底村ノ内､城山」とあり､「右ハ城井弥七郎家臣遠藤源兵衛城代ノ由」とある。『豊前志』には「川底村城阯　遠藤源兵衛居城。宇都宮氏の家臣なり」とある（『豊前志』にはこれとは別にもう一つ「川底村城阯」があり、記載を見ると、岡城のことを指していることがわかる)。『築上郡志』(文献 28)では「海老名城趾」とするが、『築上郡史』（文献 30）では「下川底城跡」とし、海老名城という呼称は誤りであるとしている。

第 272 図　下川底城堀切

【概要】岩岳川と佐井川に挟まれた段丘上にある貴船神社が主郭とみられ、東西約 50m、南北約 25m で、その西側には堀切 a を設け、西側からの備えとしている。また、東側には東西約 70m の



第 273 図　下川底城（海老名城）縄張り図（事務局作成）

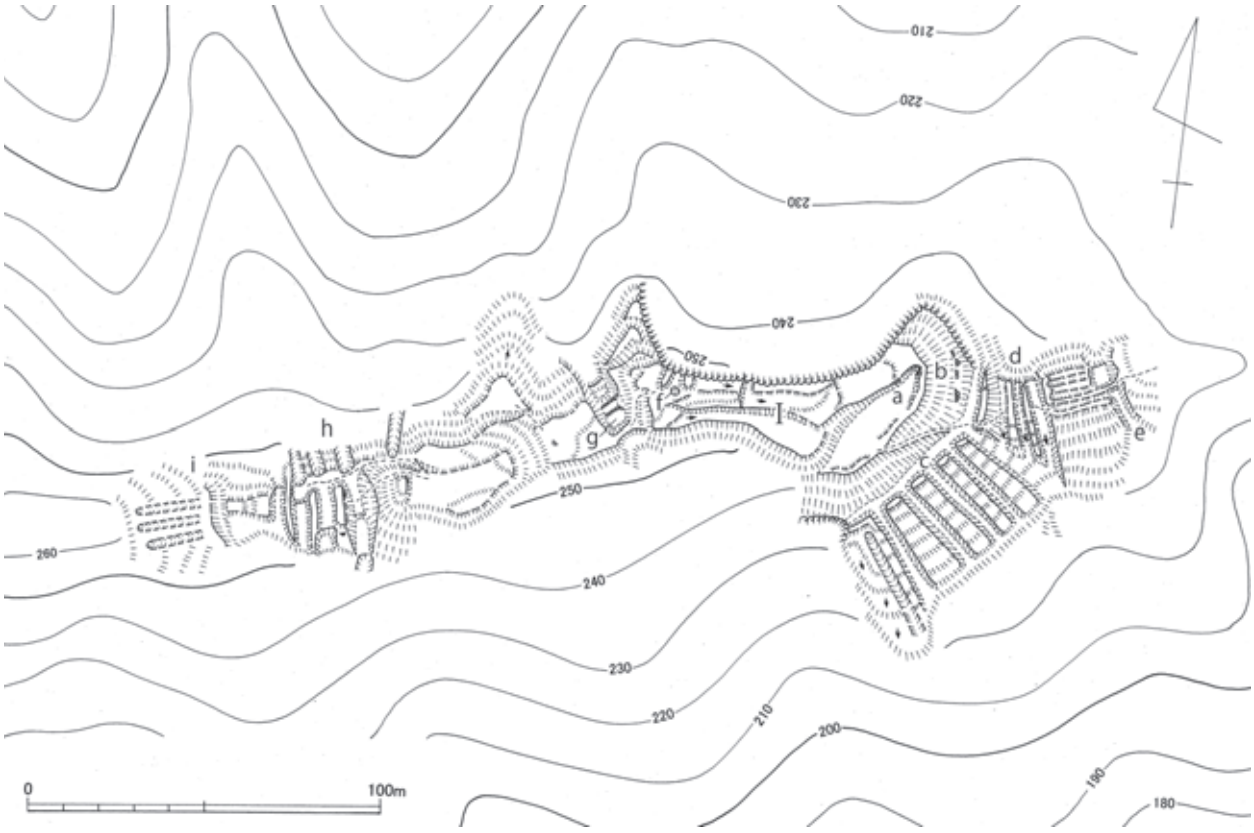
平坦面があり、かつての曲輪と思われるが、石垣など後世の改変がかなり入っており、往時の状況をどこまで反映しているかは不明である。その東側は、岩岳川から佐井川へ増水時に流れ込むような構造となっており、そこに架かる沈下橋は「堀切橋」と呼ばれ、城があったころから、台地を分断していた可能性が高い。

一方、主郭の西側にも平坦面群は広がっており、岡城の麓まで平坦面は続き、『福岡県の城』では空堀、帯曲輪などが配置された図面が提示されているものの、後世の耕作や学校用地造成などにより、往時の城館遺構を反映したものか否かを判断することは困難である。むしろ、貴船神社を中心とした東西約 100m の範囲を城域としておくのが賢明であろう。

【史料】あり　【概要】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**,28,30,32

豊前 196　櫛狩屋城（くしがりやじょう）　**郡名　上毛郡　別称　串狩野城・川内城・山田城　図幅名　下河内（東）**
種別　山城　　所在　豊前市川内

【沿革】中川上流域の川に挟まれた櫛狩屋の山稜上に位置する。『古城記』には「掻上一ヶ所　川内村ノ内、串狩野　右ハ宇都宮常陸介取出ノ由」とあり、『豊前志』には「川内城阯　宇都宮常陸介の塞なり」とあり、同一の城を指しているものとみられる。ただ、『築上郡志』（文献 28）以降の文献では、櫛狩屋にあるこの城は「山田城」とされ、それが一般的に定着しているが、『豊前志』では山田城は中川下流域にある四郎丸村（おそらく山田付近）にあったとされているため、櫛狩屋の城とは別の城を指している。また、川内城についても、『築上郡史』（文献 30）では八田城のことを指し



第 274 図　櫛狩屋城縄張り図（事務局作成）

ており、混乱が生じている。とりあえずここでは「櫛狩屋城」として報告する。

【概要】櫛狩屋集落の西側に聳える「城の台」（文献 30 に記載あり）と呼ばれる標高約 250m の頂部に位置する。標高約 250m の Ⅰ の一帯に広く曲輪群が展開しており、城の中心的な主郭と見られる。東側の曲輪の縁 a には低土塁が巡り、東側斜面には石垣 b が築かれるが、石垣は部分的である。Ⅰ の南東側斜面には、幅広の横堀と竪堀 6 本から構成される畝状空堀群 c が見られ、城内において最も厳重に防備している所である。また、Ⅰ の東側の尾根続きには、d と e、併せて 4 本の堀切群が構築され、東側からの防御に備える。d と e との間の平坦地形には、堀状の掘り込みが幾筋か見え、敵方にこの場所を足掛かりにされないための構築ともみられるが、後世のものの可能性もあり断定できない。一方、Ⅰ の西側は不明瞭な平坦地形が続くが、f には井戸跡とも考えられる落ち込みなどもあり、その西側は堀切 g により遮断するが、堀切の両端部は土橋や石垣により仕切られている。堀切 g の西側は不明瞭ながら、平坦地形が続く。あまり丁寧に整形が行われていないが、その西側 h ～ i にかけ、堀切 4 ～ 5 本を構築することで、西側からの侵入を遮断する。i の西側斜面には竪堀状の掘り込みがいくつか見られるが、城館遺構ではないと思われる。

以上のように、櫛狩屋城は畝状空堀群と堀切群により厳重に防備されるのが特徴として挙げられると共に、堀切 g の両端部を仕切る構造などは、神楽山城、広幡山城に見られる共通性が挙げられる。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**,28,30,**32**

第 275 図　櫛狩屋城遠景

第 276 図　櫛狩屋城畝状空堀群 c

第 277 図　櫛狩屋城落ち込み f(井戸か)

第 278 図　櫛狩屋城石垣 b

第 279 図　櫛狩屋城堀切 g の石組み

豊前 205　八田城（はったじょう）　　**郡名　上毛郡**　　**別称　川内城・山田城**　　**図幅名　椎田（東）**
種別　山城　　**所在　豊前市川内**

【沿革】川内の八田集落の東に見える山稜上に位置する。『築上郡志』（文献 28）には「川内村城趾」として「山田城の寨なり。今は城の臺と称ひて、番所の跡と云ふも、此邊りにあり」とあり、この城を指しているものと考えられる。また、『築上郡史』（文献 30）には「八田城跡　大字川内字八田の東山上に城の台というがあり古井戸、切割等残り番所の跡というも此の附近にある」とする。『福岡県の城』では山田氏の本城としているが、この八田城がどの文献記載に対応するものかが不明確

であるため、断定は困難である。

【概要】標高 135m の頂部に南北約 40m、東西約 30m の主郭を置き、その周囲を横堀や土塁で囲い込む構造である。単に濠を囲むだけではなく、部分的に二重に堀を巡らせたり、主郭の西側には、武者溜まり状の土塁で囲まれた空間なども造り出されている。また、横堀の要所要所には、端部を掘り残し、土橋として使用できるような工夫もなされている。特に主郭の北東側の横堀は、幅約 10m、深さ約８ｍもの規模を誇る。主郭の南側の尾根には、やや間隔を置いて堀切２本が設けられており、城域を画している。

以上のように八田城は、単郭の城でありながら、規模の大きな横堀や堀切を幾重にも巡らせた厳重な防備をなしており、城の大きさから考えると、異常ともいえる手の入れようである。可能性として、豊臣秀吉の九州平定に備えたものか、豊前国人一揆の際に備えた姿とも考えられる。

【史料】あり

【文献】6,**9**,**10**,28,30,**32**

第 280 図　八田城遠景

第 281 図　八田城横堀

第 282 図　八田城縄張り図（事務局作成）

豊前 222	高田城（たかたじょう）	郡名　上毛郡	別称　神畑城	図幅名　中津（西）
		種別　平城	所在　豊前市高田	

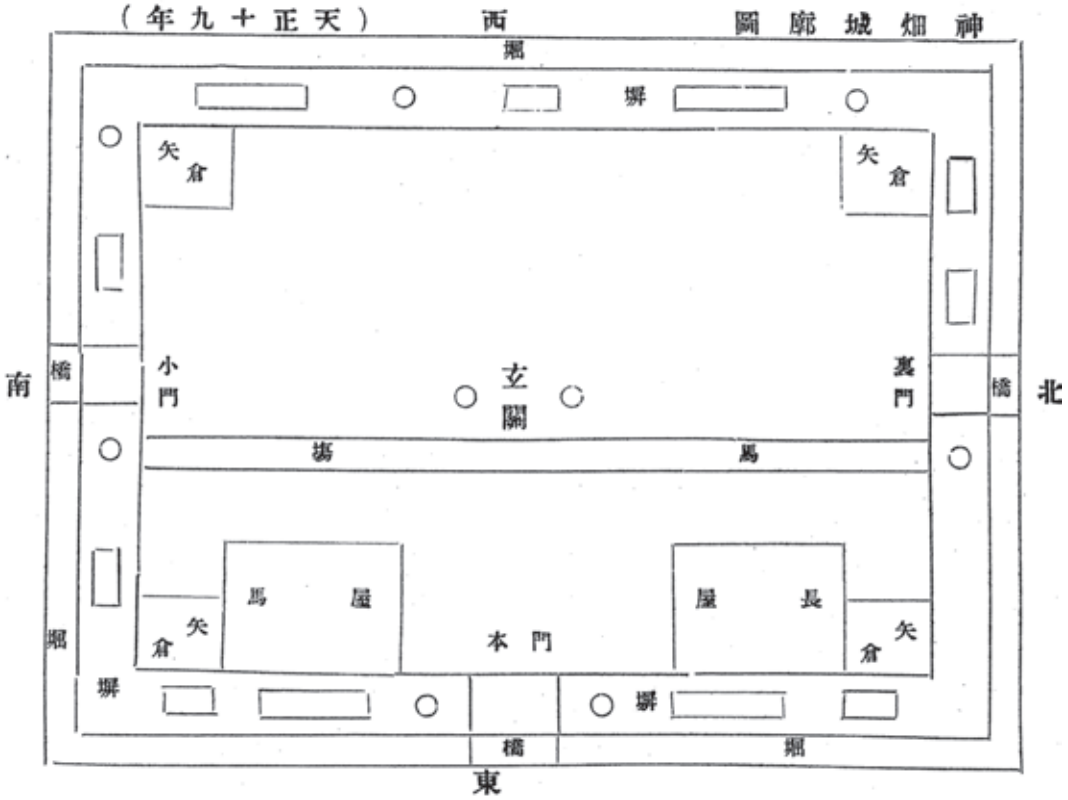
【沿革】佐井川西岸、標高 33m の平地上に位置する。『古城記』では「掻上一ヶ所　高田村ノ内、屋敷　右ハ宇都宮大和守家人有吉内記居之」とある。『豊前志』でも「高田村城阯　宇都宮大和守家臣有吉内記同宮内兄弟居れり」と記す。『築上郡志』（文献 28）には「神畑城趾」として来歴を記し、天正 16 年（1588）８月 16 日に書き残したという「神畑城廓之圖」の写しを掲載する（第 283 図）。

【概要】「神畑城廓圖」（第 283 図）を見ると、四方を塀と堀で囲み、東側に表門（本門）、北側に裏門、南側に小門を設け、四隅には矢倉を置く。表門の中に馬屋と長屋を左右に配置、中央に馬場と玄関

と記す。恐らく西側半分に本宅があったのではないかと思われる。

現地を見てみると、一辺約 100m の方形区画が想定され、区画の東側から北側にかけ、佐井川から引き入れた小川が流れ、水堀としての機能が想定される。また区画の北側は東西に走る勅使街道に面している。以上のことから、堀や塀、あるいは土塁を構えた、一辺約 100m の方形区画の平地城館であったことが想定される。

【史料】あり　【文献】1,2,4 ～ 10,28,30,32



第 283 図　神畑城廓圖（天正十九年）（文献 28 から転載）

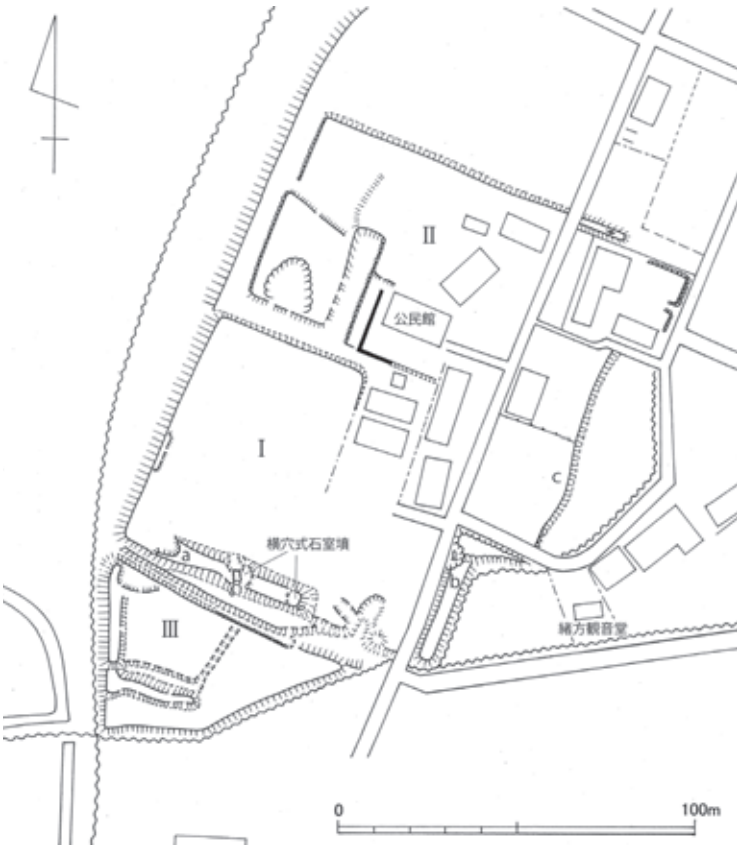
第 284 図　高田城の堀跡と思われる水路

豊前 235	緒方城（おがたじょう）	郡名　上毛郡	別称　なし	図幅名　土佐井（西）
		種別　平城	所在　築上郡上毛町緒方・矢方	

【沿革】佐井川東岸、緒方の集落内南側に位置する。『豊前志』では「緒方村城阯　同（宇都宮）家臣緒方帯刀、同刑部等居る。黒田氏より攻め落されたり」とあり、『古城記』では「同（掻上一ヶ所）　緒方村」とある。『築上郡志』（文献 28）では「字二條にあり、東西六十八間、南北八十四間の掻揚にて、湟溝の趾今に残れり、又、殿屋敷、堀、二條、等の田の字をも存す」とある。『築上郡史』（文献 30）では「大字緒方元社地の南方を字二条と称し西は佐井川に臨んで絶壁をなし南東北三方に内堀、東北に外堀の跡が残り馬場、家老屋敷など云う所もある」とする。

第 285 図　緒方城土塁 a

【概要】緒方の公民館がある一帯が城跡で、公民館の南側に約 60m 四方の空き地があり、ここが中心な曲輪と考えられる（図中Ⅰ）。Ⅰの南側の a には東西方向に高さ約 3 m の土塁が約 40m 近くに渡って残っている。土塁は古墳時代の横穴式石室墳 2 基の墳丘を利用し、それらをつなぐようにして構築されている。また、Ⅰから道を挟んで東側にも南北方向に低いながらも土塁状の高まり b が残されており、これも城の土塁とみられる。b は南北方向に約 30m 延び、東へ屈曲、約 15m 東の地点で、再び北側へ折れ、c の段差地形へとつながっており、郭のラインを踏襲しているものと想定される。一方、Ⅰの西側は川に対する崖面が続いているため、北側はどこまで城として考えるのかが難しい。Ⅰの北には東西約 70m、南北約 40m の区画Ⅱがみられ、少なくともそのあたりまでは城域として考えられよう。Ⅰの南側には空堀を挟んでⅢの区画が見られ、土塁状の高まりなどもあることから、ひとまずは城域の一部とみておくことが妥当であろう。以上、東西約 100m、南北 120 ～ 130m ほどの方形区画を基調とし、土塁や空堀を巡らしていた構造を想定することができよう。



第 286 図　緒方城縄張り図（事務局作成）

【史料】なし

【文献】1 ～ 3,5 ～ 10,28,30,**132**

豊前 245	追揚城（おいあげじょう）	郡名　上毛郡	別称　追揚ヶ城	図幅名　土佐井（西）
		種別　丘城	所在　築上郡上毛町東下・西友枝	

【沿革】友枝川と東友枝川にはさまれた山稜突端部に位置する。『築上郡志』（文献 28）には「追揚城趾　東下村、加能松の峰尾にありて、内尾兼元の出城なりと云ふ」と記す。『築上郡史』（文献 30）には「追揚ヶ城跡」として「東友枝西友枝の界をなす山脈の出鼻が之で幾条も切割の跡が残つて居る、此の処より峯伝いに上つて行けば加能松城に達する、里人は城山と云い加能松の出城であつたと伝えて居る」とある。

【概要】西友枝と東友枝の境、丘陵突端の標高約 80 ～ 110m の一帯、南北約 150m に渡って城域が広がる。標高 90 m付近に曲輪Ⅰを置く。これが主郭とみられるが、後世の祠により周辺はかなり改変がなされ、地下げや盛土が行われ、曲輪Ⅰやその北側の曲輪Ⅱは形状を変えているものと思われる。それと曲輪群の西側にも後世の山道造成が入っており、縄張りの読み込みを困難にしているが、それ以外は非常に良好に残存している。

Ⅰの南側には堀切 a が見られるが、a は埋め立てられており、a の西側には、埋め立ての際に築かれた石垣などが見られ、同様のものが東側の c にも見られる。当初、これは祠の造成に伴うものと考えたが、祠による造成は、Ⅰよりも北側でしか確認できず、またⅢの曲輪の西側には横矢をかけられるような櫓台状の張り出し b が確認でき、そこに築かれた石の積み方と a、c の石の積み方が類似することから、城郭の改修の一環だと判断した。すなわち、堀切 a を埋め立て、曲輪面上を平坦にしているのである。曲輪Ⅲの西側には、横堀が確認できる。前述したように、横堀が山道と錯綜しているがために、一見二

第 287 図　追揚城縄張り図（事務局作成）

重の堀がある、もしくは山道が２本あるかのようにも見える。しかしながら、内側の堀は櫓台状張り出しｂの形状を反映し、直角にクランクしているため、横堀である蓋然性が高い。

曲輪Ⅲの南側には土橋を設けた堀切ｄが設けられ、その南にはあまり平坦に造成していない曲輪Ⅳを挟んで、さらに堀切ｅを設けて城域を画している。一方、曲輪Ⅱの北側には麓側の尾根上に対して、三重の堀切をｆ・ｇ・ｈ構築する。堀切は全て麓まで到達するくらいにまで長大に掘られている。

そして、曲輪群の西側には、幅 10m もあろうかという大規模な竪堀６本とそれらをつなぐ横堀とで構成される畝状空堀群ｉが構築されている。畝状空堀群としては非常に大規模であり、この規模の竪堀は県内でも、直方市の鷹取城や嘉麻市の益富城、北九州市の長野城くらいでしか見られない。

以上のように、大規模な堀切群や畝状空堀群で曲輪全体を厳重に防備する様相を見ることができる。内尾氏の出城というよりは、本城、さらに言えば周辺一帯の国人領主が結集しなければ実現できないかのような大規模な改修であるとも言えよう。それと併せ、石垣を備えた横矢を効かせた櫓台やそれに付随する石垣や横堀の改修は、織豊系城郭の築城技術とも考えられ、隣接する叶松城が黒田氏により落城した伝承を持つことから、黒田氏の関与も十分考えられるが、即断はできない。いずれにせよ、周辺一帯において重要な役割を果たした城であったと想定できる。

【史料】あり　【文献】7,8,**9**,**10**,28,30,**31**,**122**

第 288 図 追揚城遠景（左隅に内蔵寺山城）

第 289 図　追揚城石垣ａ

第 290 図　追揚城畝状空堀群ｉ

豊前 246　叶松城（かのうまつじょう）

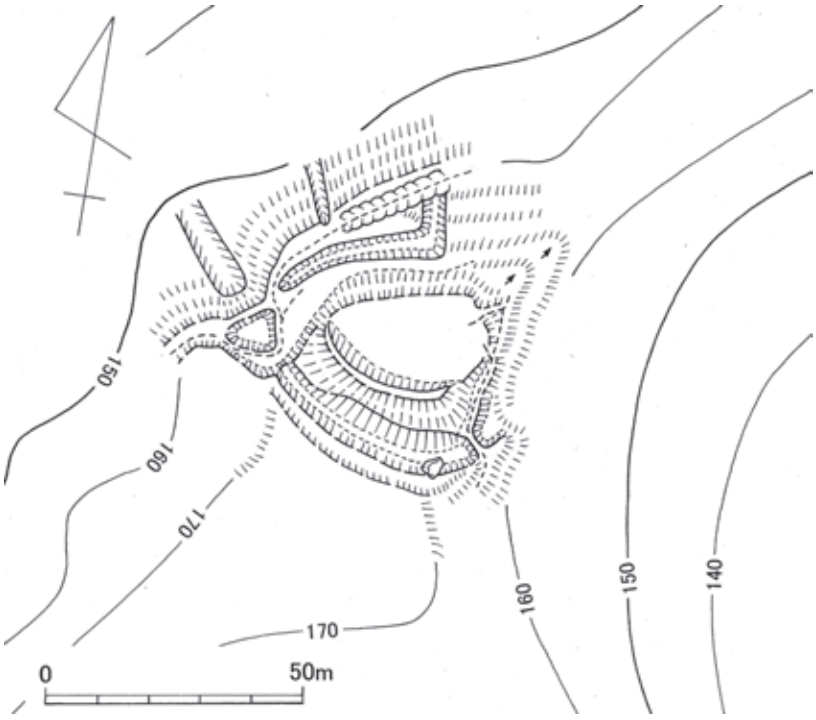
郡名　上毛郡　　別称　加能松城　　図幅名　土佐井（西）
種別　山城　　所在　築上郡上毛町東下・西友枝

【沿革】追揚城から尾根上を約 400m 登った頂部に位置する。『豊前志』には「叶松城阯　東友枝村にあり。野仲氏の出城なり。城代内尾主水、雁股城と同時に、黒田氏より攻め落されたり」とある。『古城記』には「同（城跡一ヶ所）　東友枝ノ内、叶松」とある。『築上郡志』（文献 28）では「加能松城趾」として、「高良岳山脈の峯尾にして、東西廿五間、南北二十間、堀、二重に繞る。山麓の耕地を城の越と云ひ、的場、馬場の跡をも存し、字内尾は城主常住の地なりと。是亦、野仲鎮兼の抱城にて天文の頃は内尾伊豆守親賢、天正の頃は其子兼元居る、兼元初め藤太郎と称し、後主水と改む」とあり、天正 16 年（1588）の日熊合戦の後、黒田氏に降伏したとある。『築上郡史』（文献 30）で

第 291 図　叶松城堀切

は「加能松城跡」として「大字東下西の山上姥ヶ平というが之である」とある。

【概要】友枝川と東友枝川に挟まれた山稜の北東麓の追揚城から、南西側へ尾根を約 400m 登った頂部に、城は位置する。東西約 30m、南北約 20m の曲輪を置き、その南側に高さ 5 m の土塁を弧を描くように巡らせ、その外側には、土塁に添うように堀切を巡らせている。堀底から土塁の天端までは約 8 m もある。曲輪の北東側は緩斜面となっており、全く手つかずの自然地形が広がる一方で、北西側の斜面には、横堀や竪堀が構築され、斜面側からの侵入に備えている。全長約 50m の小規模城館ではあるが、麓の追揚城と連携したいわば詰城としての役割を果たしたのではないかと考えられる。



第 292 図　叶松城縄張り図（事務局作成）

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 10,28,30,31

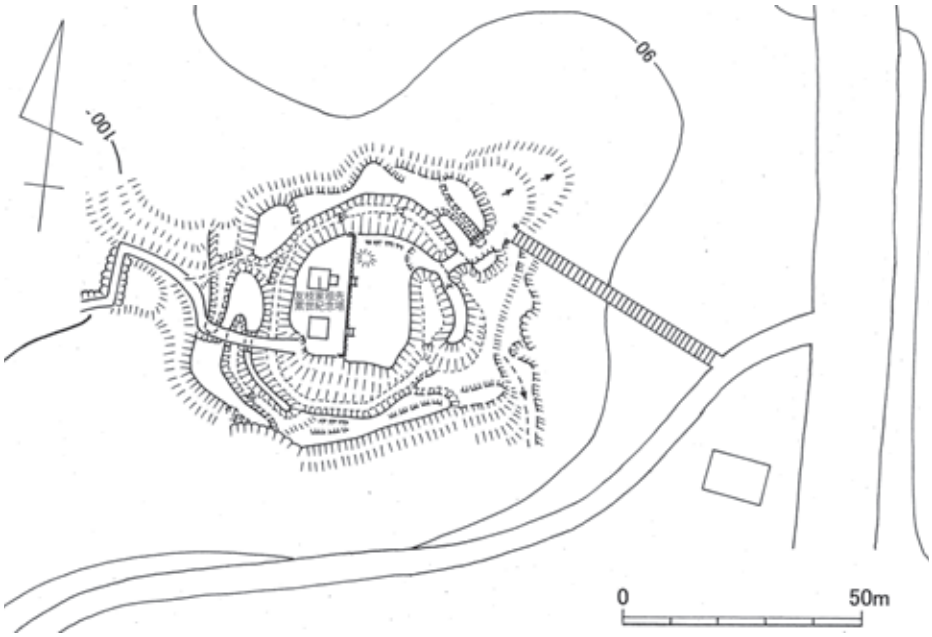
豊前 247　内蔵寺山城（ないぞうじやまじょう）　**郡名　上毛郡**　**別称　内蔵寺城**　**図幅名　土佐井（西）**　**種別　丘城**　**所在　築上郡上毛町東下**

【沿革】叶松城の東麓、東友枝川に面した半独立丘陵上に位置する。『築上郡史』（文献 30）には、「大字東下内蔵寺山上が之で二重の堀を廻らし内堀周囲約六十間外堀は東と西とにあり東方約十三間､西方約十八間」と以下寸法を列記し、さらに「小丘の下東方の耕地をシロノコシ北を古城畑と云い南方に内蔵寺跡がある」とする。また、現地には大正時代に建てられた「友枝家祖先累世紀念塔」があり、それには友枝家の中興の祖・叶松城主内尾伊豆守親實が叶松城を本城とし、内蔵寺山城を出城（牙城）としたと刻んでいる。

【概要】東友枝川に突き出した標高約 100m の半独立丘陵上に、直径約 20m の曲輪（主郭）を置く。曲輪上には、記念塔や祠が建ち、曲輪上面は若干造成され、参道により堀の一部も埋没しているが、比較的良

第 293 図　内蔵寺山城横堀

好に残存している。曲輪の周囲には、横堀が全周するが、東側は食い違うように横堀がすれ違っている。横堀は深いところで深さ約８m、幅も 10m を越える場所もある。東側と西側の尾根に関しては、横堀のさらに外側に土塁と堀が構築されており、尾根上からの侵攻を妨げている。曲輪の規模に比して、異常ともいえる厳重な防備であり、やはり黒田氏の侵攻に備えた改修の姿を表しているのであろうか。



第 294 図　内蔵寺山城縄張り図（事務局作成）

【史料】なし

【文献】6 ～ 8,**9**,**10**,30,31,**122**,**132**

豊前 253　雁股城（かりまたじょう）

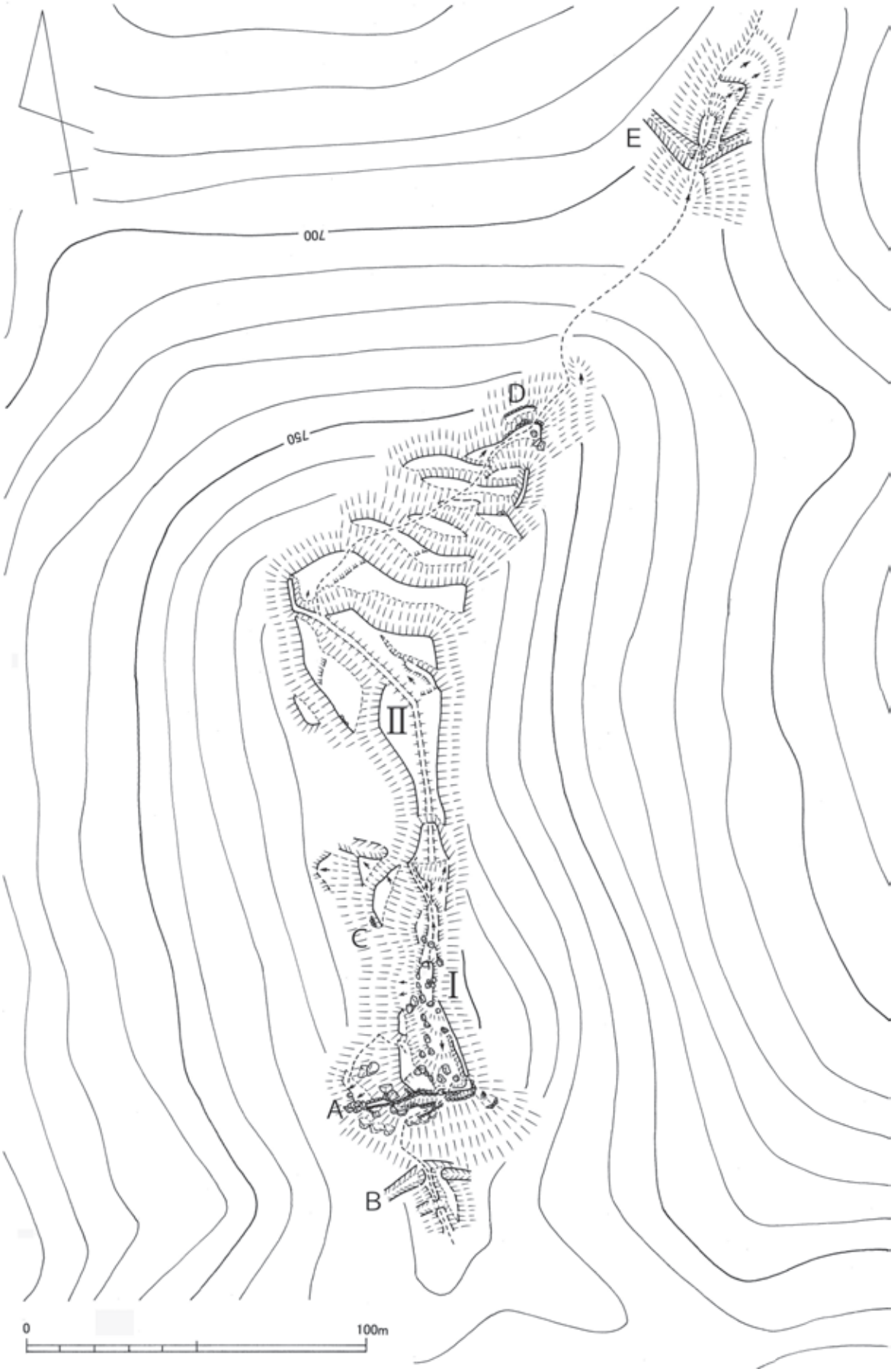
郡名　上毛郡 / 下毛郡　　別称　雁股山城　　図幅名　下河内（東）
種別　山城　所在 築上郡上毛町西友枝・豊前市松尾川内・大分県中津市耶馬渓町川原口

【沿革】友枝川最上流、下毛郡（大分県中津市）へ抜ける雁股峠の西に聳える雁股山に位置する。『古城記』には「雁股　大友ノ抱城、貞治ヨリ畠山ノ居城」とある。『豊前志』には「長岩城主野仲兵庫の出城なり。城代友枝大膳丞居る。黒田氏より攻め落されたり」と記す。

【概要】雁股山は、標高 807m の東岳と、ほぼ同程度の標高の西岳の二峰からなり、その形状が雁股に似ていることから、その名が付いたとされる。雁股城はその西岳側に位置する。

第 295 図　雁股城遠景（右側の峰）

雁股城は、雁股山の西岳の最高部を中心に南北約 400m の範囲に城郭遺構が見られる。最高所のⅠの周辺には小規模な曲輪が見られるが、平坦面はあまり明瞭ではない。Ⅰの南側には、曲輪の東側から南側にかけて土塁が巡り、石垣へと続いている。従来、石垣の存在については、Ａの箇所を中心に限定的にあることが想定されていたが、Ⅰの南側の曲輪の南端部からＡの斜面方向にかけて、石垣が継続的につながっていることが確認できる。尾根上の曲輪から西側斜面方向にかけて一列ないし二列の石垣列があったことが想定される。現在



第 296 図　雁股城縄張り図（文献 155・岡寺　良作成）

の登山道の部分については、崩落した石垣の石を、登山道整備に伴い再度積み直したような印象を受けるため、石垣列が複数あったかどうかについては地表観察のみでは判断は困難である。

第 297 図　雁股城石垣 A

Aの石垣は、扁平な石が用いられ、曲輪上面から斜面にかけて積まれて、いわば「登り石垣」の形状を呈している。石垣の終点部分は露頭の岩盤の上に積まれ、その先は垂直の断崖絶壁となっている。また、石垣の終点部分付近は斜面に石を貼り付けるのではなく、両面に面を持つ石塁状になっている。雁股山の東岳から、堀切Bを越えて尾根伝いに攻めてきた敵が、斜面伝いに侵入するのを阻止しようという意図が看て取れる。石垣の高さは1mほど残存しているが、かつてはさらに高く積まれており、そこには大分県中津市の長岩城の「櫓」にあるような方形の穴があって、地元ではこの石垣のことを「矢穴」と呼んでいたという（『福岡県の城』）。この真偽のほどは定かではないが、石垣のAの場所に矢穴があれば、斜面を横切ろうとする敵に対して迎撃できる良い場所ではある。

Ⅰの北側には階段状に小曲輪が展開するが、Ⅱの場所には、広い曲輪群が展開する。雁股山城における中心的な場所と想定できる。これらの曲輪群を貫くように、尾根の頂部には土塁状の高まりがある。一見、城郭土塁にも見えるが、曲輪の展開状況を完全に無視して曲輪の真ん中を縦断しているため、後世の登山道整備に伴うもの、あるいは郡境の表示と考えられる。

Ⅰの最高所から北へ約200mの間、曲輪群が展開した先は、地形が急激に下り、斜面へと変化する。その曲輪群の先端部Dにも曲輪の切岸を固める石垣の他、曲輪間をつなぐ土塁などが見られる。ここの石垣は土留めを目的としたものであり、使用される石材もかなり大きなものを使用している。このような石垣は城内では、Ⅰの西側、Cの部分にも確認することができ、同じ石を積むにしても、その目的によって、石材を変えていた可能性が考えられる。

そして、Dから北へ100mほど斜面を下った先に、堀切Eを設け、北側からの攻撃に備えている。

なお、雁股山へは、上毛郡（福岡県側）、下毛郡（大分県側）の両側から登ることができるが、集落がより近いのは福岡県側であり、城代が上毛郡を本拠に持つ領主（友枝氏）が当たっているのは、その位置関係を示しているものであろう。

以上のように、雁股城は中津市の長岩城の石垣などとも共通性が見られ、長岩城の出城としての位置づけにふさわしい縄張りと言えよう。

【史料】あり　【文献】1 ～ 3,5 ～ 8,**9**,**10**,31,32,**155**

2　近世城館

豊前 K1	門司城（もじじょう）	郡名　企救郡	別称　門司ヶ関山城・亀城	図幅名　下関（東）
		種別　山城	所在　北九州市門司区門司	

【沿革】企救半島の先端部、早鞆ノ瀬戸に突き出た古城山山頂に位置する。『豊前志』等によると、天治５年（1128）に下総親房（後の門司氏）が築き、応永４年（1397）には大内義弘が攻め落とし、城番の木綿和泉守は討死したという。さらに天文年間には大友家より奴留湯主水が城におかれ、その後、永禄年間にかけて大友と毛利との争奪戦が繰り広げられる。一時は豊前から筑前一帯を席巻した毛利氏も、最終的には撤退したが、門司城と関門海峡については、豊臣秀吉の九州平定まで保持し続けた。関ヶ原合戦後の慶長５年(1600)、新たに豊前国を領した細川忠興は、中津城、後には小倉城を本城として、さらに門司城を支城とし、長岡勘解由左衛門延元を城主とした。元和の一国一城令により破却されたとされる。

第 298 図　門司城遠景

なお、『取調簿』には「村ノ東方城山ノ頂ニアリ。東西十五間、南北二十間許、斜方形ノ平地ニシテ、所々ニ石垣及礎石ヲ存ス」とある。

第 299 図　門司城石垣

【概要】早鞆ノ瀬戸に突き出た標高 175m の古城山山頂を中心とした一帯に城域は広がるとされる。『福岡古城探訪』などには、古城山山頂を初めとして、そこから南東側のめかり山荘や平和パゴダ、さらに峰を隔てた筆立山山頂まで城域が連なっていたとされているが、現状はかなり改変を受けているばかりではなく、全く城館遺構が確認できていないため、そこまで城域が広がることは考え難い。ただ、古城山山頂については、石垣遺構が残されており、古城山山頂付近に城域は限定されるようである。ただ、古城山も近代以降の高射砲台などの構築により激しい改変を受けており、城の詳細な広がりや構造をつかむのは困難である。ただ、コビキＢ技法（鉄線切り技法）の瓦などが採集されていることや、面取りされた割石の石垣が築かれていることなどから、細川氏段階の改修の痕跡であることがわかる。

【史料】あり　【文献】1 ～ 8,**9**,**10**,14,**133**,136,141

豊前 K2　**小倉城**（こくらじょう）　郡名　企救郡　別称　勝山城・指月城・勝野城・湧金城・鯉ノ城　図幅名　小倉（西）
種別　平城　所在　北九州市小倉北区城内

【沿革】小倉の地は、紫川や板櫃川などの河川が関門海峡に流れ込む河口に当たり、古くより小倉津として豊前における重要な港津であった。この小倉に初めて城が築かれたのは、『倉城大略誌』によれば、文永年間に、緒方大膳惟重が居城としたことに始まるとされる。その後、菊池武光が築城して、三男武親を在城させたといわれるが、詳細は不明である。一次史料は、永禄 12 年（1569）に、毛利氏が豊前制圧のため、小倉に城を構え、南条勘兵衛を置いた頃以降に見られるようになる。この時、毛利は筑前・豊前を巡って大友方と争い、最終的には毛利氏は撤退、小倉のある規矩（企救）郡には筑前宝満城の城督で、大友方から毛利方に寝返った高橋鑑種が入ることで決着を見る。やがて鑑種は小倉津に城を構えることとなった。

天正 15 年（1587）の九州国分けにより、毛利勝信（森吉成）が小倉を居城として、田川郡と規矩（企救）郡を領するが、慶長５年（1600）の関ヶ原合戦により細川忠興が豊前国に入部する。当初、忠興は中津城を居城とし、小倉城を支城としたが、小倉城主の細川玄蕃興元（忠興の弟）は出奔、それを機に、慶長７年に小倉城を本城として、大改修を行った。細川氏が肥後に移封された後は、小笠原氏が幕末まで城主となるが、慶応２年（1866）の第二次長州征伐にて長州藩に敗北、小笠原氏は小倉城を焼いて田川郡に撤退、これが事実上の廃城となった。

【概要】現在、目にすることができる小倉城は、細川忠興の時代に大改修された縄張りであると考えられている。紫川河口の西岸に本丸・天守・二ノ丸・三ノ丸など、藩主や直臣などの屋敷を構築、一方、川の東側には陪臣や町人など、いわゆる城下町を形成し、これらの周囲には堀を巡らし、城内側に巨大な土塁が設けられた。総延長約８km にわたる「惣構」である。「惣構」は明治期まで残されていたが（第 305 図）、現在ではほとんど地上では確認することは非常に困難となってしまっている。

一方、本丸を中心とする狭義の城郭部は、本丸・松ノ丸・北ノ丸・二ノ丸ほかの曲輪から構成される。現在、城内の建造物は全く残されていないが（現在の天守は戦後の

第 300 図　小倉城天守櫓台と復興天守

第 301 図　小倉城大手口（内枡形）

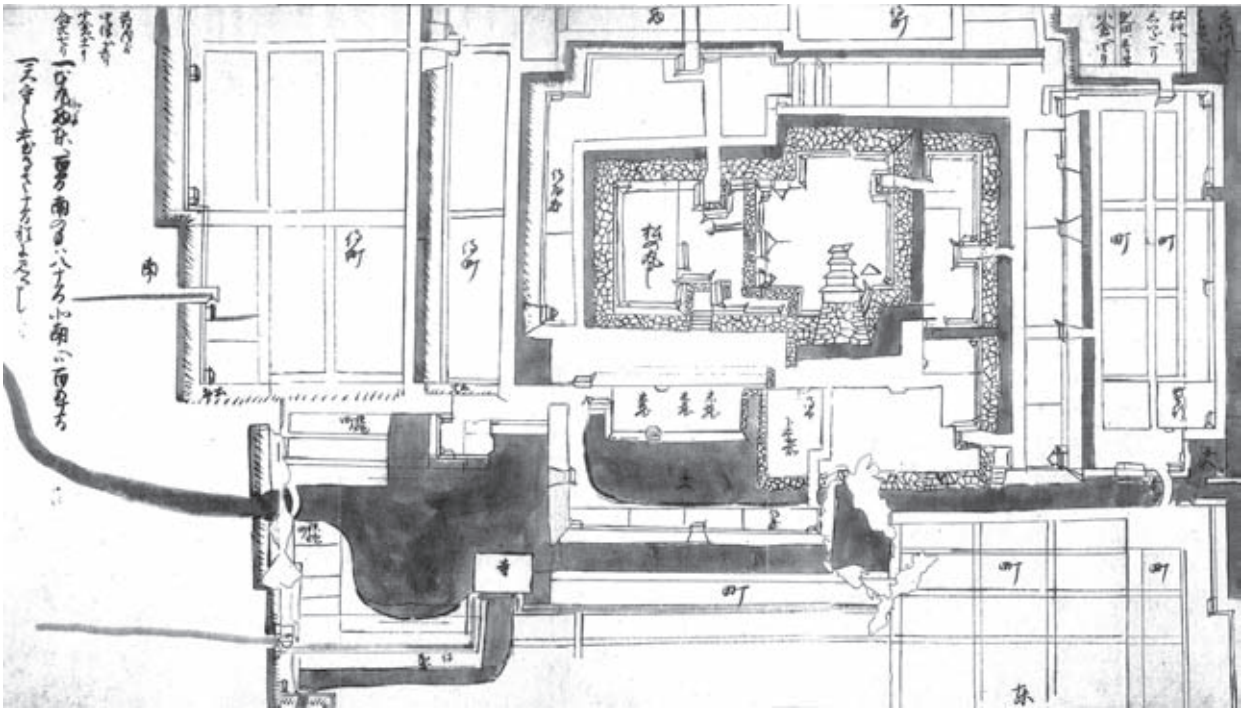
第 302 図　小倉城多聞口（内枡形）

第 303 図　小倉城西の口（元は内枡形）

第 304 図　天守北側の堀を仕切る石塁

復興天守)、寛永4年（1627）頃に描かれた「筑前筑後肥前肥後探索書」(第306図）や正保年間に描かれた「豊前国小倉城絵図」（第307図）を見ると、これらの曲輪は全て10m前後の高石垣を備え、その上面には、礎石瓦葺の天守（四層の層塔式（現在の復興天守は望楼式))、櫓、櫓門、築地塀が構築されていたことがわかる。現在もいくつかの門跡はその構造を残しているが、主要な門はほぼ全て内枡形虎口である。なお、曲輪のプランは、本丸・松ノ丸を一個の主郭として捉えれば、そこから外へつながる曲輪は全て「馬出」と見ることができ、馬出を重ねていくことで、城全体の縄張りを構成しているということが指摘されている（文献141)。石垣も後世の改修が加わっているものの、隅角部を除いた築石部は野面積みであり、近世初期の特徴ともみることができる。

第305図　明治時代の小倉城跡
（陸地測量部発行1/25,000地形図「小倉」（部分))



第306図　『筑前筑後肥前肥後探索書』に描かれた小倉城（東京大学史料編纂所蔵・文献12から転載）

現在の小倉城は、本丸、松ノ丸、北ノ丸を除いては、ほぼ地上で確認することは困難となってしまっているものの、旧二ノ丸の石垣、旧三ノ丸や「惣構」の堀からは堀障子なども見つかっており、

近世初期・細川氏段階の縄張りを色濃く見ることのできる城跡であると言えよう。

【史料】あり　【文献】3 ～ 10,**39 ～ 83**,141

第 307 図　豊前国小倉城絵図（部分・国立公文書館蔵）

豊前 K3　鬼ヶ城（おにがじょう）	郡名　田川郡	別称　鬼ヶ岳城・香春城	図幅名　金田（東）
	種別　山城	所在　田川郡香春町採銅所	

【沿革】田川郡香春町に聳える香春岳には山頂を中心として、室町時代から戦国時代にかけて香春岳城があったが、ここでは一の岳の東側中腹に位置する近世城郭の「鬼ヶ城」のみを報告する（中世の香春岳城については豊前 50 を参照）。

鬼ヶ城は、関ヶ原合戦後に豊前を領した細川氏の支城であり、細川中務少輔孝之（細川忠興の末弟）が二万五千石をもって入城した城である。他の細川氏の支城同様、元和の一国一城令により廃城となったとみられる。

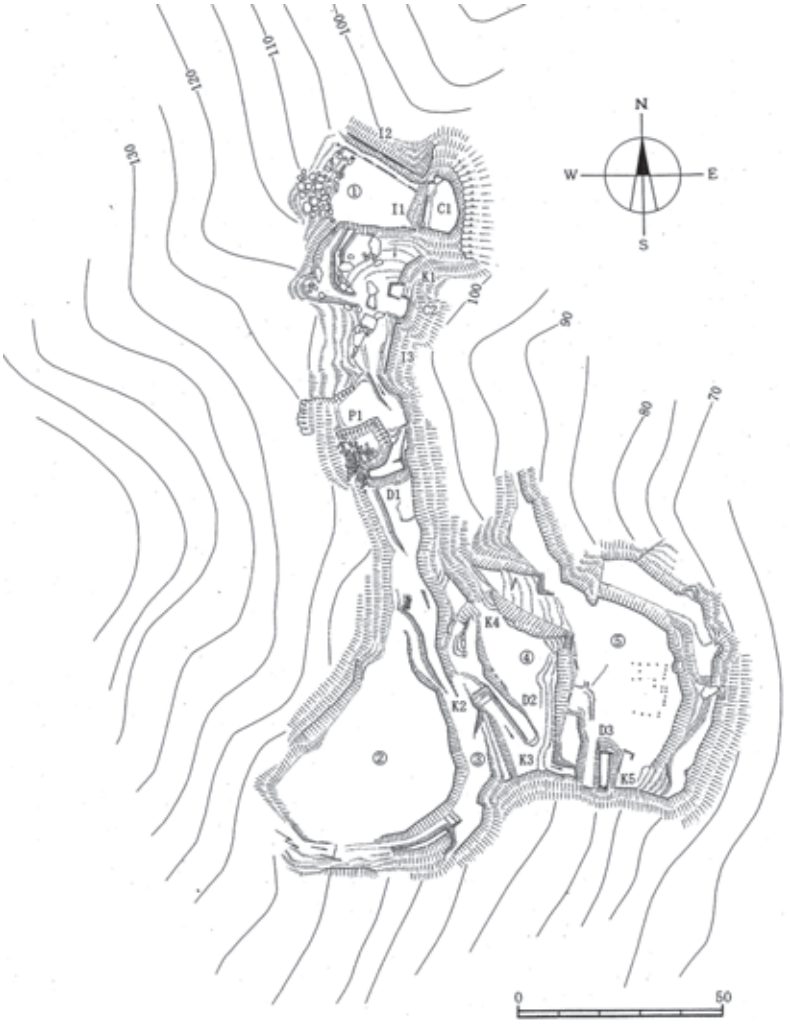
【概要】香春岳一の岳東中腹の標高約 100m 付近に、東西約 100m、南北約 150m に渡って、城域が見られる。縄張りは大きく①～⑤の 5 段の曲輪により構成され、主郭は①であったとみられる。①の南側には内枡形の虎口（K1）があり、横矢をかけることのできる櫓台状の張り出し（C2）も確認することができる。曲輪①の周囲および虎口 K1 には石垣の痕跡を確認することができ、石垣を多用していたことがわかる。また、①と②の間には、径 10m もの岩盤を掘り抜いた穴（P1）があり、水溜めとして機能したものと考えられる。そしてその南側には②～⑤の曲輪群が階段状に展開して

いる。中でも、②は約 50m 四方もあり、城内で最も広い曲輪となっているほか、曲輪⑤では現状でも建物の礎石列を確認することができる。ここでは瓦も採集されており（文献 136）、切岸には根石列が残ることから、石垣を多用し、瓦葺の礎石建物が置かれていたことがわかる。

このように、鬼ヶ城は、細川氏の段階で、他の支城（岩石城、門司城など。大分県では一戸城、竜王城など）と共に積極的に改修されたことがわかる。また、東麓には殿町の地名が残り、秋月街道に面した城下町の存在が想定される。

【史料】あり

【文献】1,3,5,7 ～ 9,**10**,**136**,**141**



第 308 図　鬼ヶ城縄張り図（文献 136・木島孝之作成）

豊前 K4　香春藩庁（かわらはんちょう）　　**郡名　田川郡**　　**別称　なし**　　**図幅名　金田（東）**
種別　陣屋　　**所在　田川郡香春町香春**

【沿革】香春岳一の岳の東麓、秋月街道に面した香春宿の中ほどに位置する。慶応３年（1867）、第二次長州征伐後の停戦条約により小倉をはじめとする企救郡を召し上げとなった小倉藩は、田川郡香春に本拠を移すこととなった。元々、小倉藩の香春御茶屋であった場所を藩庁とし、藩の拠点とした。明治２年（1869）、版籍奉還により小笠原忠忱は香春藩知事となったが、翌３年に京都郡錦原（現在の豊津）に藩庁を移転、豊津藩となった。その後、藩庁の場所は田川郡役所、香春町役場となった。

第 309 図　移築された香春藩庁門

【概要】現在、藩庁跡には、御茶屋敷時代とされる石垣が残されているが、その間口は移築された

門の間口よりも狭く、また石垣の全長も長くはないことから、後の時代の改修が想定される。唯一残された建造物である藩庁門は、御茶屋の御成門であったものだが、藩庁移転後は田川郡役所、郡立鷹羽学館の門に転用、香春小学校の校門として使用され、現在は小学校の敷地に移築されている。

【史料】あり

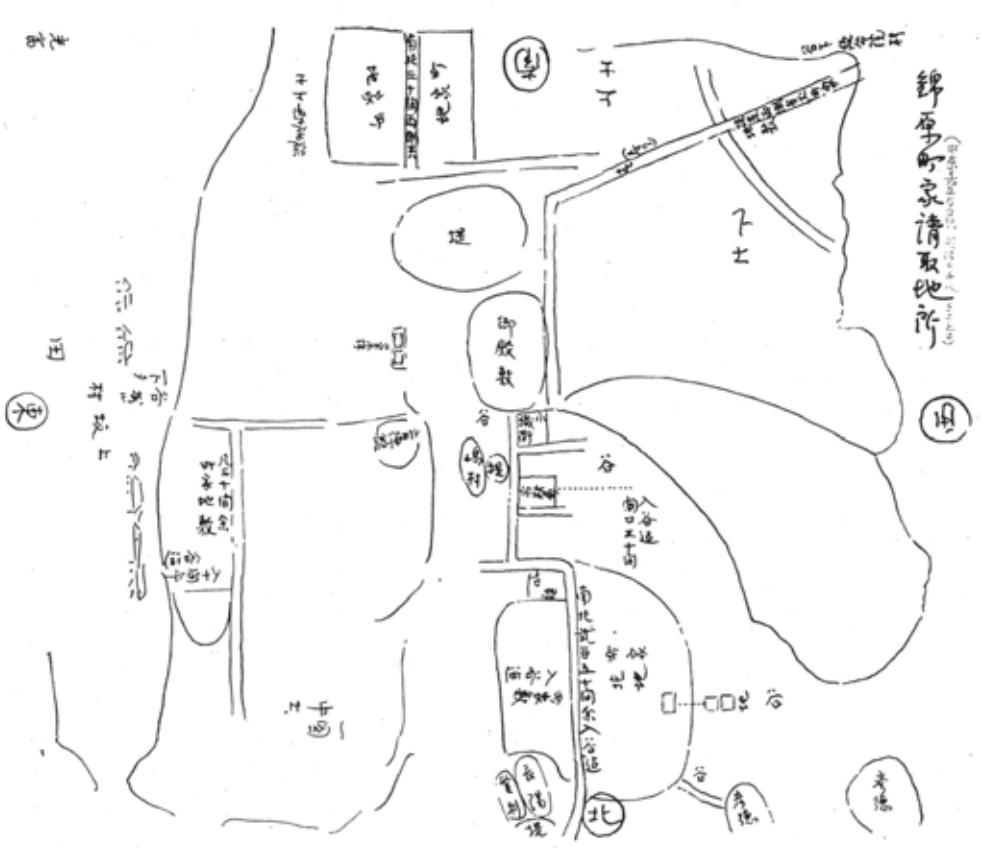
【文献】6,9

第 310 図　香春藩庁跡地

豊前 K7	豊津藩庁（とよつはんちょう）	郡名　仲津郡	別称　御殿地	図幅名　行橋（東）
		種別　陣屋	所在　京都郡みやこ町豊津	

【沿革】現在のみやこ町役場豊津支所がある場所の一帯に位置した。慶応２年（1866）に小倉を追われた小倉藩は、田川郡香春に逃れるが、翌年、企救郡の召し上げが決定、当面の藩庁を香春に置く一方で、新たな藩庁の場所の選定が開始された。藩は藩士に恒久的な城地についての意見を求め、過半数の意見が集まった京都郡錦原（現在のみやこ町豊津）の地に決定、明治２年（1869）１月４日より藩庁舎の建設を開始、同年 10 月に竣工、翌３年１月 15 日に開庁、錦原の名称を豊津に改称した。藩庁の他、隣接地には藩校育徳館を建設するものの、翌４年７月 14 日、廃藩置県により豊津藩は豊津県となり、藩知事を免職された小笠原忠忱は東京に移り、豊津の整備は中途で頓挫、学制発布により藩校育徳館も廃校となるが、明治７年に復興、現在は県立の高等学校となっている。

【概要】藩庁は現在の豊津支所から南側の町営グラウンド付近にかけて造営され、東西 90 間、 南 北 100 間の敷地内に、藩知事の政務場としての「藩庁」、藩知事邸としての「内家」



第 311 図　錦原町家請取地所
（『中原嘉左右日記』明治２年８月 25 日部分模写・文献 24 から転載）

などが建ち並んでいた。背後の小笠原神社には天守建設を予定したという小高い丘も残されている。その東には藩校育徳館、北側には市政局が置かれた。市政局には「御別邸」とも呼ばれた民政局、市井方役所などがあった。民政局は豊津小学校正門の西側に隣接し、現在も土塀と門柱を残す。市井方役所の建物は平成３年（1991）に倒壊するまでは現存し、その跡地は発掘調査が行われている。そして現在、豊津藩時代の建造物は藩校育徳館の校門（黒門）のみで、育徳館高等学校の敷地に保存されている。

第 312 図　藩校育徳館の校門（黒門）

【史料】あり　【文献】6,8,9,24

豊前 K8　旭陣屋（あさひじんや）　　**郡名　上毛郡　別称　旭城・千束城　図幅名　中津（西）**
種別　陣屋　所在　豊前市千束

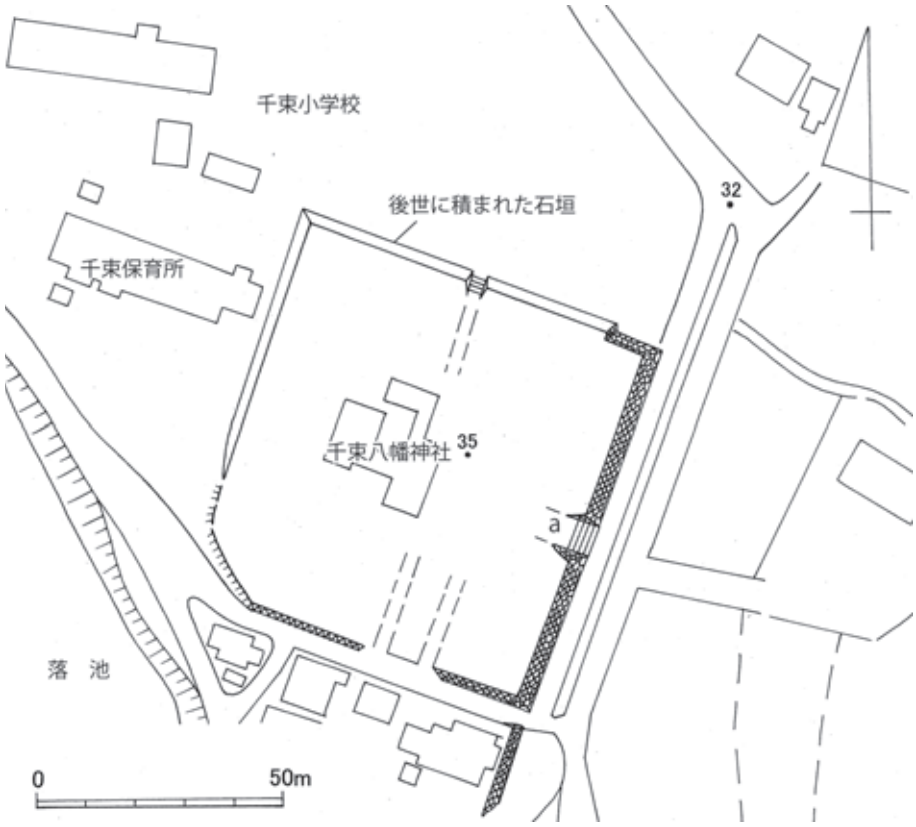
【沿革】豊前千束の標高約 35m、千束八幡神社の境内地に位置する。第二次長州征伐において、小倉を追われた小倉小笠原藩の支藩・新田藩（一万石）の藩主小笠原貞正は、小倉藩主と共に香春に逃れた後、所領であった上毛郡安雲の光林寺に入る。その後、明治２年（1869）に塔田原の地に居館を構え、同地も「千束」と改称された。それが旭陣屋（旭城）である。明治３年に完成するが、翌年の廃藩置県により千束藩（元の新田藩）は廃藩となり、廃城となった。千束八幡神社はその後の明治 13 年に建てられたものである。

【概要】千束八幡神社の境内は、一辺約 70 ～ 80m の方形の壇状地形となっており、そこに居館が置かれたとされる。方形区画の東面の中央には虎口 a が構えられ、石段も残されている。東面および、そこから接続する北面と南面の一部は、切石の落とし積みで、当時の石垣をそのまま残しているものとみられる。石垣の高さは約２ｍである。その他の面にも石垣は残されているが、河原石を用いたもので、明らかに東面の石垣とは異なるものであり、後世、神社の整備等によって積まれたものと推測される。

現在の城地には、当時の建造物は何一つ残されていないが、城門は豊前市八屋の賢明寺の山門に、御殿建物は、上毛町安雲の光林寺の庫裏として移築されて残されている。

第 313 図　旭陣屋石垣

【史料】あり　【文献】3,4,6 ～ 9,32



第 314 図　旭陣屋（旭城）縄張り図（事務局作成）

第 315 図　移築された旭陣屋の門（賢明寺）

第 316 図　移築された旭陣屋建物（光林寺）

3　城館等伝承地

豊前 D13　法然寺（ほうねんじ）	郡名　築城郡	図幅名　蓑島（西）
	種別　平地城館	所在　築上郡築上町東八田

【沿革】城井川下流北岸の標高約 12m の法然寺の境内に位置する。寺伝等によれば、法然寺は天仁元年（1108）に西願法師の開基とされ、当初は日峯山台蔵寺と称した。永正年間に行信が荒廃した寺院を再興して、含溪山念仏三昧院法然寺と改め浄土宗となった。行信は長野氏の出で、長野氏の菩提寺である護念寺（北九州市小倉南区長野）を開いた行念の第二子であるという。『築上郡史』（文献 30）には『黒田家譜』を引用し、天正 15 年（1587）、黒田孝高が築城郡の法念寺（法然寺）を仮の居所としたとされる。

第 317 図　法然寺南側の堀状の窪み

【概要】法然寺の境内は、一辺約 40 ～ 50m の方形区画を呈しており、さらにその周りの耕作地には、約 10m 幅の区画が巡っている。特に西側から南側にかけては、深さ約 1.0 ～ 1.5m の堀状に窪んでおり、堀が巡っていた可能性が考えられる。文献 132 には、境内の東側も堀が全周しているように図が書かれているが、少なくとも現段階ではよくわからない状態である。

以上のように、法然寺は堀を持つ方形区画の居館として想定することができる。これが天正 15 年の黒田孝高が居所とした際のものかどうかは、現段階では不明と言わざるを得ない。

【史料】なし

【文献】28,30,**132**

第 318 図　法然寺平面図（事務局作成。網掛けは堀の想定部分）

4　城館関連遺跡

豊前 R1	上清水遺跡（かみしみずいせき）	郡名　企救郡 種別　平地城館	図幅名　苅田（西）/ 小倉（東） 所在　北九州市小倉南区横代

【立地】横代川東岸、標高 20m 前後の低丘陵の先端部に位置する。

【概要】九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。調査区（Ⅱ区）の北側に一辺約 30m の方形区画が確認され、区画の南側には丘陵と直交するように土塁が築かれており、幅約 4 m、高さ約 2 m で、土塁に並行して空堀も掘られている。堀は南側が二段掘りで、上部からの幅は約 5 m、深さ 2.2m である。方形区画内からは方形周溝などの小溝は見つかっているが、明確な建物は不明である。この他、方形区画外ではあるが西側の平坦部では掘立柱建物群や土器焼成窯と思われる焼土坑なども見つかっている。出土遺物から 12 ～ 14 世紀頃の時期が想定される。

第 319 図　上清水遺跡平面図（文献 35・朱色が中世期の遺構）

【文献】18,35

豊前 R2	城山遺跡群（じょうやまいせきぐん）	郡名　田川郡 種別　丘城か	図幅名　金田（西） 所在　田川郡福智町金田

【沿革】彦山川と中元寺川にはさまれた丘陵の頂部に位置する。

【概要】本遺跡は丘陵全体に古墳時代の横穴墓群が築かれており、国の史跡に指定されている。横穴墓の発掘調査では、12 ～ 13 世紀の陶磁器も出土しており、横穴墓造営後も何らかの人為的活動が行われていたことがわかる。横穴墓群の調査の際に、城館跡ではないかという人為的な平坦面や土塁状遺構が確認されたため、城館遺構の存在が明らかとなった。

城館遺構は、標高 40m 弱の南北に細長い丘陵上に横穴墓の墳丘を利用するようにして造成されており、Ⅰ～Ⅲの曲輪群から構成される。Ⅲの東側は一部土塁状にもなっており、西側からの侵入を防いでいる。また、曲輪群の周囲、図中 a ～ h は、横穴墓の墳丘間の窪みが大半であるが、城館の堀切として再造成されている可能性も考えられる。城館の時期については、古墳以外の発掘調査が行われていないため不明である。しかし、当遺跡の東麓には、近世金田の手永（大庄屋）の六角家があり、藩主御成門や堀跡なども敷地内には残されており、遺跡のある丘陵頂部には六角氏代々の墓もある。推測にはなるが、中世の六角家に関する城館である可能性も考えられよう。

【文献】87

第 320 図　城山遺跡群中世城館縄張り図（文献 87・九州歴史資料館作成）

豊前 R3	伊方城園遺跡（いかたしろぞのいせき）	郡名　田川郡	図幅名　金田（西）
		種別　平地城館	所在　田川郡福智町伊方

【立地】彦山川東岸、方城中学校のある標高 30m の丘陵上に位置する。周辺には城園の他、居宅、辻屋敷、弥吉屋敷、法華屋敷などの屋敷地名が多く残される。

【概要】中学校校舎の建替えに伴い発掘調査が行われた。調査の結果、８世紀から 14 世紀までの遺構が見つかり、８～９世紀を除くと、12 ～ 13 世紀頃にも盛期があり、掘立柱建物群や井戸が大溝 SD03 の東側を中心に検出されているが、調査範囲の制約から、溝が囲う規模などはわからない。伊方（伊加田）荘に関わる居館跡とも考えられている。

【文献】86

第 321 図　伊方城園遺跡平面図（文献 86）

豊前 R4　**大原八幡神社**（おおはらはちまんじんじゃ）

郡名　京都郡　　図幅名　行橋（西）
種別　平地城館か　　所在　京都郡みやこ町勝山大久保

【立地】長峡川支流の南岸、中久保の集落にある大原八幡神社境内および周辺に位置する。大原八幡神社の祭神は豊の国の国造であった大原足尼命で、大久保にあった「雲屋敷」に住んでいたと伝えられている。

ここが城館であるという伝承は「雲屋敷」の伝承以外には見当たらず、現地表に空堀状の遺構が認められることから、今回の調査・報告に至った。

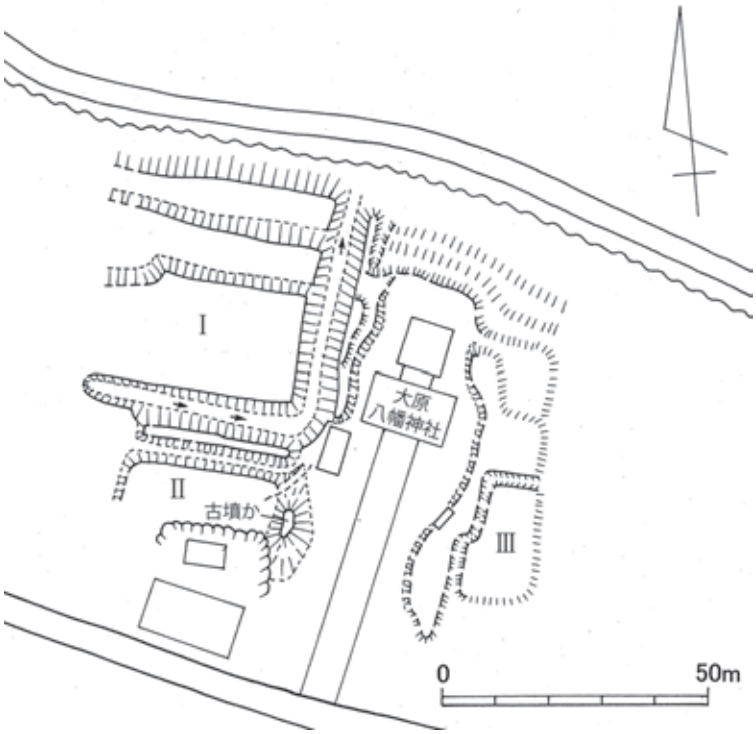
第 322 図　大原八幡神社

第 323 図　神社西側の空堀

【概要】現在、大原八幡神社の西側には、南北方向に延びる空堀があり、北側は段丘となって落ちているが、ちょうど社殿の南西隣で直角に折れ、そこから西側に延びている。一辺約 50m ずつの逆 L 字状の空堀が確認できるため、それに囲まれたⅠは居館などの方形区画と認識できる。Ⅰの西側は耕作等により不明確となっている。空堀はⅠの内側には、土塁は一切認められないが、その外側、つまり大原八幡の社殿側に土塁があり、また、堀の南側にも堀と並行する土塁ともう１本の堀が走っており、Ⅰの南側のⅡや、大原八幡神社境内も屋敷地などの区画が想定される。Ⅱは神社よりも一段高くなっており、Ⅱの東側には高さ約５mの高まりがあり、古墳の墳丘を削って土塁にしている可能性も考えられる。かたや神社の南東側にも、細いながらも地表に溝状の窪みが見られ、方形区画の存在が推測される（図中Ⅲ）。

以上のように、大原八幡神社周辺には、堀や土塁で囲まれた方形区画の屋敷地が複数想定される。発掘調査をしていないため、時期や詳細な性格は一切不明であるが、いずれかの時期の居館群である可能性は高いと思われる。「雲屋敷」伝承も、この居館群と関連して発生したものかもしれない。

【文献】なし



第 324 図　大原八幡神社の城館関連遺構縄張り図（事務局作成）

豊前 R5　延永ヤヨミ園遺跡

郡名　京都郡　　図幅名　行橋（東）
種別　平地城館　　所在　行橋市吉国・延永

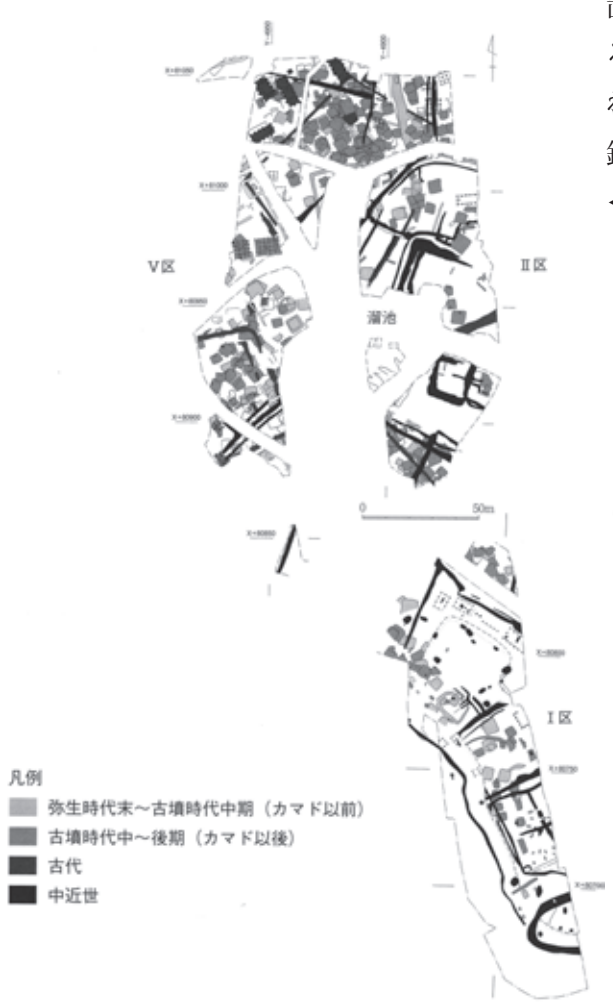
【立地】京都平野の長尾川支流の小波瀬川と山崎川にはさまれた標高 10m 前後の低段丘上に位置する。大字延永と吉国にまたがる遺跡で、ほとんど吉国に含まれる。

【概要】東九州自動車道および国道 201 号線行橋インター建設に伴う発掘調査が福岡県教育委員会・九州歴史資料館により行われ、概要が明らかとなっている。発掘調査は非常に広大な面積に及び、調査区は大きくⅠ～Ⅴ区に分かれており、弥生時代から中世まで幅広く、濃密に遺構が検出された。本来であれば、中世居館群を全体的に検証すべきであるが、今回は各調査区における概要を記すにとどめる。

＜Ⅰ区＞調査対象地域の中でも南にあたり、東西約 50m、南北約 150m の範囲の調査が行われ、15 ～ 17 世紀頃に位置づけられる溝で囲まれた屋敷地が確認され、地下式土坑やそこからは鉄製の芦屋釜なども出土した。

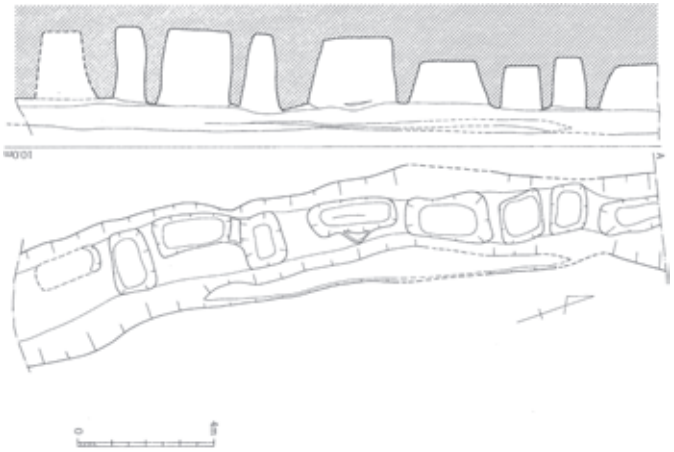
＜Ⅱ区＞Ⅰ区の北側、東西約 50m、南北約 150m

第 325 図　延永ヤヨミ園遺跡調査区位置図（文献 111）



第 326 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ区遺構配置図（文献 109）

第 327 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区遺構配置図（文献 111・濃いアミカケ中世遺構）



第 328 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ-C 区 14 号溝実測図
（文献 101・仕切りが見られる）

第 329 図　延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区遺構配置図
（文献 106・朱色が中世遺構）

の逆Ｌ字形の調査区で、調査により 12 世紀以降の溝や土坑が検出され、中には方形に区画するような屋敷地の区画が相当数見つかったが、それに伴うような明確な建物跡は検出されていない。削平等の影響もあるかもしれない。

＜Ⅲ区＞Ⅱ区の東側に当たる調査区で、調査区からは 12 ～ 14 世紀を中心とする時期の区画溝が多数検出されており、主に東西方向に長い方形区画が南北に並列するような状況が見られるようである。注目すべきは、Ⅲ-C 区で検出された 14 号溝はいわゆる「堀障子」の仕切りを持つものであるが（第 328 図）、溝からの出土遺物は 12 世紀頃を示しており、いわゆる障子堀とは系譜の異なるものとみられる。機能等も含め検討する必要があろう。

＜Ⅳ区＞Ⅰ区とⅡ・Ⅴ区に挟まれるように細長く伸びる調査区で、中世の遺構は溝と土坑が検出されたばかりであるが、溝は矩形に折れ、明らかに南北方向に長い方形区画の屋敷地と想定される。時期は 14 世紀後半～ 15 世紀頃が主体と考えられる。図示していないが、Ⅳ-C 区からは中世前期の東西方向の溝が 1 条検出されたくらいである。

＜Ⅴ区＞Ⅱ区の西側に当たる調査区であるが、遺構の主体は古代であり、中世まで下る溝は若干は確認できるものの少数であって、おそらく直線、あるいは矩形を呈するものもあり、屋敷などの区画溝と考えられようが、判然としない。

以上のように、当遺跡では 12 ～ 17 世紀に至る居館群が想定される。これは古代以来の「草野津」の港湾としての重要性に裏打ちされたものであろうが、詳細については今後の課題であろう。

【文献】99 ～ 107,109,111

豊前 R7	**宝山小出遺跡**（たからやまこいでいせき）	**郡名　仲津郡**	**図幅名　行橋（東）**
		種別　平地城館	**所在　行橋市宝山**

【立地】今川西岸、宝山城の東側の標高 7 m前後の平地上に位置する。

【概要】東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われ、南北方向に約 100m、東西約 40m の範囲が

調査された。調査により 14 ～ 16 世紀頃の建物や井戸を伴った方形区画の溝を検出した。区画溝は南北方向を基準軸とし、その東西両側に一辺約 20 ～ 30m の方形区画を隣接して配列している。南側には宝山桑ノ木遺跡が隣接するため、両遺跡についての所見は、そちらで述べる。

【文献】108

豊前 R8	宝山桑ノ木遺跡（たからやまくわのきいせき）	郡名　仲津郡	図幅名　行橋（東）
		種別　平地城館	所在　行橋市宝山

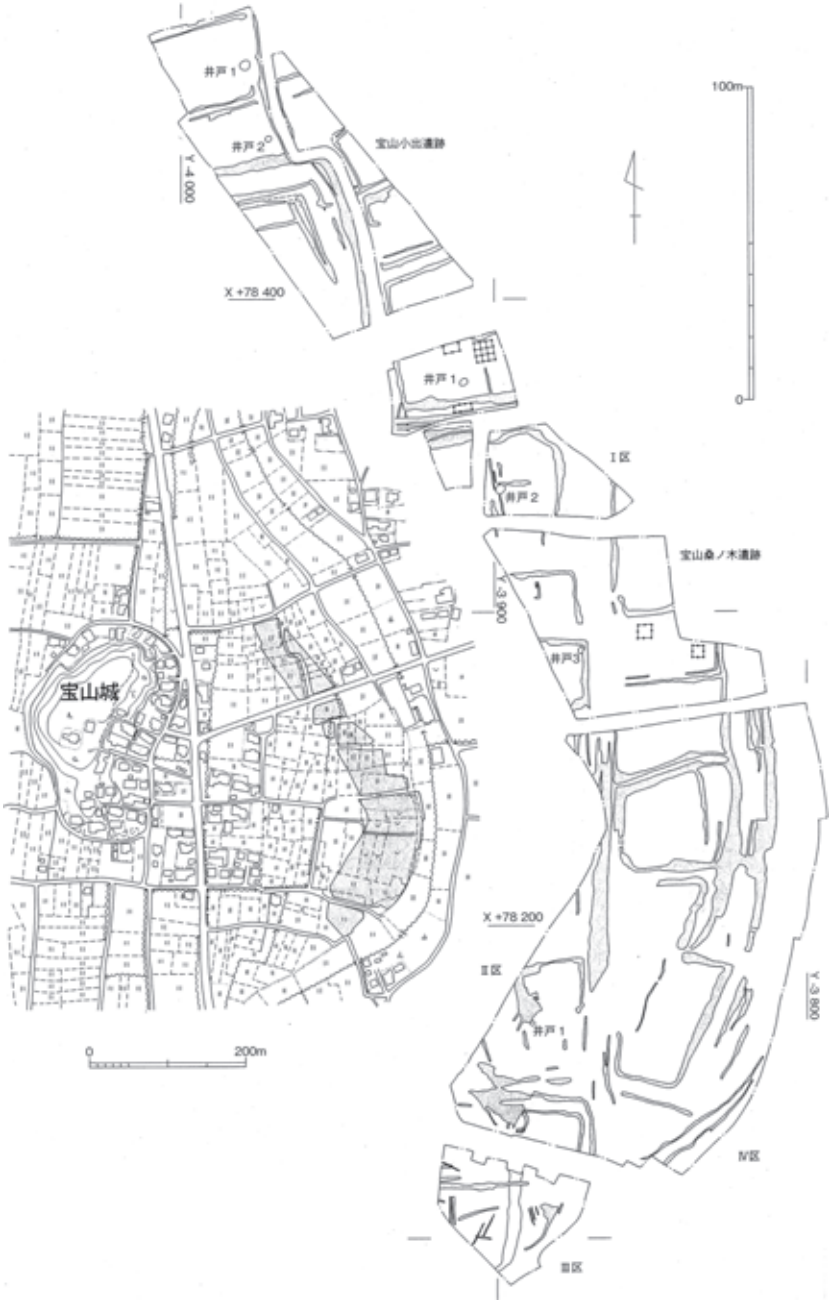
【立地】宝山小出遺跡の南隣に位置する。標高は同じく約 7 mである。

【概要】東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われ、南北約 300m に渡って調査区が設定された。

調査の結果、宝山小出遺跡から継続する屋敷地が南北方向に並列して配置された状況が確認された。溝で囲まれた方形区画の規模は、約 20 ～ 50m とばらつきがあるが、南へ行くほど大きくなっているような印象を受ける。

以上のように、宝山小出遺跡と桑ノ木遺跡で確認された屋敷地は全長約 400m にも及ぶ。区画溝の内部には多数のピットがあり、掘立柱建物群で構成される屋敷が想定されよう。当遺跡の西約 300m 地点には宝山城が低丘陵上に位置している。丘陵上は後世の耕作等による改変を受けており、地表面にて城館遺構を確認することはできないが、ここに中世城館があったことは間違いないであろう。この丘陵の東麓には現在の宝山の集落もあり、これらと併せた上で、当地の中世の状況を考えていく必要があろう。

【文献】108



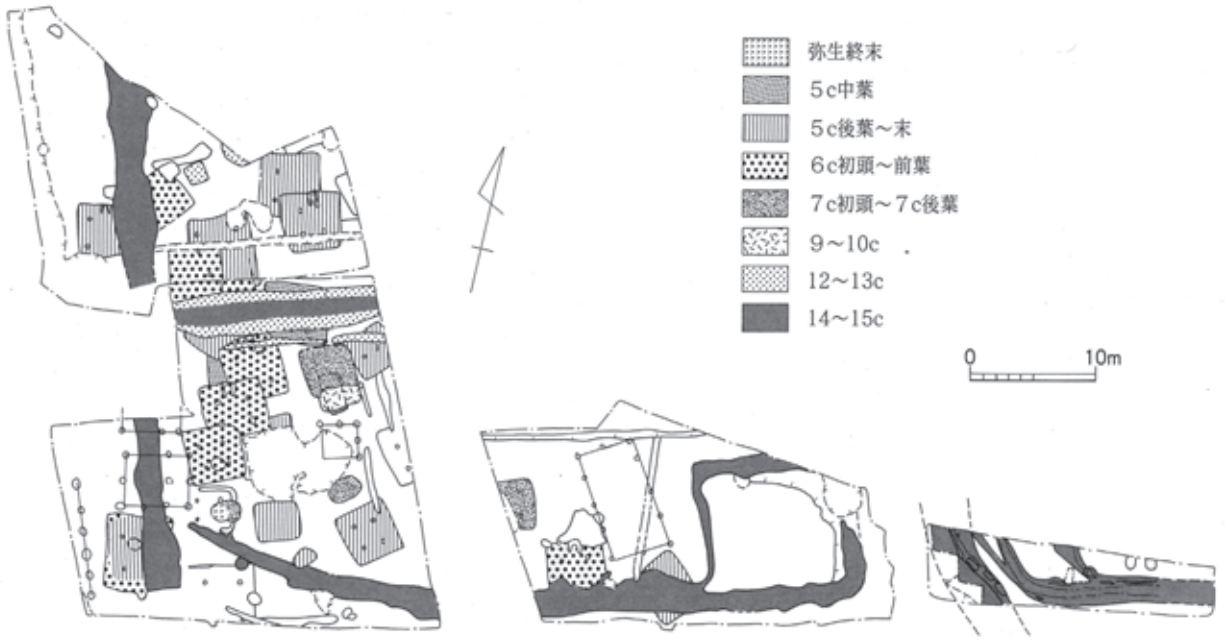
第 330 図　宝山小出遺跡・宝山桑ノ木遺跡遺構配置図（文献 108）

豊前 R9	福富小畑遺跡（ふくとみおばたいせき）	郡名　仲津郡	図幅名　行橋（東）
		種別　平地城館	所在　行橋市西泉３丁目

【立地】今川東岸の標高 10m 前後の低段丘上に位置する。

【文献】公園街路の道路建設に伴い調査が行われた。A・B の２地点の内、B 地点において関連する遺構が検出された。B 地区は、東西約 100m、南北約 50m の三角形状の調査区が設定され、弥生時代終末から近世に至るまでの遺構が確認されたが、関連するところでは、15 世紀を中心とする時期に溝で囲まれた方形区画が複数確認されている。区画は東西約 50 ～ 60m、南北約 30m の長方形で、少なくとも３区画は確認された。区画の内外からは、多数のピットが見つかっており、掘立柱建物群により構成される方形居館群が想定される。

【文献】98



第 331 図　福富小畑遺跡 B 地区遺構配置図（文献 98）

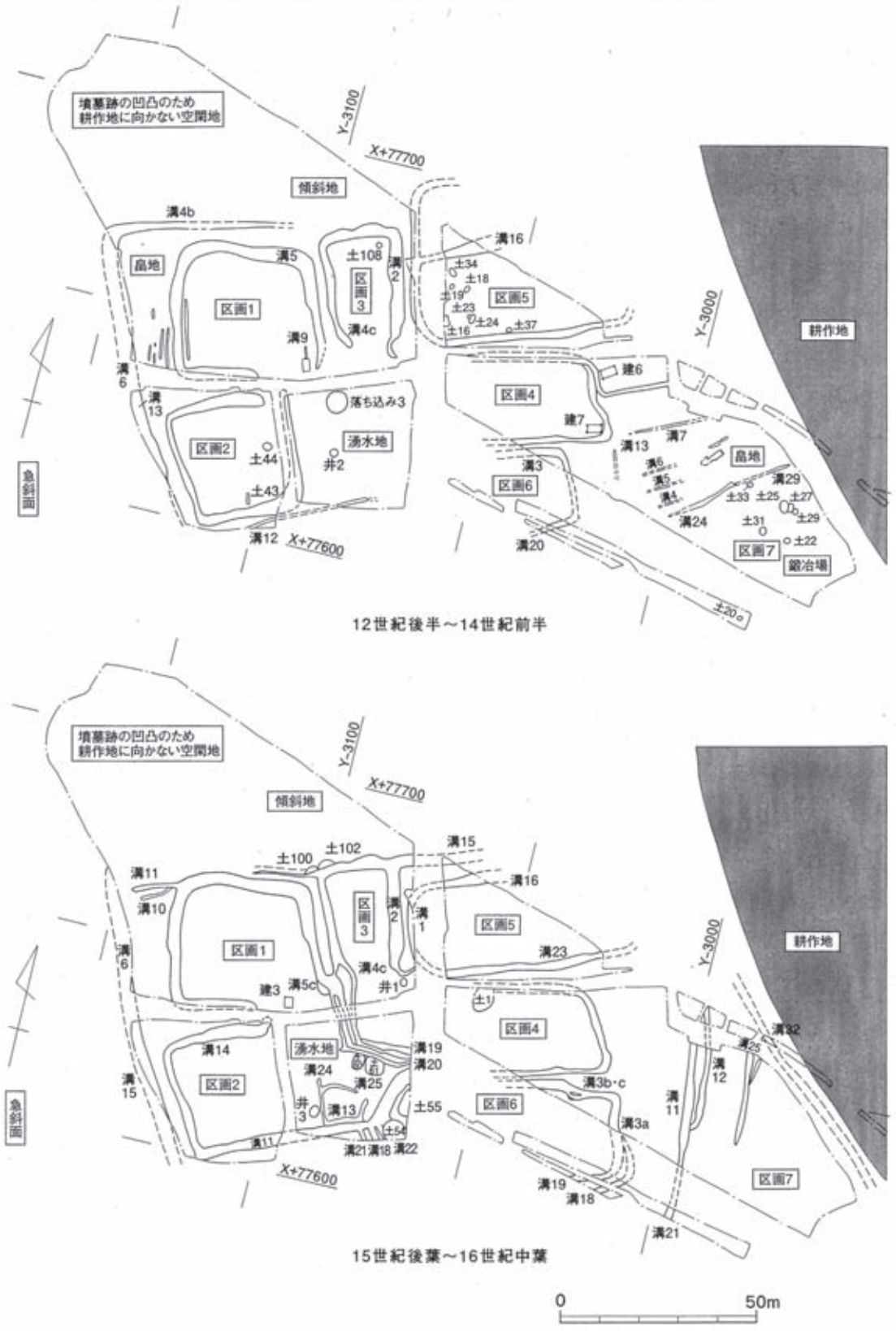
豊前 R10	矢留堂ノ前遺跡（やどみどうのまえいせき）	郡名　仲津郡	図幅名　行橋（東）
		種別　平地城館	所在　行橋市矢留

【立地】今川の東岸、矢留山の北側、標高 12 mほどの低段丘上に位置する。

【概要】東九州自動車道建設に伴い、発掘調査が行われ、東西約 250m、南北約 150m の範囲が調査されている。調査の結果、縄文時代から戦国時代までの遺構・遺物が確認されたが、中世期には、溝で囲まれた方形区画が約６区画確認され、中からは多数のピットなどが検出され、確実に掘立柱建物を備えた屋敷地群が展開していることが判明した。

溝で囲まれた方形区画は、一辺約 25 ～ 30m で、区画と区画の間は、通路として使用できるように約５mの間隔が置かれていた。出土遺物から、12 世紀後半から 14 世紀前半までと、15 世紀後半から 16 世紀中ごろまでの二時期の盛期があったとみられる。

【文献】110



第 332 図　矢留堂ノ前遺跡中世遺構変遷図（文献 110）

豊前 R11　**下木井遺跡**（しもきいいせき）　郡名　仲津郡　図幅名　豊前本庄（東）　種別　平地城館　所在　京都郡みやこ町犀川木井馬場

【立地】宇都宮氏が豊前に入部した当初に居住したとされるみやこ町犀川木井馬場集落の入口にあたる祓川西岸に位置する。北側背後には、神楽山城の出城とも考えられる毘沙門城(豊前 155)が所在する。小字名は「中屋敷」である。

【概要】圃場整備に伴って発掘調査が行われ、Ⅰ区では東西約 20m、南北約 70m の範囲が対象となり、調査区からは、井戸 4 基、製鉄跡 4 基、ピット多数と共に、石列で区画された屋敷地が確認された。石列は何度も改修が加えられており、規模は不明確となっているが、水路を挟んで南北に２区画並列するようであり、北側の区画は、南北幅は約 20m、東西幅はそれ以上とみられる。明確な建物跡は認識されていないが、おそらく多数の掘立柱建物群があったものとみられる。出土遺物は土師器他、輸入陶磁器も多数みられ、12 ～ 15 世紀の幅があるが、13 世紀頃が盛期とみられる。

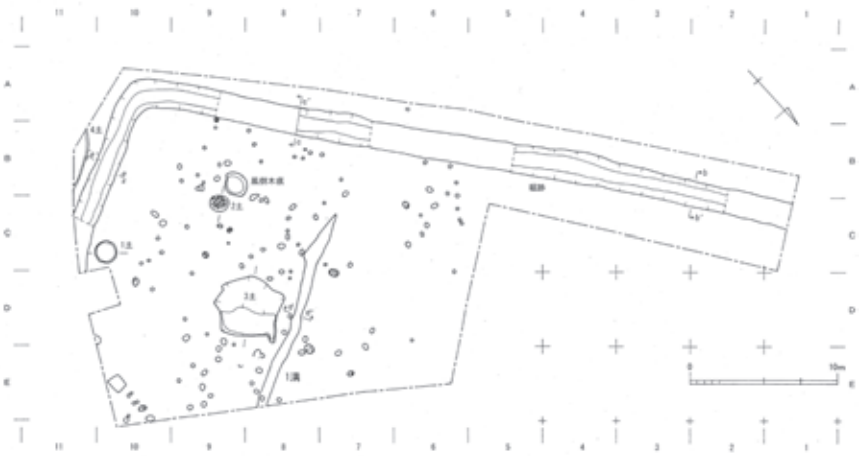
第 333 図　下木井遺跡Ⅰ区平面図（文献 93）

【文献】93

豊前 R12　**築城城跡遺跡**（ついきじょうあといせき）　郡名　築城郡　図幅名　蓑島（西）　種別　平地城館　所在　築上郡築上町築城

【立地】城井川下流北岸、標高約 10m、東築城と下築城との集落の間に位置する。周辺には本丸、二ノ丸、上屋敷、下屋敷などの字があり、中世城郭の「築城城」として周知の包蔵地となっている。確かに本遺跡でも中世居館跡の区画溝ともみられる関連遺構も検出されているが、これが直接築城城に伴うものであると断定できないため、今回はひとまず築城城とは別に関連遺跡として「築城城跡遺跡」として報告する。

【概要】施設建設に伴う発掘調査で、東西約 20m、南北約 40m の範囲が対象となり、調査区からは、多数のピットや土坑と共にＬ字に折れ曲がる溝（堀）が確認された。溝は幅約２ｍ、深さ１ｍ未満で、東西約 10m、南北約 40m が検出された。溝に囲まれた方形区画であり、屋敷地と考えられる。区画内の土坑からは礫（つぶて）とも考えられる円礫群が固まった状態で出土している。溝からの出土遺物は、13 ～ 15 世紀前半であり、屋敷の時期もそのあたりに求められよう。



第 334 図　築城城跡遺跡平面図（文献 119）

【文献】119

豊前 R13　西八田（にしはった）・堂ノ本（どうのもといせき）遺跡

郡名　築城郡　　図幅名　蓑島（西）
種別　平地城館　　所在　築上郡築上町西八田

【立地】築城航空基地の東、周防灘に面した標高８ｍに立地する。

【概要】圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、調査により約 100m 弱四方が調査対象となった。調査の結果、溝で仕切られた方形区画が約８ヶ所みつかり、区画内部からは多数のピットや土坑、掘立柱建物が検出された。溝からの出土遺物は近世陶磁が主体であり、最終埋没は近世中ごろまで下りそうではあるが、一部には 15 世紀頃のものもあり、中世後期から近世にかけて活動した可能性が考えられる。

第 335 図　西八田・堂ノ本遺跡平面図（文献 116）

【文献】116

豊前 R14	西高塚ナカバル遺跡（にしたかつかいせき）	郡名　築城郡	図幅名　椎田（西）
		種別　平地城館	所在　築上郡築上町西高塚

【立地】城井川の河口近く、岩丸川との間に挟まれた標高 11m に立地する。

【概要】施設建設に伴い発掘調査が行われ、およそ 40m 四方が対象となった。調査では、調査区西端において、南北方向に走る幅 2.3 ～ 4.7m、深さ 0.8 ～ 1.0m の直線溝を確認している。溝の東側からは、少なくとも 6 棟の掘立柱建物群が検出されている。溝の埋土からは 12 ～ 13 世紀を中心とする土師器、陶磁器（黄釉盤・龍泉窯鎬蓮弁碗）などが出土しており、これが遺跡の年代を示しているものと思われる。溝は隅部が確認されていないため、区画の規模やどちらが内か外かもわからないものの、掘立柱建物が検出されている東側が区画の内側だとすると、南北は 30m 以上、東西は 40m 以上の規模が想定される。付近には高塚城も伝承されており、関連が窺われる。

【文献】118

第 336 図　西高塚ナカバル遺跡平面図（文献 118）

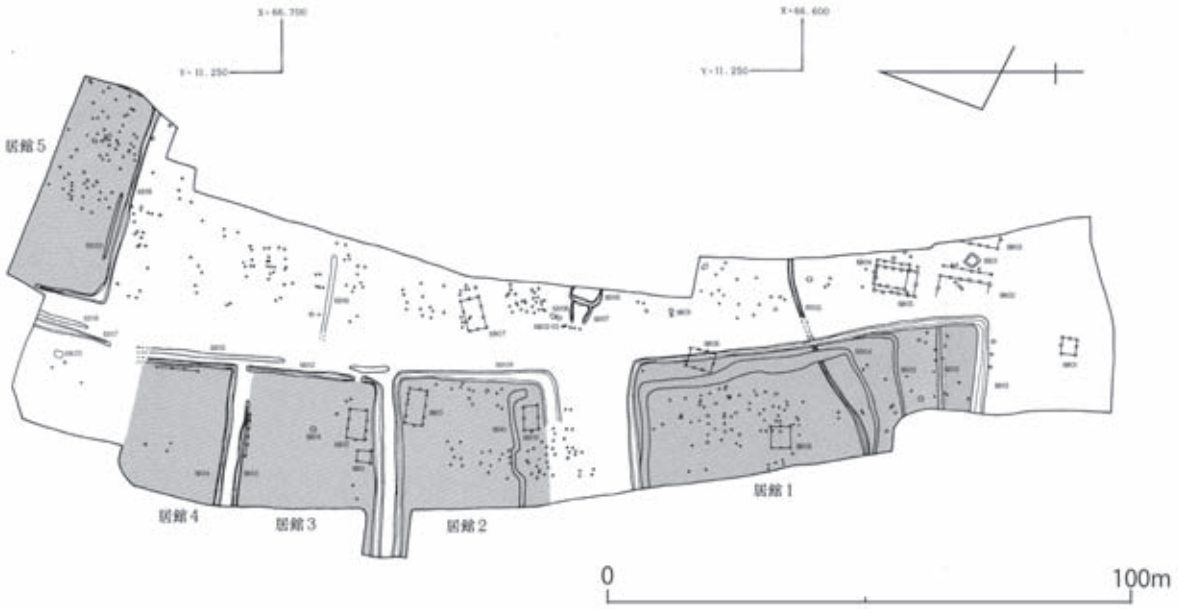
豊前 R15　荒堀車地遺跡（あらほりくるまちいせき）

郡名　上毛郡　　**図幅名**　椎田（東）
種別　平地城館　　**所在**　豊前市荒堀

【立地】鈴子川と城根川に挟まれた台地の東側、標高 27m に立地する。

【概要】圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、東西約 100m 弱、南北約 200m の範囲を調査したところ、南北に軸線を持ち、その西側に一辺約 30 ～ 50m の溝で囲まれた方形区画が少なくとも 4 つ確認され、区画の内外からは、多数のピットと共に掘立柱建物群が検出され、屋敷地群であったとみられる。区画と区画の間は数mの間隔があり、通路として利用された可能性がある。時期については、出土遺物が出ていないのか、報告書には遺物に関する記載が一切なく詳細は不明ではあるが、中世のどこかの段階のものであると考えられる。周辺には荒堀城や安祥寺城など、いくつかの中世城館が想定されており、それらとの関連が窺われる。

【文献】**33,120**



第 337 図　荒堀車地遺跡平面図（文献 120）

豊前 R16　大村天神林遺跡（おおむらてんじんばやしいせき）

郡名　上毛郡　　**図幅名**　椎田（東）
種別　平地城館　　**所在**　豊前市大村

【立地】鈴子川の北東岸、標高 27m の低台地上に立地する。

【概要】現在の大村小学校の西側に位置するが、小学校の北側には中世城館の大村城跡が想定されており、また、南側には当遺跡と同じく城館関連遺構が検出された大村石畑遺跡が立地する。

圃場整備事業に伴い発掘調査が行われているが、調査区は大きく 2 つに分かれる。

＜Ⅰ区＞ Ⅰ区は、大村城跡の想定地の西側に隣接した場所で、東西約 120m、南北約 150m の範囲が調査対象地区で、調査区のほぼ全面から、密集する多数のピットや現状の地割に並行する方向に走る直線

第 338 図　大村天神林遺跡・石畑遺跡位置図（文献 125）

の溝が検出されている。区画内からは、溝の方向に並行する軸の掘立柱建物や、井戸、焼土坑の他、蔵の基礎とも考えられる石敷きの基礎なども検出され、屋敷地であることが判明している。

溝については、明確な区画は不明瞭ではあるが、二重に囲んだ9・10号溝は、西側には土橋とも考えられる途切れた部分や、矩形に折れる箇所などもあり、方形区画を指向していたと考えられる。出土遺物は、金箔土師器や銅製銚子、完形の褐釉茶入などもあり、武家居館としての性格が窺われる。

第339図　大村天神林遺跡Ⅰ区平面図（文献125）

第340図　大村天神林遺跡Ⅱ区平面図（文献125）

＜Ⅱ区＞Ⅱ区は、Ⅰ区の南側に、東西約60m、南北約150mの範囲を調査区とし、こちらの調査区においても現状の地割に並行する形で、直線溝がいくつも直交する状態で検出されている。こちらはあまりピットが密集する箇所は多くないが、直線溝は方形区画を形成しており、東西約40m、南北約60mを一つの単位としているようである。区画内部からは掘立柱建物も検出されている。出土遺物から15～16世紀の年代が考えられるほか、各調査区では鉄滓や取瓶なども出土しており、鍛冶や鋳造活動も行われたようである。

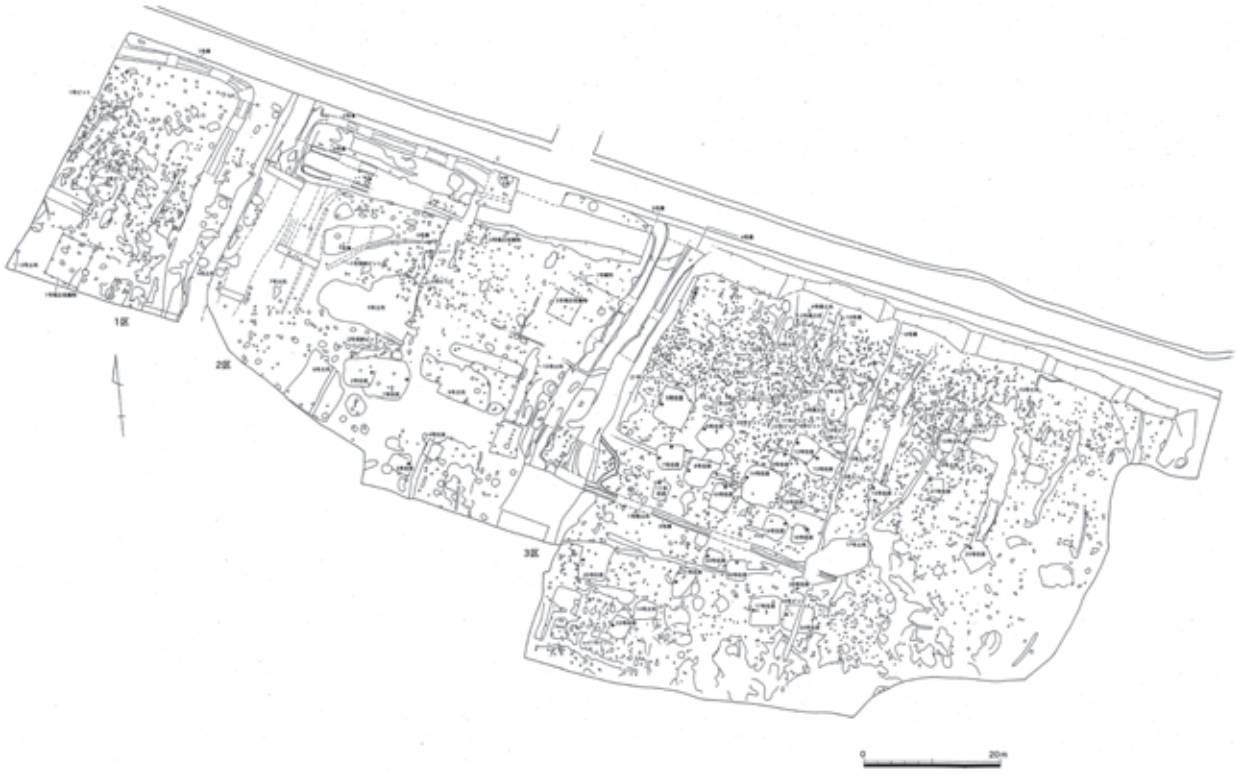
【文献】125

豊前 R18	大村石畑遺跡（おおむらいしはたいせき）	郡名　築城郡	図幅名　椎田（東）
		種別　平地城館	所在　豊前市大村

【立地】大村天神林遺跡の東隣に位置する。大村城跡の想定地の南に当たる。

【概要】圃場整備に伴い発掘調査が行われ、東西約 150m、南北約 80m の範囲が調査対象となり、調査により、現在の地割に沿った形で直線溝が検出された。溝は方形に巡り、方形区画を少なくとも３区画造り出している。方形区画の内部からは、多数のピットと共に掘立柱建物群や土坑群が見つかっており、屋敷地である。隣接する大村天神林遺跡Ⅱ区と、溝の軸線が並行しており、一連の屋敷地である可能性が高い。出土遺物から 14 ～ 15 世紀が中心になるが、４号溝からは 17 世紀代の遺物も出土しており、最終埋没は近世まで至る可能性も考えられる。

【文献】124



第 341 図　大村石畑遺跡平面図（文献 124）

豊前 R18	吉木常末遺跡（よしきつねまついせき）	郡名　上毛郡	図幅名　中津（西）
		種別　平地城館	所在　豊前市吉木

【立地】岩岳川の西側、標高 10m の低台地上に位置する。

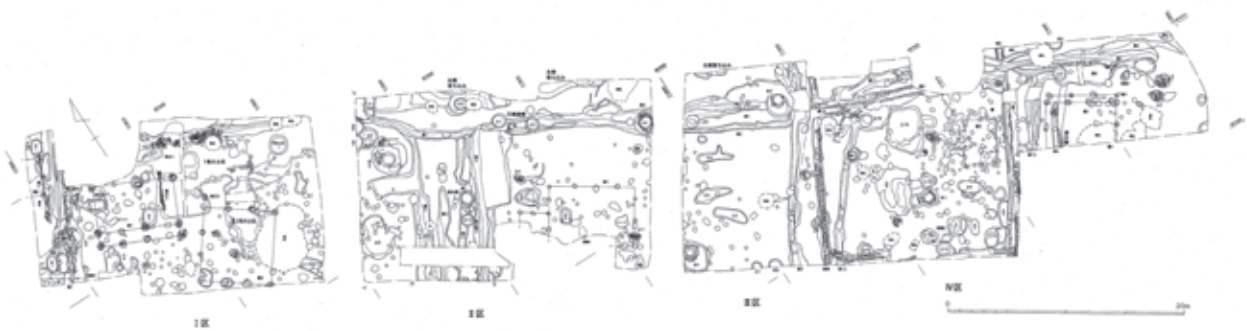
【概要】施設建設に先立ち発掘調査が行われ、東西約 50m、南北約 30m の範囲が対象となった。調査区の東半部では、一辺約 20m の溝で囲まれた方形区画が検出された。現状では、L 字形の溝が向かい合う形となっているが、区画の西側を中心に柵の柱穴が巡る。区画内には掘立柱建物と共に

大型の土坑とピット多数が検出された。出土遺物は、未報告であるため詳細は不明であるが、青磁碗、瓦器椀が出土しており、およそ 12 ～ 13 世紀の屋敷地であるとみられる。

【文献】33

第 342 図　吉木常松遺跡平面図（文献 33）

豊前 R19	市丸城居屋敷遺跡（いちまるじょういやしきいせき）	郡名　上毛郡	図幅名　中津（西）
		種別　平地城館	所在　豊前市市丸



第 343 図　市丸城居屋敷遺跡平面図（文献 121）

【立地】岩岳川と佐井川に挟まれた標高 10m の沖積平野上に位置する。中世城館の市丸城跡の想定地内に位置する。

【概要】県道の建設に伴い発掘調査が行われている。東西約 100m、南北約 20m の範囲の調査を行い、Ⅰ区～Ⅳ区の調査区全てにおいて屋敷地が検出されている。区画溝、井戸、建物跡など多数の遺構を検出したが、その大半は近世～近代が中心であり、中世にさかのぼる遺構（Ⅰ期）はⅠ区を中心とした溝や、Ⅱ区の井戸、Ⅳ区の建物 1 棟が想定される程度で、時期も 16 世紀頃である。中世末に屋敷地が成立し、近世期を通じて機能したことが想定される。

【文献】121

豊前 R20	安雲山田遺跡（あくもやまだいせき）	郡名　上毛郡	図幅名　土佐井（西）
		種別　平地城館	所在　築上郡上毛町安雲

【立地】山国川支流の黒川流域の標高 40m の丘陵突端部に位置する。

第 344 図　安雲山田遺跡西側に残る土塁

【概要】東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行われ、安雲山田遺跡では、第３地点において関連遺構が検出された。第３地点は調査対象地区の最も東にあたり、東西約 50m、南北約 60m が対象となった。調査区全面において密集するピット群に混じり、土坑の他、掘立柱建物群も検出され、さらに、調査区中央に東西に横切る直線溝を検出した。溝は幅約３m、深さ約 0.7m で、南側に低土塁を伴っていた。溝からの出土遺物は僅かに中世の土師器片や瓦器片を含むが、遺物の主体は大半が 18 世紀代であり、最終埋没は近世まで下ることがわかる。

そして、この溝と土塁は調査区外にまで延びており、発掘調査の成果と現状を併せてみると（第 346 図）、東西約 60m 以上、南北約 40m の土塁・堀に囲まれた方形区画が想定される。調査区外の現状の土塁の高さは区画外側で約 1.5m、内側からでは約 0.5m である。発掘調査では、方形区画の内外から多数のピット群が検出されているため、方形区画は固より、その外側にも屋敷地は広がっ

第 345 図　安雲山田遺跡（３地点）平面図（文献 127）

ていたと想定される。溝の埋没状況から考えて、年代は上限が 13 世紀、下限は 18 世紀頃までとなろう。

なお、３地点の北側に隣接する１地点の調査では、僅かにピットは検出されたものの、当該期の遺構はほとんど確認されておらず、北側へ大きく広がる可能性は低いとみられる。

【文献】127

第 346 図　安雲山田遺跡及び周辺城館関連遺構配置図（事務局作成）

豊前 R21	下尻高遺跡（しもしだかいせき）・ハカノ本遺跡（もといせき）	郡名	上毛郡	図幅名	土佐井（西）
		種別	平地城館	所在	築上郡上毛町尻高・緒方

【立地】山国川支流の黒川流域の標高約 40m に立地する。安雲山田遺跡の西側約 300m の位置に当たる。

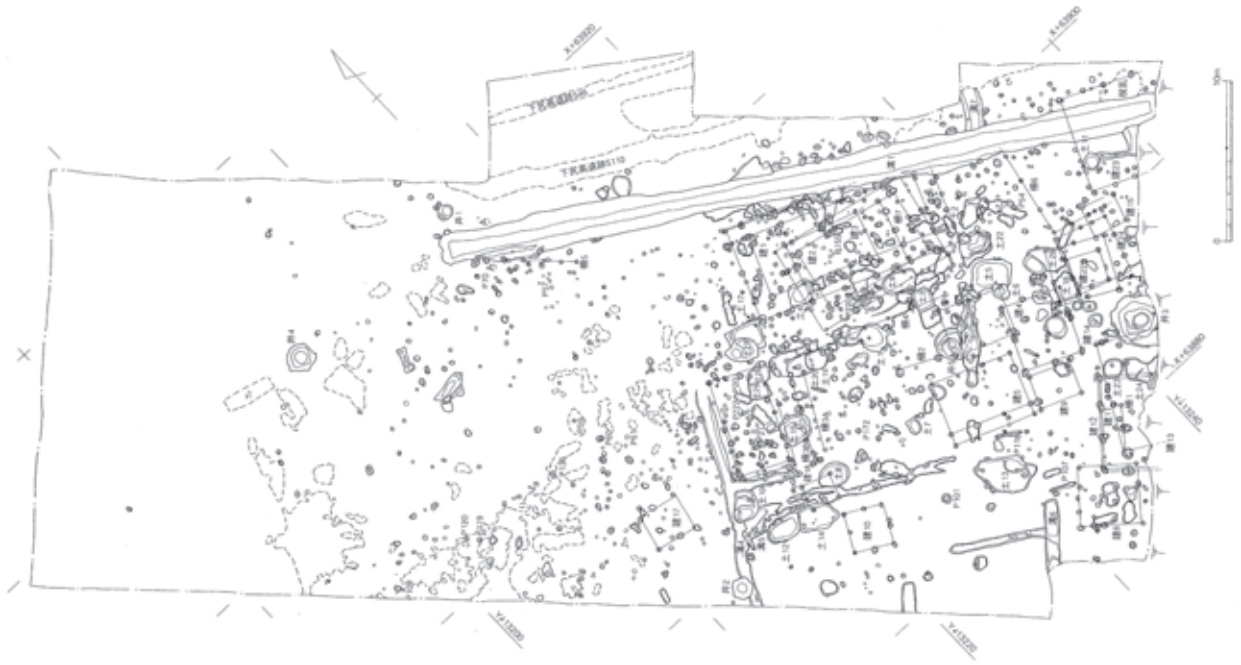
【概要】下尻高遺跡は圃場整備事業に伴い新吉富村教育委員会により発掘調査が行われており、ハカノ本遺跡は東九州自動車道建設に伴い発掘調査（第 2 次調査）が行われている。下尻高遺跡は現在報告書作成のための整理中であり、詳細な状況は明らかにされていないが、ハカノ本遺跡は報告書が刊行されており、その成果に基づいて記載する。

ハカノ本遺跡第 2 次調査では、1 区において中世の城館関連の遺構が検出されている。1 区は約 80m ×約 30m の範囲の調査が行われており、略東西方向に走る直線溝 1 条と、その南側で堀立柱建物群が密集して検出されている。直線溝は幅約 2.2m、深さ 1.1m で、埋土からは土器、陶磁器類の他、絵馬や漆器椀を初めとする大量の木製品や土錘なども出土している。

この直線溝は、北側に隣接する下尻高遺跡でも検出されており、併せてみてみると、東側が開口するコ字状に区画しているのがわかる（第 348 図）。区画は、南北 80m、東西 60m ほどの規模となり、内部から多くの掘立柱建物が検出されており、屋敷地であることがわかる。年代は、区画内の大半が、未報告であるため断定は難しいが、ハカノ本遺跡で検出された溝の遺物から、最終埋没は 14 世紀にまで下るものの、12 ～ 13 世紀頃が時期的な中心となる可能性が考えられる。

なお、隣接するハカノ本遺跡第 2 次調査 2 区では、8 ～ 10 世紀頃に位置づけられる神社建築も検出されており、当遺跡周辺の歴史を考える上で参考となろう。

【文献】126



第 347 図　ハカノ本遺跡 2 次調査 1 区平面図（文献 126）

第 348 図　下尻高遺跡・ハカノ本遺跡２次調査１区で検出された区画溝（文献 126）
（写真提供：上毛町教育委員会）

豊前 R22	今蔵遺跡（いまくらいせき）	郡名　上毛郡	図幅名　土佐井（西）
		種別　平地城館	所在　築上郡上毛町東下

【立地】友枝川中流東岸に面した標高約 50m の低段丘上に位置する。

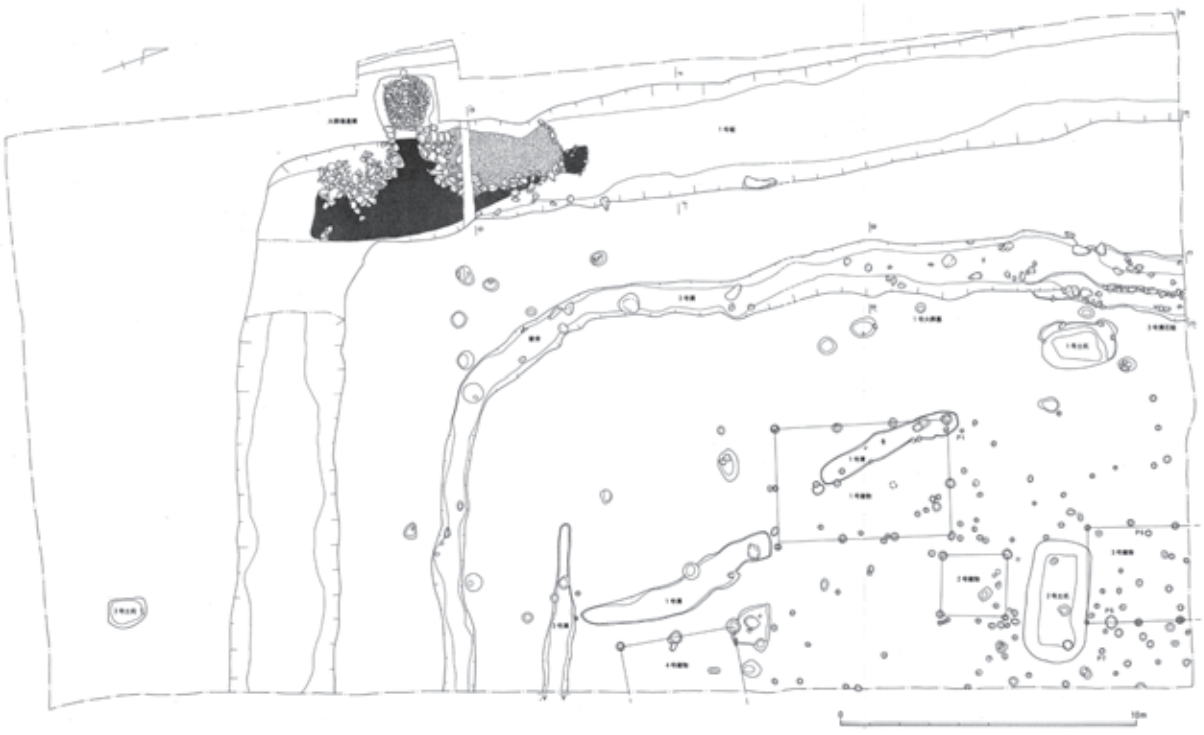
【概要】庁舎建設に伴う発掘調査が行われており、１次調査のⅠ区において城館関連遺構が検出されている。Ⅰ区は、東西約 20m、南北約 40m の範囲の調査が行われており、東西約 20m 以上、南北約 30m 以上の矩形に折れる溝（１号堀）が検出されており、その内側には、堀立柱建物４棟と１号堀に沿った形で並行する溝（３号溝）が見つかっている。１号堀は幅約４m、深さ約 1.25m で、隅部付近には、後に付け足されたのであろう石組みの火葬場遺構も見られる。一方、３号溝は１号

堀の内側、約 4 m の間隔を置いて並行しており、幅約 2.1m、深さ約 0.5m であり、一部には石組み遺構も確認され、牛の脚部の骨なども出土しており、祭祀に伴うものと考えられている。

1 号堀と 3 号溝は並行に走ることから共存したことが考えられ、さらに堀と溝との間は土塁などがあったものが削平された可能性も十分考えられる。1 号堀の出土遺物は 12 世紀から 19 世紀以降のもので、最終埋没は近世末期まで下るものの、3 号溝は 17 世紀後半から 18 世紀前半の遺物が出土しており、近世前期が下限としておさえられるかもしれない。また、上限は掘立柱建物の柱穴出土の遺物から 13 世紀頃が想定される。

なお、『築上郡史』（文献 30）には「林崎城跡」として「大字東下、友枝小学校のある台地字を林崎と云い、堀の跡など残つて居る」とあり、この遺跡のことを指している可能性も考えられる。

【文献】123



第 349 図　今蔵遺跡第 1 次調査 I 区平面図（文献 123）

Ⅵ　城館関連文献史料一覧

・本章では、本書報告対象の城館が登場する文献史料を集成した一覧表を示す。
・掲載にあたっては、城館別に採集した関係史料を「一次史料」と「参考史料」に類別し、編年配列した上で、各「一次史料」には枝番号を付した。ここでの「一次史料」とは、その城館が存続した同時代成立の史料である古文書・記録・日記類であり、その写しも含む。「参考史料」は、城館に関する記述内容の時期よりも後世の成立となる記録や編纂物である。
・本来ならば、原文書からの翻刻を掲載すべきだが、作業期間・紙幅等の事情により、その多くを良質な刊本から、一部を原本・謄写本等から収集し、内容については要旨、または当該城館に係る記述からの情報を示した。
・一覧表の作成にあたり、伊津見孝明氏・山本隆一朗氏・遠藤未央氏・野下俊樹氏の協力を得た。

＜中世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
8	猿喰城	(1)	貞治3年3月日	下総親尚軍忠状	門司文書17／『門司文書』P27、門司文書17／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P390	(下総左近将監親尚)		下総親尚、貞治2年11月に南朝方の門司親頼らが籠もる猿喰城を攻める。
		(2)	貞治4年4月日	下総親尚軍忠状	門司文書／『北九州市史　古代中世』P1186、門司文書18／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P391	(門司下総左近将監親尚)		門司親尚、「大内介」(大内弘世)の御方として渡海するにより、赤坂に陣を取り、共に猿喰城を攻め数十人を討ち取ったことを伝える。
9	柳城	(1)	貞治3年2月17日	足利義詮書状写	阿知須町公民館蔵文書(小野家文書)12／『山口県史 史料編中世2』P1018、萩藩閥閲録71小野貞右衛門24／『閥閲録2』P649	(足利義詮)	小野弾正左衛門尉(資政)殿	昨年の柳城での合戦の際に疵を負った事を賞す。
15	足立山城(妙見城)	参考	慶長5年		黒田家譜13／『新訂黒田家譜1』P443			黒田如水、西軍の毛利勝信の居城である「小倉の城」を包囲し、これを降伏させる。
		(1)	延文元年10月日	下総親胤目安	門司文書11／『門司文書』P21、門司文書11／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P386	(下総親胤)		敵が「足立嶽」に陣を取ったので、今月10日に(親胤が)同族の親資の下に属して交戦す。
		(2)	延文元年10月日	下総蓮親軍忠状	門司文書12／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P387	(下総修理亮親胤法印<法名蓮親>)		下総蓮親、敵の「足立嶽」に陣取るにより、今月13日親類若党等を差し遣わし、敵を追い払うことを申す。
		(3)	(天文元年)3月8日	大内氏奉行人奉書	長岡家文書6／『山口県史 史料編中世4』P380	(沼田)敦定	長岡大炊允(実勝)殿	長岡氏の遠田氏に従い、「妙見尾」に在城したことを記す。
		(4)	(永禄11年)8月23日		萩藩閥閲録37-1中川与右衛門7／『閥閲録2』P16	(毛利)輝元、(毛利)元就	赤穴右京亮殿	「安達山御山」での在陣の辛労を労う。
16	引地山城	(1)	天文7年10月6日	大内氏奉行人連署書状	到津家譜／『北九州市史』P1230	(貫)武助、(杉)興重	前大宮司到津殿	「御領地規矩郡到津庄御城」とある。
22 23	大三岳城 小三岳城	(1)	(年不詳)		大友家文書録2-1499／『大分県史料32』第2部補遺4P325			永禄11年10月に「三嶽城」に拠る長野壱岐守を毛利方が攻める。
		(2)	(年不詳)		大友家文書録2-1501／『大分県史料32』第2部補遺4P326			「長野ヶ三嶽城」を毛利軍が攻めて落城させる。
		(3)	(年不詳)9月8日	田原親賢書状	長野文書3／『大分県史料10』第2部P86	(田原)親賢	長野肥前守殿	長野右馬助、「三岳」において戦死したのを賞す。
		(4)	(年不詳)9月8日	吉川元春・小早川隆景連署書状	堀立家証文写72／『内海文化研究紀要』16号P104			「小三岳」より調略を以て引き取った者達については、間違いなく助ける事。
		(5)	(年不詳)10月23日	田原親賢知行宛状	長野文書4／『大分県史料10』第2部P87	(田原)親賢	長野太郎殿	長野太郎、兄右馬助が「三岳」で戦死した事に対する恩賞として田地5町を宛がう。
		(6)	(永禄11年)9月	某書状案	到津文書431／『大分県史料24』第1部P82			毛利軍、8月16日から9月5日にかけて「長野城」「宮尾」「三岳」「等覚寺」を攻めてこれを落とす。
		(7)	(永禄11年)9月12日	大友宗麟書状写	大友家文書録／『行橋市史資料編　中世』P230	(大友)宗麟	平井兵部少輔殿	「三岳」「等覚寺」両城を守るためにできるだけ早く出陣を求める。
		(8)	(永禄11年)9月15日		萩藩閥閲録37-1中川与右衛門14／『閥閲録2』P17	(毛利)元就	赤穴右京亮殿	「三岳」「等覚寺」両城の落城を祝い、その辛労を労う。
		(9)	(永禄11年)9月21日	毛利元就書状	堀立家証文写7／『内海文化文化研究紀要』16号P94		児玉三郎右衛門尉(元良)殿	「三岳仕寄」用の板100枚を堀立が準備したとの事を元春・隆景から報告があり、これを賞す。
		(10)	永禄11年9月28日	毛利元就書状写	萩藩閥閲録71佐波庄三郎1／『閥閲録2』P633、福原家文書139／『福原家文書 上巻』P395		佐波常陸介(隆秀)殿	今回の「三岳」攻めで長野弘勝を討ちとった事を賞す。
		(11)	永禄11年10月20日		萩藩閥閲録71佐波庄三郎2／『閥閲録2』P634、福原家文書140／『福原家文書 上巻』P395	(毛利)輝元	佐波常陸介殿	
		(12)	(永禄11年)12月16日		萩藩閥閲録161富嶋裁判後藤屋善兵衛5／『閥閲録4』P309		国司右京亮(元武)殿、粟屋内蔵丞(元種)殿	「鉄砲放」として派遣した後藤長左衛門が「三嶽」において敵2名を討ち取った事を賞す。
		(13)	(永禄12年)3月14日		萩藩閥閲録138相嶋孫左衛門9／『閥閲録4』P13		国右(国司元武)殿、栗蔵(粟屋元種)殿	今回の「三岳」攻めで小者の孫左衛門の働きを賞し、安芸国吉和荒所内五貫目を与える。
		(14)	(元亀元年)4月28日	桂廣繁書状	山口県文書館所蔵文書(贈村山家返章)25／『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』P1246	桂少輔五郎廣繁	村山殿	桂廣繁、村山殿の文書を拝見し、尊意のように、「三岳」において拝顔。
		(15)	元亀元年9月12日		萩藩閥閲録32赤川勘解由21／『閥閲録1』P771	(小早川)隆景	平佐藤右衛門尉(就之)殿、粟や内蔵丞(元種)殿	赤川又五郎の「三岳」における働きを賞す。
		(16)	天正6年6月1日	宗像第一宮御宝殿置札	『宗像神社史上巻』P425			「三岳要害」を毛利軍が攻めて9月4日に落城させる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
22 23	大三岳城 小三岳城	(17)	(年不詳)9月8日	吉川元春・小早川隆景連署書状	堀立家証文写72／『内海文化研究紀要』16号P104	(吉川)元春・(小早川)隆景	堀立壱岐守殿	「小三岳」より調略を以て引き取った者達については間違いがないように助ける事。
32	宮山城	(1)	永禄11年5月3日	某書状案	到津文書431／『大分県史料24』第1部P82			「三丘」と「等覚寺」の間にある「宮尾城」が毛利軍によって落とされる。
		(2)	(永禄11年ヵ)		毛利家文書742／『大日本古文書家分け8-2』P495			「宮山」に仁保隆慰を入れて用立てるように伝える。
		(3)	永禄11年6月22日	内藤隆春安堵状	勝間田家文書8／『山口県史 史料編中世2』P332	(内藤)隆春	勝間田長千代(元信)殿	内藤隆春、勝間田長千代父春保の、「豊前表宮山麓」における活躍とその討死により、彼所帯を勝間田長千代に安堵す。
		(4)	(永禄11年)6月28日	田原親宏感状	萱嶋文書43／『大分県史料10』第2部P261	(田原)親宏	萱嶋美濃守殿	「西大野宮山」に立て籠もる毛利勢との合戦での働き及び「杉」「西郷」両城における防戦を賞す。
		(5)	(永禄11年)7月9日	吉川元春・小早川隆景連署書状	勝間田家文書9／『山口県史 史料編中世2』P332	小早川隆景、吉川元春	真如院	今度の「豊前宮山表」における豊後衆との合戦における活躍を賞し、委細は別に連絡することを伝える。
		(6)	(年不詳)5月24日	某感状	松原文書6／『大分県史料10』第2部P348		松原内蔵丞殿	「宮山」における軍忠を賞す。
35	赤松城	参考	応永4年		『太宰管内志』豊前之一(中)P17			菊池貞頼・少弐忠資等が反したので、大内義弘が下向して討つ。馬岳・赤松・牛(手ヵ)切の数城、戦わずして大内に降る。
37	堀越城	(1)	応安5年9月		萩藩閥閲録121-1周布吉兵衛32／『閥閲録3』P549	(今川了俊)		8月22日に規矩郡「鷲尾城」を攻め、翌日夜に敵を悉く追い払った事を賞す。
		(2)	文明10年9月15日	大内政弘感状	「譜録」や77山県友次13／有川宜博「山口県文書館所蔵「譜録」に見える九州関係新出文書の紹介」『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告B類歴史』9号P31(52)	(大内)政弘	市木弥三郎殿	13日に「鷲岳城詰口」を攻めた際の働きを賞す。
		(3)	(永禄13年ヵ)1月25日	大友宗麟書状写	片山文書／『大分県先哲叢書　大友宗麟4-1553』P302	(大友)宗麟	田原近江守(親賢)殿、田原常陸介(親宏)殿	高橋鑑種を入れるため「鷲岳城」の築城を急ぐ事。
		(4)	(年不詳)6月8日	吉川元春書状	堀立家証文写73／『内海文化研究紀要』16号P104	(吉川)元春	堀立壱岐守殿	高橋家の足弱(女子供)は「鷲岳」に入ったのか、もしかしたら鑑種自身そこにいるのではないかと推測す。
38	下長野城	(1)	永禄8年6月22日	大友宗麟合戦手負注文一見状	入江文書22／『大分県史料10』第2部P418	(大友)宗麟		「長野筑後守里城」における田原親宏被官の手負注文を一見する。
		(2)			大友家文書録2-1486／『大分県史料32』第2部補遺4P316			「長野筑後守里城」における田原親宏被官の負傷者を記した書状を確認す。
39	長野城	(1)	永禄8年6月28日	佐田隆居感状	佐田文書上2-2／『大分県史料8』第2部P104	(佐田)隆居		「長野筑後守要害切岸」での軍忠を賞す。
		(2)	永禄8年8月13日	大友宗麟合戦手負注文一見状	大友家文書録2-1488／『大分県史料32』第2部補遺4P317	(大友宗麟)		「長野筑後守要害」を攻めた際に戦功を立てた右田駿河守家中で郷内蔵丞が負傷した事を記した着倒状を見る。
		(3)	(永禄8年ヵ)8月20日	大友宗麟感状	長野文書2／『大分県史料10』第2部P85	(大友)宗麟	長野右□(馬)助殿	「彼要害(長野筑後守要害)」を攻めた際の長野右馬助の戦功を賞す。
		(4)	(永禄11年)9月	某書状案	到津文書431／『大分県史料24』第1部P82			毛利軍、8月16日から9月5日にかけて「長野城」「宮尾」「三岳」「等覚寺」を攻めてこれを落とす。
47	手切城	参考	応永4年		『太宰管内志』豊前之一(中)P17			菊池貞頼・少弐忠資等が反したので、大内義弘が下向して討つ。馬岳・赤松・牛(手ヵ)切の数城、戦わずして大内に降る。
50	香春岳城	(1)	正平22年8月18日	沙弥耀然請文案	山城善法寺文書／『南北朝遺文九州編4』P338			「香春之城落居」によって征西府の「御沙汰」が再開された。
		(2)	正平22年8月28日	征西将軍宮令旨	九州大学文学部所蔵来島家文書／『南北朝遺文九州編4』P338(1513)	左少将(胤房)	大嶋刑部丞殿	「香春岳」における軍忠を賞す。
		(3)	正平23年10月日	有馬澄世軍忠状	肥前有馬文書／『南北朝遺文九州編4』P364	有馬澄世		香春城攻撃に向けた進軍の宿直警固・合戦・落城に到るまでの軍忠を上申。
		(4)	貞治6年10月7日	足利義詮御判御教書	肥後阿蘇家文書／『南北朝遺文　九州編4』P342(1517)	(足利義詮)	阿蘇大宮司(惟村)殿	「香春城」での不慮の事態について報告した書状を確認した。
		(5)	(応永12年)11月17日	渋川満頼書状	詫磨文書／『行橋市史資料編　中世』P122	(渋川)満頼	詫磨(満親)殿	去8日に「とりこへの城」が、続けて「かわるの一二のたけ」「むまのたけ」が落城する。
		参考			後太平記／『小倉市史』P71			「豊前国香春岳の城」が没落し、宇佐大宮司敗北す。
		(6)	(永禄4年)11月2日	大友義鎮感状	大友家文書録2-1438／『大分県史料32』第2部補遺4P293	(大友)義鎮	臼杵掃部助殿	今度「香春岳」を程なく大友家が手に入れる。
		(7)	(永禄5年ヵ)3月19日		大友家文書録2-1433／『大分県史料32』第2部補遺4P291		田原常陸介(鑑綱)殿	「香春岳城督」を賞し、150町歩を預け城料として450町歩を付け遣わす。
		(8)	(永禄5年)7月16日	毛利元就・同隆元連署条書	山田家文書／『福岡市史　資料編　中世2』P942、『行橋市史資料編　中世』P204、寄組山田家文書137／『山口県史 史料編中世3』P626	(毛利隆元)、(毛利元就)	市式(市川経好)、財新(財満忠久)、坂新(元祐)	高橋鑑種、「門司」まで攻め寄せ、杉連緒は「香春岳」を所有し、「松山」以下を手に入れる。また杉連緒、「香春岳」で50日も60日も敵を食い止めて持ちこたえる。
		(9)	(永禄5年ヵ)9月17日	臼杵鑑速書状	田尻文書21／『大分県史料13』第2部P241	(臼杵)鑑速	田尻三河守殿	「香春岳」が落城した際には足立岳の麓に陣を構えていたが、今回は急ぎ門司へ移動して陣を構えるように。そうすれば「彼城(門司城)」は落城するであろう。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
50	香春岳城	(10)	(永禄6年)1月23日		萩藩閥閲録138兼重勘左衛門9/『閥閲録4』P6	(立雪斎)恵心以下8名	桂左衛門大夫(元忠)殿	「香春岳」破却は杉連緒の荷物の搬出もある事から1月16日から23日へ延期。また、秋月氏や長野氏といった近郷の国衆勢が「門司要害」下まで攻めてくるのは時間の問題であろうから、この事を含め聖護院門跡へ報告する。
		(11)	(永禄6年)3月18日	小早川隆景書状写	乃美文書正写/『行橋市史資料編　中世』P214、乃美文書正写26/『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』P428	(小早川)隆景	兵部丞(乃美宗勝)殿	香春岳は杉修理進の意に任せるのではなく、杉に直接言い渡すことが重要であるという旨を報ずる。
		(12)	(永禄6年3月)		萩藩閥閲録52兼重五郎兵衛7/『閥閲録2』P311			隆元が「下口之儀」を放棄して戻るのを聞き次第、「香春」へ進軍する事。
		(13)	(永禄6年ヵ)6月12日		大分県史料　大友家文書録1445/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P16(1988)	(大友)宗麟	(田村)宗切老	「松山」「花尾」には(陣中見舞用の進物ヵ)急いで送り、「香春岳」には直接使者に持たせて送る事。
		(14)	(永禄6年)7月18日	毛利元就同隆元連署状	毛利家文書638/『大日本古文書家分け8-2』P351	(毛利)元就、(毛利)隆元		「門司之城」「香春嶽」両城及び規矩郡と田川郡の事はしっかり調べるというので報告するには及ばない。
		(15)	(永禄6年)潤12月24日	小早川隆景書状	長府毛利家文書19/『下関市史　資料編Ⅳ』P63、長府毛利家文書19/『山口県史 史料編中世4』P309、長府毛利文書11/『広島県史 古代中世資	(小早川)隆景	策雲	「香春岳」は聖護院道増の指示によって、隆元の指示に従い破却することが決定された。
		(16)	(永禄7年ヵ)1月15日		萩藩閥閲録33粟屋勘兵衛20/『閥閲録1』P786	(毛利)元就	粟屋木工允殿	「香春岳」から下城するようにとの事。
		(17)	(永禄7年ヵ)2月6日	宗像氏貞書状写	吉川家中并寺社文書/『宗像市史　史料編中世Ⅱ』P514	(宗像)氏貞	有田加賀守(経道)殿	香春岳を破却する旨を通達する。香春岳破却は「九州御弓箭根元被差捨」ことになるという認識を示す。一方で、「近国無双之山」であるから香春岳を残して大友勢に手出しできないようにすべきという意見をのべる。
		(18)	(永禄7年ヵ)12月15日		萩藩閥閲録161富嶋裁判石津宇兵衛12/『閥閲録4』P313	(市川)経好、(赤川)元保、(国清寺)恵心	石津平次郎	入江加賀守に従って「松山」「香春岳」の城番として在城していたところ、今度は「宝満岳」に城番として入江と共に移る事。
		(19)	(永禄11年)5月29日	毛利元就同輝元連署書状	堀立家証文写42/『内海文化研究紀要』16号P99	(毛利)輝元・(毛利)元就	児玉周防守(就方)殿	堀立壱岐守が「香春岳」に在城している事は重要な事であるが、昨日「松山」から到来した書状によると、堀立は「香春岳」の麓にいるとの事である。
		(20)	(永禄11年)6月9日		萩藩閥閲録125内藤新右衛門23/『閥閲録3』P687	(毛利)元就	内藤越後守殿	蔵に納める俵者をありったけ「香春岳」に運ぶ事。
		(21)	(永禄12年)8月29日	大友宗麟手負注文一見状	大友家文書録2-1551/『大分県史料32』第2部補遺4			「香春岳」麓の干飯村における田原親宏及び一族郎党の軍忠に一見を加える。
		(22)	(永禄12年)10月20日	大友宗麟書状	合志文書1/『熊本県史料　中世編1』P414、『福岡市史　資料編　中世2』P377	(大友)宗麟	長野三河守殿	「香春岳」「松山」を堅く守備する事が重要である。
		(23)	(永禄12年)10月28日	吉弘鑑理書状	無尽集所文書/『福岡市史　資料編　中世2』P845	吉弘左近大夫鑑理	立花勤番各御中御陣所	「松山」「香春岳」落城。
		(24)	(年不詳)3月15日	秋月種実書状	萩原文書17/『大分県史料8』第2部P292	(秋月)種実	萩原山城入道殿	「香春・馬岳」に申し談じ、少人数をその表へ差し出す事。
		(25)	(年不詳)7月21日	大友宗麟(義鎮)預ヶ状	田隅タネ資料/『福岡市史　資料編　中世1』P870	(大友)宗麟	宝珠山左近将監(隆倍)殿	「香春岳」調略の功を賞し、田川郡弁城60町を預けるので知行する事。
		(26)	(年不詳)9月20日	大友宗麟書状写	河野文書/『大分県先哲叢書　大友宗麟5』1679P51、山口サビエル記念聖堂蔵文書3/『山口県史 史料編中世4』P885		(河内加賀守殿)	「香春岳」での戦死を忠義であると評し、恩賞として大神庄の内で2町を預ける。
		(27)	(年不詳)12月18日	吉川元春・小早川隆景連署書状	堀立家証文写67/『内海文化研究紀要』16号P103	(小早川)隆景・(吉川)元春	堀立壱岐守殿	香春岳番衆を催すことについて、番衆が差し籠ったならば、帰るように指示する。
		(28)	(年不詳)1月16日		堀立家証文写68/『内海文化研究紀要』16号P103	(吉川)元春・(小早川)隆景		急ぎ「香春岳」に入城し、人数を派遣するので普請を行うよう申し付ける。
		(29)	(年不詳)	毛利元就自筆書状	毛利家文書432/『大日本古文書家分け8-2』P145	(毛利)元就	(毛利)隆元	「かん田松山」の普請については先に「香春」から散りかかって然るべきとの由、財満新右衛門より報告を受ける。
		(30)	(年不詳)	毛利元就自筆書状	毛利家文書433/『大日本古文書家分け8-2』P146			「香春岳」「松山」の城衆は城の構築をしなければならないが、その様な動きはしておらず、何とも了簡のない事である。
		(31)	(年不詳)壬5月17日	毛利輝元書状	西郷文書17/『豊前市史　文書資料』P100	(毛利)輝元	西郷遠江守	香春岳衆に加わるように命ずる。
		(32)	天正3年4月3日	堀立直正申状	堀立家証文写50/『内海文化研究紀要』16号P100	堀立壱岐守直正	国司右京亮(元武)殿、児玉三郎右衛門尉(元良)殿	「香春岳」に3年間在番し、小田原より谷口への「計略之者」両人を召し捕らえて赤間関へ引き上げる。
		(33)	天正7年9月28日	長野助守覚書	神代長野文書5/『北九州市立歴史博物館研究紀要2』P68	(長野)助守		「香春両岳」慮外の事。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
50	香春岳城	(34)	天正8年3月8日	宗像氏貞感状	竹井文書／『宗像市史　史料編中世Ⅱ』	(宗像)氏貞	竹井八郎(貞就)殿	同年2月21日に香春岳で「高橋衆」と合戦し、「親宮内丞」が討ち取られたことに対する感状。
		(35)	(天正14年)10月19日		萩藩閥閲録158布施利左衛門2／『閥閲録4』P266	(毛利)輝元		「当城」(香春岳城)と「小倉」両城の普請多忙により番匠が過分に必要なので近在の番匠を悉く集める事。
		(36)	(天正14年)12月1日		萩藩閥閲録10-2堅田安房120／『閥閲録1』P199	(豊臣秀吉)	小早川左衛門佐(隆景)殿、安国寺(恵瓊)、黒田勘解由(孝高)殿	「障子岳」を攻めて落城させ、多くの敵兵を討ち取った事尤もであると述べる。その上で「香春岳」を包囲したとの事で寒い中での辛労を労う。
		(37)	(天正14年)12月2日	豊臣秀吉書状写	大友家文書録2113／『大分県史料33』第2部補遺5P34		天徳寺右衛門入道殿	島津攻めのため阿波、淡路、備前、美作の軍勢を「嘉原嶽」に向かわせ、宇喜多秀家に受け取らせて吉川、小早川、黒田へ引き渡すよう申し付けた。
		(38)		豊臣秀吉書状	黒田家文書72／『黒田家文書1』本編P171		吉川駿河守(元春)殿、小早川左衛門佐(隆景)殿、安国寺、吉川治部少輔殿、黒田勘解由(孝高)殿	「かわらだけ」の包囲を宇喜多秀家に交代する事。
		(39)			萩藩閥閲録4毛利伊勢／『閥閲録1』P41、P42		小早川藤四郎(秀包)様	高橋元種、島津方として香春岳城に立て籠もる。
		(40)	(天正14年)12月4日	豊臣秀吉書状	黒田家文書73／『黒田家文書1』本編P175	(豊臣)秀吉	小早川左衛門佐(隆景)殿、黒田勘解由(孝高)殿、安国寺(恵瓊)	「香春岳三丸之内」に吉川治部少輔、吉川蔵人を入れた事を賞す。
		(41)	天正14年12月12日	豊臣秀吉朱印状写	萩藩閥閲録103林平八1／『閥閲録3』P12、林潤介家文書3／『山口県史 史料編中世3』P396	大閤様(豊臣秀吉)御朱印	林土佐守(就長)とのへ	香春岳城攻めで別に軍勢を投入したとの事、黒田孝高より報告があった。
		(42)			萩藩閥閲録91尾越正右衛門18／『閥閲録3』P241		有福(貞茂ヵ)	「香春岳要害」で付城を築城して在陣しているとの事、黒田孝高より報告を受け、その辛労を労う。
		(43)			萩藩閥閲録10-2堅田安房121／『閥閲録1』P200		小早川左衛門佐(隆景)殿	「香春岳要害」攻めで付城を築城し、特に先月20日には水手を取る等の攻撃を賞す。
		(44)			福原家文書217／『福原家文書 上巻』P471		渡辺石見守とのへ	「香春嶽要害」の取詰め、付城を拵え、在陣の由を黒田孝高より言上されたことを伝える。
		(45)			萩藩閥閲録45-2三浦又右衛門146／『閥閲録2』P203		神田宗四郎(元忠)殿	「香春岳要害」で付城を築城して在陣しているとの事、黒田孝高より報告を受け、その辛労を労う。
		(46)			益田家文書／『新修島根県史』P550		益田(藤兼)とのへ	
		(47)	(天正14年)12月13日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門3／『閥閲録2』P466		仁保右衛門大夫との	
		(48)	(天正14年)12月15日		萩藩閥閲録2-4山縣平八5／『閥閲録遺漏』P134、福原家文書218／『福原家文書 上巻』P471	(毛利)輝元	山縣平右衛門(元吉)殿	「香春岳」において渡邊石見守が無二の働きをしたと元春・隆景から報告があった。
		(49)			萩藩閥閲録2-4山縣平八6／『閥閲録遺漏』P134、福原家文書219／『福原家文書 上巻』P471	(豊臣)秀吉	山縣平右衛門(元吉)殿	「香春岳」における働きを黒田勘兵衛より報告があったのでこれを賞す。
		(50)	(天正14年)12月20日		萩藩閥閲録2-4山縣平八7／『閥閲録遺漏』P134		毛利右馬頭(輝元)殿、吉川治部少輔(元長)殿、小早川左衛門佐(隆景)殿	渡邊石見守、「香春嶽」において陣を構築し、数百人でこれを攻め落とす。
		(51)	(天正14年)12月22日		黒田家文書74／『黒田家文書1』本編P177	(豊臣秀吉)	小早川左衛門佐(隆景)殿、安国寺(恵瓊)、黒田勘解由(孝高)殿	「香春岳」の水手を落としてから程なくして城が落城。森吉成が城を受け取る。
		参考	天正14年		黒田家譜3／『新訂黒田家譜1』P126			黒田孝高、「香春岳」に陣を取り、豊臣秀吉の下向を待つ。その他の武将は「松山」「馬が岳」に陣を取る。
		(52)	(天正15年)1月3日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門4／『閥閲録2』P466	黒　官兵(黒田)孝高	仁　右衛門大夫(仁保元豊)殿	「香春付城御番」の辛労を労う。
		(53)	(天正15年)8月7日	毛利輝元書状	山口県立山口博物館蔵文書4／『山口県史 史料編中世2』P892	(毛利)輝元	(豊嶋新左衛門尉(信吉)殿)	毛利輝元、豊嶋信吉に対し、信吉の子が「九州香春固屋口」で討ち死したことについて悲しみを伝える。
		参考	慶長5年		黒田家譜13／『新訂黒田家譜1』P442			黒田如水、西軍の毛利勝信の家老毛利吉十郎が籠もる「香春の城」を攻め、これを降伏させる。
61	新田城ヵ	(1)	(年不詳)6月1日		萩藩閥閲録99-2内藤小源太64／『閥閲録3』P161	鎮実	内藤主水允殿	毛利鎮実、高橋元種から「高鳥居」「上野弁城」「中元寺」のうち1城の借受を強要される。
79	上伊田城	(1)	貞治5年6月	門司親長軍忠状	門司文書19／『門司文書』P31、門司文書19／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』	(門司下総次郎三郎親長)		門司親長、6月9日に「岩隈城」を、11日には「伊田城」を攻める。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
92	明神山城ヵ	(1)	(年不詳)3月4日		萩藩閥閲録131三戸次郎右衛門3／『閥閲録3』P783	(毛利)輝元	赤川七郎左衛門尉(忠近)殿	「明神尾」に長期間在番している事の辛労を労う。
104	岩石城	(1)	文明8年6月13日	大内政弘感状	佐田文書96／『熊本県史料　中世編2』P96	(大内政弘)	宇佐郡中衆	宇佐郡衆による「馬岳」「岩石」両城攻めの戦功を賞す。
		(2)		大内政弘書状	佐田文書97／『熊本県史料　中世編2』P210	(大内)政弘	佐田因幡守(忠景)	「馬岳」「岩石」両城退治の馳走を請う。
		(3)	(永禄11年)6月15日	毛利元就書状	吉川家文書1369／『大日本古文書家分け9-2』P646	(毛利)元就		現在「かんしやく」「馬嶽」両城を攻めているところであり、豊筑より人1人兵粮1俵に到るまで防長へ渡る事がないように伝える事。
		(4)	永禄12年7月15日	某書状案	到津文書432／『大分県史料24』第1部P84			田河郡「岩石城」を豊後より軍勢を召して攻略する。
		(5)	(天正9年)11月26日	大友府蘭書状写	大友文書録／『彦山編年史料　古代中世篇』P321	大友府蘭(義鎮)	柴田筑前入道(柴田礼能)殿	柴田礼能は「彦高岩要害」(彦山城・高鳥居城・岩石城)に登城した。
		(6)	(天正15年)4月7日	安国寺恵瓊書状	冷泉家文書137／『山口県史 史料編中世2』P978、萩藩閥閲録102-1冷泉五郎72／『閥閲録3』P223	安国寺恵瓊	(冷泉)元満	4月1日に「岩石」を攻め落とし、1人残らず討ち果たす。
		(7)	(天正15年)4月15日		萩藩閥閲録10-2堅田安房123／『閥閲録1』P201	(豊臣秀吉)	小早川左衛門佐(隆景)殿	「岩酌城」を攻め落とし、悉く敵兵の首を刎ねた事を聞く。
		(8)	(天正15年)11月5日	豊臣秀吉朱印状	黒田家文書69／『黒田家文書1』本編P163		黒田官兵衛殿、森壱岐守殿	「岩石」について毛利輝元が軍勢を送り詰めているとの事、尤もである。
		(9)	(天正15年)11月7日	羽柴秀吉直書	吉川家文書108／『大日本古文書家分け9-1』P78		吉川蔵人殿	「岩石」を落城させた事を賞す。
		(10)	(天正15年)11月11日	羽柴秀長書状	吉川家文書109／『大日本古文書家分け9-1』P78	(豊臣)秀長	吉川蔵人殿	「岩石」を落城させた事を賞す。
		参考	天正15年		黒田家譜4／『新訂黒田家譜1』P134			秋月種実、「岩石の城」に隈江越中、芥田悪六兵衛を将として兵を入れるも、豊臣軍の猛攻により落城す。
		(11)	(年不詳)10月15日	黒田孝高書状	波多野文書7／『平成26年北九州市立自然史・歴史博物館企画展「黒田官兵衛、九州上陸！－官兵衛・長政と北九州－」古文書翻字資料』P13(28)	(黒田孝高)		「岩石城」「付城」という単語有り(その後ろ欠損に付き内容不明)
		(12)	(年不詳)11月28日	黒田孝高・小早川隆景連署状	田隅タネ資料／『福岡市史　資料編　中世1』P872	黒田孝高・小早川隆景	小倉伯耆守殿	「岩石」の攻略に参加するとの事を忠義であると賞す。また、「阿賀」「副田」「忠願寺」攻めも進めるべきであり、「岩石城番」については他に方法はないと述べる。
		(13)	(慶長6年)9月11日	細川忠興書状	松井文庫文書334／『松井文庫所蔵古文書調査報告書2』P102	(細川忠興)	松井佐渡守(康之)殿	「もし」「かんた」「小倉」「香春」「かんしやく」の作事・普請の状況を伝える。
		(14)	(慶長6年)9月18日	細川忠興書状	松井文庫文書277／『松井文庫所蔵古文書調査報告書2』P72			「香春」で縄張りを行い、その後「岩石」へ向かい縄張りを行うように命じた。水の手は本丸に有り。
		参考	(年不詳)9月18日		綿考輯録17巻／『綿考輯録』2巻P414			「岩石」は山国や目田・玖珠からの道が通じる要衝のため、その重要性を称賛する。
106	城山砦(添田城)	(1)	(年不詳)11月28日	黒田孝高・小早川隆景連署状	田隅タネ資料／『福岡市史　資料編　中世1』P872	黒田孝高・小早川隆景	小倉伯耆守殿	「岩石」の攻略に参加するとの事を忠義であると賞す。また、「阿賀」「副田」「忠願寺」攻めも進めるべきであり、「岩石城番」については他に方法はないと述べる。
114	宝ヶ岳城(中元寺城)	(1)	(年不詳)6月1日		萩藩閥閲録99-2内藤小源太64／『閥閲録3』P161	鎮実	内藤主水允殿	毛利鎮実、高橋元種から「高鳥居」「上野弁城」「中元寺」のうち1城の借受を強要される。
		(2)	(年不詳)11月28日	黒田孝高・小早川隆景連署状	田隅タネ資料／『福岡市史　資料編　中世1』P872	黒田孝高・小早川隆景	小倉伯耆守殿	「岩石」の攻略に参加するとの事を忠義であると賞す。また、「阿賀」「副田」「忠願寺」攻めも進めるべきであり、「岩石城番」については他に方法はないと述べる。
122	上仏来山城(彦山城)	参考	永禄11年6月20日		刀衆先代帳／『彦山編年史料古代中世篇』P255			大友勢が彦山を破却し、8月20日より中宮に城郭を築いた。
		参考	天正7年		刀衆為前代記之／『彦山編年史料古代中世篇』P304			彦山座主舜有が秋月種実の子を養子にしたことに怒った大友勢が「鶯ノ岩屋」に築城して彦山城を攻めようとしたので、彦山側は「上仏来之城」に拠って防戦した。
		(1)	(天正9年)10月		大友家文書録3-1825／『大分県史料33』第2部P89			10月8日に大友勢が彦山を攻め、座主舜有「西谷上仏来山」に立て籠もる。
		(2)	(天正9年)10月15日	朽網宗歴書状	鹿子木文書／『彦山編年史料古代中世篇』P317	(朽網)宗歴	三(鹿子木氏ヵ)	彦山に「悪党」が立て籠もったことを報ずる。
		(3)	天正9年10月		石松文書／『彦山編年史料古代中世篇』P318			同年10月に「彦山表玉屋口」で石松親昌親類の挙げた分捕・手負の注文。
		(4)	(天正9年)11月26日	大友府蘭書状写	大友文書録／『彦山編年史料　古代中世篇』P321	大友府蘭(義鎮)	柴田筑前入道(柴田礼能)殿	柴田礼能は「彦高岩要害」(彦山城・高鳥居城・岩石城)に登城した。
		参考	天正12年		刀衆為前代記之／『彦山編年史料古代中世篇』			上仏来城の普請が行われた。
125	下赤城(赤城)	(1)	観応3年6月	西郷有政軍忠状写	筑前西郷文書／『南北朝遺文　九州編3』P288	西郷有政		5月2日に大庭孫次郎以下「赤」「笠松」に城を構えて立て籠もる。
		(2)	文和2年2月	平河貞家軍忠状	肥後平河文書／『南北朝遺文　九州編3』P314(1095)	平河貞家		文和元年6月9日に「赤庄」「笠松」の敵を攻める。
		(3)						文和元年6月9日に「赤」「笠松」の敵を攻める。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
125	下赤白(赤城)	(4)	(年不詳)11月28日	黒田孝高・小早川隆景連署状	田隅タネ資料/『福岡市史　資料編　中世1』P872	黒田孝高・小早川隆景	小倉伯耆守殿	「岩石」の攻略に参加するとの事を忠義であると賞す。また、「阿賀」「副田」「忠願寺」攻めも進めるべきであり、「岩石城番」については他に方法はないと述べる。
129	松山城	(1)	観応3年6月	西郷有政軍忠状写	筑前西郷文書/『南北朝遺文　九州編3』P288			観応2年11月に「苅田城」を西郷有政が攻める。
		(2)	(永禄4年)11月1日	大友義鎮ヵ感状写	武家高名記/『行橋市史資料編　中世』P200	(大友)義鎮ヵ	鶴原掃部頭殿	10月12日の「苅田松山」麓での合戦で戦功を立てた事を賞す。
		(3)	(永禄4年)11月19日	毛利元就・同隆元連署状	堀立家証文写34/『内海文化研究紀要』16号P97	(毛利)元就、(毛利)隆元	堀立壱岐守殿	「松山」の事についていよいよ異議がないように申し付けるので覚悟される事。
		(4)	(永禄4年)12月8日	小早川隆景書状写	麻生文書93/『麻生文書』P109	(小早川)隆景	(小笠原)長雄	毛利軍、「苅田松山一城」を取り付ける。
		(5)	永禄4年12月23日		萩藩閥閲録125内藤新右衛門21/『閥閲録3』/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P13(1988)	毛利元就	内藤新右衛門	内藤新右衛門、「松山番手」として下向。
		(6)	(永禄5年)7月16日	毛利隆元・同元就連署条々事書	山田家文書/『福岡市史　資料編　中世2』P942、『行橋市史資料編　中世』P204	(毛利隆元)、(毛利元就)	市式(市川経好)、財新(財満忠久)、坂新(坂元祐)	髙橋鑑種、「門司」まで攻め寄せ、杉連緒は「香春岳」を所有し、「松山」以下を手に入れる。また杉連緒、「香春岳」で50日も60日も敵を食い止めて持ちこたえる。
		(7)	(永禄5年)8月12日	毛利隆元書状	萩藩閥閲録114厚母七郎兵衛4/『閥閲録3』/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P13(1988)、厚母家文書11/『山口県史 史料編中世3』P101	(毛利)隆元	毛利治部太輔(元種)殿	「松山表」に在番している毛利元種を労う。
		(8)	(永禄5年)9月10日	戸次鑑連書状	山田家文書/『行橋市史資料編　中世』P205	(戸次)鑑連	(田尻)親種	当陣衆の事についても「松山」に到り、いよいよ攻撃出来るように陣を敷く事は田川郡の押さえになる。
		(9)	永禄5年9月13日		立花文書　福岡県史料/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P14	(大友)宗麟、(大友)義統		「松山城切岸」での家臣の働きを賞す。
		(10)	永禄5年9月18日	毛利隆元書状	萩藩閥閲録90中村七郎左衛門2/『閥閲録2』P964	(毛利)隆元	中村次郎左衛門殿、三戸新兵衛尉殿	「当城」(松山城)での大友軍との対戦を労い、敵を討ち果たすためにも毛利軍本隊の到着を待つように述べる。
		(11)	(永禄5年)9月20日	大友義鎮感状案	横山文書3/『大分県史料11』第2部P36、『行橋市史資料編　中世』P206	(大友)義鎮	戸次中務少輔殿	8月13日の「松山城切岸」での働きを賞す。
		(12)	(永禄5年ヵ)10月12日	大友宗麟義鎮越状写	真修寺文書531/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P14(1988)	(大友)宗麟	長野主水助殿	「松山要害切岸」での働きを賞す。
		(13)	(永禄5年)10月20日	大友宗麟感状	野上文書/『行橋市史資料編　中世』P207		野上孫三郎殿	9月13日の「松山切岸」での働きを賞し、また長期に及ぶ在陣を労う。
		(14)		大友宗麟感状写	大友家文書録/『行橋市史資料編　中世』P207		問田木工助殿	
		(15)	(永禄5年)10月30日	大友宗麟感状写	大友家文書録/『行橋市史資料編　中世』P207		林中務少輔殿	10月26日の「松山城切岸」での働きを賞す。
		(16)	(永禄5年)11月2日	大友宗麟感状	首藤文書/『行橋市史資料編　中世』P208、『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P19		首藤右京亮殿	
		(17)	(永禄5年)11月13日	奈多鑑基感状	糸永文書/『行橋市史資料編　中世』P209	(奈多)鑑基	糸永越中守殿	11月9日の「松山岸」での働きを賞す。
		(18)	永禄5年11月16日		萩藩閥閲録134二階権大夫2/『閥閲録3』P824/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P14(1988)	(毛利)元就	兼重弥三郎(元宜)平佐源七郎(就之)	「松山」に兵粮を送るよう二階藤左衛門に命じる。
		(19)	(永禄5年)12月22日		寺社証文目録27天満宮社僧円楽坊105/『閥閲録4』P369	(毛利)隆元	円楽坊	「松山」を攻めている敵を背後から包囲する事が決まったので、名代の僧を派遣し、祈念する事。
		(20)			住吉神社文書/『行橋市史資料編　中世』P210、住吉神社文書53/『山口県史 史料編中世4』P400		一宮大宮司殿	
		(21)	(永禄5年)12月28日	大友宗麟書状	奴留湯文書/『行橋市史資料編　中世』P210	(大友宗麟)	奴留湯主計允殿	「松山」麓で敵を1人討ち取った事を賞す。
		(22)	(永禄5年ヵ)月日不詳	大友宗麟感状写	大友家文書録/『行橋市史資料編　中世』P208			「松山切岸」における林鑑実の働きを賞す。
		(23)	(永禄5年ヵ)月日不詳		毛利家文書433/『大日本古文書家分け8-2』P146、『行橋市史資料編　中世』P210	(毛利)元就	(毛利)隆元	「香春岳」「松山」の城衆は城の構築をしなければならないが、その様な動きはしておらず、何とも了簡のない事である。
		(24)	(永禄6年)1月2日	毛利隆元書状	阿知須町公民館蔵文書(小野家文書)31/『山口県史 史料編中世2』P1022、萩藩閥閲録71小野貞右衛門1/『閥閲録2』P645/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P15(1988)、福原家文書93/『福原家文書 上巻』P385	(毛利)隆元	小野外記允(俊久)殿	松山城に籠城している小野外記允の働きを賞す。
		(25)	(永禄6年)1月4日	福原貞俊書状写	阿知須町公民館蔵文書(小野家文書)32/『山口県史 史料編中世2』P1022萩藩閥閲録71小野貞右衛門1/『閥閲録2』P645/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P15(1988)、福原家文書102/『福原家文書 上巻』P387	福原出羽守貞俊	小野外記允(俊久)殿	「松山」に籠城している小野外記允に対して昨年の松山城での合戦で負傷した件を労う。
		(26)	(永禄6年)1月19日		萩藩閥閲録125内藤新右衛門25/『閥閲録3』P687/『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P15(1988)	(毛利)隆元	内藤新右衛門	「松山」に在城している内藤新右衛門を労うと同時に天野隆重の「松山在番」についても内藤と番を組むよう申し付ける。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
129	松山城	(27)	(永禄6年)1月27日		萩藩閥閲録79杉七郎左衛門2／『閥閲録2』P687／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書第8集』P15(1988)／『行橋市史資料編　中世』P212	神代若狭守元兼、守田越中守忠能		27日に松山城に大友軍が攻めてきて午刻より申刻まで防戦する。天野隆重が在城しているので毛利軍は奮戦する。
		(28)	(永禄6年)1月27日		福原家文書100／『福原家文書 上巻』P386	神代若狭守元兼、守田越中守忠能、岩武備後守就豊、内藤小二郎直綱	粟や木工允(就方)殿、児玉小二郎(元良)殿、粟屋弥二郎(元勝)殿	今月27日に「御城」(松山城)における合戦について連絡。
		(29)	(永禄6年)1月27日	杉重良被官手負衆注文	萩藩閥閲録79杉七郎左衛門3／『閥閲録2』P687／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P15・P16(1988)、福原家文書99／『福原家文書 上巻』P386	神代若狭守元兼、守田越中守忠能、内藤小次郎直綱	天野(隆重)殿	27日の松山城合戦での城主杉松千代の被官で負傷した人物名と負傷箇所を列挙。併せて永禄4年より松山城主杉松千代が幼年のため、天野隆重が派遣されている事を記す。
		(30)	(永禄6年)2月		大友家文書録／『行橋市史資料編　中世』P214			大友宗麟、軍を率いて豊前国に入り「松山城」を攻める。毛利隆元、「松山城」を救おうと欲す。
		(31)	(永禄6年)2月4日	某(毛利隆元ヵ)書状写	萩藩閥閲録90中村七郎左衛門3／『閥閲録2』P964、福原家文書101／『福原家文書 上巻』P387	(毛利)隆元	中村次郎左衛門(就久)殿	1月27日の合戦での辛労を労い、また当日の働きについて天野隆重からの注進に感じ入り喜ぶ。
		(32)	(永禄6年3月)		萩藩閥閲録52兼重五郎兵衛5／『閥閲録2』P311／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P14(1988)			「松山表」の大友軍が撤退したので「松山」をたたんで隆元が「上国」する事は困難な事ではない。
		(33)	(永禄6年3月)		萩藩閥閲録52兼重五郎兵衛7／『閥閲録2』P311／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P14・P15(1988)			大友軍が撤退したので毛利軍も松山城から撤退し、早く隆元が「此口」へ行くようにする事。
		(34)	(永禄6年ヵ)6月12日		大友家文書録1445／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P16(1988)	(大友)宗麟	(田村)宗切老	「松山」「花尾」には(陣中見舞用の進物ヵ)急いで送り、「香春岳」には直接使者に持たせて送る事。
		(35)	(永禄6年ヵ)12月8日	小早川隆景書状写	麻生文書82／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P16(1988)	(小早川)隆景		「苅田松山一城」に取り付き、物寄の普請を行う。
		(36)	(永禄7年ヵ)12月15日ヵ		萩藩閥閲録161富嶋裁判石津宇兵衛12／『閥閲録4』P313／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P17(1988)	(市川)経好、(赤川)元保、(国清寺)恵心	石津平次郎	入江加賀守に従って「松山」「香春岳」の城番として在城していたところ、今度は「宝満岳」に城番として入江と共に移る事。
		(37)	(年不詳)		毛利家文書432／『大日本古文書家分け8-2』P145	(毛利)元就	(毛利)隆元	「かん田松山」の普請については先に「香春」から取りかかって然るべきとの由、財満新右衛門より報告を受ける。
		(38)	(年不詳)	毛利隆元自筆書状	毛利家文書737／『大日本古文書家分け8-2』P490	(毛利)隆元	左太	「松山」へ番衆を派遣するに当たって急いでいるので今度派遣する予定の3人のうち1人に申し付けると昨日御意を受けた。
		(39)	(永禄9年)4月5日	大友宗麟書状	屋形文書／『行橋市史資料編　中世』P222	(大友)宗麟	屋形掃部助殿	松山城が攻められていることについて状況を伝える。
		(40)	(永禄11年)5月29日	毛利元就同輝元連署書状	堀立家証文写42／『内海文化研究紀要』16号P99	(毛利)輝元・(毛利)元就	児玉周防守(就方)殿	堀立壱岐守が「香春岳」に在城している事は重要な事であるが、昨日「松山」から到来した書状によると、堀立は「香春岳」の麓にいるとの事である。
		(41)	(永禄11年)9月20日		萩藩閥閲録79杉七郎左衛門4／『閥閲録2』P687／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P17	杉重良	粟屋掃部助(元真)、大庭加賀守(賢兼)	「松山」に在番している大友軍との合戦の際に杉重良の家中で相手方の首を捕った者の名前・数及び自軍の負傷者・死者の名前を記載したもの。
		(42)	(永禄11年)11月12日	毛利氏家臣連署書状	山田文書／『宗像市史　史料編中世Ⅱ』P576	(宗像)氏貞	有田加賀守、山田民部丞	去る9日に「松山」に敵が攻めてきたところ、これを撃退する。
		(43)	(永禄11年)12月11日		萩藩閥閲録140坂新五左衛門3／『閥閲録4』P53／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P17・P18	(毛利)輝元、(毛利)元就	坂新五左衛門	坂の「松山」での出来事を労いつつ、内容については了承したので、その後の指示は使者に託しておくとの事。
		(44)	(永禄11年ヵ)12月12日		萩藩閥閲録79杉七郎左衛門4／『閥閲録2』P775、『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P18	(粟屋)元勝、(児玉)元良、(大庭)賢兼、(国司)元武、(国清寺)立雪	杉七郎左衛門	松山城に在城している武将の名簿。
		(45)	(永禄11年)12月14日		譜録・二階信実家／『行橋市史資料編　中世』P232	(兼重)元宣、(粟屋)元種、(桂)元忠		「松山」へ兵粮300俵を送る。
		(46)	(永禄12年)5月6日		萩藩閥閲録160-2萩町人岩武寿仙7／『閥閲録4』P304、『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P18	(毛利)輝元、(毛利)元就	岩武対馬守	「松山」の普請について油断なく進める事。
		(47)	(永禄12年)9月8日		萩藩閥閲録116林半兵衛8／『閥閲録3』P482、豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P18	(毛利)輝元	(林藤兵衛)	坂新五左衛門が立花城加番になったが、「松山」以来の辛労を労い、馳走をする事が大切である。
		(48)			萩藩閥閲録165三分一惣三郎5／『閥閲録4』P382／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P18	(毛利)輝元	(三分一式部丞)	
		(49)	永禄12年10月15日	某書状案	到津文書431／『大分県史料24』第1部P82			筑前表の毛利軍、兵を退き「松山」からも撤退す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
129	松山城	(50)	(永禄12年)10月20日	大友宗麟書状	合志文書1／『熊本県史料　中世編1』P414、『福岡市史　資料編　中世2』P377	(大友)宗麟	長野三河守殿	「香春岳」「松山」を堅く守備する事が重要である。
		(51)	(永禄12年)10月28日	吉弘鑑理書状	無尽集所文書／『福岡市史　資料編　中世2』P845	吉弘左近大夫鑑理	立花勤番各御中御陣所	「松山」「香春岳」等が落城し、「門司籠城衆」も詫び言を入れて降伏する。
		(52)	(永禄13年ヵ)3月2日	大友宗麟義鎮預状写	岐部文書12／『熊本県史料　中世編4』P315、『行橋市史資料編　中世』P235	(大友)宗麟	岐部兵庫助(鎮泰)殿	「松山城」攻めの軍労を賞し、豊筑の内15町分を預ける。
		(53)	天正3年5月28日	戸次道雪譲状	立花文書／『行橋市史資料編　中世』P238	戸次伯耆守入道道雪	きんちよ女	永禄5年9月13日の「松山城切岸」における合戦での御賀書と軍忠状袖判及び11月19日の「松山城攻口」における合戦での御賀書と軍忠状袖判有り。
		(54)	(天正7年)9月28日	長野助守覚書	神代長野文書5／『北九州市立歴史博物館研究紀要2』P68	(長野)助守		「松山」の普請、延引の事。
		(55)	(天正9年)10月28日		萩藩閥閲録6毛利伊勢5／『閥閲録1』P71、『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P19	(毛利)輝元		長野氏の軍勢が「松山」近所に駐屯しているが、敵方の高橋氏と通じているかどうか怪しいので調べる事。
		(56)	(天正9年)11月30日		萩藩閥閲録6毛利伊勢6／『閥閲録1』P70		(吉見)正頼、(吉見)広頼	「松山」近辺の事についてはこれまた示し預かる事とする。
		参考	天正14年		黒田家譜3／『新訂黒田家譜1』P114			黒田孝高、「刈田」に陣替えで移動し、吉川元春・小早川隆景も同所に陣を取る。
		参考	天正14年		黒田家譜3／『新訂黒田家譜1』P126			黒田孝高、「香春岳」に陣を取り、豊臣秀吉の下向を待つ。その他の武将は「松山」「馬が岳」に陣を取る。
		(57)	(天正14年)12月2日	小早川隆景書状	萩藩閥閲録104湯浅権兵衛80／『閥閲録3』P267／『豊前国松山城跡　福岡県京都郡苅田町文化財調査報告書　第8集』P19、湯浅家文書74／『山口県史史料編中世3』P1017	(小早川)隆景	湯浅治部大夫	「松山」に在番している仁保元豊が、黒田孝高に呼び出されたので、交代要員として湯浅治部太夫が「松山」に登城する事。
		(58)	(天正15年)6月25日	毛利輝元書状	長府毛利家文書／『福岡市史　資料編　中世2』P636、長府毛利家文書47／『山口県史　史料編中世4』P319	(毛利)輝元	妙寿寺(月臨周泉)	毛利軍、昨日「松山」に到着し、明日博多に向かう。
		参考	慶長5年		黒田家譜12／『新訂黒田家譜1』P398			黒田如水、豊後への出陣に当たり「感田の城」に衣笠久右衛門等150人、「馬が嶽の城」に桐山源兵衛等300人を入れる。
		(59)	(慶長6年)9月11日	細川忠興書状	松井文庫文書334／『松井文庫所蔵古文書調査報告書2』P102	(細川忠興)	松井佐渡守(康之)殿	「もし」「かんた」「小倉」「香春」「かんしやく」の作事・普請の状況を伝える。
133	等覚寺城(山口城)	(1)	(永禄11年)9月	某書状案	到津文書431／『大分県史料24』第1部P82			毛利軍、8月16日から9月5日にかけて「長野城」「宮尾」「三岳」「等覚寺」を攻めてこれを落とす。
		(2)	(永禄11年)9月12日	大友宗麟書状写	大友家文書録／『行橋市史資料編　中世』P230	(大友)宗麟	平井兵部少輔殿	「三岳」「等覚寺」両城を守るためにできるだけ早く出陣を求める。
		(3)	(永禄11年)9月15日		萩藩閥閲録37-1中川与右衛門14／『閥閲録2』P17	(毛利)元就	赤穴右京亮殿	「三岳」「等覚寺」両城の落城を祝い、その辛労を労う。
134	障子ヶ岳城	(1)	(長享元年)壬11月2日	門司国親書状	門司文書31／『門司文書』P43、門司文書31／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P398	(門司)国親	神代次郎兵衛尉殿	先般の大内政弘の上洛の際は、障子ヶ岳城の城番を命じられたので供奉出来なかったが、今度は是非お供したいので城代は息子の固親に任せて自分は供奉したい旨を伝える。
		(2)	大永2年2月	左衛門尉某法度案	永広文書1865／『大分県史料5』第1部P381		左衛門尉	院内衆は在京していて留守のため、御神用の夫役が難渋している事から既に「障子ヶ岳御城」の勤番をしている者を社所用に充てた。
		(3)	(天文元年)3月8日	大内氏奉行人奉書	萩藩閥閲録163吉田裁判長岡五兵衛5／『閥閲録4』P346、長岡家文書6／『山口県史　史料編中世4』P380	(沼田)敦定	長岡大炊充(実勝)殿	「障子ヶ岳」に近年は長岡実勝が在城。
		(4)	(天正14年)12月1日		萩藩閥閲録10-2堅田安房120／「閥閲録1」P199	(豊臣秀吉)	小早川左衛門佐(隆景)殿、安国寺(恵瓊)、黒田勘解由(孝高)殿	「障子岳」を攻めて落城させ、多くの敵兵を討ち取った事尤もであると述べる。その上で「香春岳」を包囲したとの事で寒い中での辛労を労う。
135	尾倉山城(岩隈城)	(1)	貞治5年6月	門司親長軍忠状	門司文書19／『門司文書』P31、門司文書19／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P392	(門司下総次郎三郎親長)		門司親長、6月9日に「岩隈城」を、11日には「伊田城」を攻める。
		(2)	(年不詳)7月3日	大友宗麟感状	合志文書1／『熊本県史料　中世編1』P414	(大友)宗麟	長野三河守殿	「岩隈村」に立て籠もっている敵を討ち取った事を賞す。
140	馬ヶ岳城	(1)	(応永12年)11月17日	渋川満頼書状	詫磨文書／『行橋市史資料編　中世』P122	(渋川)満頼	詫磨(満親)殿	去8日に「とりこへの城」が、続けて「かわるの一二のたけ」「むまのたけ」が落城する。
		(2)	文明8年6月13日	大内政弘感状	佐田文書96／『熊本県史料　中世編2』P210	(大内政弘)	宇佐郡中衆	宇佐郡衆による「馬岳」「岩石」両城攻めの戦功を賞す。
		(3)			佐田文書97／『熊本県史料　中世編2』P210	(大内)政弘	佐田因幡守(忠景)	「馬岳」「岩石」両城退治の馳走を請う。
		(4)	文明10年10月20日		正任記／『行橋市史資料編　中世』P139、正任記／『山口県史 史料編中世1』P351			「馬岳城」より右田弥三郎弘量、御太刀二百疋進上す。
		参考	(文明年間ヵ)		大内多々良氏譜牒／『山口県史 史料編中世1』P742			「豊前馬岳」において大内道頓ならびに子息加嘉丸・獅子丸死去す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
140	馬ヶ岳城	(5)	(文亀元年)月日不明		大友家文書録/『行橋市史資料編　中世』P148			7月23日に大友親治、大内氏に属する「馬嶽城」を攻める。
		(6)	(文亀元年)7月18日	大友義右感状写	大野定一文書/『行橋市史資料編　中世』P149	(大友)義右	大野但馬守殿	7月13日の「馬嶽」合戦での戦功を賞し、太刀1腰と鎧1両を与える。
		(7)	文亀元年7月26日	杉弘依合戦手負注文	杉隆泰文書/『行橋市史資料編　中世』P149、杉家文書67/『萩博物館研究報告』第3号P11	杉木工助(弘依)	弘中兵部丞(武長)殿、竜崎中務丞(道輔)殿	7月23日の「小馬岳御城詰口」合戦における太刀討分捕と手負注文を記す。
		(8)	文亀元年8月13日		萩藩閥閲録160-2渡邊与右衛門1/『閥閲録4』		杉四郎三郎殿	「馬岳城攻口」で大友勢、少弐勢と合戦した際の働きを賞す。
		(9)		大内義興感状	萩藩閥閲録11-2浦図書/『閥閲録1』P279、浦家文書4/『大日本古文書家分け11-1』P3	(大内義興)	乃美備前守(家氏)殿	「小馬岳城」の麓で大友勢、少弐勢と合戦した際の乃美家家中の働きを賞す。
		(10)		大内義興感状写	王丸文書/『福岡市史　資料編　中世1』P665		王丸中務丞殿	「馬岳城」での苦労を労う。
		(11)			河津伝記/『行橋市史資料編　中世』P153	(大内)義興	河津与三(興光)殿	「馬岳城詰口」での働きを賞す。
		(12)			児玉韞採集岡部氏古文書/『行橋市史資料編　中世』P154	(大内義興)	岡部彦左衛門尉殿	「馬岳城結口」で郎党に至るまで負傷しながら戦った事について賞す。
		(13)		大内義興感状	阿川文書/『行橋市史資料編　中世』P155		阿川孫七殿	「馬岳城詰口」での働きを賞す。
		(14)			門司文書50/『門司文書』P67、門司文書50/『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P411		門司民部丞(宗房)殿	「小馬岳城詰口」における働きを賞す。
		(15)			萩藩閥閲録170糟屋権六家来3/『閥閲録4』P498		門司弥次郎(依親)殿	「小馬岳城」の麓で大友勢、少弐勢と合戦した際に「佐伯陣」で軍功を立てた内容の注進を杉弘依から受け取る。
		(16)		問田胤世書状	久利家文書27/『山口県史 史料編中世4』P852	(問田)胤世	久利又次郎殿	「馬岳御城詰口」における働きを賞す。
		(17)		大内義興感状	内藤家文書2/『山口県史 史料編中世4』P505	(大内義興)	内藤藤五郎(興行ヵ)殿	「馬岳城詰口」における、大友勢、少弐勢と合戦の際、最前で合戦した旨の陶興房注進状を一見し、その活躍を賞す。
		(18)		大内義興感状	内藤家文書3/『山口県史 史料編中世4』P505	(大内義興)	内藤々五郎(興行ヵ)殿	「馬岳城詰口」における、大友勢、少弐勢と合戦の際、最前で合戦した旨の内藤弘春注進状を一見し、その活躍を賞す。
		(19)	文亀元年8月23日	陶興房書状	「譜録」や136山中種房2/有川宜博「山口県文書館所蔵「譜録」に見える九州関係新出文書の紹介」『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告B類歴史』9号P30(53)	(陶)興房	長崎小太郎(勝親)殿	先月23日に「馬岳御城詰口」を攻めた際の働きを賞す。
		(20)		大内義興書下写	杉隆泰文書/『行橋市史資料編　中世』P155、杉家文書(「永田秘録」)/『萩博物館研究報告』第3号P13	(大内義興)	杉木工助(弘依)殿	先月23日の「馬岳後詰」での奮戦に関する注進状を確認し、これを賞す。
		(21)	(文亀元年)8月29日	大友親治一跡安堵状	大友家文書録1-580/『大分県史料31』第2部補遺3P316、『行橋市史資料編　中世』P155	(大友)親治	中嶋太郎殿	7月23日の「馬岳城」において父左京亮安通の討死を賞し一跡を安堵す。
		(22)		大友親治感状	大友家文書録1-581/『大分県史料31』第2部補遺3P316			7月23日の「馬岳城」における働きを賞す。
		(23)			大津留運文書/『行橋市史資料編　中世』P155	(大友)親治	大津留兵庫助殿	7月23日に「馬岳」を攻めた時に負傷しながらも奮戦した事を忠節であると賞す。
		(24)	(文亀元年)9月4日	大友親治一跡安堵状写	元重実文書6/『大分県史料8』第2部P263、『行橋市史資料編　中世』P155		元重隠岐守	「馬岳城」合戦での父親の討死を賞し一跡を安堵す。
		(25)	(文亀元年)11月23日	大友親治感状	波津久文書4/『大分県史料13』第2部P155		波津久忠兵衛尉殿	「馬岳城」攻めの際の働きを賞す。
		(26)	(文亀元年)11月24日	安富元家書状	大友家文書録1-589/『大分県史料31』第2部補遺3P320	安富筑後守元家	大友殿参人々御中御報	「豊前国馬岳城」合戦での出陣の時宜を承りたい。
		(27)	永正2年7月	佐田泰景軍忠状	佐田文書113/『熊本県史料　中世編2』P220			文亀元年7月23日に「馬岳」にて合戦有り。
		(28)	永正17年5月13日	大内氏奉行人連署奉書	山口県立文書館所蔵興隆寺文書/『行橋市史資料編　中世』P161、興隆寺文書126/『山口県史 史料編中世3』P283	(弘中興兼)中務丞、(陶弘詮)安房守、(問田興之)掃部頭	氷上山別当御坊	「馬岳御陣」の際、立願においては、山領に准じ、寄進段銭、天役並びに山領内の材木等の役を免除される事を伝える。
		(29)	(年月日不詳)	条々書	永弘文書/『大分県史料5』			今より「馬岳御城番」を勤めるとの事だが、宮番についてはよくわからないとの請文有り。
		(30)	天文2年	肥前国衆連署起請文	大友家文書録2-825/『大分県史料32』第2部補遺4P62	肥前国衆連署		文亀元年7月23日に「豊前馬岳」にて合戦が行われ、大友方が敗北す。
		(31)	(年不詳)9月10日	大友宗麟感状写	加来八太郎文書1/『大分県史料8』第2部P330	(大友)宗麟	田原常陸介(親宏)殿、木付紀伊入道殿、大神兵部少輔殿、田北弥十郎殿、田原近江守(親賢)殿、奈多大膳大夫(鑑元)殿	戦況を案じて加勢衆に下知し、「馬岳城米」として黄金50両を送る。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
140	馬ヶ岳城	(32)	(弘治元年)11月22日	賢信預かり	恵良文書/『行橋市史資料編　中世』P181	賢信	豊田美濃守(鑑実)殿、青景越後守(隆著)殿、仁保右衛門太夫(隆尉)殿、波多野備中守(興滋)殿、河屋伊豆守(隆通)殿	先年の「馬岳御陣」以来13町分の反銭を上納す。
		(33)	(弘治2年)5月19日	神代隆総書状	萩原勇平文書30/『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告　B類歴史5』P28	神代隆総	萩原兵部丞殿	「馬岳」の事は是非もない。
		(34)	(弘治2年)8月20日	大内氏奉行人連署奉書案	緒方文書/『行橋市史資料編　中世』P184	(杉)民部大輔、(杉)修理進、(仁保隆尉)右衛門大夫殿、(杉隆相)美作守、(内藤隆世)弾正忠	神代中務丞(隆綱)殿	神代弘綱、「馬岳御城督」として在城していたが、ここに立て籠もる。
		(35)	(弘治2年)12月18日	田北鑑生書状	蠣瀬文書30/『大分県史料8』第2部P325	(田北)鑑生	須江上総介殿、田北左近将監(鑑忠)殿、帆足右衛門大夫殿	蛎瀬備中守の「馬岳」攻めでの働きについて田原親宏から注進があった。
		(36)	(弘治3年)3月13日	大友家加判衆連署状	佐田文書176/『熊本県史料　中世編2』P261	(臼杵)鑑続、(吉岡)長増、(田北)鑑生、(雄城)治景	佐田弾正忠(隆居)殿	特に「馬岳」の様子に就いては事実であれば是非もない。
		(37)	(弘治3年)7月9日	大友義鎮老臣連署奉書	田原文書16/『大分県史料10』第2部P48	治景、親守	田原常陸介(親宏)殿	6月21日に「山田安芸守要害」を、7月4日には「馬岳城」を攻め落とし自身も負傷した事を賞される。
		(38)		田原親宏感状	佐田文書196/『熊本県史料　中世編2』P278	(田原)親宏	佐田弾正忠(隆居)殿	「馬岳於小城切岸」合戦での戦功を賞す。
		(39)	(弘治3年)7月10日	大友家年寄連署状	佐田文書199/『熊本県史料　中世編2』P281	(臼杵)鑑続、(吉岡)長増、(田北)鑑		「馬岳要害」攻めでの働きを賞す。
		(40)	(弘治3年)7月13日	田原親宏感状	足立悦雄文書33/『大分県史料26』第4部P28、『行橋市資料編　中世』P187	(田原)親宏	田代弥七郎殿	「山田安芸守要害」攻め及び7月4日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(41)	(弘治3年)7月23日	大友義鎮書状	渡辺左近文書/『大分県先哲叢書2』P134、『行橋市史資料編　中世』P187	(大友)義鎮	渡辺左京亮殿	6月20日の「山田安芸守隆朝要害」攻め及び7月4日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(42)		田原親宏感状	足立悦雄文書25/『大分県史料26』第4部P24、『行橋市史資料編　中世』P187	(田原)親宏	足立清兵衛尉殿	
		(43)		田原親宏感状写	片山文書7/『大分県史料10』第2部P324		片山市正允殿	6月20日の「山田安芸守要害」攻め及び7月4日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(44)		田原親宏感状	森文書5/『大分県史料35』P69、『行橋市史資料編　中世』P187		森木工助(薫能)殿	6月20日の「山田安芸守宅所要害」攻め及び7月4日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(45)	(弘治3年)7月28日	大友義鎮感状	佐田文書201/『熊本県史料　中世編2』P282	(大友)義鎮	佐田弾正忠(隆居)	「馬岳」攻めにおいて調略で「小城」を落とした事を賞す。
		(46)		大友義鎮感状案	蠣瀬文書9/『大分県史料8』第2部P310		蠣瀬備中守(鎮忠)殿	秋月氏・山田氏が謀反を起こした際に「山田要害・馬岳」における軍功を賞す。
		(47)	(弘治3年)8月3日	田原親宏感状	萱嶋文書39/『大分県史料10』第2部P259	(田原)親宏	萱嶋源右衛門尉(宏次)	6月20日の「山田安芸守要害」攻め及び7月4日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(48)	(弘治3年)8月13日	道中書状	後藤敏宏文書9/『大分県史料10』第2部P303		靍田神五郎殿	6月20日の「山田安芸守要害」攻め及び閏7月3日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(49)	(弘治3年)	某覚書	永広文書2332/『大分県史料6』第1部P248			7月4日「馬岳」落城。城督ヨシカイ、ミナキ甲斐守その他秋月衆100名程討ち取る。
		(50)	(永禄元年)11月15日	蠣瀬鎮忠申状	蠣瀬文書11/『大分県史料8』第2部P312	蛎瀬備中守鎮忠	田北鑑生殿人々御中	去年6月20日、21日に「山田里城」を、7月4日に「馬岳城」をそれぞれ攻めた際に戦功を立てた被官の名前を挙げ、所領安堵の馳走を請う。
		(51)	(永禄2年)9月2日	大友義鎮書状	佐田文書205/『熊本県史料　中世編2』P286	(大友)義鎮	安心院中務大夫(興正)殿、佐田弾正忠(隆居)殿	「門司」「花尾」の残党の追討を田原親宏、親賢に命ずると同時に「馬岳城」の勤番についても肝要であると両名へ伝える。
		(52)	(永禄2年)9月25日	大友家年寄連署状	佐田文書206/『熊本県史料　中世編2』P287	(臼杵)鑑速、(志賀)親守	田原民部大輔(親賢)殿、田原常陸介殿(親宏)殿	「馬岳御城」勤番は重要である。
		(53)	(年不詳)10月9日	田原親宏感状	足立悦雄文書34/『大分県史料26』第4部P28、『行橋市史資料編　中世』P194	(田原)親宏	田代弥七郎殿	小倉津・「西郷遠江守要害」での働き及び「門司要害」を攻めた時に負傷した事を賞す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
140	馬ヶ岳城	(54)	(永禄8年)9月10日	大友宗麟書状	薦神社文書3/『大分県史料30』P226、『行橋市史資料編　中世』P220	(大友)宗麟	田原常陸介殿、木付紀伊入道(宗虎)殿、大神兵部少輔入道(親続)殿、田北弥十郎(鎮周)殿、田原近江守(親賢)殿、奈多大膳大夫(鑑基)殿	「馬岳城米」の事については承知した。
		(55)	(永禄8年)9月23日	大友宗麟書状写	渡辺文書/『行橋市史資料編　中世』P221		渡辺式部少輔殿	「馬岳」攻めについて浦部衆に急遽出陣するよう申し付けた。(式部少輔も)早々に出陣し城誘を堅固に行うように伝える事が重要である。
		(56)	(永禄11年)6月15日	毛利元就書状	吉川家文書1369/『大日本古文書家分け9-2』P646	(毛利)元就		現在「かんしやく」「馬嶽」両城を攻めているところであり、豊筑より人1人兵粮1俵に到るまで防長へ渡る事がないように伝える事。
		(57)	天正3年3月7日		島津家久上京日記/『行橋市史資料編　中世』P237			「馬のたけ」という長野氏の城を見る。
		(58)	(天正10年)4月26日	宗像氏貞書状写	無尽集所文書/『行橋市史資料編　中世』P247	(宗像)氏貞	(小早川)隆景	「馬岳」での合戦で勝利したとの事。
		(59)	天正11年閏2月20日		『長崎県史 史料編第1』P777	一鶚		「馬岳」における忠節により、佐賀居屋敷を扶持せらることを伝える。
		(60)	(天正14年)11月6日		萩藩閥閲録105福原又右衛門/『閥閲録3』P285	(毛利)輝元	福原内蔵大夫(就直)殿	「馬岳」を越えて「宇留津」へ移動する。
		(61)	(天正14年)12月20日		萩藩閥閲録2-4山縣平八7/『閥閲録遺漏』P135	(豊臣)秀吉	毛利右馬頭(輝元)殿、吉川治部少輔(元長)殿、小早川左衛門佐(隆景)殿	吉見日本之助、宍戸備前守が「右馬嶽之城」「秋月」両所を攻め落とした事、石田平六より報告があった。
		参考	天正14年		黒田家譜3/『新訂黒田家譜1』P126			黒田孝高、「香春岳」に陣を取り、豊臣秀吉の下向を待つ。その他の武将は「松山」「馬が岳」に陣を取る。
		(62)	(天正15年)3月28日	豊臣秀吉朱印状	吉川家文書706/『大日本古文書家分け9-1』P652	(豊臣秀吉)	吉川広家殿	明日「馬嶽」へ移る事を知らせる。
		(63)		大谷吉継添状	吉川家文書707/『大日本古文書家分け9-1』P652	(大谷)吉継		豊臣秀吉が明日「馬嶽」に移る事を知らせる。
		(64)	天正15年		九州御動座記/『行橋市史資料編　中世』P256			豊臣秀吉、3月29日に「馬之嶽」に到着し、中1日逗留す。元は長野氏が居住していた城也。
		(65)	(天正15年)3月30日		萩藩閥閲録10-2堅田安房122/『閥閲録1』P200、小早川家文書469/『大日本古文書家分け11』P405	(豊臣秀吉)	小早川左衛門佐(隆景)殿	秀吉、3月29日に「馬岳」に到着。
		(66)		豊臣秀吉朱印状	黒田家文書87/『黒田家文書1』本編P207		黒田勘解由(孝高)殿	
		(67)	(天正15年)5月13日	豊臣秀吉朱印状写	大友家文書録2149/『大分県史料33』第2部補遺5P279、『行橋市史資料編　中世』P257		羽柴中納言(秀長)殿	「馬かたけ」と境目の城との間の距離が離れているので、その間に1つ城を配置する事。
		参考	天正15年		黒田家譜4/『新訂黒田家譜1』P152			黒田孝高、豊前国京都郡の「馬が嶽」の城に入る。
		(68)	(天正16年)1月19日		黒田家文書96/『黒田家文書1』本編P227	(豊臣秀吉)	黒田勘解由殿、森壱岐守殿	毛利輝元、「馬岳」に本陣を置く。
		(69)	(年不詳)3月15日	秋月種実書状	萩原文書17/『大分県史料8』第2部P292	(秋月)種実	萩原山城入道殿	「香春・馬岳」に申し談じ、少人数をその表へ差し出す事。
		参考	慶長5年		黒田家譜12/『新訂黒田家譜1』P398			黒田如水、豊後への出陣に当たり「感田の城」に衣笠久右衛門等150人、「馬が嶽の城」に桐山源兵衛等300人を入れる。
147	大坂山城(因州城)	(1)	観応3年3月10日	某感状写	筑前西郷文書/『南北朝遺文九州編3』P273		西郷形部太夫殿	観応2年8月17日に武藤資法の党類が大坂に敗戦した際に、崎山・大坂を防戦し郎党が功績を挙げたことに対する感状。
		(2)	観応3年6月日	西郷有政軍忠状写	筑前西郷文書/『南北朝遺文九州編3』P288			観応2年8月17日に崎山・大坂を防戦した。
		(3)	(永禄11年ヵ)	某書状案	到津文書431/『大分県史料24』第1部P82			永禄11年6月20日に「宮尾」を落城させた後、ツイキ郡「別府」に宿陣す。また、杉因幡守と西郷氏が「大坂山」に城を築いたが、これも落城させ、「別府」に帰陣する。
148	不動ヶ岳城(西郷城、大村城)	(1)	(永禄2年)8月21日	大友義鎮書状	大友家文書録2-1439/『大分県史料32』第2部補遺4P293	(大友)義鎮	田原常陸介(親宏)殿	「西郷遠江守要害」における軍功を賞し、併せて未だ落城していない「門司」「花尾」「高春岳」の攻略を命ずる。
		(2)	(永禄2年)8月22日	佐田隆居分捕手負注文	佐田文書204/『熊本県史料　中世編2』P284			「西郷遠江守要害」攻めにおける佐田隆居文の手負注文。
		(3)	(永禄2年)8月24日	田原親宏知行宛行状案写	宮永氏影写文書13/『大分県史料10』第2部P224	(田原)親宏	溝部九郎兵衛尉殿	息子の孫太郎が「遠江守隆依要害」で戦死した事を憐れみ、父九郎兵衛に知行を宛がう。
		(4)	(永禄11年)6月28日	某感状	萱嶋文書43/『大分県史料10』第2部P261		萱嶋美濃守殿	「西大野宮山」に立て籠もる毛利勢との合戦での働き及び「杉」「西郷」両城における防戦を賞す。
		(5)	(年不詳)10月9日	田原親宏感状	足立悦雄文書34/『大分県史料26』第4部P28、『行橋市史資料編　中世』P194		田代弥七郎殿	小倉津・「西郷遠江守要害」での働き及び「門司要害」を攻めた時に負傷した事を賞す。
		(6)	(年未詳)壬3月29日	毛利元就・隆元連署書状	西郷文書24/『豊前市史　文書資料』P104	(毛利)元就・隆元	西郷遠江守殿	当城(西郷城ヵ)での忠節を賞する。
151	燕岩城(崎山城)	(1)	観応3年3月10日	某感状写	筑前西郷文書/『南北朝遺文九州編3』P273		西郷形部太夫殿	観応2年8月17日に武藤資法の党類が大坂に敗戦した際に、崎山・大坂を防戦し郎党が功績を挙げたことに対する感状。
		(2)	観応3年6月日	西郷有政軍忠状写	筑前西郷文書/『南北朝遺文九州編3』P288			観応2年8月17日に崎山・大坂を防戦した。
156	神楽山城ヵ	(1)	(観応元年)9月12日	冬□(尚ヵ)感状	高並文書2/『大分県史料8』第2部P88	(少弐)冬□(尚ヵ)	高並彦八殿	菊池武光以下、「神楽嶽」に攻め寄せる。
159関連	高畑城	(1)	応安7年9月22日	今川了俊感状写	入江文書2-18/『大分県史料10』第2部P388	(今川)了俊	田原下野守(氏能)	「高畑」に城を構える。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
159関連	高畑城	(2)	応安7年10月	田原氏能軍忠状写	入江文書2-19/『大分県史料10』第2部P389	田原氏能		9月25日に高畑城を攻めて落城す。
162 163	茅切山城 小川内城	参考	天正15年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P169			城井谷の入口の茅切山の内出崎の丸山に「神楽山」という古城有り。長政、ここを改修し兵を入れる。
		(1)	(天正15年)12月27日	豊臣秀吉朱印状	黒田家文書94/『黒田家文書1』本編P224	(豊臣秀吉)	黒田勘解由(孝高)殿	「城井表付城」を丈夫に造るように申し付ける。
165	若山城(本庄城)	(1)	明応10年2月16日	大内義興書下	佐田文書112/『熊本県史料　中世編2』P218	(大内義興)	佐田次郎(泰景)殿	「本庄城」攻めの戦功を賞す。
166	溝口館	参考	天正15年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P178			宇都宮鎮房、黒田孝高に降伏し「寒田の宅」に移る。
		参考	天正16年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P182			黒田長政、「澤田の宅」を攻め、これを落とす。
167	大平城(城井城)	(1)	(応安7年)2月3日	大友親世書状写	田原文書/『大分県史料10』第2部、『南北朝遺文九州編5』5084P100(1682)	(大友)親世	田原下野守(氏能)殿	「城井」を焼き払い、敵を城郭に追い入れたと報告があった。
		(2)	(応安7年)4月15日	今川了俊書状	入江文書2-15/『大分県史料10』第2部P385、『南北朝遺文　九州編5』5092P102(1684)	(今川貞世)了俊	田原下野(氏能)殿	「城井」が落城す。
		(3)	(応安7年ヵ)	大友親世知行預状	大友家文書録199『大分県史料31』第2部補遺3P130、『行橋市史資料編　中世』P114			「城井城」の単語有り。
		(4)	(永和4年)3月5日	今川了俊書状	弥寝文書/『南北朝遺文5』P240	(今川)了俊	弥寝(久清)殿	「宇津宮城」には明け渡しを求めており、「城持」でなければ野心を差し挟まないだろうと述べる。「野心」とは応安7年に宇都宮氏が城井で了俊に叛旗を翻したことヵ。
		(5)	永正2年7月	佐田泰景軍忠状	佐田文書113/『熊本県史料　中世編2』P220			文亀元年1月29日に中津川を渡り、2月9日に「城井城」に到る。
		(6)	(年不詳)5月25日	大友家年寄連署状	佐田文書183/『熊本県史料　中世編2』P268	(雄城)治景、(志賀)親守	佐田弾正忠(隆居)殿	山田氏、中八屋氏等が「城井宅所」を攻める。
		(7)	(天正15年)12月10日	羽柴秀吉朱印状	吉川家文書111/『大日本古文書家分け9-1』P80	(羽柴秀吉)	吉川治部少輔(元長)殿	「城井」が落城す。
		参考	天正15年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P161			黒田長政、宇都宮鎮房が立て籠もる「城井谷」をせめて敗退す。
169	別府城	(1)	(永禄11年ヵ)		到津文書431/『大分県史料24』第1部P82			永禄11年6月20日に「宮尾」を落城させた後、ツイキ郡「別府」に宿陣す。また、杉因幡守と西郷氏が「大坂山」に城を築いたが、これも落城させ、「別府」に帰陣する。
171	野中城	(1)	(天正15年)10月22日		小早川家文書443/『大日本古文書家分け11-1』P387	(豊臣)秀吉	小早川左衛門佐殿	野中氏と城井氏が「野仲古城」に立て籠もる。
172	宇留津城	(1)	(天正14年)11月7日		萩藩閥閲録21柳沢靱負24/『閥閲録1』P555	黒官孝高(黒田孝高)、左衛隆景(小早川隆景)	(毛利)輝元様	今日「宇留津城」が落城した際の柳澤新三郎の働きを輝元に対し報告す。
		(2)	(天正14年)11月8日	毛利輝元書状	毛利博物館蔵文書(児玉家文書)51/『山口県史史料編中世2』P722、萩藩閥閲録17児玉三郎右衛門14/『閥閲録1』P478	(毛利)輝元	児三(児玉元兼)	「宇留津」が落城した時の戦功を賞す。
		(3)	(天正14年)11月9日	吉川元長書状	萩藩閥閲録85都野三左衛門6/『閥閲録2』P887、都野家文書10/『山口県史　史料編中世3』P1084	(吉川)治部元長	都野弥次郎殿	
		(4)	(天正14年)11月10日	毛利輝元書状写	萩藩閥閲録21柳沢靱負24/『閥閲録1』P554、福原家文書212/『福原家文書　上巻』P470	(毛利)右馬頭輝元	柳新右(柳沢元政)殿	柳澤元政の息子新三郎、使者として「うりう津」へ派遣される。現地での戦功を立てた事を記した書状が輝元に届き、賞される。
		(5)	(天正14年)11月11日	益田元祥書状写	益田高友家文書37/中司健一「山口県文書館寄託「益田高友家文書」の紹介」『東京大学史料編纂所研究紀要』第25号P100	(益田)右衛門佐元祥	(益田兼貴)下野守殿	「潤津之城」切崩しについて、「与次郎」・「惣次郎」の活躍を賞す。
		(6)	(天正14年)11月11日	益田元祥書状写	益田高友家文書38/中司健一「山口県文書館寄託「益田高友家文書」の紹介」『東京大学史料編纂所研究紀要』第25号P101	(益田)右衛門佐元祥	(益田兼貴)下野守殿	「潤津」における澄川惣左衛門尉中間の善九郎・助四郎の疵を被るを賞す。
		(7)	(年不詳)11月11日		萩藩閥閲録92波多野源兵衛18/『閥閲録3』P29	(佐世)元嘉	波　源兵衛(波多野元信)殿	「うろう津」における戦功について隆景から感状を、また輝元より児玉元兼に御捻を遣わした。
		(8)	(天正14年)11月12日	毛利輝元書状	萩藩閥閲録85都野三左衛門5/『閥閲録2』P887、都野家文書11/『山口県史　史料編中世3』P1084	(毛利)右頭頭輝元	都野弥二郎(家頼)殿	「宇留津」を攻めた際の戦功を賞す。
		(9)		毛利輝元書状写	萩藩閥閲録103尾越正右衛門15/『閥閲録3』P240、福原家文書214/『福原家文書　上巻』P214		有福玄蕃允(貞茂)殿	
		(10)		毛利輝元書状写	萩藩閥閲録124-1平賀九郎兵衛35/『閥閲録3』P642、福原家文書205/『福原家文書　上巻』P468		(平賀)元相	黒田官兵衛、小早川隆景「宇留津」を攻めてこれをすぐに落とす。
		(11)	(天正14年)11月16日		萩藩閥閲録105福原又右衛門/『閥閲録3』P285	(毛利)輝元	福原内蔵大夫(就直)殿	「馬岳」を越えて「宇留津」へ移動する。
		(12)	(天正14年)11月20日		黒田家文書71/『黒田家文書1』本編P167	(豊臣)秀吉	小早川左衛門佐殿、安国寺、黒田勘解由殿へ	「宇留津城」、11月7日に落城し、1000人余首を刎ねられ、その他の者も磔にかけられる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
172	宇留津城	(13)	(天正14年)12月2日		萩藩閥閲録4毛利伊勢/『閥閲録1』P41、P42		小早川藤四郎(秀包)様	喜久入道専慶、同久盛が立て籠もる「宇留津之出丸」を豊臣軍が攻め落とす。
		(14)	(天正15年ヵ)12月8日		福原家文書213/『福原家文書 上巻』P470	秀就	柳沢新右衛門尉(元政)とのへ	秀就、柳沢元政の先年豊前「宇留津」における忠節に関する黒田孝高・小早川隆景書状を披見したことを伝える。
174	赤幡城	参考	天正15年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P170			宇都宮鎮房、「赤幡」に出城を構え壁兵庫・城井宮内を入れる。長政これを聞いて母里太兵衛・小河伝右衛門を派遣して城を落とす。
185	鳥越城	(1)	(応永12年)11月17日	渋川満頼書状	詫磨文書/『行橋市史資料編 中世』P122	(渋川)満頼	詫磨(満親)殿	去8日に「とりこへの城」が、続けて「かわるの一二のたけ」「むまのたけ」が落城する。
193 194	岡城(川底城) 下川底城(川底城)	参考	天正15年10月		黒田家譜5『新訂黒田家譜1』P159			上毛郡山内村「川底」の城主如法寺孫次郎、宇都宮氏に属して逆徒となる。
196 205 207	櫛狩屋城 八田城 山田城	(1)	貞和7年3月	野上廣資軍忠状	尊経閣文庫所蔵野上文書/『南北朝遺文 九州編3』P182	野上広資		豊後国の御家人野上廣資、豊前国「山田城」に向かう。
		(2)	文明10年10月9日		正任記/『山口県史 史料編中世1』P338			豊前国住人山田弥七郎貞朝、8月28日に大内氏の味方として、「山田家城」において現形す。
		(3)	(弘治3年ヵ)6月24日	大友家年寄連署状	佐田文書195/『熊本県史料 中世編2』P278	(雄城)治景、(志賀)親守	佐田弾正忠(隆居)殿	「山田宅所同要害」攻めにおける戦功を賞す。
		(4)	(弘治3年)7月9日	大友義鎮老臣連署奉書	田原文書16/『大分県史料10』第2部P48	治景、親守	田原常陸介(親宏)殿	6月21日に「山田安芸守要害」を、7月4日には「馬岳城」を攻め落とし自身も負傷した事を賞される。
		(5)	(弘治3年)7月23日	田原親宏感状写	片山文書7/『大分県史料10』第2部P324	(田原)親宏	片山市正允殿	6月20日の「山田安芸守要害」攻め及び7月4日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(6)	(弘治3年)7月28日	大友義鎮感状案	蠣瀬文書9/『大分県史料8』第2部P310	(大友)義鎮	蠣瀬備中守(鎮忠)殿	秋月氏・山田氏が謀反を起こした際に「山田要害・馬岳」における軍功を賞す。
		(7)	(弘治3年)8月3日	田原親宏感状	萱嶋文書39/『大分県史料10』第2部P259	(田原)親宏	萱嶋源右衛門尉(宏次)	6月20日の「山田安芸守要害」攻め及び7月4日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
		(8)	(弘治3年)8月13日	道中書状	後藤敏宏文書9/『大分県史料10』第2部P303		靍田神五郎殿	6月20日の「山田安芸守要害」攻め及び閏7月3日の「馬岳城」攻めでの働きを賞す。
211	大村城	参考			黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P173			山田常陸介は宇都宮氏と親しい一族で上毛郡「大村」に在城していたが、中津に招かれたところを小河伝右衛門によって討ち取られる。
222	高田城	参考	天正15年10月		黒田家譜5『新訂黒田家譜1』P159			「高田」に敵がかき上げを拵えて立て籠もる。
225	広津城	(1)	大永4年5月23日	益永道高等連署注進状案	永広文書1892/『大分県史料』P398			杉重清、秋吉源三郎を「廣津大蔵丞宅所」において自害させ、秋吉村に放火する。
		(2)	(弘治3年)6月21日	大友義鎮感状	佐田文書191/『熊本県史料 中世編2』P275	(大友)義鎮	佐田弾正忠(隆居)殿	「廣津治部大夫宅所」に18日から山田・仲八屋軍が攻めてきた際に、これを撃退し敵を多く討ち取った事を賞す。
		(3)		大友家年寄連署状	佐田文書192/『熊本県史料 中世編2』P276	(雄城)治景、(志賀)親守		
		(4)	(弘治3年ヵ)6月22日	大友義鎮感状	入江文書23/『大分県史料10』第2部P419	(大友)義鎮	田原常陸介(親宏)殿	「廣津治部大夫宅所」に山田安芸守らが攻め寄せ、広津方に杉因幡守等が加勢し応戦する。
		(5)	(弘治3年)6月24日	大友家年寄連署状	佐田文書194/『熊本県史料 中世編2』P277	(臼杵)鑑続、(吉岡)長増、(田北)鑑生	佐田弾正忠(隆居)殿	山田以下の敵が「廣津宅所」に攻めてきた際に佐田家中に手負と分捕を賞す。
		(6)	(天正15年)3月8日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門1/『閥閲録2』P466	(毛利)輝元	仁保右衛門大夫(元豊)殿	明後日10日に「廣津」に陣を移動する事になったので、当日は「廣津」に早く来るように伝える。
		参考	天正15年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P161			黒田孝高、豊前国を与えられた時に時枝の城主の時枝平太夫、宇佐の城主の宮成吉右衛門、「廣津の城主」廣津治部大輔はその下に属する。
		参考	慶長5年		黒田家譜13/『新訂黒田家譜1』P442			黒田如水、豊後国から豊前国小倉に向けて移動し、途中「廣津山」という古城の跡に陣を敷く。
230	日熊城	参考	天正15年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P159			逆徒、上毛郡「姫隈」に城を構えて立て籠もり、黒田長政これを攻める。
236	牛王城	(1)	観応3年3月	河依範房軍忠状写	下毛郡誌所収久恆文書/『南北朝遺文 九州編3』P277(1058)	河依範房		安曇七郎、尻高四郎次郎、安先孫三郎以下「屋形村」に城を構える。
245	追揚城	(1)	天正10年5月29日		友枝文書28/『豊前市史 文書資料』P77	(野仲)鎮兼	内尾伊豆守、羽津手伊予守、長野刑部丞、中尾大蔵丞、羽田宮内丞、窪田石見守	「桂林庵表」「仙光寺表」の普請をしっかり行う事。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
246	叶松城	(1)	(年不詳)11月9日		友枝文書/『豊前市史　文書資料』P75	(野仲)鎮兼	内尾藤太郎殿	「叶松」の攻撃への備えを命じる。
		(2)	天正10年5月29日		友枝文書28/『豊前市史　文書資料』P77		内尾伊豆守、羽津手伊予守、長野刑部丞、中尾大蔵丞、羽田宮内丞、窪田石見守	「叶松」から退く事がないように普請をしっかり行い、「長岩」「雁股」が不慮の事態に陥った際も20日～30日はこれらの城を支えられるようにする事。
252	松尾山城	(1)	天正8年		松尾山医王寺置文銘文/『宇都宮氏城館跡-宇都宮氏関係城館跡総合調査報告書-』P64			野仲鎮兼、城井鎮房を攻めるため「松尾山」に切寄を俄かに構える。
253	雁俣城	(1)	天正10年5月29日		友枝文書28/『豊前市史　文書資料』P77	(野仲)鎮兼	内尾伊豆守、羽津手伊予守、長野刑部丞、中尾大蔵丞、羽田宮内丞、窪田石見守	「叶松」から退く事がないように普請をしっかり行い、「長岩」「雁股」が不慮の事態に陥った際も20日～30日はこれらの城を支えられるようにする事。
		参考	天正15年		黒田家譜5/『新訂黒田家譜1』P174			野中兵庫、「雁股が嶽」に立て籠もり、黒田長政これを攻める。
		(2)	(年不明)1月21日	黒田孝高書状	田隅タネ資料/『福岡市史　資料編　中世1』P873	官兵(黒田孝高)	宝珠山殿	(孝高の)留守中は「かり又たけ」への在番を頼む。

＜中世城館＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	門司城	参考	暦応3年1月15日	足利尊氏感状写	麻生文書102/『麻生文書』P113	(足利)尊氏	麻生兵庫介殿	藤田玉置、「門司ヶ関」へ立て籠もる。(「偽文書」の表記有)
		(1)	貞治3年3月日	下総親尚軍忠状	門司文書17/『門司文書』P27、門司文書17/『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P390	(下総左近将監親尚)		貞治2年7月19日に「門司関城」に立て籠もって要害を造作中であったが、その準備が終わらないうちに南朝方が攻めてきて合戦に及ぶ。
		(2)	貞治4年4月日	門司親尚軍忠状	門司文書18/『門司文書』P29、門司文書18/『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』	(門司下総左近将監親尚)		下総親尚、「門司城山」に要害を造作中に菊池武光等南朝方が攻め寄すの間、合戦したことを申す。
		(3)	応安5年9月	周布士心(兼氏)軍忠状	萩藩閥悦録121-1周布吉兵衛32/『閥閲録3』P549、『福岡市史　資料編　中世2』P721	周布士心		「門司」「赤坂」に在陣した事を忠節と賞す。
		(4)	応安8年8月	長井貞広軍忠状	萩藩閥閲録8福原対馬/『閥閲録1』、『福岡市史資料編　中世2』P721	長井貞広		
		参考	応永4年6月		歴代鎮西要略5/『門司市史』P49			大内義弘、門司城を攻め、城主大錦和泉守を敗走させる。
		(5)	文明9年4月5日		門司文書30/『門司文書』P42	大内政弘	門司彦九郎	門司彦九郎が「門司」に在城して奮闘した事を賞す。
		(6)	(年不詳)4月23日	赤川就久・仁保隆慰連署書状	防府天満宮文書43/『山口県史 史料編中世2』P497	(仁保)隆慰、(赤川)就久	(松崎東覚坊)	当坊御拘安養寺領の半済については、「当御城(門司城)衆」品川豊次が数年知行していたことを伝える。
		参考	天文23年秋		九州諸将軍記1/『門司市史』P50・P51			小早川隆景、大友方の奴留湯主水が守る門司城を攻めてこれを攻略。しかし10月には再度大友方から門司城を奪取され、毛利方は撤退す。
		参考	(天文23年)		陰徳太平記/『小倉市史』P66			大友義鎮、弘治三年の大内義長自害の後、奴留湯主水正を門司城に入れる。その後、毛利元就、小早川隆景をもって、門司城を攻め、城を奪取、仁保就方を城督とす。
			(天文23年ヵ)		後太平記/『小倉市史』P71			大友氏、「門司の城」を攻めることを決定す。
		参考	弘治3年		歴代鎮西要略7/『門司市史』P56・P57			小早川隆景・吉川元春、数万の兵を率いて門司城を攻め落とす。
		参考	永禄2年		歴代鎮西要略7/『門司市史』P57・P58			毛利方柳澤監物、「城相」(「城代」ヵ)として門司城に在城。
		(7)	(永禄2年)8月3日	大友義鎮書状写	末永文書/『大分県先哲叢書　大友宗麟2-590』P215	(大友)義鎮	弥富右衛門尉殿	「門司」「花尾」に敵が立て籠もっている。
		(8)	(永禄2年)8月21日	大友義鎮書状	大友家文書録2-1439/『大分県史料32』第2部補遺4P293		田原常陸介(親宏)殿	「西郷遠江守要害」における軍功を賞し、併せて未だ落城していない「門司」「花尾」「高春岳」の攻略を命ずる。
		(9)	(永禄2年)9月2日	大友義鎮書状	佐田文書205/『熊本県史料　中世編2』P286	(大友)義鎮	安心院中務大夫(興正)殿、佐田弾正忠(隆居)殿	「門司」「花尾」の残党の追討を田原親宏、親賢に命ずると同時に「馬岳城」の勤番についても肝要であると両名へ伝える。
		参考	永禄2年9月26日		吉田物語7/『門司市史』P61～P63			城番の仁保右衛門太夫が守る門司城を大友方が攻撃。
		(10)	(永禄2年)10月1日	大友義鎮書状	橋津文書/『大分県先哲叢書　大友宗麟2-633』P244	(大友)義鎮	安心院中務太輔殿、佐田弾正忠殿、其外宇佐郡中衆	9月26日に「門司城」を攻めた際の「当郡衆」の戦功を賞す。
		(11)		大友義鎮感状	佐田家文書208/『熊本県史料　中世編2』P288		佐田弾正忠(隆居)	「門司要害」攻めの戦功を賞す。
		(12)	(永禄2年)10月2日	臼杵鑑速感状	佐田家文書209/『熊本県史料　中世編2』P289	(臼杵)鑑速		「門司要害」攻略の際に波多野大和守等毛利方の武将を討ち取った事を賀す。
		(13)	(永禄2年)10月3日	田原親賢感状	佐田家文書210/『熊本県史料　中世編2』P289	(田原)親賢	佐田弾正忠(隆居)	「門司要害」攻めにおける奮戦を賞す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	門司城	(14)	(永禄2年)10月3日	毛利隆元感状写	萩藩閥閲録145久芳庄右衛門／『北九州市史　古代中世』P1244	(毛利)隆元		門司要害普請の忠節を賞する。
		(15)	永禄2年10月15日	毛利隆元安堵状写	萩藩閥閲録157波多野清左衛門1／『閥閲録4』P239、波多野家文書15／『山口県史 史料編中世4』P603、福原家文書30／『福原家文書 上巻』P370	御判(毛利隆元)	波多野亀寿丸殿	9月26日に「門司城」に大友勢が攻めてきた際に戦死した波多野興滋を賞す。
		(16)	(永禄2年ヵ)12月19日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門15／『閥閲録2』P468	(毛利)元就、(毛利)隆元	仁保右衛門太夫	仁保右衛門太夫、「門司要害城番」に任命され、併せて規矩郡全体の代官職にも任命される。
		(17)			萩藩閥閲録60仁保太左衛門16／『閥閲録2』P468			豊前国企救郡内の柳・大積・片野の3ヶ所は、「門司要害」に近いため城番の仁保にこれを預ける。
		(18)	(永禄3年ヵ)2月16日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門18／『閥閲録2』P469	(小早川隆景)	長筑(長井親房) 兒三右(児玉元良)	先年、仁保隆慰が「門司在番」に任命された時に約諾に関する案文等を豊中(豊嶋ヵ)に伝えさせた。
		(19)	(永禄3年ヵ)4月11日		波多野家文書17／『山口県史 史料編中世4』P604	隆元御判(毛利隆元)	波多野亀寿殿	父兵庫允の「門司要害」の討死の賞として、長門国厚東郡須恵内十石足地を宛遣わす。
		(20)	永禄3年11月28日	田原親宏知行預状	足立悦雄文書37／『大分県史料26』第4部P30、『行橋市史資料編　中世』P196	(田原親宏)	足立下総守天性女	父下総守助秀が「門司要害」で戦死した事を賞し、豊前国京都郡等で領地を預けさせる。
		(21)	永禄4年6月16日		萩藩閥閲録157柿並次郎兵衛1／『閥閲録4』P246、『行橋市史資料編　中世』P198	(毛利)隆元	柿並九郎殿	豊前国規矩郡内で20石、仲津郡内で10石を給地として与え、仁保隆慰からも追って説明させる。さらに(門司城の)在番についても肝要であると述べる。 ※萩藩閥閲録160-2岩武寿仙3の記述内容から門司城の在番の事と推測。
		(22)			萩藩閥閲録160-2萩町人岩武寿仙3／『閥閲録4』P304、『行橋市史資料編　中世』P198		岩武対馬守(良秀)殿	豊前国規矩郡内と仲津郡内で65石を給地として与え、仁保隆慰からも追って説明をさせる。さらに(門司城の)在番についても肝要であると述べる。 ※萩藩閥閲録160-2岩武寿山14の記述内容から門司城の在番の事と推測。
		(23)	(永禄4年)6月23日	毛利隆元書状写	萩藩閥悦録160-2萩町人岩武寿仙14／『閥閲録4』P305、福原家文書90／『福原家文書 上巻』P384		粟屋右京亮(元親)殿	岩武対馬守の「門司要害」在番を忠節であると賞す。
		(24)	(永禄4年)7月3日	田原親賢感状	佐田文書／『北九州市史　古代中世』P1246	(田原)親賢	佐田弾正忠(隆信)	門司要害を切り登った軍功を賞す。
		参考	永禄4年8月		歴代鎮西要略7／『門司市史』P58・P59			門司城を巡って毛利方と大友方が合戦す。
		(25)	(永禄4年)8月2日		萩藩閥閲録109門司弥次右衛門3／『閥閲録3』P344	(毛利)元就	門司左近将監(親胤)殿、門司中務丞(親国)殿、門司尾張守(重盛)殿	「門司城勢」の在番の状況について仁保と長井から書状が来て確認し、その働きを賞す。
		参考	永禄4年9月		陰徳太平記／『小倉市史』P67			大友義鎮、毛利氏に奪取された「門司ノ城」奪還のため、大友氏家臣ら「一万五千余騎」を差し向ける。また、毛利元就、これを受けて毛利隆元・小早川隆景を大将として、「一万八千余騎」を催し、両将「門司ノ城」に入る。
		(26)	(永禄4年)9月20日	毛利隆元書状	堀立家証文写37／『内海文化研究紀要』16号P98	(毛利)隆元	堀立壱岐守殿	敵が「門司要害」の近くに布陣したのに対し、堀立が入城した事について市川・児玉から報告があり、その事を神妙であると賞す。
		(27)	(永禄4年)10月8日	大友義鎮書状写	大友家文書録2-1435／『大分県史料32』第2部補遺4P293	(大友)義鎮	小田原左京亮殿	「門司一城」守備に付き馳走して励ます。
		(28)			宇都宮文書／『大分県先哲叢書　大友宗麟2-686』P286		佐田弾正忠(隆居)殿、安心院中務大輔(興生)殿、其他宇佐郡衆中	
		(29)	(永禄4年)10月13日	毛利隆元感状写	浦家文書写19／『大日本古文書家分け11-2』P61、福原家文書57／『福原家文書 上巻』P377	(毛利)備中守隆元	乃美兵部丞(宗勝)殿	今月10日に「門司要害」に攻めてきた敵との合戦で勝利した事を賞す。
		(30)	(永禄4年)10月22日	毛利元就書状写	福原家文書60／『福原家文書 上巻』P378	(毛利)元就	児玉三郎右衛門尉(就忠)殿	今月10日の「豊前門司」における豊後衆との合戦での活躍を賞す。
		(31)	(永禄4年)10月29日	毛利元就書状写	萩藩閥閲録134浦四郎兵衛2／『閥閲録3』P827、福原家文書58／『福原家文書 上巻』P377	(毛利)隆元	乃美新四郎(元信)殿	今月10日の「門司」での合戦における働きを賞す。
		(32)	(永禄4年)10月晦日	毛利隆元書状写	福原家文書61／『福原家文書 上巻』P378		児玉三郎右衛門尉(就忠)殿	今月10日の豊後衆との合戦の時の活躍を賞す。
		(33)	(永禄4年)11月5日	毛利隆元書状写	福原家文書70／『福原家文書 上巻』P380		児玉内蔵丞(就方)	去26日の合戦(門司合戦)における活躍を賞す。
		(34)	(永禄4年)11月6日	毛利隆元書状	堀立家証文写38／『内海文化研究紀要』16号P98		堀立壱岐守殿	先月10日の「門司要害」麓での合戦において、堀立の中間である助左衛門の働きを賞す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	門司城	(35)	(永禄4年)11月6日	毛利元就書状	福原家文書68／『福原家文書 上巻』P379	(毛利)元就	児玉内蔵丞(就方)殿	毛利元就、児玉就方の去26日「門司表合戦」における活躍を賞す。
		(36)	(永禄4年)11月6日	毛利元就書状	福原家文書69／『福原家文書 上巻』P380	(毛利)元就	児玉内蔵丞(就方)殿	毛利元就、児玉就方の去26日「門司・八幡表合戦」における活躍を賞す。
		(37)	(永禄4年)11月8日	吉見正頼感状写	萩藩閥閲録143吉賀惣左衛門3／『閥閲録4』P79、福原家文書82／『福原家文書 上巻』P382	(吉見)正頼	吉賀惣左衛門(頼貞)殿	「門司要害」での合戦において敵である大友軍が敗走した際にこれを追撃して豊前国沼ノ江において敵1名を討ち取った事を賞す。
		(38)	(永禄4年)11月9日	毛利隆元書状	寄組村上家文書12／『山口県史 史料編中世3』P519	(毛利)隆元	村上掃部頭(武吉)殿	「門司表」(門司城)における大友氏と毛利氏との合戦に関して、大友方が撤退したことを賞す。
		(39)	(永禄4年)11月19日	毛利元就書状	毛利博物館蔵文書(円楽坊文書)9／『山口県史 史料編中世2』P698	(毛利)元就	円楽坊	毛利元就、円楽坊に対し、「門司表」より豊後衆が退散したことを伝える。
		(40)	(永禄4年)11月28日	小早川隆景書状	寄組村上家文書56／『山口県史 史料編中世3』P532	(小早川)隆景	村上掃部頭(武吉)殿	「門司表」(門司城)における大友氏と毛利氏との合戦に関して、村上武吉の活動を賞す。
		(41)	永禄4年12月2日	小早川隆景感状	宇野文書／『愛媛県史』P976	(小早川)隆景	宇野八郎殿	「門司城後詰」において敵数輩を討ち取った。
		(42)	(永禄4年)12月3日	毛利隆元書状写	福原家文書71／『福原家文書 上巻』P380	(毛利)隆元	児玉内蔵丞(就方)殿	毛利隆元、児玉就方の去10月26日の「門司・八幡面合戦」における活躍を賞す。
		(43)	(永禄4年)12月13日	毛利隆元感状写	福原家文書59／『福原家文書 上巻』P377	(毛利)隆元	乃美新四郎(元信)殿	去10月10日豊後衆と舎兄兵部丞(乃美宗勝)との合戦に関する乃美元信の活躍を賞す。
		(44)	(永禄4年)12月21日	大友義鎮感状	一万田文書／『北九州市史　古代中世』P1247	(大友)義鎮	一万田治部少輔殿	「門司平城口」での防戦の際に、僕従1人が負傷したことに対する感状。
		(45)	(永禄4年)12月20日	毛利隆元書状	毛利博物館蔵文書(有馬家文書)3／『山口県史 史料編中世2』P687	(毛利)隆元	有馬余四郎(世澄)とのへ	毛利隆元、去月5日夜に「門司表」から豊後衆敗軍の時、追い懸け敵一人を討ち取ったことを賞す。
		(46)	(永禄4年)12月23日	毛利隆元書状	末国家文書31／『山口県史 史料編中世3』P1065	(毛利)隆元	末国善十郎(元光)殿	去月25日の夜、門司城における毛利と大友との合戦において、大友の豊後衆を破り、その際、追い懸け敵一人を討ち取ったことを賞す。
		(47)	永禄4年12月23日	毛利隆元感状写	福原家文書80／『福原家文書 上巻』P382	(毛利)隆元	増原弥四郎(元澄)殿	毛利隆元、増原元澄の去月5日夜に門司表より豊後衆敗軍の時、追い懸け、敵一人を討取ったことを賞す。
		(48)	(永禄5年ヵ)1月10日	乃美宗勝書状	寄組山田家文書104／『山口県史 史料編中世3』P616、福原家文書65／『福原家文書 上巻』P379	(乃美)宗勝	山田民部丞(満重)殿	去10日門司表合戦に関する書状。
		(49)	(永禄5年)1月26日	毛利元就書状	寄組村上家文書4／『山口県史 史料編中世3』P517	(毛利)元就	村上掃部頭(武吉)殿	「門司表」(門司城)における大友氏と毛利氏との合戦に参加し、勝利を得たことを賞する。
		(50)	(永禄5年)1月26日	毛利隆元書状写	福原家文書77／『福原家文書 上巻』P381	(毛利)隆元	(渡辺太郎左衛門)	追而書には、「渡辺小三郎」の「門司表」における活躍と感状が出されたことを記されている。
		(51)	(永禄5年)1月28日	毛利隆元書状	寄組村上家文書10／『山口県史 史料編中世3』P518	(毛利)隆元	村上掃部頭(武吉)殿	「門司表」(門司城)における大友氏と毛利氏との合戦がおこなわれたことを示す。
		(52)	(永禄5年)2月14日	毛利元就・毛利隆元連署書状写	福原家文書92／『福原家文書 上巻』P385	(毛利)隆元、(毛利)元就	門司左近将監(親胤)殿	毛利元就・同隆元、門司親胤の「旧冬其表」(門司)における合戦の活躍を賞す。
		(53)	(永禄5年)2月14日	毛利元就・毛利隆元連署書状	御郷家文書3／『山口県史 史料編中世2』P666、福原家文書94／『福原家文書 上巻』P385	(毛利)隆元、(毛利)元就	右田伊豆守(重政)殿	毛利元就・同隆元、右田重政の「旧冬門司表」における合戦の活躍を賞す。
		(54)	永禄5年4月7日	毛利元就感状写	福原家文書72／『福原家文書 上巻』P380	(毛利)元就	大多和惣兵衛尉(就重)殿	毛利元就、大多和就重の去年10月26日の「豊前門司表」における大友氏豊後衆との合戦において一番鑓を担い、活躍したことを賞す。
		(55)	永禄5年4月7日	毛利元就感状写	福原家文書73／『福原家文書 上巻』P380	(毛利)元就	桑原宗左衛門(竜秋)殿	毛利元就、桑原竜秋の去年10月26日の「豊前門司表」における大友氏豊後衆との合戦において一番鑓を担い、活躍したことを賞す。
		(56)	(永禄5年)7月16日	毛利隆元・同元就連署条々事書	山田家文書／『福岡市史　資料編　中世2』P942、『行橋市史資料編　中世』P204、寄組山田家文書137／『山口県史 史料編中世3』P626	(毛利隆元)、(毛利元就)	市式(市川経好)、財新(財満忠久)、坂新(坂元祐)	高橋鑑種、「門司」まで攻め寄せ、杉連緒は「香春岳」を所有し、「松山」以下を手に入れる。また杉連緒、「香春岳」で50日も60日も敵を食い止めて持ちこたえる。
		(57)	(永禄5年ヵ)9月16日	志賀親度書状	田尻文書20／『大分県史料13』第2部P241	(志賀)親度	田尻三河守殿	「門司要害」取り崩しに油筒を贈れるを謝す。
		(58)	(永禄5年ヵ)9月17日	臼杵鑑速書状	田尻文書21／『大分県史料13』第2部P241	(臼杵)鑑速		「香春岳」が落城した際には足立岳の麓に陣を構えていたが、今回は急ぎ門司へ移動して陣を構えるように。そうすれば「彼城(門司城)」は落城するであろう。
		(59)	(永禄5年)10月3日	毛利隆元書状	冷泉家文書44／『山口県史 史料編中世2』P954、萩藩閥閲録102−1冷泉五郎8／『閥閲録3』P209	(毛利)隆元	冷泉五郎(元豊)殿	「門司要害」普請の辛労を労う。
		(60)	永禄5年10月16日	毛利隆元書状写	福原家文書63／『福原家文書 上巻』P378	(毛利)隆元	児玉小二郎(元良)殿	毛利隆元、児玉元良に対し、三戸善兵衛の昨年「門司表」における活躍を児玉就忠が申通したことを伝える。
		(61)	(永禄6年)1月23日		萩藩閥閲録138兼重勘左衛門9／『閥閲録4』P6	(立雪斎)恵心以下8名	桂左衛門大夫(元忠)殿	「香春岳」破却は杉連緒の荷物の搬出もある事から1月16日から23日へ延期。また、秋月氏や長野氏といった近郷の国衆勢が「門司要害」下まで攻めてくるだろうから、この事を含め聖護院門跡へ報告する。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	門司城	(62)	永禄6年6月1日	毛利隆元感状写	福原家文書74／『福原家文書 上巻』P380	(毛利)隆元	弘中民部丞(方明)殿	毛利隆元、弘中方明の去々年の「門司面」における豊後衆との合戦において、警固せんがため児玉就方と同心して活動したことを賞す。
		(63)	(永禄6年)7月18日	毛利元就同隆元連署状	毛利家文書638／『大日本古文書家分け8-2』P351	(毛利)元就、(毛利)隆元		「門司之城」「香春嶽」両城及び規矩郡と田川郡の事はしっかり調べるというので報告するには及ばない。
		(64)	(永禄6年)12月2日	毛利元就書状	冷泉家文書18／『山口県史 史料編中世2』P947、萩藩閥閲録102-1冷泉五郎50／『閥閲録3』P217	(毛利)元就	冷泉四郎(元満)殿	「門司要害」へ加番として下向しその軍労を労う。
		(65)	(永禄8年)4月12日		萩藩閥閲録102-2冷泉五郎75／『閥閲録3』P224		立雪(国清寺恵心)、赤川左(元保)、市川(経好)	防長に残っている家臣を出雲に出陣させる事にしたが、この内冷泉元満は門司に残して「門司城番」を申付けた。
		(66)	(永禄8年)11月23日		萩藩閥閲録140坂新五左衛門1／『閥閲録4』P53		坂新五左衛門尉(元祐殿)	長野表に大友軍が在陣しているが、新五左衛門の妻が「門司城」の事を気遣い、また新五左衛門自身も別に心付けをしている事を賞す。
		(67)	(永禄11年)5月22日		萩藩閥閲録125内藤新右衛門29／『閥閲録3』P688		内藤越後守(就藤)殿	長野氏を攻めるため豊後衆が出陣してきたが、長州表の防衛については「門司」が重要である。
		(68)	(永禄11年)11月5日		萩藩閥閲録123大多和惣兵衛11／『閥閲録3』P628	(毛利)輝元、(毛利)元就	大多和宗兵衛殿(就重)、粟屋宗右衛門殿(元久)	「門司」に籠もっている者達について、明日中に城から退出せずに籠もっている者がいればすぐにその者達の領地を両人が受け取る事。
		(69)			萩藩閥閲録123大多和惣兵衛12／『閥閲録3』P628	(毛利)輝元	大多和宗兵衛殿(就重)、粟屋宗右衛門殿(元久)	「門司要害」番の者について、誰も退出せずに籠もっているならば、その者達の家人を放ち、領地も没収する事。
		(70)	(永禄12年)2月12日	毛利元就書状	冷泉家文書59／『山口県史 史料編中世2』P957、萩藩閥閲録102-1冷泉五郎8／『閥閲録3』P211	(毛利)元就	冷泉民部大輔(元満)殿、長井右衛門大夫(元為)殿、仁保右衛門大夫(隆慰)殿	門司城の普請と諸仕度について(冷泉等が出した書状を)預かり承知する。
		(71)	(永禄12年)2月20日		萩藩閥閲録47南方九左衛門40／『閥閲録2』P39	(毛利)輝元	上総介(桂元忠)殿	「門司城」に大友氏と高橋鑑種が一緒になって攻めてきたとの事だが、このような事は珍事であり、あってはならない事である。
		(72)	(永禄12年ヵ)4月6日	毛利輝元袖判毛利氏奉行人連署書状	石津家文書3／『下関市史 資料編Ⅳ』P690、石津家文書6／『山口県史 史料編中世4』P268	(毛利)輝元・国司右京亮元武・粟屋宗左衛門尉就秀・粟屋掃部助元真	国司雅楽允(就信)殿・井上善兵衛尉(元直)殿・黒河三河守(著保)殿	門司要害に熊谷平太郎・同彦二郎・同将監を籠城させ、食料50日分を準備するよう命じる。
		(73)	(永禄12年)5月8日		萩藩閥閲録125内藤新右衛門13／『閥閲録3』P685	(毛利)輝元	内藤越後守(就藤)	突然の事であるが、「門司城番」として籠城する事。
		(74)	(年不詳)7月25日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門17／『閥閲録2』P468		仁保常陸介(隆慰)殿	豊前国企救郡柳郷の件について「門司」登城以来、元就・隆元が裁許していたが、その後隆元の証判を紛失した。その際杉豊後守が「香春岳」に在城していたので、一旦その事を伝えておいた。
		(75)	(永禄12年)8月21日		萩藩閥閲録102-1冷泉五郎25／『閥閲録3』P212		冷泉民部少輔殿	「門司」について懸念しており、苦労しているであろうが、早く登城する事が大事である。
		(76)	(永禄12年)10月28日	毛利元就・同輝元袖判同氏奉行人連署書状	冷泉家文書19／『山口県史 史料編中世2』P947、萩藩閥閲録102-1冷泉五郎51／『閥閲録3』P217	(毛利元就・毛利輝元の袖判有)(国司右京亮)元武、(粟屋惣兵衛尉)就秀、(井上但馬守)就重、(児玉三郎右衛門)元良	正覚寺(守恩)	冷泉元満、「門司御城番」を勤める間、冷泉の所領にかかる諸天役や段銭を免除する。
		(77)		吉弘鑑理書状	無尽集所文書／『福岡市史 資料編 中世2』P845	吉弘左近大夫鑑理	立花勤番各御中御陣所	「松山」「香春岳」等が落城し、「門司籠城衆」も詫び言を入れて降伏する。
		(78)	(永禄12年)11月9日	毛利元就・毛利輝元連署書状	冷泉家文書20／『山口県史 史料編中世2』P948	(毛利)元就、(毛利)輝元	冷泉民部少輔(元満)殿	毛利元就・毛利輝元、冷泉元綱に対し、早々に「門司表」に至り、下向することを伝える。
		(79)	(年不詳)2月5日	毛利元就同隆元連署書状	堀立家証文写35／『内海文化研究紀要』16号P98	(毛利)隆元・(毛利)元就	堀立壱岐守殿	「門司要害」不慮の際に、堅固に執り拵え、相違なく踏み静めたことを賞す。
		(80)	(年未詳)2月10日	小早川隆景書状	堀立家証文写76／『内海文化研究紀要』16号P105	(小早川)隆景		兵糧・煙硝・玉以下、仁保隆慰に預け、「門司」・南部山城の守備に緩みがない事を神妙であると評す。
		(81)	(年不詳)2月23日		萩藩閥閲録160-2萩町人岩武寿仙1／『閥閲録4』P303	(毛利)輝元	岩武対馬守(良秀)殿	「門司城番」として長期間在陣している事を労う。
		(82)	(年不詳)3月5日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門19／『閥閲録2』P469	(毛利)輝元	仁保常陸介	「門司在番」について元就・隆元が定めた事を現在でも相違なく守る事。
		(83)	(年不詳)3月27日	剣持家久書状写	剣持家文書17／『山口県史 史料編中世2』P250	(剣持)家久	粟屋弥二郎(元勝)	去年の御帰陣の砌より、「門司御城番」を仰せつけらる。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	門司城	(84)	(年不詳)3月27日		「譜録」み43三戸次久1／有川宜博「山口県文書館所蔵「譜録」に見える九州関係新出文書の紹介」『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告B類歴史』9号P36(47)	(小早川)隆景	水野源七郎(元久)殿	各々「門司在番」を堅く勤めているとの事で尤も重要な事である。
		(85)	(年不詳)4月6日		萩藩閥閲録52兼重五郎兵衛32／『閥閲録2』P319	(毛利)輝元	兼重左衛門尉(元宣)殿	「門司番衆」の事は重要であるので粟屋元通や熊谷信直を急いで派遣する。
		(86)	(年不詳)4月8日		萩藩閥閲録140市川三右衛門4／『閥閲録4』P47	(毛利)輝元	市川式部少輔(経好)殿	「門司衆」の事について続目の判の事に関する報告を受けて心得る。
		(87)	(年不詳)8月2日	毛利元就書状	門司文書59／『門司文書』P79、門司文書59／『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P418	(毛利)元就	門司左近将監殿、門司中務丞殿、門司尾張守殿	門司城に入った仁保隆慰・長井親房の指揮下に、門司一族がそれぞれの宅所に籠もって門司の在番を果たした事に対する感謝を述べたもの。
		(88)	(年不詳)9月27日	毛利元就書状	堀立家証文写30／『内海文化研究紀要』16号P97	(毛利)元就	平佐源七郎(就之)殿	「門司要害」に籠城しているとの掘立壱岐守からの注進状が来たので確認した。
		(89)	(年不詳)10月9日	田原親宏感状	足立悦雄文書34／『大分県史料26』第4部P28、『行橋市史資料編　中世』P194	(田原)親宏	田代弥七郎殿	小倉津・「西郷遠江守要害」での働き及び「門司要害」を攻めた時に負傷した事を賞す。
		(90)	(年不詳)10月15日	毛利輝元書状	「譜録」み43三戸次久5／有川宜博「山口県文書館所蔵「譜録」に見える九州関係新出文書の紹介」『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告B類歴史』9号P35(48)	(毛利)輝元	児玉三郎右衛門(元良)殿	「門司城番」として勤務している水野善兵衛尉の辛労を労う。
		(91)	(年不詳)12月1日		萩藩閥閲録107赤川次郎左衛門16／『閥閲録3』P319		赤川次郎左衛門尉殿	「門司」火事の時に急いで駆け付けた事について賞し、その上で門司城の在番も緩みなく勤める事が大事であると述べる。
		(92)		毛利輝元書状	堀立家証文写59／『内海文化研究紀要』16号P102	(毛利)輝元	堀立壱岐守殿	「門司」火事の時に急いで駆け付けた事について賞し、その上で門司城の在番も緩みなく勤める事が大事であると述べる。
		(93)	(年月不詳)26日		萩藩閥閲録21宍戸四郎五郎／『閥閲録1』P6	(毛利)輝元公	善兵(宍戸元行)、佐右(佐世元嘉)、三澤(為虎)、和因(和智)	「門司」を始めとする4つの城に配備する鉄砲の覚書。特に「門司」に関しては普請が重要と記すと共に、鉄砲100を配備し、そのうち20は中筒として台が付いていないようにする事と指示。加えて町人からも人質を取り、兵粮・弾薬も配備するように指示。
		参考		伊藤家系図	伊藤家(亀谷)文書			伊藤興忠は元亀元年2月15日に毛利方に属して、門司要害合戦で戦死した。
		参考			後太平記35／『門司市史』P71・P72			大友氏、毛利方の仁保隆康が守る門司城を攻める。南蛮船を動員して海上から砲撃を加える。
		(94)	天正3年3月		中書家久公御上京日記／『山口県史 史料編中世1』P690			小森江という場所の付近、口の瀬のならびに「文字の城」有り。
		(95)	天正3年4月3日	堀立直正申状	山口県文書館所蔵文書／『福岡市史　資料編　中世2』P894、堀立家証文写50／『内海文化研究紀要』16号P100、山口県文書館所蔵文書(堀立家証文写)3／『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』P394	堀立壱岐守直正	国司右京亮(元武)殿、児玉三郎右衛門尉(元良)殿	大友軍、「門司害容」へ攻めて来た際に、城内に防長衆がいなかったため、財満越前守、長梅軒、私が防戦に努めたがその内容については長梅軒に尋ねられる事。
		(96)	天正7年9月28日	長野助守覚書	神代長野文書5／『北九州市立歴史博物館研究紀要2』P68	(長野)助守		(長野)助守の人質「門司御城」堪忍の事
		(97)	(天正14年)4月10日		毛利家文書949／『大日本古文書家分け8-3』P227	(豊臣秀吉)	毛利右頭守殿	「門司」「麻生」「宗像」「山鹿」の各城に兵と兵粮を入れるように命ずる。
		(98)	(天正14年)7月22日	毛利輝元書状	毛利博物館蔵文書(諸家文書)17／『山口県史 史料編中世2』P749	(毛利)てる元	平藤右(平佐就之)	毛利輝元、平佐就之に「門司番屋其外番衆以下之儀」について、心元なきことを伝える。
		(99)	(天正14年)7月25日		萩藩閥閲録57渋谷九右衛門5／『閥閲録2』P408	(毛利)輝元	長筑(長井親房)、二　太右(二宮就辰)、三　与三(三輪元徳)、神惣(神田元忠)	「門司」に敵が攻めてきた際は5日内に撃退するように申し合わせる事。ここは堅固なので防長の守りであるのは言うには及ばない。
		(100)	(天正14年ヵ)8月1日		萩藩閥閲録60仁保太左衛門5／『閥閲録2』P467	(仁保)隆慰		仁保元豊を「門司」に在城させる。
		(101)	(天正14年)8月3日		萩藩閥閲録28渡邊太郎左衛門12／『閥閲録1』P685	(豊臣)秀吉	吉川駿河守(元春)との	一刻も早く「門司要害」に入り守備する事。
		(102)	(天正14年)8月5日	豊臣秀吉覚書	黒田家文書59／『黒田家文書1』本編P135		安国寺、黒田勘解由殿、宮木入道殿	豊後と「門司之要害」との間、或いは関戸と「門司之要害」の間の通行は確保しておく事。また、急ぎ「門司之要害」へ先発勢を入城させる事。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K1	門司城	(103)	天正14年8月11日		萩藩閥閲録55国司与一右衛門53／『閥閲録2』P380	(児玉三郎右衛門尉)元兼、(長井右衛門大夫)元親、(児玉東市允)元貫、(内藤興三右衛門尉)元栄	国司対馬守殿、黒川兵部丞殿、国司雅楽允殿	「門司」に入れる者の名前を挙げる。
		(104)	天正14年9月25日	豊臣秀吉朱印状	黒田家文書63／『黒田家文書1』本編P146	(豊臣秀吉)	安国寺、黒田官兵衛殿、宮木入道殿	「門司」、「赤間」の城普請を申し付けたとの事尤もである。
		(105)		吉川元春書状	阿川毛利家文書／『福岡市史　資料編　中世2』P11、萩藩閥閲録5毛利宇右衛門12／『閥閲録1』P53、阿川毛利家文書8／『山口県史　史料編中世3』P91	吉川元春	仁保元棟	今月28、29日には下関から「門司之要害」の麓に各軍渡り、人数を揃えてから小倉に向かう事。
		(106)	天正14年10月3日	豊臣秀吉書状	黒田家文書64／『黒田家文書1』本編P148	(豊臣秀吉)	安国寺、黒田官兵衛殿、宮木入道殿	毛利輝元は「門司之要害」に在城させる事。
		(107)	(天正14年ヵ)10月23日		萩藩閥閲録67高須惣左衛門10／『閥閲録2』P575	(毛利)輝元	高須惣左衛門尉殿	豊筑の事について「門司」より書状が届いたので、確認した上でこちらから書状を「門司」へ遣わす。
		(108)	天正14年12月29日		黒田家文書76／『黒田家文書1』本編P182	(豊臣秀吉)	黒田官兵衛	正月25日に宇喜多秀家を派遣するので、そちらに到着次第、「関戸」及び「門司城」を渡す事。
		参考	天正14年		陰徳太平記／『門司市史』P95			毛利家、三浦兵庫助を大将として三刀屋正左衛門・桂兵部丞・福間彦右衛門等3000人を門司城に派遣。
		(109)	天正15年3月16日		黒田家文書81／『黒田家文書1』本編P191	(豊臣秀吉)	黒田勘解由殿	「小倉」に在城している豊臣秀勝軍の内、500人は「門司要害」に残す事。
		(110)	天正15年3月20日		黒田家資料「秀吉公御書附大和大納言秀長書状之写」			今月24日・25日には「小倉」・「門司」へ移る事。
		(111)	慶長5年8月28日	松井康之列書状案	松井文庫文書445／『松井文庫所蔵古文書調査報告書3』P58	(松井康之)	加々山少右衛門殿、牧新五殿	毛利勝信、門司城の維持が出来ないため、同城には毛利輝元の軍勢が入り、守備をする。
		(112)	(慶長6年)6月1日	細川忠興書状	山田氏所蔵文書14／『熊本県史料　中世編3』P386	(細川忠興)	松井(康之)殿、(加賀山興良)隼人殿	無用の疑いをかけられるのを避けるため、「門司」「香春」等の普請を一旦中止する事。また、「小倉」の石垣普請も中止する事。
		(113)	(慶長6年)9月11日		松井文庫文書334／『松井文庫所蔵古文書調査報告書2』P102		松井佐渡守(康之)殿	「もし」「かんた」「小倉」「香春」「かんしやく」の作事・普請の状況を伝える。
		(114)	元和元年閏6月29日	書状	細川家史料103／『大日本近世史料　細川家史料1』P130		内記殿	諸国城割の触れが29日に来たので今日より「門司之城」の城割に取りかかる事。
K2	小倉城	(1)	観応3年3月23日		萩藩閥閲録71小野貞右衛門20／『閥閲録2』P649	(今川)了俊		「小倉城」にて合戦す。
		(2)	永享3年9月24日		満済准后日記／『山口県史 史料編中世1』P96			故徳雄入道(大内盛見)、「小倉ト云所」に候ず。
		参考	永禄4年9月		陰徳太平記／『小倉市史』P68			大友義鎮が毛利氏に奪取された「門司ノ城」奪還のために差し遣わした大友氏家臣ら「一万五千余騎」、「小倉城」に着す。
		(3)	(永禄12年)11月	大友宗麟感状		(大友)宗麟	田北左近将監(鑑忠)殿	高橋鑑種、大友方に降伏。宗麟これを許し、鑑種の領地を減らして規矩郡を預けて「小倉城」に入れる。
		(4)	(永禄12年)2月12日	小早川隆景書状	住吉神社文書75／『山口県史 史料編中世4』P406	(小早川)左衛隆景	市伊(市川経好)	「小倉城」の掻楯板として、一宮御神領吉母浦寄船を所望。
		(5)	(永禄12年)4月20日	毛利輝元袖判同氏奉行人連署書状	住吉神社文書76／『山口県史 史料編中世4』P406	国司右京亮元武、栗屋宗兵衛尉就秀、栗屋掃部助元	一宮大宮司殿	小倉津において、一城を築くことを仰せつけらる。
		(6)	(永禄12年)8月7日	毛利氏奉行人書状	右田毛利譜録7／『広島県氏 古代中世資料編Ⅴ』P214	(栗屋)元眞	長松太郎左衛門殿、三宅内蔵助殿	栗屋元眞、長松太郎左衛門および三宅内蔵助に対し、小倉の番手を申し付けられたことを伝える。
		(7)	天正6年6月1日	宗像第一宮御宝殿置札	『宗像神社史上巻』P425			永禄12年、「小倉津」に平城を築き、南条勘兵衛を入れる。
		(8)	(天正14年)10月14日	豊臣秀吉書状	黒田家文書66／『黒田家文書1』	(豊臣秀吉)	安国寺、黒田勘解由殿	毛利輝元、10月3日に渡海し「小倉城」を包囲。4日元種降伏。
		(9)		羽柴秀吉直書	吉川家文書99／『大日本古文書家分け9-1』P72		吉川駿河守(元春)殿、小早川左衛門佐(隆景)殿、吉川治部少輔(元長)殿	
		(10)	(天正14年)10月19日		萩藩閥閲録158布施利左衛門2／『閥閲録2』P649	(毛利)輝元		「当城」(香春岳城)と「小倉」両城の普請多忙により番匠が過分に必要なので近在の番匠を悉く集める事。
		(11)	天正15年3月16日	豊臣秀吉朱印状	黒田家文書81／『黒田家文書1』本編P191	(豊臣秀吉)	黒田勘解由殿	「小倉」に在城している豊臣秀勝軍の内、500人は「門司要害」に残す事。
		(12)	天正15年3月20日		黒田家資料「秀吉公御書附大和大納言秀長書状之写」			今月24日・25日には「小倉」・「門司」へ移る事。
		参考			日本史／『山口県史 史料編中世1』P969			黒田官兵衛、下関から二里距のところにある「小倉という、敵の城」を包囲するために出発す。

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
K2	小倉城	(13)	天正20年10月1日		十六・十七世紀イエズス会日本報告集/『山口県史 史料編中世1』P1073	(ルイス・フロイス)	(イエズス会総長)	「小倉城」近くにきたルイス・フロイスを迎えに、二名のキリシタンが巡察師を迎えに来た。
		(14)	慶長5年10月4日		黒田家文書/『福岡市史 資料編 中世1』P773	(黒田)円清	(吉川)広家様	「小倉」には毛利家より番が派遣されているとの事だが、毛利勝信へは城を渡さないようにする事。
		参考	慶長5年		黒田家譜13/『新訂黒田家譜1』P443			黒田如水、西軍の毛利勝信の居城である「小倉の城」を包囲し、これを降伏させる。
		(15)	(慶長6年)6月1日	細川忠興書状	山田氏所蔵文書14/『熊本県史料 中世編3』P386	(細川忠興)	松井(康之)殿、(加賀山興良)隼人殿	無用の疑いをかけられるのを避けるため、「門司」「香春」等の普請を一旦中止する事。また、「小倉」の石垣普請も中止する事。
		(16)	(慶長6年)9月11日		松井文庫文書334/『松井文庫所蔵古文書調査報告書2』P102		松井佐渡守(康之)殿	「もし」「かんた」「小倉」「香春」「かんしやく」の作事・普請の状況を伝える。
K3	鬼ヶ城	(1)	(慶長6年)6月1日	細川忠興書状	山田氏所蔵文書14/『熊本県史料 中世編3』P386	(細川忠興)	松井(康之)殿、(加賀山興良)隼人殿	無用の疑いをかけられるのを避けるため、「門司」「香春」等の普請を一旦中止する事。また、「小倉」の石垣普請も中止する事。
		(2)	(慶長6年)9月11日		松井文庫文書334/『松井文庫所蔵古文書調査報告書2』P102		松井佐渡守(康之)殿	「もし」「かんた」「小倉」「香春」「かんしやく」の作事・普請の状況を伝える。
		(3)	(慶長6年)9月18日		松井文庫文書277/『松井文庫所蔵古文書調査報告書2』P72			「香春」で縄張りを行い、その後「岩石」へ向かい縄張りを行うように命じた。水の手は本丸に有り。
K4	香春藩庁	参考	慶応3年3月18日		『香春町史 上巻』P845～855			香春御茶屋を藩庁とし、香春藩が成立する。
K7	豊津藩庁	(1)	明治元年11月14日	藩庁御造営別記	『豊津町史史料編 豊津藩 歴史と風土 第4輯』P38～48			藩士から徴収した意見をふまえ、錦原にて家老小笠原内匠等が藩庁の位置を決めるため、縄張りを行う。翌年11月7日より政務の取扱いをはじめる。11月28日に知藩事小笠原忠忱が赤村より移住する。
K8	旭陣屋	参考	明治2年11月		『築上郡志』上巻P110～111			小倉新田藩主小笠原貞正が香春から移り、千塚原に旭城(旭陣屋)を建設する。

＜城館等伝承地＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
D9	佐伯陣(大将陣)	(1)	文亀元年8月13日		萩藩閥閲録170糟屋権六家来3/『閥閲録4』P498		門司弥次郎(依親)殿	「小馬岳城」の麓で大友勢、少弐勢と合戦した際に「佐伯陣」で軍功を立てた内容の注進を杉弘依から受け取る。

＜所在地が不明なもの＞

No.	名称	枝番	年月日	表題	史料(群)名/所載活字文献	差出	宛先	内容
F1	規矩城	(1)	康安2年11月 日	門司親尚軍忠状	門司文書/『北九州市史 古代中世』P1184、門司文書14/『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P388	(門司左近将監親尚)		康安2年8月28日の「規矩之城」での在陣、近隣での戦闘における軍忠を上申。
		(2)	貞治3年3月 日	下総親尚軍忠状	門司文書/『北九州市史 古代中世』P1186、門司文書17/『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P390	(下総左近将監親尚)		「去々年」に菊池武光の手の者が規矩に城郭を構えた。
		(3)	貞治4年4月 日	門司親尚軍忠状	門司文書/『北九州市史 古代中世』P1186、門司文書18/『増補改訂中世北九州落日の譜―門司氏史話―』P391	(門司下総左近将監親尚)		門司親尚、武藤美作守の手に属し、「規矩城」において合戦す。
		(4)	(永禄5年ヵ)2月21日	大友義鎮書状案	田尻文書/『宗像市史 史料編中世Ⅱ』P484	(大友)義鎮	大津留和泉守(惟貞)殿	「豊前国規矩表」に「悪党」が現れたので、惟貞にも「在城」を命じている。
F2	笠松城	(1)	観応3年6月	西郷有政軍忠状写	筑前西郷文書/『南北朝遺文 九州編3』P288(1069)			5月2日に大庭孫次郎以下「赤」「笠松」に城を構えて立て籠る。
		(2)	文和2年2月	平河貞家軍忠状	肥後平河文書/『南北朝遺文 九州編3』P314(1095)	平河貞家		文和元年6月9日に「赤庄」「笠松」の敵を攻める。
								文和元年6月9日に「赤」「笠松」の敵を攻める。
F3	猪嶽城	参考	応永13年1月26日	応永社家文書惣目録	宗像神社文書/『宗像市史 史料編中世Ⅱ』P19			「豊前国猪嶽合戦忠節」を京都に注進するという内容の応永13年1月26日付「大内殿盛見状」が応永年間に存在したことを示す。
F7	杉城	(1)	(永禄11年)6月28日	某感状	萱嶋文書43/『大分県史料10』第2部P261	(田原)親宏	萱嶋美濃守殿	「西大野宮山」に立て籠もる毛利勢との合戦での働き及び「杉」「西郷」両城における防戦を賞す。

Ⅶ　城館関連地名一覧

＜凡例＞

1　本章は、報告対象地域における城館に関連する地名を一覧にしたものである。

2　城館に関連する地名とは、城（シロ・ジョウ）・館（タチ・タテ）・屋敷・門・矢倉・園・垣内・土居（ドイ）・府・丸・蔵（クラ）・城戸（キド）・鍛冶・射場・的場・堀切のほか、武器あるいは合戦に関連すると思われる地名、あるいはその他城館に関連すると思われる地名を指す。

3　地名の抽出は、「明治十五年字小名調」（『福岡縣史資料第九・十輯』1938・39 年福岡県編集・発行）に掲載された地名を基本とし、これらに掲載されていない現在残る小字等の地名を補完的に追加したものである。地名の抽出に当たっては、服部英雄氏（福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査指導委員・九州大学名誉教授）が作成したデータを利用した。

4　現在、城館と判明しているものと直接つながりがある地名については、城名等を併記して明示した。なお、今回あげられた大半の地名には、中近世城館とは無関係のものが多数含まれていると考えられるが、それらの峻別は困難であり、また今後の調査研究の備えとして、あえてその全てを掲載することとした。

＜豊前国企救郡＞

【北九州市門司区】

旧村名（大字）	関連地名
柳	城山（豊前9. 柳城）・矢倉・弓場・ヲヲシ丸・亀屋敷・弓場ノ前・屋敷・門田・多堀・堀田・屋敷田・林屋敷・畑堀・屋敷ノ下・的場
新町	ヤクシ丸・屋敷・狭間・原屋敷
馬寄	金剛丸
東原町	節丸・弓田・ヤクラ
大里	堀・西狭間・狭間・町屋敷・屋敷根砂原・舊久留米屋敷・屋敷・砂原馬場・園田・園田門田・蔵田・石丸・鹿堀・金堀・堂堀・彌次郎丸
小森江	堀田・屋敷ノ下・屋敷・屋敷ノ下・屋敷下・堀田・外記殿山・角左衛門殿山・道林山左馬殿山・古屋敷・左馬殿山
弐拾町	鹿堀・惣別当・柿ノ木田・宝ノ前・金山・シヨブアン・中村屋敷・石丸・西屋敷・小金塚・居屋敷・内屋敷
楠原	濱屋敷・屋敷・居屋敷・門田・屋敷ノ下・庄右衛門屋敷・屋敷畑・馬之丞屋敷・ヲコンジユウ屋敷・中屋敷・屋敷脇・市丸・新堀・弓場・内屋敷・山伏屋敷・切通シ・神出屋敷・屋敷ノ前・堀揚・御処ノ前・門田・堀田・上屋敷・花ノ山屋敷ノ内・殿イ藤屋敷・弓場・カシヤ下屋敷・馬場・屋敷畠・寺屋敷・トウハ屋敷・原屋敷・シヨケ屋敷・弓場屋敷・一丸・屋敷内
門司	古城山（豊前K1.門司城）
喜多久	屋敷・下屋敷・黒ノ屋敷・丸・源場屋敷・古屋敷・小屋敷・古屋敷
黒川	屋敷・木戸・内屋敷・下屋敷・垣外・垣外南・門田・園田・廣丸・古屋敷・柳ガ丸・屋敷ノ上
平山	屋敷
猿喰	障子屋敷
畑	城山（豊前10. 畑城）・日合ヤシキ・外屋敷・屋敷・伴屋脇・伴屋屋敷・ヒハヤシキ・今津屋敷・木戸ノ前・丸山屋敷・向屋敷・坂ノ上屋敷・田中屋敷・中堀・中堀屋敷・ヒカケ屋敷・原屋敷・二十田屋敷・原田屋敷・脇ノ田屋敷・下屋敷・山門屋敷・外園屋敷・下ノ屋敷・防屋敷・東風蔵屋敷・南屋敷・コアン屋敷・御堂屋敷・片宗屋敷・久住屋敷・中尾屋敷・竹中屋敷・尾ノ上屋敷・ムクサキヤシキ・大丸・門ノ前・ナキリ屋敷・門ノ前屋敷・中原屋敷・トクヤシキ・ハナシ屋敷・今在屋敷・堀内・向エ屋敷・生首堀・堀ノ口
今津	北奥屋敷・中屋敷・下屋敷・内屋敷・南屋敷
黒原	屋敷廻リ・大門・古屋敷
大畠	大城寺前・大門・屋敷
吉志	射場ヶ谷・岩ノ本・射場ノ本・大御堂・貴正防・タツノ下・久保ノ前・御用畑
恒見	荒堀・中ノ倉・元倉・大佛蔵・門田・釜蓋・前田・西條・中條・東條・岡條・打木山・打木原・中ノ倉・立岩・柿田・元倉金六谷・庄屋假堂
高野	恵里城山（豊前17. 恵里城？）・城山ノ下（豊前27.長尾城）・溝狭間・入道丸・上門田・門田・下ノ屋敷・屋敷・貴船屋敷・的場・屋敷ノ上・次郎丸・屋敷田・溝ノ内・城野尾ヶ獄・南正路下池田旧字的場・屋敷・キシロ・堀田・山際屋敷・田中屋敷・屋敷後・屋敷内・古屋敷・ホリダ・堀田下・銭屋敷・寺屋敷・切通・勝負ヶ坂・勝負迫・勝負ヶ坂南垣

【北九州市小倉北区】

赤坂	内屋敷
上富野	古屋敷・スノ木屋敷・横内屋敷・居屋敷・屋敷田・道田屋敷・大門・石橋馬場・コウケ屋敷・スハメン屋敷・畠堀・馬場・乙丸・鍛冶屋々敷・大城・堀口・大門・スノキ屋敷・屋敷・横内屋敷・長尾陳カ尾
下富野	中屋敷・外屋敷・居屋敷・奥屋敷・馬場屋敷・古屋敷・植松屋敷・馬場・乙丸・カジヤソノ・大城・大門・大溝
片野	川堀・牛丸・屋敷・堀ノ口・内ノ堀・大堀
萩崎	内ノ堀・狭間・堤
三郎丸	大堀・殿ノ前・川堀
足立	居屋敷・馬場大道ノ上・居屋敷下・馬場・馬場休場・大城寺前・馬場ノ上・裏門口
熊本	堀ノ口・大門・畠堀
片野新町	屋敷・カシ屋敷・大堀・小堀
篠崎	小武士丸・浅倉・堀端・下ノ門堀端・大溝・下屋敷
今	屋敷・土井ノ内上・屋敷ノ下・半兵衛屋敷・屋敷ノ上
小熊野	津田屋敷・津田屋敷ノ外・津田屋敷ノ下・番所床・シシホリ・熊本屋敷ノ下・熊本屋敷・奥屋敷・奥屋敷ノ下・屋敷・屋敷ノ下・迫屋敷ノ上・屋敷ノ上・伊澤屋敷・村ノ前屋敷ノ上・屋敷ノ前・屋敷前ノ谷口・穴ノ蔵屋敷ノ下・穴ノ蔵屋敷ノ上・穴ノ蔵屋敷・横山丈助屋敷・屏屋敷ノ下・番家ノ下・馬落・屋敷ノ谷尻・屋敷ノ下谷・西ヶ谷尻屋敷元・屋敷ノ裏・屋敷裏川端・井手口屋敷ノ下・寺屋敷
荒生田	井堀堺
到津	馬場河原・馬場・犬ノ馬場・堀ノ内・下屋敷・福丸・屋敷ノ上
西原町	屋敷
金田	屋敷・福丸・杉馬場
山本	坊屋敷・井堀・馬場・置殿・マル・屋敷・大野社馬場
菜園場	屋敷・杉馬場
田町	福丸末・福丸・新廳所
中原	屋敷前・矢倉下・御番所下・屋敷・寄リ土手・入江ノ上七松堀・境川七松堀・七松堀・高札場

【北九州市小倉南区】

湯川	屋敷裏・屋敷・屋敷下・大城寺・一里塚元・屋敷際・屋敷ノ下・大城寺
葛原	足立屋敷・原屋敷・松丸・西屋敷・寺屋敷・古防屋敷・谷屋敷・荒堀・門場・大城龍・屋敷・上屋敷・荒堀濱・梶屋敷・居屋敷・鋤屋敷・向屋敷・城籠・門田・門堀・松丸・森屋敷

旧村名（大字）	関連地名
葛原新町	荒堀・門田・城籠・屋敷・牛ヶ迫筋荒堀
沼	荒堀・千代丸
上吉田	久保屋敷・川堀・馬場田・田中屋敷・門田・道屋敷・小丸・道屋敷
下吉田	住居田・柿ノ子迫・散使給・堂ノ脇
下曽根	室屋敷・土手・市場屋敷・堀・蔵ノ下・内濱堀・殿田・新地土手根・土手根・平松土手ノ下・大土手・殿田
上曽根	勝円屋敷・新屋敷・丸・下曽根屋敷・観音屋敷・市場屋敷・室屋敷・城土・新屋敷
中曽根	大溝・堀・曲溝土手・道ノ樋尻溝土手・一里塚溝土手・奥曽根溝土手・小山田溝尻土手・田中前溝土手・明神田土手・尾又土手・生津溝土手・新屋敷・佐屋ノ森前溝土手・大濱西土手庄宅・大縄西土手新・大縄場西土手下新南北・大縄場西土手・大
曽根新田	北中川堀・濱地土手下・浜池上曽根地界土手下・朽網尻土手下・朽網川立登り・南沖土手・貫川南立登り・貫川北立登・北沖土手・大野川立登り・濱地土手端
西朽網	堀ノ口・カシヤシキ・イバ・馬場屋敷
東朽網	堀ノ口・宇土屋敷・屋敷・新屋敷・大塚大工屋敷・土井ヶ迫・筒井屋敷・梶屋敷・土井ヶ迫・城ヶ葉山・馬場・堂城ノ下・森屋敷
上貫	屋敷・中堀田・大堀田・勝負迫・大木屋敷・常盤屋敷・屋敷ノ上・太平屋敷・殿屋敷・府殿屋敷・屋敷ノ上・犬ノ馬場・門田・屋敷田・田中屋敷・馬場・府殿・勝負迫
中貫	屋敷・下畑屋敷・下ハタ屋敷・中ボリ田・畑田堀・ヤシキ・眞光寺屋敷・大木屋敷・下屋敷・屋敷ノ上・流田屋敷・田中屋敷・牛助屋敷・屋敷中島・中島屋敷・馬場屋敷・門ノ田・フトノ屋敷・城野院・丸山屋敷・堀・堀ノ口・犬ノ馬場・新シ殿・府殿
下貫	深丸・別府・城田・ホリ・馬場・門田
田原	原屋敷・堀ノ口・殿屋敷・屋敷・津田屋敷・堀ノ口・堀ノ口・堀ノ口
下長野	下小倉・塚ノ前・四反馬・塚前・大地屋・馬渡・前田・屋敷・レンケ屋敷・筒井屋敷・茶園畑・切通・サヤノ本・竹馬・円座堂・田原堀ノ口・堀ノ口・前田・中溝
上長野	前田・角屋敷・地蔵屋敷・外屋敷・大田屋敷・太郎丸・切通・下ノ屋敷
津田	堀ノ口・殿屋敷・屋敷
城野	屋敷・大溝
上城野	屋敷・丸城・居屋敷・イボリ・市丸・鹽屋敷・カシ屋敷・土手下・井堀
隠簑	城山（豊前37.堀越城）・古屋敷・中西屋敷・立岩
石田	堀田・屋敷田・岡屋敷・カジヤシキ・ドフキ屋敷・屋敷・屋敷ノ上・シヤウン丸畑・居屋敷・久保屋敷・カジヤ屋敷・前堀・中屋敷・後藤屋敷・友屋敷・殿屋敷・古屋敷・大屋敷・下ノ屋敷・堀ノ口・松本屋敷ノ本・金堀・金堀山・前ノ堀
蜷田	石堀・居屋敷・アカリタテ・蔵ヶ坪・迫屋敷・上屋敷・下ノ屋敷・溝堀・的場・中城
横代	新屋敷・石丸・ウシ屋敷・屋敷・仲屋敷・塀ノ内・丸ノ内・切通・正玄屋敷・ホリタ迫
丸ヶ口	城山・城ヘラ（豊前36.丸ヶ口城）・丸ノ内・台・寺屋敷・城笠岩ヘラ
堀越	屋敷田・西サヤ峠・タテ田・トヲノ前・荒堀・柿ノ木・出口・堂メグリ・内屋敷・神ノ前・東サヤ峠・木戸・堀ノ口・城ベラ・下堀越
志井	殿原・岩倉・岩蔵
徳力	園田・屋敷・百間堀
上南方	土手外・堀田・屋敷田・屋敷田・屋敷・堀田・平土手外・古屋敷
守恒	北屋敷・南屋敷
北方新町	屋敷南・屋敷・丸城・イバガ谷
北方	丸城・岩竹屋敷・金重屋敷・手屋敷・キシロ・本堀田
小森	屋舗・柳丸・城川・堀田・城ノ森・谷屋舗・門田・大屋舗・城川井手・フタ中井手・大屋舗
呼野	城山（豊前44.城山城）・屋敷田・殿山・元屋敷・屋敷・地蔵屋敷
市丸	堀ヤ・奥屋敷・屋敷・シヨフブ田・ソノ田・古屋敷・イバ・井堀・イボリ山・ソノ田
矢山	屋敷内・追筋屋敷・屋敷田・山田屋敷・倉谷・迫屋敷端・迫屋敷下・ミカン屋敷・屋敷ノ上・屋敷浦・蔵谷
井手ノ浦	屋敷・屋敷ノ下・屋敷ノ本・屋敷ノ上・百町堀・堀ノ端・屋敷田・屋敷ノ元
木下	川堀・屋敷・下ノ丸・金丸・古屋敷
石原町	福ノ谷屋敷・町内筋屋敷・屋敷町下・浦垣ノ内・鹿堀
新道寺	屋敷・屋敷・村筋屋敷・キド・屋敷下・屋敷下・廣丸・門蔵・役宅前・屋敷ノ上末本
母原	屋敷・堀田・中屋敷・屋敷田・城台・井ボリ・門田・シノホリ・ヨラク屋敷・屋敷内土橋・堀田
長尾	屋敷・屋敷田・門田・イバガ迫・古屋敷・屋敷・古屋敷
祇園町	屋敷・屋敷往還
能行	北屋敷・仁王丸・屋敷・外屋敷・山田屋敷下
辻蔵	台・屋敷・古台・荒堀・屋敷木戸・屋敷川端・荒堀道分
徳光	屋敷・藪屋敷・藪屋敷・柳丸・立ノ内・門田
春吉	屋敷・古屋敷・築留・古城山・国森社馬場
合馬	屋敷・中ノ屋敷・前田・園田・小縁屋敷・長倉・屋敷山・屋敷山道ノ下・孫屋敷・柳丸・百マツボリ・台・コツボリ・堀切
高津尾	南屋敷・屋敷・堀
吉兼	屋敷・立ノ内・埜添屋敷
田代	屋敷・明屋敷・屋敷ノ上・堀田・長倉・堀切
三岳	屋敷・荒堀・野城戸
頂吉	屋敷・江戸屋敷・寺屋敷・屋敷田・台・高札場・中屋敷・射場ノ本・古屋敷・札場
道原	屋敷・岡屋敷・古屋敷・台・屋敷田・堀切・城ノ口

〈豊前国田川郡〉

【田川郡香春町】

上採銅所	屋敷ノ上・シノボリ・掘リ田・向屋敷・岩本城戸・ユノ木屋敷・土手ノ木・井堀・城戸・馬場道・柳ヶ丸・七堀田・鍛冶屋舗・倉谷・安丸・道地丸・門田・ケサマル・カニナシ堀・草丸
採銅所町	井堀・居屋敷・奥屋敷・イサ屋敷・城山
下採銅所	井堀・堀田・寺屋敷・園田・門田・猿丸尻リ・猿丸・寺屋敷・城山・ヤクラ・屋敷・大内原屋敷・城ノ平・イサ屋敷
鏡山	城戸川内・呉屋敷・荒堀・屋敷田・寺屋敷・大塚屋敷・奥屋敷・井元屋敷・古野屋敷・重藤屋敷・秋元屋敷・陳山屋敷・居掘・一心屋敷・湯屋丸屋敷・松尾屋敷・治郎丸屋敷・明神馬場・祇園ノ馬場・番田・陳山
高野	切寄・鍛冶屋敷・岩丸・屋敷田・谷屋敷・叶屋敷・三郎丸屋敷・友池屋敷・家塚屋敷・国分屋敷・常安屋敷・国安屋敷・永安屋敷・門田・松丸
香春町	殿町山ノ方・堀ノ内
下香春町	古城（豊前50.香春岳城）・鬼ヶ城（豊前K3.鬼ヶ城）・臺・殿町・辻ヤシキ・屋敷ノ上・立堀・市屋敷・蔵屋敷・西屋敷・五郎丸・新屋敷・倉谷・軍場・馬落シ・堀切
仲津原	浦松屋敷・コマメ屋敷・前ヶ原・カチジ・釜蓋・宮尾屋敷・守屋敷・祐清屋敷・年玉屋敷・鬼塚屋敷・末広屋敷・末時屋敷・カワラケ屋敷・土器屋敷・出口屋敷・梅ノ木屋敷・寛政屋敷・無量光屋敷・次郎丸屋敷・原口屋敷・太郎丸屋敷・小室屋敷・申神屋敷・常門屋敷・道下屋敷・馬場崎
柿下	ジョウヤマノシタ（豊前51.柿下城）・クラ・大阪屋敷・寺後屋敷・寺屋敷・大阪垣藪・井堀・切通リ・ユノキ屋敷・一ノ谷外屋敷・梅ノ木屋敷・カサヤシキ・馬場・辻畑屋敷・辻屋敷・無田畑屋敷・垣ノ内・堀田・金丸屋敷・古屋敷・蔵園・高水屋敷・川添屋敷・イカケ屋敷・腹切岩

【田川市】

旧村名（大字）	関連地名
東夏吉	屋敷田・片辺屋敷・小園・内堀・外堀・是安屋敷・出水屋敷・正坊屋敷・迫屋敷・スワ屋敷・宇土路屋敷・慈光寺屋敷・谷屋敷・有光屋敷・堤屋敷・真照寺屋敷・竹林寺屋敷・辻屋敷・田ノ浦屋敷・門田・内ノ丸・堀切・正汰屋敷
西夏吉	外堀・小ソノ・ヲキヤシキ・内ノ丸橋・堀り切・奥園屋敷・谷屋敷・石丸屋敷・橋本屋敷・門田・堀ヤシキ・治郎丸・三郎丸・内ノ丸・屋敷田
新所	屋敷
糯	切寄・中屋敷・木殿・蔵園・柳土手・光丸
伊加利	屋敷・馬場ヶ迫・居屋敷・薬師屋敷・石場屋敷・相木城・城山（豊前80.大善寺城）
上伊田	屋敷・堀田・土井ノ内・内屋敷・堀越
中伊田	ホリコシ・蔵田・古屋敷・屋敷・松丸
下伊田	松丸迫・福丸・車堀・小堀・草場ヶ浦・中ノ陣
猪膝	畑屋敷・屋鋪・内堀・屋形田・馬場尾・城尾・七介屋敷・忠六屋敷・古園屋敷
金国	畑堀・門田・荒堀
上弓削田	金丸・外屋敷・切寄屋敷・次郎屋敷・井堀・秋丸・マトヲバ・常定屋敷・綿丸・小島屋敷
下弓削田	藤蔵町・塔ノ前・秋丸・柿木田・師別当・的場・庄屋フケ・北ノ前・西福寺屋敷・釈迦堂・エボシ形・綿丸・笠園・井上屋敷・堀屋敷・小島屋敷・寺ノ前・常定屋敷・秋丸・金丸・切寄・鹿場・烏帽子形・角堂・切畑・姥ヶ懐・北ノ前
見立	異国屋敷・屋敷
河原弓削田	屋敷・ソフアン屋敷・クラモチ
後藤寺	今丸・溝淵・堀・見内・上出口・黒丸・屋敷・下出口・石場尻
上糸	狭間・町屋敷・門田・堀・土器屋敷・飯ノ丸・上城・小路屋敷
下糸	堀・丸・馬場尻・原屋敷・倉持・弁城ノ前・下城ノ浦・角屋敷・下條屋敷・寺屋敷・同丸屋敷・原屋敷・半出屋敷・鍛冶屋敷・角屋敷・小路屋敷・古屋敷・マトハ・切通シ
宮ノ尾	屋根原・浮殿・鳩屋・金付面・九郎丸・藤蔵町・秋丸・屋根原・釜馬場ノ木ヶ元・岩熊園・吉丸・ゴフ屋・馬草田

【田川郡赤村】

上赤	秋ノ城（豊前124.秋野城）・屋敷下・屋敷畑・屋敷畑・平田屋敷・茶屋屋敷・数珠丸屋敷・屋敷田・峯屋敷・地蔵木屋敷・中霍屋敷・上原屋敷・廻リ屋舗・大伊良屋敷・馬落し・宮丸・堀切・中原屋敷・スハテ屋敷・高伏屋敷・丸熊屋敷・オオソノ屋敷・居屋敷・清五郎屋敷・徳丸・倉谷・陣屋・犬馬場
小内田	城ノ越（豊前123.小内田城）・甚吉屋敷・六三郎屋敷・居屋敷・馬場ノ本・太郎丸・長四郎古屋敷・源四郎屋敷・一三郎屋敷・川屋敷
大内田	屋敷・城臺・城
山浦	戸城（豊前127.戸城山城）・屋敷・灰坂屋敷

【田川郡添田町】

上津野	堀田・屋敷・園田・忠屋敷・松屋敷・内屋敷・馬落シ・古屋敷・念仏屋敷・城ヶ迫・ダイ・城輪岩・仲屋敷・大城ヶ谷・陣屋・田中堀・大城ヶ谷・臺ノ上・念仏屋敷
下津野	弓張山（豊前108.弓張岳城）・屋敷・本屋敷・鍛冶屋敷・道角屋敷・与平屋敷・善六屋敷・新蔵屋敷・古屋敷・寺屋敷・臺ノ下・城道・高小屋・屋形・土居ノ内・屋敷田・迫屋敷・寺ヶ迫屋敷・全内屋敷・元屋敷・三右エ門堀・土手ノ下・馬場ノ臺・馬落シ・宮ノ馬場・トフ屋敷・新市屋屋敷・城ノ峠・荒堀・障子ヶ谷・殿岩・堀明・マツボリ田
添田	上畑屋敷・古屋敷・鹿堀・寺屋敷・殿町・堀・代屋堀・瓦屋敷・原屋敷・居屋敷・彦三郎屋敷・藤八屋敷・鍛冶迫・勘七屋敷・惣六屋敷・作兵衛屋敷・仁佐エ門屋敷・源四郎屋敷・玄良屋敷・八兵衛屋敷・半六屋敷・庄助屋敷・門田・タツ・井掘
添田町	井掘・殿町・横町屋敷・寺屋敷
伊原	屋敷・門田
庄	上ノ屋敷・堀田・タツ・屋敷・寺屋敷・二殿屋敷
真木	新城谷・陣ヶ上・無倉谷・陣ヶ城
新城	園田・門田・屋敷・堀切・九郎丸・三郎丸
岩瀬	九郎丸・土手ノ本・先堀田・屋敷・中屋敷・ヤシキトマ・ヤシキハタ
野田	城平（豊前107.城平城）・城山（豊前112.城山城）・屋鋪・秋丸・陣原・西城山・東城山
枡田	陣屋・蔵谷・源太屋鋪・寺屋敷・黒崎屋敷・城山・馬場
下落合	殿倉・殿畑・寒屋敷・屋敷・イバ・上角・園田・内屋敷・城ノ尾・堀田・嶽城
上落合	屋方ヶ原（豊前118.屋形原城）・堀・陣屋・土居ノ下
彦山	城ヶ辻・堀ノ首
上中元寺	陣屋・城ノ越（豊前113.左衛門城）・馬場・堀ヶ原・長更屋敷・陣場
下中元寺	城ノ迫・城ノ越・平蔵ヶ迫

【田川郡大任町】

上今任	城ノ越（豊前95.城越城）・ヤシキ・土手ノ下
桑原	堀田・居屋敷・城ヶ迫・内堀
柿原	居屋敷・大丸町・小丸町
成光	傾城迫・屋形ヶ原・城戸前・居屋敷・屋敷ノ内・八郎屋敷・川城戸・外屋敷・堀田
白土	切寄（豊前99.白土城）・屋舗・殿町・園田・門田・堀ノ内
秋永	居屋敷・東屋敷・石土手
安永	嶋廻・屋敷田・屋敷・烏帽子形・広丸・乱橋・打越・切通シ
下今任	土手ノ下・柳土手・屋敷・内堀・堤土手・堀田
福田	屋敷
元松	当屋敷・ヤシキ・外土手

【田川郡川崎町】

上真崎	兎丸・石丸・市郎丸・新城谷・城ヶ尾・石堀・勝負迫
下真崎	勝負ヶ迫・丸ノ内・内屋敷・城戸口・屋敷・五良丸・寺屋敷・鍛冶屋敷・四郎丸・九門屋敷下・丸門・堀切・木城平・内屋敷・高札場・奥殿
木城	木城峠・杉園・勝負迫・屋敷下・下ノ丸・門田・上ノ丸・中ノ丸・丸
安宅	筒丸・屋敷下・三タノタチ・丈門・杉園・市殿屋敷・奥殿・福丸・射場ノ本・原屋敷・堀田・城ヶ迫・三郎丸・城ノ腰・堀ノ口・ヲクドノ・原屋敷廻リ・ナキノ屋敷・屋敷ノ上・福丸
黒木	屋敷・古屋敷・堀リノ口
荒平	木城峠・居屋敷・寺屋敷・角屋敷・北ノ殿
田原	城山（豊前83.田原城？）・城ノ越・門田・屋鋪・馬場・今村屋鋪・久門屋鋪・下堀・公門屋敷・小路屋敷・木下屋敷・射場ヶ迫・百屋敷・下丸
池尻	古屋敷・町屋敷・今丸・下屋敷
東川崎	ソノタ・桑ノ木丸・北城・屋敷田・鬼山屋敷・奥小路屋敷・徳丸屋敷・古屋敷・小倉屋敷・古房屋敷・鍛冶屋屋敷・次郎丸屋敷・田所屋敷・東蓮寺屋敷・茂兵衛屋敷・地行屋敷・迫屋敷・石堀・徳丸・サマヤシキ

旧村名（大字）	関連地名
西川崎	古屋敷・屋敷田・小園ヤシキ・馬場・下馬場・ソノ田・土居ノ本・助蔵ヤシキ・喜助ヤシキ・四郎兵ヤシキ・切通シ・城山下・本屋敷・寺屋敷・大兵エヤシキ・寺中屋敷・メクラ屋敷・市三郎屋敷・久保屋敷・内屋敷・浄園屋敷・弥四郎屋敷・半三郎屋敷・弥内屋敷・七右エ門屋敷・馬屋敷・福間屋敷・石原口屋敷

【田川郡糸田町】

糸田	城（豊前75.糸田城）・呑山屋敷・武士町・出口屋敷・井上屋敷・辻屋敷・市場屋敷・法澤寺屋敷・五郎丸・殿屋敷・堀端・馬場頭・四郎丸・石丸・的田
宮床	土手添・土手ノ下・屋敷・屋敷田
大熊	石丸

【田川郡福智町】

赤池	柿ヶ迫・御蔵下・出口・屋敷・飛車籠・板屋・岩屋免・生刀・ヤゲン
南木	城尾（豊前73.南木城？）・トノ町・屋敷・大丸尾越・寺屋鋪
神崎	鐙田・屋敷畑・勝負ヶ迫・馬場・一屋敷・屋敷・切寄・小城ノ下・金丸・内ノ丸・堀田
金田	寺屋敷・堀・城・一丸・城丸・犬ノ馬場・弁城町・外厩・内厩・土手ノ下・袈裟丸・四郎丸
市津	次郎丸・古屋敷・堀リ・堀リ田・番屋・奥園・上ノ台・馬場尾・堀リ切・土手ノ外
鋤木田	堀リ・今殿・園田・堀ノ内・米丸
弁城	垣ノ内・小堀・門ノ内・馬場・大堀・カシ屋敷・堀リ田・古屋敷・丸ノ内・内屋敷・鍛冶屋敷・城平
畑	浅倉・堀ノ口・居屋敷・三郎丸・屋敷・古屋敷・堀口・鍛冶屋敷
伊方	城園（豊前R3.伊方城園遺跡）・高シロ・銅丸・田中屋敷・殿前・居宅・取屋敷・辻屋敷・古門屋敷・三郎丸・屋敷・馬場ノ前・大垣・石丸・金丸・四郎丸・弥吉屋敷・松丸・法花屋敷・治郎丸・勝負尻・浅倉
上野	城山下（豊前53.城山城）・脊戸ヤシキ・犬ノ馬場・今ヤシキ・石堂道添・古屋敷・千代丸・中村屋敷・則玄屋敷・里屋敷・土器屋敷・山崎屋敷・堀・中島堀・新屋敷・下屋敷・米丸・屋敷口・皿山屋敷・宮地屋敷・立屋敷・小路屋敷・石垣・鹿堀・原屋敷・切寄・乙丸・堀田・桜馬場・宮司屋敷・堀川・水落米丸・城山下屋敷前・原屋敷前堀・北田土手外・谷ノ屋敷

＜豊前国京都郡＞

【京都郡苅田町】

松山	城ノ前（豊前129松山城）・古屋敷
苅田	門ノ口・殿新地・堀町
堤	矢方・上ノ屋敷・屋敷・原屋敷・居屋敷・刈屋敷・高丸・陣山・屋形峠
光國	坪屋敷・角屋敷
濱町	園屋敷・濱屋敷
馬場	殿屋敷・金丸・守屋敷・天神丸・上ノ屋敷・寺屋敷・川原屋敷・土井屋敷・門田・古屋敷・太郎丸・鬼丸
南原	高城（豊前131.高城）・倉谷・狭間・門田・鬼城・外屋鋪・鬼丸・貝柄屋敷・柿ノ木屋鋪・寺屋敷・殿山・勝負谷
集	居屋鋪・下屋鋪・城戸・鐵炮町・奥ノ屋鋪
尾倉	太郎丸・西屋鋪・糀屋鋪・馬場ノ前
與原	柳土手・臺・上入口屋敷・下入口屋敷・下ノ屋敷・上屋敷・下屋敷
二崎	中土手・前土手・沖土手・横土手
新津	居敷敷・馬場・門田屋敷・井上屋敷・板屋々敷・竹ノ内屋敷・宮次屋敷・堀田・堀口・畑堀・園田・柳土手・先田屋敷・高田屋敷・舊屋敷・堂ノ下屋敷・臺・下臺・新屋敷・垣ノ内・堀田ノ上・寺屋敷・奥屋彌
下片島	堀田・釜堀・小屋敷・下ノ屋敷・屋敷・出口屋敷・寺屋敷・比丘尼屋敷・向屋敷・土手内・長殿・木戸屋敷・土井ノ内・色轉屋敷・荒芽屋敷・屋敷・猪ノ熊屋敷・火焼屋敷
葛川	寺屋敷・屋敷・引地屋敷・古屋敷・馬場ノ谷・下屋敷・小迫丸段・堀ヶ口・城山・馬場ノ辻
上片島	立村屋敷・ヤシキ・平泉寺屋敷・二王丸・大明神屋敷・的場・次郎丸・前屋敷・外堀・釜堀・土手ノ内
岡崎	ヤシキ田・川堀・屋敷
稲光	城山（豊前132.大平山城？）・古川屋敷・福丸・北臺・外堀・的場・古屋敷・堀切・馬々ノ尾・堀田・園田・木戸屋敷・田淵屋敷・屋敷・乙丸屋敷・殿屋敷・壮田屋敷・甲斐屋敷・安澤屋敷・彌社屋敷・馬場田・芋掘・中川屋敷・堀切川入・馬場ノ田・カイ屋敷・奥屋敷・園田・馬場ノ尾・堀切宮田平・芋堀
鋤崎	外堀・鐵鉋田・堀口・古屋敷
黒添	六丸・奥屋敷・屋敷・堀田
法正寺	馬場・切通シ・鍛屋敷・金堀・堀切
谷	馬場・屋敷・角藏・奥園・堀田・小次郎丸・切通シ
山口	城山（豊前133.等覚寺城）・高城（豊前131.高城）・大鎧・堀田・倉山・上屋敷・門田・小堀田・倉谷・隠舘・等覺寺屋敷・ホド堀・堀田

【行橋市】

行事	居家敷・上屋敷・ヨナマル・長丸・イバ・殿垣・馬屋尻・馬場・西丸・ハサマ
草野	殿小路・金丸・クシヤシキ・ヨナ丸・馬場・ハサマ・大溝・下タイ・大下ダイ
長音寺	ソノタ・ハサマ・屋敷ノ後・カシ屋敷・寺屋敷・片堀・内堀・小屋敷・屋敷前・園田
中津熊	内ホリ・門田・乙丸・堀リ
上津熊	土手ノ下・土手元・小太郎丸
吉國	荒堀・千丈堀・馬場尾
長木	上屋敷・貳反田屋敷・永キ屋敷・土井内・土取場舊屋敷・馬場先・上ノ殿・土井ノ下・下屋敷・中屋敷
二塚	馬場崎・金城・柿ヶ堀・弓田・四朗丸・ヲク丸
延永	次郎丸・内堀・藤丸・屋敷・藏園
下崎	向イ屋敷・下屋敷・殿畑・殿畠ノ下・堀ノソノ・馬場ノ尾・倉谷・門田
長尾	馬場先・ツイジ・堀・屋敷ノ上・御茶屋・城山・宮ノ馬場
徳永	屋敷・古門・宮ノ馬場・正路屋敷・外堀
須磨園	屋敷・陣ノ内
常松	土井内・屋敷
福丸	上明屋敷・居屋敷・屋敷田・小金丸・堂屋敷・カキ屋敷・藏淵
高來	居屋敷・殿屋敷・追殿・金丸・井正丸・古屋敷・池部屋敷・名子屋敷
入覺	役丸・門田・土屋敷・屋敷田・的場・馬場・馬場ノ下・奥ヤシキ・内ヤシキ・周毛ヤシキ・辻ヤシキ・馬場頭
津積	内屋敷・屋敷ヶ坪・源三屋敷・五臺・堀殿・馬場ノ角
西谷	堀殿・築地・出屋鋪・石垣・久三屋敷・古屋敷
大谷	築地・ヨナ丸・荒堀・堀ノ手・門田・石垣・古屋敷・車堀
下稗田	土井ノ内・馬場・臺ノ下・的場・徳城・金丸・郷田堀・殿山
前田	臺ノ内
中川	外堀
上検地	堺屋敷・屋敷田・臺ノウチ・六郎丸・馬場・下屋敷田・居屋敷・黒元屋敷・西ノ堀・小キド・四郎丸・次郎丸
下検地	居屋敷・土井ノ内・コン屋堀・馬場・六郎丸・村ノ前屋敷・小キ戸・治郎丸・下ノ前屋敷・検次郎屋敷

【京都郡みやこ町】

旧村名（大字）	関連地名
池田	切通シ・次郎丸・牛丸・袈裟丸・太郎丸
宮原	馬場・鹿堀・的田
浦河内	屋敷ノ前・倉山・屋敷畑・番所・金丸・城下・ヤシキ前・深溝
岩熊村	東屋敷・居屋敷・屋敷・天神屋敷・田原垣・屋敷田・金丸・有馬屋敷・堀切
矢山	屋敷廻・居屋敷・堀田・寺屋敷・道佛居屋敷・谷頭屋敷・居屋敷之内・屋敷・宮ノ上屋敷・宮ノ上屋敷・迫田屋敷・迫屋敷・藏下屋敷・藏山・前田屋敷・大城・屋敷ノ内・居屋敷ノ内
長川	古屋敷・堀ノ尻・廣丸・居屋敷・旧屋敷・堀ノ・屋敷
箕田	居ヤシキ・ヤシキ・ヤシキタ・方志ヤシキ・新道寺居ヤシキ・ヤシキ田大坪
上田	古ヤシキノ下・原ヤシキ・馬バ尻・下山坂ノ上馬場
上黒田	溝曲り・園田・堂屋敷・別府
中黒田	畑ヶ堀・綾塚屋敷・浄古庵屋敷・サコ屋敷・外堀・綾塚屋敷ノ裏・浄古庵屋敷ノ裏・牛丸
下黒田	溝曲リ・別府・皮龍園
新町	居屋敷
上久保	内堀・堀生・秋丸
上野	弓場ヶ本・陣屋ノ尾
飛松	武士町・居屋鋪・堀生
下田	下ノ屋鋪・屋鋪
菩提	武士町・上ノ屋舗・屋敷
御手水	古屋鋪
図師	上ノ屋敷・黒屋敷・居屋敷・上ノ旧居屋敷・旧居屋敷・下屋敷
中久保	切通・古屋敷
下久保	溝添・溝・武士町・殿畑・鰭屋敷
平尾	上古屋敷・古屋敷

＜豊前国仲津郡＞

【行橋市】

大橋	御茶屋ノ下・又丸・荒堀・金剛丸・三郎丸・法師丸・土手ナシ・御茶屋脇
宮市	堀ノ内・五郎丸
大野井	殿屋敷・ババ・寺屋敷・ソノ田・屋敷田
寶山	下ノ馬々・ホリ・古屋敷・屋敷田・手丸コ・上ノ馬々・中ノ馬々
寺畔	徳丸・上ヤシキ・下ヤシキ・奥ヤシキ・土手下・侍島ヤシキ・ホヲラ丸
羽根木	堀ノ口・馬場・古屋敷・カシヤシキ
竹田	堀分・マトハ・古屋敷・犬丸
小犬丸	藏丸
崎野	倉丸・的場・西ヤシキ・外ヤシキ・居屋敷・小犬丸下・山城・ヤ一丸・マトハ
長江	小犬丸下・井上屋敷・長江屋敷・中屋敷・角ヤシキ・幸丸・ヤ一丸・マトハ
福富	明山屋敷・又丸
金屋	法師丸・切割
今井	寺土手
眞菰	屋敷・井樋ノ口屋鋪
馬場	森屋鋪・七郎丸・鍛冶屋鋪・上屋敷・上屋敷
蓑島	将家保谷・早陣・城（豊前143.蓑島城）
元永	城尾・道城山
沓尾	陣山・中土手道
津留	藏ノ坪・向屋浦・堀田・古屋敷・屋敷・新土手
稲童	城ノ尾・倉山・古城・城戸
松原	城ノ尾
袋迫	ヤシキ田・奥ヤシキ
道場寺	的場・奥屋敷・南屋敷・上シン屋敷・鬼屋敷・寺屋敷・居屋敷・紺屋々敷・東居屋敷・内堀・前ノ屋敷・下ノ屋敷・カジ屋敷・上ノ屋敷・裏屋敷・屋敷・長屋敷
柳井田	居屋敷・馬場・折屋敷・上屋敷・古屋敷・與市丸・扇屋敷
天生田	大将陣（豊前D9.佐伯陣）・武道田・門田・居屋敷・寺屋敷・土手・宮ノ馬場・古城尾
矢留	大将山（豊前D8大将陣）・屋敷田・三反丸・茶屋川原・塚田屋敷・亀ノ甲屋敷・秋丸屋敷・有光屋敷・栗坪屋敷・紺屋々敷・定石屋敷・小堀・堀ノ内・秋丸
流末	土手ノ内・下屋敷・居屋敷・寺屋敷・上屋敷・秋丸
平嶌	犬丸・堀ノ内・堀・辻屋敷・土井ノ内・小見通・的場・徳大屋敷・芝原屋敷・大小路ヤシキ・新町屋敷
草場	小犬丸・ハサマ・先ハザマ
竹並	古屋敷・福丸・上屋敷・淵ノ上屋敷・堀下・南屋敷・中屋敷・堂屋敷・居屋敷・野ノ丸・田中屋敷・上屋敷・北屋敷・屋敷田

【京都郡みやこ町】

吉岡	居ヤシキ・原田屋敷・ヤシキ・下ノ屋敷・久藏屋敷・ホリノ口
徳永	居屋敷・助屋敷・下屋敷・大黒屋敷・上ノ屋敷・源右衛門敷屋・地藏屋敷・柚ノ木屋敷・屋敷田・向屋敷
田中	堀・寺屋敷・平兵衛屋敷・カジ屋敷・前屋敷・小引屋敷・下ヤシキ・鐙田・牛丸・宮屋敷・七反ヤシキ・ハサマ・向ヤシキ・向ノ前・宮ノ馬場道・水神堀
惣社	内藏・切通・辻屋敷・居屋敷
國作	屋敷田・荒堀・田ヤシキ・車ホリ・井タ堀・菰天馬場
國分	中ヤシキ・神官屋敷・下中屋敷・梶屋敷・香下屋敷・寺屋敷・上村屋敷・下村屋敷・大藪ヤシキ・山崎屋敷・後屋敷・林屋敷・上ヤシキ・藏ヤシキ・城塚・古屋敷
徳政	田中ヤシキ・堀ノ上・枡ノ丸・タトイババ・居屋鋪・矢倉・タツミババ
下原	イヤシキ・ダイ・弓田
呰見	堀ノ後・屋敷田山
豊津町	臺原、苔丸ノ上・苔丸・苔丸谷・臺原下
彦徳	屋敷・新土手・古屋敷・奥屋敷・石垣・新土手・居屋敷
花熊	馬場・屋敷ノ下・屋敷・門田・割溝・大溝

旧村名（大字）	関連地名
続明院	居屋敷・といの内・鶴屋敷・屋敷田・古屋敷・内屋敷・中土手・川土手・苔丸・堀切・吉丸・屋敷田・辻垣・やぐら・内その・上ノ屋敷・とのご山・屋敷・その田
八ッ溝	古屋敷
大阪	屋敷・古屋敷・城坂（豊前147.大坂山城）・殿山
木山	古馬場・茶屋河原・上屋敷・奥屋敷・前屋敷・下タ屋敷・出口屋敷・矢倉ヶ下・倉谷
谷口	ヤシキ・伊豫殿・茶屋川原・土井ノ下・戸井ノ下
大村	城山（豊前148.不動ヶ岳城）・原田ヤシキ・馬場川原・登路屋敷・ヤシキ・上屋敷・古ヤシキ・立ヤシキ・屋敷田・忠治屋敷・古屋敷・ヤシキ・馬場口・加賀屋敷・築山
本庄	下ノ屋敷・居屋敷・カマテ・屋敷ヶ坪・堀ノ鼻・堀ノ辻・舟頭屋敷・伊助屋敷・屋敷・牛丸・古トノ・ウシ丸屋敷・仙蔵屋敷・乗屋敷・土手・寺屋敷・役宅屋敷・ヤリバ
山鹿	居屋敷・屋敷・土井ノ下・小豆堀ノ口・城坂・土井ノ渡・市蔵屋敷・堀ノ口・市蔵屋敷
鐙畑	寺屋敷・屋敷前・奥屋敷・トシロキ十城井・中屋敷
大熊	居屋敷・屋敷・源田屋敷・源田居屋敷・内屋敷・札場・馬場川原・屋敷ノ下・横田屋敷・眞代寺屋敷・土屋敷・松本屋敷・松本居屋敷・古屋敷・屋敷ノ上・堂ノ前・堂ノ下居屋敷・鎗場・小屋敷・城山・豊ヶ城・ホウ城山
喜多良	屋敷ノ下・古屋敷・九日城・石原ヤクラ・井堀・井城堀・溝堀・屋敷口・ダイ
崎山	彦七屋敷・與助屋敷・居屋敷ノ下・黒兵工屋敷・善六屋敷・甚蔵屋敷ノ下・屋敷・打平吉屋敷・冑石・上堀・古屋敷・古屋敷・太郎丸・堀・烏帽子形・市六屋敷・馬場・横三郎屋敷・安兵工屋敷・忠六屋敷・彦七屋敷・又吉屋敷・馬場道・上屋敷・治郎八屋敷・木戸ヤシキ・金助屋敷・居屋敷・屋敷口・シヨリウ屋敷・彌六屋敷・忠平屋敷・屋敷田・利右工門屋敷・臺・孫市屋敷・居屋敷ノ前・長四郎屋敷・藤七屋敷・彌吉屋敷・又市屋敷・五徳ヤシキ・ヤモウ神屋敷・蔵屋敷・殿山・観音屋敷・喜平屋敷・次郎助屋敷・寺屋敷・茶屋敷・徳兵工屋敷・勘兵工屋敷・土井ノ上・四郎兵工屋敷・キド・ヤシキ前・笹原屋敷・ヤシキ口・殿ヤシキ・殿山・城・土手ノ下
柳瀬	内屋敷・門田・山ノ下屋敷・秋丸・屋敷・寺屋敷・城落・下屋敷・土手屋敷・前田屋敷・城落土手添・古屋敷・堀ノ内・常吉屋敷・大溝・中溝・土手ノ上・荒土手
上高屋	居屋敷・居屋敷・陳屋・小屋敷・別当屋敷・小屋敷ノ原・城ヶ迫・屋敷・久富屋敷・蔵ヶ谷・屋敷田・寺ノ前屋敷・射場・古やしき・眞城田・古野垣・深溝・門田・中尾屋敷・中溝・岩たけ城・眞蔵城・狐城・屋敷ノ上
下高屋	上ノ出口・やしき・臺・屋敷ノ上・やしき田・門田
末江	穴倉・堀田・殿ヶ迫・殿やしき・やしき・やしき田・居やしき・大やしき・園田やしき
光富	臺ヶ下・宮屋敷・奥ぞの
上原	番庄屋・流鏑馬・上屋鋪・下屋鋪・西屋鋪・砦見溝・下原井手溝・屋鋪
綾野	イモジ・堀切・屋鋪・屋敷田・鑄物師屋敷・内屋敷・鐙田・代官給・砦井手溝・砦見溝・下原溝
犬丸	上屋敷・屋敷・古屋敷・新屋敷・廣丸・迫屋敷・出屋敷・下屋敷・上ノ馬場
節丸	馬隠・鍛冶屋敷・新屋敷・馬場・柿ヶ丸・園田・馬場田・庄負ヶ迫
木井馬場	神樂城（豊前156.神楽山城）・居屋敷・市屋敷・井堀・屋敷・屋敷田・屋敷田ノ上・下ノ屋敷・中門・城のこし・中屋敷・上屋敷・切通し・馬出し・源吉屋敷・小城
内垣	屋敷田・臺ノ前・古屋敷・居屋しき・やしき・沼の臺
横瀬	上臺・臺ノ坂・佛原屋敷・川原屋敷・眞所屋敷・引地屋敷・堂免屋敷・居屋敷・屋敷・屋敷ノ上・細木屋敷・畑野屋敷・西ノ原屋敷・馬場ノ前・宮ノ前・宮ノ前ワキ・寺ノ復屋敷・テラノ下屋鋪・寺ヤシキ・丸山屋敷・風呂ノ本屋敷・長田屋敷・大塚屋敷・梅ヶ谷ヤシキ・中屋敷・迫田屋敷・篠坪屋敷・迫屋敷・萩原屋敷・馬場前上道
下伊良原	ハコヤシキ・ハコヤシキ前田・屋敷・よ平屋敷・堂園古屋敷・屋彌のうへ・屋敷ノ上・鬼ヤシキ・城山・下城戸・堀田・小き戸・臺ヶ谷・五反田溝・平井手溝・丸山溝・サヤノモト東溝・中溝・新地井手溝・ヒロセ溝・二助溝・屋敷迫・高ス溝・土掘溝・塚本溝・田代溝・高ノ溝・中ノ溝・高座溝・新城淵・土ほり・鐙越・堀尾
上伊良原	フシヤデン・寺ヤシキ・七郎ゾノ・屋敷・ソノバタ・屋敷田・下ノ臺・溝ノ上・上ノ臺・屋敷ノ上・屋敷ノ前・臺・松丸・中溝・馬オトシ・城野
扇谷	屋敷ノ上・堀ノ上・神丸口・神丸・神丸前・屋敷ノ脇・堀ノ本
帆柱	廣丸・溝ノ下・空堀田・堀田・土井ノ下・屋敷ノ下・寺屋敷・臺・高札場・屋敷・古屋敷・中屋敷・杉山屋敷ノ下・臼堀リ・善八屋敷ノ上・市場ヤシキ

〈豊前国築城郡〉

【築上郡築上町】

寒田	溝口屋敷（豊前166.溝口館）・三丁弓（豊前168.城井ノ上城）・堀・下屋敷・堀ノ上・屋敷・又右衛門屋敷・佐助屋敷・塚屋敷・屋敷ノ下・ツルヤシキ・中屋敷・上屋敷・石倉屋敷・射場・五ツ筏上堀・上堀・下堀・久藏屋敷・居殿・八右衛門屋敷・彦兵衛屋敷・石倉・園田・向堀・久助屋敷・越崎屋敷・門屋敷・堀向・溝原・屋敷前・屋敷ノ上・江後屋敷・彦助屋敷・西堀・堀ノ内・屋敷通リ・臺山・矢ビツ・他城・城ノ川・城ノ平・城ノ迫
櫟原	屋敷前・屋敷・壹ノ尾・藏ノ谷
本庄	的場・立屋敷・上屋敷・城ヶ平・馬場・堀・堀川原・垣ノ内・馬々・古屋敷
傳法寺	太郎丸・堀田・丸・杉ヶ丸・小園・屋敷・松ヶ丸・馬場・門田・荒堀・石藏・倉谷・小丸・垣ノ内・城ヶ平
松丸	的場・小屋敷・屋敷田・松ゲ丸・垣ノ内・堀田・立屋敷・溝屋敷・荒堀
上深野	馬場ノ下・古屋敷・的場・古殿
下深野	原屋敷・宮ノ丸・殿ノ前・溝挟
下香樂	馬渡リ・道定・前田・堂ノ本・屋根下・出口・神ノ前・圓通越・サヤヲ・前田
袈裟丸	古屋敷・茶屋敷
安武	的・馬場口・新屋敷・屋敷・後屋敷・古屋敷・福丸・門田・屋敷田・肥屋敷・白佛屋敷・孫屋敷・錦屋敷・屋敷ノ後・上ノ原屋敷・堀越・土井ノ内
赤幡	城戸・屋敷・隠居・居屋敷・ヤシキ田・切寄平・三郎丸
船迫	中屋敷・射場・門田・古屋敷・中ノ丸
廣末	外畑屋敷・本屋敷・臺・三反丸
小山田	鎧田・荒堀・門田・柳丸・中ノ丸・倉谷・廣丸・後堀・臺岩
弓ノ師	五反丸・七反丸
上別府	園田・屋敷・矢鏑馬・古殿・屋敷田・鍛冶屋園・内屋敷・門田・堀田
下別府	大丸・茶屋ノ尾・屋敷・堀田・園田・矢鏑馬
築城	本丸・ニノ丸（豊前170.築城城）・荒堀・金木堀・屋敷・屋敷田・引丸・上ノ丸・虎垣・切通
東八田	大田屋敷・瀬戸口屋敷・丸・乙丸・馬淵屋敷・柿ヶ坪屋敷・上ノ段屋敷・鹽田屋敷・曲リ屋敷・六枝屋敷・栗柳屋敷・汲瀬屋敷・屋敷田・松ノ木園・沓拔屋敷・沼ノ上屋敷・樋ノ口屋敷・堤屋敷・外堀
宇留津	松崎屋敷・居屋敷・屋敷・堀口・吉原土手・下屋敷
西八田	外堀・堤屋敷・門田・屋敷田・大村屋敷・法住寺屋敷・矢倉下・土井ノ内・堤屋シキ
岩丸	松ボリ・小垂屋敷・城表・倉谷・小城戸・城表口・新城岩・古殿・門田・内ヶ丸・馬場尾・戸樋ノ上・六田丸・堀尾
奈古	向屋敷・馬場・屋敷・山屋敷・内屋敷・小屋敷・今屋敷・上ノ段屋敷・奥屋敷・湯屋敷・上屋敷・門田・力丸・柿カ丸・大殿
水原	古屋敷・門田・尾崎屋敷・久保田屋敷・今林屋敷・尾久保屋敷・貴船屋敷・深見屋敷・屋敷・三ツ井屋敷・鹽田屋敷・荒田屋敷・深見小屋敷・迫屋敷・古殿・小丸・寺屋敷・荒牧屋敷・神本屋敷
阪本	大丸・屋敷口・門田・大村屋敷・南屋敷・中村屋敷・秋丸屋敷・下村屋敷・鰆村屋敷
高塚	土井ノ内・中屋敷・寺屋敷・浦屋敷・高崎屋敷・園屋敷・上屋敷・籠屋敷・古屋敷・堀田・川上屋敷・門田屋敷・溝ノ上屋敷・小路屋敷・尾崎屋敷

旧村名（大字）	関連地名
越路	門田・屋敷田・屋敷内・三反丸・屋敷口・馬場・古屋鋪・墓屋鋪・下屋鋪・古屋敷・鍛冶屋原
椎田	町屋敷・永田屋敷・園田
臼田	穴藏・正屋鋪・寺屋鋪
山本	石畑屋鋪・向屋鋪
湊	城ノ本（豊前183.湊城）・門田・築地ノ内・屋敷・大丸・小丸・上屋敷・大溝・奥園・中園・町屋敷
日奈古	榎木丸・馬場尾
眞如寺	太刀洗・龍城院・小松堀・奥園・西馬場・臺・野々丸・馬場
極樂寺	石垣・中屋鋪・政所・屋鋪ノ上・向屋鋪・寺屋鋪
小原	野々丸・屋敷田・祖谷ヶ丸・中ノ丸・外ヶ丸・屋敷・屋敷坪・岩元屋敷・園田・的場本・内屋敷・寺屋敷・唐屋敷・外屋敷・馬場尾・三角屋敷・門田・十ヶ丸・香代丸・丁子ヶ丸・梅ヶ丸・柳ヶ丸
上リ松	大石ヶ丸・入道丸・松木丸・堀田・屋敷キワ・屋敷・屋敷廻・梅ヶ丸・堀切・大石ヶ丸
石堂	大石ヶ丸・内ヶ丸・臺
上ノ川内	猪堀・上臺・臺
有安	上内ヶ丸・下内ヶ丸（豊前184.有安城）・金丸・大丸・五反丸

【豊前市】

畑	郷城（豊前189.畑城）・馬落・前田・堀切・的場・中屋敷・倉谷・切下シ
馬場	横馬場・溝口・土井・荒倉・治郎丸・兎丸・堀切
中村	園田・治郎丸・戸井田・法師ヶ丸・石丸・新屋敷・飯ヶ堀・下屋敷・金丸・奥屋敷・古屋敷・堀毛・清水屋敷・屋敷田
松江	金丸・馬場村越・茶屋ノ後・殿山

＜豊前国上毛郡＞

【豊前市】

八屋	城屋敷・烏子丸・新屋敷
四郎丸	宮ノ元・築城垣・小劔・花ノ元・横屋・ヲフコガエリ・□屋田・ハカタ・トイタ・屋鋪田・鹿ノ元・前田フケ・中井前・大劔・堂ノ元・前田・ケサ丸・外畑送リ場・新地・コンジツ塚・金奈丸・本地・日掛・歳ノ□・田中丸・垣添・野地
川内	城谷・城ノ臺・城中（豊前196.櫛狩屋城）・古屋鋪前・屋鋪田・陣所平・桐迫中丸・ケサ丸・五反丸・武士田・風子丸・古屋鋪・八田屋鋪・中田キト・椎屋鋪・ヤシキタ・四反丸・居屋鋪・倉ヶ谷・陣所平
鳥越	梨ノ木丸・ソノ田・堂ヤシキ・垣ノ内・ヤシキダ・ウサギマル・犬丸ヤシキ・成國ヤシキ・ソト屋敷・犬丸・下ノ屋敷・水掛丸
大村	梶ヤシキ・堀リ田・門田・座頭ヤシキ・屋敷・興右工門屋敷・太郎屋敷・小丸・屋敷田・東シ屋敷・札ノ前・袈裟丸・馬場・馬場ノ前・居屋敷・彌九郎屋敷・中屋敷・修理屋敷・上ミノヤシキ・下ノヤシキ・上ノ馬場・下ノ馬場・讃岐ヤシキ・大名ヤシキ・屋敷ノ上・今屋敷・土井ノ下・村屋敷・土井・土井ノ田・藤助屋シキ・六屋敷・屋敷畑・城屋敷・彌助ヤシキ・馬場ノ前・屋敷ノ内・八兵衛ヤシキ・イノヤシキ・孫九郎ヤシキ・小ヤシキ・矢倉
荒堀	上ノ屋敷・兵庫屋敷・堀・屋敷・居屋敷・堀田・屋敷田・築地・西屋敷
青畑	谷屋敷・居屋敷・屋敷・倉谷・向フ屋敷・木戸・條城井・ヤシキ田・殿ノ山・的場・垣ノ内
今市	古屋敷・屋敷・堀ノ内・馬場
野田	屋敷田・西屋敷・門田・下屋敷・垣添・東屋敷・内屋敷・堀田・清水ヶ丸・鐙・下ノ土井・中ノ土井・東ノ土井・上ノ土井・門屋敷・向屋敷・居屋敷
搭田	堀町・石丸・下屋敷・向屋敷・清水ヶ丸・門田・内屋敷・甚三屋敷・臼ノ屋敷
吉木	堂前・園田・的場・北屋敷・居屋敷・上丸・築地畑・屋敷・下屋敷・馬場
赤熊	向屋敷・高地屋敷・居屋敷・藏屋敷・屋敷田・裏屋敷・屋敷・北屋敷・屋敷畠・中屋敷・上屋敷・古屋敷・土井屋敷・高地屋敷・韮屋敷・中屋敷・下屋敷
宇島	廣小路・殿山
三毛門	内屋敷
久松	キシロ・居屋敷・後シロ・寺屋敷・垣添・屋敷
恒富	上ノ屋敷・居屋鋪・古屋鋪・内屋敷・西屋敷・堀畑
小犬丸	屋敷・居屋敷・西ノ屋敷
清水町	橋本屋鋪・長枝ヤシキ・寺屋鋪・田中屋鋪・下ヤシキ・新ヤシキ・南屋鋪・門田
市丸	居屋敷（豊前219.市丸城・豊前R19. 市丸城居屋敷遺跡）・的場・屋鋪・射場元・東屋敷・垣添・門田・堀ノ内・堀・西屋敷・上屋敷・下屋敷
三毛門	居屋敷・堀田・屋敷・外屋敷・園田・射場ノ本・門田・トノ・木ノ丸・丸ノ内
三樂	居屋敷・古屋敷・上ノ屋敷・下ノ屋敷・屋敷・門田坂丸
森久	園田・屋敷田・門田・居屋敷
六郎	筒井屋敷・屋敷堀・上屋敷・角田屋敷・中ノ出屋敷・下屋敷・瀬口屋敷・東屋敷・碇屋敷
梶屋	東屋敷・園田・上屋敷・垣添・今丸・法師丸・ホリ・屋敷
堀立	屋敷田・東屋敷・下屋敷・園田・堀田・別府下・久末屋敷・東屋敷・下屋敷
岸井	法師丸・園田・堀・下屋敷・居屋敷・上屋敷・釘丸
高田	板敷・居屋敷・下屋敷
皆毛	古屋敷・寺屋敷・上屋敷・中屋敷・下屋敷・上屋敷
小石原	垣添・中屋敷・下屋敷・古屋敷・光屋敷・板屋敷
久路土	梶屋敷・垣添・牛丸・居屋敷・高畑屋敷・前屋敷・板屋敷・道丸・大問屋敷・瓦蘭屋敷・奥屋敷・大屋敷・寺屋敷・保行屋敷・堤屋敷・堀田屋敷
廣瀬	上ノ土居・中ノ土居・居屋敷・古屋敷・垣添・下屋敷・寺屋敷
鬼木	門田・石丸・屋敷田・西屋敷・下屋敷・屋敷・居屋敷・中屋敷・垣添・下長定屋敷・小屋敷・前田屋敷・東屋敷・又尻屋敷
上大西	古屋敷・堀傳
下大西	上屋敷・井堀・堀傳
永久	中屋敷・築地・上屋敷・堀ノ口・原屋敷・鬼丸・殿屋敷・屋敷・貴船屋敷・藤田屋敷
河原田	堀・門田・善丸
薬師寺	木殿・三郎丸・太郎丸・四郎丸・門田・荒堀・堀田
挟間	新堀・別府・井堀
才尾	垣ノ内・後屋敷
山内	住城・住城ノ上・住城谷（豊前202.墨城）・屋敷・城ノ越・園田・垣ノ内・別所・屋敷田・座主屋敷・井堀・屋敷ノ下・山口屋敷
下川内	仲屋敷・屋敷田・園田・金具丸・西園・屋敷田・藏田・堂屋敷・古城・上屋敷・下ノ丸・中島屋敷・石丸・垣ノ内・居屋敷・荒堀・古屋敷
下川底	石垣・城井前・奥屋敷・城山・上下屋敷・屋敷田・出屋敷・内屋敷・外屋敷・城ノ尾・城ヶ迫
中川底	屋敷・前ヶ迫・前迫・前・木戸ノ前・木戸・堂ノ本・堀・竹屋敷・上ノ切・下ノ切・下ノ臺・宮ノ前・堂ノ前・藏ノ前・平四郎屋敷・石垣・梶屋ノ下・屋敷ノ上宮山・藏ヶ迫
上川底	ヤシキ・屋敷・垣添・屋敷奥
天和	屋敷・谷口ヤシキ
大河内	屋敷・堀切・仲四郎屋敷・居屋敷・垣添・堀リ田・井ノ尻屋敷・屋敷添・出口屋敷・江津良屋敷・垣ノ内・ヤシキ・屋敷裏・八郎屋敷・弓取・高城
岩屋	垣ノ内・屋敷・小谷屋敷・垣添・寺屋敷・屋敷田・的場・屋敷廻・尾鼻屋敷・居屋敷・屋敷ノ上・堀田・鍛冶屋敷・奥屋敷・弓取渡リ
篠瀬	古屋敷・寺屋敷・小城戸ノ本・屋敷・居屋敷

旧村名（大字）	関連地名
鳥井畑	屋敷・居屋敷・園田
【築上郡上毛町】	
矢方	下石倉・居屋敷・屋敷・馬場・蟹屋敷・持溝・土居屋敷・奥屋敷・矢ハズ・庄右衛門屋敷
緒方	奥屋敷・殿屋敷・井田丸・堀・春屋敷・上屋敷・中屋敷・持溝
成恒	岩丸・未道屋敷・折鋪田・馬場ノ前・古殿・堀ノ後・中溝・藏屋敷・堀ノ内・猪ノ丸
安雲	小松堀・内ヶ丸・溝添・城ヶ守・屋敷田・堀田・小屋敷・今屋敷・長兵衛屋敷・中屋敷・梶屋敷・鼓屋敷・本屋敷・角屋敷・馬場・小木戸・馬場ノ下・大郎丸・カシヤシキ
尻高	屋敷下・屋敷・中屋敷・猪堀・鹿堀・仁助屋敷・古屋敷・前屋敷・棚屋敷・上ノ屋敷・上ノ丸・古屋敷・茂四郎屋敷・迫屋敷・上屋敷・道夫屋敷・堀田・持溝・門田・峯ノ前・堀・義助屋敷
西友枝	釣金・堀田・梅ヶ丸・藤ヶ丸・土倉・園田
東上	屋敷内・門田・岩屋々敷・屋敷ノ上・屋敷前・奥園・上屋敷・八郎屋敷・城ノ越・梅ヶ丸・屋敷ノ下・勘田丸・猪屋敷・小松堀・屋敷・垣添・下村屋敷・土屋敷
土佐井	屋敷・外園・桝丸・井堀・堀田・門田・屋敷田・垣添・新貝屋敷・屋敷畑・梅ヶ丸・的場
東下	城山（豊前245.追揚城）・垣ノ内・城ノ腰・奥屋敷・戸崎屋敷・竹ヶ下屋敷・伊ノ屋敷・古城畑・石ヶ丸・内尾屋敷・谷口屋敷・善正寺屋敷・上ノ土居・古屋敷・居屋敷安養寺・下ノ屋敷・千光寺屋敷・的場深・淨慶屋敷・屋敷田・寺屋敷・居屋敷・野間屋敷・丸・堀毛・上井堀・下井堀・井堀・屋敷畑
原井	切通・井堀・外ヶ丸・門田・屋敷田・小屋園田・堀田・儀助屋敷・亀造屋敷・忠平屋敷・橋本屋敷・弘法屋敷・垣ノ内・九右衛門屋敷・民右衛門屋敷・武右衛門屋敷・岡屋敷・堂屋敷・城ノ前・垣添・喜助屋敷・横兵衛屋敷・倉谷・伊平屋敷・仲四郎屋敷・外屋敷・圓造屋敷・傾城石・田平ノ臺・方坂臺・方坂北平臺
百留	下ノ屋敷・居屋敷・垣添
上唐原	鐙田・園田・石垣田・下堀田・五郎丸・土手屋敷・稲元屋敷・郷藏屋敷・居屋敷廻リ・道□丸・垣添・辻屋敷
下唐原	大溝端・土手添・居屋敷・古屋敷・反後屋敷・寺屋敷・堀田・太郎丸・三右衛門屋敷・秋吉屋敷・矢倉・馬場屋敷・堀口・成瀬屋敷・梶原屋敷・藏屋敷
宇野	屋鋪田・居屋鋪・松本屋鋪・上ノ屋鋪・奥屋鋪・古屋鋪・彌吉屋鋪・久七屋鋪・三右工門屋鋪・傳二郎屋鋪・恵美須屋鋪・上ノ屋鋪・下屋鋪・佐右工門屋鋪・角助屋鋪・武助瀬助二ツ屋鋪・瀧造屋鋪・政助屋鋪・權助屋鋪・原屋鋪・小臺・地藏屋鋪・林米屋鋪・權七屋鋪・與作屋鋪・馬場代・垣添・小堀・常七屋鋪・權三郎屋鋪・善九郎屋鋪・園田口・堀田・臺・桑ノ臺・堀田・彌吉屋鋪・嘉右工門屋鋪・佐平屋鋪・前屋鋪・仲四郎屋鋪・原屋鋪・小一郎屋鋪・武七屋鋪・官太郎屋鋪・御茶屋床・政助屋鋪・十右工門屋鋪
垂水	屋敷・伊田丸・馬場代・堂屋敷・屋敷ノ内・宇野屋敷・屋敷・ヤシキ・門田・大土井・上ノ土居・木戸先・園田・中ノ土居・貴船土居・屋敷井田・下タ土居・出屋敷・屋敷
八並	丸・六ツ堀・桝丸・居屋敷・上毛屋敷・屋敷下
大ノ瀬	古屋敷・居屋敷・上堀田・下堀田・堀リ田・東居屋敷
吉岡	垣添・堀・屋敷・居屋敷・須藏屋敷
中村	居屋敷・古屋敷・内屋敷・下屋敷・竹林屋敷・西屋敷
【築上郡吉富町】	
幸子	屋敷・舛丸・園田・古屋敷・横堀・居屋敷
別府	石丸・城田・大屋敷・下屋敷・居屋敷・屋敷・内屋敷
楡生	居屋敷・外屋敷・内屋敷・上ノ屋敷・屋敷
今吉	ハサマ・内屋敷
廣津	屋敷・畠屋敷・下屋敷・堀田・園田
鈴熊	屋鋪・居屋鋪・奥屋鋪・上ノ屋鋪・寒屋敷
直江	屋敷・堀田・西屋鋪・垣添・古屋鋪・居屋鋪・堂屋鋪
土屋	居屋敷・屋敷・園田・東屋敷・堀田
小祝	屋敷・屋敷畑・園田
小犬丸	堀田溝・北山溝・堀田・屋敷・園田

索　引

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
あ						
青畑城	あおはたじょう	上毛郡	豊前市荒堀	213	26	－
赤池城	あかいけじょう	田川郡	田川郡福智町赤池	68	16	－
赤熊城	あかぐまじょう	上毛郡	豊前市赤熊	217	26	－
赤城	あかじょう	→下赤城（しもあかじょう）				
赤城	あかじょう	田川郡	田川郡赤村赤	－	34	－
上野城	あがのじょう	田川郡	田川郡福智町上野	52	14	－
赤幡城	あかはたじょう	築城郡	築上郡築上町赤幡	174	22	188
赤松ヶ鼻城	あかまつがはなじょう	→赤松城（あかまつじょう）				
赤松ヶ畑城	あかまつがはたじょう	→赤松城（あかまつじょう）				
赤松城	あかまつじょう	企救郡	北九州市小倉南区道原	35	14	102
秋永城	あきながじょう	→若木城（わかぎじょう）				
秋野城	あきのじょう	田川郡	田川郡赤村赤	124	20	－
秋ノ城	あきのじょう	→秋野城（あきのじょう）				
秋葉山城	あきばやまじょう	→若木城（わかぎじょう）				
秋吉城	あきよしじょう	→下唐原城（しもとうばるじょう）				
安雲城	あくもじょう	上毛郡	築上郡上毛町安雲	233	28	－
安雲山田遺跡	あくもやまだいせき	上毛郡	築上郡上毛町安雲	R20	32	230
旭城	あさひじょう	→旭陣屋（あさひじんや）				
旭陣屋	あさひじんや	上毛郡	豊前市千束	K8	30	212
安宅城	あたかじょう	田川郡	田川郡川崎町安真木	89	18	－
足立城	あだちじょう	→足立山城（あだちやまじょう）				
足立山城	あだちやまじょう	企救郡	北九州市小倉北区足原・小倉南区足原・葛原・湯川	15	12	76
天生田城	あもうだじょう	→佐伯陣（さえきじん）				
荒平城	あらひらじょう	田川郡	田川郡川崎町安真木	87	18	－
荒堀車地遺跡	あらほりくるまちいせき	上毛郡	豊前市荒堀	R15	32	226
荒堀城	あらほりじょう	上毛郡	豊前市荒堀	212	26	－
有安城	ありやすじょう	築城郡	築上郡築上町有安	184	24	－
安祥寺城	あんしょうじじょう	上毛郡	豊前市八屋	209	26	－
伊方城園遺跡	いかたしろぞのいせき	田川郡	田川郡福智町伊方	R3	30	216
伊加利城	いかりじょう	→大善寺城（だいぜんじじょう）				
伊川城	いがわじょう	企救郡	北九州市門司区伊川	7	12	－
生山城	いくやまじょう	京都郡	京都郡苅田町苅田か	K6	30	－
石松砦	いしまつとりで	田川郡	田川郡福智町市場	66	16	－
伊田原城	いたはらじょう	→上伊田城（かみいたじょう）				
市丸城	いちまるじょう	上毛郡	豊前市市丸	219	26	－
市丸城居屋敷遺跡	いちまるじょういやしきいせき	上毛郡	豊前市市丸	R19	3	229
井手浦城	いでうらじょう	→塔ヶ峯城（とうがみねじょう（北九州市小倉南区））				
到津城	いとうづじょう	→引地山城（ひきちやまじょう）				
糸城	いとじょう	田川郡	田川市位登	77	16	－
糸田城	いとだじょう	田川郡	田川郡糸田町糸田	75	16	－
稲童城	いなどうじょう	仲津郡	行橋市稲童・松原	－	34	－
稲光城	いなみつじょう	→大平山城（たいへいやまじょう）				
犬丸城	いぬまるじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川犬丸	－	34	－
猪ノ浦城	いのうらじょう	企救郡	北九州市門司区恒見	13	12	－
猪ノ迫城	いのさこじょう	→挟間城（はさまじょう）				
猪嶽城	いのたけじょう	田川郡	旧田川郡	F3	32	－
猪膝城	いのひざじょう	→勝山城（かつやまじょう（田川市））				
今市城	いまいちじょう	上毛郡	豊前市今市	215	26	－
今蔵遺跡	いまくらいせき	上毛郡	築上郡上毛町東下	R22	32	233
今任城	いまとうじょう	→城越城（じょうのこしじょう）				
岩隈城	いわくまじょう	→尾倉山城（おぐらやまじょう）				
岩丸城	いわまるじょう	築城郡	築上郡築上町岩丸	181	22	－
岩屋城	いわやじょう	上毛郡	豊前市岩屋	192	24	－

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
因州城	いんしゅうじょう	→大坂山城（おおさかやまじょう）				
上山城	うえやまじょう	→恒見山城（つねみやまじょう）				
牛切城	うしきりじょう	→手切城（てきりじょう）				
内ヶ瀬城	うちがせじょう	→上落合城（かみおちあいじょう）				
内木城	うちきしろ	→木城城（きしろじょう）				
宇都宮氏館	うつのみやしやかた	築城郡	築上郡築上町松丸	159	22	178
馬ヶ岳城	うまがたけじょう	京都郡 / 仲津郡	行橋市大谷・西谷・京都郡みやこ町犀川花熊	140	20	160
宇留津城	うるづじょう	築城郡	築上郡築上町宇留津	172	22	－
榎木城	えのきじょう	上毛郡	築上郡上毛町上唐原	240	28	－
海老名城	えびなじょう	→下川底城（しもかわそこじょう（豊前市（豊前 194）））				
海老野城	えびのじょう	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう（北九州市小倉南区 / 田川郡香春町））				
恵里城	えりじょう	企救郡	北九州市小倉北区南丘 1 丁目	17	12	－
恵利城	えりじょう	→恵里城（えりじょう）				
円田城	えんたじょう	→宇留津城（うるづじょう）				
塩田城	えんたじょう	→宇留津城（うるづじょう）				
追揚城	おいあげじょう	上毛郡	築上郡上毛町東下・西友枝	245	28	200
追揚ヶ城	おいあげじょう	→追揚城（おいあげじょう）				
王子城	おうじじょう	→若王子城（にゃっこうじじょう）				
合馬城	おうまじょう	→宝積寺城（ほうしゃくじじょう）				
大内田城	おおうちだじょう	田川郡	田川郡赤村内田	－	34	－
大内盛見陣	おおうちもりはるじん	企救郡	北九州市小倉南区北方周辺	D2	30	－
大河内城	おおかわちじょう	上毛郡	豊前市大河内	－	34	－
大切城	おおぎりじょう	上毛郡	築上郡上毛町東上	249	28	－
大桐城	おおぎりじょう	→大切城（おおぎりじょう）				
大熊城	おおくまじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川大熊	－	34	－
大坂山城	おおさかやまじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川大坂	147	20	168
大谷城	おおたにじょう	→馬ヶ岳城（うまがたけじょう）				
大鍋山城	おおなべやまじょう	企救郡	北九州市小倉南区徳力・志井	28	12	－
大野城	おおのじょう	→宮山城（みややまじょう）				
大原城	おおはらじょう	上毛郡	築上郡上毛町東上	250	28	－
大原八幡神社	おおはらはちまんじんじゃ	京都郡	築上郡みやこ町勝山大久保	R4	30	217
大原館	おおはらやかた	→為朝屋敷（ためともやしき）				
大平城	おおひらじょう	築城郡	築上郡築上町寒田	167	22	184
大豆塚山城	おおまめつかやまじょう	田川郡	田川郡添田町添田	103	18	－
大三岳城	おおみつだけじょう	企救郡	北九州市小倉南区辻三	22	12	80
大村石畑遺跡	おおむらいしばたけいせき	上毛郡	豊前市大村	R17	32	228
大村城	おおむらじょう	上毛郡	豊前市大村	211	26	－
大村城	おおむらじょう	→不動ヶ岳城（ふどうがだけじょう）				
大村天神林遺跡	おおむらてんじんばやしいせき	上毛郡	豊前市大村	R16	32	226
岡城	おかじょう	上毛郡	豊前市下川底	193	24	－
緒方城	おがたじょう	上毛郡	築上郡上毛町緒方・矢方	235	28	199
老翁丸城	おきなまるじょう	田川郡	旧田川郡	F4	32	－
尾倉山城	おぐらやまじょう	京都郡	京都郡みやこ町勝山岩熊	135	20	157
小倉山城	おぐらやまじょう	→尾倉山城（おぐらやまじょう）				
尾倉山堡	おぐらやまほう	→尾倉山城（おぐらやまじょう）				
鬼ヶ城	おにがじょう	田川郡	田川郡香春町採銅所	K3	30	209
鬼ヶ岳城	おにがたけじょう	→鬼ヶ城（おにがじょう）				
鬼木城	おにのきじょう	上毛郡	豊前市鬼木	214	26	－
鬼邊城	おにべじょう	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう（北九州市小倉南区 / 田川郡香春町））				
小野田屋敷	おのだやしき	企救郡	北九州市小倉南区木下	D3	30	－
小畑城	おばたけじょう	上毛郡	豊前市下川底	195	24	－
大舟城	おぶねじょう	→山本城（やまもとじょう）				
小舟山城	おぶねやまじょう	→山本城（やまもとじょう）				
大舩山城	おぶねやまじょう	→山本城（やまもとじょう）				
小山田城	おやまだじょう	築城郡	築上郡築上町小山田・本庄	179	22	191

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁

か

柿下城	かきしたじょう	田川郡	田川郡香春町柿下	51	14	－
柿城	かきじょう	田川郡	田川郡添田町添田	110	18	－
頂吉城	かぐめよしじょう	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう（北九州市小倉南区 / 田川郡香春町））				
神楽城	かぐらじょう	→神楽山城（かぐらやまじょう）				
神楽山城	かぐらやまじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川木井馬場・犀川上高屋	156	22	175
隠蓑城	かくれみのじょう	→丸ヶ口城（まるがぐちじょう）				
笠松城	かさまつじょう	田川郡	旧田川郡	F2	32	－
鍛冶屋敷	かじやしき	→宇都宮氏館（うつのみやしやかた）				
蚊田城	かだじょう	企救郡	北九州市小倉南区横代東町	－	34	－
片野城	かたのじょう	企救郡	北九州市小倉北区片野	－	34	－
勝野城	かつのじょう	→小倉城（こくらじょう）				
葛城	かづらじょう	田川郡	田川郡赤村赤	－	34	－
勝山城	かつやまじょう	京都郡	京都郡みやこ町勝山黒田・勝山長川	136	20	158
勝山城	かつやまじょう	築城郡	築上郡築上町本庄	164	22	－
勝山城	かつやまじょう	田川郡	田川市猪膝	K5	30	－
勝山城	かつやまじょう	→小倉城（こくらじょう）				
金岡城	かなおかじょう	→金田城（かなだじょう）				
金岡山城	かなおかやまじょう	→金国城（かなくにじょう）				
金国城	かなくにじょう	田川郡	田川市猪国	78	16	122
金国大王城	かなくにだいおうじょう	→金国城（かなくにじょう）				
金田城	かなだじょう	田川郡	田川郡福智町金田	69	16	－
金山城	かなやまじょう	企救郡	北九州市門司区黒川・大積	4	12	－
蟹萱城	かにかやじょう	→畑城（はたじょう（豊前市 / 築上郡築上町））				
叶松城	かのうまつじょう	上毛郡	築上郡上毛町東下	246	28	201
加能松城	かのうまつじょう	→叶松城（かのうまつじょう）				
甲山城	かぶとやまじょう	→赤幡城（あかはたじょう）				
釜倉城	かまくらじょう	築城郡	築上郡築上町上香楽・小山田	178	22	190
鎌倉城	かまくらじょう	→釜倉城（かまくらじょう）				
釜蔵城	かまくらじょう	→釜倉城（かまくらじょう）				
上伊田城	かみいたじょう	田川郡	田川市伊田町	79	16	－
上伊良原城	かみいらはらじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川上伊良原	157	22	176
上落合城	かみおちあいじょう	田川郡	田川郡添田町落合	120	20	－
上清水遺跡	かみしみずいせき	企救郡	北九州市小倉南区横代	R1	30	215
上高屋城	かみたかやじょう	→戸垣城（とがきじょう）				
上長野城	かみながのじょう	→長野城（ながのじょう）				
上ノ城	かみのじょう	→糸城（いとじょう）				
神畑城	かみはたじょう	→高田城（たかたじょう）				
亀城	かめじょう	→門司城（もじじょう）				
蒲生城	がもうじょう	→虹山城（にじやまじょう）				
萱切城	かやきりじょう	→茅切山城（かやきりやまじょう）				
茅切山城	かやきりやまじょう	仲津郡 / 築城郡　築上郡築上町本庄・京都郡みやこ町犀川横瀬		162	22	－
雁股城	かりまたじょう	上毛郡 / 下毛郡	築上郡上毛町西友枝・豊前市松尾川内・大分県中津市耶馬渓町川原口	253	28	203
雁股山城	かりまたやまじょう	→雁股城（かりまたじょう）				
川崎城	かわさきじょう	→城山城（じょうやまじょう（田川郡川崎町 / 田川市））				
川底城	かわそこじょう	→岡城（おかじょう（豊前市））				
川底城	かわそこじょう	→下川底城（しもかわそこじょう（豊前市（豊前 194）））				
川内城	かわちじょう	→櫛狩屋城（くしがりやじょう）				
川内城	かわちじょう	→八田城（はったじょう）				
香春城	かわらじょう	→鬼ヶ城（おにがじょう）				
香春岳城	かわらだけじょう	田川郡	田川郡香春町採銅所・香春	50	14	115
香春藩庁	かわらはんちょう	田川郡	田川郡香春町香春	K4	30	210
岩石城	がんじゃくじょう	田川郡	田川郡添田町添田・赤村赤	104	18	129

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
岩酌城	がんじゃくじょう	→岩石城（がんじゃくじょう）				
寒城	かんじょう	築城郡	豊前市松江	188	24	－
苅田城	かんだじょう	→松山城（まつやまじょう）				
神田城	かんだじょう	→松山城（まつやまじょう）				
寒竹城	かんちくじょう	→吉志城（きしじょう）				
観音寺城	かんのんじじょう	田川郡	田川郡福智町上野	54	14	120
上仏来山城	かんぶくさんじょう	田川郡	田川郡添田町英彦山	122	20	136
城井城	きいじょう	→大平城（おおひらじょう）				
城井ノ上城	きいのこじょう	築城郡	築上郡築上町寒田	168	22	185
城井屋敷	きいやしき	→宇都宮氏館（うつのみやしやかた）				
規矩城	きくじょう	企救郡	北九州市（旧企救郡）	F1	32	－
吉志城	きしじょう	企救郡	北九州市門司区吉志	11	12	－
木城城	きしろじょう	田川郡	田川郡川崎町安真木	86	18	125
北方城	きたがたじょう	→丸城（まるじょう）				
吉川城	きっかわじょう	企救郡 / 筑前国	北九州市小倉南区辻三・八幡東区大蔵	24	12	84
吉川元春陣所	きっかわもとはるじんしょ	企救郡	北九州市小倉南区城野	D1	30	－
亀甲城	きっこうじょう	→小野田屋敷（おのだやしき）				
木江城	きのこうじょう	→城井ノ上城（きいのこじょう）				
木ノ郷屋形	きのこうやかた	→城井ノ上城（きいのこじょう）				
木下城	きのしたじょう	企救郡	北九州市小倉南区木下・新道寺・石原町・春吉・道原	33	14	96
貴船城	きふねじょう	田川郡	田川郡福智町弁城	63	16	－
木部城	きべじょう	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう（北九州市小倉南区 / 田川郡香春町））				
切帝城	きりみかどじょう	→切寄城（きりよせじょう（田川市））				
切寄城	きりよせじょう	田川郡	田川市弓削田	76	16	－
切寄城	きりよせじょう	→白土城（しらつちじょう（田川郡大任町））				
切寄城	きりよせじょう	→草場城（くさばじょう（田川郡福智町））				
草野城	くさのじょう	京都郡	行橋市草野	141	20	－
草場城	くさばじょう	田川郡	田川郡福智町市場	65	16	－
朽網城	くさみじょう	企救郡	北九州市小倉南区朽網	42	14	110
楠城	くすじょう	→別府城（べふじょう（築上郡築上町））				
葛原城	くずはらじょう	企救郡	北九州市小倉南区葛原	－	34	－
櫛狩屋城	くしがりやじょう	上毛郡	豊前市川内	196	24	195
串狩野城	くしがりやじょう	→櫛狩屋城（くしがりやじょう）				
沓尾崎城	くつおざきじょう	→沓尾城（くつおじょう）				
久津尾崎城	くつおざきじょう	→沓尾城（くつおじょう）				
沓尾城	くつおじょう	仲津郡	行橋市沓尾	144	20	－
久津尾城	くつおじょう	→沓尾城（くつおじょう）				
沓川城	くつかわじょう	上毛郡	豊前市三毛門	218	26	－
求菩提山城	くぼてさんじょう	→求菩提山砦（くぼてさんとりで）				
求菩提山砦	くぼてさんとりで	上毛郡	豊前市求菩提	191	24	－
公門屋敷	くもんやしき	田川郡	田川郡川崎町田原	D6	30	－
鞍山城	くらやまじょう	→十鞍山城（とくらやまじょう）				
久連山城	くれやまじょう	田川郡	田川郡香春町香春	49	14	－
黒岩ヶ城	くろいわがじょう	→黒岩城（くろいわじょう（京都郡みやこ町））				
黒岩城	くろいわじょう	田川郡	田川郡添田町津野	121	20	－
黒岩城	くろいわじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川久富・犀川末江・光冨	152	20	173
黒谷城	くろたにじょう	田川郡	田川郡上津村	F6	32	－
黒土城	くろつちじょう	上毛郡	豊前市久路土	220	26	－
久路土城	くろつちじょう	→黒土城（くろつちじょう）				
黒原城	くろはらじょう	→足立山城（あだちやまじょう）				
桑原城	くわはらじょう	→明神山城（みょうじんやまじょう）				
国見台	くんみだい	仲津郡	京都郡みやこ町犀川蔵持	D11	30	－
建徳寺城	けんとくじじょう	田川郡	田川郡大任町今任原	96	18	－
鯉ノ城	こいのしろ	→小倉城（こくらじょう）				
神崎城	こうざきじょう	田川郡 / 筑前国	田川郡福智町神崎・飯塚市鹿毛馬	72	16	－
幸子城	こうじじょう	→幸子矢頭田城（こうじやとうだじょう）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
幸子城	こうじじょう	→西光寺城（さいこうじじょう）				
幸子矢頭田城	こうじやとうだじょう	上毛郡	築上郡吉富町幸子	227	26	－
郷城	ごうしろ	→畑城（はたじょう（豊前市 / 築上郡築上町））				
小内田城	こうちだじょう	田川郡	田川郡赤村内田・大任町今任原	123	20	－
鴻巣城	こうのすじょう	築上郡か	旧築上郡か	F8	32	－
光明寺城	こうみょうじじょう	上毛郡	築上郡上毛町西友枝	251	28	－
香楽城	こうらくじょう	→堂山城（どうやまじょう）				
牛王城	ごおうじょう	上毛郡	築上郡上毛町矢方	236	28	－
小川内城	こがわちじょう	仲津郡 / 築城郡	築上郡築上町本庄・京都郡みやこ町犀川横瀬	163	22	180
極楽寺城	ごくらくじじょう	築城郡	築上郡築上町極楽寺	180	22	－
小倉城	こくらじょう	企救郡	北九州市小倉北区城内	K2	30	207
越堀城	こしほりじょう	→堀越城（ほりこしじょう）				
御殿地	ごてんち	→豊津藩庁（とよつはんちょう）				
小早川城	こばやかわじょう	→吉川城（きっかわじょう）				
小三岳城	こみつだけじょう	企救郡	北九州市小倉南区辻三	23	12	83
小森城	こもりじょう	→吉木城（よしきじょう）				
小森城	こもりじょう	企救郡	北九州市小倉南区小森	－	34	－
近吉砦	こんきちとりで	田川郡	田川郡福智町上野	59	14	－
玄己山城	ごんげんやまじょう	田川郡	田川郡大任町今任原	94	18	－

さ

西郷大坂城	さいごうおおさかじょう	→不動ヶ岳城（ふどうがだけじょう）				
西光寺城	さいこうじじょう	上毛郡	築上郡吉富町幸子	228	26	－
西郷城	さいごうじょう	→不動ヶ岳城（ふどうがだけじょう）				
佐伯陣	さえきじん	仲津郡	行橋市天生田	D9	30	－
左衛門城	さえもんじょう	田川郡	田川郡添田町中元寺	113	18	135
差儀城	さぎじょう	田川郡	田川郡赤村赤・大任町今任原	93	18	－
崎野城	さきのじょう	仲津郡	行橋市西泉１丁目	－	34	－
崎山城	さきやまじょう	→燕岩城（つばめいわじょう）				
迫屋敷城	さこやしきじょう	田川郡	田川郡川崎町川崎	D5	30	－
猿尾の陣	さるおのじん	築城郡	築上郡築上町寒田	D12	30	－
猿喰城	さるはみじょう	企救郡	北九州市門司区猿喰	8	12	73
猿山城	さるやまじょう	→恒見山城（つねみやまじょう）				
志井城	しいじょう	→椎山城（しいやまじょう）				
椎木谷城	しいのきだにじょう	田川郡	田川郡川崎町池尻・田川市奈良	84	18	－
椎山城	しいやまじょう	企救郡	北九州市小倉南区徳吉・志井	29	12	90
尻高城	しだかじょう	上毛郡	築上郡上毛町尻高	237	28	－
司高城	しだかじょう	→尻高城（しだかじょう）				
城田山城	したやまじょう	田川郡	田川郡福智町上野	58	14	－
指月城	しづきじょう	→小倉城（こくらじょう）				
四ノ瀬城	しのせじょう	→日瀬城（ひのせじょう）				
渋見城	しぶみじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川内垣・犀川末江・節丸	153	20	－
下赤城	しもあかじょう	田川郡	田川郡赤村赤	125	20	－
下伊良原城	しもいらはらじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川下伊良原	－	34	－
下落合城	しもおちあいじょう	田川郡	田川郡添田町落合	117	18	－
下川底城	しもかわぞこじょう	上毛郡	豊前市下川底	194	24	194
下川底城	しもかわぞこじょう	→小畑城（おばたけじょう）				
下川内城	しもかわちじょう	上毛郡	豊前市下河内	198	24	－
下木井遺跡	しもきいいせき	仲津郡	京都郡みやこ町犀川木井馬場	R11	32	223
下北方城	しもきたがたじょう	→丸城（まるじょう）				
下尻高遺跡	しもしだかいせき	上毛郡	築上郡上毛町尻高	R21	32	232
下唐原城	しもとうばるじょう	上毛郡	築上郡上毛町下唐原	238	28	－
下長野城	しもながのじょう	企救郡	北九州市小倉南区長野本町１・４丁目	38	14	－
下ノ城	しものじょう	→糸城（いとじょう）				
下ノ原城	しものはるじょう	田川郡	田川郡福智町上野	57	14	－
下稗田森遺跡	しもひえだもりいせき	京都郡	行橋市下稗田	R6	30	－

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
蛇面城	じゃめんじょう	田川郡	田川郡大任町今任原	90	18	—
蛇面山城	じゃめんやまじょう	→蛇面城（じゃめんじょう）				
障子ヶ岳城	しょうじがだけじょう	京都郡 / 田川郡	京都郡みやこ町勝山松田・勝山浦河内・田川郡香春町採銅所・鏡山	134	20	149
勝司嶽城	しょうじがだけじょう	→障子ヶ岳城（しょうじがだけじょう）				
城道寺城	じょうどうじじょう	田川郡	田川郡福智町上野	56	14	—
城導寺城	じょうどうじじょう	→城道寺城（じょうどうじじょう）				
城ノ尾城	じょうのおじょう	田川郡	田川郡添田町落合	119	20	—
城越城	じょうのこしじょう	田川郡	田川郡大任町今任原	95	18	127
城ノ腰城	じょうのこしじょう	企救郡	北九州市小倉南区蒲生	21	12	—
城ノ腰城	じょうのこしじょう	→貫城（ぬきじょう）				
城ノ腰城	じょうのこしじょう	→上伊田城（かみいたじょう）				
城ノ腰城	じょうのこしじょう	→小内田城（こうちだじょう）				
庄ノ辻城	しょうのつじじょう	→赤池城（あかいけじょう）				
城ノ粒城	じょうのつぶじょう	→椎山城（しいやまじょう）				
城平城	じょうびらじょう	田川郡	田川郡添田町添田・野田	107	18	133
城山遺跡群	じょうやまいせきぐん	田川郡	田川郡福智町金田	R2	30	215
城山城	じょうやまじょう	田川郡	田川郡福智町上野	53	14	119
城山城	じょうやまじょう	企救郡	北九州市小倉南区呼野	44	14	—
城山城	じょうやまじょう	田川郡	田川郡川崎町川崎・田川市猪国	85	18	125
城山城	じょうやまじょう	田川郡	田川郡添田町野田	112	18	134
城山城	じょうやまじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川帆柱	158	22	177
城山城	じょうやまじょう	→恒見山城（つねみやまじょう）				
城山城	じょうやまじょう	→城山砦（じょうやまとりで）				
城山城	じょうやまじょう	→元永城（もとながじょう）				
城山城	じょうやまじょう	→不動ヶ岳城（ふどうがだけじょう）				
城山城	じょうやまじょう	→山鹿城（やまがじょう（京都郡みやこ町））				
城山城	じょうやまじょう	→小川内城（こがわちじょう）				
城山城	じょうやまじょう	→馬場城（ばばじょう（豊前市））				
城山砦	じょうやまとりで	田川郡	田川郡添田町添田	106	18	132
城坪城	じょんつぼじょう	田川郡	田川市伊加利	82	16	124
白土城	しらつちじょう	田川郡	田川郡大任町大行事	99	18	—
代金城	しろかねじょう	上毛郡	築上郡上毛町上唐原	241	28	—
陣ガ城	じんがじょう	→真木城（まきじょう）				
新城	しんじょう	田川郡	田川郡香春町採銅所	46	14	112
真如寺城	しんにょじじょう	築城郡	築上郡築上町真如寺	182	22	—
陣ノ尾城	じんのおじょう	→安宅城（あたかじょう）				
陣山城	じんやまじょう	→畑城（はたじょう（北九州市門司区））				
陣山城	じんやまじょう	→椎山城（しいやまじょう）				
須江城	すえじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川末江	—	34	—
杉城	すぎじょう	仲津郡か	旧仲津郡か	F7	32	—
角田城	すだじょう	築城郡	豊前市中村	186	24	—
須磨園城	すまぞのじょう	京都郡	行橋市須磨園	—	34	—
墨城	すみしろ	上毛郡	豊前市山内	202	24	—
住城城	すみしろじょう	→墨城（すみしろ）				
巣山城	すやまじょう	企救郡	北九州市小倉南区蒲生	20	12	—
諏訪山城	すわやまじょう	田川郡 / 筑前国	田川郡福智町上野・直方市上境	55	14	121
世上ヶ岳城	せじょうがだけじょう	田川郡	田川郡赤村赤	126	20	—
節丸城	せつまるじょう	→渋見城（しぶみじょう）				
勢見ヶ岳城	せみがたけじょう	→山浦城（やまうらじょう）				
宗印城	そういんじょう	→観音寺城（かんのんじじょう）				
惣社城	そうしゃじょう	→辻野屋敷（つじのやしき）				
添田城	そえだじょう	→城山砦（じょうやまとりで）				

た

大将陣	たいしょうじん	仲津郡	行橋市矢留	D8	30	—
大将陣	たいしょうじん	→佐伯陣（さえきじん）				

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
大善寺城	だいぜんじじょう	田川郡	田川市伊加利	80	16	－
大平山城	たいへいやまじょう	京都郡	京都郡苅田町稲光・葛川・下片島・山口	132	20	146
高尾山城	たかおやまじょう	田川郡	田川郡福智町赤池	67	16	－
高来城	たかくじょう	京都郡	行橋市入覚・高来	139	20	－
高来ノ柵	たかくのき	→高来城（たかくじょう）				
高城	たかじょう	京都郡	京都郡苅田町南原・山口	131	20	145
高城	たかじょう	上毛郡	豊前市中川底	－	34	－
高城山城	たかじょうやまじょう	→高城（たかじょう（京都郡苅田町））				
高田城	たかたじょう	上毛郡	豊前市高田	222	26	197
高塚城	たかつかじょう	築城郡	築上郡築上町高塚	177	22	－
高野城	たかのじょう	→長尾城（ながおじょう（北九州市小倉南区））				
高野谷山城	たかのだにやまじょう	→長尾城（ながおじょう（北九州市小倉南区））				
高畑城	たかはたじょう	→高畑山城（たかはたやまじょう）				
高畑城	たかはたじょう	→宇都宮氏館（うつのみやしやかた）				
高畑山城	たかはたやまじょう	企救郡	北九州市小倉南区道原	34	14	100
宝山桑ノ木遺跡	たからやまくわのきいせき	仲津郡	行橋市宝山	R8	30	220
宝山小出遺跡	たからやまこいでいせき	仲津郡	行橋市宝山	R7	30	219
宝山城	たからやまじょう	仲津郡	行橋市宝山	142	20	－
嶽ヶ城	たけがじょう	田川郡	田川市伊加利	81	16	－
田島崎城	たじまざきじょう	→成恒城（なりつねじょう）				
田代城	たしろじょう	→三角城（みすみじょう・北九州市小倉南区）				
立尾城	たつおじょう	→金国城（かなくにじょう）				
立屋敷	たてやしき	→上野城（あがのじょう）				
狸葉山城	たぬきはやまじょう	企救郡	北九州市小倉南区朽網	43	14	－
田原城	たばらじょう	田川郡	田川郡川崎町田原・田川市伊加利	83	16	－
田原平岳城	たばらひらたけじょう	→田原城（たばらじょう）				
為朝屋敷	ためともやしき	田川郡	田川郡香春町中津原・田川市伊田	D4	30	－
壇の城	だんのじょう	上毛郡	築上郡上毛町下唐原	239	28	－
千束城	ちづかじょう	→旭陣屋（あさひじんや）				
茶臼城	ちゃうすじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川柳瀬	150	20	171
茶臼山城	ちゃうすやまじょう	企救郡 / 田川郡	北九州市小倉南区頂吉・呼野 / 田川郡香春町採銅所	45	14	110
茶臼山城	ちゃうすやまじょう	築城郡	築上郡築上町船迫	173	22	187
茶臼山城	ちゃうすやまじょう	→上伊田城（かみいたじょう）				
茶臼山城	ちゃうすやまじょう	→茶臼城（ちゃうすじょう）				
中元寺城	ちゅうがんじじょう	→宝ヶ岳城（ほうがたけじょう）				
鎮西原城	ちんぜいばるじょう	→為朝屋敷（ためともやしき）				
築城城	ついきじょう	築城郡	築上郡築上町築城	170	22	－
築城城跡遺跡	ついきじょうあといせき	築城郡	築上郡築上町築城	R12	32	223
辻野屋敷	つじのやしき	仲津郡	京都郡みやこ町惣社	D10	30	－
辻畑城	つじばたけじょう	企救郡	北九州市門司区大積	6	12	－
恒見城	つねみじょう	→恒見山城（つねみやまじょう）				
恒見山城	つねみやまじょう	企救郡	北九州市門司区恒見	12	12	－
津野城	つのじょう	田川郡	田川郡添田町津野	－	34	－
燕岩城	つばめいわじょう	仲津郡 / 田川郡	京都郡みやこ町犀川崎山・田川郡赤村赤	151	20	172
粒城	つぶじょう	→木下城（きのしたじょう）				
鶴林城	つるばやしじょう	上毛郡	築上郡上毛町安曇	234	28	－
手切城	てきりじょう	田川郡	田川郡香春町採銅所・福智町伊方・田川市夏吉	46	14	112
天仲寺山城	てんちゅうじやまじょう	上毛郡	築上郡吉富町広津	226	26	－
伝法寺城	でんぽうじじょう	築城郡	築上郡築上町伝法寺	160	22	－
天和城	てんわじょう	上毛郡	豊前市天和	197	24	－
土居ヶ城	どいがじょう	→戸垣城（とがきじょう）				
土居城	どいじょう	→大村城（おおむらじょう（豊前市））				
塔ヶ峯城	とうがみねじょう	企救郡	北九州市小倉南区井手浦	40	14	－
塔ヶ峰城	とうがみねじょう	京都郡	行橋市矢山・高来・入覚・内蔵	138	20	159

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
東明寺城	とうみょうじじょう	→東明寺山城（とうみょうじやまじょう）				
東明寺山城	とうみょうじやまじょう	企救郡	北九州市門司区東門司２丁目	2	12	71
堂山城	どうやまじょう	築城郡	築上郡築上町本庄・伝法寺	161	22	179
戸垣城	とがきじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川犀川上高屋・犀川喜多良	154	20	－
等覚寺城	とかくじじょう	京都郡	京都郡苅田町山口	133	20	147
徳光城	とくみつじょう	→椎山城（しいやまじょう）				
十鞍城	とくらじょう	→十鞍山城（とくらやまじょう）				
十鞍山城	とくらやまじょう	京都郡	京都郡みやこ町勝山大久保・犀川大坂	137	20	159
徳力城	とくりきじょう	→大鍋山城（おおなべやまじょう）				
徳力山城	とくりきやまじょう	→大鍋山城（おおなべやまじょう）				
戸城山城	としろやまじょう	田川郡	田川郡赤村赤・内田	127	20	136
戸代山城	としろやまじょう	→戸城山城（としろやまじょう）				
戸通城	とどおりじょう	→戸垣城（とがきじょう）				
殿倉岳城	とのくらだけじょう	田川郡	田川郡添田町落合	－	34	－
富野城	とみのじょう	企救郡	北九州市小倉北区富野	－	34	－
豊津藩庁	とよつはんちょう	仲津郡	京都郡みやこ町豊津	K7	30	211
鳥越城	とりごえじょう	→鳥越山城（とりごえやまじょう）				
鳥越山城	とりごえやまじょう	築城郡	豊前市中村・築上郡築上町有安	185	24	－

な

内蔵寺城	ないぞうじじょう	→内蔵寺山城（ないぞうじやまじょう）				
内蔵寺山城	ないぞうじやまじょう	上毛郡	築上郡上毛町東下	247	28	202
長尾城	ながおじょう	企救郡	北九州市小倉南区長行	27	12	89
長尾城	ながおじょう	京都郡	行橋市長尾	－	34	－
長尾城	ながおじょう	田川郡	旧田川郡	F5	32	－
長川城	ながかわじょう	京都郡	京都郡みやこ町勝山長川	－	34	－
長野城	ながのじょう	企救郡	北九州市小倉南区長野	39	14	106
中村城	なかむらじょう	上毛郡	築上郡上毛町中村	231	28	－
名木野城	なぎのじょう	田川郡	田川郡福智町金田	70	16	－
名城野城	なぎのじょう	→名木野城（なぎのじょう）				
成腰城	なりこしじょう	→城ノ腰城（北九州市小倉南区蒲生）				
成恒城	なりつねじょう	上毛郡	築上郡上毛町成恒	232	28	－
成光城	なりみつじょう	田川郡	田川郡大任町大行事	－	34	－
西高塚ナカバル遺跡	にしたかつかなかばるいせき	築城郡	築上郡築上町西高塚	R14	32	225
西谷城	にしたにじょう	→南原城（みなみばるじょう（京都郡苅田町・豊前 130)）				
西ノ奥城	にしのおくじょう	→木下城（きのしたじょう）				
西の城	にしのしろ	→木下城（きのしたじょう）				
西八田・堂ノ本遺跡	にしはったどうのもといせき	築城郡	築上郡築上町西八田	R13	32	224
虹山城	にじやまじょう	企救郡	北九州市小倉南区蒲生	19	12	79
二神山城	にじやまじょう	→虹山城（にじやまじょう）				
尼寺山城	にじやまじょう	→虹山城（にじやまじょう）				
新田氏館	にったしやかた	京都郡	行橋市津積	D7	30	－
新田城	にったじょう	田川郡	田川郡福智町弁城	61	16	121
若一王子城	にゃくいちおうじじょう	→若王子城（にゃっこうじじょう）				
若王子城	にゃっこうじじょう	企救郡	北九州市小倉北区富野・門司区大里	14	12	74
若王寺城	にゃっこうじじょう	→若王子城（にゃっこうじじょう）				
貫城	ぬきじょう	企救郡	北九州市小倉南区貫	41	14	108
如法寺城	ねほうじじょう	上毛郡	豊前市山内	199	24	－
ナウカ嶽城	のうがたけじょう	田川郡	田川郡添田町中元寺	115	18	－
野崎城	のざきじょう	→崎野城（さきのじょう）				
野前山城	のざきやまじょう	→覗山城（のぞきやまじょう）				
覗山城	のぞきやまじょう	仲津郡	行橋市稲童・高瀬・馬場	146	20	166
野田城	のだじょう	田川郡	田川郡添田町野田	－	34	－
野中城	のなかじょう	築城郡	築上郡築上町西八田	171	22	－
野仲城	のなかじょう	→野中城（のなかじょう）				
延永ヤヨミ園遺跡	のぶながやよみそのいせき	京都郡	行橋市吉国・延永	R5	30	218

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
のりき山城	のりきやまじょう	→覗山城（のぞきやまじょう）				
則行城	のりゆきじょう	→角田城（すだじょう）				

は

ハカノ本遺跡	はかのもといせき	上毛郡	築上郡上毛町尻高・緒方	R21	32	232
挟間城	はさまじょう	上毛郡	豊前市挟間	204	24	－
狭間城	はさまじょう	→挟間城（はさまじょう）				
畑城	はたじょう	企救郡	北九州市門司区畑	10	12	－
畑城	はたじょう	上毛郡 / 築城郡	築上郡築上町畑・豊前市篠瀬	189	24	－
八屋城	はちやじょう	上毛郡	豊前市八屋	208	26	－
八屋城	はちやじょう	→安祥寺城（あんしょうじじょう）				
八津田城	はったじょう	→野中城（のなかじょう）				
八田城	はったじょう	上毛郡	豊前市川内	205	24	196
花立城	はなたてじょう	田川郡	田川郡香春町採銅所	48	14	115
馬場城	ばばじょう	築城郡	豊前市馬場	187	24	192
馬場城	ばばじょう	→覗山城（のぞきやまじょう）				
林崎城	はやしざきじょう	上毛郡	築上郡上毛町東下	244	28	－
原井城	はらいじょう	上毛郡	築上郡上毛町原井	243	28	－
春吉城	はるよしじょう	企救郡	北九州市小倉南区春吉	－	34	－
稗田城	ひえだじょう	京都郡	行橋市下稗田	－	34	－
稗畑城	ひえはたじょう	→宮山城（みややまじょう）				
稗畑山城	ひえはたやまじょう	→宮山城（みややまじょう）				
日王城	ひおうじょう	田川郡 / 筑前国	田川郡福智町神崎・飯塚市鹿毛馬	74	16	－
東上城	ひがしかみじょう	上毛郡	築上郡上毛町東上	248	28	－
東白土城	ひがししらつちじょう	田川郡	田川郡大任町大行事	101	18	128
引地城	ひきちじょう	上毛郡	豊前市山内	201	24	－
引地山城	ひきちやまじょう	企救郡	北九州市小倉北区都１丁目	16	12	78
日熊城	ひぐまじょう	上毛郡	築上郡上毛町大ノ瀬	230	28	－
日隈城	ひぐまじょう	→日熊城（ひぐまじょう）				
彦山城	ひこさんじょう	→上仏来山城（かんぶくさんじょう）				
英彦山城	ひこさんじょう	→上仏来山城（かんぶくさんじょう）				
毘沙門城	びしゃもんじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川木井馬場	155	22	173
毘沙門砦	びしゃもんとりで	→毘沙門城（びしゃもんじょう）				
日の浦城	ひのうらじょう	→日瀬城（ひのせじょう）				
火の浦城	ひのうらじょう	→日瀬城（ひのせじょう）				
日野尾城	ひのおじょう	→日王城（ひおうじょう）				
日瀬城	ひのせじょう	上毛郡	豊前市篠瀬	190	24	－
百富城	ひゃくどみじょう	上毛郡	築上郡上毛町上唐原	242	28	－
別府城	びょうじょう	上毛郡	築上郡吉富町別府	224	26	－
平岡城	ひらおかじょう	田川郡	田川郡添田町添田	109	18	－
平島城	ひらしまじょう	仲津郡	行橋市平島	－	34	－
平原城	ひらばるじょう	→田原城（たばらじょう）				
平原城	ひらばるじょう	上毛郡	豊前市川内	206	26	－
広瀬城	ひろせじょう	上毛郡	豊前市広瀬	223	26	－
広津城	ひろつじょう	上毛郡	築上郡吉富町広津	225	26	－
広津城	ひろつじょう	→天仲寺山城（てんちゅうじやまじょう）				
広津山城	ひろつやまじょう	→天仲寺山城（てんちゅうじやまじょう）				
広幡城	ひろはたじょう	→広幡山城（ひろはたやまじょう）				
広幡山城	ひろはたやまじょう	築城郡	築上郡築上町水原・広末	176	22	189
福相寺城	ふくそうじじょう	→丸ヶ口城（まるがぐちじょう）				
福田城	ふくだじょう	田川郡	田川郡大任町大行事	100	18	－
福富小畑遺跡	ふくとみおばたいせき	仲津郡	行橋市西泉３丁目	R9	30	221
福富城	ふくとみじょう	仲津郡	行橋市福富	－	34	－
二塚城	ふたつかじょう	京都郡	行橋市二塚	－	34	－
淵上寺城	ふちがみでらじょう	→赤幡城（あかはたじょう）				
筆垣城	ふでがきじょう	上毛郡	豊前市八屋	209	26	－
筆立山城	ふでたてやまじょう	企救郡	北九州市門司区門司	1	12	－
不動ヶ岳城	ふどうがだけじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川大村	148	20	169

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
不動滝の砦	ふどうだきのとりで	田川郡	田川郡添田町添田	105	18	—
舩木城	ふなきじょう	田川郡	田川郡福智町金田	71	16	—
古川山城	ふるかわやまじょう	→椎山城（しいやまじょう）				
古寺城	ふるでらじょう	田川郡	田川郡大任町今任原	91	18	—
別府城	べふじょう	築城郡	築上郡築上町上別府	169	22	—
弁城	べんじょう	→新田城（にったじょう）				
弁天城	べんてんじょう	田川郡	田川郡福智町弁城	62	16	—
宝ヶ岳城	ほうがたけじょう	田川郡	田川郡添田町中元寺・落合	114	18	135
宝積寺城	ほうしゃくじじょう	企救郡	北九州市小倉南区合馬	26	12	89
法然寺	ほうねんじ	築城郡	築上郡築上町東八田	D13	30	214
法然寺城	ほうねんじじょう	→法然寺（ほうねんじ）				
ホラヶ岳城	ほらがだけじょう	→宝ヶ岳城（ほうがたけじょう）				
堀越城	ほりこしじょう	企救郡	北九州市小倉南区堀越・横代	37	14	104
堀敷城	ほりじきじょう	→名木野城（なぎのじょう）				
壕城	ほりじょう	→田原城（たばらじょう）				
本牛王城	ほんごおうじょう	→牛王城（ごおうじょう）				
本庄城	ほんじょうじょう	→若山城（わかやまじょう）				

ま

真木城	まきじょう	田川郡	田川郡添田町庄	102	18	—
真崎城	まさきじょう	→龍円城（りゅうえんじょう）				
益田陣	ますだじん	→吉川城（きっかわじょう）				
松崎城	まつざきじょう	→林崎城（はやしざきじょう）				
松尾山城	まつのおさんじょう	上毛郡	築上郡上毛町西友枝	252	28	—
松丸城	まつまるじょう	→宇都宮氏館（うつのみやしやかた）				
松山城	まつやまじょう	京都郡	京都郡苅田町松山・鳥越町	129	20	138
丸岡城	まるおかじょう	田川郡	田川郡大任町大行事	97	18	—
丸岡山城	まるおかやまじょう	→丸岡城（まるおかじょう）				
丸ヶ口城	まるがぐちじょう	企救郡	北九州市小倉南区隠蓑・堀越・横代	36	14	103
丸ヶ口福相寺城	まるがぐちふくそうじじょう	→丸ヶ口城（まるがぐちじょう）				
丸ヶ城	まるがじょう	→丸ヶ口城（まるがぐちじょう）				
丸角城	まるかどじょう	→明神山城（みょうじんやまじょう）				
丸城	まるじょう	企救郡	北九州市小倉南区北方周辺	18	12	—
丸山城	まるやまじょう	企救郡	北九州市門司区大積	5	12	72
三毛門城	みけかどじょう	上毛郡	豊前市三毛門	221	26	—
水ヶ手城	みずがてじょう	企救郡	北九州市小倉南区山本	31	14	93
水ヶ手塁	みずがてるい	→水ヶ手城（みずがてじょう）				
水上山城	みずがみやまじょう	→水ヶ手城（みずがてじょう）				
三角城	みすみじょう	企救郡	北九州市門司区門司	3	12	71
三角城	みすみじょう	企救郡 / 筑前国	北九州市小倉南区辻三・八幡東区田代	25	12	86
三隅山城	みすみやまじょう	→三角城（みすみじょう（北九州市門司区））				
溝口城	みぞぐちじょう	→溝口館（みぞぐちやかた）				
溝口館	みぞぐちやかた	築城郡	築上郡築上町寒田	166	22	—
溝口屋敷	みぞぐちやしき	→溝口館（みぞぐちやかた）				
三岳城	みつだけじょう	→大三岳城（おおみつだけじょう）・小三岳城（こみつだけじょう）				
湊城	みなとじょう	築城郡	築上郡築上町湊	183	24	—
南木城	みなみぎじょう	田川郡	田川郡福智町神崎	73	16	—
南原城	みなみばるじょう	京都郡	京都郡苅田町南原	130	20	145
南原城	みなみばるじょう	→高城（たかじょう（京都郡苅田町））				
簔島城	みのしまじょう	仲津郡	行橋市簔島	143	20	—
三マ尾城	みまおじょう	田川郡	田川郡添田町添田	111	18	—
宮尾城	みやおじょう	→宮山城（みややまじょう）				
宮山城	みややまじょう	企救郡	北九州市小倉南区山本	32	14	94
宮山城	みややまじょう	→福田城（ふくだじょう）				
妙見城	みょうけんじょう	→足立山城（あだちやまじょう）				
妙見山城	みょうけんやまじょう	→足立山城（あだちやまじょう）				
明神山城	みょうじんやまじょう	田川郡	田川郡大任町今任原	92	18	126

城館名	よみがな	旧郡名	所在地	番号	一覧頁	詳説頁
門司ヶ関山城	もじがせきやまじょう	→門司城（もじじょう）				
門司城	もじじょう	企救郡	北九州市門司区門司	K1	30	206
元永城	もとながじょう	仲津郡	行橋市元永	145	20	166
本長山城	もとながやまじょう	→元永城（もとながじょう）				
元山城	もとやまじょう	築城郡	築上郡築上町赤幡	175	22	－
母原城	もはらじょう	企救郡	北九州市小倉南区母原	－	34	－

や

屋形原城	やかたばるじょう	田川郡	田川郡添田町落合	118	20	－
薬師寺城	やくしじじょう	上毛郡	豊前市薬師寺	203	24	－
薬師山城	やくしやまじょう	田川郡	田川郡福智町上野	60	16	－
弥次郎畑城	やじろうはたじょう	田川郡	田川郡福智町弁城	64	16	－
安居城	やすいじょう	→安宅城（あたかじょう）				
矢留城	やどみじょう	→大将陣（たいしょうじん（行橋市矢留））				
矢留堂ノ前遺跡	やどみどうのまえいせき	仲津郡	行橋市矢留	R10	30	221
柳城	やなぎじょう	企救郡	北九州市門司区大里	9	12	－
柳瀬城	やなせじょう	→茶臼城（ちゃうすじょう）				
矢ノ浦城	やのうらじょう	田川郡	田川郡添田町中元寺	116	18	－
山内城	やまうちじょう	上毛郡	豊前市山内	200	24	－
山浦城	やまうらじょう	田川郡	田川郡赤村赤	128	20	－
山鹿城	やまがじょう	仲津郡	京都郡みやこ町犀川山鹿	149	20	170
山久井城	やまくいじょう	→明神山城（みょうじんやまじょう）				
山口城	やまぐちじょう	→等覚寺城（とかくじじょう）				
山下城	やましたじょう	→明神山城（みょうじんやまじょう）				
山田城	やまだじょう	上毛郡	豊前市四郎丸	207	26	－
山田城	やまだじょう	→櫛狩屋城（くしがりやじょう）				
山田城	やまだじょう	→八田城（はったじょう）				
山田親實居館	やまだちかざねきょかん	→大村城（おおむらじょう（豊前市））				
山本城	やまもとじょう	企救郡	北九州市小倉南区山本	30	14	93
矢山城	ややまじょう	京都郡	京都郡みやこ町勝山矢山	－	34	－
矢山城	ややまじょう	→塔ヶ峰城（とうがみねじょう（行橋市））				
湧金城	ゆうきんじょう	→小倉城（こくらじょう）				
弓張岳城	ゆみはりだけじょう	田川郡	田川郡添田町添田・津野	108	18	133
横代山城	よこしろやまじょう	→堀越城（ほりこしじょう）				
横瀬城	よこせじょう	→小川内城（こがわちじょう）				
横武城	よこたけじょう	→堀越城（ほりこしじょう）				
吉岡城	よしおかじょう	上毛郡	築上郡上毛町吉岡	229	28	－
吉木城	よしきじょう	上毛郡	豊前市吉木	216	26	－
吉木常末遺跡	よしきつねまついせき	上毛郡	豊前市吉木	R18	32	228
吉見城	よしみじょう	→足立山城（あだちやまじょう）				
世永城	よながじょう	→沓川城（くつかわじょう）				
米丸城	よねまるじょう	→建徳寺城（けんとくじじょう）				
呼野城	よぶのじょう	→茶臼山城（ちゃうすやまじょう（北九州市小倉南区 / 田川郡香春町））				

ら

龍円城	りゅうえんじょう	田川郡	田川郡川崎町安真木	88	18	－
立園城	りゅうえんじょう	→龍円城（りゅうえんじょう）				
龍園城	りゅうえんじょう	→龍円城（りゅうえんじょう）				
龍城院山城	りゅうじょういんやまじょう	→畑城（はたじょう（豊前市 / 築上郡築上町））				
六郎城	ろくろうじょう	上毛郡	豊前市六郎	－	34	－

わ

若木城	わかぎじょう	田川郡	田川郡大任町大行事	98	18	127
若木山城	わかぎやまじょう	→若木城（わかぎじょう）				
若山城	わかやまじょう	築城郡	築上郡築上町本庄	165	22	182
鷲ヶ城	わしがじょう	→堀越城（ほりこしじょう）				

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふくおかけんのちゅうきんせいじょうかんあとさん
書　　名	福岡県の中近世城館跡Ⅲ
副 書 名	豊前地域編
巻　　次	福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書　第３集
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第254集
編著者名	酒井芳司・坂元雄紀・岡寺　良（編集）
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園７番７号　TEL 092-651-1111
発行年月日	2016年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
福岡県豊前地域（旧企救（規矩）郡・田川郡・郡・京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡）に所在する中近世城館遺跡等約300箇所	北九州市門司区 小倉北区 小倉南区 田川市 行橋市 豊前市 田川郡香春町 添田町 糸田町 川崎町 大任町 赤　村 福智町 京都郡苅田町 みやこ町 築上郡吉富町 上毛町 築上町	40101 40106 40107 40206 40213 40214 40601 40602 40604 40605 40608 40609 40610 40621 40625 40642 40646 40647				140401 ～ 160331		福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福岡県豊前地域（旧企救（規矩）郡・田川郡・郡・京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡）に所在する中近世城館遺跡等約300箇所	城館及び城館関連遺跡	鎌倉～江戸時代	城館遺構（曲輪・土塁・堀など）	な　し	

要　約

本報告における中近世城館遺跡等詳細分布調査では、豊前地域の（旧企救（規矩）郡・田川郡・京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡）に所在する約 300 箇所の中近世城館、城館伝承地、城館関連遺跡等を対象とし、一部の対象については現地調査を行い、縄張り図等の作成を行い、その結果を報告している。また、文献史料、絵図資料等についても総合的な調査を実施した結果も併せて報告している。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 27	登録番号 1

福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査報告書３

福岡県の中近世城館跡Ⅲ

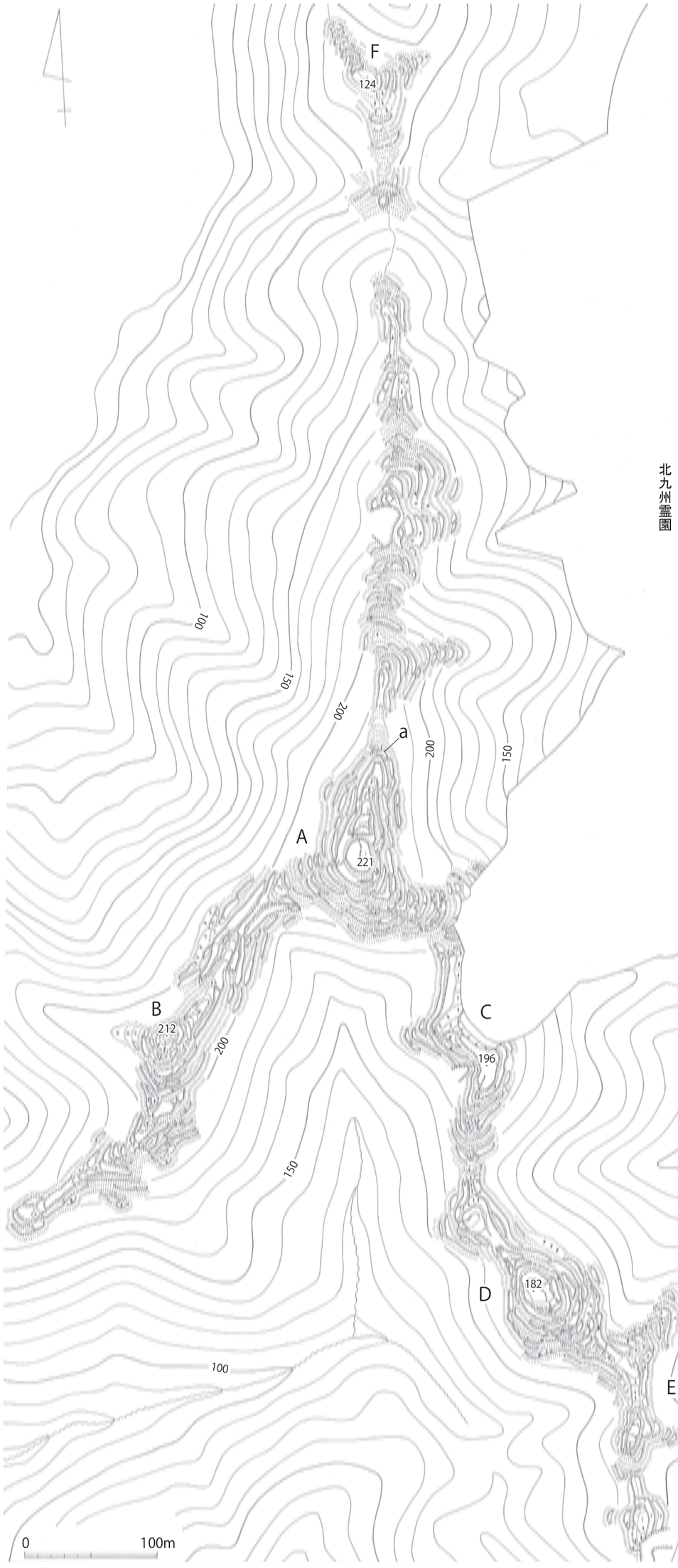
－豊前地域編－

福岡県文化財調査報告書第254集

平成28年３月31日

発　　行　　福岡県教育委員会
〒812-8575
福岡県福岡市博多区東公園７番７号

印　　刷　　株式会社　四ヶ所
〒838-8512
福岡県朝倉市馬田336



第 45 図　椎山城（主要部）縄張り図（事務局作成）